
アルカディア

灯里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルカディア

【Nコード】

N9297W

【作者名】

灯里

【あらすじ】

理想郷の名で呼ばれし世界、アルカディア。竜の声を聞き、彼らと心を通わせる魔歌使いの少年、ルカはまだ見ぬ世界に心踊らせる。

相棒の竜、アルと共に故郷を旅立ったルカを待つものとは……。

まだ見ぬ世界、そこで待つ様々な出会いを通して少年は成長していく。

人と竜の理想郷、アルカディアで紡がれる人と竜の物語。

貴方にとって世界は美しいですか？

他サイトより加筆、修正したものを掲載しています。本編完結
しました。現在は番外編を更新中です。

登場人物紹介

『アルはさ、ずっと俺の傍に居てくれる？』

ルカ・エアハート

主人公。竜と心を通わせる、ドラクナー声を聞く者の少年。

海上都市エランディアの出身のため、成人の儀を終えるまで一度も街から出たことがなかった。好奇心旺盛で笑顔を絶やさぬ彼だが、考えなしというわけではない。感情表現豊かで、同年代と比べて少々子供っぽい。

素早さを生かした剣術は父仕込みで短剣使い。スベルアリア魔歌はアルトウールに教えられた。

生来の才能も相俟って、本人は気付いていないが、普通の魔奏士シンガーとは比べものにならない威力を發揮する。

ルカが持つ魔剣ジークルーネは、アルの牙より作られた強力な魔剣で竜笛の代わりでもある。

『忘れるな……此の命有る限り、私はお前と共に在る』

アル

珍しい銀色の竜。瞳は金色。いつもルカの肩に乗っている彼の相棒。ルカが三歳の時に彼と出会い、それ以来ずっと側にいる。

サイズは肩に乗るくらいなのだが、本当の姿では無い。ロストアリアルカの魔歌の師匠で、彼もまた強大な魔力を持つ。喪歌の使い手。

博識で世界情勢から一般常識まで様々な知識に通じており、少々世間知らずなルカに取って頼れる存在。

決して自らの名を名乗ろうとはせず、ルカにもアルと呼ばせている。真名はアルトウール・レインセル・シルバーレイ。

ルカに出会う以前は人間を嫌い、世界に害をなす存在だと考えていた。

しかしルカと共にいることで人と関わるようになり、現在は人間もこの世界に生きる一つの命だと思っている。

『別に良いだろう。俺の気まぐれだと思っていればいい』

イクセル・クライン

愛称はイクセ。《黒呀》の二つ名で呼ばれる凄腕の冒険者。ハンター

刀と呼ばれる特殊な片刃の剣を扱うが、普段は刀を抜かずに無銘の長剣を使う。

歌は意外に上手く魔歌も一応歌えるが、嗜み程度。同業者には積極的に係わりつとしないが、基本は世話やきである。

しかし自らに関することは黙して語るつとはしない。

若いながら冒険者としては最高位に位置し、他の冒険者からも一目置かれている。

両親は既に死去しており、どうやら大陸出身者ではないようだが……。

『ルカ兄はずっと暗闇の中にいた僕を助けてくれたんだ』

ルーア

人竜大戦時代、竜に対抗するため、人の手により造り出された人造の竜。人造竜兵の名で呼ばれる。体自体は魔水晶を核としたマナで作られており、本人によると姿形は自由に換えられるらしい。

性格や言動は外見年齢そのままであるが、喪歌や古代文明の知識は頭の中にあるため、実は博識。

自分を救ってくれたルカを兄と慕っており、イクセもイク兄と呼んで懐いている。アルは何故か呼び捨て。

ルカから与えられた真名はルーアハメシアラズライト。

『勿論。オレは竜だから。他の始竜からは紅蓮の君、そう呼ばれている』

リオン

アルやウイスタリアと同じく、万象を司る始竜。愛称はリオン。実はルカと会った事があるらしく、リオンと言う名もルカから貰ったもの。

普段は紅の長髪をした青年の姿をしている。気に入った者なら種族も、性別すらも関係ないらしく、イクセ曰く節操なし。

始竜としての呼び名は紅蓮の君、真名はヴァーミリオンフレイヤッフィーニクス。

アルとイクセは彼に対して冷たい態度を取るが全く気にしていない。ルーアはどちらからと言うと呆れており、ちゃんとリオンの相手をするのはルカのみである。

絵に描いたような軽薄男だが、実は始竜の中ではアルに次いで年長者。

気まぐれな猫のような性格で、自らが敵と認識したものには容赦がない。その点では怒らせると一番過激らしい。

『ぼくは豊穰の君、イスラフィール』

アテイ

アルやリオンに続く長命な始竜で、真名は豊穰の君、イスラフィール。アティス。アマルティア。愛称はアテイ。

見た目は男にも女にも見える中性的な青年だが、創造と再生を司る竜でその身に秘める力は強大。

リオン曰く、千年以上の時を生きる存在だが積み重ねてきた時間を感じさせないほど天然らしい。中性的な容姿と服装のお陰で、初見ではほぼ女性に間違われる。

『我のことはウイスタリアと呼ぶが良い』

ウイスタリア

アルと同じく世界の万象を司る始竜。ただアルとは違い、始まりの時より生きている訳ではない。特にアルカディアの空や水を司る存在。

人間の存在をよく思っていなかったが、ルカと出会ったことで人に対する見方が変わった。

非常に博識で思慮深い性格だが、意外にも生まれてから千年も経っていない。その知識は始竜として引き継いだ記憶によるもの。

始竜の中では最も歳若い竜である。受け継いだ名は蒼穹の君。真名はウイスタリアⅡセレスⅡノーザンライツ。

『お久しぶりです、ルカ様』

ゼファイ

ゲイルの相棒にして始まりの竜。始竜としての呼び名は風天の君、真名はシルフィードⅡウィンディⅡゼルフィロスでウイスタリアに続いて若い竜。

誰に対しても非常に丁寧で、ルカにとって姉であり、母のような存在でもある。愛称はゼファイ。

趣味は料理で特に菓子類が得意。世話好きで、普段から抜けているアティの世話を焼くことが多い。

常に丁寧な物腰だが、興奮するところか怖い（リオン談）。

『いつでもお前が思い出せるように』

ゲイル・エアハート

ルカの父にして、世界でも指折りの運び屋。冒険者ではないが、彼らにも一目置かれる存在である。妻、シルフィアの死去を機に、ルカとは疎遠になっていたが、決して嫌っている訳ではない。

それまで子育てを妻に任せていたため、接し方が壊滅的にわからないだけである。

要領はいいが不器用でルカとはいつもすれ違ってばかり。

仕事時とは打って変わったたぶがいなさからアルに叱咤されることが多い。

ある麗らかな日

誰かが歌を歌っていた。優しく温かさに満ちた子守歌を。

静かに奏でられる穏やかな旋律はどこか懐かしく、忘れていた何かを思い出させてくれる。

緩やかに波打つ青い髪をかき上げながら女性が笑っていた。慈しむように、愛おしむように。だが彼女の顔は霞掛かったようにはつきりしない。

『大丈夫よ。眠るまで側に居るわ』

もはや顔すら思い出せぬとしたら母は怒るだろうか。

燦然と輝く太陽に見渡す限りの青い海。海から吹き付ける風は、潮を孕んで独特な香りを運んで来る。

天気は雲一つない快晴。夜が明ける前の深い青のような髪を持つ少

年は黒く艶掛かった深紅の瞳を、自分の肩の上で寛ぐ存在に向けた。

「アル、もしかして寝てない？」

少年の肩に乗るのは皮膜の翼に煌めく白銀の鱗を持つ 竜。

彼は猫のような縦長の瞳孔、黄金色の瞳を細める。

『私は寝てない。あまりに退屈だったただけだ』

「それ寝てたでしょうが。いくら俺の肩の上が楽だからって寝ないで欲しいんだけど」

中性的な顔立ちの少年 ルカ・エアハートは半眼で睨んだ後、呆れるように肩を竦めて見せた。今彼等が居る場所は海上都市と呼ばれるエランディアの一角、薄紫の花が咲き乱れるあまり地元のものも近寄らない場所である。

遠目にはエランディアの本島が見え、ルカの頭上をカモメの親子が優雅に通り過ぎた。今日も平和である。

『仕方ない。それが自然の摂理だ』

銀色の竜 アルトウールは片目を瞑ると翼を閉じ、くるりと体を丸めた。確かにこの気候では眠たくはなるかもしれない。

何故、二人？ がこんな場所に居るのかと言うとこの薄紫色の花、ラベンダーである。防虫や精神安定、はたまた食用まで様々な用途があり、需要は高い。

ルカは香りを楽しみながらラベンダーを摘み、持ってきた籠に入れた。その間に転寝をしていたアルトウールを突いてみる。

『む、終わったのか？』

彼が目を開けると同時に、本島の一番高い所に築かれた時計塔から正午を告げる鐘の音が響いて来る。

すっかり時間の感覚を失っていたルカは、今更ながら自分が空腹であることに気付いた。

「うん。ラベンダーもこれくらいあれば十分だし、帰ろうか」

『承知した』

ルカの肩から下りたアルトウルは天に向かって短く吠える。

次の瞬間、彼の眼前に見上げる程の高さの竜が居た。太陽の光に煌めき、不思議な光沢を放つ銀色の竜、これがアルトウルの本来の姿。

ルカも何故彼が普段、小さな姿で居るのか知らない。理由はひとえにアルトウルが彼の側に居たいだけなのだが、ルカがそれを知る筈もなく。アルトウルは背にルカを乗せると翼を羽ばたかせ、悠然と蒼穹に舞い上がった。

眼下に広がるのは青く美しい色を湛えた母なる海と大小様々な島である。ルカが住む街、海上都市の名で呼ばれるエランダディアには多くの島々が点在しており、大きさだけで言えば群を抜いている。もともと、全てに人が住んでいる訳では無いから、人口だけを比べれば普通の街より少ないくらいだ。

実際飛んでいるのはアルだが、風を切って飛ぶのはやはり気持ちいい。

相棒もルカの心情を分かっているようでわざわざゆっくりと飛んでくれているのだろう。

本島が徐々に近付いて来る。エランディアは一つの島に建物が密集していることでも有名であり、当然アルが降りられるような場所は少ない。

家から近い広場なら或は可能だろうが、そんな場所に着陸する程ルカも馬鹿ではない。

時計塔の近くは比較的広く、普通の竜なら降りる事が可能だ。ただし、誰か先客が居る場合を除いて。

アルは緩やかに減速すると音を起てることなく、軽やかに降り立つ。ルカを地面に降ろすと銀色の翼を閉じ、再び小さな姿に戻る。そして彼お気に入り場所であるルカの肩に飛び乗った。

「ありがとう」

『礼など必要ないと常々言っているだろう』

礼の言葉は何度聞いても慣れることはなくて、思わず顔を逸らしてしまう。アルの様子が面白くて彼に気付かれないよう小さく笑った。

「うん、でも大切なことだから。“ありがとう”って言うのは当たり前だよ」

そう言って微笑するルカは、思わず笑い返してしまうような太陽に似た暖かい笑みだ。

エランディアから一度も出たことがない彼は、街の人々を見て育つて来たこともあり、人と人の繋がりを大事にする心優しい少年だった。

ルカの優しさには人も竜もない。彼にとって竜とは友人であり、家族なのだから。

『分かってる。ほら、ゆくぞ』

ぺしりと軽く尾で叩かれた。余程恥ずかしかったのか、目も合わせたくない。

ルカは油断すれば零れそうになる笑いを堪えながら、石畳みを踏み締めるように歩いた。

ドラグナー

街中に行くルカに露店の主人や子供たちから声が掛けられる。

まだ成人を迎えてはいないものの、所謂何でも屋のような事をしているためだ。ルカにとって趣味の一環のようなもので、滅多に家にいない父親に叩き込まれて育ったからと言うのもある。

エランディア独特の石造りの街並は訪れる者に堅さよりも人の温もりを伝えてくれる。それはここに住む人々の明るさに寄るものだが、辺境とも言える都市では珍しい。

「ルカ兄ちゃん、僕も今度アルに乗せてね！」

「アルが良いなら俺は大歓迎だよ」

一人の少年がお願いすると一緒に遊んでいた子らも僕も、私もと声を上げる始末。その辺りは流石は子供である。

自分たちの預かり知らぬ未知のものにも瞳を輝かせる彼等は正に好奇心の塊だ。

「私は子供は苦手なんだが……」

ぼつりと呟いた一言が子供たちに聞こえる訳もなく。例えアルが大声で叫んだとしても聞こえまい。普通の人間には彼の、というか竜の言葉を理解出来ないからだ。

だが稀に人の中にも竜の言葉を理解し、心通わせる者が居る。ルカもまたそんな人間の一人であり、彼のような者を声を聞く者と呼ぶ。ドラグナー

しかし何故彼等が竜の言語を理解出来るのかは分かっていない。

一種の精神感応では無いかと言われているが、真実に辿り着いた人間は一人としていなかった。

狭々とした街ではあるが、ルカは生まれ育ったこの街が大好きだった。

しかし一度としてエランディアを出た事がない彼は、外の世界に憧れてもいた。ルカは声を掛けて来る人々に挨拶しながら、ある家の前で止まった。

「ヘンリエッタさん、居る？」

「はいはいー、少し待ってね」

呼び掛けながらノックしてみると、直ぐに答えが返って来る。開けられた扉の先、声の主はエプロンを付けた若い女性だった。アーモンド型をした灰色の瞳に、明るい茶の髪を緩く巻いて肩に流している。二十代半ばほどにしか見えないのだが、実年齢は三十歳を超えているらしい。

「ルカ君、いつもありがとう。お昼まだでしょう？ 良かったら食べて行って。勿論アル君もね」

ヘンリエッタの申し出は非常にありがたかった。

ルカは滅多に家に寄り付かない父親の影響もあり、家事全般をこなすことは出来る。

しかしヘンリエッタの料理は温かくて、好きだった。彼女が作る料理は覚えていない母の味だから。

『お言葉に甘えさせて貰ったらどうだ？』

「そうだね。それじゃあお邪魔します」

ルカは軽くお辞儀をすると、アルを乗せたままお邪魔する。

昼食は海老やイカがふんだんに使われたシーフードパエリアだった。ほんのりと色付いた海老やサフランの香りが何とも食欲を刺激する。ヘンリエッタが作るパエリアは絶品だ。

「いただきます」

「はい、どうぞ」

美味しそうにパエリアを頬張るルカをヘンリエッタは優しい瞳で見つめていた。

彼女は数年前に水難事故により、夫と小さな息子を亡くしていた。子供が生きていたらルカと同じような年頃だろう。

「ヘンリエッタさん？ どうしたの？」

「何でもないわ。ルカ君が美味しそうに食べてくれるから作り甲斐があるわね」

ルカはヘンリエッタの思いを知るよしもない。ただテーブルに座るアルだけが彼女の思いを知っているかのように目を伏せた。

パエリアを美味しく頂いた後、ルカはヘンリエッタが淹れてくれたハーブティーとラベンダーを練り込んだ砂糖菓子を頂いていた。

気が利く彼女はわざわざアルの分まで用意してくれている。

竜は大気中のマナを取り込むことで生きている。つまりは食事は必要ないのだが、アルは甘い物が好みなのか菓子類を食べることが多い。

現に今も砂糖菓子を美味しそうに（ルカ以外の人間が見れば分からないが）食べていた。

『ヘンリエッタが作る菓子は美味しいな』

「ヘンリエッタさん、アルも美味しいって言ってます」

ルカが通訳しないと竜の声は、普通の人間には単なる鳴き声にか聞こえない。

彼のような声を聞く者は少なく、例え声を聞く者であっても竜と心を通じ合わせることは難しいと言われている。

「あら、嬉しいわ」

本当に嬉しいそうに食べる二人を見てみると、ヘンリエッタの顔も自然と綻ぶ。

ルカが小さな頃から共に暮らしてきたアルは、家を空けること多い父　ゲイルよりも彼に取つての親なのかもしれない。

事実、ルカに多くの知識や魔法を教えたのも彼だ。この世界、アルディアに存在する魔法体系は竜たちが使う喪歌であり、人が扱えるようにしたのが魔歌である。

魔歌、喪歌とは歌うことにより、世界に漂う不可視のエネルギー、マナと自らの魔力を媒介にし、様々な現象を引き起こす術だ。

父と息子、微妙な距離

話に花を咲かせていたルカ達の耳に、何かが潰れたような嫌な音が届いた。かなり大きな音であったため、ヘンリエッタも驚いたように目を瞬かせている。

かなり近い。考えなくても分かる。音がしたのは自分の家の方で、音の原因は勿論、あの父親だろう。

『……ゲイルが帰って来たようだな』

アルは非常に嫌そうな顔をして、尻尾をテーブルに叩きつける。決定的な親友の一言に、ルカは小さく溜息を付き、静かにティーツプを置いた。

まさか息子の誕生日に帰ってくるとも思っていなかったが、一体どんな風の吹きまわしか。

「ヘンリエッタさん、父が帰って来たみたいなので失礼します。ごちそうさまでした。美味しかったです」

「あら、そうなの？ いいのよ、気にしないでいつでも来てね」

はい、と頷くとアルを肩に乗せヘンリエッタの家を出る。

次にルカの目に入ったのは見るも無残に屋根が潰れた我が家。隕石でも落ちてきたのか、大きな穴を見るだけで悲しくなって来た。我が父のことながら思わず頭を抱えなくなる。

居間に続く扉を蹴破る勢いで開ける。すると、穴の空いた天井を気にする風もなく、椅子にもたれ掛かるように座る一人の男があった。

年の頃は三十代をいくら過ぎたところ。みずみずしい若葉を思わせる緑の髪と同色の切れ長の双眸が印象的な美丈夫。今正に旅から帰って来たような服装で、唯一の武器らしき物は腰に下げた長剣だけ。

「……父さん、帰ってくる時は普通に来てくれない？　いつも屋根修理するの俺なんだから」

男　ゲイル・エアハート、真正銘ルカの父親は、ルカが帰って来たことに気付कि、笑みを浮かべた。ひらひらと手を振り、ルカと彼の肩に乗った存在に声を掛ける。

「エランディアは竜が降りる所が少ないから仕方ないだろ。それより元気にしてたか？」

ゲイルは立ち上がるとわしゃわしゃとルカの頭を撫でる。

彼は相棒の竜　ゼフィロスと運び屋の仕事をしているため殆ど家に寄り付かない。ルカの記憶によると最後に帰って来たのはもう一年近く前か。

家々が密集しているエランディアは確かに竜が降りられる場所は少ない。

だが無いわけではないのだ。流石に屋根を破つての登場はないだろう。

「一応は元気だけど……」

『ゲイルよ、こつも家に寄り付かないのでは息子に嫌われても文句は言えんぞ』

ルカの肩に乗るアルもやや呆れたような口調で嗜める。家に居な

いゲイルを遠回しに責めているのだが、果たしてそれに気付くかどうか。

今日だってルカの一五歳の誕生日を分かって帰ってきたのか、それとも偶然なのか分かったものではない。

だがそんな父親でも、息子を思う気持ちは本物だ。ただ、愛情表現が分かりにくいというか、不器用というかよくも悪くもそんな人間なのである。

「あのなあ、俺だって好きで寄り付かない訳じゃねえよ。じゃなきゃわざわざたまにでも帰る理由なんてないだろ」

アルが言いたいことは分かる。ゲイルが父親としてルカにしてやれたことなど数える程しかない。

ゲイルが家を空けるようになったのは妻であるシルフィアを失ってからだ。何もかもが虚しくなった。生きる意味を見失った。

しかし悲しいのはルカも同じ。

だが一番辛い時に自分は、ルカの傍に居てやれなかった。理由を付けて全てから逃げ出した臆病者でしかない。

そんな負い目もあり、ルカにどう接していいのかすら分からない。情けなくてゲイルは気付かれぬよう自嘲気味に笑う。

「それよりルカ、今日は誕生日だろ？ ほら、やるよ」

ゲイルが投げて寄越したのは、鎖の付いた銀のロケット。精緻な細工は素晴らしく、思わず見入ってしまった。中央にはルカの髪と同じ、小粒な青い石が象眼されている。

おもむろにロケットを開けば、一枚の絵が飾られていた。若き日の父に幼い自分。そして柔和な笑みを浮かべた青い髪の女性。シルフィア・エアハート。ゲイルの妻であり、ルカの母に当たる人。

「かあ……さん？」

「そつだ。いつでもお前が思い出せるように」

震える声で呟けば、ゲイルが破顔する。

優しくかった母の思い出は記憶の中に埋没して行く。ルカはいつしかシルフィアの顔さえ思い出せないようになっていた。

そして今日成人の儀を終えればルカはこの街を出て、世界を回ろうと思っている。

ずっと前から憧れた外の世界。例え新しい記憶が増えようと母の顔を忘れぬように。ゲイルなりのプレゼントなのだろう。

「……ありがとう。嬉しい」

ルカはロケットを閉じ、そつと両手で包むように握り締める。

怖かった。日々思い出せなくなる母の顔。いつか何もかも忘れてしまうのではないかと。

深い赤の瞳から涙が滲む。アルは心配そつに彼に身を寄せ、何も言わずにルカを見つめている。

ゲイルはばつの悪そうな顔をしながらも安心させるようにぼんぼんと頭を撫でた。子供でいられる最後の時間。声を押し殺してルカは泣いた。

海神の抱擁

ゲイルはルカにロケットを渡すと、休む暇もなくさっさと旅立った。何でも重要な依頼があるらしい。

本人は認めないだろうが、どうやら本当にルカの誕生日だから戻って来たようである。時計塔まで見送りに来たルカに、ゼフィロス父の相棒の竜がこっそり教えてくれた。

その足でエランディア唯一の教会に向かう。成人の儀はそこで行われるからだ。

アルカディアに特定の宗教は存在しない。自然に宿るとされる神々を信仰するのが一般的で、エランディアは海の神、ネレウスを奉っている。

時計塔近くにある教会は海の神を奉るだけあり、白く塗られた壁と装飾に使われた青が印象的だ。白亜の教会は陽光を弾いて白く輝いている。

今日成人の儀を行うのはルカだけ。ルカが教会に足を踏み入れた時、既に神官二人が彼を待っていた。

「ルカ、よく来ましたね。お待ちしていましたよ」

柔らかな笑みを浮かべるのは三十代半ばの男。純白の聖衣を纏い、長い白髪を後ろで結んでいる。真っ直ぐに見据えられたエメラルド色の瞳は、まるで全てを見通すように澄み切っていた。

彼 ティアは代々ネレウスに仕える神官の家系で、後ろに控える少年は彼の弟である。

「こんにちは。ティアさん、ジェイド」

ジェイドとルカは同じ年で、彼は一足先に成人の儀を終え、神官の道歩んでいる。

そつと目配せをすればジェイドは小さく笑う。親友と言っても過言ではない彼は、ルカともう一人の親友とは性格が全く違うとは言葉、大事な友人だった。

「こんにちは。早速ですが初めましょうか」

「はい」

成人の儀と言っても複雑なことは一切ない。ただ祝福を受けるだけ。

ルカはテイアの前まで歩み出ると絨毯の上に跪いた。

アルは儀式の邪魔をしないように椅子の上で行儀良く座っている。本来なら一時間ほど掛かる儀式だが、今回はルカ一人であるため、略式で行われる。

「……汝に海神わたつみの祝福を与えん」

ルカに授けられた言葉は、魔歌に近いものなかもしれない。

祈りを捧げるルカを包んだのはマナ。それも海の神ネレウスが司る水に属するものだ。ふわり、と薄い水色の光の抱擁にアルは僅かに目を細めた。

そしてその光は静かにルカの中に吸い込まれるようにして消える。

「ありがとうございました」

成人の儀を終えた後、ルカは二人に礼を言って教会を後にした。気配を感じて振り向くと、自分を追って来る人物が見える。

白い神官服の少年、ジェイドである。普段運動をしない彼は、息

も絶え絶えといった感じで、見ているこちらが申し訳なく思ってしまう。

「ジェイド、どうかした？」

ジェイドの呼吸が落ち着くのを待つて尋ねる。わざわざ追い掛けて来るとは何かあったのだろうか。忘れ物はないはずだ。肩に乗ったアルを見る限り、それはない。

もし何かを忘れていれば、彼が絶対に気付くからだ。首を傾げるルカに、ジェイドはただ一言こつ言った。

「…………行くんだろ？」

どこに、とは言わない。幼なじみで親友の彼等に多くの言葉は必要なかった。『世界を見てみたい』とルカは昔から言っていた。予感はしていたのだ。きっと誰にも言うことなく旅立つのだろうと。核心をついた一言に、ルカは観念したように肩を竦めてみせる。

「やっぱりジェイドには隠しきれなかったね。うん、もう行くこと思ってる。皆が知れば見送りに来てくれるだろうけど。そうしたらさ…………別れが寂しくなるから」

別れが印象的であればあるほど辛くなる。薄情だと言われるかもしれないがルカは決めていた。誰にも言わずにエランディアを旅立つと。

アルもルカが決めたことなら何も言わないでいてくれたのだ。

「…………そっか。なら僕だけでも見送るよ」

ルカとジェイドは笑い合うと、互いに何を言う訳でもなく並んで

歩き出す。

行き先は時計塔。エラウンディアで一番高く広い場所である。

しかし普段あまり人が訪れることのない場所は、何故か多くの人で賑わっていた。

まだ見ぬ世界

「どうして。何も言っていないのに……」

「みんな、ルカ君が来たわよ」

呆然と呟くルカに対し、アルとジェイドは笑っていた。

とその時、人込みの中にいたヘンリエッタが、二人に気付いて声を上げる。見送りに来てくれたのは、ヘンリエッタだけではない。親しい者たちや友人、世話になった人たちもいる。いつも遊んでとせがんで来る子供たちもいた。

「ルカの考えることはみんなお見通しと言っことかな」

「……俺ってそんなに分かりやすいのかな？」

『だろうな。でなければここに誰もいるはずがない』

ジェイドは笑いを堪えながらルカの方を向く。当の本人は驚いたような微妙な顔だ。肩に乗るアルも笑みを隠そうとしなかった。

ルカは隠し事が上手いとはお世辞にも言えない。朝からそわそわしていれば尚更である。加えて今日は成人の儀。区切りを付けるのもってこいの日だからだ。

「ルカ君、たまには手紙ちょうだいね。貴方が留守の間はちゃんと掃除しておくわ。いつ帰って来ても困らないように」

ヘンリエッタはルカが黙っていたことについて何も言わない。送り出してくれる人がいるのは、こんなにも嬉しいのだとルカは

初めて知った。薄情だと怒られてもおかしく無いというのに、皆何も言わない。

例えどこに行こうとも自分の故郷はこの街。帰るべき場所があるから頑張れる。きつとそうなのだろう。

「ヘンリエッタさん……ありがとう」

「気にしないで。こんなことお安いご用よ」

母が生きていたなら、ヘンリエッタのように笑って送り出してくれただろうか。彼女は僅かに記憶に残る母のように温かくて、ルカは少しだけ泣きたくなかった。

「ルカ、お前が帰って来るまでに一人前の菓子職人になるからな！アルを唸らせるくらいになってやるから期待しとけ」

ルカ、と声を掛けたのは赤掛かった茶の髪に白い調理服姿の少年。ルカの友人の一人ラルフである。

菓子職人見習いである彼は幼い頃、ラルフは一人前の菓子職人に、ルカは冒険者になると約束した仲だった。

まだまだ一人前とは言えないが、それはルカも同じ。ラルフが一人前の菓子職人になるのなら、ルカは一人前の冒険者に。約束を忘れぬよう、心に刻みつける。

『それは楽しみだ。私を満足させてくれるのを待っている』

「アルも楽しみだつてさ。でも俺も負けない。約束だからな」

ルカとラルフは絶妙なタイミングで互いに腕を付き合わせ不敵に笑う。そしてジェイドとも同じように腕を合わせた。

次に会えるのはいつになるか分からない。けれど、三人とも変わっているのだろう。

「アル君、ルカ君を頼んだわよ」

『任せておけ』

ルカの肩から降りた彼の体を眩い光が包む。光が消えた時には、小さな竜の姿はなく、見上げるほどに巨大な銀の竜が顕現していた。アル本来の姿である。

ルカを背に乗せたアルは、ゆっくりとその大きな皮膜の翼を広げた。

『いつてらっしやい』

「いつてきます!」

ルカの返事と共に、美しい銀色の竜はエランディアの空に舞い上がる。ルカは皆の姿が遠くなるまで眺め、この街で過ごした昔を思う。

少年は相棒の竜と共に故郷の街を旅立つ。まだ見ぬ世界に思いを馳せながら。

序奏 了

私は私に誓う

彼が見ているのは、自らの金色の瞳を通して見る“世界”だった。生きとし生ける者全てを照らす太陽の光、視界に入るのは海沿いの街道だ。いかにも穏やかな昼下がりと云った感じだが、彼等以外に旅人の姿はない。

それはひとえに魔物の存在だ。自然に住む獣とは似て非なるもの。だがそれも彼にとっては驚異にすらなりえない。うたた寝しそうになるのを我慢し、ほんの十数年前に思いを馳せる。

永遠に近い時を生きて来た。理想郷の名で呼ばれるこの世界を見守っていた。誰にも知られるはずのない世界の果てで。

そう、あの子と会うまでは……。人などとうに見限っていたつもりだった。

一人の人の子がアルを変えた。

純粹に嬉しかったのだ。アルを家族と言ってくれたことが、必要としてくれたことが。彼は『
』ではなく、“私”が生きる意味を与えてくれた。

だから私は私に誓う。此の命在る限り、お前の傍にいます。

「……………ル！ アルってば！」

そこまで考えた所で彼 アルトウールは現実に戻された。目の前には呆れたルカの顔がある。きつとうたた寝したと勘違いしているに違いない。名誉のために言うが、うたた寝はしていない。金色の目を細め、訝しげにこちらを見るルカを見返す。

『言っておくがうたた寝など断じてしていないぞ』

言われる前に釘を刺しておく。確かに寝そうにはなかったが未遂である。

ルカもそれ以上、追求するのは諦めたらしい。視線をアルから離し、ポーチをまさぐった。

「ならいいけど。あのさ、アルストロメリアってこの道であってる……よね？」

ルカは腰に付けてあるポーチから地図を取り出して眺める。アルも彼につられて身を乗り出して覗き込む。

何分地図など普段は見ることにすら無い訳で、今居る地点を把握しているのかさえ怪しいものだ。ルカたちが目指すアルストロメリアは、エランディア周辺では最大の街であり、ギルドの中でも限られた、冒険者としての登録を受け付けている支部があった。

完全に油断していた。男は悔し気に唇を噛んだ。

右腕からは血が滴り、感覚も無いに等しい。傍には自分が倒し、息絶えた数体の魔物が転がっている。

おかしい。これまでなら魔物が街道で人を襲うことは少なかったはず。こんな事なら一人でも連れてくればよかった。

それももう遅い。狼に似た魔物が男を取り囲んでいた。一匹や二匹ではない、数が多い。もう少し少なければどうにか出来ただろうが、今の自分では無理だ。

どうにか活路を開こうと剣を構えた直後、声が聞こえた。淀みなく、滑らかに紡がれる旋律。歌なのだろうか。

『揺らめく光は黄泉への導、逆巻く炎は断罪の槍。其は誓いと祈りを知り、猛き焰の旋律へと誘う。朱は制約、血は誓約。己が力を知り、魂を織る。無垢なる願いは届くことなく、果てなき天へと響くのみ』

その歌は何よりも澄んでいて、綺麗な歌だった。男が見上げると同時に飛来した短剣が魔物の眉間を穿つ。

まだ若い、十代半ばの少年だった。水の色とも空の色ともまた違う透き通った青い髪、黒掛かった深紅の瞳は男にしては少し大きい。中性的な顔立ちの彼の肩には、ちよこんと銀色の何かが座っていた。男に跳びかかるうとしていた魔物の体を少年が投擲した短剣が貫く。ぎゃう、と悲鳴を上げてのた打ち回る狼。

『遙かな詩は世界に響き、世界は歌に満たされる。掲げた約束を知るならば、今導きの声に応えよ 誓焰槍』

少年が掲げた手を囲むように描かれた複雑な真紅の紋様。魔物の身を撃ち貫いた灼熱の炎槍は、狼の体を灰すら残さず焼き尽くす。呆然とする男の前に少年が駆け寄って来た。

「大丈夫ですか!？」

『心配ない。傷は見た目ほど酷くはないぞ』

少年は、思わず座り込んだ男を心配そうに見つめる。少年の肩に乗った何かが鳴き声を上げた。

銀色に煌く鱗を持つ竜。竜の鳴き声を聞いた少年、ルカはほっと胸を撫で下ろす。

「あ、ああ。君は魔奏士シンガーなのか？」

竜族が扱う喪歌を簡略化させた魔歌ロストアリアを操る者スペルアリア。こんな年端もいかにぬ少年が男を救ったのだ。

「はい。俺はルカと言います。すみません、少し傷の具合を見せてください」

男は頷き、黙って傷を見せる。見ず知らずの少年に傷を見せるなんて正気の沙汰ではないが、この少年は間違いなく男を救ったのだ。命に関わる傷はないし、殆どが擦過傷。ただ右腕の傷はかなり深い。魔物の牙の跡だろう。

ルカは傷口に掌を翳すと、意識を集中する。

『……救いを望み、全ての子らの安息を願う。遙かな詩は世界に響き、世界は歌に満たされる。切なる祈りを知るならば、今導きの声

に応えよ 治癒』

「あくまで応急処置ですから必ず医師にみせて下さい。絶対ですよ」
紡がれた魔歌と共に、とめどなく流れていた血が止まる。傷は大
方塞がったが、自然治癒力を促進させたに過ぎない。完全に治すこ
とも可能である。

しかしそれでは体に負荷が掛かるのだ。

「あの、ところでアルストロメリアってどう行けばいいですか……
？」

街道を歩いていた二人だったが、血の臭いがする、と呟いたアル
にルカは急いで駆け付けて来たのだった。そのためどの道に来たの
かまったく覚えてない。

怖ず怖ずと尋ねるルカに男は快く頷いた。

安らぎの旋律

「えー……と。これは何なのかなあ？」

ルカは目の前の光景に言うべき言葉を見つけられずにいた。やんややんやと繰り広げられる乱闘騒ぎ。空中を無数の皿が舞い、酒瓶が飛ぶ。第三者が見れば何の祭りかと勘違いするだろう。

『私に聞くな。知るわけがないだろう』

肩に乗るアルに尋ねると、そっけない答えが返ってくる。真面目に答える気もないのか、体を丸め、瞳を閉じていた。話しかけるな、ということらしい。

腕に包帯を巻いた隣の男性が頭に手を当て、呆れたようにあるいは情けないと言った感じでため息を付いた。

「すまない。乱闘騒ぎは滅多にないんだがな」

ルカが助けた彼はアーヴィンと名乗り、聞く所によると、アルス
トロメリアの冒険者組合ハンタースギルド、通称ギルドの受付らしい。

病院に付き添った後、ギルドまで案内して貰ったのだがこの有様である。皆、ルカやアーヴィンに見向きもせず皿や料理を投げ合う始末だ。

刹那、飛んで来た何かが、べしゃり、とアルの顔に激突した。原型を留めていないため、分からないが、パイ生地と肉から恐らくミートパイらしい。

『……ふふふ。あはははは。面白いぞ人間共。たわけが。私に喧嘩を売るなど二千年早いわ！』

金色の瞳を開き、不敵に笑ったアルは肩を震わせている。ミートパイ塗れになったことが相当嫌だったようだ。

しかしながら、竜である彼が本気で怒ればギルドどころか、この街が壊滅してしまう。よもや本気ではないだろうが、滅多に冗談を言わないアルである。

テーブルにあったタオルでアルの体を拭きながら、ルカはアルを宥めにかかった。

「ま、まあまあ。落ち着いて。用はこの乱闘を止めさせればいいんだよね？」

「しかしこうなれば、俺でも簡単に止められないぞ」

アーヴィンも困ったように頭を掻いている。

冒険者ハンターは血の気が多い者が大半らしく、止めると言われて、はいそうですかと止める奴がいるはずがない。そもそも言われて止めるなら乱闘など起こっていないはずだ。

「大丈夫、大丈夫。俺に任せてよ」

魔歌は何も戦闘だけに使う訳ではない。ルカは任せてよ、と笑うと、息を吸い込み、歌いなれた旋律を口にした。

『星歌う、愛しい子らへの子守歌。その歌は母なる調べ、全てに通ずる安らぎの旋律。おと星が奏でし原初の調べが染み渡る。遙かな詩は世界に響き、世界は歌に満たされる。優しき音色を知るならば、今導きの声に応えよ 潮騒』

それはまるで水晶を打ち鳴らしたかのように透明で澄んだ歌声。

美しい歌声に毒気を抜かれた者たちは次々に乱闘を止め、たおやかな歌に聴き入った。

この魔歌は本来なら対象を眠らせるものなのだが、興奮している者には効果がない。

だが乱闘を止めるには十分だろう。現に冒険者たちは固まったまま、互いに顔を見合わせている。気の抜けた冒険者たちを見たアーヴィンがすかさず声を張り上げる。

「ほら皆、いい加減にしてさっさと片付けろ！」

お、アーヴィン帰ってきたのか、などと今正に気付いた者や、右腕に巻かれた包帯を見て、怪我してるじゃねえかよ、と言う者もいる。

男たちは渋々ながら倒れたテーブルと椅子をもとに戻し、散らばっていたゴミや料理を片付け始めた。

「おかえりなさい、アーヴィン。怪我してるみたいだけど大丈夫？ それとこの坊やは？」

カウンター越しに声を掛けて来たのは、燃え上がる炎を思わせる赤毛の女性。年の頃は恐らく二十代前半ほどだ。

胸元が大きくあき、大胆にスリットが入った真紅の服に、幾重も付けた金の腕輪が甲高い音を立てる。一見すると踊り子にも見える服装だが、カウンターにいるということは、受付なのだろう。

「ただいま、リリース。一週間は重い物を持つなって。ああ、この子はルカ。危ない所を助けてもらってね」

アーヴィンは包帯が巻かれた腕を女性に見せると、後ろのルカたちに視線を向ける。紹介されたルカは軽く会釈をすると、リリースと

呼ばれた女性はルカを見て淡く微笑んだ。

「そう、坊やがあの歌をね。私はリリス。彼と同じくギルドの受け付けよ」

「ごめん。本来の目的を忘れてた。登録なんだけど、まずはこの書類に記入してもらえるかな？」

アーヴィンがカウンターの奥から取り出したのは一枚の用紙。冒険者の登録と言っても簡単な書類審査とギルドから提示された依頼で判断される。

ルカは紙とペンを受け取り、カウンターに座った。ルカが書類を書いている間、アルは邪魔をしないように肩から下りてテーブルに移動する。

「あら貴方、竜よね？　じゃあルカちゃんは声ドラクナーを聞く者なのかしら？」

『その通りだ。だがお主もそうであろう？』

「私は力が弱いから駄目よ。ちゃんと聞こえない時もあるし」

リリスはルカの肩に乗ったアルを見た。ゆらゆらと尻尾を振りながら問うアルに、彼女は首を横に振る。

一口に声ドラクナーを聞く者と言っても、人によって力のムラがあるのだ。リリスのように簡単な意志疎通しか出来ない者もいれば、ルカのよう
に竜と心を通わせる者もいる。

「出来ました」

「では君の試験を兼ねた依頼だが、少し特殊なものを頼みたい」

書類を書くこと訳十分。出された書類は本当に必要最低限のことだけで、直ぐに書き終わってアーヴィンに渡す。

書類を受け取ったアーヴィンが差し出したのは一枚の紙だった。冒険者組合のクエストボードに張り付けられているのと同じものだ。

冒険者のランクによって受けられる依頼に違いがあり、紙に引かれたラインで区別出来る。

しかしこれには何のラインも引かれていなかった。試験を兼ねた依頼であるからだろう。紙を受け取ったルカは依頼内容を見て目を見張った。ルカの肩からそれを見ていたアルは無言。

「依頼書を見て貰えば分かるが、この街とデウス村の中間に位置する山、アルセニスに一体の竜が住んでいる。しかしここ最近、彼の様子がおかしいらしい。話を聞くところにも、そう都合良く声を聞く者などいない、そういう理由で見送られてたんだが、君なら可能と判断してね」

ある意味ではこの依頼がルカに回ってくるのは当然だろう。冒険者はそれほど星の数こそいるが、竜と心を通わせる声を聞く者などそう都合よくいない。

竜はこの世界では人の隣人とされる生物だが、幼い頃からアルと接して来た彼には人が無意識に持つ竜へ恐れがない。

ルカにとって竜とは人間と同じであり、深い知性を持つ彼等より心ない人の方がよっぽど怖いのだ。

本来ならいくら声を聞く者だとは言え、こんな年端もいかぬ少年を竜のもとに行かせるのは無謀もいところである。

しかし彼の実力なら心配ないと判断したし、同行者もつけるつも

りだった。

「もし危険だと判断したら即座に戻ることに。それと一人、ギルドの冒険者が同行する」

「分かりました。やらせて下さい」

「そいつの同行は俺がする」

アーヴィンから依頼書を受け取り、ポーチに入れたその時である。入口の方からこちらに誰かが歩いて来る。

まだ若い二十歳前後の青年だった。背中の半ば程まで伸びた艶やかな漆黒の髪、切れ長の瞳はアメジスト。目鼻立ちを整っているが、浮かべる不敵な笑みと聞こえた口調から上品とは言い難い。

白いシャツ以外は上着もズボンも黒であるため、まるで闇に溶けてしまいそうだ。

「い、イクセ！ どうしてお前がここに！？ いや、それはこの際どうでもいい。お前ほどの奴が同行する必要はないだろう！」

何故かアーヴィンが慌てた様子でルカと青年の間に割って入った。どうやらイクセと呼んだ彼と知り合いのようで、随分動揺しているようだ。

ルカは腰に差した二振りの剣が気になった。一本は普通の長剣。艶やかな黒塗りの鞘に納まったもう一本は僅かに反りがある。

普通の剣ではない。父に教えてもらった。確か刀、と呼ばれる剣だったはず。

「あの、お知り合いですか？」

「あ、うん。彼はイクセル・クライン。《黒呀》の二つ名で呼ばれる冒険者だ」
ハンター

このまま黙っていると話が進まなさそうなので、思いきって尋ねてみる。

ルカの思った通り、二人の視線がこちらに向いた。アーヴィンに紹介された青年は不敵な、あるいは皮肉めいた笑みを見せる。

ルカはその時、アルが少し目を細めたことに気付くことはなかった。

イクセルはルカが今まで会って来たどの人間とも違う、そんな感じがした。もし誰かに例えるなら……父に似ているのかもしれない。

「別に良いだろう。俺の気まぐれだと思っていればいい。おい、ルカだったか？ 行くぞ」

答える前に、有無を言わず腕を掴まれる。引き離そうにも少年と青年では力が違うし、驚いてそこまで考えが至らない。アルに至っては諦めているのか、ルカの肩に乗ったままだった。

別にイクセルが同行するのが嫌な訳では無いが、唐突な展開に戸惑うのは当たり前である。

「えっ、あの、ちょっと……」

やっと我に返ったルカは、長身の青年を見上げる。勿論、ルカの抗議など無視で、イクセルは手を話してくれない。

アーヴィンとリリスは呆然と二人と一匹を見送った。

ルカの肩に乗ったまま、先程から一言も喋らなかつたアルトウールは、人知れずため息を零す。

『やれやれ、ルカも厄介な者に気に入られたものだな』

恐らくはルカが魔歌を歌う所を見たのだろうが、一体どういうつもりなのか。ルカは良い人々に囲まれて育ったせい、少々無防備な所がある。あまり人を疑うことをしないのだ。

あの男、イクセルと言ったか。何を考えているかは知らないが、ルカに害をなすようならば許しはしない。

これから考えるとアルは少しだけ重い気分になった。

靈山の守護者

大概の人となら直ぐに打ち解けるルカだが、少しだけ緊張していた。それは彼が父に似ているからかもしれないし、まったく別の何かかもしれない。

アルストロメリアを出た二人と一匹は早速目的地に向かう。

しかしながらルカは土地勘が無いし、アルはそもそも歩かないので同様である。そうなれば自動的に青年について行くことになるのだが、やはりただ者ではない。

重そうな靴を履いていると言うのに、全く足音がしないのだ。

おまけに鎧どころか鎖帷子すら着ている様子はなく、上着とシヤツ一枚の動き易い軽装。見た感じでは得物は無造作に腰に下げた長剣と刀だろう。

どこまでも冒険者と言う常識から外れているのか。そもそも髪が長い辺りからしてそうだ。さほど手入れはしていなさそうだが、艶やかな黒髪は風でゆらゆらと揺れている。

普通、冒険者の男で髪を伸ばしている者はいない。長い髪、それを纏めもしないものは戦いでは邪魔だからだ。

「イクセルさん、でしたよね？」

「イクセでいい。それと敬語も必要ないからな」

おずおずと名を呼ぶと、イクセル、否、イクセは唇の端を上げて笑う。敬語も必要ない、と。

折角の整った顔立ちなのだが、皮肉めいた笑みのお陰で若干物騒に見える。本人が敬語は必要ないと言うのなら、ルカが無理をして

敬語を使う必要もないだろう。

緊張した面持ちでイクセを見上げる。

「分かりまし……じゃなくて分かった。イクセ、これでいい？」

「イクセル、お前は声を聞く者としての力は強いようだな。まあ、ルカには及ばんが」

正直な話、ルカも敬語は苦手だ。気を使っているようだし、何だかくすぐったかった。

声を聞く者だと初めはイクセを褒めたものの、最後に取って付けたのはアルらしい。

しかし驚いたのは当の本人ではなく、隣を歩くルカである。

「えっ、イクセって声を聞く者だったんだ」

ルカとアルの会話にも特に反応していなかった。てっきり声を聞く者ではないと思っていたのである。

ルカの予想外の一言にアルとイクセが笑い出したのは同時だった。普段なら文句なく勘が良い少年は意外に鈍いらしい。

「ここに竜が住んでるんだよね？ でもどこに居るんだろ」

暫く歩いたルカたちは目的地に辿りつく。アルストロメリアとデウスの中に位置する霊山は、巖かに三人を迎えていた。見上げる山は遥か高く、頂上付近は深い雲で覆われている。かなり高いのだろう。

この山、アルセニスは古くから大地を司る神、クロノスが宿るとされ、地元の人々から崇められてきた。

そしていつの頃からか、この山に住む竜を恐れ、あるいは敬い、守護者と呼ぶようになったのだ。

アーヴィンの話では竜は、麓付近にいる事が多いというが、竜どころか動物すら見つけられない。

先ほどまで晴れていたと言うのに、澄んだ青は全てを塗りつぶす灰色へと変わっていた。

『その必要は無い。お出ましのようだ』

アルが口を開いた瞬間、ルカの周りだけが暗くなった。

刹那、目を開けていられないほどの突風が巻き起こり、何か羽ばたく音が耳に届く。

「守護者と言われるのもあながち間違じゃないってか」

呟くイクセを彩るのは、やはり皮肉めいた笑みだ。

現れたのは強大な竜。ルカが両手を広げてても到底足りない。鞭を思わせるしなやかな尾に、皮膜の翼は蝙蝠に似てはいるが全く違う力強さに溢れている。

見るからに硬そうな真紅の鱗は光沢を放ち、一際存在感を示していた。頭部から生える角はルビーの結晶を思わせる。

竜は燃え盛る炎に似た宝石のような瞳を三人に向けた。

「何者だ？」

ただ、ただ一言。その一言が空気を震わせる。なのに不思議と恐怖は感じなかった。問答無用で襲って来ることもなく、見る限りでは様子がおかしいとは思えない。

しかしこれは冒険者組合ハンターズギルドの正式な依頼である。

「俺はルカ・エアハートと言います。実はギルドの依頼で貴方の様子がおかしいと聞いて……」

ルカは名乗ると、正直に事の次第を話した。偽っても仕方の無いことだし、何よりルカはそんな事をしたくはない。

声からして彼、だろугが、普通の人間なら彼を相手にしてこうも落ち着いてはいられない。

威圧的ではないが、強大な竜に見下ろされて恐怖を感じない者の方が少ないからだ。鋭い牙や長く伸びた爪は本能的な恐怖を呼び起こす。

『我はシャーレン。この地に住む竜だ。悪い事は言わん。人の子よ、今すぐ此処を立ち去るが良い……死にたくなければな』

相手も予想外のルカの反応に驚いたように目を細める。ただアルだけは何かを感じたようで静かに首を振った。

シャーレンが発した言葉は決して自らが望んだものではない。少なくともルカは間違いないと思う。

何故ならシャーレンは拒絶しながらも訴え掛けるような、それでいて助けを求めているような悲痛な瞳をしていたからだ。

お前が望むなら

「理由を聞かせて。これが依頼である以上、そう簡単に帰る訳には行かないんだ」

ルカはシャーレンから目を逸らすことはない。

口に出した言葉は建前だった。ルカの本音は別にある。依頼も理由の一つではあるが、どうしても彼の口から聞きたかったのだ。

シャーレンは何故、ここから立ち去れと言っただろう。

ルカの瞳をじっと見つめていたシャーレンだったが、

『早く立ち去れ……ぐ……あ』

言葉が途切れ、竜の巨体が傾く。

シャーレンは苦しげに呼吸を繰り返し、見えない何かに耐えるように地面に爪を突き立てている。明らかに普通ではない。そんなシャーレンを心配してルカが駆け寄るが、返った来たのは拒絶だった。

『く……るな』

『ルカ、様子が変だ。気をつける』

シャーレンの声は呻き声に近いが、はっきりとルカを拒絶している。肩に乗ったアルが気をつけると言ってもルカは一向に離れようとはしない。

様子がおかしいことは分かっていた。けれど、苦しげなシャーレンを放っておくことなど出来ない。

「分かってる。でも……」

「離れる！」

言い終わる前に、ルカの体は強い力で引き寄せられる。それと同時にルカが居た場所をシャーレンの爪が薙いだ。イクセが引き寄せてくれないければ、ルカも無事で済まなかっただろう。

だが、無事だったのはルカとアルだけ。イクセの左腕には切り裂かれたような傷があり、黒い服を濡らしていた。

ルカを庇ったせいだ。イクセは痛みにも顔をしかめながらも竜から視線は逸らさない。揺らめく炎を思わせる瞳は爛々と光り輝いている。

「イクセっ！」

「大丈夫だ。それより……」

イクセは左腕を押さえたまま、いつでも戦えるように腰の剣に手を添える。アルはルカの肩に乗ったまま、沈黙を守っていた。

真紅の竜は何度も何度も地面に頭を打ち付ける。それこそ狂ったように。一体、彼の身に何が起きているのだろう。

イクセに庇われたルカが思わず声を上げるが、果たしてシャーレンに届いているかどうか。

「シャーレン！」

『頼……む。逃げて……くれ。我はもう……自分で命を絶つことも出来ぬ……。叶うなら、我が……我である内に……殺して、くれ』

自由にならない体を押さえつけ、シャーレンは懇願するように頭を下げる。

余程強く噛み締めていたのだろう。口から一筋、鮮血が流れ落ちた。今は辛うじて彼の理性が残っているから良いものの、それもいつまでもつか。

もはや我は自分で命を絶つことすら出来ぬ身。ならばせめて殺してくれ、とシャーレンは言う。

けれど、ルカは諦めたくはなかった。

彼に何が起こっているのかルカには分からない。だからと言ってシャーレンの言葉に従うことは出来なかった。

会ったばかりだとか、そんなことは関係ないのだ。ルカにとって竜は『友達』だから。友達を助けたいと思うのは当たり前ではないのだろうか。

「そんなの嫌だ！ どうしてそんな簡単に諦めるの!？」

『ルカはそんな人間なのだ。 霊山を護りし竜よ』

シャーレンの頭の中に響いた声は、少年の肩に乗った小さな竜の声だった。

今まで意識すらしていなかった小さな存在。どうやら竜の声は人の子たちに聞こえてないようで、銀色の竜は真っ直ぐにシャーレンを見据えている。

どうして今まで気づかなかったのだろう。いや、気づけなかったのだろう。『彼』の存在に。

『貴方は…… 白銀の君』

「どつする、ルカ？」

肩に乗るアルが静かに問うた。イクセは何も言わず、ただ一人と

一匹を見つめている。

「……どうにかして助けられないの？」

目の前で苦しむ彼を、命を絶つことではしか救えないのだろうか。自分はなんて無力なのだ。シャーレンにしてあげられることが一つもない。この間にもシャーレンは必死に自らを苛む激情に耐えている。

ルカは血が滲むほど強く右手を握り締め、縋るようにアルを見た。

『私にもあの者を助ける術は分からぬ。そしてこのままではいずれ……。無理をするな。お前が辛いのなら私が代わっても良いのだぞ』

返ってきたのは半ば予想していた答えだった。彼が正気を失うのは時間の問題だ。助ける方法が分からない以上、今ここで命を絶たねば、多くの被害が出る。シャーレンもそれを望んでいるのだ。

だがアルは出来れば、ルカに命という重荷を背負わせたく無かった。

勝手だとは分かっている。それでもアルトゥールに取ってルカは何をしてでも守りたい存在だった。

『殺し……くれ』

「……それがシャーレンの願いなら。ごめんアル、力を貸して」

人は竜に比べあまりに脆弱な存在だ。生半可な魔歌スヘルアリアでは竜には通じない。何故なら魔歌は竜の喪歌を元にしたもの。元は彼らが操る術なのだから。

今のルカでは彼を傷つけることは出来ても、命を絶つことは出来ない。むしろ苦しみを長引かせるだけだろう。

それでもアルが力を貸してくれるなら、何とかなる。ルカが隣のアルを見ると、家族であり親友でもある竜は一も二もなく了承した。

『お前がそう望むのなら』

「シャーレン!？」

唐突に向けられた鞭のような尾の一撃をルカは、辛うじて身を捻ってかわした。

先程まで苦悶の表情を浮かべていたシャーレンはもうない。今の彼は理性の欠片もない獠猛な瞳をしており、天を衝くほどに猛々しい咆哮を上げた。

まずい。ルカが歌おうとしている魔歌は、普通の魔歌ではない。極度の集中を要するため、攻撃を避けながらはとても無理だ。

『どうすれば……』

「お前の歌が完成するまで俺が引き受けてやる」

唐突に口を開いたのはイクセだった。シャーレンの一撃を受けた利き手は大丈夫なのだろうか。

ルカの心配をよそに、イクセの顔には彼らしい不敵な笑みが浮かんでいる。自分を信じるといふことらしい。彼が信用に足る人物であると、ルカはとっくに理解していた。

「イクセ……ありがとう」

二重唱

本来なら、ルカに付き合う必要はないのだろう。イクセの役目は見届けることと、万が一の護衛だ。竜と戦うことは依頼には入っていない。

しかし、この少年に付き合ってみたくなつたのだ。自分が失つてしまつたものを持つ彼に。

イクセは利き手と逆の右手で、愛用の剣を抜き放つた。

普通の武器では竜に傷を付けることすら難しい。

魔歌による攻撃も武器よりは有効だが、高位の竜となれば人の器では必ずしも有効とは言えないのだ。

そう思っていたイクセだが、聞こえて来た歌に表情を変えた。ルカとアルが同時に歌っている。それも良く似た、だがまつたく違う歌。

「玲瓏たる凍鳴。其の色彩は契約の証、許されぬ永久の夢。齋すは、承継無き終焉のみ。愛し子は揺り籠の中で眠り、来る事の無い明日を夢見る」

『壮美なる蒼氷。其の色彩は停滞の証、繰り返される刹那の夢。齋すは、風化すら赦さぬ停止のみ。愛し子は夢見りより目覚めず、自らの運命を識ることもなし』

彼等が歌うは不思議な魔歌だつた。似て非なる言の葉。考えなくてもルカとアルがどれ程互いに信頼しているのかが分かる。

それは二重唱と呼ばれるもので、二人の魔奏士が共に別々の歌を歌い、一つの特異な魔歌を紡ぐ詠唱法である。竜と比べ、力に劣る人が生み出したものだ。

発動すれば非常に強力なのだが、その反面、魔奏士^{シンガー}同士の相性が悪かったり、息が合わなければ暴走する危険もあった。

心地良い歌を聞きながらイクセは跳躍し、爪の一撃を剣で受け流した。ただの一撃が圧倒的に重い。

しかしイクセの役目は彼を倒すことではないのだ。動きに注意を払えば見切れぬ速さではなかった。動きが滅茶苦茶で読みづらくはあるが、これくらいどうということはない。

「遙かな詩は世界に響き、世界は歌に満たされる。折れぬ心を知るならば、今導きの声に応えよ 絶対氷結」

『遙かな咆哮^{こえ}は世界に響き、世界は声に満たされる。砕けぬ心を知るならば、今我が導きに応えよ 絶対氷結』

イクセが離れた一瞬の内に歌が完成する。それと同時に肌を刺すような冷気が辺りを満たした。

ルカとアルを中心に渦巻く強大な魔力。二人とシャーレンの足元に円状の紋様が描き出される。同時に一気に周囲の温度が下がった。吐息が、空気が凍りつき、草も木も、あらゆる物が白く染まる。それは全てを氷結させる氷姫の吐息。

『絶対氷結』

詠唱の完成と共に、シャーレンの足元に描かれた光の紋様から隆起する数多の氷柱。鋭く尖ったそれは氷というより槍のよう。

隆起した氷は強靱な筈の竜の鱗を安々と貫き、地面に縫い止める。シャーレンから抑え切れない悲鳴が上がった。まるで磔にされた罪人のよう。

イクセもシャーレンから離れていると言いつのに、流れて来た冷気

が肌を刺すように痛い。

真紅の竜を貫いた氷はやがて強大な氷の棺となって竜を包む。

「……ごめん。俺が不甲斐ないばかりに。これで終わらせるよ」

泣いてなどいられない。ルカの呼び掛けに、棺は甲高い音を立てると、無数の氷片となって砕け散った。空中を舞う氷片が陽光を受けてきらきらと輝く。ダイヤモンドダストと呼ばれる現象だ。

あまりに幻想的な光景に、イクセの口から感嘆の声が漏れた。崩れるように倒れたシャーレンから断末魔の叫びがこぼれ落ちる。

『……』

最後に彼は何か言おうとしたが、それは言葉にはならなかった。炎を思わせる瞳が静かに目が閉じられる。命の灯が消えたシャーレンの体は、光の粒となって立ち上った。

純粋なマナによって構成される竜族は、死ねば体はマナに還元され、大気に溶けるのだ。それは世界と一つになるということに他ならない。

沈黙が場を満たす。ルカもイクセも喋ろうとはしない。

アルは視線をルカから外したまま、ゆっくり口を開いた。

「ルカ、これはあの者自身が願ったことだ。最後に自らの命の使い道をお前に預けた。ルカが気に病むことも自分を責める必要もない。……だがシャーレンに代わって礼を言う。ありがとう」

この心優しい少年は自らを責めるだろう。

それでもアルは知っておいて欲しいのだ。誰に強要されたわけでもない。彼は自分の意志で命の使い道を選んだのだと。

だからどうかルカには笑っていて欲しい。身勝手な思いだとも知っても。

「だけど……」

『お前はそう言うかもしれないが、私たちのために泣いてくれる。それだけで尊いのだ。だが、泣かないでくれ、ルカ。私はお前が泣いているのは苦手だ』

ルカの赤い瞳から一筋の涙が零れ、白い頬を濡らした。

我ながら情けないと思う。もう成人を迎えたと言うのにこれでは子供ではないか。

自分たちのために泣いてくれる。それだけで尊いのだとアルは言う。人も竜も同じだとルカは思っている。

人だから、竜だから、は関係ないのだ。

「お前はよくやったよ」

近付いて来たイクセが乱暴にルカの頭を撫でる。

その仕種が父にそっくりで余計に涙が出そうになった。

果たして、自分の行動は正しかったのだろうか。確かにシャーレンは死を望んだ。

だが他に何か方法があったのではないか。命を奪う以外に彼を救う術があったのではないか。

そう考えずにはいられない。

アルは何も言わなかった。金色の瞳を閉じ、ルカに身を寄せている。悲しみを少しでもやわらげるように、あるいは悲しみを分かち合うように。

ひとしきり泣いた後、涙を拭う。いつまでも泣いてはいられなかった。泣いてはシャーレンに申し訳が立たない。

ルカがふと下を見た時だ。シャーレンが消えた場所で光る何か。

「あれは……？」

近付いて見てみると、それはちょうど手に収まるくらいの結晶だった。

煙水晶に似た、だがそれよりも昏い色をしている。

ただの結晶ではないことはルカにも分かった。結晶からは力を感じるので。

『これは……おかしい』

ルカの肩に乗ったまま結晶を見つめていたアルが口を開いた。
心なしか声が硬い。何がおかしいのだろう。
見れば黙ったままのイクセも複雑な表情をしている。

「えっ？」

「竜族が純粋なマナから構成されるのは知っているだろう。だからこそ我等はマナを糧にするのだが……竜が死した時に残る物。それが竜の魔力とマナが結晶化した魔水晶だ。だが……」

竜は食事が必要としない。世界に漂うマナを取り込んでエネルギーとするのだ。

竜が死した時、体はマナへと還る。しかし唯一残されるものがあった。

それが竜の魔力と体内に取り込んだマナが結晶化した魔水晶と呼ばれるもの。ルカも魔水晶自体は知っている。けれど、気づけなかった。

魔水晶は単体で凄まじい力を秘めている。何せ、竜の魔力が結晶化したものだ。貴重で中々手に入らないが、人の魔歌を強化するこスベルアリアとが出来る。

だが問題はそれではない。シャーレンの魔水晶は『違う』のだ。

「俺もあまり見た事は無いんだが、魔水晶は確か乳白色か透明だったと思う」

「……そうだ。本来なら無色透明であるか乳白色。こんな色は私も初めて見た」

押し黙ったアルの言葉を継ぐように、イクセが口を開く。

魔水晶は本来、無色透明か乳白色のどちらかである。黒は存在しない。だというのに、シャーレンの魔水晶はどう見ても煙水晶のよな色をしていた。

ルカが転がった魔水晶を拾おうと触れた途端、水晶に蜘蛛の巣状の亀裂が入る。

「何？ ひびが……」

突然現れた亀裂に驚き、直ぐに手を引つ込めた。

だが次の瞬間、硝子が割れるような甲高い音を立て、魔水晶が四散する。

ただ触れただけなのに。

ルカが答えを求めるようにアルを見ると、彼は驚きに目を見開いていた。

アルがここまで動揺した姿をルカも見ることがない。

『馬鹿な……。触れただけで砕け散る筈がない』

魔水晶の強度は折り紙つきで、地面に叩きつけたくらいではひびも入らない。普通の武器では傷を付けるのがやっとだ。

しかし現に魔水晶は触れただけで砕け散った。あり得ないことばかりである。それが意味するものは……？

「……ここでもうしている訳にも行かないだろう。とりあえずアルストロメリアに戻るぞ。ルカ、一応欠片は拾っとけ」

『……分かっている』

「う、うん」

イクセの言う通り、長居は無用だ。いつまでもここにいて出来ることはないし、ギルドへの報告もある。何にしても一度アルストロメリアに戻るしかないだろう。

ルカは魔水晶の欠片を拾い、腰のポーチに仕舞う。ルカもアルも、そしてイクセも釈然としない思いを抱えながら霊山を後にした。

銀色の青年

アルストロメリアに着いた時には、既に太陽は西に沈み掛けている。
た。

直ぐそこには夕闇が迫り、オレンジの光がアルストロメリアの街並みを照らしている。

昼間は人で賑わっていた大通りも、夕刻であるからかやはり人通りは少ない。

既に露店は畳まれ、街には明かりが灯り始めていた。

多くの家々から煙が立ち上り、夕食時を知らせるように食欲をそそる香りが鼻孔をくすぐる。広場で遊んでいた子供たちも仲良く帰路に着く。

子供たちの無邪気な笑い声が響いていた。

ルカは街に着いてから何をしたのか、あまり覚えていない。

ギルドに行つて報告をすれば、アーヴィンやリリスは怒りながらも、よく無事だったと喜んでくれた。冒険者としての正式な手続きは明日でなければ出来ないと聞いた覚えがある。

その理由を聞いた気もするが思い出せない。

ルカは一言二言、言葉を交わしてイクセと別れ、酒場と宿を兼ねた宿屋にチェックインした。

そこでアルと一緒に早めの夕食を取り、シャワーを浴びたルカは勢いよくベッドにダイブする。白いシーツは太陽の香りがして気持ちいい。枕に顔を埋めていると、

『ルカ、せめて髪はちゃんと拭いてから寝ろ』

そんなアルの言葉も耳に入らない。一分と経たない内に健やかな寝息を立て始める。

アルはルカの寝付きの良さに半ば呆れ、感心しつつもブランケットを掛けてやった。

勿論、口で挟んで、だが。

牙を立てて破かなかったただけ上出来だ。

「……ごめ……ん」

身じろぎしたルカの瞼が震え、頬に涙が伝う。

アルやイクセの手前、気丈に振る舞ってはいたようだが、やはり辛かったのだらう。

痛ましげに顔を伏せたアルの体が光に包まれる。一瞬の後、アルがいた場所には長身瘦躯の青年の姿があった。

年の頃は恐らく二十歳前後。恐ろしく整った顔立ちの青年だ。否の打ち所がない美貌は、とても人間的ではない。艶やかな光沢を放つ銀色の髪は長く、腰近くまで伸びている。服装は白い布が何重にも折り重なったようなローブで、幾つもの金の留具があしらわれていた。

ルカを見下ろす瞳は、猫のような縦長の瞳孔に煌く金色をしている。

青年はベッドの側にしゃがみこむと、長い指でそつとルカの涙を掬い取ってやった。

本当に優しい少年だ。会ったばかりの竜の死をこれほどまでに悲しんでくれる。

空よりも青く、海よりも透き通った美しい魂を持つ少年。

その魂に心惹かれた。

「ルカ……」

ルカの名を呟いたきり、青年は喋ろうとはしない。ただルカを慈しみに満ちた眼差しで見つめているだけ。

その時、青年の耳に控えめなノックの音が届いた。

一応ノックはしたものの、返事が来るまで入らないというのはイクセの柄ではない。

しかし、いざドアを開けてみると、見知らぬ青年の姿があるだけだ。

部屋を間違えたかもしれない。イクセが急いでドアを閉めようと腕を引き掛けた時、おもむろに銀色の青年が口を開いた。

「部屋は合っているぞ、イクセル」

「……もしかしくなくてもアルか？」

銀糸を紡いだような髪に黄金の瞳。人ならざる美貌を持つ彼に見覚えはない。

知らない人物に名前を呼ばれ、イクセは目が点になる。

だがこの尊大な物言い、そして合っているという言葉。二つを照合すると答えは自ずと出た。

イクセの確信を突いた問い掛けに、青年は猫のような金の瞳を瞬かせ、驚いた顔を作った。青年　アルは頷き、イクセを見返す。

「ああ。……驚かないのか？」

「そりゃあまあ、でも驚いたってどうにかなる訳じゃないだろう？」

生憎と非常識なことには慣れている。冒険者なら日常茶飯事だ。ハンター

いちいち動揺しては身が持たない。

別に竜が人間になっただらかと言って、それは驚くが、騒ぐほどイクセは馬鹿ではないのだ。

第一、騒いだところで解決するはずもなく、むしろ余計に話がややこしくなるだけである。

それともイクセル・クラインを舐めているのか。

「それは……そうだが、しかしそう簡単な問題でもないだろうに。お前は本当におかしな人間だ」

会った時から思っていたこと。このイクセルという人間はルカとは少し違うが、良い意味で常識外れなのだ。

竜の強大な力に対して、脅威は覚えているだろうが、恐れる素振りもない。現にアルが人の姿になってもこの態度である。

やはり人という生き物は、個体差が激しいとアルは思う。ルカやイクセのように竜族と友好的な関係を築く者も居れば、あからさまに畏怖や恐慌といった感情をぶつけて来る者も沢山居る。

それは竜族が人の良き隣人と呼ばれるようになった現在でも変わらない。人の中に根強く残っている感情なのだ。

アルには正確な理由は分からないが、人というものは自分と違うものを排斥し、拒絶する。

おまけに同じ種族でありながらも、肌や髪、瞳の色などで争う彼らだ。竜は人よりも強大な力を有する上に生物としても、全く人間とは違う。

人が竜を恐れるのも、ある意味では仕方のないことなのだろう。そして何より、人自身が自分達よりも竜を上位の種族だと考えているからなのかもしれない。

「おかしいとは失礼だな。寛容だと言ってくれ、寛容と」

少しだけ不満そうに唇を尖らせるイクセ。そんな彼を見てアルは小さく笑う。

本当に人間が彼やルカのような者たちならいい。

そうすればアルトゥールは何の疑問もなく世界を愛していただけるうに。

だがそうなるには彼は永い時を生き過ぎており、人の愚かさと醜さを知り過ぎていた。

共に歩む者ならば

「そうだな。お前は本当に寛容だよ。イクセル」

他の人間に比べて恐ろしくな、とアルは続ける。ルカや彼の父、ゲイルにイクセル、そしてエランディアの人々は別だが、アルトゥールはそれほど人を好いているわけではない。彼らのように素晴らしい人々に出会わなければアルはずっと人間を好きになれなかっただろう。

聡いイクセルは何か彼の含みに気付いたらしく、微妙な顔をしている。一応、アルなりに褒めたつもりではあったが、どうも分かりづらかったらしい。

何とも言えない顔をして頭を掻いている。

「竜の考えはわかんねえな」

そんなイクセルを見て小さく笑った時、アルは激しい痛みを胸を押さえて蹲る。とても言葉では言い表わせないほどの痛みだ。まるで体を串刺しにされるような痛みに立ち上がれない。

同時に頭の中に流れこんでくる映像。

今は狼狽えるイクセルの姿も目に入らなかった。頭に浮かんだその映像を食い入るように見つめていることしか出来ない。

「おい、どうした!？」

切羽詰まったイクセルの声も耳に入らなかった。見えるのは雪に閉ざされた未開の地。

そして蒼穹色の鱗を持つ竜と対峙する、黒い外套を纏った人間。

ローブの人物から紡ぎ出された旋律は、痛みに朦朧とするアルの意識を覚醒させるには十分だった。最後に見たのは魔水晶が煌く幻想的な洞窟である。

信じられなかった。だがこれは現実だ。『彼』がもつとも近くにいた自分に助けを求めた、ということではないだろうが。

トランクスレイヤー
「滅竜歌……だと」

トランクスレイヤー
「滅……竜歌？」

トランクスレイヤー
滅竜歌。その名すら忘れ去られた魔歌である。遙か昔、竜を滅ぼすためだけに人間が編み出した、だが千年も前に廃れたはずの失伝魔法。

歌える人間がいるはずはない。そう、絶対に。
けれど、脳裏に響いた魔歌は間違いなく竜を滅ぼす滅竜歌。トランクスレイヤー

彼らしくない狼狽した様子のアルは、まるでイクセが目に入っていないかのよう。

金の瞳も焦点が合っていない。ここでは無い虚空を見つめているだけだ。イクセが両手でアルの肩を掴んで揺さぶると、虚ろだった瞳にも輝きが戻って来る。

「おいつ！ アル！！」

「……私は大丈夫だ。静かにしろ。ルカが起きる」

顔を上げたアルは蒼白と言っている。

だがアルの抑揚の無い口調からは、質問は一切受け付けられないという堅い意志がはっきりと滲み出ていた。

大丈夫だと言ってイクセの助けを拒み、一人で立ち上がる。何も

ないよう装っているが、何も無いはずがない。

アルが倒れかけた理由も分からず、滅竜歌という不吉な単語のことも分からないのだ。

「何を考えてる？」

黙り込んだアルを見て、思わずイクセの口をついて出た言葉。しまったと思った時には既に遅い。

だが先程のアルが見せた顔。悲壮な決意といえいいのだろうか。何故かは分からない。彼は最も大切にしているであろうルカを置いて行くような気がした。

その時、寝ている少年にアルが一瞬だけ視線を向けたのをイクセは見逃さなかった。

アルは答えない。憂いを帯びた表情で何も言うことなく、窓の外を見据えている。彼はその金の瞳に風景ではない何を映しているのだろうか。

「……こいつを、ルカを置いて行くつもりなのか？」

予想すらしなかったイクセの言葉に、微動だにしなかった青年が僅かに目を見張った。

しかし反応はしたものの、アルは口を閉ざしたまま。

だが否定もしない沈黙は肯定しているのと同じであった。

この一日、見てきた竜ならば、本当に何も無いのなら真っ先に否定するだろう。それがルカのことなら尚更だ。

「俺にはお前の考えていることは分からないし、事情も知らない。だが何故だ？ ルカはお前にとって大切な存在じゃないのか？」

イクセはただの冒険者^{ハンター}で彼らのことをよく知らない。
だがこの一日、行動を共にしたアルならばあり得ないことは真っ
先に否定するはず。

否定も肯定もしない沈黙。それこそが肯定である証だった。

「……言うまでもなくそうだ。だが私と共に行けば十中八九、命の
危険に曝されるだろう。そうと分かっているル力を連れて行くこと
など私には出来ない」

暫しの沈黙の後、アルはまるで搾り出すように、あるいは自らに
言い聞かせるように答えた。

イクセもアルの言いたいことは分からないではない。アルにとっ
てル力は『全て』なのだろう。

これはルカから聞いた話だが、ルカはアルと三歳の時から一緒に
居るのだという。ではもし家族同然の彼が突然居なくなったら、ル
カは何を思うだろう。

「危険だと言うのならお前が共に居て守ればいい。どうしてそんな
簡単な事が分からないんだ。ルカはきつとお前に置いて行かれたと
泣くだろう。少しは置いて行かれる者の気持ちを考えたらどうだ。
……それとも俺の言っている事は間違ってるか？」

勿論、残して行く方も辛いだろう。

だがイクセは置いて行かれる者の悲哀を知っている。はじめは明
確な理由も分からず、まるで世界にたった一人残されたような孤独
感に苛まれた。

何故、何故自分を残して命を絶ったのか。

大切だからこそ傍を離れた？ そんな理由、慰めにもならない。

本当に大切ならば傍に居て欲しかった。共に生きて欲しかった。何
故理解^{わかって}くれなかったのか。

物好きな人間

「いいや。これはただの私の我が儘だ。そうだな……私は何を恐れていたのだろうか」

アルは優しい手つきでルカの髪に触れた。銀色の長い髪に隠れて彼の表情は見えない。

彼ら竜族は長き時を生きる種族な訳だから、彼もイクセの何十倍も生きている計算になる。それは全て理解した上で出した決断なのかもしれない。

どんなに言葉を重ねてもイクセは部外者だ。彼らには彼らの事情がある。

一瞬だけ軽はずみな事を口にしたかと後悔したが、ならば尚の事、イクセが言おうとした意味が分かるのではないか。

「なら問題ないだろ？ それに俺も付き合っから心配するな」

誰もが見惚れる笑みを作ったイクセは、アルが全くもって予想していなかった一言をあっけらかんと言いつつ放った。

アルが言葉の意味を理解する間、たつぷりと痛いぐらいの沈黙が続く。

やっとイクセが言わんとした事を理解し、アルは盛大なため息をついた後、失笑とも苦笑ともつかない微妙な表情を浮かべた。

「まさかそんな事を言いここまで来たのか？」

「ああ。なんだ、おかしいか？」

イクセはついさつき自分を説教した人物と同一人物とは思えないほど間抜けな顔をしている。

イクセにすればルカは徐々に気に入った人物だし、旅は道連れだと誰かが言っていたものだ。

それに普段は同業者と積極的に関わらないが、興味がある、と言えればいいだろうか。

「ああ、おかしいな。物好きな人間もいたものだ。ルカを気に入ったようだが、あまりルカで遊んでくれるなよ？ お前と違って純粋なのだからな」

そう言っただけで笑うアルは、どこか楽しそうだ。

しかし失礼ではないか。ルカは純粋でイクセは違うといたいのだろう。確かにその通りだが、わざわざ指摘する所でもないだろうに。

人間、というかルカに近づく者には割と嫌味をよく言うのかも知れない。どの道、この竜に逆らうつもりはなかった。先ほどのように動揺している時ならまだしも、今はとても口では敵いそうにない。

「へいへい。どうせ俺は純粋じゃありませんよ。そもそも十九にもなっただけで純粋はないだろ」

かといってこのまま部屋に戻るのも癪だ。

反論を忘れずに言うとなまた明日な、とイクセは部屋を後にした。

ドアが閉まる音を確認してアルは元の姿に戻り、ルカの枕元で身を丸める。

健やかな寝息を立てる少年が起きる気配はない。

目を閉じたところでイクセに言われたことが蘇る。

思い知らされた気がした。やはり人と竜は違つと。

人と共に生き、暮らすようになっても自分たちは違つ存在だ。^{ルカ}

彼と生きることでは忘れかけていた使命。

これはきつと警告だ。身の程を弁えず、たった一つの存在に心奪^{アルトウール}われた自分への。

いくら鳥籠から出ようとしても叶わない。何故なら飛び立つための翼は既に絡め取られているのだから。

第一奏 了

旅は道連れ

深いまどろみの中でルカは二人の人間の声を聞いていた。

誰が誰を置いて行く？ 命の危険？ 一人はイクセの声だ。もう一人は……誰なのだろう。聞いたことのない声。だけどどこか懐かしい。

会話の内容は耳には入って来る。ただ覚醒していない頭では理解出来ないだけだ。

やがてドアが閉まる音を境に、部屋は静けさに包まれた。薄れ行く意識の中で誰かが優しく頭を撫でた気がした。

瞼をさす光で目が覚める。ゆっくりと目を開ければ朝日が眩しい。目が光に慣れ、真っ先に視界に入った白い天井。故郷エランディアではないのだ。アルストロメリアの宿屋である。

昨日の夜は色々あったせいか直ぐに眠ってしまったらしい。ルカが上体を起こすと、アルは既に起きていて、窓際に座って外の景色を眺めていた。

それなのに何故か不安になる。金色の瞳を外に向けた彼は景色ではないどこかを見ているよう。不安になり、思わず親友の名を呼ぶ。

「アル？」

『ん？ 起きたのか？』

振り向いたアルは、ぱたぱたと翼を羽ばたかせ、定位置であるルカの肩に乗った。

こちらを見るアルは普段と何ら変わらない。気のせいだったのだろうか。

今のアルはちゃんと目の前を、ルカを見ている。

「うん。……朝ご飯食べに行こうか」

気のせいだったのかもれない。

深く考えるのはよそう、とルカはベッドから起き上がり、背伸びをする。身支度を整えると一階に向かう。

食堂に着いたルカは正に目になった。昨日別れたはずのイクセがカウンター席に座って手を上げていたからである。

着崩した黒い服に、腰には長剣と刀と呼ばれる不思議な剣。艶やかな長い黒髪をこめかみ付近の髪だけ残し、上辺りで適当に紐で結んでいる。いわゆるポニーテールというやつだ。

「あれ？ なんでイクセがここにいるの？」

「言ってなかったか？ 俺もここに泊まったんだよ」

ルカが泊まったこの宿屋は大きいし、同じ宿になる可能性もくはない。

だが聞いてないよ、と驚くルカを尻目にイクセはただ面白そうに笑っていた。

ルカは結局、イクセの隣に座って朝食を取ることになった。今日

のモーニングセットは小麦色に焼き上がったトースト、コーヒー（イクセはブラック、ルカは砂糖とミルク入り）にレタスとトマトのサラダ。

たっぷりとイチゴジャムを塗ったトーストをかじりながらルカは聞いた。

「ねえ、本当に一緒に来るつもりなの？」

朝食が運ばれて来る間にイクセから聞かされた驚きの提案。アルは相変わらずしれっとしていたが、ルカは約一分無言で目を白黒させていた。イクセはルカについて来るという。

そもそも二つ名で呼ばれる彼が、自分の旅に同行するメリットがないではないか。

「駄目か？」

「そうじゃないけど、アーヴィンさんからイクセはあんまり人と組まないうって聞いたから」

駄目か、と聞かれれば駄目なはずがない。イクセは街を出でから初めて気負わずに話せる相手だし、何より一緒に居て楽しい。

しかしイクセほどの冒険者となれば引く手数多のはず。それなのに自分と共に来ていいのだろうか。

「まあ、俺は気に入った奴としか組まないからな。お前が気に入った。それじゃ不満か？」

そう言って黒呀と謳われる青年は、憎らしいくらいに惚れ惚れする笑みを見せる。

そこまで言われれば、嫌とは言えないではないか。ルカは困った

ような、苦笑めいたような表情を作った。

そんな二人を尻目に、アルは我関せずといった様子でイチゴジャムを食べている。ルカ以外にはとことん関心がない竜である。

「ううん。じゃあ改めてよろしく、イクセ」

ルカはイクセに向かって右手を差し出す。イクセもルカの手を取り、しっかりと握り締めた。

そしてその二人の手の上に銀色の竜がぼすつ、と乗り上げる。

どうやら自分を忘れるなどの無言の抗議らしい。さっきは全く干渉しなかったくせに現金な者であるとはイクセの談。

イクセは仕方なくもう一方の手、左手でアルの頭を撫でてやった。彼が不服そうにイクセの手を押しつけたのは、それから五秒後のことである。

昨日は色々と手一杯で街中を見て回ることも出来なかったが、アルストロメリアはエランディアとは全く違う。

エランディアにも朝市はあるが、露店に並ぶものは随分違う。新鮮な魚介類や野菜が並んでおり、威勢の良い声が飛び交っている。目にする物全てが珍しく見えてルカは思わず顔を綻ばせた。

故郷の街は海に囲まれていることもあり、ジャムなどの保存がきく物を除いて新鮮な果物や野菜は貴重だった。

エランディアでも野菜は栽培されてはいたが、潮風に耐えられるものとなれば限られてくる。果物も同じだ。

「そんなに珍しいのか？」

嬉しそうに顔を輝かせるルカを見て、イクセは露店にある林檎を買って手渡した。

ルカが思いきってかじると、みずみずしい林檎の爽やかな味が口内に広がる。

嬉しそうに林檎を頬張るルカだが、一体どんな辺境に住んでいたのか。アルストロメリアは街の中でも一般的で、他と比べて変わった所もない。

イクセの故郷も島国であるが、生鮮食品は豊富だったため、大陸に来て驚くことはなかった。

「うん。イクセには言ってなかったよね？俺はエランディアの出身なんだ。だから街を出るのも初めてだよ」

「へえ、あの変わった風習の」

エランディアには不思議な風習があるとイクセも聞いたことがある。

確か成人を迎えるまでは街を出ることを許されない、そんな感じだっただろうか。言われてみれば依頼の最中も街道をきよるきよる

と見回していた。

しかしそれにしては戦い慣れていると思うのだが。

イクセは彼にしては珍しく怪訝な表情をしている。こう見えて聡いルカは、彼の疑問に気付いたようでああ、と声を上げた。

「エランディアで何でも屋紛いの仕事してたから。基礎は父さんから教わったんだけど、結構魔物も出るしね」

一口に魔物といっても様々で、ひっそりと住んでいるものもあれば、人に牙を剥く魔物もいる。

何でも屋の仕事には、そう言った人に害なす魔物の退治も入っていたのだ。

ルカの父、ゲイルは運び屋をしていることもあって剣術の心得があった。ルカは知らないことだが、会話に困った彼は徹底的に息子に剣術を教え込んだのである。

「なるほど。道理で街を出たばかりでも戦い慣れてるわけだ。で、どこか行きたい所あるか？ ギルドに行くにも急ぐことでもないだろうし」

「んー、じゃあ武器屋に寄っていい？」

イクセが何故だと尋ねると、ルカは二の腕に付けているスローナイフの鞘を指差した。

アーヴィンを助ける時に投擲して回収するのをすっかり忘れていたのだ。

武器屋に一步踏み入れたルカは思わず感嘆の声を上げた。故郷の街とは比べ物にならない品揃えだったからである。

剣だけでも多くの種類があり、兵士が好んで使う、炎のように波打つ刀身を持つフランベルジェや冒険者の間ではお馴染みのバスタ

ードソードなどの有名所。

使い手の少ない、曲線を描く細身の刀剣シャムシールや、その重量からあまり実用とは言いづらいツーハンドソードまで様々である。

それらを横目にルカは短剣やレイピアなどが陳列されている一角に向かった。

本来短剣は投擲に向いているとは言えない。投げるよりも直接斬り付けた方が良いからだ。

射程自体も長いとはいえないし、急所に当たらなければ決定的な傷にもならない。ルカがあえてスローナイフを使うのは馴染みの武器だったからといえる。

「んー、どれにしようかな」

「これなんかどうだ？」

イクセが手に取ったのは、黒い柄に少し長めの刀身。シンプルな作りのナイフ。ルカはそれを受けとって軽く振る。持ちやすさは勿論、値段も手頃だ。銀の刃には一点の曇もない。

ものの数秒で購入を決めたルカは店長の元へと向かう。イクセは会計を待つ間、アルを頭に乗せて陳列された武器たちを眺めていた。

「重いんだが……」

『知らんな』

イクセの抗議も当然、アルには黙殺される。将来禿げたらどうしてくれるんだと言いたいが、言えるはずもなく。

こうして見て回っても、流石に刀は置いていないようだ。

刀は所謂“斬る”ことに特化した剣である。刀身は合金で作られていることもあり、最も強靱な刃をもっていると言えるだろう。

そうこうしている内に会計を終えたルカが戻って来た。何やら晴々しい顔をしているが……。

イクセの頭に乗っていたアルが、定位置であるルカの肩に乗る。

「じゃーん。値引きしてもらったよ」

得意そうに語るルカに思わず店長の方を見ると、疲れたような、だがこちらもどこか晴々しい表情を浮かべていた。

どれだけ値引きして貰ったのか分からないが、ルカが満足したことは確かだ。

「一体何したんだ？」

「えっへへ、秘密」

イクセが尋ねてもルカは秘密と笑うばかり。余程嬉しかったのだろう。見て見て、と肩に乗るアルに見せている。

笑うルカは十五歳の少年そのもので、とても竜を倒すほどの魔奏士には見えなかった。

絆を繋ぐもの

武器屋を後にしたルカ達は、その足でギルドへと向かう。

冒険者としての正式な手続きを行うためだ。

ギルドは昨日訪れた時とは違い、静けさに包まれていた。しかしギルドの“静か”の定義は普通の“騒がしい”であるため、あてにはならないが。

ここのギルドは酒場でもあるため、まだ朝だと言うのに多くの人で賑わっている。朝っぱらから酒をあおる者、テーブルに突っ伏して眠る者、ポーカールに興じる者など様々だ。

ルカがそんな彼らを見回しながら歩いていると、その度に誰かに話し掛けられる。

カウンターに向かうまで一体何人に声を掛けられたか。

「ねえ、イクセ。なんでこんなに話し掛けられるんだろ？」

当の本人は小首を傾げてイクセに問うた。本当に話しかけられる理由が分からないのだろう。

やはりこの少年は鋭いのか鈍いのか分からない。昨日あれだけ目立っていたのを忘れたのだろうか。それともルカの基準では目立つ、に入らないのかもしれない。

肩に乗ったアルはそんな彼に慣れているようで、頭を押さえようとしたイクセを見て、微かに笑っている。

「あのなあ。昨日あれだけ目立ってたただろうが」

「目立ってた？」

「昨日魔歌を歌ってただろう。後、俺が付いて行ったせいもあるけど」

目立ってた、と言われてルカは本当に不思議そうな顔をしていた。確かに喧嘩を止めたが、それだけで話しかけられるとは思えないからだ。

問題なのは喧嘩を止めたことではない。何、で喧嘩を止めたのか、だ。

しかしルカが声を掛けられた理由はイクセにもあった。人を近付けぬことで有名なイクセが成人を迎えて間もない少年を気に入って同行したというのだから、冒険者たちが興味を示すのも仕方がない。

「あ、あれ？俺にとって魔歌を歌うことは別に特別なことでもないから、全然気付かなかつたよ。ってかイクセのせいじゃん！」

普通、魔奏士シンガーは滅多に魔歌を歌わない。少なくとも喧嘩の仲裁には使わないだろう。それは彼等が力を見せつけることを嫌うからだ。魔歌は学べばある程度、誰でも扱う事は出来るが、歌が重要な意味を占めるため、個人の落差が激しい。

特にルカが歌った『絶対氷結』など高度な魔歌となれば、歌える者も限られてくる。それはつまり、魔奏士であっても雲泥の差がある場合もあり、自らの手の内を見せないという意味でもあるからだ。

「ルカはエランディアでもよく歌っていたからな」

アルが言うように、ルカは故郷ではよく歌っていた。仲の良い子供たちにせがまれるからだ。勿論、歌うことが好きなのも理由の一つだが。

それにルカにとって魔歌スヘルリアは自分とアルを繋いでくれたきっかけでもあり、人と人を結ぶもの“絆”であって隠すべき特別なことでは

ない。

「おはよう二人共。アル君もね」

「元気そうで良かった。昨日沈んだ顔をしてただろう？」

二人とアルを出迎えたのは、昨日と同じようにカウンターに立つリリースとアーヴィンだ。

彼の腕には包帯が巻かれているが、昨日よりか楽なのか動作は自然そのものである。アーヴィンはグラスを磨く手を止めて柔らかく微笑みかけた。

もしかして自分はそんなに顔に出ていたのか。どうやらリリースも気付いていたようで、ルカは急に恥ずかしくなって俯く。

「あ、はい！ すみません。ちょっと色々あったんで。でももう大丈夫です！」

心配してくれた二人に申し訳なくて、ルカは何とか笑みを作った。だけど“彼”を助けられなかったことを思うと辛い。

でもそれと同時に、ちつぽけな力で誰かを救えるなど思い上がりだと思う自分もいる。あれで本当によかったのだろうか。何か別の方法があったのではないのか、と何度も考えてしまう。

考えた所で“答え”が出ないのは分かりきっている。

しかしそれを止めることはルカには出来なかった。

ただ皆に心配をかけたくない。その一心でルカは何でもないと笑う。少年の気遣いに気付いたイクセはルカの頭に手を置いた。無理をするなどの意味を込めて。

「そう？ ならいいんだけど……」

「そうそう、ルカ君も晴れて冒険者ハンターになった訳だし、肝心な物を忘れてたわ。今から渡す物は、ライセンス代わりだと思ってちょうだい。冒険者のランクは石の色を見れば直ぐ分かるわ。ルカ君はまだ取ったばかりだから緑よ。後は順に赤、青、紫ね」

リリスもアーヴィンもルカより人生経験豊富な“大人”である。二人はルカの様子から何かを察したようで、深く追及することは止めようだ。

気を取りなおしたりリリスが差し出したもの。不思議な輝きを放つフォレストグリーンの宝石が嵌め込まれた耳飾りだった。シンプルだがそれ故に無駄な細工がなく、ルカが好きなデザインである。

この石は冒険者の身分を証明する物であり、石の色で持ち主のランクが分かる仕組みになっているらしい。

「ちなみにイクセって勿論……」

リリスが持つ耳飾りを見てふと思う。そういえばイクセのランクを示す石は何色だろう。隣のイクセに視線を向けると、彼は笑いながら無言で刀を見せる。

その剣帯には飾りが付けられていた。石の色は言うまでもなく『紫』。冒険者の最高位である。ハンター

「……ですよねえ」

「ルカちゃんにはこれが一番似合うと思ったの。これは絶対に無くさないようにしてね。一応ギルドからの支給品だけど紛失した場合、自費だから」

冒険者となって初めて支給される石はライセンス代わりとなるた

め、装飾具など直ぐ見せられる物を選ぶ冒険者ハンターも多い。

イクセも剣帯に付けているし、首飾りや腕輪といった装飾品に加
工する者たちもいた。

リリスによると紛失した場合、自費らしい。聞けば飛び上がるほ
ど高いという。これは嵌められている石が特殊なせいでもあるが、
正当な理由があれば紛失、または破損しても支給される。

「分かりました。気をつけます」

リリスから耳飾りを受けとって付けると、ルカは改めて自分が冒
険者になったのだと実感した。一人前には程遠いだろうが、それ
も今はこれでいいと思う。

例え一歩ずつだとしても自分は確かに進んでいるのだ。そう考え
ると嬉しさが込み上げてくる。シャーレンのことを考えると胸は痛
んだが、今は納得して前に進むしかないのだろう。

「そういえば、ルカ君はこれからどうするんだ？ イクセはどうせ
君に付いて行くんだらう」

アーヴィン曰くイクセは元から一つの街に長居するタイプではな
いし、ルカを気に入っているらしい。彼とは結構な付き合いである
アーヴィンにはイクセがどうするのか、何となく理解出来ていたの
だ。

「世界を見て回ろうと思います。俺、今まで故郷の街 エランデ
イアから出たことがなかったの」

「だからあの時も道が分からなかったわけか。君がエランディア出
身なら納得したよ」

成人を迎えないと街を出られないというきたりは、大陸中探してもエランディアくらいなものだ。こうして街の外に出て分かったが、外の世界は本当に広い。

見るもの全てが新鮮で、自分の知らないことだらけだ。

知らないものに触れるのは胸が躍る。無論、目に見える全てが綺麗だとは限らない。むしろ汚れている部分の方が多いかもしれない。世界が決して綺麗なだけではないことはルカも分かっていた。

まだまだ一人前とは言えないだろうが、何も知らない子供ではないのだ。

この先、楽しいことばかりではなく、辛いこともあるだろう。シヤレンの時のように、誰かの命を絶たなければならぬ場面に出くわさないとも限らない。

それでもルカは知りたいと思う。まだ見ぬ世界を、これから出会うであろう多くの人々を。

「ね、二人とも。目的地はどこにする？」

「まあ、俺はお前に付いてくから気にするな」

ルカの声に答えたのはイクセ。いつもなら真っ先に反応するはずのアルは、考え込むように虚空を見つめている。

普通の人間には竜の表情など分からないだろう。だがルカには分かった。

今のアルは悩んでいる。間違いなく。

アルが悩みや迷いといった感情を表に出すことは滅多にない。と
いづか見たことがなかった。ルカの前でも、だ。

そんなアルが言うことを躊躇っている。何年も一緒にいるのに直ぐに気付けなかったことが悔やしかった。アルにとって自分^{ルカ}は何な

のだろう。親友であり、時には父や兄であった彼。

「おし、ちょっと場所変えるか」

気を利かせて言ったのはイクセである。彼はルカの頭を軽く叩いた後、安心させるように髪を撫でる。確かにここは騒がしいし、場所を変えた方がいい。

ルカはアーヴィンとリリースに再会の約束をして、イクセと共にギルドを出た。

共に存るとの誓い

ギルドを出た二人と一匹が訪れたのは、街の中心に位置する広場。水が豊かなアルストロメリアを象徴する大きな噴水が目を引く。

まだ朝も早い。運動をする者や朝の散歩をする者など結構な人を見かけることが出来た。アルストロメリアはかなり大きな街であるが、広場の周辺には木々が植えられ、鮮やかな花々が咲き誇っている。

ルカとイクセは空いていたベンチに腰掛け、アルは話をし易いように手摺に飛び移った。

「……ねえ、アル。何か言いたいこと、あるんじゃないの？」

噴水を見据えたままルカは問う。目の前では子供たちが噴水の水を掛け合ってはしゃぎ回っている。朝から元気な限りだが、彼らには朝も昼も関係ないのだろう。

対するアルは無言。まだ話していいものか悩んでいるのかもしれない。以前ならアルが話したくないのなら、ルカも無理に聞こうとは思わなかった。

けれど、シャーレンの一件があつてからアルの様子は明らかにおかしかった。暫しの沈黙の後、アルは重い口を開く。

『……正直な話、私も何と説明したものか困っているのだ。話せばお前を巻き込んでしまうかもしれない。そうなればお前まで危険に曝すかもしれないのだ。ルカよ、それでも尚、知る覚悟はあるか？』

アルを見れば美しい金の瞳と目が合った。知る覚悟はあるか、彼の顔と声は真剣そのもの。アルがここまで言うのなら、本当に危険に曝されるのだろうか。

だがそれが何だというのか。例え危険が身に迫ろうが構わなかった。ルカにとつてはそれよりも、アルがいなくなってしまう方がずっと怖い。ルカは案じて欲しい訳ではなく、彼が背負うものを少しでも背負わせて欲しいのだ。

イクセは口を挟むことなく、二人の会話を聞いている。ルカはアルの瞳を見据え、無言で肯定の意を示すように頷いた。

『お前たちの言葉で言うのなら同族だろうが、私と同じ存在^{もの}が今、命の危機に瀕している。このまま何もしなければ、確実に命尽きることだろう。しかもその者が受けた傷は喪歌や古代歌では癒すことが出来ない。何故ならそれは、竜を滅ぼすためだけに編み出された^{スヘルアリア}魔歌だからだ。今はことは別の空間にいるが……。本来ならお前に頼むべきなのだろう。しかし、お前を巻き込むと分かっています、私は言えなかつた』

人には効かず、純粋なマナで構成された竜のみを傷付ける。受ければまず無事では済まない。例え生き残ったとしても、その傷は喪歌や喪歌よりも上位とされる古代歌の癒しすら受け付けぬ。それは正に竜族を滅ぼすためだけに生み出された狂気の魔歌。

アルと“同族”だからこそ、“彼”はかろうじて命を繋ぎ止めている。今は純粋なマナが溢れる空間にいるようだが、それでも尚助かるかどうか……。

『アル』が助けられない以上、ルカに助けを求めるべきなのだろう。本来なら迷うことすら許されない。けれど、もし彼と引き合わせれば、ルカを自分たちの事情に巻き込んでしまいかもしれなかった。それだけならまだいい。彼を傷つけた相手がルカを傷つけないという保証はどこにもないのだ。

だからアルは迷っていた。話せばルカは絶対に行くと言いはるだろう。危険に曝されると分かっていますが、誰かを見殺しにするよう

な少年ではないからだ。

「アルはその人、って言うのもおかしいけど、会いに行きたいんだよね？ なら俺も行くよ。喪歌ロストアリアや竜エンシェントアリアの古代歌じゃ助けられないのなら、魔歌スベルアリアで助けられるかもしれない。それに……アルはずっと俺と一緒にいてくれるんでしょ？」

ルカはふわりと笑ってアルの頬に手を添える。『アルトウール』は人間の少年と共に生き、共に存ることを誓ってくれた。約束してくれたことが、ただ純粹に嬉しかったのだ。母が死んでから、父は滅多に帰ってこなくなった。寂しくて悲しくて、震えるルカにアルは言ってくれた。この命ある限り、共に在る、と。

『ああ。此の命有る限り、私はお前と共に在る』

アルは誓いの言葉を口にするると目を細め、添えられた手に頬を寄せる。

幼きあの日、アルが誓ってくれた言葉。何よりも嬉しかった。自分自分は一人じゃないと勇気付けられた。

でも改めて言われると何だか照れ臭い。ルカはアルから手を離すと話をそらした。

「……うん。ありがとう。あ、イクセはどうするの？」

不安気に隣のイクセを見上げる。ルカにしてみればついて来てくれれば心強い。だがアルは命の危険に曝されるかもしれないと言った。いくら彼が凄腕の冒険者と言えど、人より遥かに強い力を持つ竜までもが危険だという場所に好んで行くだろうか？

もし行くというのなら余程の物好きである。それに冒険者は体が資本だ。これは依頼ではないし、ましてや報酬があるわけでもない。

いくら彼がルカを気に入っているといても、それとこれとは話が別だ。

「ん？ 俺はお前について行くって決めたからな。今更何がこようとも構わないさ」

だがルカの懸念をよそに、イクセは軽く答える。イクセにとって死の危険は日常茶飯事、隣り合わせに存在する。冒険者である以上、死の危険は避けては通れないのだ。

死にかけて経験など一度や二度ではない。死を覚悟したことだつてある。

「イクセ……」

『お前は本当に変な奴だな。ある意味では感心する』

ルカはイクセの名を呼ぶことしか出来ない。会ったばかりの自分と共に来てくれる。それがどんなに嬉しいことか。

ルカの肩に乗ったアルは呆れたように笑う。酔狂な人間だ。ある意味では驚嘆に値する、と。

「そりやどうも。で、そこへはどうやって行くんだ？ 聞くにはこのことは違う空間なんだろ？」

『それは問題ない。私とあやつは繋がっている。何せ同じ存在ものだからな。しかし……そうだな、人目につかない場所がいいだろう』

「じゃ、街の外だな」

人目につかない場所、となれば街の外に出るのが一番早い。街中

でも人気がない場所はあるにはあるが、ここからなら外に出たほうが早い。

イクセに連れられ、ルカとアルは広場を出て街の外へと向かった。

共に存るとの誓い（後書き）

まだまだ序盤です。先は本当に長いですね……！

光満ちる水晶の洞窟

アルストロメリアを出た二人と一匹は、街道から少し離れた場所にいた。朝も早いとは言っても人の姿も疎らで、わざわざ横道に入らなくてもよかったかもしれない。

太陽の光に目を細めながら、ルカとイクセはアルを見る。次に何をすべきか、それを知るのは彼だけだから。

「次はどうしたらいいの？」

『私の言う通りに地面に紋様を書いてくれ』

ルカは頷いて落ちていた木の枝を拾い、アルの指示に従って手を動かした。そうして出来上がったのは複雑に描かれた紋様。魔法陣。それは夜空に瞬く星のようであり、天に輝く月でもあり、万物を照らす太陽のようでもあった。かなり抽象的であるが、他に例え方がないからだ。

『ルカ、イクセル。魔法陣の中に』

二人はアルの指示通りに魔法陣の中に入る。ちょうど二人が立てるくらいのスペースで少々狭いが、この際文句はいつてられない。アルはルカの肩の上から飛び降りると二人の前に立った。

『……紋様を力、巡るが如く満ちる力よ。我が望みし場所、汝が作りし狭間の世界と共に在る事を我は願う。白銀の名に於いて命ずる。我が証たる鍵を以って強固に閉じし扉、今開かん』

アルが紡いだ歌。それは喪歌ではない。竜は簡単な喪歌なら呪文

すら必要なく、咆哮一つで発動出来る。その竜が長い詠唱うたを必要としているのなら、今アルが歌っているものは何なのだろう。

どちらかというところ、今はもう失われて久しい古代歌エンシェントソングに近く、完成した歌には喪歌や魔歌を歌う場合に必ずある結びの部分がなかった。では果たしてこれは喪歌といえるのだろうか。瞬間、魔法陣から放たれたまばゆい光がルカの視界を灼いた。

次に目を開けた時、ルカの瞳に映ったのは、先程までいた街道ではなく、視界一杯に広がる魔水晶の洞窟だった。壁や地面にも無数の魔水晶が生えており、濃密に凝縮されたマナを感じる。

紫の光を帯びた青の魔水晶は何処からか差し込む光によって、きらりと幻想的に輝いていた。

しかしルカは美しい景色を楽しむことが出来ず、思わずしゃがみ込んだ。胸がむかむかして気持ち悪い。吐き気はないが、息苦しいと言えはいいだろうか。

『大丈夫か？ 濃密なマナは我等にとって力となるが、人の身には辛いやもしれぬ。特にルカはマナに敏感だからな。イクセル、お前はどうか？』

イクセが心配して背中をさすってくれるが、息苦しさは何ともいえない気持ちの悪さは治まりそうにない。イクセはまだ平気そうに見えるが、心なしか顔色が悪いように見える。平気なのはアルだけで、彼はルカを気遣ってイクセの肩に飛び移った。

「頭痛が少しだけ、な。我慢出来ないほどじゃないから問題ないが、ルカは大丈夫……じゃねえよな。全然」

気分が悪くなったのは、ルカがマナに敏感な体質だからだろう。それは魔奏士としては重宝されるものであるが、今この場では辛い

だけだ。心配したアルが戻るかと尋ねるが、ルカは首を縦に振らなかった。イクセの手を借りて何とか立ち上がる。

通常ならマナが人体に影響を及ぼすことはない。

だがこの洞窟に満ちるマナの濃度は通常を遥かに超えていた。薬も使い過ぎれば毒となるように、マナもこれほどの濃度まで来れば人の体に悪影響を及ぼしかねない。

「俺なら大丈夫だから急ごう。怪我してる竜が心配だよ」

アルもイクセも何も言わなかった。言ったとしてもルカは聞き入れない。ならば自分たちが出来るのは、ルカの負担を減らしてやることだけ。そうと決まれば早く竜の元に向かわなければならぬだろう。アルはイクセと視線を交わし合い、先に進むのだった。

光輝く水晶の洞窟もずっと見続けていれば当然、感動は薄れてしまふ。同じ景色が続くのだから辛い所だ。少なくともイクセは五分で飽きた。

どうやら奥へ行けば行くほどマナが濃くなっていくようで、それに従って、頭痛が起こる回数も増している。

辺りを見回せば、魔水晶の周りを幻想的な光が舞っていた。ルカには分かる。これは『マナ』だ。本来なら黙視出来ないマナが視認出来るほど、この洞窟にはマナが溢れている。

刹那、地面に生える水晶の影から何かの姿を現した。

「……誰？」

ルカたちの前に現れたもの。それは狼なのだろうか。熊ほどの体躯にふわふわとした銀色の体毛を持っている。すらりと伸びたしなやかな肢体。背に輝くのは光を封じ込めた水晶のような翼。洞窟に

生える魔水晶と同じ、紫掛かった青い水晶の翼は、硬質的な輝きを秘めていた。

牙を剥き、襲い掛かるようすもない。青み掛かった紫の双眸には深い知性の輝きがある。

『我は蒼穹の君の眷属たる者。人の子らよ、ここはそなたらが立ち入るべき世界ではない。一体何用で参った？』

狼から発せられた声は低いが女性のよう。

ただしこの狼は人の言葉を話しているわけではない。竜と同じように声をドラクナー聞く者だけが聞くことの出来る声だ。

「俺たちはアルの知り合いに会いに来たんだ。それが貴方の言う蒼穹の君かどうかは分からないけど」

『蒼穹の眷属よ、名は何と申す』

『申し遅れました、白銀の君よ。我が名はイシュリア。蒼き眷属。ではその方々は……』

イクセの肩に乗ったアルに気付いた彼女　イシュリアはアルに向けて深く頭を垂れた。二人と言っているのか分からないが、二人の間で交わされる会話を理解出来ないルカとイクセは、ただ見ていることしか出来ない。

白銀の君、そして蒼き眷属。彼らにしか分からない会話。

『青髪がルカ、黒髪がイクセ。二人とも私が認めし者、ルカは我が真名を与えた人間だ』

イシュリアの青紫の瞳が驚きに見開かれた。眷属であるイシュリ

アはその意味を何よりも理解している。この少年は白銀の君が真名を与えるほどの人間なのか。

イシュリアの主が聞けばきっと驚くだろう。昔の彼と同じように人間を嫌う主なら。

「……承知致しました。我が主の元に案内いたします。どうぞこちらです」

イシュリアは再び頭を垂れると、わざわざルカたちに歩幅を合わせて歩き始める。辺りには二人とイシュリアの足音だけが反響していた。

イクセの肩に乗ったアルが俯くルカを案じて声を掛ける。

「ルカ、本当に大丈夫か？」

最奥に近付くにつれて、感じるマナは密度を増していく。ルカは我慢しているようだが、明らかに顔色が悪い。アルは少しだけ、彼を連れて来たことを後悔した。

アルにとってルカは何物にも変えがたい存在だ。何を賭してでも守りたいもの。

しかし彼の意見を尊重することもまたアルの望みなのである。

「大丈夫。まだいけるよ」

気丈に答えながら、ルカは休むことなく歩き続ける。シャーレンのように目の前で何も出来ないのは嫌だ。例え彼が望んだこととしても自分はシャーレンを殺した。その事実が変わらない。

ルカだって自分の限界は分かっている。出来ることと出来ないことも理解している。

だが頭では理解していても実際、納得出来るかとなるとまた違う

のだ。だから助けたい。ちっぽけな力だっていい。自分出来る最大限のことをしたいから。

『分かった。お前を信じよう』

ルカが考え、悩んだ末に決めたことなら従う。『アル』はそう誓ったではないか。

ルカを信じることに。彼を信じなくて自分は、一体何を信じるというのだろうか。

「ありがとう」

そう言っただけルカは笑った。眩しくて、でも優しくアルの一番好きな顔だ。ルカのアザを見る度、自分の選択は間違っていないかったのだと確信出来る。

世界は決して優しく、美しいだけのものではない。運命は時に残酷で、一欠片の救いもない。

だがそれでも自分たちは生きていかなばならないのだ。この“世界”で。

『何がだ？』

「俺を信じてくれて」

首を傾げるアルにルカは笑っている。礼など必要ないと何度も言っているのに。体調が悪い時もそうやって他人を気遣うルカをアルは本当に誇らしいと思った。

彼のような人間に出会えたことがアルにとっての奇跡。

『当たり前のことだ。わざわざ礼を言われるようなことではない』

蒼穹の鱗持つ竜

それは見上げるほどに強大な竜だった。大きさだけで言えばアルの本来の姿と同じくらいだろう。鮮やかな蒼穹色の鱗は光を反射して煌めいていたが、傷口から流れる真っ赤な血が痛々しい。

傷は体全体及んでおり、穿たれた傷とも擦過傷とも違う、まるで内側から裂けたような傷だった。本来なら美しいはずの藤色の瞳は半ば光を失い、口からはひゅう、ひゅうと苦しげな吐息が漏れている。

ルカとイクセはその姿に言葉を失った。思わず目を背けたくなくなるような傷だ。

『ふっ……我を笑いに来たのか、白銀よ』

蒼穹色の竜はイクセの肩に乗ったアルを見据えて、低い声で笑う。苦しげに絞り出したような声は年若い男のもの。イシュリアが心配そうに蒼穹色の竜に寄り添った。

アルはイクセの肩から降りると蒼穹色の竜を見上げる。巨大な彼に比べ、今のアルはとても小さい。子供と大人のような。

だがアルが纏う雰囲気は竜とは比べ物にならない。存在感がまるで違う。

彼等の中に流れる空気は勿論家族ではないし、友人とも少し違った。では何なのだろう。

『何を馬鹿なことを。全く、歳を取ると捻くれてくるのか？ ヒヨツ子が。……その傷は誰にやられた？』

『分からない、としか言えぬ。だが滅竜歌を歌えるのは『人』だと貴公も分かっているだろう？』

そう、滅竜歌は人間にしか歌えない。

だがそれは千年前に失われた魔歌のはずだ。しかし彼の傷口を見れば直ぐに分かる。内側から裂けたような傷は間違いなく滅竜歌によるもの。

アルと同族であるからこそ、今は命を繋いでいるが、それもいつまでもつか分からない。いかに強靱な生命力と再生力を持つ竜と言えど、滅竜歌によって付けられた傷を治す術はない。竜族が操る喪歌では、治すどころか傷を悪化させてしまうだろう。

『そうだな。……ルカ』

びくりと竜の体が動いた。ルカ。この人の子があれを看取ってくれた者なのか。本来なら竜と眷属であるあれば、意識的に繋がっている。

しかし何かの原因で最後の声は殆ど聞き取れなかった。最後の時、彼の中に流れて来たのはあの子の想い。そしてルカという名の人間の名前だけだった。

『……ルカ。そうか、人の子よ、そなたは我が眷属、シャーレンの最後を看取ってくれた者なのだ。礼を言う。あの子は楽に逝けたのだな』

「違っつ！ 違います！ 俺は俺は……殺すことでしか彼を助けられなかった。だから礼を言われるような事ではないんです」

気が付けばルカは思わず叫んでいた。それまで抑えていた想いが堰を切って溢れ出す。

あの時、何か出来ることはあったのではないか。仮定の話だと分

かっている。

けれどその想いはルカの中で日増しに強くなっていった。シャーレンの最後の表情が瞼の裏に焼き付いて離れない。

『違うのだ。人の子よ、シャーレンの最後の想い、我は確かに受け取った。あやつはそなたに感謝していたよ。己を責めるでない。シヤールンもそれを望まぬだろう』

竜の口から出た予想もしない言葉にアルとイシュリアは驚いていた。彼が人間嫌いであることはアルやイシュリアが一番良く知っていたからだ。

シャーレンの最後の想いが、彼の人間に対する見方を変えたのかもしれない。

ルカが口を開こうとした直後、竜が激しく咳込んだ。苦痛を耐えるようにうずくまるが、閉じた口から鮮血が溢れ、水晶の床を赤く染める。

『蒼穹！』

『主様っ！』

『……心配、ない。少し痛んだ……ただだ』

アルとイシュリアから悲痛な声上がる。蒼穹色の竜は、二人の声を聞いて緩やかに身を起こした。少し傷んだだけ。それが嘘だということとは明白だった。ルカは血塗れになるのを省みず、竜に近寄る。やはり塞がりかけていた傷が開いていた。

『何を……っ？』

竜はルカの意図が分からず問う。

だがルカはそれに答えず、傷口に手を当て、精神を集中させた。マナが溢れるこの洞窟ならば、例え二重唱用の魔歌であっても一人で発動出来る。

しかし本来二人で歌う魔歌を歌えば、上手くコントロール出来ず暴走するかもしれない。

いや、マナが莫大にあるここでは、一つ間違えば確実にそうなるだろう。それでも迷っている暇はなかった。そのためにここに来たのだから。

『輝ける光輪。其の色彩は御使いの証。人々の願いと祈りを知る者。其は傷付きし翼癒す清麗の乙女。今此処に降臨し、我が懺悔聞き届け賜え。赦しの言葉を示さんが為に……』

気を抜けば、意識を持つていかれそうだった。本来なら二人で制御するものをルカ一人でしようとするのだから、当然だ。

しかしそれは彼が考えた以上に難しいものだった。魔歌は発動さえしてしまえば安定する。だが逆にいえば歌っている時は非常に不安定であると言っている。

今ここで魔歌が暴走すればルカは無事では済まない。意識を保つことに集中する。昔、魔歌を教わった時、アルに言われたことを頭の中で反芻する。

『良いかルカ。魔歌で一番大事なことは“歌う”ことだ。歌にならないものは魔歌にあらず、また魔力を紡ぎ、マナを操る歌。それが魔歌や喪歌だ』

“歌うこと”。それは高位の魔歌であろうと二重唱であろうと変

わらない。全ての魔歌に通じることだ。落ち着いて、マナを感じればいい。

ルカは魔奏士として天賦の才を持っている。師がアルだったことも理由の一つだが、それを差し引いても彼は優秀だ。

一つを教えれば、二つを学び、教えた術を自分がやり易いように何度も変化させて行く。当初はアルも驚いた。まさかルカにこれほどの才があることに。

だから見てみたくなったのだ。彼なら人の高みに到達出来るのではないかと。

『……遙かな詩は世界に響き、世界は歌に満たされる。想う心を知るならば、今導きの声に応えよ　煌天子』

螢火に似た光が生まれる。最初は一つだったものが二つ三つと増え、やがて大きな光となった。

現れたのは淡い光に包まれた銀色の髪の子半透明の少女。

まるで罪ある者全てを赦すように優しい笑みを浮かべている。背には御使いであることを示す白翼と、頭上で輝く光輪があった。

純白の長衣を身に纏う彼女は目を閉じると、透き通る白い腕で竜を優しく包み込んだ。

刹那、少女と竜の体全体が輝くと、ふっと少女の姿が解けて消える。するとどうだろう。出血は止まり、全ての傷は跡形もなく塞がっていた。

蒼穹の鱗持つ竜（後書き）

か、肩がこります……！

ウイスタリアⅡセレスⅡノーザンライツ

「ルカ!」

「だい……じょうぶ」

意識を失いかけた所をイクセに支えられる。名前を呼ばれていなければ、ルカはそのまま倒れていたかもしれない。少しふらついただけだと言つて、イクセの手を借りて立ち上がる。

だがルカが立っているだけでやっとの状態だと、誰が見ても明らかだった。普通の魔歌であればこれほど消耗することはなかっただろう。

しかしルカが歌つたのは二重唱用の魔歌。竜であるアルには手伝つて貰えないし、イクセとは一緒に歌えない。二重唱は歌い手たちの息が合わなければ成功しないのだから。会つたばかりのイクセと歌えるはずがなかった。

辛い時も悲しい時もルカは滅多に他人に弱い所を見せようとはしない。それは幼くして母を亡くし、家を空けることが多くなった父に、ルカが身につけたものだといえる。

街のみんなに、何よりも自分を案じてくれるアルに心配を掛けたくなかつたからだろう。

『ルカ、無理をするな。辛い時は辛いと言え。でなければ私は何のために居るのだ?』

アルはルカに気を遣つて貰いたいのではなく、話して欲しいのだ。ルカはアルの“支え”になつてくれた。では自分はルカの何になれ

るのだ。親、ではないだろう。親友ではあるが、ただの親友とも違う。明確な答えが出ないことを理解しつつも自問し続けていた。

そしてルカはアルにそんな表情をして欲しい訳ではない。ただ成人を迎えたからには、アルにばかり甘えていられないと思ったから。だけどそれは結局、ちっぽけな意地だったのかもしれない。

「うん。ありがとうアル」

『貴公も随分丸くなったものだな。人の子よ、名は何と言う？』

蒼穹色の竜はすっかり生気が戻った藤色の目を細め、アルを見て楽しげに笑う。痛々しい傷はどこにも見当たらず、蒼穹色の鱗は空を切り取ったかのよう。

何故急に名前を問うのか疑問に思ったが、ルカは素直に答えた。

「ルカです。ルカ・エアハート」

『手を前に出せ』

言われた通りに両手を差し出す。その意味を理解したアルとイシユリアは僅かに目を見張った。イシユリアの方は驚いていたと言っても過言ではないだろう。

『我が名はウイスタリア。ウイスタリアセレスノートザンライツ。蒼穹の名を冠す者。心優しき人の子、ルカ・エアハートよ。汝を我と対等である存在と認め、我が一部を授ける』

「これは……竜笛」

差し出した手に淡い光が灯ったかと思うと次の瞬間には、不思議な青い光沢を放つ何かが現れていた。形状だけで言えばオカリナにも見えるが、それにしても小さい。

竜笛と呼ばれるそれは、竜族が友好の証として人に贈る物だ。竜の一部である鱗から作られ、強力な魔力を秘めるそれは魔法的な護符も兼ねるといふ。

『ルカよ、私のことはウイスタリアと呼ぶが良い。もっとも白銀からも真名を授かっただろうが』

竜はウイスタリア、と名乗った。“蒼穹の君”の名で呼ばれる彼の本当の名はウイスタリア“セレス”ノーザンライツ。

“白銀の君”アルトウールと同じように滅多な事では真名を明かさない。ルカはそんな彼の名前を呼ぶ許しを得たのだ。

「ありがとう、ウイスタリア」

『ルカ様、私からも感謝致します。主様を救って頂き、ありがとうございます』

前に出たイシュリアが恭しく頭を下げた。本当に感謝している。ウイスタリアは怒るだろうが、主こそイシュリアの存在する意味なのだから。イシュリアにとって彼が全て。

青紫の瞳に涙を溜めて礼を言うイシュリアに、ルカは慌てて首を振った。

「そんな……感謝される事なんてしてないよ。俺は俺のやりたい事をしただけだから。あ、れ……？」

か細い声と共に体が傾く。緊張の糸が切れたのか意識を失い、崩

れ落ちたルカをイクセが慌てて受け止める。少年の顔は血の気を失って青白い。

やはり無理をしていたのだろう。呼吸は落ち着いているが、これ以上は長居出来ない。魔歌を行使した時点で限界だったのだ。

『早く此処から出た方がいい。貴公もそうだが、人の身では辛いだろう。我はまだ休息が必要なようだ。ここに留まるのは得策ではないだろうが、現世では回復に時間が掛かり過ぎる。送ってはやれんが、貴方が居るのならそれも不要だろう』

意識を失ったルカを案じるようにウイスタリアが目を細める。イクセも人の心配をするほど余裕はなかった。正直な所、立っているのも辛い。

ウイスタリアも傷は癒えたが、本来なら生命に関わる程の傷だ。失った体力と魔力だけは魔歌では癒すことは出来ない。

ウイスタリアを傷つけた人間が再び彼を襲わない保証はなかったが、失った体力と魔力を回復させるにはマナが溢れるこの空間でなければならなかった。

蒼穹であるウイスタリアの領域でなければ。

『蒼穹よ、次相見えるのは何時か分からんが、簡単に死ぬ事は許さんぞ。お前にも私にも死ぬぬ“理由”があるのだからな』

ウイスタリアを見上げてアルは言った。生きて世界を見守ることそれが“彼等”の存在理由にして生きる意味。簡単に死ぬぬ体を呪ったこともあったが、今は死ぬぬ理由がある。

ルカのためにも死ぬぬ。彼の成長を見届けるまでは。

『肝に命じておこつ。それと貴公も気を付けた方がよい。滅竜歌の

存在が知れば人と竜、双方に波紋を齎すことになるだろう』

滅竜歌の歌い手の意図は知れないが、人と竜。人竜大戦以降、寄り添いながら生きて来た二つの種族を揺るがす大きな問題となることは間違いない。時として身に余るほど強大な力は人を狂わせる。

人竜大戦の再現となれば、魔歌と言う奇跡を手に入れた人は、今度こそ竜とどちらか一方が滅びるまで争い続けるのではないか？

誰よりもウイスタリアの真意と言葉の意味を理解するアルは、重々しく頷いた。

『お前の懸念は十分承知している。だが私は……人の可能性を信じてみたくなったのだ。例えばどれ程愚かで救いようがなくとも、人は常に変化する生き物だ。人は変わる。良いようにも悪いようにも』

人間の中には本当に学習せず、救いようのない馬鹿共もいる。

だが人には竜にはない可能性があった。長い時を生きる竜は滅多な事で変化しない生物だ。

しかし寿命が短く、刹那を生きる人間は悔い改め、“変わる”ことが出来る。だからこそ、ルカと言う存在に巡り会えたアルは、人の可能性を信じてみたくなったのだ。

ウイスタリアは昔の『アルトウル』からはまるで想像出来ない物言いに驚く反面、納得してもいた。

本当にルカという少年は彼にとっても、恐らくはアルにとっても太陽のように眩しい。ウイスタリアでさえも人について考え改めさせられた。

『本当に……貴方は変わった。驚くくらいに』

『おだてても何も出んぞ。……イクセル、ルカと共に私の傍に』

ウイスタリアとアルトウールはほんの一瞬、哀切の視線を交わすと、どちらからともなく視線を逸らした。ル力を支えるイクセはアルの言う通り、彼の横に並ぶ。

「……水面みなせに波紋、広がるが如く満ちる力マナよ。我が望みし場所、人と竜いさが共生し世界と共に在る事を我は願う。白銀の名に於いて命ずる。我が証たる真名を以つて鍵とせん。現世うつしよへと繋がる扉よ、今開け」

朗々と歌い上げるアルに導かれるようにして描き出される魔法陣。人には理解出来ない複雑な紋様によつて構成されたそれは、最後の一節を告げると一際強い輝きを放った。

始まりの竜

魔水晶の洞窟から戻ったアルとイクセは、ルカを宿屋へと運んだ。無理に二重唱を歌った疲労もあったのか、ルカはあれから眠り続けたまま。既に日は沈み、辺りには夜の帳が降りている。

アルは枕元に座って静かにルカの寝顔を見つめていた。イクセもいたのだが、夕飯とシャワーを浴びるらしく今は席を外している。するとルカの瞼が開き、夕焼けを切り取ったような茜色の瞳が露になった。

「アル……？」

『目が覚めたか？』

うん、と返事をする。ルカはゆっくりとベッドから上体を起こした。まだ少し頭が痛く、目眩までする。無理をしたつけのようなものだが、心は澄み切った青空のように晴れやかだった。

ウイスタリアを助けられたその証がベッドサイドに置かれている。不思議な光沢を秘める青い竜笛。

「……ねえ、アル。教えて欲しいことがあるんだ」

ウイスタリアはアルはウイスタリアも同じ存在だと言った。白銀と蒼穹の名を冠する彼等は何者なのか。そして滅竜歌^{トランクスレイヤ}。

アルもまたルカが何を問いたいのかを理解していた。いつか話さねばならないと思っていたこと。それは“アルトウール”が存在する理由でもある。それを理解しつつアルは問うた。

『……何だ？』

「ドラゴンスレイヤー滅竜歌って何？ それと白銀の君ってアルの、ううん。“アルトウール”のことなの？」

じつとアルの金の瞳を見据える。十年以上一緒に居たのに自分は、アルについて何も知らなかったということを感じ知らされた。

アルもまたこんな形で話すことなるうとは夢にも思わなかった。だがここまでルカに知られた以上、隠す必要はないし、何よりルカにこんな表情をさせるのはもう嫌だった。

ウイスタリアに言えたことではない。本当にアルこそ、ここ十年で随分と腑抜けになったようだ。

『ドラゴンスレイヤー滅竜歌とはその名の通り、人が竜を滅するためだけに編み出した最初の魔歌であり、千年前に失伝した筈の古代歌だ。エンシエントアリアそして私と蒼穹は万象を司る“始竜”と呼ばれし存在もの。そして私は唯一、この世界の始まりより生きている』

始竜は言い換えれば、世界の支柱と言っている。死ねばマナになって世界へと還る他の竜族と違い、彼等は死した時、先代の記憶を受け継いで転生する。

だが魂は違う。アルが死に転生した場合、次に生まれて来るのはアルトウールの記憶を持つがアルではない。そしてアルこそ唯一、原初の時より生きる竜なのである。

「人が竜を滅ぼすために……」

アルの口から出た言葉が信じられなくて、ルカはもう一度声を出して呟いた。

滅竜歌。人が竜を滅ぼすためだけに編み出した最初の魔歌にして、全ての魔歌の元型。

今でこそ人のよき隣人とされる竜族だが、まさか人がその竜を滅ぼすために魔歌を生み出したなんて、到底信じられなかった。今まで自分が歌っていたものが、元は竜を滅ぼすために生まれた歌だなんて信じたくない。

「……かつて人と竜の大きな戦いがあった。喪歌ロストアリアという強大な力を振るう竜族に対し、何の力も持たない人族はあまりに不利だった。そんな中、人族の中で喪歌に目をつけた人間がいた。その者は人は発音出来ぬ言葉がある喪歌をどうにかして人の身で操る術はないのかと考えたのだ。そうして生み出されたのが滅竜歌ドラゴンスレイヤー。後の魔歌と呼ばれるものなのだ。」

人竜大戦、文献にすら残らぬ人と竜の戦いをアルは記憶している。だからこそアルトウルは人を好きになれなかったのだ。

人が竜に勝っていたもの。それは固体数である。ただそれだけだといってもいい。

だが竜族に対抗するには同等かそれ以上の力を手に入れる必要がある。ある時、喪歌に目をつけた人間が長い時を掛け、喪歌を元としたある術式を組み上げた。

滅竜歌と名付けられたそれは、喪歌を元としてはいるが発揮される効果は全く違う。純粋なマナで構成された竜族の体を内側から破壊する、ある意味では何よりも残酷なものを人は作り出してしまったのだ。

ルカはまるで内側から裂けたようなウイスタリアの傷を思い出し、びくりと体を震わせた。あんな恐ろしく、惨いものを人は竜に使っていたかと思うと胸が詰まりそうになる。

「でも……千年前に失われたはずなんでしょ？」

『そうだ。……大戦の末期は既に戦いとも言えぬ酷い有様だった。数えきれぬ骸が、血が大地を濡らし、朱く染めていった。人も竜も戦いを続けられない程に疲弊し、明確な終わりとも言えずに戦いは終わった。やがて二つの種族は後のことを考え、滅竜歌の存在を秘匿とすることにしたのだ』

アルは目を閉じ、かつて起こった戦いを思い出す。あの光景を地獄と言わず何というのだろうか。滅竜歌の出現により戦いは更に激しさを増して行き、大戦の末期はもう、ただの殺しあいではしかなかった。結局決着すら付かず、戦いは終わった。

だがアルは戦いに干渉することは出来ず、ただ傍観することしか許されなかった。見守ること、それが始まりの竜たる自分たちの役目だから。もどかしかしくて、始竜という名に縛られる自分が馬鹿らしかった。

やがて和解した双方は二度と悲劇を起こさぬため、そして後の人と竜の関係を考え、滅竜歌の存在を闇に葬ったのである。

「そんなことが……」

ルカはそれ以上、言葉を紡ぐことが出来ずに俯いた。

知らなかった。まさかそんな事があったなんて。アルはその全てを見てきたのだろう。人竜大戦や滅竜歌について語る彼の表情は固く、哀しみの色が見えたから。

ならばアルが人を嫌うのも仕方がない。いや、嫌って当然だ。知らなかったではいけない。無知もまた罪なのだから。

『ルカ、私はお前にそんな顔をさせたくて話した訳ではないぞ』

唇を噛み締めるルカの手にアルは頬をすり寄せる。そう、ルカが

気に病むことではない。全ては終わったことなのだ。

だがこの心優しい少年は当事者であるかのように心を痛めてくれる。咎めるような、だがそれでいて自分を心配してくれていると分かるアルの声音にルカは嬉しくて少しだけ淋しかった。

本当に自分はアルに守られて生きて来たんだと実感したからだ。

世界はこんなにも広くて、一番よく知っていると思っていたアルのことでさえ、知らないことは沢山ある。

「……うん。ありがと、アル。今まで俺は本当にアルに守られて来たんだね。……何だかアルが始竜だって言われても実感沸かないや」

ルカは寝物語によく聞かされた話を思い出す。この世界、アルカディアを見守る始まりの竜たちの話を。

始竜なんてお伽話の中だけの存在だと思っていた。だからいきなりアルが始竜なんて言われても驚く前に、実感が全くと言っていいほど沸かない。誰よりも何よりも近い存在だからこそ、親友や家族以外のアルを想像出来ないと言っただ方が正しいだろうか。

とその時、部屋のドアノブが回され、濡れて艶やかに光を弾く黒髪を拭きながら青年が入ってくる。青年　イクセは視線を一人と一匹に向けた。

そして気づく。どうやら自分は思いの他、空気が読めない人間だったようだ。

しかしこのまま回れ右も出来ない訳で、イクセは仕方なく口を開く。

「話は済んだのか？」

「うん、一応はね。イクセは聞いた？」

「まあな。つつても普通なら信じられない話だな」

髪を拭いていたタオルを首に掛け、大きく息を吐く。

イクセも相手がアルでなければ、与太話だと一蹴していたことだろう。

ベッドから上体を起こしたルカの髪を掻き回し、アルの頭も軽く撫でたというより、叩いた。

「今日は疲れただろう。もう休め。アルもあんま無理すんなよ」

イクセはそれだけ言うとひらひらと手を振って部屋を出る。

アルは頭を触られたことがお気に召さなかったようで目を細めていたが、それほど不機嫌ではないようだ。ルカもお言葉に甘え、アルと一緒に太陽の香りのするシーツに身を委ねた。

見つけた大切なもの

『何故、創造主は我らを作ったのだ！？　ただ見ていろとでも！？』

発せられた怨嗟の叫びは衝撃となつてアルの耳朵を打った。それほどまでに彼の怒りは凄まじく、手の付けられないものだった。煮えたぎる程の感情の波に押し流されるのではないか、そう思ったくらいだ。

しかし『アルトウール』は彼を認める訳にはいかない。つとめて静かな声で言う。

『……』　『よ、分かっているだろう？　我等は此の世には干渉出来ぬ』

それが世界を見守る者、言い換えれば傍観者である始竜の運命だった。彼等の力をもってすれば争いを止める事など造作もない。

だがそれでは駄目なのだ。仮に干渉したとして、それを何度繰り返せばいいのだ？

この世界に生きる生命は既に管理者の手を離れた。人や竜、そして世界は一人で歩いて行かねばならないのに。

『白銀！　貴様に言われずとも分かっている！　ではどうすれば良いと言うのだ！？　このまま傍観しろと言うのか！！　ただ死に逝く様を見続けろと言うのか！　答えろ、白銀よ！』

紫水晶よりも僅かに濃い瞳が、悲哀と激情に彩られる。彼の気持ちには痛いほどよく分かった。その怒りは大きさの違いはあれ、皆が抱いているもの。

だがそれ故にアルトウールは頷くしかなかった。

『そうだ。……お前の言いたいことは分かる。ではどこで終わりにすればいい？ 我等は神ではないのだ。それは傲慢だとは思わないのか？』

始竜の力を持ってすれば戦いを止めることは出来るだろう。多くの命を救うことだって。それが出来たならどれほど幸せだろう。彼が言うようにただ見ていることしか出来ない。ではもし力を使つたとして、それを何度繰り返せばいいのだろう。

自分たちの意思で彼らが戦いを止めない限り、意味が無い。悲劇が繰り返されるだけ。

始まりの竜は神に等しき存在ではあるが神ではないのだ。

二人の会話を見守っていたどこまでも青く澄んだ蒼穹色の鱗を持つ竜もまたアルトウルに同意するように頷いた。

『彼の言う通りです。私たちは“神”ではない。神にはなり得ない。それは貴方もよく分かっているでしょう？ 失われる命を悼むのは構いません。ですが私たちが存在する意味をもう一度思い出してみてください。……感情に任せた物言いは出来ないはずですよ？』

森の緑より鮮やかな瞳が彼の紫の瞳とかち合った。彼女の諭すような口調と優しい瞳に一瞬言葉に詰まる。

彼女が、アルが言いたいことは痛いほどよく分かっている。彼もまた『始竜』だから。

押し黙った彼だったが、やがて苦しげに口を開いた。

『分かっている。痛いほどに。だが私はお前たちのようにはなれない。割り切れない！ 神になれないと知りつつも願ってしまう……』

彼が最後に言った、血を吐くほどに悲痛な叫びが今もまだアルの耳に残っている。彼は優しすぎたのだ。だから『あんな』結果になつた。

これが夢だと言つのなら覚めてくれ。

雨が屋根を叩くようなシャワーの音でアルは目を覚ました。まだ覚醒しきっていない頭で考える。ああ、やはり夢だったのかと。

あれはそれこそ気の遠くなるような昔、まだ人と竜が争っていた時代だ。始原の時より生き続けている始竜はアルただ一人。白銀の名を持つ彼は、普通の竜など及びもつかない魔力を有する。

竜の魔力は時を経ることによって増すと言われていた。ならば始まりの時より生きるアルは一体、どれほどの力を持つというのか。

「アル、起きたの？ うなされてたけど大丈夫？」

アルが思案に耽っていたその時、青い髪から水滴を滴らせながらル力が戻って来た。アルが珍しく寝ていたから一足先に起きてシャワーを浴びていたのである。

気になったのはアルがうなされていたこと。苦しげに顔を歪め、しきりに何か呟いていた。

でもそんなことは彼と一緒にいて初めてのことである。アルは今までそんな素振りを見せたことはないし、何より決まってル力より先に起きているのだ。

『そうか。私はうなされていたか……』

呟き、自嘲するように口を歪める。夢の中で彼が発した怨嗟の叫びが今もまだ頭の中に残っている。どうして今になってこんな夢を見たのだらう。竜は殆ど睡眠を必要としない。夢だっただけ見ることも少ないのに。

目を閉じて記憶の中に残る彼を思い出す。

『何故、創造主は我らを作ったのだ！？』

かつては自分もそう思ったことがあった。見守ることしか出来ぬのなら、何故自分たちの母は始竜を作り、役目を与えたのか。

だが今は『アルトウール』を生み出した神に感謝したい。大切なものに巡り会えたから。昔とは違う、己の心の中に灯る一点の光を見つけたアルは淡く微笑した。

そんな彼の僅かな変化。普通の者なら気付かないだろうが、ルカには分かった。

「うなされてたかと思うと笑ったり、本当に大丈夫なの？」

髪を拭く手を止めて尋ねる。思えばウイスタリアの件から少し様子がおかしかつた。明確に変だとはいえないが、十年以上も一緒にいたルカが微かに感じる違和感、といえはいいだろうか。

心配するルカに対し、アルは笑って答える。

『ああ、大丈夫だ。そんなに心配するな』

「ん、分かった。けど辛い時はちゃんと行ってね。俺がアルにしてあげられる事なら何だってするから」

アルが大丈夫だと言うのなら、これ以上は聞くまい。

ただ、ルカはアルに言うて欲しいのだ。彼がそうしてくれたように哀しみも苦しみも分かち合いたいから。それが『家族』ではないのか。

『ルカ……』

「それじゃあ朝食取ってから出発だね。アルー」

ルカは太陽を思わせる笑みを浮かべながら、アルの特等席である肩を叩いた。

今はまだ全てを話すことは出来ない。だが時が来れば必ず、そう

思いアルはルカの肩に飛び乗る。お気に入りの特等席はやはり心地よい。

心優しい少年の横顔を見つめ、アルは小さく礼を言った。ありがとう、と。

第二奏 了

見つけた大切なもの（後書き）

第二奏、終了しました。本当に女子率が低いです……！

呼び声

かつて人竜大戦の最中、人と竜が手を携えて暮らす都が存在した。名を空中都市エリシオン。エリシオンとは古い言葉で楽園を意味する言葉である。正に理想郷に相応しいその都市は誰にも邪魔されることなく、ひっそりと空に浮かんでいた。

エリシオンに暮らす人々は皆、竜と心を通わせる、本当の意味の声を聞く者であったと言われている。

本来、声を聞く者とは、竜と心を通わせる者との意味があつたらしい。

しかし大戦以降、声を聞く者へと意味を変えたと伝えられている。

だが運命はそんな彼等を見過ごしてはくれなかった。竜たちに都市の存在を知られたのだ。やがて人々は都市から去ることを余儀なくされる。

都市を降りた人々は散り散りとなり、世界各地に散って行った。主を失った空中都市は千年以上の時が流れた今もまだ、空をさまよい続けているという。

隠された楽園、エリシオン、より。

“それ”は覚めることない夢の中でまどろんでいた。ただ一人、帰ることのない誰かを待ち続けるために在りし日の夢を見ながら。

長い長い時を眠り続けていた。このまま目覚めることなく、揺り籠の中で眠り続けるはずだった。だが、

『誰か……助けて……』

打ち捨てられたかのように佇む古代遺跡。一寸先も見えない暗闇の中に淡く輝く光の球体が浮かんでいる。そんな朧月のようにほのかな光に照らされているのは、二人の人間と一匹の竜だった。

一人は目にも鮮やかな、海を思わせる青い髪と黒掛かった赤い瞳を持つ十代半ばほどの少年である。真剣そのものと言った顔には年頃の少年が持つ浮ついた雰囲気は微塵もない。

そして少年の前を歩くのは二十歳前後の青年だ。アメジストより深みのある紫の瞳に、闇に溶け込むかのような長い黒髪を頭の上辺りで結んでいる。

人間ではないもう一人、銀色の鱗を持つ竜は少年の肩に乗っており、光ほどではないにせよ僅かに銀光を放っていた。

「この遺跡、随分古い物なんだね」

足元に気をつつつ、しかし顔は前を向いたままルカは言う。明かりがなければ自分の周囲すら何があるのか分からない。今はまだ暗闇に目が慣れて来たからいいが、床が崩れているところがないとも限らない。

「建物の老朽化具合からすると数百年単位も前のものだろうな。魔歌が何かで補強はしているようだが……」

黒髪の青年　イクセが呟く。造り自体はその時代の技術に酷似しているが、ここまで保存状態の良い遺跡は類を見ない。

ただ保存状態がいい訳ではない。何らかの術が使われている。魔歌にそれほど詳しいとは言えないイクセにもそれくらいは分かった。しかし人が操る魔歌では何百年単位ももつはずがない。

『魔歌ではない。これは喪歌、いや、古代歌だ』

とその時、初めてルカの肩に乗った竜が口を開いた。エンシェントアリア 古代歌は喪歌の中でも現在では失われた歌や伝える者のいなくなった歌を指す言葉だ。ただし喪歌と古代歌の境は非常に曖昧である。

竜族の中でも強い魔力を持つ者でしか扱えないとされるそれを扱えるのは、もう始竜たちとアルから古代歌を教えられたルカのみ。

「こんな遺跡に？」

遺跡自体は多少珍しい造りではあるが、多くの冒険者が訪れたこ

とや遺跡荒らしのお陰でめばしい物も変わった発見もない。
ではこの遺跡に古代歌がかけられている理由はなんだ。

そもそも二人と一匹が何故、打ち捨てられた遺跡に足を運んだのかと言うと勿論、ギルドの依頼である。

何でも考古学者の依頼主が遺跡に入った際、魔物に追い回されて護衛とはぐれた挙句、今までの研究結果を纏めた荷物を落としたらしい。

逃げ帰った後でそれに気付いた彼は慌ててギルドに依頼したらしいのだが、逃げることに必死で落とした場所の見当すらつかないというのだ。

「おい、アル」

『何だ、イクセル？』

珍しく声を掛けられたアルは、ルカの肩からイクセの頭に飛び移る。彼が嫌がついていてもお構いなしだ。頭が重い事この上ないし、何より肩がこって首が痛い。

イクセはアルの暴拳に眉を潜めながらもルカに聞こえないよう、小声でアルに尋ねる。

「その、滅竜歌を使ったっていう奴、見つけなくていいのか？ もしエスメラス王国の者なら……。いや、王の手の者だって可能性もなくはない」

ウイスタリアを襲った者の意図は知れないが、彼が最後に言っていたように滅竜歌の存在が知れば、人と竜、双方に波紋をもたらすことになるだろう。

いや、そんな生やさしいものではない。軍事に力を入れているエ

スメラス王が知れば、もしくは王の手の者だとしたら、それこそ竜を滅ぼそうとするかもしれない、と。小声で言っているのはル力を慮ってのこと。

だがイクセの懸念とは裏腹に、アルは焦ってすらいなかった。

『仮に見つけるとして、どうやって探し出すつもりだ?』

「そりゃ……なんだろうな?」

予想もしないアルの言葉にイクセは戸惑う。確かに滅竜歌の歌い手を見つければよいとしてもどうやって見つけるのか、皆目見当がつかなかったからである。

黙りこみ、難しい表情になったイクセ。見つける方法までは考えていなかったらしい。

『そういうことだ。滅竜歌の歌い手を探すにしても手がかりが全くない。そんな状態で闇雲に動いても無駄だ。もし歌い手が他の竜を殺しているのだとしたら、何の噂にもならぬはずがないだろう』

言いながらアルは前足でイクセの頭を軽く叩く。今はあまりに情報が少なすぎる。滅竜歌の歌い手の意図が見えない以上、闇雲に動くのは逆に危険だ。歌い手がウイスタリアを狙ったのは偶然なのか、それとも意図したことなのかも分からない。

加えて滅竜歌の歌い手が他に竜を殺していたとしたら、噂にならないはずがない。滅竜歌による傷はどんな魔歌や武器で付けられた傷とも違う。

もつとも、エスメラス王の手の者であった場合、握りつぶされている可能性もあるのだが。現状では取れる手段がないのである。エスメラス王の元に乗り込むなんてもつての外だ。

最後にもう一度イクセの頭を叩いたアルはルカの肩に戻る。その瞬間、

『誰か……けて』

直接頭の中に響いてくるか細い声に、ルカは思わず辺りを見回した。

しかし視界に入るのは石造りの壁と周囲を照らす淡い光だけ。第三者の気配は毛ほども感じられない。魔物の気配もないが、幻聴では絶対がない。確かに聞こえた。

「声が聞こえたんだ」

小さな、悲痛な声が。

だがイクセもアルも聞こえなかったのか、不思議そうに首を傾げていた。

仮にもイクセは声を聞く者で、アルは高い精神感応力を持っている。ルカにだけ聞こえて、彼らには聞こえないなどあるはずがない。

『助……けて』

今度はもつとはつきりと聞こえた。やはり間違いない。助けを求めると子供の声。

その声を辿るようにルカは走り出した。慌ててイクセと振り落とされたアルがルカの後を追う。

「おい、ルカ！ 一体どうしたんだよ!？」

見通しの悪い場所で走るのははつきり言って危険だ。遺跡を守る罾があるかもしれないし、ここは魔物の住家にもなっているのだから

ら。

いつものルカなら魔物の気配に気付くだろうが、今の彼は明らかに焦っている。こんな状態で魔物と出くわせば怪我は免れない。

けれどルカはイクセの声など耳に入っていないよう。

『聞こえる……俺を呼ぶのは誰?』

走りながら神経を研ぎ澄ます。声は段々と近くなっている気がした。角を曲がった先、遺跡の最奥は行き止まりである。ルカの前にそびえる石の壁。恐らくは古代語なのだろう、文字が刻まれている。ルカには理解出来ない言葉の羅列。

そつと導かれるように壁に手を触れる。すると、轟音を立てて壁が横にずれていった。

真つ先に視界に入ったのは祭壇のように一段高くなった場所。ルカの背丈ほどもある水晶が鎮座している。しかもただの水晶ではない。魔水晶だ。

床には魔水晶を中心として細い溝が魔法陣のように部屋全体に広がっていた。

『これは……』

「何かの術式か?」

追いついたアルとイクセも息を呑む。壁に刻まれた文字が何であるか、専門ではないイクセには分からない。

だが悠久の時を生きる銀色の竜は違うようで壁に描かれた文字を見て、驚きの声を上げた。ルカはまるで誘われるように一步を踏み出す。

『楽園への……』

アルが文字を読み上げようとした瞬間である。ルカの足が溝に
いたその時、魔水晶が唐突に光を放ったのだ。突然の光の洪水に目
も開けていられない。

刹那、三人の姿は文字通り遺跡の中から消えていた。

空中都市エリシオン

一瞬、ルカたちを浮遊感が襲う。次に目を開けた時、彼等の視界に映ったのは、今までいた古代遺跡ではない。目の前に広がるのは、それよりも遙かに大きい古代遺跡群だった。まるでここだけ時が止まっているのではないかと思わせるほどに保存状態がいい。

だが驚くべき事はまだある。目に入るのは遺跡とどこまでも広がる青い空。そう、この遺跡群は空に浮かんでいるのだ。思わず下を見れば、あまりの高さに目が眩みそうになった。何せ雲が下にあるのだ。

「ここは……？」

一体どこなのだろう。数十秒前までは別の遺跡にいたというのに。先ほどの光と魔水晶が自分たちをこの遺跡へ運んだとも言うのか。ルカが思わず呟いた一言に答えるようにアルは独りごちた。

「……空中都市エリシオン。かつて人と竜が暮らせし楽園と謳われた場所」

アルも実際に目にしたことはない。知識として知っているだけ。なんせ昔は人や竜にさえ関わらなかつたのだから。

人竜大戦時代、全ての竜と人が敵対していた訳ではない。一部の竜や人間たちは戦うことをよしとしなかった。その中でも人と竜が手を携えてくらしていた秘境があったという。空中都市エリシオンはその秘境の一つだ。

「しかし何で浮いてるんだ？」

イクセは自分の足で蹴って確かめる。すると硬い岩の感触が返って来た。

どうやら大きな岩の上に遺跡群があるようだが、都市の重さを支えるとなれば生半可な力では叶わない。

古代歌を使ったとしても、これだけの質量を空に浮かべることなど可能なのだろうか。

『浮遊岩だろう。私もここまで巨大なものは見たこと無いが……』

「浮遊岩？」

『そうだ。今では殆ど目にすることはないがな。恐らく浮遊岩に古代歌を掛けているのだろう。……ルカよ、声とは何だ？』

浮遊岩とはその名の通り、大量のマナを含んだ岩のことである。現在は殆ど見かけなくなったが、千年前はそれほど珍しいものではなかった。

しかし浮遊岩の力を持ってしても、都市一つを空に浮かべるのは難しい。古代歌を掛けることで浮遊岩の力を増幅させているのだろう。かなりの力業であるが、竜だからこそなし得るものだといえよう。

「……分からない。誰かが助けてって言うってたんだ。普通の声じゃない。頭の中に直接響いて来るような声だった。アル、俺たちを乗せてここから降りられる？」

アルの問いにルカは首を振って答える。その声も今は聞こえない。助けを求める声が自分たちをこの空中都市と呼ばれた遺跡群に導いたのだろうか。再度意識を集中しても声が聞こえることはなかった。

『可能だろうな。だが、声が気になるのだろうか？』

アルならずとも竜族は風の流れを感じ取ることが出来る。空を自在に舞う竜族特有の能力でまず風を読み間違うことはない。

だがアルにはお見通しだったらしい。ルカはどうしても自分を呼ぶ声が気になっていた。それが助けを求めるものなら尚更。

何も見えない。明るいうでいて暗い牢獄に囚われていた。自分の意思では一切自由にならない体。

僕は何のために生まれて来たの？

いつかそう問うたことがあった。自分を生み出した人の一人はその問いにこう答えたのだった。

『お前に生まれた意味は必要か？ 存在意義がなければ生きられないのか？』

分からない。だって自分の生まれた理由を知りたいと思うのは当たり前でしょう？

ある時誰かが言った。お前は竜を殺すためだけに作られたニセモノだと。

嫌だ！！ 僕は誰も殺したくなんてない！！ そう言って全てを拒絶した。

だけど運命はそんな僕を許してはくれなかった。……沢山、本当に沢山殺した。自分の手が誰の血か分からない程に赤く、黒く染まるほど。

もう殺したくないのに！！ お願いだから誰か僕を助けて……。

殺して！！

『どづした？』

「また声が……聞こえた」

遺跡で聞いた時よりはつきりとルカの元に届いた。声と共に伝わって来る悲痛な叫び、さらけ出された嘆き。

（何故、どうして泣いているの？ 何がそんなに哀しいの？）
まるで一人置き去りにされた子供のように声の主は泣いていた。
君はどこにいるの……。そう強く想った時だった。

『僕は……ここにいますよ』

それまで一方的だった声が初めてルカに応えた。

だがそれも一瞬の事で直ぐ声は聞こえなくなる。しかしルカには十分だった。昔誰かが言っていた。ドラグナー、声を聞く者。その力は一種の精神感应ではないかと。

「アル、イクセ、俺について来て！！」

ルカは叫ぶと、何かに導かれるようにして走り出した。目指す場所が明確にあるのかその足取りには一切の迷いもない。

ルカが誰の声を聞いているのか、イクセもアルも分からなかった。だがルカが言うのなら真実に違いないだろう。だから意外にお人よしな青年と少年にだけは甘い竜は頷き合い、共にルカの後を追った。

感じるままにルカは走った。どこを目指しているかなんて分からない。

ただ心が命じるままに足を進める。遺跡群を抜け、辿り着いた先は、ちょうど都市の中央部分、かつては広場だった場所だ。

地面には石畳が敷かれ、宝石のような美しい石が嵌め込まれている以外、変わった点はない。

しかしルカに呼び掛けていた声は確かにここからだった。直ぐ近くに感じる。だがどこなのだ。

「絶対にここから聞こえた……何かあるはず」

『これは魔水晶か！』

ルカに追いついて来たアルが驚きの声を上げた。あの遺跡に設置されていたものと同様の魔水晶。竜が死した時、残すそれはマナと魔力の結晶であり、強い力を秘めるという。

恐らくルカたちがこの空中都市に運ばれたのも遺跡にあった魔水晶が原因だ。

単体では効果を発揮しないだろうが、都市の魔水晶と遺跡の魔水晶は、転移の古代歌が掛けられた転送装置だったのかもしれない。

「じゃあ俺たちがここに飛ばされたのもそれが原因か？」

『恐らくはな。ただこの魔水晶自体には転移の古代歌は掛かっていない。受信専用なのだろう』

アルほどの魔力となればわざわざ飛んで降りなくとも転移術を操ることなど造作もないが、ルカがまだ留まると言った以上、彼は従うつもりだ。勿論、意外にお人好しな青年　イクセも。

「アル！　これって……」

広場の中央にいたルカは急いでアルを呼ぶ。しゃがみ込んだルカの視線はある紋様に向けられていた。魔歌や喪歌を歌う時に描かれる魔法陣に似た紋様。

だがそれは魔歌でも喪歌でもないが、古代歌の魔法陣に似ている。

『魔歌でも喪歌でも、ましてや古代歌でもない』

「えっ？」

ルカが振り返り、紋様に手をついた瞬間だった。

魔法陣と広場に散りばめられた魔水晶が淡い光を放つ。まるで広場全体が煌めいているよう。幻想的な光の乱舞。そして轟音と共に地下へと続く階段が現れる。

「……行くっ」

助けを求める声は聞こえなかった。この先に自分を呼ぶ声の主がいるかどうか分からない。

だが進むしか道はないのだ。階段の先に何かがある。それが何かまでは分からないが。

ルカは意を決して、一步を踏み出した。

ドラグーン

地下深く続く階段の先に広がっていた光景に、二人は息を呑んだ。目の前にはウイスタリアがいた空間と同じような、幻想的な光景が広がっている。無数の魔水晶で地面、天井共に埋め尽くされており、鏡のような輝きを放つ水晶にはルカやイクセの姿が映し出されていた。

ただ、あの空間とは違って息苦しさを感じることはない。

「アル……あれは……」

アルとイクセはルカの声につられて、彼が指差す方に目を向ける。最奥にあるのは一際大きな水晶だ。だが驚くべきはそこではない。ルカの身の丈以上もある水晶の中に“それ”は眠っていた。

丹念に作られた飴細工を思わせる金とも琥珀ともつかない髪に、愛らしい顔立ちの少年だ。一見した所、十代を少し越えた辺りだろう。

両眼は力なく閉じられ、胸は彼が辛うじて生きている証拠に僅かだが上下している。抜けるように白い肌はまるで白雪のようであったが、それと相反するように少年の半身は金色の鱗で覆われ、背には竜族の証たる皮膜の翼が広がっていた。

『ドラグーン
人造竜兵……か』

アルが驚愕を隠しきれない声で呟く。ルカも一度として聞いたことのない名だ。

「ドラ……グーン？」

『ああ。かつて人竜大戦時代、滅竜歌が生み出される以前に、人が竜の魔水晶から造り出した兵器。それが人造竜兵だ。声を聞く者と同調することによって凄まじい戦闘力を発揮するらしいが、よもや完成体がいたとは……。ルカが声を聞いたのもこやつと波長が合ったからだろうな』

遙か昔、この世界の技術は今とは比べものにならないほど高度なものだった。だからこそ喪歌を元にして滅竜歌を作り出せたのだが、それでも人は圧倒的な力を持つ竜族には敵わなかった。

そこで人は竜の喪歌を研究すると共に、自分たちの力で人造の竜を作れないかと考えたのだ。

竜の魔水晶を核とするそれは、竜同様強大な力を手にすることが出来た。

しかし本来なら竜と言う器を持ってして、始めて持ちうる力である。人造の竜たちは強大な力を自ら操る術を持たなかったのだ。

弱点を補ったのは声を聞く者。彼等が持つ一種の精神感応と言える力。声を聞く者が人造竜兵と同調することにより、竜の力を制御することに成功した。ルカがこの人造竜兵の声を聞いたのも波長が合ったからと言えるだろう。

「この子が兵器……？」

アルの説明を聞き、再び少年を見る。とてもそんな風には見えなかった。

少年は人と竜が融合した異形ともいえる身体であったが、ルカは不思議と恐怖は感じなかった。寧ろ懐かしい気さえする。

するとそれまで動かなかった瞼が僅か震え、美しい瑠璃色の両眼が露になった。ただ彼の意識は未だ夢うつつをさまよっているのか

焦点は合っていない。

「生きてるのか？」

『ああ。長い間封印されていたようだが……これでは時間の問題だろうな』

人造竜兵は自由に姿を変えられるが、半身が竜化しているということはつまり、限界が近いということだ。千年以上も封印されていたのだから当然だが、いつ機能を停止していてもおかしくない。その時、少年を戒めていた魔水晶に蜘蛛の巣状に亀裂が入る。

『だ……れ？ 僕の声……聞いてくれたひと？』

「そうだよ。待ってて。直ぐに出してあげるから。……でも、どうやれば」

か細い声で少年は言う。虚ろであった瑠璃色の瞳にも生氣が戻っていた。砕ころにも亀裂が入ったとは言え、魔水晶の強度は高く、生半可な力では到底壊せない。思案するルカに定位置に戻ったアルが口を開いた。

『お前が本当にこの人造竜兵ドラクーンと波長が合うというのなら触れるだけでいい』

「う、うん。やってみるよ」

頷いて、自分より僅かに高い位置にある魔水晶に手を触れる。するとどうだろう。ルカが触れた先から何かが染み渡るように徐々に亀裂が増えて行く。そしてそれが水晶全体に及んだ後、魔水晶は音

を立てて砕け散った。

ルカは慌てて、支えを失った少年の身体を受け止める。その体は信じられないくらいに冷たい。

血が通っている生物にあるはずの暖かさは一片もなく、本当に生きていたのかと疑いたいくらいだ。

するとどうしたのだろう。少年の様子がおかしい。自分で自分を抱きしめるように小刻みに震えている。

「どうしたの!？」

『力の暴走だ! ルカ、意識を集中して同調しろ!! でなければこの人造竜兵は自らの力に耐え切れずに死ぬぞ』

本来、人造竜兵は声を聞く者の力を借りて、その身に眠る強大な力を御する。

だが千年以上も封印されていた力は、戒めから解き放たれた途端に暴走を始めたのだ。少年を助けたくば意識を同調させ、力を制御してやる他ない。

意識を集中しろと言われても、そんなに簡単に出来るはずがない。だが出来なければこの子は死ぬ。だからルカは少年を抱きしめて必死に願った。助けたいと。

助けたい。強く思ったその時、ルカの意識は飛んだ。目を開ければそこは無数の矢が飛び交い、怒号が交錯する戦場。喪歌ロストアリアによって引き起こされたのだろう炎が平原を赤く照らしている。

一切自分の思い通りにならない体の中、向かい来る敵をひたすら殺して殺して、殺し尽くした。手が肉を裂き、骨を断つ感触まで鮮明に感じられる。

ああ、これが同調ということなのだ。ルカは理解した。認識した。途端、吐き気が込み上げて来る。いっそのこと吐いてしまいたかった。

これがあの子の記憶なら彼はこんな地獄のような世界で生きていたのか。そう思うと哀しくて、苦しくて涙が出そうになる。殺したくない。嫌だと叫んでいるのに届かない。

『どうして誰も聞いてくれないの！？ もう殺したくないよ！！』

力の限り訴えたというのに。憎かった。自分という存在を造り出した人間も、飽きることなく争い続ける愚かな竜も。

(どうして、何故？ 誰も分かってくれないの！？)

次に映った景色は戦場ではない。誰かが優しい瞳で自分を見つめている。上から伸びて来た大きな手が自分の頭を撫でた。くすぐったくて気持ちいい。

この人は誰なのだろう。顔を見ようと頭を上げるが、霧掛かったように輪郭しか見えなかった。

「お前はまるで私の息子のようだよ」

笑いながらその人は言った。それは太陽のように眩しくて、自分には決して手に入れられないものだ。と理解する。

ただどいつからかその人は、自分を造ってくれた人は笑わなくなつた。自分を見ては泣きそうになって視線をそらす、その繰り返し。

(僕は悲しかった。僕は誰？ 僕は僕。それともルカ？
僕は、俺は……)

『ルカ！！ 記憶に引きずられるな！！』

その声は何よりも深く、そして早くルカの心に届いた。我に返ると、目の前には難しい表情で自分を見るアルとイクセと、燦然と輝く水晶の庭園。

全てを焼き尽くす炎もなく、矢も怒号も飛び交っていない。あの地獄のような光景は夢だったのか。

「ここは……俺は何して」

声に出した瞬間、ルカは唐突に自分が置かれた状況を理解した。腕の中には不安そうに自分を見上げる人造竜兵ドラケーンの少年がいる。

彼と同調して、ルカは少年の記憶を垣間見たのだ。あの光景は全て彼が見て、そして経験したこと。思い出そうとすれば体に震えが走る。

『大丈夫か？』

「うん、ありがと。……あれは君の記憶だったんだね。でも、もう大丈夫。君は誰も殺さなくていいんだよ」

気が付けば頬を冷たい何かが伝っていた。茜色の瞳から零れたそれは紛れも無い涙。

どれだけ辛かっただろう。どれほど憎んだことだろう。ルカが包むように優しく抱きしめると、少年の瑠璃色の瞳にも涙が滲む。

記憶と同じように頭を撫でてやれば、嗚咽が漏れる。少年はルカの腕の中で泣き続けた。まるで全ての涙を出してしまうように、ただひたすら。

たった一つの宝物

少年の体は既に人と変わらぬそれだった。金色の鱗も翼もなく、顔色も随分良い。力を制御出来たからだろうが、こうして見ると本当に人間と区別がつかない。

やっと少年も落ち着いたようで、涙を拭ってル力を見上げた。その様子はまるで飼い主を見る子犬を思わせる。

するとその時、今まで沈黙を守って来たアルが口を開いた。

『人造竜兵^{ドラグーン}、人が造りし竜よ。お前には三つの選択肢がある。このまま私たちと共に来るか、それとも命を断つか。それが嫌だと言うのなら、今までのように眠り続けるのもよかるう。誰も強要はしない。己の意思で選び取らねばならないのだ』

アルもまたル力と同じようには行かないが、少年の記憶を垣間見た。あれは本当に真正銘、地獄だ。人造竜兵の少年が生きていた時は、長きに渡る人竜大戦の中でも、最も戦いが激しかった時期だからだ。

望まぬまま竜たちの命を奪い続け、正気を失いたくともそれすら許されなかった。正に永遠に続く責め苦だったことだろう。

だからこそアルは問うた。彼が死にたいと言うのなら止める権利はない。死を望む者を生かしても無駄だからだ。

もう誰も彼に何かを強要することはない。彼は今、選択を迫られているのだ。

「……僕は、本当は死にたくない。生きていたい……」

少年はじつとアルの金色の瞳を見つめて呟く。この命が消えてし

まえばいいと思った。

だがそう思うのと同じくらい、生きたかった。生きていたかった。俯き、竜から人となった自らの手を握り締める。

この手は沢山の血で汚れている。それでもこの心だけは偽れなかった。

「……うん、分かった。じゃあ、俺たちと一緒に行く？ アル、イクセも異論はない？」

『お前とその者が決めた事。私に異論はない』

ルカの肩から少年の頭に飛び移ったアルが言う。少年を見るアルの猫のような金色の瞳は、ルカ以外に見せるとは思えないくらいに優しかった。

彼を目覚めさせたのはルカ。だからルカには責任がある。彼を造ってくれた『あの人』には及ばないだろうが、彼には怖いだけではない、美しい世界を見て欲しかったから。

「俺もないな」

イクセも笑って少年の髪をかき回す。それに驚いた彼がこちらを見上げるが、イクセは何も言わず微笑んだままだった。

生きたいと願う心を否定することは誰にも出来ない。

ルカは少年に手を差し延べる。少年の記憶に残るあの人によく似た、だがそれよりも小さくて白い手を彼は、怖ず怖ずとだがしっかりと握んだ。

「そう言えば君、名前は？」

ルカの問いに少年はふるふると首を振った。自分たちを区別する

ための型式番号はあったが、それは名前ではない。形式上の名だ。かつて少年を造ってくれたあの人が『』と呼んでくれたこともある。だが彼が死んだ時にそう呼んでくれた自分も死んだのだ。

「じゃあ、ルーアハ。ルーアはどうか？」

「ルー……アハ？」

ただ純粹に嬉しかった。もうこの世界に少年を省みてくれる人間などいないと思っていたから。なのにルカは手を差し延べてくれた。右も左も分からないこの真つ暗な世界に射した一条の光。笑い掛けるルカは記憶に残るあの人にそっくりで、少年はまた泣きそうになった。

遠い遠い記憶で守れなかったあの人。あの人が最後に言った言葉を思い出す。そう、生きる、と。

『ルーアハは古代語で聖霊を意味する言葉だな』

「ルーア、ルーア……」

まるで噛み締めるように、心に刻み付けるようにルーアは己の名を何度も何度も繰り返して呟いた。聖霊なんて大層な名前を貰うほど、綺麗な存在ではないし、勿体無いとも思う。

けれど、嬉しかったのだ。ルカにとっては何気ないものなのかもしれない。

だがルーアには違う。名前は何よりも大切なもの。

「……ありがとうございます、マスタールカ」

「え、あっ、ええっと、そんなマスターなんてくすぐったいから、

ルカで良いよ。あと敬語もね」

少年はいや、ルーア八と名前を貰った彼は、大輪の花が咲くような笑みをルカに見せた。誰もが笑い返さずには入られない、思わず顔が綻んでしまう笑みだ。

そんなルーアにルカは慌てて首を振る。マスターなんて呼ばれると背中がむず痒くなってしまふ。敬語よりも砕けた話しの方がいいし、何だか距離を置かれているようで嫌なのだ。

するとルーアは少し困ったような顔をして、やがて照れ臭そうに言った。

「ルカ兄って呼んでもいい？」

「うん！ 勿論だよ。あ、そういえば自己紹介してなかったっけ。俺はルカ・エアハート。あっちがイクセでルーアの頭に乗ってるのがアルね」

『エアハート、エアハート……』

屈託のない笑みを作るルーアに、思い出したように自己紹介をするルカ。

エアハート、の名を聞いた瞬間、イクセの中で何かが引っ掛かった。どこかで聞いたことのある名だ。

だが具体的に思い出せない。気になることは気になるが、その辺り、彼は割と楽観的な性格だった。直ぐ様その考えを頭から追い出す。

『まあ、いいか。その内思い出すだろ』

『もうこの都市に用はないな？』

こほんと咳ばらいをした後、アルはそう切り出した。ルカの目的だった声の主もこうして見つかったことから、いつまでも長居している訳にはいかない。

ルカやイクセはすっかり忘れているだろうが、依頼にあった荷物はまだ見つけていないのだ。

「うん。じゃあ、行こう、みんな」

長い間、封印されていたことで足元が覚束ないルシアに手を貸して地下室を出る。ルカに手を借りながら歩く少年は一度だけ、自らが長い時を過ごした空間を振り返った。

だがそれも僅かな時で自らの意思で、足で歩き出す。

ルシアが久しぶりに感じた世界は、あの頃とは比べものにならないくらい美しかった。

心地よい風は優しくルシアの髪を揺らし、緑の匂いを運んで来る。見渡す限りの青い空は一点の染みもなく、どこまでも澄み渡っていた。

全てを飲み込まんと燃え盛る炎もなく、竜たちの咆哮も聞こえない。瞼に焼き付いて離れなかった真紅の花も、いつの間にか美しい世界にかき消されていた。

かつてルシアが、いや、ルシアを造った彼が焦がれた世界。人と竜の理想郷、美しきアルカディア。

「これが世界……」

深く息を吸い込んで呟く。これがルシアを造ってくれた人が望んだ、渴望したと言っても過言ではない“世界”なのだ。人と竜が争

うことのない世界がこんなに美しいものだ、ルーアは初めて知った。

本当ならあの戦いで死ぬはずだった自分^{ルーア}。何かの偶然で、戦いで命を落とさなかったとしても、遠からず殺されていただろう。竜と同じ力を持つルーアは戦いが終われば不要だから。

（生きていて良かった……。あなたが僕に見せたかった世界はこれなんです）

かつてあの人が見ていた景色。それを見ることが出来た。

世界の中では今のルーアなどただのちっばけな存在でしかない。だけとただのちっばけな存在でいられる、それが何よりも嬉しい。

もう人造竜兵^{へいぎ}である必要はない、誰も殺さなくていいのだ。

「どうしたの？ ルーア」

黙りこんだルーアを心配して、ルカが顔を覗き込む。ルーアは泣きそうになって俯いた。気を抜けば漏れそうになる嗚咽を抑え、どうにか声を絞り出す。

「ありがとう……。僕を助けてくれて本当に……。ありがとう」

ルーアの頭をルカは何も言わずにもう一度、優しく撫でてくれた。優しい手はこの世界で生きて良いのだと言ってくれている気がする。この手に残った、たった一つの宝物^{いのち}を抱いて生きて行こう。どこまでも歩いて行こう。あの人が望んだ世界で。

星天楼

『では行くぞ』

ルカの肩から飛び降りたアルの体が淡い光に包まれる。次の瞬間、三人の前には見上げるほどの銀色の竜が顕現していた。小さなアルの姿はどこにもない。

全身を覆うのは、陽光を反射する強靱な銀の鱗に、頭から伸びた金色の二本の角はまるで黄金のよう。背から生えた二枚の翼は、猛々しさと神々しさを併せ持った優美なる白銀。長くしなやかな尾は鞭を思わせる。猫の目のように縦長の瞳孔を宿す瞳は、月を嵌め込んだ宝石のように美しい色合いをしていた。

銀色の竜　アルトウールはルカたちが乗りやすいように屈んで頭部を前に出す。

『乗れ。本当ならルカしか乗せんが、致し方あるまい』

アルは不機嫌そうに言つてそっぽを向いた。いくら大きくなつてもアルはアルらしい。文句を言うのは忘れなかった。ただ何だかんだ言つても本気で嫌がつている訳でもないようで、現にアルの瞳は悪戯っぽく細められている。

ルカは勿論、それをよく理解しているイクセも苦笑しつつ、ルカに続いてアルの背に乗った。ルカはルーアに手の差し伸べる。

「ルーアは？」

「僕は自分で飛べるから大丈夫」

大丈夫、と言つたルーアの背から見目鮮やかな皮膜の翼が広がる。

金色の鱗は陽光を弾いて黄金に輝く。金の翼は地下室で目にしたものと同じだが、それよりも尚、光を受けて美しい煌めきを放っている。

生命力溢れる金の翼はまるで、生きる意思を取り戻したルーア自身を体現しているかのよう。優雅に空を泳ぐ少年の姿を早く見たい、ルカは心からそう思った。

『久方ぶりだろうが間違っても落ちるなよ?』

「いくら何でも落ちないよ!」

翼を出したルーアを見て、アルがからかうように言った。ルカ以外には素直ではない、アルらしい言い回しである。

ただし、ルーアがそれを理解出来たかというと……。

案の定、半ばムキになって言い捨てると翼を羽ばたかせ、さつさと蒼穹へと飛び立ってしまった。その姿は封印されていたとは思えないほど、全く危なげない。むしろ優雅でさえある。

「アール」

背中から聞こえて来たのは妙に凄みのあるルカの声。アルはまだ命がほしかったので、振り向くことはしない。アルは黙って銀の翼を大きく羽ばたかせた。

吹き付ける風に大きく髪が乱れ、ルカは思わず目を閉じる。

だがそれも刹那のことで次に目を開けると、アルは既に空中都市を見下げる位置にいた。

「これが空中都市……」

アルの背に乗りながら、ルカは空中都市と呼ばれた古代都市郡の

意味を理解した。アルは浮遊岩の上に都市があるのだと言っていたが、とても岩とは思えない。そもそもこれほど強大なものが空中に浮かんでいるなんて、実際に目にして信じられなかった。

都市は雲の上にあつたため、白い雲海はルカたちの直ぐ真下にある。二人がアルの背に乗った直後、何やら眩いていたのは喪歌だったらしい。空気は薄いはずだし、肌寒いはずなのに寒さを感じない。ルカも知らない喪歌の効果か。

「にしても凄い眺めだな」

イクセは半ば感嘆して、目の前に広がる光景を眺めた。周りは全て青一色に染まっている。いつも見上げる空の色をより鮮やかにしたような曇りのない、ルカの髪と同じ青。『青』がこんなにも綺麗だとは思わなかった。

ルカとイクセが感動している中、ただ一人悲しげな、それでいて何かを決意した顔をする彼。ルーアである。彼は翼を羽ばたかせてアルの隣に並ぶと、エリシオンが見渡せる位置に滞空した。

「あのね、アル。お願いがあるんだ」

『なんだ？』

「ここを……エリシオンを壊して。今の僕には都市を破壊するだけの力が出せないから」

ルーアの顔に悲壮な色はない。ただ穏やかな顔をしている。決して綺麗なだけではない、様々な感情を断ち切り、過去と決別するために。

それに……この都市は墓標だ。ルーアにはあの人がずっとここに

縛り付けられているようではない。

ルカとイクセは何も言わなかった。彼の瞳の内に宿る何かに気付いたからだろうか。アルも彼の決意を感じ取ったのだろう。

「……本当に良いんだな？」

力強い金色の瞳がルーアを見つめる。ルーアは声に出すことなくただ頷いた。

しかし下手に破壊すれば砕けた都市の破片が地上に落ちて被害が出てしまう。そうならないようにも粉々に粉碎するしかない。

『良いだろう。ルーアハ、私の後ろにいる』

だがアルにはそんな心配など無用なのだろう。始まりの時より生きる竜である彼に取っては。アルは目を閉じて意識を集中させる。力を制御するために。

アルは滅多に喪歌を歌わない。それは歌う必要がないからだが、そのアルが歌っている。ルカも聞いたことのない喪歌だ。

アルの眼前に強大な光の魔法陣が形成される。人が扱う魔歌よりずっと複雑なそれが喪歌の証。そして喪歌に呼応するかのようアルの体が銀色の光を帯びる。本来見えるはずのない強大な魔力が知覚化されているのだ。

「アルって凄い力を持つてるんだ……」

信じられないと言った面持ちでルーアが呟く。恐らくはルカに合わせて小さくなっている時は力を抑えているのだろう。ルカやイクセには分からないかもしれないが、同じ竜であるからこそルーアにはアルの凄さが分かる。

今まで彼が目にしたどんな竜よりも、彼が殺さざるを得なかった

どんな竜よりもアルの力は強大だった。

そんな力を持つ竜が何故人の子と共にいるのか興味が沸いた。だが何となく想像はつく。ルカが存在だ。ルカは凄くあたたかい。優しく包みこんでくれる太陽のように。

力の制御が出来ずに半身が竜の姿だったルーアを見ても怖がらなかった、拒絶しなかった。そればかりか大丈夫だよといって抱きしめてくれたのだ。

とその時、アルの体が一際強く輝いた。蒼穹に朗々と歌い上げるアルの声が響く。

『黄昏の舞台ソウイに月が舞う。数多の星が舞台ソウイを描く。奏でるは、悲哀に満ちた光の旋律オホシ。其の響き、星の海が奏でし悠遠なる音階にして揺籃の記憶。始原より続く承継の証を今此処に示さん。さあ、我が咆哮コエにて覚醒めざまめよ、月に愛され、星に加護まもられし愛し子よ。其は万物すべてを照らす光なり。遙かな咆哮コエは世界に響き、世界は声に満たされる。気高き光を知るならば、今我が導きに応えよ 星天楼』

突如として現れた都市を囲むようにして幾重にも重なる黄金の光輪。ただの光の輪ではなく、表面はまるで流麗な文字のようなものが刻まれているようだ。

ただルカとイクセには読めない。光輪は段々小さくなるようにエリシオンに集束し、そして弾けた。

次に静寂が辺りを満たす。あまりの光の洪水に、目を開けていることさえままならない。後に残った光の筋が地平線の如く長く広がったかと思えば、空には残滓である白い光が舞うばかりで人竜大戦時代の古代都市群は、跡形もなく消滅していた。

空架かる橋

ロストアリア
喪歌。竜族が扱う、魔歌の元となった魔法的な力。人間の常識ではそうだし、当然ルカやイクセもそう思っていた。だが“これ”は違う。ロストアリア喪歌の本当の恐ろしさを二人は初めて目にしたのだ。

頭では分かっていたはずだった。高い魔力を持つ竜族は、簡単な喪歌なら歌を必要としない。一言で発動出来る。魔歌と喪歌の違いを今、ここで見せつけられた気がした。人間が編み出した偽物の歌など所詮、本物には及ばないと言われている気がした。

ルカでさえ小さいとは言え都市を破壊するほどの喪歌を目にしたことはない。アルは滅多に喪歌を使わなかったし、使う時も攻撃に関するものは殆どなかった。

自分とアルは違うのだと分かっていたはずだった。なのに本当の意味で理解していなかったのではないのかと、激しく心を揺さぶられた。最も近い存在である彼が遠く思える。

アルは優しい。ルカに心配を掛けたくないからと何も言わない。それでもちゃんと自分の意思を尊重してくれる。

だけどルカは嫌なのだ。悲しみも苦しみも、アルが背負っているものを一緒に背負いたい。守られるだけでなく、守りたい。だってアルはルカの家族で親友だから。そう思うのは我がままなのだろうか。

「これが喪歌、か……」

本当にあのシャーレンという竜を相手にして、よく生きていたも

のだとイクセは思う。彼が喪歌を歌わなかったのは、シャーレンの中に僅かに残った理性のお陰だ。それが彼に喪歌を使わせなかったのである。

そんなイクセの思いを読み取ったのか、あるいは気のせいかアルは間延びした口調で言った。

『そう案ずるな。こんな真似が出来るのはせいぜい私くらいなものだ。まあ、力を取り戻したルーア八なら可能かもしれんが……』

アルが歌った星天楼は喪歌であるが、区分としては古代歌に分類される。古代歌は総じて絶大な威力を誇るというのだから別に不思議なことはない。

ただ、ここまでの力を引き出せたのは間違いなく歌い手、アルの力によるところだろう。

だがアルが歌った歌でさえ、古代歌の威力を弱めるためのものだった。それを知るのは人造竜兵たるルーアだけ。

「え、いくら僕でも無理だよ。今の喪歌って言うより古代歌だもん。僕の頭の中に記憶されている古代歌は少ないから」

ルーアが生きていた時代でも古代歌は謎に包まれていた。彼も多少なら使えるが、ここまでの力を持つ古代歌は記憶にない。簡単なものとはかく、高位の喪歌や古代歌は丸暗記すれば誰でも使えるようになる訳ではないのだ。

都市一つを消滅させる歌などともない。いくら人造竜兵とは言っても、ここまで爆発的な力を引き出すことは不可能だ。

「そもそも古代歌と喪歌の違いって何なんだ？」

「んー、えっと、喪歌や魔歌がほぼ一つの属性のManaを使うのに対

して、古代歌は複数属性のマナを使うんだ。後はまだ属性として区分されていないマナとかね。だから喪歌や魔歌に比べて扱いが難しいんだけど、二つにはない効果を持っていたり、絶大な威力を持っていたりするってわけ。まあ、俺もアルから聞いたことをそのまま言ってるだけだけど」

魔歌や喪歌がほぼ単一属性のマナを使うのに対して古代歌は複数のマナ、そしてまだ属性が定まっていないマナを使う。それ故に扱いが難しいが、魔歌や喪歌に比べ、様々な効果を持っていたり、単純に凄まじい力を発揮したりと、言うなれば二つの歌の上位に位置する歌なのである。

ただ、どこからどこまでが喪歌で、古代歌だという明確な境はない。

「……なあ。もう一つ、気になってることがある」

「気になってること？」

アルの背に乗ったまま、何やら考え込んでいるイクセ。難しい表情をしている彼は、普段より何倍もおっかなく見える。

ルーアはアルから離れないよう、ぴったりと寄り添って浮いていた。アルが喪歌で守ってくれているお陰で、会話するのにも声を張り上げる必要はない。

「ああ。俺たちが何で遺跡群に飛ばされたのか、だ。あの魔水晶からは最初、力を感じなかった。でもルカが魔法陣に入った瞬間、ここに飛ばされたんじゃないか？」

イクセとアルがルカを追って部屋に入った時、魔水晶からは何の力も感じなかった。魔水晶であることは分かったが、僅かな魔力し

か含んでいなかったはず。

ルカが床に、正確には魔法陣に足をつけた瞬間、エリシオンに飛ばされたのではないか。何故ルカなのか、と問われても分からないが、まず間違いないだろう。

「それはルカ兄の遺伝子情報を読み取ったからだよ」

『遺伝子？』

仲良くルカとイクセの声が重なった。難しい単語をさらりと口にしたのはルーアである。聞いたことのない『遺伝子』という言葉にルカもイクセも首を傾げるしかない。

一方、アルはルーアの説明に合点がいったらしく、なるほど唸り声をあげていた。

『遺伝子とは簡単にいうと、生物の遺伝情報を担う主要因子だ』

「遺伝子はDNAが複製されることによって受け継がれるからね。エリシオンに入ることが出来るのは民と招かれた者だけ。ルカ兄はエリシオンの民の末裔なんだよ」

「俺が……？」

遺伝情報やDNAなど、残念ながら彼らの話は難しすぎてルカにもイクセにも分からない。

唯一分かるのは自分が空中都市に暮らしていた民の末裔らしいということ。

ルーアが言うにはエリシオンに足を踏み入れることを許されたのは、民と民によって招かれた者だけらしい。

魔水晶がルカに反応した。それはつまり、ルカがエリシオンの民

の末裔であることに他ならない。驚きだが、確かに辻褄は合う。

『エリシオンの民は声ドラクナーを聞く者として強い力を持っていた。恐らくは先祖返りなのだろう。ルカの力は古の民と比べても遜色ない』

「そっか……。なんだか不思議な感じだね」

ルカはもう一度だけ、空中都市があつた場所を振り返る。人と竜異なる種族が心を通わせ、共に生きることは想像以上に難しい。同じ人でさえ簡単ではないのだ。竜が人の善き隣人と呼ばれるようになった今でも。

しかしエリシオンの人々は、人と竜が争っていた時代に竜と共に暮らしていた。それがどれだけ凄いことか。ルカは今なき都市と楽園の人々に心の中で礼を言う。

ありがとう。ルーアを守ってくれて、竜と共に生きてくれて。感謝の気持ちを込めてルカは歌った。人と竜ルカアルを繋ぐ絆うたを。

『青藍あおきの空に願いは届き、数多の色彩いろを呼び覚ます。其は夢描く絵描き人、尊き夢の具現者あるじ。夢抱く子ねむりこは蒼穹架そらかる階はしを目指し、夢は現となるだろう。遙かな詩は世界に響き、世界は歌に満たされる。約束ちかいの徴と知るならば、今導きの声に応えよ 天弓』

ルカの歌が終わった瞬間、浮かび上がる七色の魔法陣。この歌はスヘルアリアスヘルアリア魔法陣エンヘントアリアではなく、古代歌。魔法陣が一際強く輝くと、細かな水の粒が雨の如く蒼穹に舞う。

そして赤、黄、橙、緑、青、藍、紫。七色に煌く虹がルカたちの前に顕現していた。それは正に空に架かるアーチ。

虹はしばし竜や蛇に例えられることもあり、神との契約を意味する場合もあるらしい。

「綺麗……」

「ああ……」

虹を見たルーアもイクセでさえも、それ以上言葉を紡ぐことが出来なかった。美しい、その言葉さえ陳腐に思えてしまう。

青い空に架かる虹。それがこんなにも美しいなんてルーアは知らなかった。虹なんて一度も目にしたことがないルーアは。

人と竜が生きた理想郷。世界が本当にそうなればいい。ルカはそんな願いを胸に、この歌を歌った。

人と竜は確かに違う生き物だ。

だが言葉を交わすことが出来るのなら、分かり合える。心を通わせることが出来る。いや、例え彼らの言葉が分からなくても、竜たちの歌はこんなにも美しいのだ。

『彼らも喜ぶだろう。……さて、お喋りはそこまでだ。黙っていな
いと舌を噛むぞ』

言い終わると同時に、虹を背にアルの体が風を切って加速する。遂には古代歌の残滓である白い光の粒子を追い越し、地上を目指す。光の粒を見つめていたイクセがぼつりと呟いた。

「何だか雪みたいだな」

「雪？　これが雪……」

ルカは雪なんて本の中でしか知らない。海上にあるエランディアでは実際に目にしたことがあるはずもなく、雪と白い光を結び付けることが出来なかった。

ルカが手を差し出せば、手の平に乗った粒子はすぐに解けて消える。

『いつか本物を見に行けばいい。時はたっぷりとあるのだからな』

白雪のような光に感動しているルカにアルが優しい声で言った。

北に向かえば雪は嫌でも目に入る。その時に飽きるまで眺めればいいのだ。

何も焦ることはない。ルカには沢山の時間があり、アルには無限に等しい時があるのだから。

戯れる子猫たち

幸いなことに空中都市エリシオンはルカたちがいた遺跡からそう離れてはいなかった。三人と一匹は遺跡に戻り、依頼の品を回収した後、冒険者組合があるアイリスの街に戻った。アイリスの街並みが珍しいのか、それとも行き交う人々が珍しいのか、ルーアはきよるきよると周りを見回している。

千年近く封印されていたことを考えると目に映るもの全てが珍しいのだろうか。威勢の良い声に反応したかと思えば、まじまじと露店を見つめていた。

「それじゃあ、報告して来るからイクセはルーアと服見てて。俺も直ぐに行くから」

ルカがそう言って駆け出したのは、街へ入って直ぐのことである。今のルーアは病人が着るような白の上下で裸足だった。服なら変身の要領で適当に変えられるからと遠慮したのだが、ルカがどうしても言い張ったのである。流石に彼の好意を無下には出来ない。

申し訳ないと思う反面、嬉しかった。誰かに何かを貰うなんて殆ど記憶になかったからだ。唯一の例外はあの人くれた“名前”。ただどそれはあの人死んだ時に捨てた。

今の自分はルーア。この名はルカがくれた大切な大切な贈り物。そんな訳でルーアはイクセに取っ変え引っ変え着替えさせられてばかりだが、なかなか決まらないらしい。今も試着室なる部屋に押し込まれて着替えさせられている。

「ごめん。遅くなっちゃった」

見なくても声でルカだと分かる。色々着替えさせられている内にルカが戻って来たようだ。急いで着ていた白の上下を脱いでイクセが見立ててくれた服に着替える。

幸い複雑な服という訳でもなく、着替えに手間取ることはないはずだった。なのにボタンを止める手かもどかしい。どうにか着替えを終えたところで試着室のカーテンを開ける。

「あ、ルーア出てきたよ」

目の前にある姿見に自分が映っている。イクセが見立てた服は彼の好みらしく、シンプルなものだった。

袖口にボタンがついた半袖の白いシャツに青と白のストライプのリボンタイが凡庸になりがちな胸元を飾っている。下はルカのジャケットと同じ、ベルトがついた黒のハーフパンツといったものである。仕上げに少し底が厚めのブーツをはかされた。

どこかルカに似た格好で、二人が並べばきつと兄弟のように見えるに違いない。何にせよ、ルカの目から見ても似合っているということとは確かだ。服を見立てたイクセは得意げに笑っていた。

「ま、俺の見立てだから当然だろ」

「うん、似合ってるよ。じゃあ、会計行ってくるね」

シンプルだが作りがしつかりした服は、まるでルーアのためにつらえたかのようによく似合っている。ルカはルーアが何かを言う前に会計の方へ走って精算を済ませてしまった。思い立ったら即行動。それがルカのモットーである。

何から何まで父、ゲイルとは正反对だが、ここだけはそっくりだ。自由奔放で息子を省みないゲイルに対してルカは他人想いで家族を大事にする。ルカの透き通るような青い髪と茜色の瞳や中性的な顔

立ちは、母であるシルフィア譲りだ。

「思い立ったら即行動か」

ここ数日で慣れていたイクセでさえ、あまりに早いルカの行動に半ばあきれ、半ば感心している。

イクセの声にはた、と我に返ったらしいルカは恐る恐るルアの顔を見た。

友人で幼馴染であるラルフとジェイドにいつも注意されるのに、こんな時に限ってやってしまった。

「あー……つい癖で。ええっと、気に入らなかった？ ルーア」

「ううん、全然そんなことないよ。嬉しい。ありがとう、ルカ兄」

ルーアはと言うと、いきなり話を振られたことに気付かずきょとんとしている。考えること数秒、ルカが言わんとしていることに気付いて慌てて首を振った。

頬を染め、はにかみながら礼を言う。そんなルーアがあまりに可愛くてルカは思わずルーアを抱きしめて頭を撫でる。

ルカの腕の中におさまったルーアは恥ずかしくて、でも嬉しくもあり、どうしていいか分からず戸惑っていた。ルカはあたたかくて優しい太陽の香りがする。

「ルカ兄ってお日様みたい。あつたかくてすごく安心する」

「そうかな？ そんなことないと思うけど。ルーアの方が太陽みただよ。髪とか綺麗だし」

心地よさそうに目を閉じるルーアに、ルカはそうかな、と首を傾

げる。自分をお日様だというのなら、ルーアの方が太陽みたいではないか。飴色の髪は陽光を弾いて燦然と輝いていた。

とても人の手で造られた存在とは思えない。人造竜兵であることを思い出せば、同時にあの辛い記憶を思い出してしまう。

自分の腕の中で嬉しそうに笑う彼は本当に辛い思いをしたのだ。今、ここにいること自体が奇跡ではないか。

「ルカ兄？ どうしたの？」

「うん。……ルーア、生きててくれてありがとう」

黙り込んだルカをルーアが不思議そうに見上げている。ルカに出来ることなど、少ししかないのだろう。彼が負った傷は決して浅くはない。人を憎んでも仕方がないのに、ルーアは屈託の無い笑顔を見せてくれた。

思わず口をついて出た言葉。生きて、自分と出会ってくれてありがとう、と。

ルーアは泣きそうになりながら笑い、うん、と大きく頷いた。

「おい、アル」

一部始終を見ていたイクセが、いつの間にか自分の頭に乗っていたアルに言う。

『なんだイクセル』

「何か小動物たちが戯れてるぞ」

今の二人は正に、子猫同士がじゃれあっているような微笑ましい光景だ。この光景を世の女性たちが見れば、可愛いと連呼していた

に違いない。

「どうやらそう思ったのはイクセだけではないらしい。アルの顔も心なしに柔らかく見える。あくまでイクセの目からであって、本当はどうか分からないが。」

『さながら子猫だな』

二人を見たアルがぼつりと呟いた。

ちなみにルカとルーアの二人は、店の人々から好意的な目で見られていることにも気付いていない。イクセから見れば、あそこだけが別世界である。

するとその時、背後から耳慣れない声が聞こえた。

「良かった。エアハート君！」

第三奏 了

戯れる子猫たち（後書き）

第三奏終了です……！次章のタイトルは青髪の歌姫、だったりします。

とんでもない依頼

今にして思えば、何か断り方法があったのではないかと思う。
だがもう遅い、手遅れだ。

ルカは姿見に映る自分の姿を見てため息をついた。そこに映っているのは見慣れた自分ではない。

しかし『彼女』には似ている。瓜二つだ。

『母さん、俺は俺じゃなくなつたみたい……』

こんな姿をアルやイクセ、ルーアに見られたら笑われるに違いない。

服を着替えさせられた拳銃、武器も取り上げられた。

ルカの手元に残ったのは、父が誕生日にくれた宝石が嵌め込まれた銀色のロケットだけ。ルカは鎖を外し、首の後ろに回して金具を止めた。

ルカの姿を見つけて安堵の表情を浮かべたのは、二十歳前後の青

年だった。特徴のない顔立ちだが、寝癖だろうかこげ茶の髪が所々跳ねている。よくよく見れば何となく見覚えがあった。

だが直ぐには思い出せない。エアハート、と言う名を知っていたことから、ギルド関係の人間だということは推測出来るが……。

「……あ！ 受付の……」

じつと彼の顔を見つめっていると、どうにか思い出せた。ギルドの受付の男性である。

随分と急いでいたようで息も絶え絶えだ。何かルカに言いたいことがあるらしいが、この状態では話も聞けない。取りあえず彼が落ち着くのを待って、ルカは口を開いた。

「あの、受付の人が俺に用ですか？ もしかして何かやりました？」

恐る恐る青年を見上げる。自分でも知らない内に何か不味いことでもやってしまったのだろうか。

血の気が引き、冷や汗がたらたらと吹き出て来る気がしてならない。

そんなルカとは裏腹に、青年は両手を振って否定した。

「あ、違うんだ。アルストロメリア支部のリリスさん、知ってるよね？」

青年の口から出たリリスの名にルカは首を傾げるしかない。

ルカが初めて訪れた街、アルストロメリアのギルドの受付の一人、アーヴィンとリリスの世話になったのは記憶に新しい。

しかしそのリリスとこの青年に何の繋がりがあるのだろうか。一方イクセもルカと同じなのか、口こそ挟まないが、怪訝そうな顔をしている。

「はい。お世話になりましたから。でもそのリリスさんがどうかしたんですか？」

「それが……なんでも君に頼みたいことがあるみたいだね。ギルドまで来てるんだ。もしエアハート君が受けてくれるなら、ギルドを通して正式に依頼するみたいだけど。私も詳しいことまでは……」

青年の話を要約すると、リリスがギルドでルカを待っているという。

ここで疑問が一つ。何故名指しなのか、だ。

ルカはまだ駆け出しと言っても過言ではない冒険者^{ハンター}だし、依頼をするならイクセが最適である。

ルカを呼び出したということは、自分にしか出来ないことなのだろうか。

「分かりました。わざわざありがとうございます。受けるか断るかは別として、一度話だけでも聞いてみます。イクセとルーアはどうする。どこかで時間潰す？ それとも一緒に行く？」

考えたところで分かるはずがなく。話を聞いてみなければ何とも言えない。

わざわざルカを指定した上に、アイリスまで来たのなら、それ相応の理由があると考えて間違いないだろう。話を聞くだけならアルがいれば十分だし、まだ頼みを聞くと決まった訳ではない。

「俺も一緒に行くわ。ルーアも行くだろ？」

『うん。僕も行くよ』

意見も纏まったことで一行は、青年と共にリリスが待つギルドへと向かった。木製の扉を開ければ涼やかな鈴の音が鳴る。

ギルドに入った途端、様々な酒が混ざった臭いが鼻をつく。何度もギルドに出入りするようになれば、慣れてくる臭いである。ルカも最初は顔をしかめていたが、慣れた今は気にならない。慣れとは恐ろしいものだ。

案内を終えた青年は律儀に頭を下げてカウンターへ戻っていく。わざわざ探すまでもなくリリスは見つかった。

何故なら、彼女の燃え盛る炎を思わせる赤い髪と抜群のプロポーションは一際目立っていたからだ。

ただ、流石にアルストロメリアで見た胸元が大きく開き、大胆にスリットが入った服ではない。体の動きを疎外しないように作られた柔軟性のある服と白いパンツに戦闘向きのブーツ。

そしてベルトには鞘に収まった二振りのロングソードが差されている。

唯一あの時と同じなのは、両腕に付けた金の腕輪だけ。今のリリスは受付と言うより、どこから見ても一端の冒険者に見える。

「リリスさん！」

「ルカ君、イクセ。アル君に……えーと、この子は？」

ルカたちを見て破顔したリリスは、一行の中に見つけた頭一つ以上低い存在に不思議そうな顔をした。

どうみても十代前半で、二人のように武器を持っている訳でもない。街で遊んでいる子供たちと何ら変わらない少年が何故、ルカたちと共にいるのだろう。そう思ったに違いない。

「あ、はい。彼はルーア、こう見えても俺と同じ魔奏士なんです」

「あら、そうなの。坊や、小さいのに凄いのね」

少々苦しい紹介のような気もするが、ルーアを紹介するにはこれが一番無難だろう。ルーアの細身の体はどう見ても強そうには見えないし（あくまで見た目の話である）、かと言って人造竜兵と正直に話しても彼女が理解出来るはずもない。

その点、魔奏士なら細身も何も関係ないのだ。ただし、魔奏士とはただ魔歌が歌える者を指す言葉ではない。攻撃の魔歌だけでなく、回復、補助、魔歌や喪歌について理解していなければ本当の魔奏士とは言えない。

一応、冒険者と同じくライセンス制度はあるのだが、難関なため殆どの者は取得しない、いや、出来なかった。

勿論、取得すれば優先的に仕事を回して貰えるなどのメリットはある。ちなみにルカの場合はエランディアから出たことがないため、持っているはずがない。

「立ち話もなんだし、三人とも座って」

リリスはそう言うと、一行を空いていたテーブル席に案内する。

座ったのはいいのだが、肝心の話はまだ聞いていない。ルカは早速、話を切り出した。

「あの、リリスさん。受付の人から俺に頼みたいことがあるって聞いて来たんですが……」

「ルカ君に頼みたいことはね、私の故郷のことなの。私とアーヴィンはグラディウス出身んだけど……単刀直入に言うわ。ルカ君に歌って欲しいの」

グラディウスといえばテゲア大陸の南端、砂漠の中にある街だ。ルカも『砂漠』について雪と同じで知識として知っているものの、実際に目にしたことはない。アルに言わせれば砂の海らしいが、ルカにしてみれば青い海しか知らないため、想像出来なかった。歌って欲しいとリリスは言うが、一体どういうことなのか。

「歌うだけなら構わないですけど、一体どういうことなんですか？」

『神祈祭か？』

神祈祭と口にしたのはリリスではなく、アルだった。

祭というからにはエランディア　ルカの故郷の海神祭と似たようなものなのだろうか。

「確かグラディウスは太陽神ソールを奉ってるって聞いたことがあるが……」

口を開いたのは今まで黙っていたイクセだった。

この世界　アルカディアは唯一神ではなく、地域によって信仰する神が違う。エランディアの民が海神ネレウスを信仰しているように、リリスとアーヴィンの故郷　グラディウスの民は太陽神ソール、イクセの故郷は夜神ノティスを信仰している。

当然、行われる祭りも街ごとに違うため、神祈祭がどういう物なのかも想像出来ない。

だが歌と言うのなら、奉納のためなのだろうか。

「そうなのよ。昔、姫巫女がソールに雨乞いをしたことが由来となっているんだけど、今は毎年選ばれた子が歌と祈りを捧げるの。勿論今年も決まってたんだけど……その子が喉を痛めちゃって、とて

も歌える状況じゃないから代役を探してるの」

「街に代役を出来る子いないの？」

「それなのよ。確かにルーアちゃんの言う通り、代役は考えてあった。けどね、選ばれた子が凄すぎたの。歌もかなり上手いし、顔も可愛いからその子の“代わり”なんて誰もやりたがらないわけ」

ルーアは可愛いらしく小首を傾げてリリスに問うた。それこそ毎年行われる祭なら代役だっているはず。

確かにリリスが言うことにも一理ある。そんな人物の代わりなど、誰もやりたがらないだろう。どうしてもその人と比べられてしまうだろうから。

そこでルカはあることに気付いた。重大な、いや、致命的なことに。ルカの聞き間違いではなければ、リリスは“姫巫女”と言っていた。ならば当然、女でなければいけないはず。

「……あのー、リリスさん。俺、男ですけど。女じゃないと駄目なんじゃないですか？」

「大丈夫よ、バレなきゃ」

とんでもない一言にルカが固まったの言うまでもない。どこからそんな自信が湧いて来るのだろう。

ちなみに彼女の答えをある程度予測していたアルはため息をつき、イクセは笑いを堪え、ルーアはただ面白そうに二人を見ていた。

とんでもない依頼（後書き）

ルカを受難の始まりです……！

所詮は他人事

「絶対に嫌です！」

「お願い。こんな事、ルカ君にしか頼めないし」

リリスが困っているのなら、ルカとて何とかして助けたかった。だがそれだけは嫌だ、譲れない。越えられない一線だ。

かと言ってリリスもそう簡単に退くような相手ではない。懇願するような上目使いでルカを見上げる。

流石に女装して、なんてそう簡単に頼めない。普通、男に頼まないとと思うのはルカだけだろうか。わざわざ女装せずとも他を探した方がいいに決まっている。

「やっても良いんじゃないか？」

「他人事だと思って……」

口を挟んだのはイクセだった。

しかし声音は真剣とは程遠く、絶対に面白がっている。その証拠にテーブルに肘を付いて顎を乗せた彼の端整な顔には意地の悪い笑みが浮かんでいた。

思わず声に出してしまったのも仕方ない。

「そりゃあ、他人事だからな」

ルカが不満気に言えば、イクセは笑いを堪えるのに必死だった。

ルアもイクセの真似をしてテーブルに肘をつけて遊んでいる。意外に鋭い時もあるルアも今は外見相応の少年でしかない。

一度でも自分をマスターと呼んでくれたのなら、切実に助けが欲しかった。どうか女装から逃れられないかと思案していたルカはある考えに行き着く。

「それなら別にイクセでも良いんじゃない？」

彼の整った顔は十分女にも見えるし、自分でも良いのなら当然イクセだって大丈夫なはず。他人事だと思って面白がっていたお返しだ。

ちなみに先程から一言も喋らないアルは、興味のない会話になった瞬間、ルカの肩の上で昼寝を始めた。

「ばっ、背の高さ時点で駄目だろ」

確かにイクセほど高い女性なんて殆どいないだろう。その点、ルカは年頃の少女より背は高いが、化粧を施せば絶対に男だとばれなはずだ。少なくともリリスはそう思う。

顔立ちや年齢、歌い手としてもルカが最適なのである。

「そうなのよねー。顔だけならイクセでも全然いけるんだけど」

「……どうしても俺じゃなきゃ駄目なんですか？」

「ええ、ルカ君ほど可愛い子居ないから絶対大丈夫よ」

満面の笑みを浮かべて言うてくれるのは良かったが、男が可愛いと言われて嬉しいはずがない。だがこのまま断るのもリリスに申し訳なかった。元々、ルカは何でも屋をやっていただけあって困っている人を放って置けない性分なのだ。

リリスの頼みも女装さえなければ、二つ返事で承諾していただろ

う。

リリスが真剣な眼差しで自分を見ている。助けを求めている。その時点でルカの心は決まった。

「分かりました。でも女装なんて今回だけですよ」

ルカは渋々と言った様子で首肯した。

気は進まないが、他でもないリリスの頼みである。シャーレンの時、随分と心配を掛けたから申し訳ないとも思っているのだ。

「ありがとう。本当に助かるわ。神祈祭も主役がいなきゃ、話しにならないし」

「主役!？」

リリスが発した言葉に聞き捨てならない一言があり、ルカは思わず聞き返した。

今、確かに『主役』と言ったような……。

リリスはと言えばその整った顔にふてぶてしい笑みを浮かべている。言うのを忘れていたというより、あえて口に出さなかったと言うところか。

隣でイクセが盛大に嘔き出して笑い転げているのには触れないでおこう。他人事だからって少々笑いすぎではないのか。ルカがイクセを睨み付ければ、彼は笑いを抑えて涙を拭いた。

次の瞬間には、つい数秒前まで笑い転げていたとは思えないポーカーフエイスだ。

「で、リリスさん、主役ってどういうことですか？」

「姫巫女役の子が祈りの歌を歌うのは神祈祭の言わばメインイベントだから、主役って言うっても過言ではないわね。それとも止めたくなった？」

まるで試すような口調だった。ただルカがそう感じただけなのかもしれないが。

だがそこまで言われればルカとて引き下がれない。何でも屋を営んでいた時と同じなのだが、何でも屋であろうと冒険者であろうと一度引き受けた依頼は何かあるうと最後までこなす。

それを疑われるのはあまり気分のいいことではないのだ。

「いいえ。確認しただけです。プロですから、一度受けた依頼は最後までちゃんとやります！」

言い切ったルカを見てリリスが微かに唇の端を持ち上げた。彼女が止めるかと問うたのはわざとだ。そう言えばルカが必ず受けるかと踏んでいたから。

そしてリリスの読み通りになった。その辺りは流石にリリスの方が一枚上手だったのだろう。

「そうね、ごめんなさい。それじゃあ話しも纏まったことだし、アル君、起きて。悪いけどグラディウスまでひとつ飛びお願いね。徒歩だと時間掛かつちゃうから」

『……もう……食べ……ないぞ、ルカ』

どつやら食べ物の夢でも見ているらしい。ルカの肩の上で気持ちよく昼寝をしていたアルがイクセによって叩き起こされたのは、それから約二秒後のことである。

ほとんどの場合、初めて竜の背中に乗った人間は空から見た景色に感嘆の声を上げるといふ。リリスもそれは例外ではないらしく、興味津々といった様子で地上を覗き込んでいる。

結構な速さで飛んでいるため、慣れていない者なら目を開けていることさえままならない。

しかし気を利かせたアルが喪歌を歌ってくれたため、彼女はのんびりと景色を楽しむことが出来るのだ。

少しでも魔歌をかじったことのある人間なら、ルカやイクセ、リリスにルーアの体を薄い風のヴェールが覆っていることに気づくだ

ろっ。

「凄い眺めね……こんな世界があるなんて驚いたわ」

『お前は本当に人を使うのが上手いようだな、リリス』

普通に暮らしていたのなら、絶対に見れない光景だ。

下から間延びしたアルの声が聞こえて来る。それはアルを移動手段に使ったことだけではなく、ルカのことも含んでいるようだ。先程寝ていたようでルカとリリスの会話を聞いていたらしい。

ルカにしてみれば気付いていたのなら、教えてもらいたいものだが。

ルカがわざと身を乗り出してアルの金色の瞳をじっと見るが、本人は知らぬ存ぜぬで通すつもりらしい。

「僕、自分で飛んでもよかったんだけど、まだ駄目？」

不満げな声を漏らしたのは、ルカの隣に座ったルーア。どうやら彼は自分の力で飛びたかったようだが、返って来たアルの答えは少年を落胆させるものだった。

『駄目だ。短時間ならまだしも長い距離は止めておけ。体力も魔力も未だ戻ってはいないのだろう？』

どうやら凶星だったようでルーアは言葉に詰まる。その通りだ。ルーアの体力、魔力ともに未だ半分近くしか戻っていない。

皆に心配を掛けたくないが故に黙っていたのだが、流石は年の功、アルにはお見通し的那样だった。

「無理しちゃ駄目だよ、ルーア」

「そつだ。少しは他人に頼ることを覚えたっていいんだからな」

ルカが心配そうに、イクセは笑って頭を撫でてくれる。

自分がかつて望んだものが全て今、この瞬間に詰まっているような気がして、ルーアは花が咲くように柔らかく微笑んだ。

「うん！」

普通に移動したのなら、アイリスからグラディウスまでは五日から七日かかる。

単純な距離の問題と砂漠のお陰なのだが、アルに乗せてもらっているルカたちには関係ない。これなら今日の夕方にはグラディウスに着けるだろうとはアルの談だ。

だが、ずっと竜の背に乗っているのは思うよりも退屈だ。身体を動かすことも出来ないし、せいぜい会話くらい。

とは言え、何時間も話していれば、いい加減ネタもなくなっていく。取り留めのない事を考えていたイクセは、この間から引っ掛かっていた“エアハート”について唐突に思い出した。

「おい、ルカ、お前もしかしてゲイル・エアハートの血縁か？」

ゲイル・エアハート。冒険者たちの間でも有名な人物。相棒の竜と共に運び屋を営む彼は、依頼成功率はほぼ百パーセント。剣士としての腕も高いらしく、かの剣聖と並び称されるくらいである。

エアハートと言えば珍しい名なので、心当たりはそれしかないのだが、ゲイル・エアハートに息子がいたとも聞いたことはない。

しかしルカはエランディアの出身だと言っていたから、間違いで

はないかもしれないが。

「え？ うん、そうだよ。ゲイル・エアハートは俺の父さん。でも何でイクセが父さんの名前知ってるの？」

ルカも父が運び屋をしているとは聞いたが、イクセほどの冒険者が名前を知っているくらいに有名なのだろうか。

ゲイルは自分について殆ど話さないし、そもそも家に帰ってくる事すら珍しい。

一年の殆どは相棒のゼフィロスと共に世界中を飛び回っているのだ。

「嘘。ルカ君ってあの、ゲイル・エアハートの息子なの！？ 業界じゃあ有名よ？ 依頼の成功率はほぼ百パーセント。物凄く強いらしいし、組合に所属してないのにその地位を確立しているの」

『ゲイルは殆ど自分について話さなかったからな。とは言っても隠していた訳でもあるまい。……全く不器用な男だ』

頭上の会話を聞いていたアルが呆れ気味に呟く。そんな男の息子が真っ直ぐに優しく育ったのは本当に不思議なものだ。

放任主義と言えば聞こえはいいが、ようはゲイルは息子に対する接し方が分からなかったのだらう。

ゲイルと比べてアルはルカと殆どの時を過ごして来た。そう思えばゲイルよりもアルトゥールが彼の父親的な役割を果たしたのかもしれない。

グレイウス

「父さん、自分のこと殆ど喋らなかつたし、運び屋って知つたのも二年くらい前だもん」

ゲイルが家に寄り付かなくなったのは、ルカが五、六歳の時、母が帰らぬ人となった年からだ。

幸い、アルやヘンリエツタのお陰で何とか暮らしてこれたのだが、それはルカが何歳になつても変わることはなかつた。たまに帰つてきても数日でエランディアを旅立つ父親。

正直に言えば寂しかった。突然、母を亡くし、父までも家に寄り付かない。一番甘えたい年頃だろうにルカはずっと我慢していた。アルがいたから耐えられた。ずっと一緒にいてくれたアルがいたから。

「……何でも屋をやつてたのも父親の影響なのか？」

イクセはふと想い出す。ルカは故郷のエランディアで、アルと共に何でも屋を営んでいたと言つていた。戦い慣れしていたのもそれが理由だと。

父が運び屋だから彼もまた同じように何でも屋を営んでいたのだろうか。イクセの問いにルカは僅かばかり驚いたらしい。何とも言えない表情を浮かべている。

「ん……、まあ、そうなのかな」

ルカは曖昧に濁して眼下に広がる砂の海を見つめる。父の影響だと思つたこともなかつたからだ。

砂漠、どこまでも広がる砂の海。確かにアルの言つたように海に

見えなくもないが、やはりルカにとって海は透き通った母なる青い海だ。

アルが作ってくれた風のヴェールのお陰で、細かい砂が飛んで来ることもない。暑いのは暑いが、エランディアで慣れている。ただ、暑さの種類は違うのだが。

『見えたぞ』

アルの声に反射的に前を見たまでは良かったものの、ルカの目にはどこまでも広がる砂の海しか見えない。それはイクセヤリリスも同じようだ。怪訝そうな顔で顔を見合わせていた。目を凝らせば、何とか黒い点のようなものが見える気もするが……。

「あれがグラディウス？ 何だか雰囲気が違うね」

「俺には黒い点にしか見えなただけど」

そんな中、へえ、と物珍しげな声を上げた人物がいた。ルーアである。どうやら彼にはアルと同じようにグラディウスの街が見えているらしい。竜族は人と比べ、視覚や聴覚が優れているがそれでも度を越している。もしかしたらアルとルーア。二人が特別なのかもしれない。

黒い点にしか見えなかったものも段々と近付くにつれてはつきりと見えてきた。

あれがグラディウス。独特な造りの石の家屋に青と白の見目鮮やかな宮殿のようなものまで見える。環境が違えば、人々の住む家や服まで変わると言うが、グラディウスはエランディアやアルストロメリア、アイリス、今まで見たどの街とも違う不思議な雰囲気だ。

アルは街の近くでかつ、人に見付からないように隠れた砂地に着陸する。同時に今までルカたちを覆っていた風のヴェールがはらりと解けて見えなくなった。

アルの体が銀色の光に包まれたかと思えば、見上げるほどに強大な竜の姿はどこにもない。いつものように小さくなったアルはぴよん、とルカの肩に飛び乗った。

「行きましようか。まずは私の実家に行くわね。詳しいことは明日話すわ」

リリスの後について歩き出す。初めは良かったのだが、歩く度に靴が砂に沈んで歩きづらい。その上細かい砂は服や靴の中に入ってくるから最悪だ。まだ服だから良かったものの、これが鎧を着た騎士であつたなら、鎧の重みで身体が沈んで到底動けないだろう。

先頭を行くリリスは流石に慣れた足取りだが、イクセもルカのように苦戦している様子はない。アルは自分の肩の上だから関係ないし、唯一ルカだけが同じように四苦八苦していた。

だが待つてくれと言うのもしゃくだ。ルカは文句も言わず黙々と足を動かし、リリスとイクセの後を追う。

神祈祭が近いお陰か、グラディウスの街は多くの人々で賑わっていた。あまりの人に、慣れていない者なら酔いそうなほどだ。夕刻だというのに熱気が凄まじい。

よくよく見てみると、大通りを歩く人々の大半が日に焼けた肌に薄い生地 of 衣服を身につけている。かと思えばルカたちのように白い肌に色素の薄い髪の人間もいた。

アルが知っていたと言うことから考えると、神祈祭は有名なのだろう。祭を目にするためにグラディウスにやって来ている観光客も結構いるのかもしれない。

目に映るもの全てが新鮮で、ルカはゆっくりと辺りを見回した。砂であるはずの地面はきちんと石畳が敷かれ、強い日光を避けるために屋外の飲食店や露店の頭上には天幕が張つてある。

街の外、地平線の彼方に目を向ければ既に夕暮れ時が近いことから、夕日に照らされた砂の海が美しい夕焼け色に染まっていた。きらきらと光る砂はまるで黄金。とても言葉では言い表せない美しさにルカは息を呑む。

「綺麗だね……ルカ兄」

ルーアもルカの隣に並び、同じように砂漠を眺める。

自然というものは人やそこに生きるものに敵しいだけではない。人の心を揺さぶる美しさがある。自然の雄大さを感じるとはこう言うことなのだろう。

大通りを行く人々は誰も振り返らない。グラディウスの民からすれば見慣れた光景に違いない。

「ルカ、ルーア。はぐれるな、ちゃんとついて来いよ」

イクセとリリスが優しい眼差しで見守っていたとは露知らず、ルカとルーアは慌てて二人の後を追った。

「ここが私の家よ」

リリスの言う家、とはルカが空から見たあの宮殿である。

遠くからでは分からなかったが、近くで見ると装飾に金や銀が使われていることが分かった。他家と同じく材質は石だが、上から白と青の塗料が塗られているために一見した所で気づかない。

一本の柱でさえルカの倍以上の太さで、こちらも細やかな彫刻が施されており、果ては床は石畳と思いきや、何と大理石である。

こんな税の限りを尽くした建物を見たことすらないルカは、ただ呆然と宮殿を見上げるしかなかった。

それはルーアモアルも、イクセでさえ同じなように皆仲良くルカのように瞬きすら出来ず、彫像と化している。

「……これが、家」

「ええ、私、グラディウスの領主の娘なの」

リリスがさらりと流した中に爆弾発言があつた。つまりここがリリスの家であり、グラディウス領主の宮殿ということか。

グラディウスの領主の娘。確かにこれが領主の館なら納得出来る。ただ、ルカは一言も聞いていない。驚いているイクセも知らなかったのだろう。

「俺も初耳だ」

「あら当然よ、だってアーヴィン以外知らないもの」

アーヴィンが知っていたのは、彼もまたグラディウス出身だから。当然よ、と笑うリリスはルカ達の反応を楽しんでいるかのよう。リリスが領主の娘だということは分かった。

では何故、領主の娘がアルストロメリアのギルドの受付なんてしていたのだろうか。領主の娘だとすれば彼女の歳なら既に結婚しているはず。それに加え、普通ならグラディウスの外に出るのも稀だろうに。

「それが何でギルドの受付なんてやってたんだよ。剣だって使える。本当に領主の娘か？」

「失礼ね。見聞を広めるために決まってるじゃない。領主となる者広い視野を持て。父の教えだわ。剣も同じよ。基礎は父から教わったわ。グラディウスの剣士は皆、舞踏剣の使い手だってイクセも聞いたことあるでしょう？」

リリスが腰に差している剣は軽めに作られた普通のロングソード。グラディウスの剣士はシャムシルやカトラスなど刀身が反り返った片刃の剣を使う。

満身に鎧を付けられない砂漠では殆どの場合、防具は身に纏わない。彼らが湾曲した刀身を持つ剣を使うのは、生身の相手によりの確に傷を負わせるためだ。

「舞踏剣か……確かに有名だな」

「舞踏剣って何？」

ルカの問いにリリスがどうぞ、とイクセに説明役を譲った。大方面倒なことを自分に押し付けようとする魂胆か。説明役など面倒ではあるが、期待の眼差しで見つめてくるルカを無下には出来ない。

イクセはふう、と息を吐くと仕方なく口を開いた。

「その名の通りだ。グラディウスの剣士はまるで舞うかのようにしなやかに、そして美しく剣を振るう。だがその演舞は見る者に感激や感動を与えるものじゃない。彼らが与えるのは死だ。だからこそ、彼等の太刀筋は美しい。純粹に生きること、人を殺めることだけに特化した剣だからな」

ルカは父から教えられた剣しか知らない。そう言えば自分が戦う姿を見たアーヴィンが、まるで俺の故郷の剣士みたいだよ、と話していたことを思い出した。

舞踏剣がどんなものかは知らないが、父の剣はもしかしたら、舞踏剣の流れを汲むものかもしれない。

その直後、ルカの耳に間延びした女性の声が届いた。

「まあ、リリース様。お帰りになられたんですね」

美貌の青年

振り向いた先には一人の女性がいた。

年の頃は三十代後半から四十代前半だろう。長い栗色の髪を一つに纏め、日に焼けた褐色の肌をしている。

少し垂れ目がちな瞳は、透き通った湖底を思わせるエメラルドグリーン。

際立った容姿ではないが笑顔が眩しい素朴な女性だ。

「ミリア。ええ、今着いた所よ」

女性を見たリリスの顔が綻んだ。

どうやらこの女性はミリアと言っらしい。ミリアは、まあまあまあ、と嬉しそうに目を細めると視線をルカたちに向けた。

ミリアの『お嬢様』が連れて来た者たちは、十代半ばと思われる少年と肩に乗った竜に十代前半の少年、そして二十歳前後の青年という、奇妙と言えば奇妙な組み合わせである。

「リリス様、こちらの方々はお知り合いの方ですか？」

「そうよ。右からルカ君に肩に乗っているのがアル君、ルーア君にイクセ。ルカ君とイクセは冒険者ね」

リリスは右から順にルカたちを紹介した。

ミリアは冒険者と聞いた途端、感嘆の声を上げる。

アルの姿には少々驚いていたようだが、気にしないことにしたらしい。流石はあのリリスの知り合いだ。

「あらまあ、お若いのに偉いですね。申し遅れました。私、グラデ

イウス家でメイドをさせて頂いています、ミリアと申します。ささ、立ち話もなんですし、中へお入りになりませんか？」

確かにミリアの言う通り、いつまでも突っ立っている訳にも行かないだろう。

既に日が沈み始めているせいも少し肌寒い。ルカも砂漠は昼と夜の温度差が激しいと本で読んだことがある。

「それもそうよね。皆行きましょう」

ルカたちは玄関とは思えない庭を平気で突っ切るリリスの後に続く。

しかしこの広さはどう見ても庭の規模を越えていた。

底まで見渡せる澄んだ泉に、咲き乱れる色とりどりの鮮やかな花。風に乗って爽やかな香りを運んでくる。正にオアシスではないか。それにこの広さは、軽く家の一つや二つ、入ると思うのはルカだけだろうか。

だが庭の広さより、ルカたちが目にするようになる宮殿の方がよほど恐ろしかった。

支柱一本にしても凝った彫刻が施され、金や銀が使われている。床は勿論、鏡のように磨かれた大理石。敷かれた真紅の絨毯には金糸で刺繍された獅子が猛々しく咆哮していた。あまりに見事な刺繍に絨毯に足を付けることすら憚られる。

見上げた天井には大粒の水晶で作られた豪華なシャンデリアが吊られており、まばゆい光と共に大きな影を落としていた。

宮殿の中にある調度品から絨毯、カーテンに至る全てのものがルカからすれば信じられない。相当な金額が掛けられているのだろう。

「これは……リリスさん？」

正面に飾られた油絵を見てルカが呟く。

そこには二人の女性と少女が描かれている。炎のように鮮やかな赤い髪をした二十代半ばほどの美しい女性と、傍らに座る十一、二歳ほどの可愛いらしい女の子だった。

淡い水色のドレスを纏い、髪を結い上げた女性とリボンとレースが使われた薄紅色のワンピースを身につける長い髪の少女。二人の顔立ちはよく似ている。

歳の離れた姉妹か、それとも親子か。二人共、こちらに微笑み掛けていた。思わず頬を緩めてしまうような絵だ。

名のある画家の手によるものなのだろう。まるで呼吸しているのではないか、と無いはずの息使いさえ感じさせる精巧さだった。

「私と母よ。よく似ているでしょう？」

「はい……」

本当によく似ている。リリスと彼女が浮かべる微笑みは、ルカが持つロケットの中に眠る“家族”も同じだった。見るからに幸せそうな、満ち溢れた笑顔。

ルカは知らず知らずの内に首から下げたロケットを握り締めた。母もまたあんな笑顔で自分たちを見つめていたのだろうか。

「まあ、リリス。お帰りなさい！」

弾んだ声と共に、正面の階段から誰かが駆け降りて来る。

レースがふんだんに使われた淡い色合いのドレスは見るからに動きづらそうだ。

だがそれを物ともせず、ドレスの裾を掴んで一人の女性が駆けて来た。高いヒールでここまで走れるのも珍しい。

「ただいま、母さん」

「あら？ お客様かしら？」

リリスの一言にルカとイクセは驚くしかない。確かにリリスと同じ、燃え盛る炎を思わせる赤い髪に顔立ちも瓜二つだ。

しかし女性はどう見ても三十代前後には見えなかつた。とてもリリスのような子供のいる母には見えなかつた。

首を傾げる女性にリリスは頷いて、ルカたちを紹介した。女性は嬉しそうに微笑むと、ドレスの裾を掴まんで優雅にお辞儀をする。

ミリアは女性とリリスに深々と頭を下げた。

「初めまして。私はアイリーン。グラディウス領主イノセントの妻にしてリリスの母です」

ルカも女性 アイリーンに倣って慌てて頭を下げた。

エランディアで育つたルカは貴族や王族と会った経験などあるはずもなく、ぎくしゃくしてしまうのは仕方ない。

イクセの方は流石に慣れていいのか淀みない動作で礼をする。ルカも見よう見真似で礼をした。

アルは居心地が悪そうにルカの肩に隠れている。グラディウスは砂漠の中にあるだけあり、竜は珍しいらしい。

ここに来るまでも子供達の好奇心溢れる目と、大人たちから未知のものに対する怯えが混ざった視線を向けられていたのだから当たり前前だ。

「郷に入りては郷に従え、か……」

「アル？」

呟いてアルはルカの肩を降りる。アルの体が光に包まれたかと思
うとそこには一人の男が立っていた。いや、まだ青年と言ってもい
いだろう。イクセと同じ二十歳前後か。

腰に届く髪は銀系の煌きを放ち、金の両眼はまるで猫のような縦
長の瞳孔をしている。

服装は金の止め具があしらわれ、幾重にも布を重ねた白い外套。

恐ろしく整った顔立ちの青年だった。まるで人間味のない、神掛
かったと言っても差し支えない。

青年の整い過ぎた美貌は見る者に冷たい印象を与えるが、彼の黄
金の瞳は穏やかな光を湛えてルカを見下ろしていた。

「えっ、ええ！？　ア、アルだよね？」

アルの変化にルカは驚きを隠しきれない。目の前の彼はアル以外
に有り得ない。

アルが今まで人の姿を取った事なんて無かったのに。ルカの慌て
ぶりをひとしきり楽しんだ後、青年　アルは口を開いた。

「嗚呼。人の姿を取ったことはなかったからな。驚かせてしまった
だろう？」

そう言って銀髪の青年は微笑する。声も口調もいつものアルに違
いない。

しかし姿が異なればこんなにも違うのか。驚いているのはルカと
リリス、そしてアイリーンでイクセとルーアは驚いた様子はない。

彼は今までルカが見た誰よりも美しい。竜だからだろうか。人が触れてはならない聖域。そんな雰囲気の人となったアルは纏っていた。

「そりゃ、ちよつとはびつくりしたけど、アルって人型になれたんだね」

「昔から千を超えた竜は、人と言葉を交わすことが出来ると言うだろうか？ それにルーアハが人となれるのなら、私が出来ないはずもない」

ルーアが自在に姿を変えられるように、アルもまた竜形態だけでなく、人の姿を取る事も出来る。

年を経た竜が人と言葉を交わせるとの御伽噺は事実なのだ。

ただ、竜たちは殆ど竜以外の姿を取ることがないため、ルカでさえも知らなかった。

「あらあら、改めてはじめまして。竜族のお方」

驚いたのもつかの間、アイリーンはにこやかにドレスの裾を摘んで礼をする。リリスと同じ顔には恐怖も好奇心も浮かんでいない。流石は領主の妻ということなのか。

アルも珍しく目を伏せ、軽く頭を下げた。

「お初にお目にかかる。私はこのルカの保護者。アルとでも呼んで頂いて構わない」

いつものアルと同じ声音だったが、随分丁寧である。見慣れている竜の姿ではなくて、人の姿を取っているからだろうか。確かにアルには違いないし、ルカの気持ちの問題なのだろう。

心がざわめき、落ち着かない。アルが自分の知らない存在に思えてならなかった。

触れた温もり

「ではアルさん、とお呼びします。皆さん、着いたばかりでお疲れでしょう。お部屋に案内しますわ。リリス、案内して差し上げて。ミアは食事の準備を」

「はい」

頷いて歩き出すリリスの後に続く。

先程から思っていたことだが、庭から今までミア以外の使用人の姿を見ていない。こんなに広い屋敷にまさか一人ということはないだろうが、何だか淋しい感じがする。

小さいがアルと共に暮らし、母の温もりが残る家を思い出すからだろうか。

正面の階段を上って案内された先は客人用の一室である。

リリスは夕飯の時に呼びに来ると言って去って行った。

何気なく扉を開けた瞬間、ルカはあまりの光景に固まった。まさか客人用の部屋がここまで豪華だとは思わなかったからだ。

何を言っているのかまるで分からない。

床には見るからに高そうな毛皮の絨毯に、照明には大きさは違えど、玄関のシャンデリアと同じ水晶が使われている。

窓は一面硝子張り、外はバルコニーになっており、夕日が部屋の中を橙色に染めていた。

部屋の端に置かれたベッドは一人一人が寝るにしては随分と広い。

三人は横になれるだろう。作りもしっかりしており、何と天蓋つきだ。

ルカはゆつくりと扉を閉めてもう一度扉を開けた。やはり見間違いでもなければ夢でもない。ドアノブに手を掛けたまま、両隣りのイクセとルーアを見る。

イクセはいなかった。既に自分の部屋に入っただけらしい。ルーアはルカと同じように固まっている。

「ルカ、何を突っ立っている。早く入ればどうだ？ ルーアハもいつまで阿保面を曝す気だ」

「阿保……！？」

どこからか聞こえて来た辛辣な言葉に、固まっていたルーアが反応する。

だが誰もいない。不思議そうに周囲を見回す二人にまたも声が聞こえて来た。

『下だ、下』

つられるように下を見れば、血を零したような絨毯の上に立つ銀色の竜。アルの姿がある。

アルは仏頂面でこちらを見上げていた。どうやらルカとルーアが気づいてくれなかったことが、お気に召さなかったらしい。

二人の言葉を待つ前に、彼は定位置であるルカの肩に乗る。

「もう戻っちゃったの？」

『何だ、不満か。お前たちの前で人の姿でいる理由もないだろう？』

確かにアルが言うように、自分たちの前で人の姿を取る必要はない。

だがあの美しい青年をもう一度見たいと思うのはルカもルーアも同じだろう。不満げに言うアルに、ルカは苦笑するしかなかった。やっぱりアルはアルだよ、と。

どこまでも続く深い夜空と瞬く星だけを観客に、少年はただ一人歌っていた。透き通るような月の光を浴びて。美しい歌声は空へと

届き、闇へと溶けて行く。

耳を澄まさなければ分からないはずの小さな歌声だったが、それは驚くほど透明な歌声だった。

もしここに星空以外の観客が居たのなら、神の歌声と呼んで褒め称えたであろう。

いつもなら寝付きがいいはずのルカも、今日ばかりは直ぐに眠ることが出来なかった。今まで見たことのない物を沢山見たからだろうか。

体は少し疲れていたが、ルカの心は踊っていた。

本格的に稽古に入るのは明日からになるらしい。ずっと女のふりをするのは苦痛だが、それを一時でも忘れてしまふほど、夜のグラディウスは美しかった。

ほのかに灯る疎らな明かりに、朧月に照らされて神秘的な雰囲気醸し出す夜の砂漠。昼間のように乾き、限られた生物しか生存出来ない砂の海ではない。

エランダディアでは絶対に目にすることの出来ない自然の美しさがそこにある。

その感動を少しでも表したくてルカは歌っていた。誰かに聞いて貰えなくても構わない。ただ心から沸き上がるメロディを口にした。

「時を経ても失われる事のない物語。千の夜を越え、夜明けが来るその時まで唄い続けよう」

最後のフレーズを口にして、歌い終わるとルカはふう、と一息をついた。

砂漠の夜は冷える。上着を着ていても尚、肌を刺すような寒さに見舞われた。

お陰で眠る所が寧ろ目は冴え渡って来たくらいだ。うん、と背伸びをして手すりにもたれ掛かる。

「眠れないのか？」

心地良い声がルカの耳朶を叩いた。驚いて振り向けば、月光に照らされた銀色の青年の姿がある。

美しい銀髪は月明かりを浴びてきらきらと輝き、金の瞳は闇に浮かび上がる明かりのようにほのかな光を放っていた。服装は昼間と同じ白い布が重ねられた外套で、金の飾りが月光を反射している。

黄金色の光を放つ月。その化身であるかのように美しい青年は絵画の中から抜け出て来たかのよう。そう思えるほど、この世のものではない麗しさを秘めていた。

「アル……。うん、ちよつとね」

人の姿になる意味がない、と言った彼が何故、人の姿でいるのだろう。

アルは緩やかな足取りでルカの隣に並んだ。

こうして見ると人になったアルの背は高い。イクセと同じかそれ以上。必然的にルカはアルを見上げる形になってしまう。

「……まだ慣れないか？」

変に緊張して何も言えなくなったルカに、アルは彼にしては珍しく、怖ず怖ずと口を開いた。

主語が無いため一瞬分からなかったが、慣れないとは人の姿のことだろう。

「人の姿は何だか緊張する。アルなのに、ね」

自分でもおかしいと感じた。どんな姿であろうとアルはアル。十年以上も共に暮らして来た掛け替えのない家族で、友のはずなのに。

『ルカ』が知らない“アル”を見て戸惑っているのかもしれない。

「お前が嫌なら私は人の姿を取らないが……」

アルは怒られた子供のように元気がない。それがあまりにも姿と不釣り合いで、ルカは思わず笑ってしまう。

やはり姿が変わってもアルはアルだった。分かっていたはずなのに、本当の意味で分かっていたいなかったのだ。

「そんな事ないよ。かつこいいし、綺麗だし。……違うんだ。アルのせいじゃない。俺の知らないアルを見て、不安になったんだ。いつか別れが来ることぐらい、俺にだって分かっている。でもアルが遠くに行っちゃうんじゃないかって。あー……なんたる。上手く、言えないや」

人とは比べものにならない時をアルは生きて来た。そしてこれからもそうだ。いつか、それが遠い未来の話であっても別れは必ず来る。

しかしルカが心配しているのは、そんな事ではない。「トランスレイヤー」滅竜歌についてアルから聞かされてから、彼は手の届かないどこかに、自分の目の前から消えてしまうのではないか。そんな不安に苛まれるようになったのだ。

だが自らが抱えた不安を上手く言葉に表すことなど、ルカには出来なかった。

言えばいらぬ心配をさせてしまうだろう。だからずっと言えなかったのだ。

「ルカ……」

「ごめん。変なこと言っちゃって」

「ごめん、と無理矢理笑うルカはとても見てられない。滅竜歌のことも含め、全てアルの責任だ。ルカにこんな顔をさせてしまうのなら、言わなければ良かった。」

後悔してももう遅い。話してしまった以上、後戻り出来ないのだ。

「お前が望むなら何度でも誓おう。アルトウールの名にかけて此の命ある限り、お前と共に在ることを」

ルカの不安を拭うことが出来るのなら、何度だって言う。ルカを一人にしない。この命続く限り、傍にいる。

アルはルカの手を取り、静かに頭を垂れた。まるで主にかす傳く騎士のように。あるいは臣下が王にするように。

触れたルカの手は氷のように冷たかった。長い間、外気に曝されていたからだろう。

「……まだ不安か？」

ルカの手を取ったままアルが問う。アルは確かに微笑していたが、どこか縋るような瞳でルカを見る。

ルカは少しだけ気恥ずかしくなって俯いた。でも嫌じゃない。

(ずるいよ。アルにそんな顔されたら不安だなんて言えないよ)

「ううん。もう大丈夫。ありがとう、アルトウール」

ルカはアルの手をそっと両手で包み込む。

アルの手はほんのりと温かい。竜である時はどちらかと言えば冷たいのに。

この温もりが自分の元から消えてしまわぬように、ルカは切に願った。

毒を食らわば皿まで

明かりに照らされた舞台に透き通るような歌声が響いていた。織腕と言うに相応しい両手を掲げ、歌っているのは一人の少女。一見したところ、十代半ばほどだろうか。

空の青とも海の青とも違う、絹のように艶やかな長い髪に、大粒の宝石を思わせる茜色の瞳は長い睫毛に縁取られている。

目鼻立ちは勿論整っているが、少女からは神秘的な美しさがあった。良い意味で浮世離れしている、と言えはいいだろうか。

服装はグラディウスの民が好んで着る薄い布を巻き付けたようなもので、身体のラインがはつきり浮かび上がるのが唯一の難点か。

聞き手の胸を打つ歌声は、舞台の前の五人の観客たちに向けられている。燃えるような赤毛を持つ二人の女性と、長い黒髪の青年に飴色の髪の少年、そして絹のような銀色の髪を靡かせる青年である。三人の青年と少年、特に普段から彼女の歌を聞き慣れている銀色の青年でさえ聞き入らずにはいられない、鈴のように澄んだ歌声だった。小さな音を立てるのさえ無粋と感じてしまうほどに。

「……予想以上だわ。リリースがあの子を押すのも当然ね」

アイリーンはこれまで何人もの歌い手を見てきたが、ここまで素晴らしい歌声に出会ったことがなかった。それに加え、彼女は一度聞いただけで完璧に歌ってみせたのだ。

こうして声を出すことさえ彼女の歌を邪魔しているように感じるのだから、相当だろう。

美しいだけの歌声ではない。ただ美しいだけなら、ここまで惹きつけられることはないだろう。その歌声には驚くほど深みがあった。

「でしょ。でも私も何か感動しちゃった。凄く綺麗。声もあの子も」
神に愛された歌声と言うのは、彼女のような声を言うのだろうか。
この歌声はただ綺麗なだけではない。聞く者の心を打つ、心が洗われるような気がする。

これこそ正に、祭りで歌われるべき神に祈る歌だ。
歌が終わった。五人の観客は深く頭を下げた少女に惜しみない拍手を贈る。

だが顔を上げた少女は何とも言えない、微妙な顔をしていた。

「どうした？」

「何でもない」

アルが問い掛ければ別に、と返って来る。少女は素晴らしい歌を披露した人物とは思えない、年相応の子供に戻っていた。

少女、否、ルカは舞台を降りる。

髪は長くて邪魔だし、服も露出する部分が多過ぎだ。それなのにアルとイクセはぼけーっと歌に聞き入っているし、一度張り倒そうかと思っただくらいである。イクセなどさんざん笑っていたくせに。

『良い歌だ』

竜笛を通して“声”を聞いていた“彼”は深く息を吐いた。とある洞窟の中。地面からは大小様々な水晶が生え、魔力を帯びてうっすらと光り輝いている。その様はとても幻想的で、ここに人間がいたのなら、あまりの美しさのために息を漏らしていただろう。

そんな水晶群の中で寝そべるのは、一体の竜。青く煌めく蒼穹色の鱗に銀色の角を持つ竜は、藤色の瞳を優しく細めた。

『主様……』

彼の耳に、聞き慣れた声が届いた。銀色の体毛に青み掛かった紫の瞳。光を封じ込めた水晶の翼を背負う狼は彼の眷属、イシュリアである。

彼女にも歌声は聞こえていたはずだ。イシュリアと彼は繋がっているのだから。

『本当に美しい歌だ』

『ええ、とても。あの方らしい』

嬉しそうに笑う主　ウイスタリアを見て、イシュリアもまた微笑んだ。彼の歌声は心の中で燦る不安や怒りを洗い流してくれる。

彼のような人間ばかりなら、人と竜は争うこともなかっただろう。イシュリアやアルが人を嫌うこともなかっただろう。

あり得ないと知りつつも願ってしまう。信じたいと思ってしまう。

竜全てが善ではないように、人全てが善でも悪でもない。そもそもその括りさえ、人や竜が作り出したもの。

『……イシュリア、我は信じてみたくなった。人と竜の絆というものを』

ルカとアル。二人を見て感じたことだ。表面上は上手く行っているように見えても、人と竜が分かり合うことなど不可能だと思っていた。それほどまでに二つの種族は違い過ぎたのだ。生きる時間も持つ力も、そして価値観も。

ウイスタリアも人はどうしようもないくらい、愚かで救いのない存在だと信じて疑わなかった。

だが一人の少年がウイスタリアだけでなく、『白銀の君』の考えをも変えた。

ルカ・エアハート。本当の意味での竜と心ドラクナーを通わせる者。見ず知らずの竜のために涙を流してくれた彼。

ウイスタリアはそんなルカとアルを見て、人と竜の絆を信じてみたくなったのだ。

いつかきつと、本当の意味で二つの種族が分かり合える日が来るのではないのかと。例え滅竜歌と言う波紋があるうともルカとアル、二人の絆が切れることはないだろう。

『そうですね。お二方を見ていれば私とてそう思います。それに……白銀の君が認めたお方ですから』

『心優しいあの子が悲しむことのないように……我は願おう』

透き通るように美しい歌声を聞きながら、ウイスタリアはその両

の瞳を閉じた。

（どうか世界よ、あの子を悲しませないでくれ。世界は母の胎内のように優しいだけではない。だが互いを大切に想うあの方とルカ、二人の絆を裂くことだけは……）

そう願いながらも、ウイスタリアはとても言葉では言い表せない胸騒ぎのようなものを感じていた。

「今日の練習はここまでにしましょう。そうだね。もし良かったら舞台を見に行かれてはどうかしら？」

「はい、是非！」

アイリーンの提案に真つ先に乗ったのはルカだ。理由は一刻も早くこの恰好から解放されたかったから。長い髪は暑くて邪魔だし、何より衣装が薄すぎる。女装をしているだけでも苦痛なのに、イク

セが笑いを堪えている所を見れば張り倒したくなった。
しかしきらきらと目を輝かせる彼に止めを刺したのはリリースである。

「そうね。ついでに皆にも紹介しましょ」

「え？」

「だってみんなには代役を用意するとか伝えてないもの」

リリースのとんでもない言葉に卒倒しそうだ。紹介すると言つのはやはり『この恰好』で、だろう。

青い顔になるルカを見てリリースは楽しそうに笑っていた。

ルカにしてみれば、本番以外でこの姿を晒すのは勘弁して貰いたい。いくらリリースの頼みであつてもだ。

アイリーンと言えば、ルカの顔が引きつっていることに気付いていない。リリースは確信犯で後の三人は勿論気付いている。

「つ、つつしんでお断りします！」

断った直後、ルカの体は宙に浮いていた。抗議の声を上げる暇もない。一瞬のことだ。

ルカはまるで麻袋のように、軽々とイクセの肩に担がれていた。

「ちよつ、イクセ！ 降ろして！！」

「やだね」

ルカは降ろして貰いたい一心で暴れるが、黒の青年はびくともしない。イクセの顔を見なくてもその表情は想像できた。面白がつて

いるに違いない。

アイリーンのいつてらっしゃい、と間の抜けた声を背に、イクセと担がれたルカの後ろに苦笑するアルとルーア、堪えきれずに噴き出すリリスが続く。

「イクセの馬鹿、阿呆！ おろしてつてば！！」

肝心のイクセはルカの罵詈雑言を物ともしない。口笛まで吹いている始末だ。

「……ルカ、時には諦めるというのも大事だぞ」

「笑いながら言われても全然説得力ないよ！」

アルはといえば全く助ける気がないらしく、頼みのルーアもちらりと見た瞬間、不自然に視線を逸らされた。

グラディウスの民族衣装に着替えさせられた時、スローイングナイフもジークルーネも似合わないからと取り上げられている。流石にイクセ相手に魔歌を歌う訳にもいかず、ルカには叫ぶ事しか出来ない。

「毒を食らわば皿までって言うだろ。ま、諦めて大人しくするんだな」

イクセが言うことはもつともである。もつともだが、先ほどで笑っていた人物には言われたくないのがルカの心情だ。

だがこのまま拒否しても強引に連れて行かれるだけである。ならば自分の足で歩いた方が数倍良い。そう思い、ルカは渋々折れたのだった。

「……もう、分かったよ。だから降ろして」

蒼穹の危機

街に出たルカたちを待っていたのは好奇の視線だった。何しろ、アルの銀色の髪にルカの青い髪と、ルーアの飴色の髪は、グラディウスでは滅多に見ない色だからである。

神祈祭のお陰で外の人間が増えたとは言え、三人のように鮮やかな髪の色は珍しい。

リリスの炎を思わせる髪も十二分に目立ちそうなものであるが、彼女は別の意味で目立っていた。街行く人々が親しげに彼女に声を掛けるのだ。領主の娘だから、ではなくリリス本人が愛されている証拠だろう。

昨日は夕方であつたためかそれほど注視されなかつたが、今は朝通りにいる人々の殆どがグラディウスの民である。

好奇の視線に耐えられなくなった（女の格好をしているため余計に）ルカはアルの背中に隠れる。

「どつした、ルカ？」

「……視線が痛い。アル、壁になって」

人々の視線に気付かない、と言うか全く意に介さないアルは、不思議そうにルカを見た。

聞かなくても分かるだろう、そんな意味を込めてアルの金色の瞳を見たが、駄目だった。全然気づいていない。

遂に我慢の限界が来たらしいルカは、アルの背に隠れる。背が高いアルの背後に隠れれば、小柄なルカの体は殆ど見えない。

しかし本人に言えば怒られるだろうが、少女が（あくまで見かけ

上は）青年の背に隠れる姿は非常に微笑ましい。

「仰せのままに、姫」

笑いを堪えながらアルが言う。「冗談を言わない彼にしては珍しく、楽しんでるらしい。

ルカにしてみれば冗談に聞こえないのだが。案の定、唇を尖らせてアルの背中を叩く。その仕草さえ微笑ましいと口にしようものなら、烈火のごとく怒り出すに違いない。

「姫じゃないって！」

「まあ、見た目だけなら姫でも全然いけるけどな」

イクセが笑って口にした瞬間、アルの背から移動したルカに思いつきり髪を引っ張られる。それほど強い力ではなかったが、痛いものは痛い。ルカの方は謝る気などないようで、むしろ不機嫌そうな顔でイクセを睨みつけていた。

イクセはこりゃあ乱暴な姫様なこと、と言いかけ、慌てて言葉を呑み込む。

「イク兄、後で髪、結んであげよっか？」

「ん？ じゃ、頼むわ」

見兼ねたルーアが間に入って、何とか場を和ませようとわざとらしく明るい声を上げる。これ以上、厄介な事態になりたくないイクセもそれに飛びついた。

イクセの長い髪は砂漠の中では暑くてたまらないだろう。首の後ろに熱が籠り、相当暑いはず。本人は顔に出さず平気そうにして

いるが、服も黒で髪も黒なら暑くないはずがない。

ルカも一度だけ、彼が髪を結んでいる所を目にしたが、面倒なので普段は下ろしているのだとか。その方が邪魔だと思っるのはルカだけだろうか。

「おお、リリスちゃん、帰ったのかい！　綺麗な兄ちゃんたち連れてお帰りかい？」

リリスの耳に届いた壮年の男。

振り向いた先には白い歯を見せて笑う壮年の男性が佇んでいた。浅黒く日焼けした肌に、色素の濃い髪はグラディウスの民の典型的な特徴だ。

思わず頬を緩めてしまうような笑顔にルカもつられて表情が緩む。

「おじさん、そうなのよ。昨日帰ったばかりなの。そうそう神祈祭で歌ってくれる子を連れて来たから紹介するわね」

リリスは無言を言わず、かつ素早い動きでアルの背に隠れていたルカを引っ張り出した。正に瞬きの間に、である。

彼女には心の準備やら何やらとの言葉は通じないらしい。

流石はリリスである。少しはこの強引さを分けて欲しい、彼女を見た者の殆どが口を揃えて言うのだから相当だ。

「ルカちゃんよ。若いけど冒険者で魔奏士なの」

「ほお、そりやまた若いのに凄いなえ。こんな可愛らしいお嬢さんが冒険者で魔奏士とはおじさん驚くよ」

冒険者は十五歳を過ぎていれば誰でも資格を取得出来るが、その

年で冒険者になる者は少ない。魔奏士も同様だ。

魔歌は学べばある程度、誰でも扱えるものだが、やはり生まれ持った才が必要である。

それに魔奏士と名乗るにはそれなりの実力がなければならぬ。

一方ルカはリリスに紹介された以上、挨拶するしかなかった。ルカは覚悟を決めて口を開く。

「ルカと言います。初めまして」

につこりと笑って挨拶するが、名字であるエアハートを名乗ることとはしなかった。大丈夫だとは思うが、イクセのように気付くかもしれないし、エアハートと言う名字自体珍しいからだ。

しかし彼の心配とは裏腹に少女の微笑みにすっかり気を良くした男性はにこにここと笑っている。

これなら大丈夫そうだと安心した瞬間、言葉ではとても言い表せない感覚がルカを襲った。

反射的にウイスタリアから貰った竜笛を見ればそれは、鈍い輝きを放っている。竜笛が自ら光を放つことはない。もしかやウイスタリアに何かあったのか。嫌な予感ばかりが胸をよぎる。

助けを求めるようにアルを見上げれば目が合った。

「アル、ウイスタリアに何か……」

「ああ……」

「俺も行くから」

自分だっけと一緒にいきたい。のけ者にされるのはもう嫌だ。そんな思いを込めて金色の目を見つめれば、アルは観念したようにため

息をついた。

自分のお願いにアルが首を横に振るわけがない。ル力は確信していた。

「……仕方ない。ただし危険があるのはまず間違いない。私の傍から離れるな」

「うん！」

水晶に囲まれた空間で力を蓄えていたウイスタリアは、僅かな異変に気付いて顔を上げる。

見たところ、周囲が変わったことはない。

だが研ぎ澄まされた彼の感覚は確かに異変を伝えている。何かが違う。空気、だろうか。ウイスタリアが首を傾げたその時、かつんと聞こえるはずのない靴音が耳に入った。

『……………何者だ？』

現れた“それ”は人だった。否、人の姿をしていた。

頭の上からつま先まで長い黒の外套を纏った人物の素顔は窺い知れない。フードを深く被っているせいかわ顔も見えず、性別も分からなかった。

ただ一つ分かるのは、目の前の人間は今ではもう癒えたとは言え、ウイスタリアの傷の原因となった人物であること。

『貴様！？ 何故ここに……………』

ウイスタリアは驚きを隠しきれなかった。

現世から切り離されたとも言えるここは、人の力に入れる場所ではない。竜、それも彼やアルのような力を持った存在でなければ。

外套を纏った人物は、ウイスタリアの言葉には答えない。フードの隙間から見えた唇が僅かに歪んだ気がした。

ウイスタリアは咄嗟に身構えるが、滅竜歌 竜を滅ぼすために

生み出された魔歌を操る者に対してこちらは下手に動けない。

ルカのお陰で命は取り留めたものの、まだ魔力、体力共に万全とは言えないのだから。

『……………何者だと聞いている？』

「やて……………お前は“何”だと思っ？」

発せられた声は青年のものだった。警戒心をあらわにする蒼穹色の竜に対し、青年は肩を揺らして笑う。

何、だと？ 決まっている。“人”だ。人でなければ滅竜歌は歌えない。いや、歌わない。

しかしウイスタリアもまた答えることはしない。青年にとってはこの会話も、言葉遊びだと気付いたからだ。

『主様！？ 貴様……！？』

微動だにしないウイスタリアに、青年も動かない。沈黙を破ったのはイシュリアの声だった。

主の前に主を傷付けた人間の姿を認めたイシュリアは、鋭い牙で喉笛を食いちぎらんと襲い掛かる。

『……四散せし幾千の叫び、幾万の嘆き。其は塵芥ちりあくたより生まれし怨嗟にして慟哭。白は緋に変わり、血の涙を流す』

青年の口から紡がれたもの。それは地の底より響く怨嗟の声だった。

その旋律と詩には肌を泡立たせる何かがある。

理屈ではなく、真つ先に本能が恐れているのだ。ドラゴンスレイヤー 滅竜歌。竜を滅ぼすための魔歌。

『止めろっ！！』

イシュリアはウイスタリアより力を与えられた存在であって竜ではない。

だが彼の眷属であり、その身体は竜と同じようにマナで構成されている。滅竜歌を受ければ待っているのは間違いなく“死”だ。

人が、それとも

「すみません、リリースさん。少し急ぎの用事が……直ぐに戻りますので」

話し込んでいるリリースと男性にお辞儀をすると、ルカとアルは走り出す。

話から大体を察したイクセと全く訳が分からないルーアも取りあえず二人の後に続く。

アルはそのまま人気のない路地裏に身を隠した。流石に街中で消える訳にはいかないからだ。

「時間がない。飛ぶぞ」

アルが口を開いた瞬間、周囲の景色がぐにやりと歪む。

次にやって来た閃光に思わず目をつむれば、一瞬だけ浮遊感に包まれた。瞼を刺していた強烈な光が収まり、恐る恐る目を開けた先には先日訪れた水晶の洞窟だった。

紫掛かった青の魔水晶が地面から生えている。大きさも様々で、ほんの小さなものからルカの身の丈にも及ぶものもあり、ルカも二度目でなければ見入っていたことだろう。

四人の中で唯一、この空間を訪れたことのないルーアさえ、洞窟にマナが満ち溢れている事が感じられた。現世では考えられないほどのマナの量だ。

「何………」

「ルーア？」

驚いて動けずにいるルーアの首根っこをイクセが掴んで引つ張った。アルは何かを感じているのか導かれるように水晶の洞窟を進んで行く。

進むにつれて全く喋らなくなったルーアを心配してルカが声を掛けるが返事はない。そんな彼もそのまま飛び出して来たため、まだ女装したままである。違和感が凄まじいが、ウイスタリアの危機にそんなこといつていられない。

「……すごく嫌な感じがする」

呟いたルーアの声は紛れも無く震えている。まるで見えない恐怖を感じているように。

“それ”が何なのかルーアには分からない。否、分かりたくなかった。

それでも感じるのだ。自分の全てが塗り潰されていくような恐怖、とでも言えばいいのだろうか。

言葉では到底、今の気持ちを言い表すことが出来ない。肌が粟立つ。分からないのに分かる。これは危険だ。

「それはお前の竜としての本能が危険を告げているのだろう」

「竜としての本能？」

アルの言葉を聞き、ルーアは不思議そうに首を傾げる。確かにルーアは竜だ。竜であることには変わりはない。

しかし人の手によって造られた竜である自分に、果たして本能など存在するのか。アルの瞳はもうルーアを見ていなかった。彼の金の瞳は前だけを見据えている。

「あれは……誰？」

高くそびえる水晶の向こう側、ウイスタリアと彼の前に佇む黒衣の人物。

次に現れたイシュリアが、ウイスタリアを庇うように前に出た。イシュリアは黒衣の人物を主に害をなす者と判断したのか、その鋭い牙で喉を噛みちぎらんと地面を蹴る。外套の人物はというと、焦る所か逃げもせず口を開いた。

『……四散せし幾千の叫び、幾万の嘆き。其は塵芥より生まれし怨嗟にして慟哭。白は緋に変わり、血の涙を流す』

その詩を耳にした時、ルカの口は考える前に動いていた。聞いたことのない、魔歌と呼べるものかどうかも分からない。それでもこの“うた”は危険だ。

しかも普通に魔歌を歌うだけでは間に合わない。それでも出来ないなんて言うてられない。やるしかないのだ。

ルカは覚悟を決めて歌う。しかし魔歌は魔歌でも歌う部分は結びの部分だけだ。

魔歌は歌うことによってマナを集める事で発動する。通常は結びの部分で歌っただけでは発動しないが、このマナが溢れる洞窟なら可能だ。

『遙かな詩は世界に響き、世界は歌に満たされる。凍てつく想いを知るならば、今導きの声に応えよ 氷煌楯』

歌が完成すると共にイシュリアの眼前に氷の大盾が出現する。それと同時に、激しい音を立てて盾が崩れ落ちた。それも粉々に砕け散ったのだ。

魔歌で作られた盾をここまで粉々にするとは尋常ではない。アルは四散した氷片を見た後、ウイスタリアの前に立つ人間を鋭く睨みつけた。

思わぬ乱入者にウイスタリアとイシュリアがこちらに振り返る。

「ルカ！ それに……」

「動くな」

ウイスタリアにはアルが人の姿となっても分かるらしい。僅かに目を見張り、銀髪の青年を凝視していた。

一方、アルが掲げた手に従って隆起する槍。燦然たる光を凝縮したような光槍は、瞬く間に黒衣を縫い取め、動きを封じた。正に瞬きの間だった。熟練の魔奏士であっても、アルから逃れる術はないだろう。

アルは黒衣の人物に歩み寄ると、低い声で問う。

「貴様、何故“それ”が歌える？ 千の昔に潰えたものを」

アルは黒衣の人物が歌った歌をそれ、としか言わなかったが、千の昔に潰えたそれは間違いなく『滅竜歌』のことであろう。

低く、鋭いアルの声に、拘束されている筈の人物が声を上げて笑った。拘束され、一步も動けないはずなのに。目深にフードを被っているため、表情は見えない。

だがその唇は笑みの形を刻んでいる。

「さて、何故でしょうかね。何故だと思えますか？ 白銀の君。いや、ドラゴンロード、アルトウール＝レインセル＝シルバーレイ殿」

「貴様！！ 何故その名を……」

シルエツトだけでは判別はつかないが、声は若い男のもの。
対してアルやウイスタリア、イシュリアは驚きを隠し切れない。
アルのいや、アルトウールの真名を知るのと同じ始竜か、ルカだ
け。何故、ただの人間がアルの真名を知っているのか。
それだけではない。竜の姿ならいざしらず、人の姿でアルを竜だ
と見破ったのだ。

「さて、何故でしょうね」

アルの詰問とも言える問いにも彼は答えをはぐらかしたただけだっ
た。口元だけが楽しげに歪められている。

このウイスタリアが作り出した空間は完全に現世から断絶された
世界。アルと同じように始竜であるか、もしくは力を与えられた眷
属でなければこの世界に足を踏み入れることは出来ない。

それなのに彼は間違いなく自分たちの前にいる。声と口元だけで
は彼の真意を推し量ることなど到底出来なかった。

「お前は本当に……“人”か？」

そう口にしながらも、アルは目の前の人物が人だと確信していた。
何故なら滅竜歌は人にしか歌えない上に、感じられる気配は確か
に人だからだ。

だがそれ故にアルは信じられなかった。

一人一人の力では、ここに辿りつくことすら出来ないはずだ。では
目の前の人の形をしたものはなんだ。その堂々巡りである。

「少なくとも私は人ですよ」

「……貴方はどうして“こんなこと”をするの？ 前にウイスタリ

アを傷付けたのも貴方なんですよ」

ルカは臆することなく目の前の青年を見つめる。アルは滅竜歌は千年前に失われたと言っていた。

今、イシュリアに向けて放たれたのもまた滅竜歌。つまり、彼はウイスタリアを殺そうとしたのだ。ルカは何に対しても滅多に怒ることはない。

だが今のルカは声を荒らげてはいないものの、声には静かな怒りが込められていた。

「だとしたら？」

青年の態度も声の質さえも変わらない。

抑揚のない、あるいは人形のように感情のない声だ。いや、ルカの目には彼が楽しんでるように見えた。

「俺は貴方を許さない。貴方が俺の大切なものを傷付けるなら」

「俺も同感だな。何者か知らないが趣味悪いぜ、あんた」

ルカが青年を睨み付けるようにじっと見据えると、イクセも剣に手をかける。

ルーアは何かあれば直ぐ動けるように身構えた。

「流石に始竜であるあなた方二人を相手にするのは骨が折れる。それと人の手により作られた竜も。私とて死にたくありませんからね」

予想外の言葉にルーアはびくりと肩を震わせた。

ルーアが人造竜兵であることは一目では分からない。アルやウイスタリアなら別だろうが、少なくとも人や普通の竜では分かりよう

がないのだ。だというのに目の前の青年は確信している。

「……………私たちから逃げられると？」

アルが言うようにこちらはルカやイクセ、ルーア、ウイスタリアにイシュリア。六人いるのだ。

滅竜歌の歌い手を簡単に逃がす気はないし、逃がしてはならない。青年にはまだ聞かなければならないことが山ほどある。

闇に連なる者

「確かに私ではあなた方には勝てない。ですがなにも勝つ必要はないですから」

『揺らめく光は黄泉への導、逆巻く炎は断罪の槍。其は誓いと祈りを知り、猛き焰の旋律へと誘う。朱は制約、血は誓約。己が力を知り、魂を織る。無垢なる願いは届くことなく、果てなき天へと響くのみ。遙かな詩は世界に響き、世界は歌に満たされる。掲げた約束を知るならば、今導きの声に応えよ 誓焰槍』

青年が紡いだのは滅竜歌ではない。

魔歌、いつかルカが歌ったものと同じものだ。目標はアルでもウイスタリアでもルーアでもない。掲げた手の先にいるのはルカ。咄嗟にアルがルカを背に庇い、咆哮した。

瞬間、彼らの前に銀色の光を放つ透明な大盾が出現する。盾に突き刺さった直後に霧散したのは炎の槍だ。

人の魔歌ではともアルの喪歌を破ることなど出来ない。

「私は何者か知りたければヒントをあげましょう。私は闇に連なりし者。それだけ言えばお分かりでしょう？」

「待て！」

くすり、と青年が笑った直後、彼を戒めていた槍が霧散する。アルの力で作り出された槍が簡単に消えたのだ。アルとて全力ではなかったが、とても人の力で逃れられるものではないはず。

彼を縛めるものはもう、何も無かった。

鋭いアルの声が飛ぶと同時に相手を拘束するための喪歌が放たれ

るが、もう遅い。マナと魔力で作られた鎖は虚しく空を切った。

「逃げたか……」

恐らくは転移系統の古代歌を使って逃げたのだろう。

しかし最後に口にした『闇に連なる者』。その言葉から連想されるものは只一つ。常闇を司る……。

久方ぶりに見た夢はこれを暗示していたのか。アルたち始竜が見る夢は何かしら意味があるものだ。

しかし同時に有り得ないと思う自分も居た。

ウイスタリアを一瞥すると彼もまた、信じられないといった面持ちで青年が消えた場所を見つめ続けている。

「アル……？」

ルカは言い知れぬ不安を感じてアルのローブの裾を掴んだ。

アルだけではない。ウイスタリアも明らかに様子がおかしかった。イシユリアは不安そうな眼差しで主を見据えている。

まただ。また怖くなる。アルが自分の傍から去ってしまうのではないのか、そう思ってしまう。根拠などどこにもないというのに。

「すまない。私は大丈夫だ。ルカ？」

アルは優しい手つきでルカの頭を撫でる。それでもルカの不安は消えない。アルが居なくなることが何よりも怖かった。

口には出せない。出してしまえば、それが現実になってしまいうで怖かった。そんなこと、あるはずもないのに怖いのだ。

ルカはローブから手を離すと無理やり笑顔を作った。優しい彼に心配を掛けたくないから。

「ごめん」

「あまり無理はするなよ。……蒼穹、怪我はないな」

アルもルカの様子がおかしいことに気づいたのだろう。

だがローブの裾を掴んだまま、それ以上口を開こうとしない。

アルはもう一度ルカの頭を撫で、背後に立つウイスタリアを仰ぎ見た。空のように青い鱗には傷一つない。青年に向かって行ったイシュリアにも見た所、怪我は無かった。

『嗚呼、助かった。貴方が来てくれなければ我らは間違いなく死んでいただろう』

ウイスタリアは深い息を吐き出し、アルを見下げる。それは誇張でも何でもない。

ルカたちが来てくれなければ、自分とイシュリアは死んでいた。自分たち始竜が死ねば世界は『荒れる』。

何故なら始竜とはこの世界、アルカディアの万象を司る存在だからだ。

「いや、それより間に合ってよかった。ルカ、体は大丈夫か？」

「え、うん。前に来た時より平気なんだけど、何でだろ？」

アルに言われて初めて気づく。言われてみれば気分も悪くないし、頭痛もしない。

前にここを訪れた時は通常を超える膨大なマナにあてられたのに。イクセはと言えば、何か考えこむように顎に手を当てている。

「それはきつとルカ兄の体がマナに慣れたからだよ。魔奏士は普通

の人間と比べてマナへの適応力が高い。でなければ強力な魔歌を操れないからね。ルカ兄はマナに敏感かもしれないけど、裏を返せばそれは、マナへの適応力が高いつて言うことなんだ」

口を挟んだのは、先ほどから洞窟を見回していたルーアだ。

魔奏士として重宝されるマナへの適応力。ルカはマナに敏感な体質である。

しかしそれはマナの影響を受けやすいと同じようにマナへの適応力が高いということにも繋がる。

銚色の少年に目を向けたウイスタリアは董色の瞳を細めて唸り声を上げた。

『……人の手により造り出された竜、ドラグーン人造竜兵か』

ルーアが普通の竜ではないこと。それはアルやウイスタリアのよくな強い力を持つ竜になら分かる。

何故なら、竜と人造竜兵の体の構造は僅かに違うからだ。咳かれた言葉にルーアはウイスタリアの前に出ると、胸に手を当てて礼をした。

その仕草は優雅としか言いようがなく、ルカはただ驚くしかない。

「始まりの時より生きるドラゴンロード、蒼穹の君とお見受けします。お察しの通り、私は千年の昔、人の手により作り出された竜、ドラグーン人造竜兵。そこにいる人の子、ルカの手により助け出されました。今の名はルーアハメシアラズライトと申します」

ルーアハメシアラズライトと言う名はついこの間、ルカが与えてくれたものだ。メシアは古代語で救済を意味し、ラズライトは瑠璃の主成分となる鉱石の名だ。

アルは別として、彼のあまりの変わり様に驚いていたのはルカと

イクセ。

千年の時を封印されていたとは言え、ルーアの言動は紛れも無く年相応の少年のものだった。

しかし今の彼は見た目通りの少年ではない。文字通り、千年の時を生きた『竜』であった。

『成る程、貴公もまたルカに助けられたのだな』

「ええ、彼は壊れかけた私を救ってくれたんです」

微笑むルーアはとても十代前半ほどの少年ではない。どこか老獪ささえ感じさせる、年を経た者特有の雰囲気纏っている。

ルカがいなければルーアは間違いなく死んでいただろう。声を聞いてくれなければ。

滅びを待つだけの存在であった自分^{ルーア}。ルカと出会わなければ、緑の匂いも太陽のあたたかさも知らなかっただろう。

「やっぱり、ルーアは竜なんだね」

「眠っていたとは言え、千年は生きてるもん」

ルカが感心したように声を上げると、ルーアはえっへんと胸を張る。その声は先程とは違い、年頃の少年のものだ。

口調と声音まで少年に戻っていて、ルカは少しか拍子抜けしてしまう。一体どちらが本当の彼なのか。いや、どちらも彼なのかもしれない。

「それで蒼穹よ、どうするつもりだ？ 居場所が知られた以上、ここにはもう留まれないだろう？」

青年がどんな方法でウイスタリアの居場所を突き止めたのか分からないが、この空間が知られた以上、留まる訳にはいかない。しかし未だ彼の力は完全ではないのだ。

『現世に戻るしかないだろう。まだ力は戻っていないが、背に腹は変えられぬ』

ウイスタリアはけだるげに身を起こすと何やら呟いた。すると彼をまばゆい光が包む。

次の瞬間、ルカたちの前にいたのは青い竜ではない。一人の青年だった。

彼もまたアル同様、目を向けずにはいられない秀麗な美貌の持ち主である。

竜である時のように柔らかな色合いの董色の瞳はアルと同じ、猫のような縦長の瞳孔。澄み切った冬空を思わせる長い髪を頭上で結わえ、金属の髪飾りを幾つも刺していた。

服装は白と紺、青を基調とした装束で袖が長く、全体的にゆったりとした不思議な作りだ。芸術品のような美しさはアルに通じるものがある。

「やっぱり、ウイスタリアも人になれるんだね」

「でも大丈夫なのか？ あいつ、人の姿でもアルが竜だと気付いたんだろ？」

一言も喋らなかつたイクセが顔を上げ、苦い表情を作る。竜は殆ど人の姿を取ることはない。ルカでさえ知らなかつたのだ。なのに青年はアルが竜であると確信していた。

では例えウイスタリアが人の姿を取ってもまた居場所を悟られる

のではないか。イクセはそう言いたいのだろう。

「例え分かったとしても、人に紛れていればまず心配はないだろう。滅竜歌の存在はまだ人の世に知れていない。今はまだその存在を明らかにすもりがない、つまりはそう言うことだ。それに滅竜歌は人には害はないが、植物や自然は違う」

青年の意図はウイスタリアにもアルにもまだ分からない。ただ一つ分かるのは、彼はまだ滅竜歌の存在を秘匿としようとしていること。ならば例え方が一、居場所を知られたとしても人に紛れていれば心配ない。

これからもそうとは限らないが、この空間に留まる方がもっと危険である。

ウイスタリアは近くにあった水晶群にそつと触れた。

すると透明だった水晶が濁り、鈍い輝きに変わったかと思うと、硝子が割れるような音を立てて砕け散る。マナとマナの繋がりを破壊する滅竜歌が全ての原因だ。

闇に連なる者（後書き）

次章で第四奏、終了になります。

一時の別れ

『ご安心下さい。主の事はこの身に代えましてもお守り致します』

「駄目だよ！ 自分を犠牲にしてもウイスタリアは喜ばないよ。自分の身もウイスタリアも守って」

イシュリアが言う通り、自分の命を捨ててもウイスタリアを守るだろう。それは眷属の宿命であり、意味でもあるのだが、ルカは嫌なのだ。

誰かのために自分の命を捨てる。では残されたものは？

イシュリアはそれでいいかもしれない。

だが残されたウイスタリアはどう思うだろう。誰かのために自分を犠牲にする。そんな悲しい考えは嫌だった。イシュリアが生きていなければ意味がない。

「ルカの言う通りだ。我はそんな事のためにお前を作った訳ではない」

頂垂れるイシュリアにウイスタリアは言う。永遠に近い時を生き、世界を見守る始竜は孤独だ。だからウイスタリアは己の力を割いてイシュリアを作り出した。イシュリアは言わばウイスタリアの子であり、半身でもある。

イシュリアに確立した自我を与えたのも彼が望んだ事。

ウイスタリアは優しい手つきで眷属の頭を撫でた。彼女の死はウイスタリア死と同じ事。

『主様……承知しました。ルカ様も申し訳ありません』

主のために、それがイシュリアの存在意義。自らを犠牲にするこ
とと存在意義とはまた別なのだ。ルカは主は自分の身を犠牲にする
ことを望んでいないと言った。主もその通りだと。

自分も守って主も守る。ルカの一言はすんなりとイシュリアの中
に入ってくる。今まではずっと、身を呈して主を守ればそれでい
いと思っていた。

「しかしその格好は……どうしたのだ？ すまない。あまりに似合
いすぎていたのではな」

ウイスタリアは口元を手で押さえ、笑いを堪えながら問う。今ま
で我慢していたのだらうが、何も笑うことは無いだらう。ルカにし
てみればずっと我慢してもらいたいものである。

民族衣装を纏い、つけ毛をつけたルカはどこからどう見ても少女
にしか見えない。似合いすぎている、の一言に機嫌を悪くしたルカ
の頭をイクセが撫でる。

「こいつにも色々事情があったんだよ」

「いいから早く出よう。イクセだって具合、あんまりよくないでし
よ？」

顔を上げたルカは笑っていなかった。へらりと笑っていたイクセ
の顔が驚きに変わる。

それから直ぐにばつの悪そうな顔になって頭を掻いた。アルはま
だしも、ルカに気付かれるとはイクセも思わなかったからだ。

意外と敏い少年に誤魔化しが通用しないのは分かっている。

「……悪い、正直吐きそうだ」

イクセはどうにか笑ってみせるが、激しい頭痛と吐き気は前に訪れた時より更に酷い。最悪な気分だ。

演技には自信があったから、何とか隠し通せるかと思ったがルカの方が一枚上手だったらしい。

頭痛と吐き気はどちらかと言うと、あの青年を前にしてから。

彼が滅竜歌の歌い手であったことが関係しているのか。どちらにしても最悪であることには変わりない。

「馬鹿者！！ それを早く言え！」

「まあ、大丈夫かなと……」

アルはイクセの胸ぐらを掴んで強引に引き寄せる。非の付け所のない顔立ちは間近で見ても美しい。夜の女王そのものであるかのような金色の瞳は、彼の怒りを表すように爛々と輝いていた。

まさかアルがここまで怒るとはイクセも予想出来ず、対応に困るいつも冷静で、どこか人を喰ったような態度の彼がルカ以外の人間に感情を露にするととは。

「ちよ、揺らすな。死ぬ、死ぬって」

呆然とアルを見つめていると、がくがくと襟を掴まれ揺すられる。イクセは真つ青になりながら必死で訴えた。口調はいつもの彼らしく軽いものではあるが、無理をしていることには変わりない。

こう見えてイクセが強情だとルカが知ったのはつい最近である。

「だから言っただろう。早く言えとな。皆、私の側に。直ぐに飛ぶぞ」

アルは大きいため息をついた後、何やら呟いた。

瞬間、一行の視界は光に塗り潰される。

目を開ければそこは、ルカたちが駆け込んだグラディウスの路地だった。舞い上がる砂埃と濁いた空気がそれを教えてくれる。あまりに突然の出来事にルカもイクセもいまいち状況が掴みきれない。

「……………戻って来た、のか？」

呟くイクセの顔色はまだ悪いものの、水晶の洞窟にいた時よりはずっと良い。

ルカたちの隣には人の姿になったウイスタリアとイシユリアの姿もある。水晶の翼を背負った銀狼はかなり目立つ。ルカたちの体で隠れているものの、下手をすれば魔物と間違えられてしまうかもしれない。

「みただね。イクセ、大丈夫？」

「まあ、な。さっきよか全然マシ」

ルカの声にイクセは深い息をつく。先ほどまではまるで、水の中にでもいるような感じだったが、頭痛も吐き気も嘘のように治まっている。

未だ気分は悪いが、それももう殆ど感じない。イクセを見ていたアルが頭を押さえながらため息をつく。

「イクセル、お前はもう少し賢明な奴だと思っていたが？」

「でもさ、アルはイク兄を心配して言ってるんだよね。それくらい僕にも分かるよ」

眉間に皺を寄せて睨むアルを見て、ルーアがくすりと笑う。アルは確かに人間を好いている訳ではない。

しかし人の中にもルカやイクセルのような人間がいることを知っている。ただの人間のためではなく、友をアルは心配しているのだ。

「アルは素直じゃないからね」

すると堪えきれなくなったのか、ルカも声を上げて笑う。彼が実は心配性で他人思いであることはルカが一番よく知っていた。それを表に出さないだけで。

アルはというと、かなり不本意であるらしい。素直じゃないのはイクセも同じだと言うように視線を向けていたが、当然のごとくイクセに無視された。

「素直じゃなくて悪かったな」

「貴公がそんなにムキになるのは見たことがないが」

まるで子供のように不機嫌になったアルに、ウイスタリアも笑った。昔の彼とは本当に比べ物にならない。ウイスタリアが知る、そして記憶に残る『白銀の君』とはまったく違う。ルカが彼を変えたのだろう。

一人だけ釈然としないアルだけが、むすつとした顔でそっぽを向いたのは、また別の話である。

「ウイスタリアとイシュリアはどうするの？」

「我とイシュリアはしばらく旅をしようと思う。力を取り戻し……あの者の目的も探らねば。名残惜しいが別れの時だ」

人の姿を取り、人に紛れていれば簡単に襲われることはないだろう。その間に失った魔力を取り戻し、滅竜歌を操る者の目的を探らなければならぬ。

あの人間が何故“あれ”について知っているのか分からないが、人が知るべきことではないのだ。

滅竜歌の歌い手ということも合わせると、やはり何らかの関係があるのだろう。滅竜歌の存在を知るのは一握りの存在のみ。

「……そっか。でも気をつけて。何かあったら遠慮なく言ってね」

「そうだ。私たちには死ねぬ理由がある。あまり無理はするな」

腕を組み、真剣に語るアルの表情は変わらないものの、彼は彼なりに心配しているらしい。そしてウイスタリアもそれをよく分かっていた。

アルカディアの万象を司る始竜は簡単には死ねない。この世界で生きることと『』が役目。

世界の監視者とも言える彼らは、自らの死の恐ろしさを十分に理解していた。アルの意外な気遣いにウイスタリアは小さく笑う。

「言われずとも理解してる。心配せずとも貴公の足手まといにはならない。ウイシュリア」

『はい』

ウイシュリアは狼の姿をしているが、熊ほどの体躯と光を封じ込めた翼のせいで、ここが路地でなければ確実に目立っている。

次に目を向けた時、ウイスタリアの傍らに立っていたのは狼ではない。まるで透き通った氷を思わせる、綺麗な顔立ちの女性だった。

肩より僅かに伸びた髪はアルよりも暗い、灰色に近い銀色で、切れ長の瞳は紫掛かった青色。

服装はシンプルな金属の具足に籠手、腰には一振りの剣を差している。鎧は付けていないが、軽装の剣士と言った感じだろうか。いや、ウイスタリアを守る騎士のよう。

「これなら心配いりません。私が主を守ってみせます」

「へえ、眷属でも人型になれるんだね」

「ええ、ウイスタリア様の眷属ですから」

感心した風のルーアに、若い女性となったイシュリアが答える。始竜は自らの力を別け与え、眷属を作ることがある。

しかし人の姿を取るといっものは、古の知識を受け継いでいるルーアでさえ知らないことだ。一見してもまるで見分けがつかない。どこからどう見ても人間だ。それこそ、ルーアと変わらぬほどに。

「では行くか、イシュリア」

「はい、主様」

連れ立って歩く二人はさながら主と彼に仕える騎士か。

不思議な雰囲気青年と女剣士とは、妙な組み合わせと言えなくもないが、心配はないだろう。仮にもウイスタリアは始竜であり、イシュリアは彼の眷属なのだから。

「気をつけるよ」

「アルのいう通り、無茶だけは駄目だからね」

イクセとルカの声に振り返ったイシュリアが会釈をし、ウイスタリアは片手を上げて答える。何かあればアルが異変を感じるだろうし、ルカは彼の竜笛を持っている。

ルカは二人の姿が見えなくなるまで、手を振り続けていた。

第四奏 了

一時の別れ（後書き）

四奏、終了しました。次章は引き裂かれた絆、になります。

歌に隠された秘密

自分はこの子のために何が出来るのだろうか。ありとあらゆるものからルカを守りたかった。彼を害するもの全てから。それは竜がただ一人の人間に向けるにはあまりに大きな感情。

本来なら始まりの竜であるアルは世界に、ただ一人のヒトや竜に干渉してはならない。監視者とも言える存在だ。

もし二つの種族が滅びを選択するのなら、それはそれで仕方ないことなのだろう。

しかし千年も昔に失伝したはずの滅竜歌を操る人間が残した“闇に連なりし者”との言葉。

もし、その言葉に偽りがなければなら、アルたち始竜に責任がある。彼には真相を確かめる義務があるのだ。ルカのために出来ること、それは『アルカディア』を守ることもある。

ルカの屈託のない笑顔を見て、アルの心は揺らぎそうになった。自分の行動がどれほどルカを傷付けるのか痛いほどにアルは理解している。

それでもやらなければならない事が『アルトウル』にはある。

『すまない……こんな選択しか出来ない私を許してくれ。いや、許せとは言わない。私はアルトウルという存在の前に“始竜”なのだ。これ以上、私達の事情にルカを巻き込むわけにはいかない』

その時までには、ルカにもイクセにも、勿論ルーアにも気付かれる訳にはいかない。具体的な言葉こそ交わさなかったが、ウイスタリアも自分と同じ考えではないのだろうか。

この決断はまるで半身を引き裂かれるくらい辛かった。叶うことなら始竜としての役割など捨ててしまいたかった。

分かっている。一時の感情に任せて全てを投げ出すことなど出来るはずがない。これほどまでに自分が始竜であることを呪ったことなどなかった。

竜ではなく、ただの竜であつたなら、ずっと彼の傍にいられただろつに。

それが叶わぬ願い、絵空事だと知りながらアルはウイスタリアとイシュリアを見送るルカを見て微笑んだ。せめて優しいルカに悟られぬように。

グラディウスの街が見えなくなつてから、ウイスタリアは振り返る。照りつける太陽に、果てしなく続く砂の海と、澄み渡る青い空。人間であるなら、うだる様な暑さであつたが、竜であるウイスタリアとその眷属であるイシュリアは殆ど暑さを感じない。二人とも平然としていた。

ウイスタリアにつられるようにイシュリアも後ろを見た。人の目だと分からないが、彼らの目にはしっかりとグラディウスの街が見える。

人の世に出るのは本当に久しぶりだ。ウイスタリアは本当なら、生まれて五百年ほど。成体であるが竜としては若い。

だが彼には若い竜にはない、どこか老成した雰囲気がある。それは始竜としての蓄積された記憶のためでウイスタリア自身のものではない。

受け継がれた記憶と自分の目で見、感じるものはやはり違つのだ。記憶は所詮、他人が書いた日記を読むようなもの。彼自身の経験

ではない。

「何処に行こうか、イシュリア？」

「主が行かれる所ならどこへでもお供致します」

向き直ったウイスタリアが背後を歩く彼女に尋ねる。人間の街を転々とすれば、あの人間も簡単には自分達を見つけられないだろう。それにしても、生真面目に返すイシュリアに、ウイスタリアは思わず笑みを零した。それでこそイシュリアだ。

かつてはイシュリアの傍らに彼がいた。シャーレン。もう一人の眷属。もはや世界へと還った彼がいたのなら、何と云っていただろう。

「それでは答えにならないだろう」

「も、申し訳ありません」

呆れたように笑いながら、ウイスタリアは別れたばかりのルカを思う。

最後に見たアル　白銀の君の表情が、頭から離れない。思いつめたような、それでいて何かを決心したような顔。

ウイスタリアには彼の心を窺い知ることには出来ないが、嫌な予感がした。

アルにはルカがいる。あの子を悲しませることだけは……。

「主様？　如何されましたか？」

主の僅かな変化に気付いたイシュリアが、訝しげに主を見る。そんなイシュリアに、ウイスタリアは直ぐに不安そうな顔を打ち消す

と真っ直ぐ前を見た。

「何でもない。行くぞ、イシュリア」

「御意に」

柔らかい砂を踏みしめ、渴いた風を受け、二人は再び歩き出す。ウイスタリアとイシュリアのようにアルとルカの間にも強い絆がある。自分が心配するほどの事ではないのだろう。それでも願わずにはいられない。

どうか二人の絆が引き裂かれることのないように、ウイスタリアは世界を去った神に祈った。

結局、リリスの元に戻ったルカたちは、言うまでもなくこっぴどり絞られた。しかも抜け出した本当の理由も言えないため、怒られ損ではないだろうか。

神祈祭まで日がないことから、ルカは毎日練習に明け暮れていた。朝も昼も関係なく、だ。

依頼を受けた以上、中途半端には出来ないという矜持もある。ルカは文句も言わずに練習していた。

「ルカの奴、張り切ってるな」

練習風景を目にしたイクセは、感心したように呟いた。

隣には同じく感嘆の声を上げるルーアに、彼の肩に乗ったアル。今日は人の姿ではなく、見慣れた竜の姿だ。

『しかしこの歌、魔歌に似ている……』

「あ、アルも思った？ 何だか魔歌特有の『音』が混ざっているのかな？」

魔歌が魔歌足たりえる結びの詩は入っていないものの、この旋律は魔歌に通じるところがある。人の耳ではほぼ気付かない。竜である彼だからこそ気付いたのだ。

勝手に二人で納得している竜たちの会話は、イクセにはさっぱり

である。魔歌についてそう知識がある訳でもないし、アルとルーアにはついていけない。

「はあ、人間には分からない音ってか？」

『そういうことだ。まあ、殆どの、だがな』

「分かったから頭に乗るなって」

眉を八の字に曲げるイクセに、アルは素っ気ない返事をする。つまりは会話に入ってくるなということか。

ルーアの肩に乗っていたアルが、イクセの頭の上に乗った。アルは見た目は小さいが、結構な重さである。しかもアルが乗るのは決まって頭だ。

せめて肩にして欲しい。何だってイクセだけ頭なのだろう。はげたらうは冗談だが、少しだけ将来が不安になったイクセである。

『仕方ないな』

ふー、と深いため息をついたアルは、イクセから（正確には彼の頭から）離れた。

仕方ないって言うより当たり前だ、とつつこみたい衝動に駆られたが、ここは我慢。余計なことを言っつて馬鹿にされるのは目にみえている。

「あ、ルカ兄、来たよ！」

ルーアの声につられるように前を見れば、ルカがこちらに歩いてくる。

今日の練習は終わったらしい。祭りまで一週間を切っていること

もあり、ルカは少しだけ疲れているように見えた。

「練習終わったの？」

「うん、今日のはね」

『練習もいいが、あまり根を詰めるな。倒れては元も子もないぞ』

心配そうな顔をするアルは、既にルーアの肩に戻っている。ルカは例え疲れていても、自分からは何も言わない。

今だって連日の練習で疲れているだろうに。この勢いだと倒れるまで弱音は吐かないだろう。

十年以上も共に過ごして来たアルには分かる。

「うん、ごめん、ちゃんと休むよ。あのさ、アル、今俺が歌ってた歌って、魔歌に似てないかな？」

「ごめん、と謝ったルカはルーアの肩に乗ったアルに尋ねる。ここ最近、練習ですつと歌っていて気付いたことだ。

具体的に何が、とは言えないが、そんな気がした。博識なアルならもしか、と思って聞いたのだが。

すると何故かイクセが驚いた顔をする。

「あ、ルカ兄も気付いた？ 流石だね」

驚きで何も言えないイクセを尻目に、ルーアは瞳を輝かせ、アルは満足気に頷いている。

イクセの記憶が正しければ、アルは殆ど人に分からない音だと言っていないかったか。

どうやら常人は色んな意味でイクセ一人のようである。イクセは

ルカの両肩に手を乗せ、にっこり微笑んだ。

「ルカ。お前、ホントに人間か？ 俺にはさっぱりだ」

「イクセつてば酷いな。俺はれっきとした人間だよ」

ルカは唇を尖らせて、四歳上の青年を見上げる。人間以外の何に見えるのだろうか。

するとルーアの肩に乗っていたアルが飛び上がり、イクセの頭を蹴った。

あだ、つと悲鳴が上がるがアルは気にしない。そのままちゃっかりと彼の頭に腰をおろす。

『ほぼだと言っただろう、イクセル。人には聞こえない等と私は一言も言っていない』

「まあ、アル、その辺にしてあげて。話を戻すけど、あの歌ってもしかして魔歌として組み立てられるかなって思ったんだ」

リリスが言っていたが、神祈祭は元々、神に雨を降らせてもらうためのもの。

つまり、あの歌こそ雨乞いの歌であり、歌っていた歌姫は元は魔奏士だったのかもしれない。

そしてこれはルカがアルから学んだことだが、高位の魔歌はただ歌うだけでは発動しない。

雨を降らせるための魔歌は、時を経ることについてしか、普通の歌になってしまったのではないのだろうか。

『恐らく可能だろう。だがあの歌を魔歌として組み立てるのは骨が折れるぞ。もとある魔歌をアレンジするのなら兎も角、あの歌は殆

ど魔歌の原形を留めていない』

唸るようにいうアルが言うように、歌となってしまうたものを、魔歌として組み立てるのは容易ではない。

一から魔歌を作り出すことと同意義だ。魔歌の詩はただの詩ではない。詩の中には効果範囲から制御方まで魔歌を操るために必要な全てが含まれている。

「そっか……それじゃあ、無理かなあ」

『そう急くな。骨が折れるとは言ったが不可能ではない。私やルーアハがいるのだからな』

残念そうな顔をするルカを見て、アルが得意げに笑う。そもそもアルは始竜。

魔歌の元となった喪歌は初めにアル達、始竜に与えられたものだ。アルが言ったのは、普通の竜や人間であれば、ということである。

「手伝ってくれるの?」

『手伝わぬ訳がないだろう?』

不思議そうに尋ねるルカに、アルは不敵に微笑んだ。

ただ雨を降らせたとしても、グラディウスの乾いた大地には一時の潤いにしかならないだろう。それでも人々に希望を与えられるなら、ルカはやってみたいと思うのだ。何事にも全力で、それが自分、ルカ・エアハートだから。

「もちろん、僕も手伝うからね」

「まあ、俺は大したこと出来ないと思うが一応な」

「ありがとう、みんな」

舞姫と歌姫

そして、神祈祭当日。

グラディウスの街は今までにないくらいに賑わっている。街行く人々は興奮を隠しきれず、地元の者たちでさえ、どこかそわそわしていた。

歌姫を見るためか、大通りは人でごった返しており、慣れていない者なら体調不良を訴えてもおかしくない。

そんな中、アルたちは皆で『歌姫』を待っていた。何でもリリスとアイリーンが、直々に衣装を選んでくれているらしい。ただ、アルとイクセは若干辟易している。

「あれから何分だ？」

呆れたように尋ねるアルは、竜ではなく人の姿である。人の姿の方が目立たないからとの理由ではあるが、整い過ぎた容貌は逆に人目を引く。雪のように白い肌に銀の髪、金の瞳と色素の薄い彼は余計に目立つのだ。

しかし人々がアルに注意を向けることはない。何か特殊な法を使っているのだろう。

「丁度二十分だね。リリスさんたち張り切ってたから、きつとまだ出てこないよ」

答えたのは少女にも見える餍色の髪を持った少年。ルーアである。隣には、待ちくたびれたらしいイクセの姿があった。

今日はルーアに結って貰ったのか、髪は頭の上で纏められている。それでもこの暑さでいつもと変わらぬ黒の上下とは、見ている方が暑くなる装いだ。

「ルカの奴、かわいそうに。今頃、リリスの玩具になってるな。張り切り過ぎてルーアちゃんもどう？　って言われてただろ」

「僕の場合は自分で姿変えられるしねー」

ふふん、と笑ったルーアは凄いでしょ、と胸を張った。

人造竜兵である彼は、自分の姿を自由に換えられる。

人造竜兵は魔水晶を核として作られているが、肉体は竜と同じマナだ。アルが人の姿を取るのと同じように男にも女にもなれる。

ルーアが少年の姿を取っているのは、彼を作ってくれた人間の息子を元に作られているから。

「こんな感じね」

ルーアは周囲を見回してくるり、と一回転をする。すると、どうだろう。ルーアはもう少年ではなかった。

年の頃は十代前半ではなく、ルカと同じ十代半ばほど。髪と瞳は飴色と瑠璃で同じだが、肩より少し長い髪を左右で縛っている。

服装も変わらずストライプのリボンタイに白いシャツ、黒のハーパンツにブーツだ。ただ、どこから見ても『ルーア』は少女だった。

「ほー、成る程な。って誰か見てたらどうすんだよ」

「酷いなー、イク兄、そんなへましないよ」

感心していたイクセだが、慌てて辺りを見回した。幸い気付いた人間はいないらしい。

ルーアが心外だなー、と唇を尖らせる。その仕種は非常に可憐な

のだが、それだけだ。彼女であれ彼であれ、ルーアであることに変わりない。可愛らしいと思わないでもないが、イクセの中で『ルーア』はやはり少年だった。

アルはじゃれ合う二人をよそにグラディウスの街並みに視線を向けている。彼らのやり取りなど耳に入っていないようだが、アルの耳が僅かに動く。

「お待たせ、みんな」

声を弾ませ、鼻息荒く飛び出して来たのは鮮やかな緋色の衣装を纏ったリリスである。普段から目を引く容姿をしているが、今の彼女の比ではない。

美人が更に美人になっていることもあって、周囲からの視線がすごいのだ。

「リリスさんは舞姫だったよね？」

「ええ、舞姫って言っても本来は領主の役割だけど」

首を傾げるルーアは、既に少年の姿に戻っていた。イクセも呆れるくらいの早業である。

彼女は歌姫であるルカとはまた違うが、舞姫（男の場合は舞い手）をつとめることになっていた。神祈祭で舞踏剣を披露するのだ。

本来はグラディウス領主イノセントの役目であるが、どうしても今日に間に合いそうになかったため、リリスが呼び戻されたのだ。

歌姫の代役をルカに頼んだのも、イノセントの代わりに、だろう。

その落ち着きようと美貌から実際の年齢より高く見られること多い彼女だが、リリスはイクセの二つ上、二十一歳をこの間迎えたばかりだ。

「すごく綺麗だよ」

「ありがとう、ルーアちゃん」

今の彼女の姿は舞姫と呼ぶに相応しい。

リリスが纏う緋色の衣装は大胆なスリットが入っており、靴はそれで本当に踊れるのかと思わせるヒールの高さだ。

ルビーを思わせる真紅の髪は頭上で結び上げ、首と手首、足首にそれぞれ、踊る際にしゃらしゃらと音が鳴るように金属の飾りがついた金輪を嵌めている。ふわりと微笑んだリリスはまるで美の女神のよう。

「つとそれより、驚きなさい！ 最高傑作よ！！ さあ、早く出てくるのよ、ルカちゃん」

「ちょ、心の準備くらいさせて下さい！」

さあ、とリリスがルカの手を引くが、扉から見えるのは細い腕だけ。どうやらルカが嫌がって出たくないらしい。それは彼の悲痛な叫びから容易に察することが出来る。

だが現実はそのままで甘くない。ルカの後ろにいたらしいアイリーンが可愛らしく、えーい、とルカの背中を押した。

慣れない靴でも履いていたのだろう。ルカは簡単に引き摺り出されてしまった。現れたのはいつものルカではなく、少女の格好をさせられたルカである。

「わっ！」

「おー、こりゃまた美人さんだな」

イクセが間延びした声で言い、余計に恥ずかしくなったルカは、慌ててリリスの後ろに隠れた。その仕草も非常に初々しくて可愛らしいのだが、一言でも口走ろうものなら、彼の親友兼保護者にどんな目に合わされるかわらない。

深いため息をついたアルがイクセを嗜める。

「あまりルカをからかうな、イクセル」

「からかつてるつもりはないけどな」

イクセがルカを褒めたのはお世辞ではなく、本当に綺麗だったからだ。

抜けるように白い肌はこのグラディウスの地では珍しく、余計に周りからの注目を集めている。うっすらと化粧を施されたルカはリリスが舞姫であるように、歌姫そのものであった。

リリス同様、薄い布で作られた青い衣装は露出度が高く、腕は剥き出しで透き通った白のストールを巻いている。

髪にはルカの瞳と同じ茜色の宝石の髪飾りに、腕と首にはリリスとお揃いの銀輪を嵌めていた。胸は勿論、というか言つまでもなく詰め物だ。

腰近くある長い髪は先になるにつれて、鮮やかな青から深い青のグラデーションになっている。

これはルカの髪と同色の付け毛が見つからなかったためだが、リリスは満足していた。いつもと同じなのは冒険者を示す耳飾りだけで、それ以外はどこからどう見ても少女である。

「リリスさん！」

「まあ、いいじゃない。どうせ嫌でも直ぐに見られるんだし。見られてなんぼよ。こんなもの」

「そうよ、とっても可愛いから大丈夫よ」

笑うリリスとアイリーンは流石親子、そっくりだ。とは言え、可愛いから大丈夫とはどんな理論なのだろう。あのアルでさえ苦笑している。

だが今日までの経験で何を言っても無駄だとルカは理解しているので、何も言わずにがっくりと肩を落とした。

「んー……そうね。ルカちゃんの出番までまだ時間あるし、良かったら回って来たらどうかしら？」

神祈祭のメインは歌姫の歌と舞踏剣であるが、他の地域では見かけない露店や見世物もある。

ルカがエランディア出身だと聞いたアイリーンのささやかな気遣いだ。すると真っ先に反応したのはルカではなく、何とルーアだった。

「行こうよ、ルカ兄！」

「え、あ、ちよつと！ ルーアってば……ていうかこの格好でルカ兄って呼ばれても困るんだけど……」

一応は女の格好をしているのだから、ルーアの発言は色々と誤解を招きかねない。

しかし今の彼にはルカの制止の声もまるで耳に入っていないらしい。ルカの手を取って元気よく駆け出していく。

イクセモアルも予想外のルーアのはしゃぎように、ぼかんと口を

開けて一連の出来事を見つめていた。

「お、俺達も行くか」

「ああ……そうだな」

アルならこの人混みの中でも二人を見失うことはないが、このままルーアを放っておくのは不味い気がする。何せ人が多いし、ルカは『歌姫』なのだ。

アルとイクセは頷き合い、人混みを掻き分けてルカとルーアを追った。

ただそれだけの事

「見て見て！ あれ何！？」

ルーアに連れられたルカは露店を見て回っていた。並ぶ露店でさえ、故郷のエランディアとは違う。全く同じものがない訳ではないが、珍しいものばかりである。

見てみて、と綿飴を指さすルーアは本当に嬉しそうで、ルカもすっかり怒る気が失せてしまった。

考えてみれば千年近くも封印されていたのだから、見るもの全てが珍しいのだろう。故郷を出たばかりの自分と同じではないか。

千年の時を生きた人造竜兵だと言っても、その大半は封印されていたのだ。知識として頭にあっても、ルーア自身が経験したことは少ないはず。今のルーアは長い時を生きた竜ではなく、年相応の少年そのものだ。

「綿飴だよ。欲しい？」

「うん！」

ルカが欲しいと聞けば、瞬時に嬉しそうな声が返ってきた。よほど嬉しかったのだろう。瑠璃色の瞳を輝かせている。数ある露店の中でも人気らしく、その露店の周りだけ人が多い。

ルカはそんな微笑ましい少年を見つつ、露店の主人に一つ下さいと声を掛けた。

「もしかして嬢ちゃん、歌姫様か？」

「あ、はい」

今の格好とルカの容姿は、嫌でも目立つ。滑らかな白磁の肌に海とも空とも違う、神秘的な青の髪。

その色彩はグラディウスの民ではないのに、纏う民族衣装は非常によく似合っている。こんな姿でも人混みに紛れていられるだけまだましか。

戸惑いがちに頷くルカに、男性はにかつと笑うと綿飴を差し出した。きよとんとする二人に構わずに。

「ならお代はいらねえ。さっ、もってきな！」

「え、でも……」

いくら歌姫と言っても自分が嘘をついているかもしれない。勿論、嘘ではないが。

少しくらい疑っても良いと思うのはルカだけだろうか。

おっちゃんは有無を言わずルカに綿飴を握らせた。それも自分とルーア、二人分である。気前が良いというか、グラディウスの民は皆、リリスと同じように豪快らしい。

「ありがとうございます」

ルカも頑張つて、にこやかに笑い返してみる。多少引き攣ったが、そこは許して欲しい。

リリスに散々、ぼろを出すなどが、おしとやかにしていると釘を刺されたからだ。出来れば関わりたくないのが。

そんなルカの思いなど露知らず、男性は照れたような表情を浮かべていた。

「礼はいらねえよ。美人さんの顔が拝めただけで十分さ！」

「はあ……」

白い歯を見せて笑う男性に、ルカは何と言葉を返していいか分からなかった。そう言うものなのだろうか。ルカにしてみれば、自分が美人かどうかなんて分からない。そもそも基準すらよく分かっていないのだから。

ルカにしてみれば“美人”は人になったアルを指す言葉である。美人の基準が高すぎるため、自分をその範疇に入れることが出来ないのだ。

「……ありがとね、ルカ……姉」

二人は男性に礼を言って、近くにあった長椅子に腰を下ろす。綿飴を興味深そうに見つめていたルーアが怖ず怖ずと口を開いた。

ルカ兄と呼ばないのは、先程ルカが言いかけたからだろうが、彼も彼なりに気を使ってくれているらしい。それにしてもそこまで畏まる必要はないと思うのだが。

「急にどうしたの？」

「……僕は本来なら消えているはずだった。でも貴方は、僕も気付かなかった僕の本当の思いを教えてくれた。冷たく、暗いだけの世界から救い出してくれた。……本当に感謝してるんだ」

口をついて出た声は普段の彼よりも少し低い。

誰にも気付かれる事なく消える存在。それがルーアだった。冷たく、暗い水晶の牢獄でただ滅びの時を待つだけだった“モノ”。

だけどルカは自分の声に気付いてくれた。ルーア自身でさえ分からなかった本当の願いを探り当てた。

あまつさえ、ルーアハ「メシア」ラズライトと言う真名さえ与えてくれたのだ。感謝してもしきれない。あの人が生み出してくれた自分にもう一度、命を吹き込んでくれた人。

「……良かった。俺もね、少し迷ってたんだ。ルーアを本当に外の世界に連れ出して良かったのかって」

ルーアの告白を聞いたルカは息を吐き出した後、ぽつりと呟く。初めてあの声を聞いた時、どうにかしなければならぬ。そんな気持ち芽生えたのだ。自分以外誰にも聞こえない声。助けを求め悲痛な声を聞いた時、そう、反射的に助けなければと決意した。

ルーアは人の手により作られた竜、人造竜兵。^{ドラゴン}望まぬまま命を奪い続け、命を絶って欲しいと言っていた。

だけど、もし本当にそうならばルカを呼ばずとも、彼は遠からず消滅するはずだった。それを自身が知らぬはずはないだろう。

「え？」

「ルーアに取って何が最善なのか、だったのか俺には分からない。もしかしたらあのまま、揺り籠で眠っていた方が幸せだったのかも知れない。……違うな。俺は結局、ルーアに人間を嫌いにならないでほしかったんだ」

言いたいことが上手く言えなくて、ルカはもどかしげに己の髪に触れる。

世界は綺麗なものばかりではない。汚いものも、醜いものも存在する。理想郷の名で呼ばれるこの世界、アルカディアには。

正論全てが通る世の中でもなければ、最低な人間だっている。目覚め、自分たちと旅を共にするようになれば、望まずともそんな世界の一面を目にする事になるだろう。

ただでさえ、人竜大戦時に人間に良い印象は抱いていない彼の瞳に、世界はどう映るのか。

夢見た世界とは違う現実には人造竜兵の少年は何を思うだろう。

ルカはただ、ルーアに人を嫌いにならないで欲しかったのだ。綺麗な部分だけを見て欲しいなんて都合がよすぎるのかもしれない。それでもルカは美しい世界を見せたかった。

彼を造った人が愛した世界。それは決して醜いだけではないと言いたかったのだ。

「確かに僕は人間は好きじゃないよ。酷い事をするような人はね。僕にだって分かってる。世界は美しいだけじゃない。光があれば影が出来るように、世界もまた綺麗なものがあれば醜いものもある。表裏一体。それは何にでも存在することだよ」

表裏一体だと言ったルーアは、いつもの無邪気な少年でも、ウィスタリアに名乗った時の威風堂々とした竜でもない。

どこか大人びた、それでいて静かさを宿す瞳は、行き交う人々を見つめている。

ただ、その瞳はここではない、遠くを映しているようだった。今ではない遙か昔、人竜大戦時代だろうか。

「ルーア……」

「だから貴方が気に病むことなんてない。僕は感謝してるって言うたでしょ。勿論貴方だけじゃなく、アルやイク兄にも」

視線をルカに向けたルーアは、晴れやかに笑った。

生きたいと願ったのも、ルカたちと共に行きたいと思ったのも自分だ。誰かに言われたからではない。

だからルカにはそんな顔をして欲しくなかった。あの時、アルに言われたように、ルーア自身が望んだことなのだから。

あの人が愛した世界をこの目で見る事が出来て本当に良かった。それに加え、ルカはルーアに真名を与えてくれた。

「そっか……ありがと、ルーア」

自分が礼を言うのもおかしい気もするが、ルカは嬉しかったのだ。てつきりルーアは人間が嫌いだと思っていたから。

だがルーアはルカが思ったよりも大人だった。千年を生きた竜なのだから当たり前かもしれないが。

笑って礼を言えば、ルーアは不思議そうな顔をして自分を見ている。そんなに変なことだっただろうか。

「ルカ兄がお礼を言うことじゃないよ。だって僕のこと心配してくれたんでしょ？」

「って言うより俺の我がままだけどね」

世界が美しいだけではないように、人もまた良い人間ばかりではない。良い人間もいれば悪い人間もいる。良い悪い、など簡単に言える訳ではないが、人は誰しも心に暗い部分を持っている。それは人が人である限り、どうしてもないこと。竜には醜いばかりの生き物かもしれない。

それでもルカは人間が好きなのだ。だからこれは自分の我がままなのだろう。

苦笑するルカにルーアは言う。

「うっん、そんな事ない。ルカ兄が助けしてくれたから、僕は今、ここに居る。それで十分だよ」

「……凄いなあ、ルーアは。これじゃあ、どっちが励ましてるのか分からないよ。って呼び方、ルカ兄に戻ってるし」

いつもは外見相応の少年なのに、こんな時だけルーアはずっと大人びて見える。ある意味では仕方ないのだろう。ルカは生まれてまだ十五年ちよいで、ルーアは眠っていたとしても千歳なのだ。加えて人と竜では器も違う。

それが少しだけ悔しくて、ルカは思わず話題を逸らした。

「あ、わわわわ。ゴメン、ルカ兄!!」

「だから戻ってるってば!!」

慌てふためくルーアが面白くて、つい意地悪をしたくなる。だってこれくらいいしないと悔しいではないか。

ルカはルーアにはれないよう小さく笑う。と突然、背後から肩を掴まれた。

「こゝら！勝手に走って行くなよ。少しは探す方の身になれって」

「イクセ！それにアルも！」

振り返った先にいたのはイクセとアルだった。

二人には申し訳ないが、ルカもルーアもすっかり忘れていた。話に夢中になっていたからだろう。この人混みの中ではぐれでもしたら大変だ。

ルカとルーアの頭に手を乗せ、さも苦労したと言んばかりのイクセに、背後のアルが呆れたように腕を組む。

「お前は私の後について来たただけだろう」

「うぐっ……」

それを言われると辛いところがある。イクセは思わず言葉に詰まって押し黙った。二人を探し出したのはアルであってイクセではない。

竜の力を持つてすれば、ルカたちを探すことなど造作もないのである。

ただ、位置が分かっても人混みをかき分けるのは一苦労だ。現にアルとイクセも二人の元にたどり着くまで時間が掛かった。

「それより、二人とも、どうかしたか？」

「何でもない。ねっ、ルーア」

「うん。ちょっと話をしただけだよ」

不思議そうに首を傾げるアルを見たルカとルーアは、顔を見合わせて微笑む。

いくらアルでもこればかりは教えられない。今の話は二人だけの秘密なのだ。

君が幸せであるように

竜 天翔る翼持ち強大な力持つ存在^モ
人 脆弱なる存在 深き英知持つ存在^モ
太陽と月 光と影 対極に位置する種族^モ
始竜 始まりの時に誕生せし竜
万象を司る世界の支柱

此の力 何度疎ましく思っただろう
容易く死ねぬ 此の体 何度呪い嘆いただろう

世界が君を忘れても いつか朽ちる其の時も忘れない
この存在を守るためなら何物も惜しくない

あの日交わした約束 果たせない約束
だからせめて願おう 君が幸せであるように
遠い空の下で願おう 例え遙かに遠く離れても

世界かルカか、そう問われればアルは間違いなくルカを選ぶだろう。アルにとっての世界はルカだ。彼こそが世界の象徴だった。

だが『アル』と白銀の君アルトゥールは違う。始竜である自分には責任と使命が付き纏う。投げ出すことは出来ない。それは彼の存在意義であり、贖罪でもあった。

ルカと約束した。此の命在る限り傍にいと。
イクセが言った。本当に大切なら傍にいて守れと。もっともだと思ふ。アルとて叶うならそうしたい。どんなに願っても、あの時とは状況が違うのだ。

それにルカはもう一人ではない。イクセも、ルーアもいる。アルが傍にいれば、ルカは本当に命の危険に晒されるだろう。あの者の狙いは始竜だ。だからこれでいい。

いや、これが正しいことなのかもしれない。いくら心を通わせようと人と竜は違う。異なる存在だ。持ちうる力も流れる時間も違う。自分という存在は人^{ルカ}に不幸しかもたらさないのかもしれない。

「アルー！　おい、アルってば。どうかしたの？　難しい顔しちゃって」

首を傾げてアルを見上げるルカは、十五歳になった。今のルカはロケットの中で微笑むシルフィアと瓜二つだ。もしここにゲイルがいたのなら、大いに驚いていたことだろう。

本当に立派になった。もう自分の助けは必要ないのかもしれない。この辺りが潮時か。

「何てことは無い。考え事をしていただけだ」

「アル」

ルカは他人の感情に聡いところがある。だから彼に悟られないようにアルは小さな笑みを作った。

口を開いたのはルカではなくイクセ。いつも以上に真剣な顔をしていると思うのはアルの気のせいだろうか。

彼はああ見えてかなり鋭い。流石は『紫』の冒険者であるが、今気付かれる訳にはいかなかった。

「どうした？」

「いや、何でもなし。悪かったな」

イクセはアルの顔をじっと見つめた瞬間、首を横に振った。まるで見えない何かを、あるいは不安を振り払うように。

ルカだけではなく、イクセやルーアにも悪いと思う。これはアルの勝手な思いである。彼らに理解して貰おうとも思わない。何故ならアルは『アルトゥール』であり、同胞以外の誰にも理解されない存在であるからだ。

イクセとルカが前を歩く中、ルーアは前を向いたまま、隣のアルに声を掛けた。

「ねえ、アル」

「なんだ？」

答えたアルもまた、視線を前から外さぬまま。

視線を介さずとも、顔を見なくても分かる。分かるという程はつきりしたものではなく、感じると言った方が正しいだろうか。

ルーアの声はいつもの無邪気な少年のものではない。どちらかというと『竜』である彼に近いだろう。

「ルカ兄にとってアルは、何物にも代えられない存在だよ。だからあの人を悲しませないで。人は一人では生きていけない。支えてくれる存在が必要なんだ。勿論、僕やイク兄だってそうだけど、やっぱり一番はアルなんだよ」

アルが何について悩んでいるのか、何を考えているのか、それはルーアにも分からない。それはそうだ。ルーアはルーアであってアルではないのだから。

ルカがどんなにアルを大切に思っているのかは勿論、アルにとってルカが何より大事な存在だと言う事も、ルーアも少しは分かっているつもりだ。

それでも言わずにはいられなかった。

人は一人では生きていけない。孤独というものは全ての生物を襲う恐怖だ。一人きりである事が本当の孤独とは限らない。ルーアやイクセモルカの支えになれているとは思う。

しかし一番はやはり、アルなのだ。人生の殆どを共に過ごしてきた。

「ルーアハ。……分かっている。言われずともな。しかし私は始竜移ろわぬもの。所詮、世界と言う名の牢獄に捕らわれた哀れな小鳥移ろい続ける人と生を共にしたいと願うのは、荒唐無稽な話なのかもしれない」

始竜は世界の万象を司る、強大な力を持つ存在である。その始竜でさえ、世界という大きな檻から見ればちっぽけなものでしかない。何が始まりの時より生きる竜だ。世界という大きな鳥籠から出れずにもがく小鳥ではないか。

世界を創造した神々は、どうして始竜に心を与えたのだろう。心などなければ、これほどまでに苦しむことはなかったはずだ。

半身を引き裂かれるような耐え難い痛みがアルを襲う。

「……違うよ。アルは移ろわぬものなんかじゃない。ルカ兄と出会った事で世界という檻から抜け出し、宿命という鎖から逃れられた

んじゃないの？」

「どう足掻いた所で逃れられはしない。宿命からはな」

自嘲するように、或いは過去を懐かしむようにアルは笑った。それは皮肉にも今まで見た彼のどんな顔よりも人間らしい表情である。愚かにも、例えそれが一瞬であっても、アルはそれを忘れていた。全てを忘れ、全てから逃げ出したいと願ってしまった。外へも羽ばたけぬ哀れな小鳥。

翼があつても飛べはしない。宿命という鎖に捕らわれた時点で、両翼をもがれた鳥と同じなのだ。

リリス。それが私の名だ。本来ならリリスは、あんな形でグラディウスの街を出ることはなかっただろう。グラディウス領主、イノセントの娘である自分はどこかの貴族に嫁いでいたはずだ。

だがリリスはそれが嫌で、グラディウスを飛び出した。父や母が暗に言った訳でも催促された訳でもない。

それでも若い彼女にしてみれば、屋敷は窮屈以外の何物でもなかった。

そんな時だ。アーヴィンに出会ったのは。

彼はなんとリリスと同じグラディウスの民だという。舞踏剣の使い手であった彼は、利き腕に大きな怪我を負い、故郷を出てきたのだと言った。

彼の話では日常生活に問題はないが、とても戦闘に耐えられるような腕ではないと、医師に言われたらしい。リリスはアーヴィンと自分を重ねて見ていた。境遇も故郷を出た理由も違う。しかし居づらくなったという点は同じだったから。

それからはや四年。長いようで短い四年だった。故郷を出て過ごして来た日々を思い出しながら、リリスは多くの観客の前でシャムシールを振るった。

ひゅん、と風を切る音が響く。シャムシールは相対する者の盾を掻い潜り、敵を斬り裂くために作られた剣だ。

グラディウスの砂塵に覆われた大地では身を守るための鎧は役に立たない。そんなものを着込んでしまえば、足を砂に取られ、動くこともままならない。

だからグラディウスの民は戦でも軽装だ。鎧の代わりに防御の手

段として盾を携えるのだが、その盾を掻い潜り、敵に致命傷を与えるためにこの曲刀は作られている。

グラディウスの剣技が舞踏剣と呼ばれる由縁でもあるのだ。そのまま払い、再びシャムシールが空を斬った。

寸分の狂いもない、優雅とも言える流麗な体捌き。それは一朝一夕で身に付くものではない。まるでそれは円舞。舞踏剣と呼ぶに相応しい舞いだった。

彼女がシャムシールを振るう度、腕につけた金環がしゃんと音を立てた。美しく優雅であるが、彼女の剣はただ美しいだけではない。流れるような剣に隠された苛烈さ。時には流れる水のように穏やかに、しかしそれと同時に燃え盛る炎のような苛烈さを含んでいる。

それはただ魅せるだけの剣ではない。一瞬でも目を奪われれば、その刃は容赦なく相対したものの命を奪うだろう。

リリスは剣を振るいながら、見物人に目を向ける。観客の中にルカたちは勿論、驚くべきことにアーヴィンの姿もあった。何も言わずに出て来たというのに、わざわざ駆けつけてくれたのだろうか。

類は友を呼ぶ

「アーヴィンさん？」

ルカたちが彼を見つけたのは、本当に偶然である。何せこの人混みだ。待ち合わせをしていなければ、特定の人物を探し出すことは難しい。

ルカは思わず声を掛けてしまったことを後悔したが、振り向いた青年は思った通りの人物だった。

アルストロメリア支部の受付の一人、アーヴィン。やや癖のある柔らかな亜麻色の髪にアップルグリーンの瞳。顔立ち自体は整っているものの、女性的で穏やかな印象を受ける。動きを阻害しないような軽装で、腰には鞘に納まった一振りの剣を下げていた。

「えーと……イクセにルカ……くん？」

ルカたちを見た彼は文字通り、固まった。アーヴィンの視線がまですイクセに向き、次に女装したルカに移る。

流石にイクセの事は直ぐに分かったようだが、ルカにも気づいたらしい。何度も鮮やかな緑の瞳をしばたかせた彼は、目の前の少女がルカだということに気づいた。

少年の姿であるルカと同じところは耳飾りと、首から下げたアンティークのロケットだけだというのに。

「はい！」

「その格好は……聞くまでもないね。ところで、後のお二人は？」

流石はグラディウスの出身だ。ルカの服装からあらかたの事情を

察したらしい。

アーヴィンの視線の先には、ルカの背後に立つ見慣れない二人。一人は光を受けてキラキラと輝く飴色の髪に瑠璃を思わせる瞳。十代を僅かに過ぎた愛らしい少年である。

もう一人は驚くくらいに整った、整い過ぎた顔立ちの青年だった。年は恐らく、イクセより僅かに上。アーヴィンと同じくらいだろう。

風が吹く度に流れる髪はまるで銀糸。ほつれなど一切なく、光の滝を思わせる。じっくり見なければ分からないが、月を思わせる金の瞳は猫のような縦長の瞳孔をしていた。

ちゃんと目の前にいるというのに、現実味がない。銀と金、至上の色彩を宿した青年は、この世のものではないかのよう。

「ルーアと……アルです」

ルカに紹介されたルーアが軽く会釈する。

アルの方は何も言わないので、きつと話してもいいのだろう。察しの良いアーヴィンなら、ルカの傍に銀色の竜がいないことにもきつと直ぐに気づく。柔和とても荒事が向いているとは思わないけど、受付をしていることだけはあり、その観察力は本物である。ならば変な言い訳をするよりも白状した方が早いと思ったのだ。

「へー……あのアル君がねえ」

「驚かないのか？」

銀髪の青年がアルだと言っても、アーヴィンの態度は変わらない。驚いた様子も一切なかった。

流石のアルも微かに目を見張る。イクセの反応と同じではないか。アルが驚かないのかと問えば、彼は笑顔でこう答える。

「いや、驚いてるよ。驚いてどうにかなる訳でもないから」

それはいつかイクセも言っていた。驚いたってどうにかなる訳じゃないだろう？ と。あれはアルが初めて人の姿を見せた時だ。

アルは呆れを通り越して感心していた。類は友を呼ぶというのは本当らしい。見た目や性格は全く違うが、アーヴィンはやはりイクセの友人である。

「やはりイクセルの友人だな」

「どつという意味だよ」

「言葉通りだが？」

くつくつと喉を鳴らして笑うアルに、イクセは怪訝そうな顔をした。彼にしてみれば何がおかしいのか分からないのだろう。

生憎と『アル』はルカ以外に優しくないので答えてやらない。尚も答えを聞きたいのか、尋ねてくるイクセを横目で見つつ、さあなと返事をしたのだった。

「そう言えばアーヴィンさんはどうしてここに？」

アーヴィンと会えたのは本当に偶然だが、彼は何故ここにいるのだろう。

アルストロメリアからグラディウスまではかなりの距離があるし、里帰りしても受付二人がギルドを空けるのはまずいのではないか。

グラディウスの出身だから、わざわざ神祈祭を見物しに来たとも思えない。

「一応、故郷だし、何よりリリスが気になったから。代役をするって一言も言ってくれなかったから、追いかけて来たんだ」

アーヴィンは若干言いづらそうに頭を掻いている。

グラディウスに戻ってきたのは何年ぶりだろうか。かつて彼は舞踏剣の使い手であった。それも将来を嘱望された。

だがその夢は無残にも砕け散った。ある事故により、利き手が使い物にならなくなったのだ。普通に日常生活を送る分なら問題は無い。

しかしもうこの腕では剣を持って戦うことが出来ないと宣告された。剣を握ることなら出来る。ただそれだけだ。

利き手ではない方の手でも努力をし、訓練をすれば恐らく利き手と同様に剣を振るうことが出来ただろう。

それでもアーヴィンには出来なかった。腫れ物に触るような空気と雰囲気になえられなくなったのだ。同情はいらない。優しさや好意も時としてそれは人を傷つける。

それから故郷を出てからずっと剣を握ることはなく、ルカに助けられたその時に数年振りに剣を握ったのだった。

「なんだ。てつきりお前にも言ってるのかと思ってたけど、違うのか？」

隠しているわけでもないが、それでも二人は恋人同士。性格は正反対で、何もかも違う二人だが、そう言われてみればルカにも納得出来る。

だからイクセもあえて彼には知らせなかった。リリスがアーヴィンに話していると思ひ込んでいたから。

「全然。だから急いで来たんだけど、リリスの出番は終わったのか

な？」

「まだだと思えますよ。俺達も行くところだったんです。一緒に行きましょう」

舞姫が舞踏剣を披露するのも、歌姫が太陽神に捧げる歌を歌うのも、グラディウスの中心部に位置する広場。

リリスの出番が終われば、小休止を挟んでルカの番なので、祭りを堪能したルカたちは早めに広場に向かおうとしていた。その時にアーヴィンの姿を見つめて声を掛けたのだ。

「それにしても凄い人だね。昔はここまで凄くなかったんだけど……」

アーヴィンは少し気圧されたように人混みを見つめていた。広場に向かおうとしているのは彼らだけではない。

人の波は全て広場へと向かっている。もみくちゃにされながら、ゆっくりと前へ進んで行く。

少しでも気を抜けば本当にはぐれてしまう。結局、広場の中心に辿り着いた時には既に舞の奉納が始まっていた。

辺りは驚くくらい、しんと静まり返っており、静寂だけが場を満たしている。

人々の視線の集まる先、舞台の中央にはシャムシールを手に舞うリリスがいた。真紅の衣装を纏い、一心に剣を振るう。紛れもなく見る者全てを魅了する舞姫がそこにはいた。

リリスはまるでシャムシールを自身の手足のように操っている。剣を振るう度に結った髪がリボンのように舞い踊った。華麗や美しいといった言葉でさえ、彼女の舞いを完璧に表現出来るものではない。

リリスの剣は一種の芸術であり、生存という人間の本能により編み出されたものであるこそ、それは人々に感銘を与える。ただ純粹に“生きるため”に特化された剣。それがグラディウスの舞踏剣だ。一瞬でも目を奪われてしまえばシャムシールは、その者の命を刈り取るだろう。美しいだけではない。綺麗な薔薇に刺があるように、舞踏剣は美しさの裏に死を隠し持っている。

だからこそ、舞踏剣は世界でもっとも“美しい”剣技と謳われるのだ。

「これが舞踏剣……」

ルカはこれまでリリスが練習している場面を目にした事があったが、彼女は一度も真剣を持つことはなかった。その意味がやっと理解出来た気がする。

するとルカの考えを読んだようにイクセが言う。

「真剣を持ってこそその舞踏剣だからな」

「純粹な生への欲求。だからこそあの剣は美しい。ルカ、お前と同じだ」

アルはそつとルカの頭に手を乗せる。ふと見上げれば、優しく笑うアルがいた。

記憶に残る今はなき母に似た温かな笑顔。ルカを安心させる、大好きな笑顔。

「え？」

「お前は何よりも純粹であるが故に美しく、あの剣のように真っ直

ぐで曇りない。それはお前の強さだ。だから私はお前に惹かれたのかもしれない。私が持たぬものを持つお前に」

人は己にないものを他人に求めるといだが、それは竜も同じなのかもしれない。ルカの真つ直ぐな心も純粹さもアルには無いものだ。光に惹かれる蛾のように、あるいは蜜に惹かれる蝶のように。だから傍にいたいと願うのかもしれない。この眩しい存在の近くに。

「アル、それはさ、人も竜も同じだよ。違うからこそ、人はそれを求める。おかしいことなんかじゃない。もし全てを持っているのなら、共に生きる必要はないんじゃないかな？」

人も竜も一人では生きていけない。完璧な存在ではないから、全てを持たないからこそ共に生きることが出来る。

完璧であるのなら、寄り添って生きる必要はない。それは人であり、竜であり、始竜だって同じだ。

少なくともルカはそう思う。完璧になんてなれないのだ、なれなくていい。不完全な存在だからではなく、自分たちは世界に生きる“命”であるから。

ナミダアメ

「……ホントにアルはそんな恥ずかしいことさうつと言っよね。感心しちゃうよ。……リリスさんの次だからもう行くね。早く行かないか、あそこまで辿り着けないかも」

ルカは照れた顔を隠すようにアルから顔を背ける。

そろそろリリスの舞も終盤だ。今、ルカたちがいる場所から舞台までさほど距離は無いが、この人混みではどれほどで辿りつけるかわからない。

加えて、ただでさえ歩き慣れていない靴だし、着ている衣装は薄い生地を使っているため、些細なことで破れそうだった。もし破りでもすれば、リリスの雷が落ちることは間違いないだろう。

それだけは何としても避けたいので、細心の注意を払って進んで行くことにする。

「行つてらっしゃい！」

「気をつけてね」

「頑張つて来いよ」

「ルカ、冷静にな。魔歌の本質とは『歌う』ことだ」

「うん、頑張つてくる。ありがとう、みんな」

ルーアが元気よく手を振り、アーヴィンがにこりと微笑む。

イクセがゆるく笑い、アルは優しい眼差しでルカを見た。ルカは

舞に釘付けになる人々を掻き分けて進んで行く。

上手く出来るだろうか。こんな数の観客を前にして歌った経験はない。全て経験したことのないものばかりだった。緊張しているかと問われれば、そうなのかもしれない。

けれど、不思議と怖くはなかった。

アルとルーアと一緒に組み上げた魔歌。恐らく発動はすると思う。一度試した時は問題なかった。

しかしどんなものでも絶対は有り得ない。それでも仮に成功したならば、最高のサプライズになるだろう。

リリスとアイリーンにだけは話したのだが、彼女たちは即座に了承してくれたのである。

勿論、観客や街の人々は知らない。知っているのは自分達だけだ。やれることは全てやった。後はただ祈るのみ。

『万物の母たる水を司る海神ネレウスよ、我が願い聞き届けたまえ』

何度も練習したし、特別なことでもない。いつもと同じように歌えばいい。歌うことは何より好きだから。いや、歌こそが自分とアルを繋ぐものだったから。

ルカは首から下げてあったアンティークのロケットを握り締める。十五歳の誕生日に父から贈られた物。中には自分と両親が描かれた絵が入っている。

見なくてもいい。触れるだけで、一人じゃないと実感できるのだ。大丈夫、きつと上手く行く。

それは奇跡の歌声であった。透明で澄んでいるのは勿論だが、聞く者の心を掴んで離さない何かがある。

グラディウスの民にすれば、聞き慣れた歌だというのに、歌い手が違うだけでここまで違うものなのか。まるで初めて聞いた歌のよう。

この歌い手の歌こそ、神に捧げる歌に相応しい。歌い手は目を伏せ、白い織手を掲げた。

グラディウスでは滅多に見ない海のように青い髪が風に揺れる。歌っているのはまだ十代半ばほどの少女だった。

長い睫毛に縁取られた瞳は、太陽が沈む直前の茜色をしている。透き通るような白い肌はまるで浮き上がっているように見え、それが一層少女の美しさを際立たせていた。

少女はグラディウスの民族衣装でもある薄い青の生地が使われた服を身に纏っている。耳には冒険者であることを表す緑の石が嵌めこまれた耳飾りに、銀鎖がついた年代物のロケット。華奢な腕にはリリスと揃いの銀環を付けており、涼やかな音を立てる。

彼女の声は正に天上の歌声。

それは優しいだけではない。力強く、気高い生命の賛歌。雄大な自然に比べ、人は脆く弱い存在だ。それでも決して媚びることなく、屈することもない。

だからこそ、この歌声は人々の心を惹き付けて離さないのだ。

歌い終わった少女を待つていたのは盛大な拍手と惜しめない歓声。しかし歌が終わると同時に、少女は再び口を開いた。紡がれる不思議な旋律。それがただの歌ではないことを一体、この場にいる何人が気付いただろうか。

少女の足元に展開した強大な水色の魔法陣。それは彼女の足元から、広場全体を覆うように広がった。同じものが澄み渡った空にも顕現する。

魔歌よりも複雑で優美なる紋様。常人には理解出来ない言葉の羅列。それは古代歌の証だ。エンシエントアリア

『……胸に抱く、淡い想いは言葉に。こゝろ儂い言葉は風に流れ、広がる蒼穹そらに辿り着く。言葉は涙に変わり、涙は言葉を地に降ろす。遙かな詩は世界に響き、世界は歌に満たされる。届かぬ心を知るならば、今導きの声に応えよ なみだあめ 泪雨』

ルカが神に祈るための歌を歌い、古代歌を歌い出すのをアルは下から見つめていた。

水晶の鈴を鳴らしたかのように澄んだ透明な、誰もが聞き惚れてしまうほどの玲瓏たる歌声。ルカ自身が楽器であるかのように美しい音色を奏でている。

その歌声は儂いだけでなく、力強ささえ含んでいる。『歌』とい

うものを何よりも深く考える竜アルだからこそ、この歌声の本当の価値が分かるのだ。

多くの聴衆の中では恐らく自分とルーアだけ。歌い終わった後、ルカはアルたちの方を見た。不安と自信が混在した表情のルカにアルは小さく微笑んで頷いた。

『ルカ、お前なら出来る』

『胸に抱く、淡い想いは言葉ことばに。儂い言葉は風に流れ、広がる蒼穹そらに辿り着く。言葉は涙に変わり、涙は言葉を地に降ろす』

舞台の上のルカが微かに笑うと、三人で組み上げた古代歌のフレーズを口にする。詩にも表れているように遙か昔、この地は水不足に喘いでいた。

長い間、干ばつに見舞われ、飲み水さえ手に入らなかった。人々の涙だけがグラディウスの地に染み渡る中、ある者はそれを天罰だと言った。

グラディウスの民が作り出した魔歌は局地的とは言え、天候を操る高度なもの。

それは正に人間が作り上げた古代歌キセキ、人々の願いの完成形。時として強い思いは力となる。

そして人々の涙は雨となってグラディウスの地に降り注いだ。

『遙かな詩は世界に響き、世界は歌に満たされる。届かぬ心を知るならば、今導きの声に応えよ 泪雨』

結びの言葉を口にした瞬間、魔歌が発動した。浮かび上がる強大な魔法陣。今しがたまで澄み渡っていた空を灰色の雲が覆う。

降り出した恵みの雨。初めは小さな雨粒だったが、たちまち大粒

の雨となり、乾いた大地を満たしていった。

この雨は一時的なものでしかない。直ぐに止んでしまう。砂礫の大地に染みこむことなく流れていくだろう。それでも歌姫が雨を呼んだという事実は変わらない。

この雨は確かに街の人々に希望と歓喜を与えることが出来る。突然の出来事に呆然としていた人々の声も、やがて大きな喜びの声へと変わった。

この日、一つの奇跡が起こった。後世にも伝えられるこの一件は『歌姫の奇跡』と呼ばれ、長い間、語り継がれていく事になる。

別れの夜

夜空こそ、この世の全ての神秘を凝縮したもの。朝のような輝きは無く、夕刻のような人の心を打つ物悲しさもない。それでも、夜は朝や昼よりずっと、この世界の美しさを感じる事が出来るだろう。

青や黒、紫が入り混じったそれは、とても一言で言い表すことが出来ない。青であり深い紫であり、黒でもある。

夜色のキャンバスに散りばめられた銀の星屑たち。きらきらと輝く金平糖のようなのに、手を伸ばしても掴むことは出来ない。

夜空や瞬く星々、天に輝く夜の女王。それは決して、人の手では作り出せない大いなるもの。この世界を創造した神々だからこそ成し得た奇跡。

どんなに手を伸ばしても掴むことは叶わない月も星も、まるで自分にとっての人だとアルは思う。

虫達でさえ寝静まった夜。リスが用意してくれたルカの部屋にアルはいた。ルカはベッドの中で健やかな寝息を立てている。

あの後、人々に囲まれたルカは日付が変わるまで宴に付き合い、帰って来たのはついさっきだ。

やはり疲れていたのか、シャワーを浴び、ベッドに潜り込んだ後、数分で眠りについた。

窓から漏れる月の光だけが室内を照らしている。ゆっくりと時間が流れるような感覚にアルは浸っていた。静寂で満たされた夜はとても安心出来る。

容赦無く全てを照らし出す太陽神ソールではなく、遍くものを優しく包む夜の神ノティスの時間だからだろうか。

何にせよ、この世界に神はいない。彼らはアルカディアを創りだすと同時にこの世界から姿を消したのだから。

アルは何をする訳でもなく、ルカを見つめていた。髪を撫でようと手を伸ばす。寸での所でアルの手は止まった。

昨日、ルーアに言われた言葉を思い出したからだ。

『ルカ兄にとってアルは何物にも代えられない存在だよ。だからあの人を悲しませないで。人は一人では生きていけない。支えてくれる存在が必要なんだ。勿論、僕やイク兄だってそうだけど、やっぱり一番はアルなんだよ』

ルカは泣くだろう。イクセはきつと怒る。ルーアは止められなかった己を責めるかもしれない。出来るなら、『ここ』にいたい。だけどそれは叶わぬ願いであるし、アルもこればかりは譲ることは出来ない。

この命在る限り傍にいる、そう誓ったはずなのに、その誓いを果たすことが出来なくなった。

許して欲しいとは言わない。恨んでくれて構わない。自分勝手な行動だと理解している。

いつかイクセが言っていた言葉。

『危険だと言うのならお前が共に居て守ればいい。どうしてそんな簡単な事が分からないんだ。ルカはきつとお前に置いて行かれたと泣くだろう。少しは置いて行かれる者の気持ちを考えたらどうだ』

確かに彼は正しい。危険ならばアルがそばにいて守ればいい。今までなら、何の躊躇いもなく頷いていただろう。置いて行かれる者の気持ちも痛いほど分かっているつもりだった。

始まりの時から今まで、アルトウールはいつも置いていかれる者

であり、数えきれない死を目にして来た。

けれど、あの時とは状況が違う。あの青年が彼の言葉通りの存在であるのなら、ルカだけではない、イクセヤルーアも巻き込む訳にはいかないのだ。

本来なら、今は眠りにについている『彼』に助力を願う方がいいだろう。

いくらアルであっても、滅竜歌の歌い手に一人で挑むのは無謀以外の何物でもない。

だが彼の心には、未だ癒えぬ傷があった。もし青年が本当に『そう』ならば、何と残酷なことか。彼をきつと傷つける。

『始まりの竜、白銀の君アルトゥールの名に於いて命ず。彼の者をあらゆる災厄より護り賜え』

アルはそっと、眠るルカの額に手を当てた。するとルカの体が光に包まれる。

その光もほんの一瞬の事で、室内を照らすのは月明かりだけだった。

ルカに掛けたのは守護の法、と呼ばれるものでアルの力が尽きぬ限り、何者も彼を害することは出来ないだろう。

守護の法と、自分の牙より作り出した魔剣がある限り、ルカに危険が及ぶ事はない。

ルカと出会って十二年、人間にすれば長く、竜にしては瞬きのように短い時間。片時も離れたことがないルカとの別れの時が迫っていた。

「どうかお前が幸せであるように。遠い空の下でもそう願おう。…今までありがとう。ルカ、お前と出会えて本当に良かった」

アルはまるで、今生の別れであるかのような表情をしている。これ以上長居すれば、離れたくなくなってしまふ。唇を噛み締め、踵を返そうとしたその時だ。ルカの手がアルのローブの裾を掴んでいた。起きた訳ではなく、無意識だろう。本当に恐ろしい。

「本当にすまない……。私だけはお前の側から離れぬと誓ったのに……」

アルはルカを起こさないよう、そっと彼の手を解くと、胸の中に渦巻く様々な思いを押し込めて、バルコニーに立った。

少し冷たい夜の風がアルの髪とレースのカーテンを揺らす。ルカが起きる気配はない。

アルはもう一度だけルカを見ると、渦巻く思いを断ち切るよう、静かに銀色の翼を広げ、飛び立って行った。

ルカは深い微睡みの中で何かを感じていた。それが『何』なのか分からなかったが、絶対に手放してはいけない。そんな気がしていた。なのに、離してしまったのだ。

瞼を刺す光にルカはゆっくりと目を開ける。何度か瞬きし、広いベッドから身を起こし、うんと背伸びをした。

昨日、というか今日なのだが、ルカが雨を降らした後、つまり神祈祭の締めくくりの後に盛大な宴が催された。

なんでも歌姫が雨を呼んだ記念、だそうだ。流石に酒は遠慮したが（何故かイクセたちから止められたため）結局、宴が終わったのは日付を跨いだ今日である。

疲れていたこともあり、シャワーを浴びたルカは直ぐに寝入ってしまった。窓から覗く太陽の位置からすると、まだ朝早い時間なのだろう。

「……アル？」

何故か不安になり、親友であり、相棒である竜の名を呼ぶ。返事はなく、部屋のどこにもアルの姿も見当たらなかった。

こんな朝から出かけたとはとても思えない。

それに、彼がルカに何も言わずに出て行くことはなかった。眠る時も、目覚める時も必ず傍にいる。

なのに、アルがいない。不安になったルカはもう一度アルの名を呼ぶが、聞き慣れた声が返ってくることはなかった。

言い知れぬ何かを感じたルカは部屋を出て、隣にあるルーアの部屋に駆け込む。

「ルーア！」

「どうしたの、ルカ兄？」

ルーアは丁度、ベッドから起き出したところだったらしい。眠そうに瑠璃色の瞳を擦っている。ルカとてまだ理解出来ないことを話すのは躊躇われたが、今はどうしようもない。ルーアの他に頼れるのはイクセだけだ。

「アルが居ないんだ。……ルーアは知らない？」

思い切って出した声は、予想以上に震えていた。

まだアルが消えたとは限らない。そう、きつとどこかに出かけているだけ。きつと直ぐに帰って来る。そう信じていたかった。それなのに不安で不安で堪らない。

「え？ 僕は知らないよ。居ないって一体……」

「……うそ」

嘘だと言って欲しかった。

しかしルーアは驚いた顔をしている。本当にアルがどこに行ったのか知らないのだろう。

次の瞬間、ルカは止めるルーアの声も聞かず、弾かれたように走り出していた。

何かを考えるより先にルカは走り出していた。あてがある訳でも手掛かりがある訳でもない。恐らく反射的にだ。

嘘だと、夢だと思いたかった。悪い夢なら今すぐ覚めてほしい。

自分の肩に慣れた重みはない。アルが好きだと言ってくれた特等席。軽すぎる肩に涙が出そうになる。

「アル……」

広すぎる屋敷を出て、グラディウスの街を駆けた。朝早いこともあり、大通りにも人は少ない。露店で賑わっている所もあるが、そこに相棒の姿はない。威勢の良い声も、値切りをする客の声も全て耳に入らなかった。ただ一人の声だけが聞きたいのに。早くルカと呼んで欲しい。

けれど、どんなに探しても、アルの力が感じられなかった。いつだって隣にあった力が感じられない。

どうして、何故。そんな思いだけがルカの心の中を占めていた。足の力が抜け、石畳の上に膝をつく。今は何も考えたくない。

「ルカ……！」

「ごめん、ごめん……」

背後で自分と呼ぶ声。そして肩に置かれたぬくもり。振り返らずとも分かる。イクセとルーアだ。

でも二人の声を聞いてしまえば、何も考えないなんて無理だった。言われずとも分かっている。

いや、分かってしまった。彼は自分の前から去った。それが現実だ。止めたくても止められない。涙がとめどなく溢れてくる。

「ルカ兄……」

悲しげで、戸惑うようなルーアの声。視界が涙で滲む。泣いちゃいけない。

けれど流れ出たものはどう頑張っても止まりそうになかった。み
つともないと思う余裕すらない。

溢れた涙が頬を伝い、点々と地面に跡を残す。

この間から、アルの様子が普段と違うと感じていたのに気付けな
かった。この命ある限り傍にいると約束してくれたから。

否、本当は分かっていたのだ。アルがルカの前から姿を消した。

それはつまり、ルカだけでなく、仲間たちを巻き込まないためだ。
頭では理解している。

けれど理解することと納得することは全く違う。

アルがいない。その事実がルカの心を打ちのめした。

まるで幻のように消えてしまった彼。十年以上傍にいた存在が隣
にいない。心にぽっかりと穴が空いた様だった。

ルカの口から堪えきれない嗚咽が漏れる。

「……ルカ兄、大丈夫、大丈夫だよ」

ルーアは優しく、俯いて涙に暮れる少年を抱き締める。

だがこんな時、何と言えればいいかルーアには分からなかった。

柔らかな感触がルカを包んだ。今はそれが誰かなんて気にする余
裕はない。ただ心のままにルカは泣き続ける。

茜色の瞳から零れ落ちた雫は、昨日の恵みの雨のように静かに石
畳を濡らしていた。

何よりも願うこと

『囀る声は空への憧れ。見渡す瞳は未知への期待。遙か地平の先へ夢馳せる。募る想いはやがて翼となり、穢れなき翼は空に羽撃く。遙かな詩は世界に響き、世界は歌に満たされる。無垢なる願いを知るならば、今導きの声に応えよ 翔翼』

紡ぎかけた詩は少年の、ルカの口内に消えた。

もし彼の居場所が分かるのなら、このまま飛んで行きたかった。どこだろうと関係ない。この背に翼がなくなるとも、竜が操る奇跡^{うた}はそれを可能にする。

知らなかった。隣に誰かがいないだけで、世界がこんなにも寂しいなんて。

自分を導いてくれた一つの光。いつか空を見上げて歌う自分に彼は言った。

『例え遠く離れた何処かにいても、私にはお前の歌が聞こえる』

「ずっと探してた。帰るべき場所は君の元。それでも君はもう居ない。会いたくて。でも会えなくて。ずっと君の名を呼び続けていた。それが例え君に届かないとしても。何度だってこの詩を歌おう。君に届くまで」

気が付けばルカの口は、歌い慣れたメロディを紡ぎ出していた。夕暮れに染まる時計塔、まだ自分が故郷にいた時、彼のためによく歌っていた歌だ。

だがもう、この歌を聞いてくれる存在は自分の傍にはいない。

君はもう居ない。会いたくて。でも会えなくて。詩はまるで自分と彼のようにだった。

苦しくて悲しくて、心が引き裂かれたよう。

「永久に続くはずの約束をした。君のコト、思い続けるから。けどこの思いは幾年起とうとも、変わることはないのでしょうか。恐くて辛くて震えてしまいそう。君は今、どこにいますか。私と同じ空を見上げていますか？ 約束の場所で君のために歌ったアリア。君と繋いだ物語」ストーリー

（ねえ、アル。アルは今、どこにいるの？ 俺と同じ空を見上げてる？ 俺は嫌だよ。これでお別れなんて。アルと紡いだ物語は終わらせない。俺はまだ終焉ラストなんて望まない。必ず探しだしてみせる）

まだ繋がっていると信じたい。大丈夫、落ち着いて。全てアルが教えてくれたこと。

ルカはアルと一緒にいたい。例え命の危険に晒されようとも。傍にいたい、いて欲しい。

だからきつと、アルを見つげよう。だって約束したから。

ルーアの腕の中で暫く泣いた後、ルカは大丈夫だと笑顔で言ったのだ。

痛々しいくらいに目を腫らし、大丈夫だと返すルカに、二人は掛けるべき言葉を見つけれずじやいた。ルーアとイクセに心配を掛けないように無理をしていたのだろう。

こんな時くらい我がままを言ったっていい。理不尽だと泣きじゃくっても仕方がない。

なのに涙を拭いたルカは泣き言一つ言わなかった。アルを責めることもなく、笑っていたのだ。

その後、事情を簡単に話した三人はリリースとアイリーン、アーヴィンに別れを告げ、グラディウスの街を後にした。三人は最後までルカを案じてくれ、自分たちに来ることなら何でも言っただけと言ってくれたのだ。

ルカはそんな彼らにも心配を掛けたくないと言いつつ、申し訳なさをうな顔をした。

本当ならまだグラディウスに留まっていたかったし、リリースとアーヴィンの事情も聞きたかったが、今は正直、頭の中はアルで一杯だった。

『……アルが姿を消したのはきつと、滅竜歌のことにルカ兄を巻き込まないためにだろうね。ごめん、僕が気付いてたら、こんな結果にはならなかったかもしれない』

ぼつりと呟いたルーアは、いつもの少年の姿ではない。延々と続く砂礫の海の上を飛ぶもの、それは猛々しくもあり、優美な竜だった。

太陽の光を弾いて輝く飴色の鱗に力強い金色の両翼は黄金その物であるかのよう。立派な角は黄金色をしており、人の姿と同じく、瑠璃色の瞳は宝石のように煌いている。

アルが姿を消す前、ルーアは妙な胸騒ぎを感じていた。理屈ではない竜の本能。あの時、異変に気付いていればアルを説得出来たかもしれない。

後悔しても仕方のないことだろう。けれど、悔やまれてならなかった。

心のどこかで思っていたのだ。アルがルカを残していくはずがないと。

「謝らないで。誰も悪くないんだよ。でも俺はこのまま納得なんて出来ない。……どんな願いよりアルの傍にいたい、傍にいて欲しい。他は望まないから」

後悔を滲ませるルーアに、ルカはゆるゆると首を振った。

誰も悪くない。本当にそう思うのだ。ルーアもイクセもアルだつて。ルカはアルに会いたい。命の危険より何より、アルがいない事の方が辛いのだ。

きっと自分はアルに依存しているのだろう。彼がいなくても、一人で立たなければならぬ。そう思うのに、目の前が真っ暗になつたかのよう。

何も見えない。アルという色を失っただけで、世界はこんなにも色褪せて見えるのか。

「ルーアの力で探せないのか？ 同じ竜なんだろう？」

『……正直、難しいね。アルはいわば僕より上位の個体だから、気配を隠されれば僕じゃ探せない』

イクセの問いにルーアは目を伏せ、かぶりを振った。

ルーアは竜を元にして作られた人造竜兵だ。ドラクーン竜を超えるための力を与えられ、調整された存在ではあるが、アルは始竜。ルーアには自分より上位の個体だと認識される。

力さえ感じられれば追うことが出来るが、アルがそんなヘマをするはずがない。

ルーアがどんなに感覚を研ぎ澄ませても、アルの力は感じられなかった。

「そうだ！ ウイスタリアならもしかして……」

ルカは弾かれたように顔を上げる。同じ始竜であるウイスタリアならあるいは、アルの力を感じることが出来るかもしれない。青い空と同じ輝きを放つ竜笛を取り出すと、ウイスタリアに呼びかけた。

「ウイスタリア、聞こえる？」

『ルカか？ 何か問題でも？』

竜笛から聞こえたウイスタリアの声。どこか自分を気遣うような響きがアルと重なって、ルカは思わず泣きそうになった。

溢れそうな感情を押し込め、我慢するように唇を噛む。震える声を何とか抑えながらルカは切り出した。

「……アルがいなくなっただんだ」

頭の中に響いた声は僅かに震えていた。付き合いの浅いウイスタリアでさえ分かる少年の変化。

ウイスタリアと繋がっているイシュリアも気付いているようだ。不安そうに細められた青紫の瞳をこちらに向けている。イシュリアも自分もルカに救われた。自分達に出来ることがあるのなら、喜んで彼の力になる。

ウイスタリアが恐れていたことが現実になってしまった。滅竜歌の歌い手である青年を目にした時、アルの様子はおかしかった。

あの時から既に決意していたのかもしれない。分かっているながら何も出来なかった自分に腹が立ち、ウイスタリアは唸り声を上げた。最悪の事態を想定していなかった訳ではない。

だが考えられる最悪の事態は起こってしまった。

『ウイスタリアの力でアルを探せない？』

『本当にすまない。同じ始竜であっても、我には無理だ。竜族の力の源である魔力は血に宿る。生まれて数百年の我ではあの方を追うことは出来ない』

継るようなルカの声に、ウイスタリアは口を開くことを躊躇った。しかしルカに嘘はつけない、つきたくない。

喪歌を操るための力。魔力とは竜の血に宿るものだ。長く生きれば生きるほど、竜の魔力は増す。始まりの時より生きるアルと、生まれて数百年のウイスタリアではその身に秘める力が違い過ぎる。何か手がかりがあれば別だが、彼は何一つ残していかなかった。

『……そっか、ごめんね。無理いつちゃって。俺なら大丈夫だよ。だから心配しないで』

その声からして、明らかに無理をしている。無理をしなくていい。そう言いたかったが、今のルカには何を言っても無駄だろう。

それでもウイスタリアにはアルを責めることも出来なかった。悩み、苦しんだ末に出した結果であることを理解していたから。

失伝したはずの滅竜歌に、それを操る人間。闇に連なる者。やはり『そう』なのか。

彼は、白銀の君はウイスタリアよりずっと、核心に近いものを掴んでいるのかもしれない。

だからこそ彼は何より大切なルカの前から姿を消したのではないだろうか。全てウイスタリアの推測でしかないが、それしか考えられない。

『……我の方も何とか探ってみよう。何か分かったらまた連絡する。ルカ、あの方を連れ戻したいと願うのなら、お前の強い思いが必要になる。かつての我がそうであったように。あの方を探し出して欲しい。あの方自身のためにも』

『主様……』

始竜、白銀の君として、何よりも使命に忠実であった彼。

ルカにアルが必要なように、アルにもルカが必要だとウイスタリ

アは思うのだ。ルカこそ、あの『アルトウール』を変えてくれた存在だから。

悲しみを紛らわせるように

ウイスタリアは言った。アルを連れ戻したいと思うのなら、強い思いが必要になると。

強い思いなら誰にも負けたくない。アルは家族で親友だ。アルが自分を思っただけ離れたことは分かる。考え抜いた結果だということも。

だけど、ルカの考えも聞いて欲しいのだ。ただアルに護られていくだけじゃない。人の力など、ちっぽけでしかないのかもしれない。それでもアルが俺を護りたいと思ってくれるのと同じくらい、ルカもアルを護りたい。

（一人で行くっちゃうのなんて嫌だよ。俺を一人にしないで……置いて行かないで）

砂漠を抜けたルカたちは、魔奏士が集う都市ルシタニアを訪れていた。少しでもアルの情報を集めるためであったのだが、有力な情報は得られなかった。

ギルドでも同様である。銀色の竜は珍しい。もし誰かが目にしていけば、直ぐに分かるはずだ。それなのに銀色の竜の目撃情報もなく、八方塞がりだった。よく考えてみれば、アルがそんな失態を犯すとは思えない。

分かっていたはずだった。ルカはただ、一筋の希望に縋りたかったのだ。

ルシタニアはアルストロメリアほどではないが、大きな都市である。情報を集めるなら、最適と言えるだろう。

街行く人々の殆どは武器を携えている。皆、住人と言うよりは、冒険者や魔奏士だろう。魔歌の研究が盛んであることから、学者のような恰好の者もいた。

イクセは一人、ある場所を目指している。ルカとルーアの姿はない。彼らは彼らで、アルに関する情報を集めていた。手がかりが見つかる可能性は低いが、今のルカはじつとなどしてられないだろう。

大通りから横に逸れ、裏通りに入る。少し横に入ったただけだというのに、やけに薄暗い。雰囲気、いや、空気が違うと言えればいいだろうか。ごみが散乱していることもないし、決して汚れている訳でもない。敷かれた石畳みは薄汚れており、黒に近い灰色をしているが、貧民街よりずっと綺麗だ。

通りには何やら怪しげな店や露店などが並び、どこか乱雑とした印象を受ける。

迷いのない足取りで歩くイクセの前に立ち塞がった少年。彼の口から紡がれたのは、実に魅惑的な声だった。

抗えない魅力を含んだ、聞き入らずにはいられない美しい声。まるで鳥の囀りのようであり、とても人間の声とは思えない。どんな役者でさえ、少年の声を真似することは出来ないだろう。

「よお、《黒呀》。久しぶりだな。俺様を呼び出すなんて相当なこ
とか？」

年の頃はルカよりやや上、十六、七歳ほどだろう。どこか敏捷な猫を思わせる少年だった。

亜麻色の髪はあまり手入れされていないのか、所々跳ねているし、

いささか艶を失っている。モノトーンのキャスケットを被り、薄手のシャツにベージュのスラックスを履いていた。黙っていたら中々整った顔立ちではあるのだが、橙色の瞳は忙しなく周囲を見回している。

武器という武器は殆ど持っておらず、ベルトで二の腕に取り付けた短剣くらいだろう。

「まあな。^{ナイトエンゲイル}“小夜啼鳥”の力を借りたい」

「ふうん。珍しいな。黒呀が俺様を頼るなんて。ま、このリード様にかかればなんてことないぜ」

小夜啼鳥、と呼ばれた少年は満足気な笑みを浮かべた。

イクセが裏通りを訪れたのは彼に会うため。小夜啼鳥の名で呼ばれるリードは、優秀な情報屋である。彼ならばあるいは、アルについて知っているかもしれない。いくら彼が優秀でも、その可能性は限りなく低いのだが。

それでも可能性がある限り、それに縋ってもいいだろう。

「で、何だよ。言ってみな？」

「ああ。……銀色の竜についての情報が欲しい」

「ねえ、ルカ兄、少し休んだ方がいいんじゃない？」

アルが居なくなってもう一週間。ルカは寝る時間も惜しんであらゆる手段を使い、アルを探していた。どんな些細な情報だって構わない。

だがそんな彼の思いとは裏腹に、全くと言っていいほど手掛かりはなかった。

日に日に増していく不安。本当にアルを探し出すことが出来るのか。気がつけば眠ることさえ怖くなっていた。

今もギルドに戻ってきたばかりだというのに、また街に出ようと

している。

「大丈夫、まだいけるよ」

力なく笑うルカはどう考えても大丈夫なようには見えない。イクセとルーアがいくら言っても無駄だった。休んでいるからと、疲れた体に鞭打って、一心不乱に動き続けた。まるでそうすることで悲しみを紛らわせるように。食事すら満足に取ってはいないだろう。もうルカの体は限界だった。顔色は悪く、いつ倒れてもおかしくない。

見かねたルーアは静かに喪歌を紡いだ。

「ルーア、何を……」

『優しき腕かいなに抱かれて眠れ愛し子よ。目覚めにはまだ遠く、現実まことを知るにはまだ早い。今はただ、母なる旋律メロディに身を委ね、深き眠りに沈む時。遙かな咆哮こえは世界に響き、世界は声に満たされる。妙なる響きを知るならば今、我が導きに応えよ 摇篮歌』

瞬間、支えを失ったルカが崩れ落ちる。意識を失った彼の体を、一回り小さなルーアが抱き留めた。こうでもしなければ、ルカは本当に倒れるまで休もうとしなかつただろう。

摇篮歌はいつかルカが歌った潮騒よりも強力なもので、最低三時間は何があっても目を覚ますことはない。

ルーアはルカを抱え、ギルドの二階に上がって彼をベッドに横たえた。

昏々と眠るルカの体にルーアはそつとブランケットを掛ける。イクセがルカに代わり、駆けずり回っているが、期待は出来ない。

アルが本当にルカの傍を離れたのなら、自分に繋がるような手掛

かりは一切残さないだろう。

彼は中途半端なことほしない。それが余計にルカを傷つけることが分かっていたから。

ではどうやってそんな彼を見つけるのか。

分からなかった。どうにも出来ない現実。ルカがそれに気付いていないはずがない。それなのにルカは寝る間も惜しんでアルの行方を探していた。

痛々しくて見ていられない。ルーアに出来ることがあるのなら、何だつてしてあげたかった。

せめて夢の中ではアルと再会出来ればいいのに、とルーアはベッドに腰掛け、眠るルカの髪を優しくすいた。

ルカは、真っ白な世界にいた。自分以外、誰もいない、何も無い空間。呆然と立ち尽くす彼の耳に、無邪気な笑い声が聞こえてくる。子供の、恐らくは少年の声だ。驚き、声ができる方を見れば、そこには五歳ほどの少年と小さな竜がいた。

空の色でも海の色でもない不思議な青い髪に、きらきらと輝く茜色の瞳。中性的な顔立ちとあいまって、少女と見間違えられそうな少年である。そんな少年を眩しげに見つめる銀色の竜。嗚呼、あれは自分とアルだ。

だがその二人はまるで陽炎のように消えてしまう。

次にルカの前に浮かび上がったのはまだ十歳に届かない自分と、特等席であるルカの肩に乗ったアル。

二人はいつものように他愛もない話をしていた。それでも彼等は

嬉しそうで、弾けるような笑い声を上げている。

次々と浮かんでは消えるかつての自分達。父やイクセ、ルーアの姿もあつた。

なくしてから初めて気付いたもの。アルはこんなにも自分の心の中にいた。友人であり、時には父親であつた彼。

彼がいたからルカは寂しさに押しつぶされることはなかった。

「アル、会いたいよ……」

口に出してしまえばもう、抑えられなかった。会いたくて会いたくて堪らない。今すぐアルに会いたい。

挫けそうになる自分に腹が立つて、泣きたくなる。けれど、泣かない。絶対に泣くもんかと齒を食いしばったルカの耳に若い男の声が届いた。

『会いたいか？』

「会いたい、会いたいよ……」

『ならオレが会わせてやろうか？』

その声が誰かなんて考えもしなかった。会いたいかと問う声にルカは強く頷く。

予想もしない至近距離で聞こえた声に驚いて顔を上げると、目の前に二十歳前後の見知らぬ青年が佇んでいる。

目の覚めるような美貌の持ち主。腰まで届く長い髪は揺らめく炎のように鮮やかで、下に行くにつれて橙に近い色をしている。思わず見入ってしまいそうなほど美しい瞳は宝石よりも艶やかなバーガンディ。

すつと伸びた鼻筋に、陶磁器のように滑らかな肌。引き締まった
肢体には余計な筋肉は一切ついていない。

綺麗なアルとはまた違う種類の、だが比べることの出来ない華やかな美貌である。気だるげな雰囲気に加え、何とも言えない色香を含んでおり、同性であろうとも目を向けずにはいられないだろう。

夢の中の訪問者

「……………誰？」

親しげに笑いかけてくる彼には見覚えがない。そもそもこんな青年に会っていれば絶対に忘れない、いや、忘れられないだろう。目の覚めるような美貌はもし女性であれば傾国の美姫と呼ばれるほど。それに、彼はただ美しいだけではない。こうして佇んでいるだけで匂い立つ色気がある。

纏う衣装もルカが目にしたこともない異国情緒溢れるものだ。

真紅の装束には金の鳥が描かれており、今にも飛び立ってしまうのではないか、そう感じられるほど精緻な刺繍だった。

一方、青年の方はルカの口から出た思わぬ言葉に、落胆した様子だ。

そんな顔をされても、知らないのだから思い出せるはずがない。すると何か思いついたのか、青年は一転して笑顔になる。

『本当にオレを覚えていないのか？』

青年の言葉にルカは、はあ、とため息をつく青年の顔をまじまじと観察する。見れば見るほど整いすぎた顔だ。完璧すぎて疑ってしまふ。人が美しいと感じる全てを備えているかのよう。その点からも彼は少しも人間らしくない。その言動や表情の豊かさは実に人間らしいのだが。

優雅でいて、どこか気だるげな仕種は血統書の付いた気まぐれな猫と言った感じだ。

言われて見れば見覚えがあるような、ないような……………。

「……あー！！ リオン兄！」

驚きのあまりもう一度青年の顔を見つめる。やはり間違いない。彼はエランディアを訪れた旅芸人だった。奇術を得意とする彼はルカに様々なものを見せてくれたのだ。

何もない所から白い鳥を出したかと思うと、占いや歌まで奇術師の域を超えていたのをよく覚えていた。

ルカはそんな彼に懐き、時間が許す限り一緒にいた。歌を教えてもらったり、遊んで貰ったりと本当に楽しかった。

青年　リオンは幼いルカがアルの次に懐いた人物であったが、彼がエランディアに滞在したのは僅か十日。

最後の日、普段我が儘を言わないルカが離れたくないと泣いてぐずったのだ。

そんなルカに青年は再会を約束して別れた。もう十年近く前になるだろう。

『ご名答。十年ぶり、ルカ』

見惚れるような華やかな笑みを浮かべたりリオンはルカを力一杯抱きしめ、鮮やかな髪を一房取って口付ける。

まるで女性を相手にするような優雅さに丁寧さで、もしここにイクセがいたのなら、リオンの手つきがいやらしいと言いつつだが、生憎ここには二人しか居ない。

リオンの腕の中は心地よくて、お日様のようにあたたかかった。思わず泣きそうになる。今、ルカが一番欲しいもの。

「でもどうしてリオン兄がここに？ 俺の夢の中でしょ。それに十年前に見た時と全然変わってない」

再会を喜ぶ前に疑問が一つ。何故、夢の中に十年も前に別れたりオンがいるのだろう。リオンのことは今まで何故か思い出せなかったし、夢に見たこともない。

そしてリオンの容姿。十年前の彼しか知らないのだから、納得出来ないこともないが、ここまでスキンシップが好きだっただろうか。不思議そうな顔で見上げてくるルカを見て、リオンは甘く笑った。

『勿論。オレは竜だから。他の始竜からは紅蓮の君、そう呼ばれている。別れの時、真名を教えただろう?』

「……ヴァーミリオン＝フレイア＝フィーニクス。そっか、あれ真名だったんだ」

別れの時、そして真名。この二つの単語を聞いた瞬間、ルカは唐突に全てを思い出した。

ヴァーミリオン＝フレイア＝フィーニクス。それが彼の真なる名。リオンからはお呪いのようなものと聞かされていたあの言葉が彼の真名だったのだ。だから自分は彼にリオンの名を付けた。どうして忘れていたのだろう。あんなに良くしてくれたのに。

『よく出来ました』

「へえ、リオン兄って始竜だったんだ……って本当に!？」

うんうんと頷いていたルカは、自分が発した言葉に驚き、再びリオンを見上げる。

彼はまだしっかりとルカを抱きしめたままだ。見る者を魅了するワインレッドの瞳は悪戯っぽく細められている。

つまり彼はアルやウィスタリアと同じ万象を司る始竜。ならば彼の外見が変わらないのも、夢に現れた理由も説明がつく。

それにしては、今まで出会った始竜たちとリオンは何から何まで正反対だった。神がかり的な美貌を除けば、だが。

『驚いた？ 実はさ、ちよつと居眠りしたら十年経つてたみたいでオレ焦つたよ。いや、本当に美人さんになつちやつて嬉しい』

無邪気に笑うリオンがさらつと口にした一言に、ルカは思わず声を上げそうになった。ちよつと居眠りのレベルではないだろう。

それとも竜にすれば十年など大した時間ではないのかもしれない。普通の竜ではなく、永遠を生きる始竜なら。

『で、オレは勿論、夢じゃない。ルカの夢にお邪魔はしているけど』

ここにいるリオンは、ルカの夢の中の人物ではない。実体でもないが、意識体のようなものである。本当の彼は今も眠りの中にいる。文字通り、夢現の状態なのだ。

しかし、リオンは旧交をあたために来た訳ではない。勿論それもあるが、本当の目的は“彼”のことだ。

聞いて、とても居ても立ってもいられなくなった。同胞は勿論、滅竜歌の歌い手についても。

「でも、どうしてリオン兄が？」

『セレスから全て聞いた。レインのこと、滅竜歌のことも。もう一度聞こう。レインに会いたいのか？』

ルカを見下ろすリオンの表情は、真剣そのものといった感じで、先程の軽さは微塵もない。

少し考えて思い至る。セレスというのはウイスタリアのことだろう。彼の真名はウイスタリア「セレス」ノーザンライツだ。

レインはアルトウル＝レインセル＝シルバーレイ、アルのことか。

何度問われてもルカの思いは変わらない。何度だって言おう。例え声が枯れても叫び続ける。

「……会いたい」

はつきりとそう言い、ルカは真っ直ぐにリオンを見据えた。嘘偽りない自分の本心。

会いたいから会ってはならないのか。アルが自分を想ってそばを離れたのは知っている。けれど、納得は出来ない。

どうしてそれほど思いつめる前に相談してくれなかったのか。否、一番腹が立っているのは自分自身にだ。彼と十年以上、一緒にいたのにアルの苦悩に気づけなかった。大丈夫だと高を括っていたのだ。

『……命の危険に晒されることになっても？』

「うん。だってアルは俺の答えを聞いてもくれなかった。絶対に会って文句言ってやるって決めたから」

リオンの表情は真剣なまま変わらない。

確かにルカとアルは人と竜。持ちうる力も違えば、その身に流れる時間も違う。別れの時はいつかやって来るだろう。

けれどそれはまだ少し先であって欲しいとルカは願うのだ。だからアルに会って文句を言ってやりたかった。勝手にいなくなったことも、一人で全部抱え込んでいたことも。

何故なら、アルはルカの家族で親友なのだから助けたい、力になりたいと思うのは当然ではないか。それにこんな終わりをルカ・エアハートは望まない。

『……いい顔になった。ならオレが言うことは何も無い。会わせてやるよ、レインに』

ルカの答えを聞いたリオンは、ふつと表情を緩ませる。

本当にルカは大きくなった。竜にすれば十年など瞬きのような時間だ。しかし人間は違う。

十年の時は少年を立派な人間へと成長させた。リオンの知るルカよりもずっと大人びた彼をリオンは複雑な気持ちで見据える。

ルカの成長は嬉しい。だが紅蓮の君と呼ばれる彼は、一抹の淋しさを感じていた。人は刹那を生きるからこそ、素直に間違いを認め、成長出来る。それは竜にはない可能性だ。

もつとも、彼のような人間ばかりではないのだが、そんな彼らを含めてリオンは人が好きだった。

『オレも随分と人に感化されたか？』

昔の自分では考えられない想いにリオンは内心、苦笑する。

始竜であるリオンと比べ、人、そして竜でさえも刹那を生きるものだ。

人の世でさえ、彼の興味を引き付けることはない。自分たちは世界を見守るもの。決して運命に干渉してはならないから。

だがかつて自分と同じ始まりの竜でありながら、その禁忌を犯したものがいた。

今はもう亡い、かつて暁闇の君と呼ばれた竜。彼は人竜大戦で失われて行く命を見過ごすことが出来なかったのだ。

確かに始竜の力をもってすれば争いを止めることなど造作もない。ではどこで終わりにすればいい？

自分たちは神ではないのだ。神にはなり得ない。何故なら自分た

ちも不完全な存在であるから。

滅竜歌の歌い手が口にした『闇に連なる者』という言葉。頭では否定しつつも、どうしても思い出してしまふ。そんなこと、あり得ないのに。

「リオン兄？」

突然黙り込んだリオンを案じて声を掛ける。蠱惑的なワインレッドの瞳に宿った何か。それは悲しみだろうか。それとも後悔。そのどれでもないような気もした。

その何かを探し出す前にリオンの姿が揺らぐ。まるで蜃気楼のよう。

『……何でもないよ。ルカ、オレの元へ来い』

「え？」

『渡した竜笛と真名があれば辿り着ける。オレはまだ完全に目覚めていない。今は文字通り、夢うつつな感じ』

本来ならまだ目覚めの時ではなかった。

しかし世界に現れた不穏な影。水面に生まれた小さな波紋。それはやがて世界を揺るがすものとなるかもしれない。ならば、うたた寝を決め込む訳にはいかないだろう。

それに、ルカが彼に会いたい言っているのだ。手を貸さないという選択肢はあり得ない。過保護な彼ほどではないが、リオンもまたルカを大切に思っているから。

『歌い方は人に造られた彼が知っている。待ってるよ、ルカ』

「リオン兄!？」

ルカの髪を梳いていたリオンの姿が透け始める。そこで大きな欠伸をする辺り、やはり自分の知るリオンであった。

ルカの動揺をよそに目に涙を溜めるリオン。それさえ色気に溢れているのだから、もしリオンが異性であったなら、流石のルカも赤面していることだろう。

『あー……ねむ』

「待つてよ、リオン兄!!」

リオンを呼ぶ自分の声でルカは目覚めた。自分の体を確認し、ベッドから身を起こす。部屋には誰もいなかった。イクセもルーアも。頭が少し重い感じがするが、恐らく喪歌の影響だろう。時計を見れば、ルーアと話した時より三時間も経っている。

久しぶりに十分な休息をとったためか、体は羽根のよう、とは言えないものの軽いし、随分すっきりしたような気がした。

小夜啼鳥

リオンと話したことで少しだけ、落ち着くことが出来た。ささくれ立っていた心が嘘のように凧いでいる。胸を突くような焦燥も随分分りました。アルに会いたいという気持ちは変わらない。

いや、以前よりずっと強くなっているだろう。それでもルカの心を満たすのは焦りではなく、温かさだった。

リオンが見せた夢はただの夢ではない。身を起こしたルカの手の中には、炎のように揺らめく菱形の石があった。まるで燃え盛る炎そのものを封じ込めたよう。光の角度によって真紅に見え、時には橙にも見える。首から下げられるように鎖が取り付けられたそれは、石に似てはいるが手触りが違う。

リオンが言っていた竜笛とはこの石のことなのだろう。竜笛と言っても、笛の形を取らない竜笛もある。

この石は確かに別れ際、彼から貰った物だったが、エランディアに置いて来たはずだった。何故、ルカの手の中にあるのか。もしかそれも始竜の力なのかもしれない。

何にせよ、ルーアとイクセを見つけて夢の話をしなければ始まらない。

ルカは竜笛を首から下げ、部屋を出る。ドアノブに手を掛けるルカは、今まで二人に見せていた痛々しい表情ではない。アルがもっとも好きな、彼らしい晴れやかな笑顔だった。

話はルカが目覚める少し前に遡る。暫くルカの寝顔を見ていたルーアだったが、イクセを迎えにくくため宿を出た。紫の冒険者である彼のことだ。心配するだけ無駄だろうし、わざわざルーアが行く必要もないのだろう。

けれど、ルカについて話したかったし、イクセもイクセで疲れていないはずがないのだ。彼はよくやっている。疲れたとは一言も言わないし、ルカを案じながら情報収集を続けていた。

彼がどこに行ったのか、ルーアは知らない。聞かなくても、イクセの魔力を辿れば簡単に分かった。魔力というものは差こそあるものの、アルカディアの民ならば皆が持っているもので、その魔力の波長は人によって違いがある。

よって波長さえ分かれば、その人物を見つけることができるのだ。それは竜でも同じだが、強い力で隠されている場合、ルーアの力を持ってしても探しだすことは出来ない。

ルーアは迷うこと無く大通りから裏通りに足を踏み入れた。外見こそ少年である彼だが、本来は長い時を生きる竜。大の大人でさえ入るのを躊躇う場所にも平気で入っていく。人々は物珍しげにルーアを見つめているが、声を掛けてくる者は一人もいなかった。

怪しげな露店を通り過ぎ、石作りの階段を降りた先、一段低い場所にある扉を開ける。からんからんと扉に取り付けられた鐘が鳴り、店の主人に客の来訪を告げた。

そこは洒落たバーだった。照明はほの暗く、琥珀色の光が店内を優しく照らしている。まだ昼ではあるが、ここにいると夜だと錯覚してしまうだろう。

店主の趣味なのか、カウンターや並べられた椅子、テーブル、その全てが年季の入ったものだ。

陳列された酒瓶は透明や緑、赤など様々で、匂いに敏感なルーア

は思わず顔をしかめた。酒は嫌いではないし、竜は人の酒では酔わないのだが、この匂いだけはいつまで経っても慣れない。おまけに一つや二つではない、数え切れないほどの酒の匂いが混ざっているのだ。

呆気に取られているマスターを素通りして、カウンター席に向かう。そこに座り、グラスを傾けていたのはイクセと見慣れぬ少年だった。恰好からして冒険者ではない。とてもイクセの友人とは思えないが、ルーアが知らないだけだろうか。

名も知らぬ少年の隣に座り、彼らが持つグラスに目を向ける。透明なグラスはオレンジ色の液体で満たされていた。

「何、昼間からお酒飲んでるの、イク兄？」

「……あのな、飲む訳ないだろ」

イクセはルーアを見ても驚いていないらしい。予想していたのだろうか。ねーねー、とからかうように笑うルーアの頭を軽く叩いた。端から見ればイクセが大人気ないように見えるが、ルーアの方がずっと年上だ。二人のやり取りを面白そうに眺めていた少年がグラスをルーアの目の前に持つてくる。

「スクリュー・ドライバーのウオツカ抜きだから大丈夫さ、ルーア君」

「それってただのオレンジジュースだし。って僕の名前……」

少年の声は信じられないくらい透き通った声だった。鳥の轉りのようであり、誰であろうと聞き入らずにはいられない。

スクリュー・ドライバーはウオツカをベースとするカクテルで、

そのスクリユー・ドライバーからウォツカを抜けばただのオレンジジューズである。そこでルーアはたと気づく。

何故、彼が自分の名前を知っているのか。会ったことなどない。ルーアは一度見た顔を忘れないのだから、見間違いはあり得なかった。

驚くルーアをよそに少年は笑っている。すると、イクセが彼の頭に乗っていたキャスケットをはぎ取り、亜麻色の髪をかき回した。

「なに偉そうな顔してんだ。こいつはリード。情報屋だ。俺と一緒にいたから、ルーアの名前を知ってるだけだろ。何せ、ストーカーだからな」

「あのさあ、黒呀。ストーカーって俺様に対して酷くね？ えっと、ルーア君。俺は黒呀が言うように、ナイチンゲル小夜啼鳥の名で呼ばれる情報屋。でも今回ばかりは役に立たなかったんだけど」

「僕はルーア。でもそれは仕方ないんじゃない？ 相手が相手だし」

リードは非常に嫌そうな顔をして、乱れた髪を手櫛で整える。二人は知り合いのようだが、イクセはアルの手がかりを求めて彼を呼び出したのだろう。

しかしいくら優秀な情報屋であっても、ただの人間がアルを探し出すことは不可能に近い。イクセもそれは重々承知しているはず。気落ちしているリードの肩を叩き、気しないほうがいいよ、と笑いかける。

「ルーア君ってばいい子。黒呀にはもつたいないぜ」

「はいはい、そうだな。俺には勿体無いな。じゃあな、リード。ほら、行くぞ、ルーア」

「えー、まだ来たばかりなのに。……分かってるよ。早くルカ兄の所に戻らないとね」

リードは橙色の瞳を煌めかせ、何故か感動したように自分より五歳は年下の少年を見つめていた。

適当に返事をしたイクセはルーアの首根っこを掴んで立ち上がる。リードでも分からないのなら、ギルドで情報が見つかるはずもない。ルカのためにも諦めたくはないが、先が見えないまま、歩き続けるのは辛い。心が先に折れてしまうのだ。

それはルーアもよく理解している。唇を尖らせ、不平を口にしていた彼も一転して真剣な顔になった。

宿にはルカを一人で残してきた。ルーアが一人でやって来たことから、イクセも分かっているだろう。今のルカには休息が必要だ。言っても無駄なら、力づくで休ませるしかない。ルーアはそれを実行したのだろう。そうでなければあの少年は倒れるまで止めない。

イクセは小さくため息をつく、ポケットから取り出したコインをカウンターに置き、バーを後にした。

ヴァーミリオンⅡフレイアⅡフィーニクス

「イク兄もそろそろ休んだ方がいいんじゃない？」

バーを出て、街中を歩くルーアは隣のイクセを見上げる。憔悴している、とまではいかないものの、流石のイクセも疲れは溜まっているに違いない。

睡眠を必要としないルーアは別だが、イクセの方はかなり疲れているはず。いくら紫の冒険者と言えども疲れを知らない訳ではない。ルカが心配なのは分かるが、それでイクセが体を壊したら意味がないではないか。

「大丈夫だ。ルカのためにも早く見つけてやらないと。あんな顔のルカは見たくないからな」

「そうだね……」

イクセは彼にしては珍しく屈託のない笑みを見せ、ルーアの頭を撫でる。子供扱いされるのは好きではないが、イクセにされるのは不思議と嫌ではなかった。

アルのためにもルカのためにも、二人を必ず再会させなければならぬ。どれだけ無謀でもやるしかないのだ。

無理しなくていい。そう言ってやりかけたが、今のルカには逆効果だろう。だから自分に出来ることをやる。それがイクセの思いなのだ。

光が見えない闇の中でもいつかきつと出口は見つかる。止めない雨がないうちに。それに今が最悪なら、少なくともこれ以上悪くなることはないだろう。

楽観的にでも考えなければとてもやっていられない。

次の瞬間、二人の耳に入った声。それは久しぶりに聞く彼の元気な声だった。

「イクセ！ ルーア！」

二人を見つけたルカは、自分でもまだ信じられなかったが、夢の中での出来事を話した。リオンと会ったこと、彼が始竜であることも。信じてくれるだろうか。

恐る恐る二人を見れば、イクセもルーアもルカを安心させるように笑っていた。彼らが居てくれて本当に良かったと心から思う。ルカ一人では耐えられなかった、立ち上がれなかった。

「よし、じゃあ、そのリオンとやらにご対面だな」

「人目に付かないところに行かないとね」

「二人とも……」

二人の気遣いが嬉しくて、思わず泣きそうになってルカは俯く。頼ってはいけないと一人で全部抱え込んでいた。もう一度泣けば自分を抑えられなかったから。癩癩を起こしそうで、それを抑えるのに必死だった。

アルがいなくなり、イクセもルーアも辛くないはずがない。それなのに二人は何よりも自分を気遣ってくれたのだ。周りが見えていなかった自分。情けなくて申し訳なくなる。精一杯だったから、は言い訳に過ぎない。

「行こうぜ。さっとさとアルの奴、連れ戻さないとな」

イクセの大きな手がルカの肩に置かれ、ルーアの華奢な手が優しく手に触れる。温かい。

ありがとう、と泣きそうになりながら礼を言う。

何と言われようが、諦めない。絶対にアルを迎えに行くのだ。一人ではなく、イクセやルーアと一緒に。三人は人通りの少ない路地に入ると、辺りに誰もいないことを確認した。

リオンは言った。自分の元に辿り着く術、歌は人に造られた彼が知っている。それは言うまでもなくルーアだろう。

ルカが問うと、彼は一二もなく頷いた。うん、僕の記憶にあるよ、と。鎖を外し、赤い石を差し出すとルーアは竜笛を手取る。

「行くよ」

『……我が咆哮こえに宿る言霊コトナよ。我が血に応えよ。我が望みし場所、汝が作りし狭間の世界と共に在る事を我は願う。ルーアハ「メシア」ラズライトの名に於いて命ず。我が手に在りし縁を辿り、今此処に異界への扉を開かん』

ルーアは指を噛み切ると、流れ出た鮮血で円を描く。少年が紡いだ言葉はいつか、アルがウイスタリアの元に辿り着くために使ったものと似ている。

魔歌でもなく、喪歌でもなく、古代歌とも少し違う。必ずあるはずの結びの言葉がない不思議な旋律。それは正に歌だ。

血で描いた円が赤い光を放ったかと思うと次の瞬間、ルカたちは魔水晶の洞窟にいた。ウイスタリアが居た場所に似ているが、決定的に違うのは魔水晶の色。

紫の色を帯びたものではない。周囲を埋め尽くすのは、まるで炎その物を封じ込めたように真っ赤に輝く魔水晶だった。

紅色の水晶に囲まれているためか、炎の中にいると錯覚してしま
いそうだ。光の加減によって揺らめく水晶は幻想的で思わず見入っ
てしまいそうになる。

ただ、ウイスタリアの作り出した空間とは違い、不快感を感じる
ことはない。それはイクセも同じようで、壁や地面を見ながらぼつ
りと呟く。

「あの洞窟に似てるな」

「同じ始竜だからね。他の竜に比べて放出するマナは格段に多いし、
ここは隔絶された空間だから力が結晶化されやすいんだ」

イクセの言葉に答えたのは、同じように周囲を見回していたルー
ア。

竜は大気中のマナを糧とするが、同時に微弱だがマナを放出して
いる。特に始竜は他の竜と比べ、格段に放出する量が多いのだ。

しかしそれでも通常、竜の体外でマナが結晶化することはない。
この洞窟は隔絶された空間であり、そこに強い始竜の力が合わさり、
魔水晶を形成しているのだろう。

「ふーん。で、そのリオンとやらはどこにいるんだ？」

「直ぐ近くだと思う。これ見て」

「あ、もしかして、あれ……」

ルカはルーアから返してもらった竜笛を二人に見せる。それはま
るで脈動するかのように明滅を繰り返していた。リオンが近くに
いる証拠だ。

ルーアが指差した先、見上げるほどに巨大な魔水晶の中に『それ』

はいた。

炎に抱かれるようにして眠る竜。ルビーその物であるかのように神秘的に煌く角は、美しいという言葉さえ陳腐に聞こえる。

真紅の鱗は全てを灰燼に帰す焰。鮮やかなだけではない、見る者を圧倒する美しさがある。言うなればそれは暮れなずむ夕空。とても一言で表せるような色ではない。赤であり紅、あるいは緋。

あれが紅蓮の君、ヴァーミリオンⅡフレイアⅡフィーニクス。

「リオン兄……」

ルカが呼んでも真紅の竜はぴくりとも動かない。深い眠りについていからだろうか。

直後、ルカの手の中にある竜笛が眩い光を放った。

目も眩むような閃光に目を開けていられない。光が収まった後、恐る恐る目を開ければ巨大な魔水晶が忽然と消えている。代わりに三人の前に立っていたのは年若い男。

年の頃はイクセと同じかやや上。蠱惑的な瞳は深いワインレッドで、滝のように流れるやくせのある髪は、揺らめく炎のような煌きを放っている。先ほどの竜と同じ、ため息が出るほどの美しさだ。華やかな美貌の持ち主だったが、どこか飄々としており、気まぐれな猫を思わせる雰囲気纏っていた。気だるげに髪を掻き上げる仕草でさえ様になっており、色香が漂っている。

最後の時と、夢であった姿と全く変わらない。兄と慕う青年の姿が目の前にあった。

「リオン兄！」

完全なる滅竜歌

「ルカ！」

紅蓮の君、の名を与えられた青年は、駆け寄ってきたルカを優しく抱きしめる。十年の時を埋めるように、あるいは彼を慰めるように。夢の中とは違う。それよりもずっと確かな質感を持った手が嬉しい。

髪を梳いてくれる手がアルと重なった。見た目は全く違うのに、そんな所は泣きたくなるくらいそっくりだ。やはり同じ始竜だからだろうか。彼は太陽の匂いがする。

「ルカ兄……よかった」

「ああ……」

涙ぐむルーアの肩に、イクセの手が置かれた。あの青年はルカが兄と慕っていた存在だという。アルがいなくなった今、この再会が少しでもルカの心の支えになるのなら喜ばしいことである。

少しだけ寂しく思うが、絆というのは過ごした時間など関係ない。それはイクセとルーアだって同じだ。

少なくとも今のルカには支えが必要だ。それに二人を見ていると、ルーアもイクセもあたたかな気持ちになれた。

「そうそう、自己紹介しないと。オレはヴァーミリオン。リオンでいいから。よろしく、イクセルくん、ルーアくん」

「で、その手はなんだ？」

ルカから身を離し、見惚れるような笑顔を作ったりオンはイクセとルーア、二人の元にやって来ると何の躊躇いもなく抱きついた。純粹に驚くルーアに、紫の瞳を細めてリオンを睨み付けるイクセ。リオンの方はイクセの鋭い視線も全く気にしていないらしい。

暑苦しいと言ってやりたかったが、それどころの話ではなかった。無理やり振りほどこうにもリオンの力が強すぎて不可能だ。見た目は人間でもこの馬鹿力は間違いない竜の力である。

しかしルーアも動けない所を見ると彼がずば抜けて力が強いのか、あるいはただルーアが驚いているだけなのか。

「まあまあ、細かいことは気にしない」

「それにくんは付けなくていい」

イクセは呆れたように華やかな美貌を持つ青年を見据えた。美形はアルで見慣れているし、同性ならばどうということもない。

この年になってくんを付けられるのは遠慮したいし、出来れば離して欲しいのだが。一切身動きが取れない。離せと言っても離すよきな青年ではなさそうだ。

「んー……じゃあイクセとメシアで」

「く、苦しい……」

イクセの正直な感想は、なんだコイツである。皆、アルやウイスタリアと同じような者だと思っていたが、違うらしい。それとも彼らを除く始竜は全員、リオンのようなぶつとんだ性格なのだろうか。

ルーアが苦しげな声を上げているが、青年はお構いなしだ。イクセも自分ではどうにも出来ないので、助けを求めるようにルカを見る。視線を向けられたルカは苦笑しつつ、リオンの背中を叩いた。

「リオン兄、ルーアが窒息するよ」

「お、ごめんごめん。久しぶりすぎて力の調整が……」

「それでどうやってアルを探すんだ？」

リオンはばつの悪そうに頭をかくと、慌てて二人の体を解放した。久しぶりで潰されればこちらが迷惑である。

体を摩りながらイクセが問う。この青年のお陰で危うく本来の目的を忘れるところだったが、自分達はアルの手掛かりを探すためにここを訪れたのだ。それとも同じ始竜なら探せるとでも言うのだろうか。

「慌てない、慌てない。何もしくたってやって来る。エサにつられて、な」

リオンは艶やかに笑っていた。そもそもアルは『自分達の事情』に巻き込まないために、ルカの元から去った。彼が本気で隠れてしまえばリオンであろうと追うことは出来ない。

アルは始竜の中で唯一、始まりの時より生きる者。リオンもアルに次ぐ年長者ではあるが、魔力という点では及ばない。

しかしそんなまどろっこしい事をせずとも、危険は伴うが簡単な方法がある。

「それはどう言う……」

言い掛けたイクセだったが、リオンが彼の唇に人差し指を押し立て、それを遮る。

アルを探すにはもうこの方法しかない。それにルカが言ったのだ。

たとえ命の危険に晒されようともアルに会いたいと。
そしてリオンの読みは当たった。喉を鳴らして妖しく笑う。

「ほら、随分と早いお出ました」

リオンは軽い口調で言うと、三人を庇うように前に出た。何の前触れも無く唐突に現れたのは黒衣の人物だった。身間違えのような滅竜歌の歌い手。

ルカの体が強張る。そう、青年が始竜を狙っているのなら、リオンとて例外ではない。

しかしあまりに早すぎるではないか。

「まさか……」

リオンが言ったエサとはこういうことだったのか。文字通り、エサはリオン自身。

アルが滅竜歌のことがきっかけで姿を消したのなら、当然術者を追うはず。彼を追えないのなら、術者を誘い出せばいい。始竜であるリオンを囿にして。

そしてリオンの読み通り、術者は現れた。アルが現れる保障はないが、恐らく来るだろう。そのために、滅竜歌の歌い手に分かるように力を放出したのだ。わざわざルカたちの気配を悟られないよう、隠蔽までして。

「あんたがセレスが言ってたヤツ、か。なるほど、気味悪いくらい、気配がそっくりだな。さて、洗いざらい吐いて貰おう。何故、始竜を狙う？」

華やかな美貌に、冷たい笑みを浮かべたリオンにも青年は沈黙し

ている。リオンの背に庇われたルカは彼の背中ごしに青年を見つめていた。

先ほどとはうって変わり、リオンは冷静だ。滅竜歌という、本来なら本能が恐れるものを前にしても。

始竜はただの竜ではない。アルカディアの万象を司る存在。普通の人間は自分達の存在すら知らないだろう。なのに何故、リオン達を滅ぼそうとする。何のために？

ただでさえ、彼が死んでから、始竜のサイクルは崩れ始めている。世界の支柱が一つ欠けた状態である今、もう一柱が崩れれば世界は必ず、乱れるだろう。

「この世界に必要ないから、だとすればどうですか？」

「何を馬鹿な……」

くすり、と青年が笑った気配がした。何を馬鹿なとリオンは思う。始竜はアルカディアに必要なだ。それが自分達の存在意義でもあるのだから。

青年が何を思い、その言葉を口にしたのか、今の一言では到底推し量ることが出来ない。

何かの比喩か、果たしてそのままの意味なのか。フードに隠れた顔は見えず、そこから何かを窺うことは出来なかった。

「始竜がいなければ世界は乱れる。そんなことも分からないのか？」

相変わらずリオンの表情は真剣そのもの。ワインレッドの瞳も射抜くように目の前の人物を見つめている。

まるで試すような口調に黒衣の人物はこう言い返した。

「乱れるだけで滅びはしない。始竜などこの世界に必要ない」

口に出された声音と口調は別人のようだった。先ほどの柔らかさは欠片もない。全てを拒絶し、否定するようなもの。

リオンは訝しげに眉を寄せる。ルカたちも状況を見守ることしか出来なかった。

しかしあまりに静か過ぎて逆に不気味に思える。身構えたその瞬間、青年が動いた。

『夜天牢』

「ルカ！」

膨れ上がる魔力。リオンが咄嗟に声を上げたが、間に合わない。

それは正に一瞬の出来事だった。ルカ、イクセ、ルーアの三人は半透明の闇色のドームに捕らわれていた。

ルカは急いで魔歌を歌おうとするが、そこで致命的なことに気付く。

声が出ないのだ。慌てて二人を見れば、ルーアは喉に手を当てて首を振り、イクセは困ったように笑って両手をあげてみせる。

声が出なければ魔歌は歌えない。向こうの声は聞こえるが、この半透明のドームが音を封じているのだ。

「なら、答えは一つ。まだ死ぬつもりも予定もないんでね」

リオンを中心にして膨れ上がる強大な力、集束する火のMana。

空中都市でアルが星天楼を歌った時のようにリオンの体も赤く発光している。都市すら消し去る力を持つ始竜。彼らが本気を出せばいくら滅竜歌を操る者と言えど、分が悪いのではないか。

だが青年は笑っていた。本当に愉快だとも言つように。

「まだ分からないのか？」

彼の言葉を見殺し、力を練り上げようとしたリオンは愕然と自らの体を眺めた。体がまるで金縛りにあったように動かないではないか。

ルーアとリオンには分かった。次に紡がれた歌は、ウイスタリアの時とは違い、完全なる滅竜歌だと。

『血塗れの刃は我が手中。四散せしは幾千の叫びにして幾万の嘆き。世界を埋める幾億の慟哭。白は緋へと染まり、真紅の涙が流れ行く。遙かな詩は世界より途絶え、世界は滅びに満たされる。昏き破滅を知るならば、今逆の証を立てよ 滅竜歌』

譲れない一線

青年の口から紡がれたのは紛れも無く滅竜歌である。それも完全なる。リオンとてまともに受ければ無事では済まない。

リオンは咄嗟に魔力障壁を張ってそれを防いだが、滅竜歌には十分とは言えなかった。滅竜歌はマナとマナの繋がり破壊する歌。現に炎の色をした障壁はいとも簡単に碎け散る。

反射的に体を捻ってかわしたが、右腕に鋭い痛みが走った。

「ぐっ……」

ほんの僅かに掠っただけだと言うのに、もう右腕の感覚がない。力なく、だらりと下がった腕からは鮮血が滴り、流れ落ちた赤が血溜まりを作っていた。竜の回復力を持つてすれば、この程度の傷はすぐに治癒するはずだった。それが滅竜歌で受けた傷でなければ。

ルカは血が滲むほど強く唇を噛み締めて、リオンを見つめていた。自分は見ていることしか出来ないのか。リオンが傷つき、血を流しているようにも。

ルカがどんなに拳を叩き付けようとも障壁はびくともしない。ルーアの、竜の力を持ってしても破壊出来ないのなら、結果は分かりきっている。

それでもこのまま、指をくわえて見ていることなど、ルカには出来なかった。どうにかしなければと思うのに何も思いつかない。

もうどうにもならないのかと思ったその時、腰にあるジークルーネが眩く輝いた。

魔剣ジークルーネ。これは始竜であるアルトウールの牙より作り

出された剣だ。ルカは引き寄せられるように剣を抜き、障壁に向けて一閃した。

刹那、視界を覆っていたドームが一瞬で碎け散る。ジークルーネを包んでいた光は銀色。アルの色だ。

「一体何がどうなったんだ？」

解放されたイクセに聞かれても、ルカとて分からない。

答えを求めようとジークルーネを見ても、役目を果たしたとばかりに沈黙していた。銀色の光も既に収まっている。

「リオン兄！」

「もう理解しただろう？ 紅蓮。『我』が何者であるか分からぬお前ではない。いつまで目を背けているつもりだ。紅蓮と白銀、お前達が『我』を滅ぼしたのだから」

黒衣の青年はルカ達には目もくれない。膝をつき、右腕を押さえ、リオンを冷たく見下ろしていた。永久凍土よりも冷ややかな声に含まれるのは紛れも無い憎悪。

リオンの前に佇む人物は自分からフードを剥ぎ取った。

下から表れたのはやはり青年。夜闇を思わせる艶やかな黒髪に、リオンを見下ろす紫水晶の瞳には虚無と憎しみが漂っていた。

顔立ちは恐ろしく整っており、笑ってもいないことから酷薄な印象を受ける。ルーアはあれと同じ瞳を知っていた。あれは自分を戦わせた研究者たちと同じ目だ。

だが驚くべきはそこではない。青年の顔は双子か、まるで鏡に映ったイクセ自身であるかのようにイクセにそっくりだった。

「うそ……イクセ」

目の前の青年はイクセそのものと言っている。違う所を見つかる方が難しいだろう。黒曜石を砕いたような黒の髪も、紫水晶を思わせる瞳も同じ。

けれど、その瞳に宿るものはイクセとはあまりに違う。深い憎しみ、そして悲しみが渦巻いている。

顔色一つ変えない青年に対して、イクセの方は驚愕に目を見開き、ただ彼を見つめることしか出来なかった。

「何か言い残す事は？」

俯いたまま、リオンは何も言わない。いや、何も言えなかった。

リオンとアルが彼を滅ぼした。そうだ。そうするしか道はなかった。何故なら、リオンはリオンである前に始竜であり、自分達は神ではないから。

なのに、『彼』は違った。望んでしまった、願ってしまった。

沈黙するリオンに青年は無言で左手を翳し、旋律を紡ぐ。

「リオン兄！」

ルカの呼び掛けにもリオンは動かない。イクセも動ける状況ではないし、ルーアも完全に滅竜歌がもたらす恐怖に吞まれている。滅竜歌の本質を理解しているが故に、ルーアは動く事が出来なかった。人間の体には一切影響を及ぼす事はないが、竜は違う。滅竜歌は純粋なマナで構成された竜族の体を内側から破壊するからだ。

ルカは走りだし、必死で魔歌を紡いだ。間に合うか、いや、間に合わせる。

『氷煌盾』

滅竜歌がリオンの体を捉える瞬間、彼の前に顕現した氷の盾。マナの結びつきを破壊する滅竜歌には時間稼ぎにしかならないが、それで十分だった。

盾が一瞬で砕け散り、氷片が舞い踊る。

「リオン兄！」

「ルカ兄！」

滑り込むようにリオンと青年の間に割って入った。思わぬ乱入者に青年が眉をひそめる。

ルアが悲鳴に近い声を上げるが、それでもルカは動かなかった。臆することなく茜色の瞳で青年を見上げる。

「死にたいのか、人の子よ」

まるでお前など簡単に殺せる、そんな口ぶりだった。

魂まで凍らせるような声に恐怖が沸き上がるが、気持ちだけは負けないよう、青年を睨みつける。怖くないはずがない。体は小刻みに震えているし、立っているだけで精一杯だ。

けれどそれ以上にリオンを見殺しになんて出来るはずがないのだ。

「死にたくなんてない。でも、前にも言ったでしょう。俺の大切なものを傷つけるなら許さないって。俺では貴方には敵わないかもしれない。けど、それでも譲れないものがあるんだ」

大切なものを傷つけるなら、どんな相手だって許さない。

自分の力では、きっと彼に敵わないだろう。こうして向かい合っているだけで、肌が泡立つよう。それでもルカの中で譲れない一

線があるのだ。

立ち塞がり、真つ直ぐに自分を見つめてくる少年に青年は笑った。それは獰猛な、それでいてどこか悲しげな笑みだった。

その笑みは何を意味しているのだろう。憎しみの裏に隠された感情を窺い知ることが出来ない。

悲しげな笑みを浮かべたのはほんの瞬きの間だけだった。すぐに青年の表情は冷ややかなものに戻っている。

「その心意気は買うが、私の前に立ち塞がるというのなら容赦はない。せめてもの情けだ。紅蓮共々一瞬で終わらせてやろう」

何か目に見えない力で押さえつけられたように体が重い。ルカは立っていられずに膝をついた。

だがそれでも鉛のように重い体を引きずってリオンの傍まで行き、庇うように抱きしめる。飛び出そうとしたルーアも、青年が手をかざした瞬間、地面に膝をつく。

「貴方に見してみれば……馬鹿らしいことなのかもしれない。けど、貴方には……絶対に分からない」

彼が何者であるかは知らないが、退く訳にはいかない。大切なものを失いたくないのだ。

強大な力を持つ青年に見れば、わざわざ命を捨てるなど馬鹿らしいと思うかもしれない。だからきつとあの人には分からない。ルカのこの思いは。

「何とでもいうがいい。これで……終わりだ」

石でもなつたかのように体が動かない。声を出すだけでも辛い

に、これでは魔歌なんてとても歌えなかった。もう駄目なのか……。
リオンを抱きしめたまま、ル力はぎゅっと目を瞑った。

『アル……』

心の中で彼の名を呼ぶ。刹那、炸裂する光。轟音と共に視界を覆った銀色の光。いつまで経っても衝撃も痛みもやってこない。

恐る恐る目を開ければ、ル力は自分の体が銀色の燐光を纏っていることに気付く。未だ体は重かったが、そんなことに気にならなかつた。

「守護の法か、小賢しい」

ル力を見た青年が秀麗な顔を歪めて呟く。

守護の法、聞いたことはなかったが、一つだけ確信できたことがある。このあたたかな銀色の光は間違いなくアルの力だ。

そう思えば胸があつくなる。恐らくは自分の元を離れる時にかけてくれたのだろう。

その時、今まで微動だにしなかったリオンの目が動く。ワインレッドの瞳は宝石よりも力強く輝いていた。

「……確かにお前を滅ぼしたのはオレとレインだ。だがそれを後悔したことなど、一度としてない。分かっているだろ、オレたちは神じゃない！」

リオンが言い放った直後、ル力を圧迫していた力が呆気無く消える。これもリオンの力なのだろう。

リオンは思う。自分達は確かに神に等しき存在なのかもしれない。しかし神ではないのだ。自分達はあくまでこの世界、『アルカディア』を見守るものであり、導くものではない。

世界は既に創造主の手から離れ、一人で歩き出している。間違っ
こともあるだろう。悲しみや苦しみだつてある。

美しいものばかりでもない。むしろ綺麗なものの方が少ないだろ
う。

だがそれは世界に生きる人と竜が背負い、自らで消化せねばなら
ないもの。それを奪う権利など誰にも、神にだつてないのだ。

異なる存在である限り

『だから……お前には分からない！ 獄炎陣』

リオンが左手を掲げた瞬間、青年を囲むように広がる黒き炎。その名が示すように、まるで地獄で燃え盛る炎のよう。リオンの髪の色にも似た炎は容赦なく洞窟を包み込み、赤く染め上げた。

あまりの熱気に呼吸をするのさえ苦しい。胸を押さえるルカの手をリオンが掴む。

「ほら、呆けてないで逃げるぞ！」

走り出したリオンは、呆然とするイクセとルーアの服を掴んでひよい、と担ぎ上げる。右手はルカの手を掴んだままだ。

手を引かれたまま、ルカはちらりと後方に目を向けるが、見えるのは灼熱の炎の海だけ。青年の姿は見当たらない。

ルカの耳には朗々と歌い上げるリオンの声だけが聞こえていた。

『水面^{みなも}に波紋、拡がるが如く満ちる力^{マナ}よ。我が望みし場所、人と竜が共生^{いき}し世界と共に在る事を我は願う。紅蓮の名に於いて命ずる。我が証たる真名　ヴァーミリオンⅡフレイアⅡフィーニクスを以つて鍵とせん。現世^{うつしよ}へと繋がる扉よ、今開け』

ルカの視界を真っ白な光が覆う。

思わず目を閉じ、次に目を開けた時には既に魔導都市と呼ばれるルシタニアに立っていた。ルカたちが滞在していた街だ。

勿論、あの青年の姿もないし、魔力の気配もない。張り詰めていた緊張がとけたのかルカは足の力が抜け、地面に座り込んだ。

今になって恐怖が沸き上がってくる。自分はなんて存在に逆らおうとしたのだろう。

“あれ”は人の身では決して敵わない。理解の範疇を超えている。人の姿をしているのに、人ではないような。

「大丈夫か？」

「う、うん」

尋ねるリオンに、ルカは頷くことしか出来ない。それはイクセとルーアも同じようで、イクセにいたっては思い詰めた顔で石畳みを見つめている。

普段の彼からは想像出来ないが、“あれ”を見せつけられたことを考えると無理もない。自分たちの及ばぬところで何かが起こっているような気がしてならない。

ルカだって未だ混乱しているのだ。様々な事が一度に起こりすぎて、頭がついていかなかった。

「場所を変えた方がいい……。全てはそれからだ」

ルカもイクセも、ルーアもリオンの言葉に従うしかない。

だからこそ、彼がここではない“どこか”を見つめていた事に誰も気付かなかった。

どうしてこうなってしまったのだろう。何を間違ってしまったのだろう。『彼』が言った言葉が頭から離れない。

『もう理解しただろう？ 紅蓮。』『我』が何者であるか分からぬ前ではない。いつまで目を背けているつもりだ。紅蓮と白銀、お前達が『我』を滅ぼしたのだから』

そうだ。そうするしか方法がなかった。リオンはリオンである前に始竜である。

だがどんな理由があれ、リオンが彼を手にかけたのは事実だ。言い訳は許されない。彼の命を絶つことが自分に出来る唯一のことだった。

あれから千年。彼がいない世界をリオンは見守り続けた。彼の代わりに。傷付き、血を流す心を無視して。

呆然とする三人を宿屋まで送った後、リオンはただ一人、路地裏にいた。裏通りよりも薄汚れており、乱雑としている。高い塀に囲まれているせいか、夜でもないのに薄暗い。大の大人でも足を踏み入れることを躊躇うだろう。

リオン以外、人の姿はない。いるとすれば鼠くらいだ。そんな中、リオンは虚空を見つめたまま、何者かに問いかける。

「……分かってる。そこに居るんだろう？」

問いと言うよりは確認なのだろう。リオンはここに自分以外の誰かがいると確信しているようだった。路地裏はしんと静まり返っている。誰かが現れる気配もない。

それでも彼は路地裏から動こうとしない。沈黙が数十秒続いた後、ため息をつき、もう一度『彼』に呼びかけた。

「レイン。いい加減にしないとオレは本気で怒る」

バーガンデイの瞳が鋭さを帯びる。殺気とまではいかないが、決してルカの前では見せない表情だ。すると観念したかのように、銀髪の青年が現れた。

薄暗い路地裏でも煌めく長い銀色の髪は紡がれた銀糸のようで、それ自体がほのかに光を放つ金色の瞳。非のつけどころのない美貌に、幾重にも重ねられた白の外套を身に付けている。顔立ちは全く違うというのに、彼とリオンはどこか似ていた。この世のものではないかのような美貌か、それとも別の何かか。

青年は間違いなく、ルカの前から姿を消したはずのアルだった。

「気付いていたのか」

「当然。気付かない程、オレは馬鹿じゃない」

微かに驚きの混ざったアルの声に、リオンは事もなげに言った。始竜の中ではこう見えてもアルに次ぐ力を持っているし、彼は気付いていないだろうが、力がただ漏れである。余程ルカの事が心配だったのではないだろうか。

守護の法を掛けていたことにも驚いたが、何よりアルは“あれ”が誰か気付いていたというのか。だからこそルカの前から姿を消したと。

もしそうならば、リオンにはアルを責めることは出来ない。

「なあ、レイン。全て分かったのか？ だからルカの前から姿を消したのか？」

アルから答えはない。しかし沈黙こそが肯定だった。

では何故、自分を目覚めさせなかったのだ。青年が言った通り、彼を滅ぼしたのはリオンとアル。

始竜という鎖に縛られている以上、アル一人で何が出来るというのだろう。滅竜歌を前にすれば、アルとて無事では済まないことは百も承知のはず。

黙ったままのアルにリオンは続ける。

「何故オレを目覚めさせなかった？ それにゼフィヤセレスだっているだろう」

今日覚めている始竜は、リオンとアルを含めて四人。白銀の君
アルトウール、紅蓮の君　ヴァーミリオン、蒼穹の君　ウイ
スタリア、風天の君　シルフィード。

始竜である限り、自分達では青年を退けることは出来ても、倒すことは出来ない。それでも助力を求めることは出来るだろう。一人で相対するよりずっと懸命なはずだ。

「ああ、だが覚醒してもいないお前を巻き込みたくはなかった。蒼穹や風天にしても生まれて千年も経たぬ命。危険に晒すわけにはいかない」

アルはリオンに言われるまでもなく理解していた。彼らを強制的に目覚めさせることは可能だ。

しかしそれは危険を伴うし、目覚めている蒼穹と風天はまだ始竜としては未成熟。加えて蒼穹は一度、滅竜歌を受けたのだ。

始まりの時より生きる白銀の名にかけても、彼らを滅竜歌の危険には晒せない。

「レイン……」

「だからルカを頼む。……お前になら任せられる」

アルは金色の目を伏せ、リオンに向けて頭を下げた。

彼が誰かに頭を下げる。そんな場面など、リオンは目にしたことがない。それだけ彼にとってルカが大事だということだろう。ならば何故、そばにいてやらない。

リオンはアルの胸ぐらを掴み、静かな声で言った。

「なら傍にいてやれ。分かるだろ、レイン。お前には」

ルカがどんなにアルと共に在りたいと思っているか。自分などが言わずとも、アルは理解しているはずだ。今のルカは痛々しく見ていられない。

始竜の役目は分かる。けれど、彼はリオンのような過ちを犯してならないのだ。

「……それは出来ない」

「何故!?!」

「それは私とルカ。人と竜が共に生きる限り、いつか至る道であったからだ」

アルは正面からリオンを見つめる。生命力溢れるバーガンディの瞳は怒りに揺れていた。

いつか至る道。そう、例え心を通わせても、竜じゅうんと人ルカは所詮、別の生き物なのだ。

始竜はきつと人に不幸しかもたらさない。別れの時が早いか遅いかだけのこと。夢の時間はもう終わった。現実に戻る時だ。

「それは……」

リオンはそれ以上、何も言えなかった。アルの言葉は真理とも言える。人と竜、寄り添いながら生きてきた二つの種族。その中にも越えられない壁が、越えてはならない一線がある。つかず離れず、それが本来の距離なのだ。

だが自分は、アルトウルはそれを忘れ、人ルカに近付きすぎた。だからこれは罰なのである。始竜の背負うべき使命と罪を忘れた自分への。

「レインの言うことは正しい。けど、ルカの気持ちはどうなる？」

あの子は言った。レインに会うためなら、命の危険に曝されても構わないと。……あの子の気持ちを踏みにじるのか?」

「そんなつもりは……」

ルカの気持ちや踏みにじるつもりはなかった。

ただ、守りたかっただけ。出来るならそばにいたかった。ルカの成長を見届けたかった。始竜であることを忘れられたらどんなに楽しかったか。

もしアルがただの竜であったなら、彼に寄り添うことが出来ただろう。

しかしアルは始竜だ。それは変えようがない。では自分はどうすれば良かったのか。

此の命、尽きよつとも

イクセやルーアと共に宿屋へと戻ったルカだが、ルーアは兎も角、イクセは一言も喋ろうとはしなかった。部屋に閉じこもったまま、出てくる気配もない。

滅竜歌の歌い手であった青年は、イクセと瓜二つだった。違う箇所を見つける方が難しい。まるで双子のよう。ルカも当然、気になつてはいたが、宿屋に向かう途中も、イクセが口を開くことはなかった。何かを知っている、と言うよりは何を言っていていいか分からない。そんな感じだろうか。

何にせよ、今は彼から話を聞くことは出来ない。待つしかないのだろう。

歌い手の青年は姿を現したが、結局アルは現れなかった。リオンの読みが外れたのだろうか。それでも彼を責めることは出来ない。それよりも、心配なのはリオンの方だ。滅竜歌で受けた傷は治したが、決して浅い傷ではない。出来るなら、体を休めた方がいいし、あの青年とのことも気になる。何も無いように振舞ってはいても、平気なはずがなかった。

リオンがどこにいるのかは分からないが、ルカには竜笛がある。それによって自分と彼は繋がっているのだ。ルカはイクセをルーアに任せると、リオンを探して路地裏に足を踏み入れる。

ルカの視界に入ったのはリオンと銀髪の青年だった。言い合う二人を見て、その場から動くことが出来ない。体が石になったかのよう。

「同じだよ。ルカのことを思うなら、離れるべきじゃなかった。どんな思いでレインを探していたか」

「アル！」

リオンが自分を思っただけで言ってくれるのは嬉しい。

だがもう我慢出来なかった。どうかこれ以上、アルを責めないで欲しい。走り出したルカは正面からアルの胸に飛び込む。

アルは戸惑い、驚きながらルカを抱き留め、鋭く細めた金色の瞳をリオンに向けた。

「ルカ！？ 何故……紅蓮、貴様……」

「オレじゃない。そう睨むなよ」

「アル、嫌だよ。いかないで、俺を一人にしないで」

二度と離さぬよう、ルカはアルを力一杯抱きしめる。離れていた時間はほんの一週間程度だろう。なのに、半身が引き裂かれたかのように辛い。

ルカは確かに「一人」ではなかった。イクセやルーアがそばにいてくれた。けれど、喪失感は埋めようがない。心にぽっかりと穴が空いたようで、アルがいない世界は色褪せて見えた。

「ルカ……」

下した決断は間違っていない。アルは今の今までは、そう思っていたのに。

しかし、しがみついて泣きじゃくるルカを見て、分からなくなつた。

選んだ道は、間違っていないのだと思っていた。ルカも分かってくれるだろう、と。けれど、それは一方的な押し付けでしかなかった。

ただ。

こんなにもルカを悲しませてしまった自分に怒りを覚える。何故、こんな簡単なことに気付かなかったのだろう。リオンの言う通りだ。気付かなかったとはいえ、アルはルカの気持ちを踏みにじったのだ。

「……何でもするから、だからどこにも行かないで」

涙が止まらない。堰をきったように溢れてくる。ルカはアルにしがみついたまま、涙が枯れるまで泣き続けていた。みつともないとか、格好悪いとか、考える暇もない。

アルの姿を見てしまえば、我慢など出来なかった。

ずっと隣にいた誰かがいないだけで、こんなにも世界は淋しい。ルカのそばにはイクセヤルア、リオンだっただけでいてくれる。

だけど、駄目だ。誰もアルの代わりにはならないし、なって欲しいとも思わない。

アルがいい、アルでなければ嫌なのだ。我が儘なのかもしれないが、それがルカの“答え”だから。

「分かったろ、レイン。いい加減にしないと、地獄の果てまで追いかけるぞ」

ワインレッドの瞳を細め、冗談めかした笑みを浮かべるリオン。戸惑うようにルカを抱きしめていたアルは何も言えなかった。

あるいは、正しい答えなど、始めから存在しなかったのではないか。これは正しいのだと、自らに言い聞かせて逃げていた。どんなに取り繕っても無駄だ。

「私は……」

言いかけて口ごもる。本当にルカのことを思うなら、どうすればよかったのだろう。必死に、縋りつくように自分を抱きしめる少年を、アルは自から手放そうとしたのだ。

いつかイクセが言ったように、そばにいて守ればよかったのか。人と竜の考えは違う。ルカから離れることが、最善の道であったはずだった。

「アルは嫌？ 嫌なら大人しく諦めるよ」

流れる涙を拭い、ルカは長身の青年を見上げた。口に出した声は震えている。本当は離れたくない。

けれど、アルが嫌だと言うのなら、ルカに止める術はないのだ。彼がルカの前から去ったように、必要とあらばアルは何度でもその選択をするだろう。

「……私の想いは変わらない。今一度誓おう。此の命尽き、魂すら燃え果てようともお前と共に在ることを」

アルはそつと、ルカの目尻に溜まった涙を掬う。許されないことなのかもしれない。始竜であるアルがただ一人の人間と共にいることは。

初めて彼を見た時、ただ純粹に美しいと思った。海よりも青く、空よりも鮮やかな魂に心惹かれた。だからアルは、アルトゥールはその魂と共にありたいと願ったのだ。

何と罵られても構わない。もうルカを悲しませるのは嫌だから。

かつてのアルはアルトゥールの前に始竜なのだと思い込むようにしていた。でなければ自分の役目を忘れてしまいそうだったから。

だが違つのだ。やっと理解出来た。白銀の君、アルトウール・レイセル、シルバーレイである前に、アルはこの世界に生きるただ一つの命、『アル』なのだ。

「うん、うん」

ルカは何度も頷き、アルの手に触れる。その手は少しだけ冷たい。それでも夢ではない、幻でもないのだ。アルが目の前にいる。

本当は怖くて堪らなかつた。アルが再び、自分の前からいなくなると思えば。

ルカにとつてアルは世界であり、全てだつた。あるいは父であり、母であり、兄でもあつたのかもしれない。

彼を介してルカは世界に触れた。アルがいなければ今の自分は無い。だから彼に否定される事が何よりも怖かつた。そばにいたい、そう願うのは罪なのだろうか。

「アル、俺は大丈夫だよ。自分の身くらい自分で守れる。だから」

竜は偽りを言わない。彼らは人に比べ、信頼した相手にはとても真摯なのだ。

アルが一度交わした約束を違えてまで、ルカの傍を離れたのは、相当な葛藤があつたのだろう。だから怖い。アルは自分のせいでルカに危険が及ぶと分かつたら、躊躇いなく身を退くだろう。

例え命の危険に晒されるとしても、ルカはそれを望まない。危険だつていい。アルのそばにいたい、そばにいて欲しい。だつて家族と共にいるのに、理由なんていらぬはず。

「ああ、今になってやっと分かつた。結局、私は何一つ、分かつていなかつたようだ」

アルは優しく笑い、ルカの青い髪を撫でる。ルカのためだと自分に言い聞かせて、考えることを止めていた。もう大切なものを、自分を救ってくれたためくもりを、手放したりはしない。

片方の手で髪を撫で、もう片方の手でゆっくりと少年の背中を摩る。『一人』がどんなに寂しいか、ルカが一番よく知っているというのに、何て馬鹿だったのだろう。

顔を上げたルカは、何度も何度もアルの胸を叩く。自分たちがどれだけ心配したと思っているのか。

「アルの馬鹿！ 勝手にいなくなったりして、イクセモルーアも心配したんだよ！！」

「すまない」

リオンは何も言わない。ただ微笑んで二人を見守っている。今のアルはルカの気が済むまで、謝る事しか出来なかった。悪いのは全てアルで、ルカはこれっぽっちも悪くないのだ。これくらいで許されるのなら、甘んじてお叱りを受けよう。リオンのお陰で、大切なものを失わずにすんだのだから。

滅竜歌が残した爪痕

「な、だから言っただろ。地獄の果てまで追いかけるって」

二人を見守っていたリオンは笑って、片目をつむってみせる。

流石に地獄は言いすぎだが、ルカなら自分が納得するまで彼を追いかけるだろう。そんな絆を羨ましいと思う反面、焦がれてしまう。リオンも彼らのようになれていたなら、彼を失うことはなかったのか。

後悔してももうどうにもならないことだが、微笑ましいアルとルカを見て、そう思ってしまったのだ。

「紅蓮、腕を見せろ」

「何故？ まあ、見せるだけならいくらでも」

いつも以上に厳しい表情を浮かべるアルに、リオンは笑いながら腕を見せる。別段、変わったところはない。先程ルカが治療した後と同じ、白く滑らかな肌があるだけだ。

しかしアルは顔をしかめ、リオンの右腕を掴む。

「血の匂いがする。幻術を解け」

「分かった。分かったから、そう怒るなって」

竜の嗅覚は人間とは比べものにならない。アルは微かな血の匂いに気付いたのだろう。

リオンもまさか彼に気づかれるとは思わなかった。ずっと隠しておくつもりはなかったが、せめてアルとルカが話した後に、と思っ

ていたのである。

けれどアルは待つてはくれなかった。表情からも、彼がリオンを本気で案じてくれていることは分かる。観念したように両手を上げた瞬間、リオンの右腕が塵気楼のようにぐにやりと歪む。

「血が……。どうして？ 治したはずなのに」

ルカは信じられないと言った面持ちで、リオンの腕を見つめる。治した筈の傷口が開いていた。赤い装束のお陰で分かりづらいが、袖はぐつしよりと塗れ、血が白い肌を伝っている。

アルは無言を言わず袖を捲り上げ、表れた傷を見て顔をしかめた。まるで抉り取られたように肉が裂けている。言うまでもなく滅竜歌によるものだ。

竜の喪歌では治せない、そう聞いたから治療はルカが行った。傷口も確かに塞がったはず。

「紅蓮が受けた滅竜歌は完全なるもの。それは例え、僅かであつても竜の肉体を内側から破壊する。蒼穹の時は不完全であつたから良かったものの、これは厄介かもしれんな」

滅竜歌は竜の肉体を構成するマナとマナの繋がりを破壊する。始竜であつたからこそ、この程度で済んでいるが、普通の竜ならまず間違いなく滅されているだろう。

眉を潜めるアルに対し、リオンはけろりとしている。直視出来ない傷に驚いているのはルカだけで、当のリオンは何故平気なのか。

「別に痛くはないけどさあ」

「当たり前だ。麻痺しているからな」

アルはへらりと笑う。リオンの頭を叩く。痛くないから放置する。というの、馬鹿のすることだ。滅竜歌の恐ろしさはリオンも痛いほど理解しているはず。彼は実際、目にしたことがあるというのに。リオンとは気の遠くなるほど長い付き合いだが、時々こうやって考えの読めない事がある。

いや、アルも分かっているのだ。彼は自分よりルカやアルのことを優先してくれた。わざわざ幻術を使ったのも、ルカに心配を掛けないように、だろう。

「早く治療しないと」

「待て、ルカ。紅蓮に治癒系の魔歌と一緒に自然治癒力を促進させる古代歌をかけてやれ」

慌てて魔歌を紡ごうとしたルカをアルが止める。

始竜が持つ自然治癒力は強いが、それでもマナとマナの繋がりを破壊しようとする滅竜歌の力の方が強い。

しかし治癒系の魔歌と共に、自然治癒力を促進させる歌を掛ければ何とかなるはずだ。でなければ滅竜歌の方が勝ってしまう。

「うん。リオン兄、腕出してね」

痛くはないとリオンは言うが、これは見ている方が痛々しい。

もしかしたら気を使ってくれたのかもしれない。なかった。

確かに竜の肉体は人とは比べ物にならないほど強靱だ。しかし痛みを感じない訳ではないし、不死でもない。

申し訳ない気持ちと僅かな怒り。それを押し込めて、ルカは意識を集中させた。

『我は問う、神とは如何なるものであるか。傷付き、羽ばたく事を』

願う翼よ。今一度、大いなる母より賜りし力、貸し与えよう。故に
汝、汝が神は己が内に在ると知れ。遙かな詩は世界に響き、世界は
歌に満たされる。世界なる心を知るならば、今導きの声に応えよ
天恵』

歌が終わった瞬間、きらきらと光る金色の粒子がリオンの体を包
み込む。まるで妖精が飛び回っているように幻想的な光景だった。
光の尾を引くこれが、リオンの再生能力を促進させているのだ。

竜であるリオンだからこそ平気だが、人間にはあまり多用出来な
い。己の生命力を代償とすることもあり、使いすぎれば寿命を縮め
る可能性があるからだ。

元より古代歌は竜たちの歌。エンシェントアリアその効果も当然、彼らの体に合わせ
たものになる。

古代歌であっても、竜が操る限り、滅竜歌で受けた傷を癒すこと
は出来ない。

金色の光を纏っていても、リオンの腕は未だ血塗れだった。リオ
ンは平気で右腕をぺちぺちと叩いている。血は止まってるようだが
傷はまだ塞がっていない。

「あー……変な感じがする」

「我慢しろ」

微妙な表情をして唸るリオンに、アルから鋭い声が飛んだ。

竜、特に始竜は再生力が高い。今は歌によってそれを一時的に高
めている状態である。傷が急速に治癒するのと同じ速度で組織が破
壊されて行くのは、あまり気持ちいいものではないだろう。

どんなに気持ち悪くても、こればかりは我慢してもらうしかない。

「それじゃあ、行くよ」

『空に描く、人の祈りは永遠に。地に響く、竜の叫びは永久とこしえに。其は瞳閉じし者、救いなき落とし子よ。今此処に二つの祈り合わせ、汝を救わん。但しただ、心せよ。其が気まぐれ、主が恩寵であることを。遙かな詩は世界に響き、世界は歌に満たされる。尊き生命いのちと知るならば、今導きの声に応えよ 双祈』

朗々と響くルカの声にリオンが耳を傾ける。水晶の鈴を打ち鳴らしたかのような透明な歌声。これと同じ声をいつか、遙か昔に聞いた気がした。懐かしくてあたたかい。まるで母の腕に抱かれているかのように。

優しい銀と金の光が混じり合い、リオンの腕に集束する。光が弾けるように消えた時には、既に傷は跡形もなく塞がっていた。白磁のように滑らかな肌が見えるだけ。

「おー、痛みが戻って来たか」

リオンが右腕を撫でると、血の痕も瞬きの間に消えた。

傷は塞がったとはいえ、腕に引き攣るような痛みが走る。それは生物の傷を治そうとする力を通り越して、強制的に傷を治した反動とも言えるのだが、リオンは平然としていた。元より我慢出来ない痛みではない。

「イクセとルーアのところに戻ろう。アルにもリオン兄にも色々、聞きたいこともあるし」

「ああ、そうだな。それで良いか、紅蓮？」

「ここまで来た以上、話すしかないだろう」

アルとリオンの聞かなければならないことが沢山ある。イクセにそっくりな青年が言った、アルとリオンに滅ぼされたとの言葉。

その人物が滅竜歌を扱えることは勿論、何故イクセと同じ顔をしているのか。分からないことばかりだ。

金色の目を伏せ、問いかけるアルに、リオンはいつも以上に真剣な表情で頷いた。自分の伺い知らぬところで何か動き始めている。ルカはそんな気がしてならない。そしてその中心にいる存在を彼らは知っているのだと。

何より心配だったのはイクセのこと。ルーアがついているとは言え、彼はあれから一言も喋ろうとはしなかった。思案するように俯いて、何かに没頭しているようにも見える。

ルカにとってイクセはアルとは少し違うが、頼れる兄貴分だった。彼が悩んでいるその時にさえ、自分は自分のことで手一杯で何の助けも出来ないことが悔しかった。ルカはアルたちと共に宿屋に戻り、縋るような気持ちでドアノブに手をかける。一度息を吐くと心を決め、ドアを開けた。

「良かった。心配したんだよ、ルカ兄。中々帰ってこないから」

ドアを開けた瞬間、ルーアが胸に飛び込んでくる。慌てて少年の体を受け止め、何とか踏み止まった。ルカはルーアの飴色の髪を撫で、申し訳なさそうに謝った。

「ごめんね、ちょっと色々あって。イクセの様子は？」

「変わりなし。ずっとあの調子だよ。あっ、アル、戻ってきたんだ」

晴れやかな笑顔が曇る。ルーアは目を伏せ、ゆっくりと首を横に振った。

見た目よりずっと大人びた表情を浮かべていた彼は、ルカの後ろにいるアルの姿に気付く。顔を輝かせ、年相応の少年の笑顔を銀髪の青年に向ける。

「ああ。すまないな、心配をかけて」

ルーアの笑みを見たアルもふわりと顔を綻ばせた。思わず笑い返してしまうような魅力を人造竜兵の少年は持っている。ルーアはルカに代わって文句を言ってやろうと意気込んでいたが、アルを見て怒る気が失せた。

言わなくとも彼は分かっている。もう何も言わず、ルカの前から去るようなことはしないだろう。

「本当にね。大変だったんだから。色々聞かせて貰わなきゃならないことがあるね」

「ああ……」

腰に手を当て、ルーアは不敵に微笑んだ。いつもの彼なら何か一言、言いそうなものだが、今日のアルは何も言わない。言われるがままだ。ルカに泣かれたことが相当堪えたのだろうか。

アルとリオンには聞きたいことが山ほどある。イクセと瓜二つの青年、彼の気配が突然変わったこと。最初は確かに人のそれだったというのに。

始竜たちの事情はルーアにも分からない。

だが何だ、あの違和感は。いびつに組み上げられたパズルのように、何かがしっくりこないのだ。

「まずはイクセル抜きで話そう。いいな、紅蓮？」

「ああ、その方が賢明だな」

そう言って目配せをするアルとリオン。二人の間には、当事者たちにしか分からない何かがある。

しばらく沈黙した後、言葉を選ぶようにアルはこう切り出した。

「……全ては今から千年程前に遡る」

暁闇の君

「私たち始竜は、互いを傷つけることが出来ない。そういう風に作られたからだ。しかし千年前、一体の始竜が禁忌を犯した。かつて暁闇の君と呼ばれたものだ」

アルは息を吸い、心を決めて言葉を紡ぐ。

始まりの時より生きる始竜は世界を見守るものにして、万象を司るもの。世界に干渉することは許されない。それが彼らに課せられた戒めだった。

しかし今より千年の昔、その禁を破ったものがいた。暁闇の君と呼ばれる竜。その真名さえ、時の流れに埋もれ、もう二度と口にされる事などないはずだった。

誰よりもこの世界に生きる命を慈しみ、愛した彼。

だが人竜大戦はそんな彼を変えた。彼は滅竜歌というもっとも残酷な方法で、命を奪われる竜たちを見捨てる事が出来なかったのだ。

淡々と語るアルの表情は普段と変わらない。それなのに彼の声は確かに悲しみに満ちたものだった。

「禁忌？」

「ああ、そうだ。オレたち始竜は、世界に干渉してはならない。だがあいつはその禁を破った。失われる命を自らの手で救おうとした。そう、殺すことで。だからオレとレインはあいつを滅ぼしたんだ」

ルカの声に答えたのはリオン。頷くりオンの瞳はここではない、どこかに向けられている。千年の昔、彼を滅ぼした場面を思い出し

ているのかもしれない。

始竜が持つ強大な力。それを使えば人を滅ぼすことだって出来る。だとしても、それだけは決してしてはならない。痛いほどそれを理解していたはずなのに、“あれ”は耐えられなかった。

だがルカとルーアには引つ掛かることが一つある。互いに傷付けることが出来ないのなら、どうやってその“彼”を滅ぼしたというのだ。

「でも始竜は互いに傷付けることが出来ないんでしょ？ どうやってその竜を滅ぼしたの？」

「私たちはエリシオンとは違う理想郷の民の力を借りた。直接攻撃は出来ずとも方法はある」

そう、人と竜が共存する理想郷。それはエリシオンだけではなかった。

始竜である限り、アルたちは『暁闇の君』を滅ぼすことは出来ない。だから理想郷の民の力を借りた。今では二重唱デュエットと呼ばれる詠唱法を使って。

アルとリオン、そして先代の蒼穹の君は確かに彼を滅ぼしたはずだった。なのに生きていたというのか。

「あの滅竜歌を歌った人は始竜なの？ でも始めは確かに“人”だった。なのに……」

ルカは思う。あの青年は確かに人だった。それに滅竜歌を歌うことが出来るのは人だけだ。

けれど、彼はアルの真名を知っていた。始竜の真名は同じ始竜か、ルカのように真名を与えた人間しか知らないはずなのに。

では彼は一体、誰なのだろう。人でありながらアルの真名を知っ

ていた彼は。

「だろうな。現にオレは動けなかった。ただ、“あれ”は間違いなく人間だよ」

リオンは青年を攻撃しようとして、金縛りにあつたかのように動けなかった。それが青年が彼である証。

あの体は間違いなく人間であるが、自分たちが人と竜を間違えることなどあり得ない。あの青年は間違いなく人間だ。竜ではない。

「その話、俺にも聞かせて貰わないとな」

そこへ聞き慣れた彼の声が響く。扉の先には、彼らしい不敵な笑みを浮かべるイクセがいた。

不敵に笑うイクセは、少しだけ疲れたように見える。それでもそこに悲しみや苦しみの色はなくて、ルカは一先ず安心した。

彼が立ち直るにはまだ時間が必要だと思ったからだ。紫水晶の瞳には一点の曇りもない。生命力溢れる瞳を見れば、もう大丈夫なのだと分かる。それでも言葉にしなければ伝わらない想いだけであるのだ。

「イクセ、もう大丈夫なの？」

「ああ、お前に心配されるなんてよっぼだったんだな」

上目使いに尋ねるルカに、イクセは首を竦めてみせる。見ればルアも心配そうな顔をしているし、戻って来たらしいアルだって珍しく、金色の目を細め、真剣な顔でイクセを見つめている。

唯一、リオンだけがいつもと同じ、飄々とした表情だ。

「アルも帰って来たみたいだし」

「そんなことより何だ、イクセル。その腑抜けた面は。見ている方が辛気臭くなる」

視線をルカの背後にいるアルに向けると、彼は遠慮なくイクセを睨み付けた。怒っているのだろうか。もしそうならばこっちだって怒りたい気分である。何も言わずにルカのそばから去ったのに。

そしてアルの口から出た言葉は、彼らしく、相も変わらず辛辣だった。

だが変わらない彼に安心している自分がいる。気付かないところで気を張っていたのかもしれない。

「うつせ。俺だって悩み事の一つくらいある」

「いがーい。悩みなんて無さそうだけど」

心外そうに唇を尖らせるイクセに、リオンまで茶々を入れてくる始末だ。つられるようにして、ルカとルーアが笑う。それが自分に対する気遣いだとイクセは理解していた。

年下のルカや会ったばかりのリオンにまで心配させてアルの言う通り、不甲斐ない。本当にお人好しな仲間達だと思う。

素直に礼をいうのは照れくさくて、それでも礼を言わずにはいられない。

「すまない、そして礼を言う。大丈夫だ、本題に入ってくれ」

イクセの紫の瞳に鋭い光が戻る。彼を見たルカは小さく笑った。いつもの彼だ、《紫》のイクセル・クラインだ。

それを見たアルがふつと表情を緩めた。ルーアも安心したように

頷き、リオンは微かに笑ってみせる。

「さつきも言った通り、あれは人間だよ。あれ、はね。ただし、中身は違う。魂はかつて暁闇の君と呼ばれたヴァイスファイトⅡグラフィⅡノスフェラート。……かつてオレとレインが滅ぼした始竜だ」

神になりたいと願い、始竜の役目を放棄しようとした竜。

始竜で唯一、闇の名を与えられた暁闇の君、ヴァイスファイトⅡグラフィⅡノスフェラート。彼が死んでから、新たな暁闇の君は生まれていない。

自分達が死ねば体は大気中のマナへと還り、魂は転生する。その魂がないのだから、新たな始竜が生まれるはずがないのだ。先代の魂の記憶を読み取ることで自分達は力と知識を得るのだから。

始竜は永遠の時を生きる。肉体は滅びてもその魂は転生し、生き続けるのだ。

ではその魂が転生しなかった場合、新たな始竜が生まれることはない。

始まりの時より脈々と受け継がれる魂こそが、彼らを形作るものなのだから。リオンの持つ魂もウイスタリアの魂も同じ。

では暁闇の君　ヴァイスファイトⅡグラフィⅡノスフェラート、肉体は既に滅び、しかし魂のみで生きながらえる彼は“何”なのか。

「ヴァイスファイトⅡグラフィⅡノスフェラート……」

「単純な魔力量でいえばオレと同じか、ちょい落ちだな」

ヴァイスファイトはリオンと同じように、長い時を生きた竜だった。

竜の魔力は血と、そして魂に宿る。生きる時が長ければ長いほど魔力は高まると言われていた。

そこから考えればヴァイスファイトは、強大な力を有していると考えて間違いない。アルには及ばないにしても恐らく、魔力だけで言えばリオンと互角だろう。

「でもさ、そのヴァイスファイトはどうしてイク兄の顔をしているわけ？ それにアルたちを殺そうとしている理由もよく分からないし」

「そうだよ。始竜を殺しても世界は滅ばないって言ってたし。どうしてこんな酷いこと……」

二人が話してくれた内容では、あの青年がイクセと同じ顔をしていたことも、始竜を殺そうとしている理由も分からない。ルーアのもっともな疑問に二人は押し黙った。

アルとリオンに恨みがあるから、という訳ではないだろう。もしそうならば、関係のないウイスタリアを傷つける筈が無い。

彼はこうも言っていた。この世界に始竜は必要ないと。

「ルカ……。晝闇のことは分からない。しかしイクセルについて仮説を立てることは出来る」

ヴァイスファイトが何を考えているのか、アルには分からない。アルはヴァイスファイトではないからだ。始竜は万能でもなければ神でもない。心は目に見ぬもの。この世でもっとも理解しづらいもの、それが心だ。

ヴァイスファイトについては分からないが、彼が何故、イクセと同じ顔をしていたか推測することは出来る。

「言つとくけど、俺に生き別れの兄弟がいたとか、そんなことはないからな。正真正銘、俺は一人っ子だ」

胸を張り、堂々と言うイクセに、アルとリオンは思わず脱力した。流石に二人もそこまで短絡的ではない。

真剣な話をしているはずなのに、頭を抱えなくなった二人である。ルーアもやや呆れたように苦笑している。生き別れの兄弟がいたと仮定しても、ヴァイスファイトとは結びつかない。

「あのね、いくら何でもそこまで馬鹿じゃないって」

「まったく……お前らしいというか何とというか」

「え、てつきり俺もそう思ったんだけど」

「……ルカ、お前もか」

え、と驚いた顔をしたのはなんとルカである。彼は普段、察しも良いし飲み込みも早い。考えたくはないが、イクセに感化されたのだろうか。

アルに睨まれたイクセは意味も分からず、狼狽することになった。

始竜の核たるもの

「ま、そこが可愛いんだよねえ」

まるでぬいぐるみを抱きしめるように、ル力をぎゅうと抱きしめるリオン。少々苦しいのは竜族が誇る馬鹿力のせいだろうか。

おまけに頼ずりをされ、ル力は苦笑してしまう。嫌ではないし、むしろ少し照れくさい。こうやって誰かに抱きしめて貰った記憶は殆どないから。

「リオン兄、苦しいよ……」

「あ、ごめんごめん」

目覚めたばかりだからだろうか。どうやらまだ力の加減が出来ていないらしい。苦しいと言えば、リオンは慌ててルカの体を解放した。

アルが息を吸い込むと、ぴんと張り詰めたような空気が場を満たす。語られようとしている事実にくせは無意識に息を呑む。恐ろしくないはずがない。自らのあずかり知らぬところで何かが起こっている。そして彼らはその『何か』を知っているのだから。

「これは全て推測でしかないが、イクセル、お前は本来なら始竜として生まれるはずだった」

咳払いをし、姿勢を正したアルは、真っ直ぐにイクセを見つめた。月を思わせる瞳には何の感情も浮かんでいない。ただ真実のみを語るだけだ。

銀色の青年が発した予想もしない言葉にリオンを除く全員が押し

黙った。

いくらアルの言葉と言えど流石のルカも直ぐには信じられない。イクセはどう見ても人間だ。自分と違うところなんてない。

だがアルは、ルカの友人は憶測だけで物をいう竜ではない。それを口にしたということは、何か確信があるのだろう。

「俺は竜なのか？」

口に出した声は僅かに震えている。イクセは生まれてこの方、人間であることを疑ったことなんてなかった。

運動神経は普通の人間より良いだろうが、それも常識の範囲内だ。彼らのように魔歌を操ることは出来ない。人間である、はずだ。

もしイクセル・クラインが竜ならば、今まで生きてきた全てを否定されることと同意義。誰が違うと言っても、イクセ自身が認めない。

「早まるな。お前は間違いなく人間だ。私は生まれるはずだった、と言ったのだ。竜としての肉体、そして魂が揃って初めて『始竜』となる。だがお前の場合はその核たる魂がなかった。当たり前だ。暁闇あれが生きていたのだからな。だからお前は人として生まれた」

アルは不安に揺れる紫水晶の瞳を覗き込む。始竜として生まれるはずだった。それはつまり、イクセは人間だということ。始竜はただ始まりの時より生きる竜ではない。世界の支柱にして万象を司るもの。アルを除いた始竜は、先代よりその魂を受け継いでいる。

その魂こそが始竜を始竜足らしめるもの。始竜たちは魂を受け継ぐことで深い知識や記憶を得るのだ。

新たな暁闇の君として生まれるはずだったイクセ。

しかしヴァイスファイトの魂が転生することなく、生きていたため、イレギュラーな事態が起きた。核たる魂を受け継げなかったイ

クセは人としての肉体を得、人間として生まれたのである。

「オレたちも直ぐには分からなかった。だがいくら人として生まれても、本来は始竜として生まれるはずだった肉体と魂が共鳴していた」

アルの言葉を次いでリオンが口を開く。同じ始竜であったアルとリオンでさえすぐには分からなかった。

ヴァイスファイトの魂は仮初の肉体に入っているようだが、彼の肉体は既に失われている。魂が本来あるべき器に戻ろうとする帰巢性と言ってもいいだろう。

イクセは確かに人だが、その肉体は本来、始竜となるはずだった。肉体が滅びていようと、ヴァイスファイトの魂と次代の暁闇の君となるはずだった肉体には繋がりが生じる。

「ちょっと待つて。じゃあそのヴァイスファイトはイクセの肉体を手に入れようとはしないの？ だって仮初の体じゃ始竜の力に耐え切れないし……」

ルカはアルが言ったことを思い出す。竜としての肉体、そして魂があつて初めて始竜となると。

いくらイクセが人間だとしても、ヴァイスファイトは本来の肉体を取り戻そうとはしないのだろうか。

始竜の力は強大である。人造竜兵^{ドラクーン}たちの多くが己の力に耐えられなかったように、人の器では到底、始竜の力を受け止め切れないはず。

だというのに、ヴァイスファイトはイクセを気にもしなかった。彼が注意を向けていたのはアルとリオンのみ。

「んー……それはオレも思ったんだけど、あいつは多分、イクセの

体を使おうとは思わないはず」

「人の肉体でなければ、あれは私たちを滅することは出来ないからな」

リオンの言葉にアルも同意する。始竜は互いを傷付けられない。そのように作られているからだ。

しかし仮初とは言え、竜の体を捨て、人の肉体を手に入れたヴァイスファイトはその理に縛られない。

確かにイクセの肉体を手に入れば、アルとリオンに遅れを取ることはないだろう。

だがそれでは意味が無い。始竜の肉体では、彼らを滅ぼせないのだから。

「イクセ、大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ」

先ほどから黙っているイクセを心配してルカが顔を覗き込む。イクセは大丈夫だと言って笑ってみせる。

自分が始竜として生まれるはずだった。そう聞いて確かに驚いたが、心のどこか納得している自分がいる。

「俺のことはいい。で、これからどうするんだ？ ヴァイスファイトってやらを放って置くわけにもいかないだろ」

「……止めなきゃ」

考える前にルカはそう口走っていた。彼は絶対に諦めない。それほどまでにヴァイスファイトの憎しみは深く、暗い。

どれほど止めて欲しいと訴えても、彼の耳には届かないだろう。ならば力づくでも止めるしかない。

アルを、リオンを、ウイスタリアを絶対に消させやしない。それに彼にこんな悲しいことをさせてはならないのだ。

憎しみの中に見えたほんの僅かな躊躇い、悲哀。ルカは出来る事なら彼を助けたかった。何を持って助けるのかと言われれば分からない。だけど、このままではいけない気がしたのだ。

「しかし……無理にお前達が関わることはない。これは元々、私たち始竜の問題だ」

アルの表情は晴れない。ヴァイスファイトがどう考えたのかは知らないが、何もこんな真似をする必要はなかったはず。

始竜の命は始竜だけのものではない。この世界の命同然なのだ。自分たちに恨みがあるのなら、ウイスタリアを巻き込むいわれはないはずである。

ルカの気持ちは嬉しいが、こればかりは自分達、始竜の問題。

アルとリオンの原因なのだ。あの時、躊躇いなくヴァイスファイトを滅していれば、こんな事にはならなかった。言い訳のしようがない。全ては自分達の責任だから。

金色の目を伏せ、彼にしては珍しく後悔めいた表情を見せるアルに、ルカは明るく微笑む。

「あのね、アル。リオン兄もだけど。もう始竜だけの問題じゃないんだよ。それに、これは俺の考えだけど。あの人を、ヴァイスファイトを止めなきゃ。こんな悲しいことをさせちゃいけない。ね、ルカ、イクセ」

真っ直ぐにアルとリオンを見つめてくる瞳は、夕焼けを切り取っ

たかのように鮮やかだった。

どこまで優しい子なんだろう。自分を傷つけようとしたヴァイスファイトを案じてくれるなんて。

竜のために泣いてくれる、竜のために悩んでくれる。いつかアルが言ったように、それだけで嬉しいのだ。

それはルカだけではない。

少年の想いを聞いた、造られた竜の少年と始竜として生まれるはずだった青年は頷き合い、二人の始まりの竜を見た。

「僕も付き合っよ。あの人が一目見たいと願った世界を壊させる訳にはいかないから」

ルーアを造ってくれた人が望んだこの『美しい世界』。全てが綺麗なものではないけれど、あの人は確かに人と竜が争う世界ではなく、この生命溢れる世界を望んでいた。

あの人が見たいと願った世界。それだけでルーアには十分だった。それに自分を闇の中から助け出してくれた人たちを、ただ純粋に助けたいと思ったのだ。

彼らがいなければルーアは緩やかに滅びに向かっていただけだろう。在りし日の夢を見ながら。

「俺も協力する。元はと言えば、この肉体に入るはずだった魂だろう？ 今の体の持ち主としてけりをつけなきゃな」

イクセは胸に右手を当て、悪戯っぽく片目を閉じる。

過去はどうあれ、自分はイクセル・クラインだ。

しかし自分には今の肉体の持ち主として、全てを見届ける義務がある。

そして少しでも関わった以上、何もなかったことには出来ない。ルカが言ったようにこれはもう、始竜だけの問題ではないのだ。

悩む、という選択肢は初めからなかった。怖いとも思わない。

「君たちならそう言うと思ったよ。イクセ、メシア。なあ、レイン。力を借りてもいいんじゃないか？ 意地張ってないでさ」

「……本意ではないが、仕方ないだろう」

二人の答えを聞いたリオンは小さく笑い、アルの方を見る。言われずとも分かっているのだ。

アルとリオンではヴァイスファイトを滅ぼすことは出来ない。以前、彼と対峙した時のように人の力を借りなければ。

本当はルカを、イクセやルーアも危険に晒したくはない。そんなものはアル達の役目だ。

けれどそれでは以前と何も変わらない。危険から遠ざけることだけが、護るということではないはず。

ルカは自分と共に在りたいと言ってくれた。そんな彼を信じてみてもいいのではないか。ルカが自分を信じてくれたように。

始竜の核たるもの（後書き）

六奏も終了しました。残り四章です！

海原をゆく者

どこまでも続く大海原。太陽の光を浴びてきらきらと輝く海面を、鮮やかなコバルトグリーンの鱗を持つ一頭の竜が飛翔している。翡翠を固めたような角は鱗と同じくらい、燦然と光輝いていた。たおやかな、と言うに相応しい。

潮風を切って悠々と飛ぶ姿は爽快そのもので、竜の背に乗る男も瞳を閉じ、柔らかな風にその身を委ねていた。

海は見るまでもなく穏やかなもので、竜とその背の人物を除けばカモメたちか、時折跳ねる魚だけがそこにいる。男の耳に入るのも風と鳥たちが奏でる音だけ。

「どうだ、ゼファイ。後三十分ほどか？」

男は自分を乗せて飛ぶ竜に尋ねる。片目を開けた男は精悍な顔立ちをしており、肌は日に焼けている。年の頃は三十代前後だろうか。ミントの葉を思わせる鮮やかな緑の髪に、切れ長の瞳はエメラルドのよう。

引き締まった肉体には余分な脂肪などなく、動きやすい簡素な衣服を身に着けている。腰には剣を一本差しており、傭兵のように見える。ただ傭兵にしては防具類の類は一切見受けられなかった。

「ええ、恐らくはその程度だと思いますが、もう暫く我慢して下さい」

ゼファイと呼ばれた竜は視線を上げ、日の光を思わせるサンシャイニーエローの瞳を男に向ける。それは例えるのなら、女性のように穏やかな優しい声だった。まだ若い、二十代ほどだろうか。

竜の声を本当の意味で理解出来るのは声ドラクナーを聞く者と呼ばれる特殊

な者たちだけ。

竜の言葉に頷き、背後を振り返る男は間違いなく、そのドラグナ
ーだろう。

ゼフィの言う通り、彼女の背の大半を占めているのは男ではなく、
大きな荷物である。木箱の中身は依頼人である老夫婦によると南国
で有名な果実らしい。

孫娘夫婦に届けて欲しいとの依頼で、一人と一匹は海沿いに位置
するある街に向かっていた。

男は気まぐれで気に入った依頼しか受けない。どんなに報酬が良
くても、気に入らなければそれで終わりだ。奔放で我がままで、子
供のような人だけれど、ゼフィはそんな彼が好きだった。

彼とはもうかれこれ十年以上の付き合いだが、本当に何一つ変わ
っていない。密かに笑うゼフィには気づかず、男は言う。

「俺は我慢できるが、ゼフィこそ大丈夫か？」

実はこの木箱、大きさもさることながら、見た目以上に重い。

孫娘夫婦のために張り切って詰めたのだろうが、無茶とは思いつ
つも、少しは運ぶ方の身にもなって貰いたいものだ。何せこちらは
竜一匹と人一人なのだから。

『この程度なら問題ありません、ゲイル様』

しかしゼフィはと言えば、随分涼しい顔をしているではないか。
それに対し、男　ゲイル・エアハートは人知れず笑みを零した。

世界でも指折りの運び屋である彼は多忙を極める。一年中世界を
飛び回っており、それを同居人の竜に咎められたくらいだ。それは
兎も角、依頼は全てゲイル自身が判断するため、今日の様にはただ荷

物を運ぶという依頼も多い。

『一つお知らせが……』

「なんだ？」

『白銀の君と紅蓮の君が私たちに会いたいと』

背に乗るゲイルの顔を伺いながら、いつになく真剣な表情でゼ
ファイ、否、風天の君　シルフィード「ウィンディ」ゼルフィロ
スは言った。

そこは光に彩られた空間だった。竜族の力となり、生命力となる
マナに満ち溢れた空間に生える金色の魔水晶。夕暮れ前の空に地面
は金色の光で埋め尽くされていた。

金にも琥珀にも見える魔水晶は微かに光を放ち、闇の中で揺らめ
く蠟燭の炎のように仄かに輝いている。

だが幻想的な光景とは裏腹に、そこには生あるものの気配が感じ

られなかった。不純物のない澄みきつた水に生物が住めないように、一種の静謐さすら感じさせる聖域のようでもある。

大小さまざまな水晶が存在する中で一際大きな魔水晶が、小さなクラスタ状の水晶に護られるように聳え立っていた。人の身の丈ほどあるだろうか。

小さなものとは違い、透明度が低く霞みがあったように見えないが、魔水晶の中に何かがある。ぱきん、と鈴なりの音が響いたかと思うと水晶に大きな亀裂が入った。その音を皮切りに連鎖する乾いた音。

刹那、今までの何よりも高い音を立てて水晶が砕け散る。魔水晶があつた場所より現れたのは一糸纏わぬ人間だった。

歳の頃は十代後半。おそらく十六、七だろう。白磁のように滑らかな裸身が薄闇の中に浮かび上がっている。その人物は中性的で整った秀麗な顔立ちをしているが、女性のように見えた。

薔薇の蕾を思わせる唇、金色の睫毛は影を作るほどに長い。ややくせのある、銀に近い黄金色の髪は腰に届くほどだった。

金を散らしたような琥珀色の瞳は眠そうに細められている。

白く輝く肢体は女性のように柔かなシルエットを描いていたが、女性にあるはずの胸のふくらみはない。ということは青年なのだろうか。

だが彼、もしくは彼女の放つ独特な雰囲気性別を曖昧にさせていた。青年はまず周囲を見回すと、次に自分の体に目を落とす。そこで何も纏っていないことに気付くと、青年は軽く右腕を一振りした。

次の瞬間、青年は不思議な服を纏っていた。

ゆったりとした袖は緩やかに波打ち、ふんだんに白の飾り布を取り付けられ、両腕に結ばれたりボンが尾のように靡いている。腰に

は美しい刺繍が施された幅の広い帯を結んでおり、それはまるで、蝶の翅のように軽やかに見えた。

和と洋を合わせたどこかアンバランスな、不思議な服装と言っている。青年はまだ眠そうに目を擦り、ゆっくりと琥珀の瞳を閉じる。瞑想をするように穏やかに、だがそれでいてまどろむ幼子のような無垢な表情をしていた。

しかし僅か数秒で目を開け、何やら呟いたかと思うとその姿は跡形もなく消えていた。

アルとリオンは言った。今、目覚めている始竜は自分達を含め、白銀の君アルトゥール、紅蓮の君ヴァーミリオン、蒼穹の君ウイスタリア、風天の君シルフィード、豊穡の君イスラフィールだと。シルフィードとウイスタリア、目覚めたばかりのイスラフィールは顔を出してくれるらしい。

ルカたちはアルが作り出した不思議な空間にいた。ウイスタリアやリオンが作り出した異空間と同じ、銀の光を放つ魔水晶群がその証である。理由は勿論、他の始竜を待つため。

一行が滞在していたルシタニアでも構わないのだが、流石に始竜

たちは目立ち過ぎる。アルやリオン、ウイスタリアと今までルカが目にした始竜はこの世のものではないくらい美しかった。

街中でそんな人間がいれば流石に目立つからである。他の始竜を待つ間、リオンが感慨深げに呟いた。

「随分久しぶりじゃないか？ 始竜がここまで集まるなんて」

「……そうだな。千年前の人竜大戦でさえ私と紅蓮、そして先代の蒼穹だけだった」

そんな彼にアルも同意する。始竜がここまで一箇所に集まることは珍しい。休眠状態にある紫電の君エクレールと転生に入った夢幻の君が居れば、全員揃ったことだろう。

千年前の人竜大戦時にヴァイスファイトはアルとリオン、先代の蒼穹の君に滅ぼされた。

だがその一件で先代の蒼穹の君は死を迎え、ウイスタリアが生まれたのだ。

「そうなんだ……。でも始竜の皆って人の姿は凄く綺麗だよな」

直視するのも恥ずかしいというか、遠慮してしまう。アル、リオン、ウイスタリア。ルカが出会った始竜は皆、美の方向は違うが例外なく美しかった。

「ん、まあ、そう『造られた』からな」

「え？」

「……来たな。豊穰か」

造られた、と口にしたりオンはどこか寂しげに見える。彼らしくない声色にルカが首を傾げ、その理由を尋ねる前にアルが口を開いた。

アルが視線を向けた先、銀色の魔水晶の影から現れたのは十六、七ほどの人物。金を散らした琥珀の瞳に、やや癖のある銀に近い黄金の髪は腰よりも少し長いだろう。

一見したところ、性別は分からない。

中性的で整った美貌、女性のように柔らかな肢体。和と洋が混在した不思議な服を纏っている。その人物はアルとリオンに目を向けると、ふわりと微笑み、耳朶に響く柔らかな声音で彼、もしくは彼女は言った。

「うん、久しぶり。ルウ、ミリイ」

風に愛されし者達

ふわりと微笑んだ彼、もしくは彼女は一行に近付いてくるとルカをぎゅうと抱きしめた。ルカは予想外の出来事に目を白黒させるしかない。その人物はというと、戸惑うルカなど気にもしていないらしい。

ルーアとイクセは何も言えずに目を瞬かせているが、アルとリオンは慣れているのか、ああ、また始まったかと言った顔で青年を見つめている。リオンといい、この青年といい始竜の挨拶のようなものだろうか。

「あ、あの……」

「気にするな。いつものことだ」

ルカはおずおずと声をかけようとするが、気にするなどのアルの言葉に何とか頷く。戸惑ってはいるが不思議な気分だった。青年の腕はあたたかい、懐かしい感じがする。まるで母の腕に抱かれているようで安心する。

おずおずと顔を上げれば、金を散らした琥珀色の瞳と目が合った。どこまでも透明で混じりけのない綺麗な瞳。琥珀色の目を細め、柔和な笑みを浮かべるこの人はまるで子供のよう。

見た目でさえルカより年上で、実年齢はアル、リオンに続くほどだというのに、とてもそうは見えない。不思議な雰囲気纏っている。

「ぼくは豊穰の君、イスラフィールⅡアティスⅡアマルティア。アティ、って呼んで。ルウもミリイも元気だった？」

ふわりと笑うイスラフィール、いや、アティはとても綺麗だった。アルのようなこの世のものではない絶世の美貌でもなく、リオンのように華やかさがある訳でもない。

けれどアティにはアティの独特の美しさがあった。全てを包み込む聖母のよう。優しくてあたたかい。アティの腕はルカに今はなき母を思い出させる。

「嗚呼、数百年ぶりか？」

「それくらいだろ。久しぶり、アティ」

「うん、ミリイとは千年以上ぶりだったかな」

旧友との再会にアルの顔もほころぶ。アルが親しいもの以外に見せることのない笑顔を見せると、ルカも嬉しくなるのだ。

千年前の人竜大戦でアルとリオン、先代の蒼穹の君が集まった以来だと言っていたことからすると、始竜同士が数百年会わないのもざららしい。そこでルーアがあれば、と首を傾げる。

「ルウとミリイってアルとリオン兄のことなの？」

「そうだよ、ルーアくん。ルウはアルトゥール、ミリイはヴァーミリオン」

「今、アティが言ったけど、オレたち始竜は真名を呼ばない」

言われてみれば、ルカが目にした始竜は互いを真の名では呼ばない。アルは紅蓮や蒼穹などの称号を、リオンはレインやセレス、間名を呼んでいる。そしてアティも同様だ。何か理由でもあるのだろうか。その理由を聞こうとしたルカだが、次に姿を現した人物を見

て顔が綻ぶ。

現れたのはウイスタリアと彼の着属、イシュリアだった。二人とも別れた時と同じく、人の姿をしている。

ウイスタリアは長い蒼穹色の髪を一つに纏め、裾と袖の長い衣を身につけており、イシュリアは肩近く切りそろえられた灰に近い銀の髪に騎士を思わせる装束。

「やっばー、セレス。元気してた？」

無言で微笑むアルとアティに比べ、軽すぎるリオンの挨拶にウイスタリアは困ったような表情になり、イシュリアは僅かに眉を潜めた。もしかして仲がよくないのだろうか。少なくともルカの知る彼なら、ここまであからさまに不快感を表すことはなかったはずだ。

一見すると馬の合わなさそうなアルとリオンでさえ、付き合いが長いせいか、息はぴったりである。アティだってそうだ。

「紅蓮の君、申し訳ありませんが、その手をお離してください」

ウイスタリアの肩に触れようとしたリオンの腕が横から伸びて来た手に掴まれる。その手は勿論、イリュリアのもの。主を護る騎士のようにウイスタリアを庇うイシュリアにリオンは苦笑した。

離せと言われても、そもそも触れてさえないのだが、彼女には関係ないらしい。不快感を隠そうともしない辺り、彼女も主同様若い。

リオンにすれば挨拶なのだが、イシュリアはそれさえも気に入らないのだろう。狼と言うより忠犬だが、口には出さない。言えば間違いない彼女を怒らせるだろうし、これ以上の面倒はリオンも御免である。

「離す前に触ってもいけないけど。イシュリアちゃんはホントにセレ

スを護る騎士だね」

そんなリオンにイシュリアはというと恐れ入ります、と頭を下げただけ。にっこりと微笑んだりオンを見て表情を変えないのはある意味凄いと思う。

イシュリアの敬意を払う対象にリオンは入っていないのだろうか。とは言え、彼女に負けるリオンではない。睨み合うリオンとイシュリア。一方は見惚れるような笑顔で、もう一方は氷のように冷たい表情で睨み合っている。

「貴公も変わらないな」

それでもめげないリオンを見て、ウイスタリアはあきれ果てるように、あるいは仕方のない子供を見るように苦笑した。困ったように笑う彼はリオンを嫌っているようには見えない。ウイスタリアの性格から考えると意外と照れてるのだろうか。

ウイスタリアは視線をリオンからアルに移す。ルカの目には彼の横顔が、ほんの少しだけ怒っているように見えた。

「……本当に一時はどうなるかと思ったが、ルカのお陰だ。貴方という人は、本当に……。少しは彼の気持ちを考えたらどうだ。我が言わずとも貴公なら理解しているだろうに」

ルカのお陰で考えられないほど、アルは変わった。ウイスタリアの知る『白銀の君』からは考えられない変化。以前の彼なら二度とルカの前に姿を現すことはなかっただろう。

だが彼はルカの元に戻って来た。

本当によかったとウイスタリアは思う。彼は唯一、始まりの時よりに生きる竜として、自分達の誰よりも使命という鎖に縛られてきた。

そう、造られたのだと言つのは簡単だ。しかしアルはその瞳で、誰よりも悲惨な世界と悲劇的な結末を見続けて来た。

だからこそ彼は誰よりも始竜という、使命という鎖に囚われていたのだ。そんな彼を鎖から解き放ってくれたのは紛れもなくルカである。

アルは無言でウイスタリアを見つめていた。まるで彼の言葉を噛み締めるように。

「俺だけの力じゃないよ。俺一人ならきつと立ち上がれなかった。イクセやルーア、リオン兄、もちろんウイスタリアとイシュリアも、皆が居てくれたから」

ルカは皆を見回して笑った。自分一人ならきつと立ち上がれなかった。

ただど一人じゃないって分かってたから。イクセにルーア、リオン、ウイスタリアやイシュリアが居てくれたから、諦めずに頑張れた。立ち上がった。

こんな素晴らしい仲間たちと出会えたことに感謝したい。ルーアがそつとルカの手己の手を重ねる。

「ううん、僕たちはほんの少しだけ力を貸しただけ。ルカ兄の力だよ」

「何たってルカだからな」

柔らかく微笑むルーアに、イクセも同意する。ルカとアルの絆は強い。例え自分たちがいなくても、彼らの絆はきつと再び結ばれたことだろう。

その時、ルカたちを見守っていたアティは弾かれたように顔を上げる。銀に輝く水晶の向こうに見えた人影。それは一人ではなかつ

た。アテイの口からこぼれ落ちた名。

「ゼファイ」

「……来たか」

頷いたアルの表情はやや硬い。それがゼファイなる人物に向けられたものではないことを数秒後にルカは知ることになる。煌く水晶のお陰ではつきりと見えないが、始竜たちやルーアは見えているらしい。

次の瞬間、若い女の声が響いた。

「遅れて申し訳ありません。少々手間取りまして」

巨大な水晶の影から現れたのは二人の男女。

女の方は二十歳前後だろうか。日の光を思わせる美しい双眸に、左右で結わえたコバルトグリーンの髪はエメラルドのように鮮やかで、思わず見惚れてしまう。

顔立ちはまるで神の造形であるかのように整っていたが、彼女が笑うとまた雰囲気が変わる。まるで、全てを赦す聖母のように穏やかだった。彼女にはアテイとはまた別の温かさがある。

そして何より、人目を引くのはその服装。両耳に金の耳飾りを付け、全体を白と緑で統一された服は、どこかの民族衣装のように見える。両肩はむき出しで、下に行くにつれてふわりと広がる袖からは真珠のように滑らかな肌が覗く。感じとしてはルカが歌姫を演じる時に着せられた衣装にどことなく似ていた。

しかしルカを何よりも驚かせたのは女性の隣にいた男。

一見したところ三十代前半から半ばほど。いや、見方によっては

もつと若々しく見える。健康的に焼けた肌に精悍な顔立ち。男の緑髪と同色の瞳は隣の彼女とも少し違う。

彼女が濃い緑だとすれば男は、ミントを思わせる薄い緑。瞳は神秘を表す深い緑をしている。

唯一の武器は腰に一本の剣と、服装は動きやすさを重視した簡素なものだった。引き締まった体軀から冒険者のように見えるが、冒険者を示す飾りはどこにも見当たらない。

「父……さん？」

呆然と呟くルカに男　ゲイル・エアハートはばつが悪そうに頭をかき、諦めたように頷いた。アルの表情が心なしか硬かったのは父のせいなのだ。

エランディアを出てから父とは一度も連絡を取ってはいない。冒険者と運び屋という世界を飛び回る職業であるため、互いに連絡を取るのが難しいという理由もある。

いや、正直な話をすればルカは、何を報告していいか分からなかったのだ。父の愛情を疑っているわけではない。父は父なりに自分を大切にしてくれているのだろう。

しかし、そう直ぐには普通の親子には戻れないこともまた確かである。

風に愛されし者達（後書き）

一応は作中の始竜の紅一点、ゼフィの登場です。

馬が合わない二人

「父さんってあのゲイル・エアハートか？」

そう言いながらイクセは目の前の男をじつと見つめた。世界でも指折りの運び屋である彼を、実際に見たことはない。噂だけは冒険者をしていればかなり耳に入ってくるが、多少尾ひれは付いているだろうとは思っていた。

依頼の成功率はほぼ百パーセント。残りの数パーセントは彼自身が気に入らない依頼を蹴ったものである。

しかしこうして会ってみればその噂も尾ひれがついたと言うより、その通りなのだろう。

「あんまり似てないね。ルカ兄とお父さん」

ルカとゲイルを見比べていたルーアが呟く。

確かにルカとゲイルは似ていない。あんまりというか全然である。髪の色も目の色も違う。精悍な顔立ちのゲイルと比べ、ルカは似ても似つかない中性的な顔立ちだった。

それだけではなく、纏う雰囲気も正反対だし、似ているところを見つける方が難しい。

「ルカは母親似だからな。それにしても久しいな、風天。付け加えるのならお前もだが、ゲイル」

「その射るような視線は止めるって。お前、オレに恨みでもあんのか？」

ルカは母であるシルフィアと瓜二つだった。透き通るような青い

髪や夕焼けを切り取った茜色の瞳、顔立ちさえも。だからこそ、ゲイルは妻を亡くしてから家に寄り付かなくなり、今も上手く接する事ができない。彼に妻の面影を見てしまうから。

アルはそれを不甲斐ないと思いつつ、ある意味では仕方がないと分かっていた。父親として決して褒められたことではないが、彼の気持ちが無理解出来ない訳ではない。

アルはゼフィなる人物を見た後、永久凍土よりも冷ややかな瞳でゲイルを見た。そこには一切の慈悲も無い。

しかしゲイルは普通なら縮み上がりそうな視線を平然と受け止めている。ゲイルの空気を読まない一言にアルの顔が更に不機嫌の色を帯びた。見ていて分かるように、アルと父は馬が合わないのだ。

ならば会話をしなければいいのだが、それはアルの気が済まないらしいので、会えば決まってこんな感じだった。

いつも通りのやり取りに、ルカは口を挟むこともしない。いつものことだからだ。

リオンはそんな二人を笑いながら、イクセとルーア、ウイスタリアやイシュリアは驚いてアルを見つめている。アティはと言えば、ここにこしながらアルとゲイルを見ていた。

そこでルカははた、と気付く。父がいるということは、彼女はもしや……。

「あ、ゼフィってもしかしてゼフィロス？」

「はい、お久しぶりです、ルカ様。私はこの場に集まりし皆様と同じ始竜。名は風天の君、シルフィードゥウィンディゥゼルフィロス。今まで黙っております、申し訳ありません。ゲイル様の指示です」

ルカの声にサンシャインイエローの瞳を細め、彼女は笑った。竜である時と同じ、たおやかな声。

ゼフィの柔らかな笑みはルカに母を思い出させる。母のことは殆ど思い出せないが、きつと彼女のような女性だったのだろう。

申し訳なさそうに頭を下げる彼女にルカは慌てて首を振った。自由奔放な父の考えはルカにだって分からない。ゼフィがわざわざ謝ることではないのだ。

「じゃあ、父さんがいるのは……」

「私が呼び出したからな。この男にも知らせる必要がある」

「オレたちのこと知ってるから、だな」

「ああ。ゲイルは私とルカが会う以前より、風天と付き合いがあったからな」

非常に不本意であるとアルの表情が物語っていた。

だがそれはリオンと相談して決めたこと。ゲイルの相棒、ゼフィと彼の付き合いは長い。彼が妻であるシルフィアと会う以前より行動を共にしているのだ。それに加え、この男は並外れた洞察力と直感を持つ。

アルが普通の竜ではないとゲイルは直ぐに気付いたのだった。

「これで揃ったようだ」

「ならば早速、本題に入ろう」

皆を見回してウイスタリアが言った。ルカとイクセ、ルーアにゲイル、そして始竜たち。まだ眠りにについている竜を除けば全員が揃

った事になる。

ウイスタリアの言葉を継いで口を開いたアルに、ルカを含めた全員が頷いた。アルとリオンが他の始竜たちを集めたのは他でもない。かつて暁闇の君と呼ばれた始竜、ヴァイスファイト「グラフ」ノスフェラートについてだ。

まずアルの話は滅竜歌により始まり、ウイスタリアのこと、それを操る人間にヴァイスファイトの魂が宿っていることで終わった。勿論、イクセのことも含めて、である。

「そう、ファイが……確かに誰よりも熱心な子だったけど。……悲しいね」

最初に口を開いたのはアティだった。眠っている間も感じていた嫌な気配。あれは世界の歪みだったのかもしれない。滅竜歌はこの世に存在してはならぬ歌。そしてヴァイスファイトもまた消え去るのが道理。肉体を失った彼はもう始竜ではないのだ。言うなれば亡霊。

不完全とは言え、滅竜歌を受けたウイスタリアを心配してアティが尋ねる。

「きみはもう大丈夫？」

「万全とは言えないが、問題はない」

ウイスタリアの体力、魔力共に八割方回復していた。傷を受けた時の処置が的確だったことと、始竜が持つ再生能力のお陰である。

だが滅竜歌は竜を滅ぼすための歌。影響が出ないとも限らない。

それきり、誰も喋ろうとはしなかった。険しい表情のアルとリオンに悲しげに顔を伏せるゼフィ。ルカやイクセ、ルーアも何を言っていないのか分からなかった。

「そのヴァイスファイトの目的は始竜を殺す事だろ？ 滅竜歌って便利なものがあるなら、どうして仕掛けてこない？ 今なんて絶好のチャンスだろ」

誰もが押し黙る中、口を開いたのはゲイルだった。彼が言ったこととはあながち間違いではない。始竜でさえ滅ぼせる滅竜歌があるのなら、何故すぐに仕掛けてこないのか。

アル達はヴァイスファイトを害す事は出来ないが、彼は違う。始竜という肉体から解き放たれたヴァイスファイトは始竜を殺せるはずだ。

そこでルカは気づく。青年がヴァイスファイトだと分かった時、リオンは青年に向けて喪歌を使った。リオンたちは彼に攻撃出来ないのではないのか。

「あ、でも、ちょっと待って。あの時、リオン兄攻撃してなかった？」

「いや、あれは直接攻撃したわけじゃない。あくまで動きを封じただけだ。傷一つないだろうな」

リオンは苦笑しつつ、首を横に振る。あの時、使った喪歌はヴァイスファイトを直接攻撃するものではなかった。足止めのために彼を炎の檻に閉じ込めただけ。それだけでは彼を殺せない。

ヴァイスファイトは傷ひとつないだろう。

「ということとは直接攻撃は出来ないけど、間接的になら傷つけることが出来る、ってこと？」

「そうだ。それがあれが仕掛けてこない理由だ。確かに私たちは“

「ヴァイスファイト」を害することは出来ない。しかし今、ルーアが言ったように間接的になら我らに刻まれた制約が表れることはない」

あれ、と首を傾げて言ったのはルーアだった。始竜は互いに傷つけることが出来ない。では直接は無理だとしても、間接的ならどうだ？

アルたちは直接、彼を攻撃することは出来ない。しかし喪歌の余波にまで始竜に刻まれた本能が働く事はないのだ。だからこそ彼は動かないのだ。

いくらヴァイスファイトが滅竜歌を使えるとは言え、単純な力に劣る始竜たちを簡単に殺す事は不可能。それが分かっているからこそ、彼は仕掛けてこない。

ヴァイスファイトであると悟られなければ可能だったかもしれないが、今は違う。

世界のあるべき姿に戻すのなら、暁闇の君ヴァイスファイト「グラフ」ノスフェラートの存在を許してはならないのだ。

「アル達の力でヴァイスファイトを探すことは出来ないの？」

「無理だな。余程近いなら別だが」

ルカが問えば、アルは首を振って答える。始竜という肉体を捨てた彼の力を感じ取ることはアルにも不可能だった。既にその肉体は滅び、人の身体に宿っている状態では。

彼はヴァイスファイトではあるが、ヴァイスファイトではない。滅竜歌を使うか、ヴァイスファイトの魂が表に出ている状態なら別であるが。

「じゃあ八方塞がりなの？」

「いや、手詰まりなのはあちらも同じ。オレたちが出てこなければならぬ状況を作ろうとするだろう。目的は決まってるからな。あいつはオレたちを、オレたちはあいつを殺したいんだから」

ルーアが何とも言えない表情をしてリオンを見る。動けないのは向こうも同じだ。こちらがヴァイスファイトの魂を還したいと思うように、ヴァイスファイトもまた、リオンたち始竜をなんとしても殺したい。そう思っているだろう。

簡単に殺せないのなら、ワンクッション置けばいい。

自分達が出てこなくてはならない状況を作り出す。罾を張り、手薬煉を引いて待つために。そうでなければ力と数に劣る彼が自分達を殺す方法は無い。

「つまりは現状維持、様子見ってこと？」

「と言うよりはそれしか出来ることがないからだ」

拍子抜けしたように尋ねるルカに、アルはため息をついて頷いた。警戒をしておくには越した事はないが、それでもずっと張り詰めていては疲れてしまう。もっとも、それもヴァイスファイトの狙いなのかもしれない。

「なら、いざと言う時に連絡取れるようにしとかないな」

「それなら心配ない」

ゲイルの言葉にアルは憮然とした表情で何かを差し出した。

始竜たちの思念交換も万能ではない。現にアルがウィスタリアの危機を知ったのは、始竜としての本能、ヴィジョン。

アルの手の中に光る、銀色の光沢を放つ何か。ルカには分かる。羽根に似た、だがそれよりもしっかりした作りのそれは、アル自身の鱗だった。

賽は投げられた

竜笛とは違うがそれに良く似たもの。竜族が自身の一部を使い、作り出したものには力が宿るとされている。始まりの時より生きるアルが牙より作ったルカの魔剣、ジークルーネはヴァイスファイトの拘束を破ってみせた。たかが鱗と言っても、強大な力を秘めているのだろう。

つるりとした手触りの鱗を受け取り、ゲイルは懐に仕舞った。

「それを持っていけば、いかなる時でも私と繋がる事が出来る。何かあれば連絡が欲しい」

警戒するにこしたことはないが、ヴァイスファイトと一筋縄ではいかない相手。自分たちを泳がせて仕留める気かもしれない。

確かにアルたち始竜は互いに繋がっているが、ウイスタリアのように命の危険に晒されでもない限り、自分たちにはそれを感じる事が出来ないのだ。

しかし鱗など強い魔力を秘めた物を持っているなら別だ。竜笛が持ち主の危機を伝えるように、アルの鱗を持っていけば、いかなる時でもアルと繋がる事が可能なのである。

「あ、オレはいい。レインたちにお世話になるから」

「え、リオン兄も来るの？」

あ、と声を上げたのはリオンで、彼の発言に一番驚いたのはルカだった。イクセとルーアは半ば予想していたようで、アルはと言えば頭に手を当て頭を振った。非常に嫌そうだが、そんな表情をしても彼の美貌が損なわれることはない。むしろ怒った顔も綺麗だと思

えるのだから不思議だ。

「じゃあ、ぼくも一緒に緒させてもらおうかな？ 勿論、邪魔じゃなければ、だけど」

次に口を開いたのは、そんなルカたちを見ていたアテイ。はい、と手を上げ、にこにここと笑うアテイの考えはまるで読めない。

アルやリオンの次いで長い時を生きる始竜だと聞いたが、ウイスタリアやゼフィの方がよほど年上に見える。アテイ自身の性格と身に纏う雰囲気のせいだろうか。

勿論、ルカに依存はない。ルカが皆はどう、と尋ねると、

「リオンを止めて、アテイでいいんじゃないか？ なあ、アル」

「そうだな。私もその方がいい」

なあ、と何気にとんでもない発言をするイクセに、アルも即座に同意した。イクセがリオンを見る瞳は彼にしては少しだけ冷たい。たまに冗談を言う彼だが、今回はかりはルカも本気なのか冗談なのか分からなかった。

そこまで考えて、ある考えに行き着いた。イクセはリオンを慮っているのではないか。

イクセの顔は人の姿となったヴァイスファイトと瓜二つ。そばにいれば、どうしても彼を思い出してしまっただろう。

千年前、リオンはアルや理想郷と人々と共に、ヴァイスファイトを滅ぼした。

だがリオンとヴァイスファイトの間にはそれだけではない何かがある。それは彼らの態度から窺い知ることが出来たし、普段はおちやらけていても、リオンがただ軽いだけの人物ではないとイクセも

分かっていた。

そしてアルも。表面上は冷たくても、実は面倒見が良い彼もまた、リオンを案じているのだろう。

「うっわー、二人とも容赦ないね」

「いやー、二人ともそんなにオレから離れたくないって？　そこま
で言われちゃ行くしかない」

ルーアも楽しそうに見えるのはルカの気のせいか。素直ではない二人を笑っているのだろう。例えリオンを案じていたとしても、アルもイクセも素直にそれを表に出すような者たちではない。

リオンはそんな二人の気遣いを知ってか知らずか、照れたように笑っている。

「言っていない」

「言っわけないだろう」

即座に仏頂面になったイクセと不機嫌そうなアルの鋭いつっこみが返って来た。リオンを心配しているとは思えない二人に、ルカはあれ、と首を傾げる。

もしかや本当に嫌なのだろうか。段々不安になって来て頭を掻く。アティは相変わらず柔らかな笑みを浮かべており、仲が良いのか悪いのかよく分からない彼らを見つめていた。

「では我とイシュリアは彼等に同行させて頂こう。構わないか？
ゲイル殿、ウィンディ」

咳払いをして言ったのはウイスタリア。ヴァイスファイトの狙い

が何であれ、別々に動くよりは行動を共にした方がいい。

滅竜歌を操るヴァイスファイトの前では、一瞬の油断が死に直結する。いくら始竜とは言え、彼もまた始竜であったものだ。三度も遅れを取る訳にはいかない。

ウイスタリアはまだ始竜としては最年少で未熟だが、だからと言ってそれを免罪符にはしたくなかった。

「俺は構わない。ゼフィも異論はないだろう？」

「はい。ゲイル様の仰る通りに。よろしくお願いします、セレス。イシュリアさん」

ゲイルにしてみれば、ヴァイスファイトなど知ったこっちゃないが、それでもこの世界を好き勝手にされるのは気に入らなかつた。世界は玩具ではない。滅びたいなら勝手に一人で滅べばいいのだ。

丁寧にお辞儀をするゼフィはゲイルとは違って礼儀正しい。そんな彼女がゲイルの相棒だと考えれば不思議である。長年の付き合いならば、少しはゼフィの丁寧さを見習って欲しいものだ。

「セレスとゼフィじゃどうにも心配だな。フィー」

それまで考え込んでいたりオンが、おもむろに右手を上げた。

次の瞬間、彼の腕の上に現れたのは小さな鳥。燃え上がる炎を思わせる羽毛の翼は赤から橙へと変化しており、リオンの髪に似ている。しなやかな尾はまるで鞭のごとく。

光の加減によって朱や真紅にも見える鳥は謳われる不死鳥のよう。その翼が羽ばたく度に火の粉が舞い上がるような錯覚に見舞われた。

「紅蓮の眷属だな」

「そのとおり。名前はフィー。オレの眷属だよ」

アルの言葉にリオンは頷き、自らが力を与えた眷属の頭を撫でる。ウイスタリアがイシュリアに己の力を分け与えたように、リオンの腕の上にいるフィーという鳥もまた、リオンが力を与えた眷族である。

紹介されたフィーはお辞儀をし、改めて自己紹介をした。

『お初にお目にかかります。主より与えられた私の名はフィー。どうぞお見知りおきを』

『フィー』が発した声は普通の人間には分からないが、この場に
いる人間は皆ドラグナーであるため、心配は不要だろう。

始竜たちは己の力を分け与え、眷属を作ることがある。長い時を
生きるには孤独は辛い。それに加え、自らの手となり、足となる存
在が必要になるからだ。

ウイスタリアが司るのは天と水、彼の眷属であるイシュリアもそ
の属性を持っている。

リオンの眷属であるフィーも同じ、火を司るもの。その証拠にフ
イーはまるで、炎そのものであるかのような不死鳥の姿をしていた。

「フィー、オレの代わりにセレスたちを頼む」

『御意に。我が主よ』

「あなたの眷属は誰かさんと違って礼儀正しいな」

リオンとフィーのやり取りを横目で見ていたイクセが何となしに
呟く。いや、何となしにではない。口では誰かさんと言ってはいる
が、彼の紫の瞳はしっかりとリオンに向いている。

そうでなくても、決して鈍くはないリオンだ。その誰か、が自分を指していることくらい分かっている。

「まあ、礼儀正しいオレはおいといてレインか？」

「こーら、リオン兄。そんなこと言っちゃ駄目だよ」

ちなみに彼が怒るのは、リオンも承知の上である。そして案の定、怒るとまではいかないが、アルの金色の瞳は鋭く細められていた。しかしアルが何か言い出す前に、二人の間に割って入ったのはルカだった。両手を腰に当て、仕方ない兄を見る弟のようにリオンを見上げている。

その様子があまりに微笑ましくて、ゲイルとゼフィは顔を見合わせて微笑んだ。アティは柔らかな眼差しで三人を見つめ、イクセヤルーア、ウイスタリアとイシュリアもそんな彼等を見つめている。

「んー……やっぱりルカはカワイいな」

そう言ってぬいぐるみにするようにルカを抱きしめようとしたリオンだが、その手は虚しく空を切った。あれ、と顔をあげるとルカはアルの腕の中にいる。

アルがかなり不機嫌そうな顔をしているのは、見間違いではないだろう。

苦虫をかみつぶしたように秀麗な美貌を歪める青年を、ゲイルは驚きが混じった表情で見っていた。彼は何に対しても淡泊であったと思う。ルカと共に過ごすようになってゲイルに小言を聞かせたりはしていたが、彼がここまで感情を露にする場面をゲイルは目にすることがない。

『こんなボンクラ親父よりよっぽど父親らしいな』

もつともアルが不機嫌な理由は、父親が息子に抱く感情とは少し違っただろうが。

いくつもの絶望を味わったことだろう。いくつもの慟哭と悲しみを見てきただろう。何故、世界はこんなにも不条理で救いがないのか。誰か教えて欲しい。白銀や紅蓮、蒼穹は言った。神にはなれないと。

ではどうすれば良かったのか。怨嗟と慟哭は嫌でも頭の中に入ってくる。生きたいと願う声が、死にたくないとの叫びが。

どこで狂ってしまったのだろう。その全てを無視して始竜として生きることなど、ヴァイスファイトには出来なかった。神になりたいた訳ではない。ただ、助けたかった、救いたかった。何の罪も無い命を。その選択は始竜として間違っているのかもしれない。

だがそれがヴァイスファイトⅡグラフィックⅡノスフェライトが望んだ事。例え白銀や紅蓮でも邪魔させない。

歪んでしまったこの魂は、全ての始竜たちの魂が還る輪廻の輪には戻れないだろう。それでも構わなかった。

自分が願い、感じたこの思いは刷り込まれた本能とは違う、偽りでもない。それだけは決して曲げる事が出来ない誓い。

始竜は世界の支柱などではない。この全てを蝕む毒だ。だから早く消してしまわなければ。そこまで考え、黒髪の青年　かつて暁闇の君と呼ばれていた彼はフードを目深に被り直した。

フードを目深に被った彼は一見するとかなり目立つはずだが、雑踏に紛れてしまえば意外に気にならない。それとも道行く人々はただ不干涉なだけなのだろうか。

そんな彼の隣には一人の子供が居た。性別は分からないが、愛らしい顔立ちをしている。雪のような真っ白な髪に夜色の瞳を持った子供は、物珍しそうに周囲を見回していた。

「……ミラ」

ヴァイスファイトが発した名に子供は不思議そうに青年を見上げた。恐らく、ミラと言うのはその子供の名前なのだろう。長身の彼と比べて、随分小さいことから兄弟に見えるかもしれない。

しかし彼らの間を流れる空気はとても家族とは言えなかった。どちらかと言えば、ヴァイスファイトの方が距離を掴みかねているような、そんな印象を受ける。

「私からはぐれるな」

「うん、ミラなら大丈夫」

ミラはにっこりと笑い、ぴったりとヴァイスファイトの後を付いてくる。その笑顔を見た途端、後悔の念がヴァイスファイトの心^よを過ぎ^よった。

だがそれを一瞬で打ち消し、街中に行く。もうすぐだ。もうすぐヴァイスファイトの願いが叶う。

それに今更、何を迷うことがあるう。もう賽は投げられてしまったのだから。

永遠はいらない

こうして外の世界を歩くのは何百年ぶりだろう。始まりの竜であるアティは滅多なことでは出歩かない。最後に『外』に出たのはウイスタリアが生まれた時だろうか。

アティが眠りつく前と比べて随分、変わってしまった、と言うよりは彼は世界に触れていない。

ただ雰囲気は違うと思う。漂うマナも空気でさえも、アティが受け継いだ記憶に残る創世の時とは何もかもが違うのだ。

ただ一つ変わらないのは、アティがこの世界を愛しているということ。そしてその世界の中には当然、ヴァイスファイトも含まれていた。

悲しい子だとアティは思う。彼は誰よりも優しくかったから。

自分達は世界を見守るために創られた命。それに対してもどかしさを覚えることはあっても、その運命を呪った事は一度もない。

だがヴァイスファイトは違うのだ。己の運命を呪った。犯してはならない禁忌を犯した。だけど、

『もう、いいよ。きみはあとどれくらい、傷付くつもりなの？』

彼は決して世界を憎んでいるわけではない。ヴァイスファイトが傷付くだけだ。彼の考えはアティにも分からない。それでもヴァイスファイトはかつて同胞だった。彼のことはよく知っている。自分たちに刃を向けるような人物ではない。

変わってしまったと言うのは簡単だが、本当にそうなのだろうか。何かを見逃していないのか。

アティがそう考えた時だ。前を歩いていたはずのルカがやって来たのは。

「アテイ？」

「どうしたの、ルカ？」

彼の相棒であるアルは小さな竜の姿で前を歩くりオンの頭に乗っている。お陰でリオンはイクセとルーアからからかわれる始末であった。将来はげても知らないぞ、と。

竜にはげるも何もないのだが、イクセはからかいたくて仕方ないらしい。そんなイクセはヴァイスファイトについて気にするそぶりもない。

「アテイが悲しそうな顔をしてたから。ヴァイスファイトのこと？」

「……うん。彼はね、始竜でなければこんな想いをする必要はなかった。このまま続けてもあの子が傷付くだけなのに。あの子はただ、優しすぎたんだ」

どうしてこの少年は他人の気持ちに聡いのだろう。そんな彼には言い繕っても意味が無い。

純粹に悲しかった。彼が始まりの竜でなければ悲劇は起きなかつただろう。彼が誰よりも人や竜に近かったから、他人の痛みを見過ごすことが出来なかった。

アテイとて傍観することが正しいとは思っていない。だが自分たちの選択が正しいとか間違っているとか、簡単に言えるほど単純なことではないのだ。

「なら、俺たちが止めよう。何よりもヴァイスファイトのために。あの人にこんなことさせちゃいけない。それは俺にだって分かるよ」

それは簡単なことではないかもしれないけど、ル力は敵だと簡単に割り切ることが出来ない。

彼の紫水晶の瞳の中に見えた憎しみ。その中には確かに悲しみの色があった。それはほんの僅かなものであったのかもしれない。

それでも見えたのだ。出来るなら助けたい。

「ありがとう。流星はレインが選んだひとだね」

アティはもう憂いを帯びた表情ではない、太陽を思わせる温かで優しい笑みを浮かべている。褒められると少しだけ照れくさくて、ル力はそれを紛らわすように頭をかいた。

「ここまで大所帯なのも久しぶりだな、ゼフィ」

ゲイルは隣を歩くゼフィに声を掛けた。運び屋として世界中を飛び回る彼にしてみれば、ゼフィ以外と旅をする機会はあまりない。運びものが人である場合を除いてだが。運び屋と言っても所定の街までエスコートというか護衛を引き受けることもあるからだ。

本日の同行者は二人と一匹。青年の姿をしたウイスタリアと騎士のようなイシュリア、彼女の肩に乗る鳥のフィー。皆外見だけならゲイルより十歳は下である。

「そうですね。……ゲイル様、ルカ様と一緒にではなくて安心しておいでですか？」

容赦のないゼフィの問いにゲイルは思わず押し黙る。彼女はやらかな笑みを浮かべているが、目が笑っていない。ゲイルが何も言えなかったのは凶星だったからだ。

ルカのことは大切に思っている。シルフィア同様にだ。

しかしそれを言葉や行動に表すことがどうしても出来ない。気恥ずかしいということもあるし、今更父親面をするのも、との想いがあるからだ。

いや、言い訳で、ただルカに嫌われるのが怖いだけかもしれない。

「さあな。オレはただ恐れているだけなのかもしれない。良い父親とは言えなかったからな」

ルカが一番辛いときに一緒にいてやれなかった。心のどこかで向き合うことから逃げた臆病者だと笑う自分がいる。アルがゲイルを見て口をすっぱくして言うことも分かっているのだ。

銀色の竜は言う。ルカには私ではなく父親が必要なのだ、と。

「……ルカはゲイル殿のことを嫌ってはいない。貴方との接し方が分からないだけだ。それは我が言うまでもなく、貴方自身が理解しているだろう？」

「かもしれない。だが俺は分かっているながら、その一歩が踏み出せない臆病者だ」

ウイスタリアの董色の瞳は真っ直ぐにゲイルに向けられており、彼がどれだけ自分を案じてくれていたかが分かる。ルカはゲイルを嫌ってはいないのだらう。接し方が分からないのはルカも同じなのだ。

たかが一歩、されど一歩。その一歩を踏み出すことが怖い。

自嘲するように笑うゲイルにウイスタリアも、ゼファイでさえかける言葉が見付からなかった。これは自分達部外者が口を挟む問題ではないかもしれない。

けれど、ウイスタリアとゼファイは気兼ねなくルカとゲイルが笑い合えるように、と願っている。それは決して間違っていないはずだ。

「俺の話はもういい。取りあえずはいつも通りにさせてもらおう。もし何か感じたら教えてくれ」

「……人というものは難しいな」

ゲイルは一方的に話を切ると、歩く速度を上げた。その後を慌ててゼファイが追う。

ウイスタリアの咳きは隣を歩くイシュリアの耳に入った。人間は難しい。竜であるなら簡単である意思の疎通さえ、ままならないのだから。

嘆きともとれる主の言葉に、紫掛かった瞳を細めたイシュリアは重々しく頷いた。

「ええ、そうですね」

別段、何かが変わった訳では無い。

いや、変わったというのなら自分の考え方だろう。イクセル・クライン。始竜として生まれるはずだった命。

そう聞かされた時、心の中で納得している自分がいた。すつきりしたような、パズルのピースがぴったりはまったような不思議な感覚。

物心つく頃からずっと、何かが引つかかっているような気がしていた。異質さを感じていたと言っていた。

宿を取り、皆が眠りについてからもイクセは中々眠ることが出来なかった。部屋を抜け出し、屋根に上る。見上げた空には満天の星々が煌めいている。銀の星屑はまるで砂糖菓子のように。それなのに手を伸ばしても掴めない。

刹那、唐突に現れた気配にイクセは振り返った。

「夜更かしする悪い子みーつけた」

振り返った先に居たのは、目の覚めるような美貌を持つ青年だった。焔を思わせる長い髪にどこまでも深いワインレッドの瞳。闇の中でもより一層美しく見える。

炎の化身であるかのような青年　　リオンは面白そうに言つとイクセの隣に腰を下ろした。

「悪い子って歳じゃない」

「ねえ、始竜になる気ない？」

子ども扱いされるのは気にいらぬ。もう十九なのだから。とは言え、彼ら始竜にしてみれば、誰であろうと子供なのだろうが。

唐突に紡がれた言葉に、イクセは言葉を失った。何と答えていいかさっぱり分からない。そもそも、問いの意味が分からないのだ。目を白黒させるイクセに、リオンは尚も続ける。

「もしヴァイスファイトの魂を受け入れれば、イクセは始竜になれる。元は始竜として生まれるはずだった器だ」

イクセはリオンが言わんとすることを理解した。

もとは始まりの竜として生まれるはずだった命。もし彼イクセが始竜の核たるヴァイスファイトの魂を受け入れれば、始竜となれる。『永遠』を生きることが出来る。

死してもその記憶は受け継がれ、『イクセ』という存在は残るだろう。

「……断わる。俺は永遠なんていらぬ。それに俺はヨボヨボの爺さんになって沢山の子供や孫達に囲まれて死ぬっていう夢があるんだよ」

イクセは永遠なんていらぬ。そんなものくそくらえだ。

ただ一瞬一瞬を噛み締めて生きて行きたい。イクセル・クラインは、人として生まれたからには人として死にたいのだ。今の自分は

『竜』ではなく『人』なのだから。

イクセの答えに、リオンが堪えきれずにふき出した。心外そうに眉を寄せるが、リオンが気にした様子は無い。ひとしきり笑った後、彼は寂しげに、あるいは羨ましそうにこう言った。

「良い夢だ」

リオンは運命を呪ったことなど一度もない。何故なら、それが自分たちの中に刻まれた本能だから。

しかしイクセの平凡な、だが素晴らしい夢を聞いてリオンは微笑んだ。確かに彼は永遠を生きる始竜なんかより、刹那を生きる人間の方が似合っている。

リオンには決して手に入れることが出来ないものだからこそ、イクセの夢は余計に眩しく見えた。持たざるものを望むのは人も竜も同じなのだ。

「……それに永遠なんて地獄だろ？」

イクセはリオンを見つめて笑う。永遠を生きる。それは人が追い求めた夢の終着点なのかもしれないが、そんなもの真つ平ごめんだ。イクセル・クラインはアルやリオンのようにはなれない。

彼らのように世界のために己を捨てることなど出来ないから。自分自分だ。

「地獄ね、いい例えだ。確かにこの世界は美しいけど、それと同じくらい醜いから」

永遠を生きる。それは生き地獄だと、イクセは言いたいのだろう。見上げた星空は一点の汚れもなく美しいが、世界は美しいものばかりではない。人は創世の時より飽きることなく争い続けている。

何の理由もなしに同族を殺すのは人間だけだ。

リオンが見続けてきた世界は美しくもあり、それと同じくらい醜かった。

「だから俺は“人間”でいい。綺麗なものも醜いものも知ってるから。とてもあんたやアルみたいにはなれそうにない」

イクセは世界のために永遠を生きるなんて出来そうもない。きっと世界に絶望してしまう。ヴァイスファイトのように。

あんたやアルみたいにはなれそうもない。イクセの答えを聞いたリオンは困ったように笑った。

「オレはさ、褒められるような始竜じゃないさ。凄いのはレインの方。始まりの時からずっと生きてるから。レインは汚いものも綺麗なものも、喜劇も悲劇も全てを見て来たんだろう」

「な、やっぱり俺には無理だ」

ルカとの出会いがどれほどアルの救いとなっただろう。始竜の宿命だと、世界と消え逝く命を見守ってきた彼。辛くないはずがないだろう。

それなのに彼はただ一人、始まりの時より生きる竜として耐え続けた。そんな真似はリオンには出来ない。耳を塞ぎ、目を閉じていた自分には。だからリオンは笑うだけだ。イクセの気持ち分かりすぎてしまうから。

「変な話をしてさ、悪かった。邪魔したな」

去ろうとしたリオンの服の裾をイクセが掴んだ。普段は絵に描いたような軽薄男だというのに、何故急にこんな話をしたのだろう。

気にしてくれていたのか。

リオンの驚いた声にイクセは初めて自分が彼の裾を掴んでいたことに気付いた。

「なあ、もう少し聞かせてくれないか？ あんたたちのこと」

不思議そうに自分を見返すリオンに、ばつが悪そうな顔でイクセは言った。

まだ眠れそうもない。ならばリオンから話を聞きたかった。始竜はほとんど眠りを必要としないらしいし、彼等や“ヴァイスファイト”について聞かせてほしい。否、知らなければならぬのだ。

夜はまだ長い。再びイクセの隣に腰掛けたリオンは美しく微笑んだ。

「勿論、イクセの誘いを断るほど野暮じゃない」

きみがきみだから

「……………良かったの？」

薄っぺらいベッドに横になり、寝返りを打ったルカは枕元で丸くなった彼に聞いた。隣のベッドではルーアが、向かい側のベッドにはアティが静かな寝息を立てている。

ルカの声にアルの瞼がぴくりと動き、月を思わせる金色の瞳が露になった。

『任せておけ、と言っていたからな』

心配するルカに対し、アルはあくまで気軽に言う。ルカが言いたいのはいくせのこと。彼の様子が少しだけおかしいことに二人は気付いていた。

イクセは気にした風ではなかったが、気にならないはずがない。自分が始竜として生まれるべきだったと言われて驚かない方がおかしいのだ。

イクセの性格からすると、自分達の前では遠慮して、気にしないふりをしていたと言う事も考えられる。心配するルカにリオンが言ったのだ。イクセのことは任せて、と。

「リオン兄なら大丈夫だと思っけど……………」

『私たちよりあやつの方が適任だろう』

見上げた窓からは屋根の様子は見えない。満天の星空が広がっているだけだ。

イクセの話聞くのなら、結構な付き合いとなったアルやルカ、

ルーアよりも知り合ったばかりのリオンの方がいい。自分達ではきつと、遠慮して彼は話してくれないだろうから。

その点、リオンなら色んな意味で適任だろう。軽そうに見えても、彼は他人を思いやれる人物だ。それにリオンはリオンで、イクセを案じているに違いない。

『豊穣でも良かったと言えば良かったが、あれは天然だからな』

「うん。アティは直感で話してるもん」

アティを天然だと言うアルの口調は仕方のない子供の話をする親のようなもので、ルカは思わず破顔した。それはそれで彼の良いところなのだが、確かに相談相手をつとめるには少々心もとないだろう。

『お前は心配してくていい。イクセルなら大丈夫だ』

「うん」

『さあ、もう寝るぞ。ルカ』

アルはそこで話を切ると、さつさと丸まって目を閉じた。

ルカやゲイルを除いた人間とはある程度、距離を置いていた彼がイクセを信頼して、彼なら大丈夫だと励ましてくれる。ルカはそれが嬉しくてたまらない。

そんな彼を微笑ましく思いながらルカも瞳を閉じた。

「おやすみ、アル」

ルカとアルが眠りについた後、ルーアはそっとベッドから身を起こした。

隣からは健やかな寝息が聞こえており、穏やかなルカの寝顔に思わず顔が綻ぶ。室内を照らすのは淡い月の光だけ。優しい黄金の光は全ての子らを等しく包んでくれる。その中には造られた存在である『ルーア』も含まれるのだろうか。

考え込むように目を伏せた瞬間、柔らかな声が響いた。

「どうしたの、ルーアくん？」

それは他の二人が起きないよう配慮してか小さな声だったが、人造竜兵であるルーアの耳には十分届く。

優しげに問う彼の金を散らした琥珀色の瞳は、まるで星のような光を放っている。アティの瞳を見ると、不安などどこかへ行ってしまいそうだ。

「……アティ兄。ちよつと眠れなくて」

「きみは人造竜兵なんだよね？」

アティの形の良い唇から紡がれた人造竜兵という言葉にルーアは表情を硬くして頷いた。

人竜大戦時に作られた遺産　人造竜兵の唯一の成功体。それがルーアだ。

ルーアはアティが人造竜兵という名を知っていたことに驚いていた。自分が生まれたのは千年近く前。アティは眠りについていないのか。

「……ぼくはね、竜でも人でも、そして人造竜兵にだって魂はある

「思ってる」

俯くルーアにアティは言う。彼の言葉はいつも唐突でルーアを混乱させるが、不思議と真理をついていた。

魂。目に見えぬいのちの形。アルカディアでは魂は流転すると言われている。

人の手によつて作られたルーアに魂なんてあるのだろうか？ ルーアハ「メシア」ラズライトは作りたいのち。ルーアがどんなに背伸びしても、その事実は変わらない。

「本当に？」

「うん。じゃあ聞くけど、確かにきみはひとの手によつて作られたいのちなのかもしれない。けど、きみという自我は誰かにつくられたものじゃないでしょう？ きみがきみなのは、人造竜兵^{ドラグーン}だからじゃない。きみがルーアだから」

イクセの話聞いて、ルーアは不安になったのだ。自分という存在がこの世界に存在しているのか、ヴァイスファイトと同じく歪んだモノではないのか。そう考えれば眠ることなど出来なかった。

ルーアの体は竜の魔水晶を核として生まれたものだろう。兵器として生み出された存在だ。

だが彼が持つ自我は決して誰かに作られたものではない。ルーアがルーアなのは、人造竜兵だからではなく、彼がルーアハ「メシア」ラズライトだから。それ以外の何物でもない。

「アティ兄……」

「だから何も悩む事はないんだよ。きみはこの世界に必要とされている。大丈夫。きみは間違いなく、アルカディアに生きるいのちだ

「よ

「ありがとう」

慈愛の笑みを浮かべて頷くアティを見て、不覚にも泣きそうになった。必要とされている、アティのその一言でどんなに救われるだろう。

嬉しかった。自分はこの世界で生きていいだと認められた気がする。瑠璃色の瞳に涙をためて礼を言うルーアに、アティは微笑み、無言で首を振った。

そこは地獄といっても過言ではない光景だった。鼻を突く血臭、折り重なるように倒れた竜たち。皆、例外なく血塗れであり、もはや虫の息と言っている。数はざっと三十程度だろう。彼らに刻みつけられた傷は刃物で付けられたものでも、恐らくは魔歌によるものでもない。

まるで内側から破壊されたような痛々しい、目を背けたくなるような傷だった。

竜たちは苦しげに呼吸を繰り返し、怨嗟の瞳でこの災厄を引き起こした人間を見つめている。

その先にいたのは、一人の青年だった。夜を思わせる黒髪に同色の外套で体全体を包んでいる。鋭い刃を思わせる美しい顔立ちをしていたが、宝石のような紫水晶の瞳には何の感情も浮かんでいない。ただ今にも死に逝く竜たちを見つめているだけだった。黒髪の青年は視線を彼等から外すと、背後にいる人物に向けて恭しく礼をし、膝をついた。

豪華絢爛な椅子に腰掛け、青年を見下ろしているのは壮年の男。紺色の髪を撫でつけ、頭には金の宝冠を乗せている。それに加え、男が纏う金糸、銀糸の複雑な刺繍が施された礼服は明らかに絹で作られており、最上位。つまりは王を表す紫の外套を身に着けていた。

そしてその周りには男を守るように、白銀の鎧に身を包んだ騎士たちが控えている。

「貴様の言い分は真だったようだな。名を何と申す」

膝を付き、頭を垂れる青年に男は言った。その声に見下すような響きがあることは青年も気付いている。表を上げた青年はどこか哀れみに似た瞳で男を見つめた。

「ヴァイス、と申します。陛下」

ヴァイスとは古い言葉で白を意味する単語だ。黒髪に全身黒尽くめな青年と正反対の名とは随分な皮肉である。何もかもが可笑しく

て男　否、王は笑った。

その時、折り重なるように倒れていた竜の一体が血塗れになりながらも、最後の力を振り絞って立ち上がる。控えていた騎士達が騒然となった。

竜の恐ろしさは彼らが一番知っている。鋼のように硬い鱗は生半可な攻撃を受け付けず、強大な魔力を持つ彼らは恐ろしい喪歌を行使する。とてもただの人間が太刀打ちできる存在ではない。

しかし黒髪の青年　ヴァイスは慌ててなごいなかった。ゆつくりと振り向くと、形の良い朱唇から無慈悲なる旋律を紡ぎ出す。

するとその刹那、竜が力の限り咆哮した。同時に顎から血が滴り落ちる。普通の人間にはただの雄叫びとしか聞こえないそれは喪歌の合図。正に命を削って紡いだ喪歌だった。

全てを焼き尽くし、飲み込まんとする凶悪な炎が迫るが、炎を前にしながらも青年は笑っていた。嘲るように、それでいて凄艶に。

『血塗れの刃は我が手中。四散せしは幾千の叫びにして幾万の嘆き。世界を埋める幾億の慟哭。白は緋へと染まり、真紅の涙が流れ行く。遙かな詩は世界より途絶え、世界は滅びに満たされる。昏き破滅を知るならば、今反逆の証を立てよ　』

それを“歌”と呼んでいいものだろうか。魔歌のように神秘を感じさせる諧調でもなく、竜の喪歌のような力強さ、猛々しさを感じさせるものでもない。

まるでこの世の怨嗟と慟哭を集めたような、禍々しい、それでいて胸を締め付けるような悲しい旋律だった。

何故、どうして、そこまで世界を呪うのだろう。その歌は正に血を吐くような叫びであり、聞き届けられなかった訴えだった。

漆黒の青年の口から紡がれた歌。それは迫りつつあった炎をかき消し、喪歌を歌った竜に到達した、のだろうか。王や騎士達の目には何も見えない。

けれど人よりマナを感じられる竜たちの目には、マナの繋がりや破壊する波動に見えたことだろう。

青年の歌を受けた竜の体が光となって消えて逝く。純粋なマナによって構成される竜族は死ねば体はマナに還元され、大気に溶ける。残されたのは握りこぶしほどの乳白色の結晶、魔水晶と呼ばれるもの。

竜の魔力と彼らが取り込んだマナが結晶化したそれは、強大な力を持つ魔力増幅器とも言われている。

まるでそれを待っていたように、折り重なるように倒れていた竜たちも光となって消えた。惨劇を物語るのは、彼らが残したおびただしい量の赤黒い血と、残された魔水晶。

それを見ていた王は堪えきれずに笑った。むせ返るような血の匂いすら、気にも留めずに。

「呆気ないものだ。我らでは太刀打ち出来ぬ存在だとばかり思っていたが。それともヴァイス、貴様が特別なのか？」

肘掛に肘を付き、さも面白いと言ったように王は問う。恐らくは娯楽に飽きていただろう彼に取っては良い暇つぶしになった、ぐらいのものだろう。

だがその瞳には紛れもない恐怖と野心が刻まれている。

「私だけが、と今は申しておきましょう。私もまだ死にたくはありませんので」

自分に対して物おじしない青年を王は気に入っていた。それはあ

る種、人が動物を可愛いがるのと同じかもしれないが、王が彼に抱いていた感情を変えたのは確かである。ひとしきり笑った王は臣下たちを魔水晶の回収に当たらせた。

「良いだろう。貴様を私の臣下に加えてやる」

それが彼と王の約束だった。竜を一体、倒せる魔奏士がいるだけで他国への牽制になるというのに、青年は一人で三十ほどの竜を殲滅してみせた。

これなら忌まましい竜どもを殺し、魔水晶を手に入れることだって出来る。そうなれば王に逆らう者など、国など全て滅ぼしてしまえばいいのだ。

「有り難き幸せ」

青年は再び膝き、顔を伏せる。伏せられた顔に嘲るような笑みが浮かんでいたことは王でさえ知らない。彼の真意を知るのはただ一人、ヴァイスと名乗った青年のみ。

白い夢

太陽の光が室内を照らしている。まだ朝早い時間だ。それまでルカの枕元で体を丸め、静かに眠っていたアルが唐突に目を覚ました。嫌な気配がする。

しかし何がどう嫌なのか、上手く表現することが出来ない。だが確実に何かが起こっている。竜としての本能が警鐘を鳴らしていた。

ルカやイクセ、ルーアはまだまどろみの中にいたが、その直後、炎を思わせる髪をかきあげ、リオンが身を起こした。それとほぼ同時にアティも静かに起き上がる。

『あやつが動いたか』

金色の目を閉じ、すぐに開けたアルは言った。

いや、口を介する音ではなく、思念を介したものだ。あやつ、とは間違いなくヴァイスファイトのことだろう。その声は普段の彼よりずっと低い。

『だろうな。嫌な気配だ。胸糞悪い』

リオンの方は不快感を隠そうとすらしなかった。不機嫌そうに美しい顔を歪め、頭を掻く彼をルカが見ていれば、驚いたかもしれない。いつも飄々として笑みを絶やさないあのリオンがだ。

けれどアルだけがその奥に隠された悲しみに気づいていた。

『また使ったんだね。“あれ”を。ぼくにも分かるよ、感じられる』

厳しい表情を浮かべるアルと、嫌そうな顔をするリオン。残った

アティは悲しげに目を伏せた。

ヴァイスファイトはまた滅竜歌を行使したのだ。それもリオンに使った完全なる滅竜歌を。

マナとマナの繋がり破壊するそれが使われれば、アルたち始竜は感じられる。ただし、限定的であつたり不完全なものなら別だが。

『……………何でだ、どうしてあいつは……………』

『ミリイ……………』

顔を伏せ、拳を震わせるリオンにアルもアティも言葉を掛けることが出来なかった。

かつてヴァイスファイトが始竜であつた時、リオンとは仲が良かった。性格は正反対だったが、それでも上手くやっていたのだ。

リオンがヴァイスファイトを滅ぼすと決めた時、どんな気持ちであつたか、二人には分からない。いつも笑って本音を見せない彼だから。

悩まなかつたはずがない。何度も悩み、出した結果がアルや理想郷の人々と共にヴァイスファイトを滅ぼすということだった。心を殺して彼を滅したはずだった。それなのに彼は生きていた。魂のみの存在となつて。

また、もう一度お前を殺せというのか、かつての同胞であり友であつた者を。口には出さないが、それは血を吐くようなりオンの叫びだった。

ルカは起きていた。普通の人間であるのなら、彼等の思念を介した会話を聞くことは出来なかっただろう。いや、声を聞く者^{ドラグナー}であっても。

だがドラグナーとして高い力を持つルカは別だった。元々、彼等の力は精神感応だと考えられている。本来なら分かるはずのない声を聞き取る力は確かに常識を超えたものだ。

竜^{ドラグナー}と心を通わせる者であるルカには意識せずとも、彼等の声が聞こえてしまった。

『あやつが動いたか』

耳に響く心地の良い声はアルのもの。諦めを含んだ、それでいて普段より重々しいアルの口調。

あやつ、というのはヴァイスファイトのことだろうか。

『だろうな。嫌な気配だ。胸糞悪い』

するとそんな声にリオンが答えた。いつもの彼からは考えられないほど、声音に不快感が表れている。がしがしと頭を掻いているのかもしれない。

その声がほんの少しだけ悲しげに聞こえたのはルカの気のせいだろうか。

『また使ったんだね。“あれ”を。ぼくにも分かるよ、感じられる』

次に聞こえたのはアティの声だった。悲しげな、残念そうな彼の声。

ヴァイスファイトが使ったもの。それは間違いなく滅竜歌。ルカは体が震えた気がした。竜を滅ぼすために作り出された歌。全ての

魔歌の元型なるもの。

人が作り出した一つの奇跡にして、罪。取り返しのつかない過ち。あんな残酷な歌をまた歌ったというのか。

何のために？ あの人は始竜を憎んでいるのではなかったのか。

アルたちが何も言わないということは、ウイスタリアたちに滅竜歌を使った訳ではないのだろう。罪もない竜たちを犠牲にして、彼はどこに行こうとしているのか。

まだ十五年という、竜にとって瞬きほどの時しか生きていないルカには分からない。ヴァイスファイトの気持ちは。きっと辛かった、悲しかっただろう。

けれど、だからと言って彼がやるうとしていることは許されることではないのだ。

『……………何でだ、どうしてあいつは……………』

『ミリイ……………』

絞り出すようなリオンの声に、彼の名を呼ぶことしか出来ないアティ。リオンとヴァイスファイトの間にはルカが知らない何かがあったのかもしれない。

何故なら、どうして、と言う彼の声は今まで聞いたことのないほど切羽詰まったものだったから。ルカはただ始竜たちの会話を聞いていることしか出来ない。

何も出来ない自分が悔しい。せめて彼等に悟られぬよう、少年は寝たふりを続けた。

白い、真っ白な世界だった。雪のように雲のように汚れの無い純白。ルカは一人でその真っ白な空間に立っていた。建物もなく、人もいない。佇んでいるのはルカだけだ。

全てが白で統一された世界。そこでは青い髪に赤い瞳のルカだけが異物だった。何者にも穢されない『純白』。美しい反面、ここには何も無い。悲しいくらいに。

「綺麗だけど……何も無い。あれは……？」

自分以外何もなく、誰もいないのだと思っていた。

だが誰かがうずくまっている。周囲に溶け込みそうなくらいほど見事な白髪に白の服。

ルカはまるで吸い寄せられるように白い子供に近付いた。しゃがみ込み、視線を同じ高さに合わせる。

「きみ？」

ゆっくりと話しかければ、子供はルカの方を向いた。

整った目鼻立ちをしている。性別までは分からないが、あと五年、十年すれば美しい娘、美貌の青年となるだろう。

影を作る睫毛は一本一本長く、瞬きをすればよく分かる。大粒の宝石のような瞳は夜を思わせる不思議な色をしていたが、今やその瞳からは透明な雫が流れ落ちていた。

「どっつして泣いてるの？」

ルカの言葉に彼、もしくは彼女は初めて自分が泣いていることに気付いたらしい。

おずおずと白磁を思わせる己の頬に手を寄せた。不思議そうに涙で濡れた手とルカの顔を何度も見比べている。

「……わからない。なににもわからない」

「きみの名前は？」

分からないと何度も首を振る子供にルカが尋ねれば、その子は蕾が花咲くように微笑んだ。よく聞いてくれたと言わんばかりに。

その子の名を聞く前に全てが薄れて行く。全てを埋め尽くす雪のように。

次に目を開けた時、そこは自分達が一泊した宿屋の一室だった。

アルたちの会話を聞いてしまったルカはその後、本当に寝入ってしまったのだ。

ゆっくりとベッドから身を起こせば部屋に誰もいないことに気付く。

「夢……？」

夢にしてはやけにリアルだった。あの子は誰なのだろう。雪のような髪に抜けるような白磁の肌、夜色の瞳が印象的だった。会った事などないはずなのに、どこか懐かしい。

視界が白く塗りつぶされる前、あの子は自分の名を伝えようとしていたのだろう。

だが最初の一文字しか聞き取れなかった。

自分でも分からないが、あの子の名前が聞けなかったのを酷く後悔している自分がある。ともあれ、考えても仕方ない。夢の中での出来事なのだから。

ルカは気持ち切り替えると身支度を整え、食堂に向かった。

人と竜の可能性

一瞬だけ感じた懐かしい気配にウイスタリアは顔を上げた。久しく感じていなかった近しい気配。受け継いだ記憶がその力を知っていると言っている。

ゲイルとゼフィは前を歩いており、何やら談笑していた。

イシュリアが訝しげに声を掛けるが、彼女の声など全く耳に入っていないようで、ウイスタリアは雑踏の中、無言で空を見上げていた。そうすることで声が聞こえるような気がしたのだ。

董色の瞳に映るのは空か、それとも別の何かか。

「主様！」

イシュリアはそんなウイスタリアを見て不安になった。確かに彼はイシュリアの前にいる。

だが『ここ』にいないような気がしたのだ。一心同体と言っても過言ではないウイスタリアが酷く遠い存在に思えてならない。懇願にも聞こえる声に、ウイスタリアの董色の瞳がゆっくりとイシュリアを映した。

「イシュリア？」

「申し訳ありません。どうかされましたか？」

彼が自分の声に気付かぬはずがない。それなのに、彼の耳にはイシュリアの声が聞こえていなかった。訝しげに自分を見る主に、イシュリアは何でもありません、と首を横に振る。

ウイスタリアは平静を装う彼女には気付かず、董色の瞳を細めて口を開いた。

「懐かしい気を感じた。あれは夢幻か……」

ウイスタリア達、始まりの竜は世界に存在するマナの属性の数だけ存在する。

今日覚めている白銀、暁闇、紅蓮、豊穰、風天、蒼穹に加え、眠りについていてる紫電、そして転生に入った夢幻である。

ウイスタリアが感じたのは、転生の輪に戻った夢幻の気配だ。水と夢、もつとも近い力であるため、感じる事が出来たのだろう。

「お目覚めになったのですか？」

「分からない。感じたのはほんの僅かな気配だった。いくら我と夢幻が近いからと言ってもそこまでは……」

もし夢幻の君が目覚めたのなら喜ぶべき事だが、イシュリアの問いにウイスタリアは表情を曇らせた。もし完全に目覚めているのなら、ウイスタリアだけでなく、始竜全てが感じる事が出来る。

しかし前を歩くゼフィに変化はない。これでは恐らく、彼女も感じてはいないだろう。何せウイスタリアでさえ、ほんの僅かしか感じる事が出来なかったのだ。あまりに小さなものであるため、目覚めてもいないかもしれない。

『セレス様。ゲイル殿や我が主に伝えた方がよろしいのではないでしようか？』

そう提案したのは二人の会話を見守っていたフィーである。もし夢幻の君が目覚めたのなら、ヴァイスファイトよりも先に保護をする必要があるからだ。自分たちだけではなく、年長者たちの意見も聞きたい。

勿論、杞憂であればいいが、取り返しのつかないことになっては遅いのだ。

「ああ、だろうな。ゲイル殿とウィンディには我から言うが、彼にはお願い出来るか？」

『はい、お任せください。我が主の名誉のために言わせて頂きますが、主は誰彼構わずあんな真似をする訳ではありませんから』

ウイスタリアはどうしても彼　　リオンが苦手なのだ。どう接していいかわからないこともあるし、妙にスキンシップが好きなことも理由の一つである。

困ったように端整な顔を歪めるウイスタリアに、フィーは納得したように頷いた後、リオンの名誉のために付け加えた。リオンが“ああ”なのはあくまで気に入った存在だけに対してである。

階段を降りながらルカは考えていた。

あの夢はなんだったのだろう。ただの夢ではない。きっと何か意味があるはず。ルカにはそう思えてならなかった。

雪のように真っ白な世界にいたあの子。助けを求めるような無垢な瞳で自分を見ていた。会った事もないし、見たことも無い。けれど、どこか懐かしい気持ちになった。

アルやリオンたちと居る時と同じようなあたたかい気持ち。それを上手く言葉に表すことは出来なかったが、嫌な感情ではないことは確かである。

一階の食堂に足を運べば、仲間たちの姿はすぐ見付かった。赤に黒、飴色に金色というかなり目立つ髪をしていたから。

真っ先にルカの存在に気付いたルーアがぶんぶんと手を振る。ルカも同じように手を振ればルーアは満面の笑顔を浮かべた。

「おはよう、みんな」

空いた席に腰掛け、ふと仲間たちに目を向ければ、アルを除いた三人は見慣れない髪型をしていた。

イクセはいつか見たように黒髪を頭の上で纏めたポニーテールで、リオンはやや癖のある髪を後ろで三編みにして背中に垂らしている。アティとは言えば、黄金色の髪を綺麗に纏め、髪飾りをさしていた。

「……どうしたの？」

「すごいでしょ」

「ありがと、メシア。長いと邪魔だからさあ」

えっへんと胸を張り、得意げそうにいうのはルーアである。確か、グラディウスの街でもルーアはイクセの髪を結っていたはず。気まぐれな猫のようにワインレッドの瞳を細めたりオンは、綺麗に編まれた髪を掴み、目の前まで持って来る。

アテイの方も気に入っているようで、にこにここと笑っていた。

『流石に私は遠慮したがな。髪を弄られるのは好きではない』

無然と言ったアルはアテイやリオンと違い、今までと同様、竜の姿でいることが多かった。サイズの違いも勿論あるだろうが、やはり本来の姿の方が落ち着くのだろう。

ぱたぱたと小さな翼を羽ばたかせたアルは、定位置であるルカの肩に乗った。

「アルの髪はさらさらだから一回遊んでみたいのに」

唇を尖らせ、不機嫌そうに頬を膨らませるルーアはこうして見ると本当の人間のよう。

つい忘れてしまいがちだが、ここにいる者は何百時もの時を生きただけである。だというのに彼らはそれを感じさせないくらい自然だ。

「ルカも起きたことだ。そろそろ話して貰おうか。『あやつ』はヴアイスファイトのことで間違いないな？」

さりげなく、平静を装ってイクセが言った。あの会話を聞いていたのはルカだけではなかったのだ。

イクセの紫水晶の瞳は、いつになく真剣な色を帯びている。始竜たちにはその一言で十分だったらしい。目配せをした彼等だったが、アルが口を開く。

『お前の言う通りだ、イクセル。ルカもルーアも聞いていただろ
うっ?』

思わぬアルの一言にルカは顔を強張らせた。それはルーアも同様
で、ばつが悪そうに視線を逸らす。そう、聞いていたのはルカだけ
ではない。イクセも、ルーアも聞いていたのだ。

始竜として生まれるはずだったイクセの声を聞く者としての力が
強いのは当たり前であるし、人造竜兵であるルーアが聞こえぬはず
がない。

何となく気まずい空気が流れる中、そんな雰囲気壊すようにリ
オンが手を叩いた。

「はいはい。それはそれで置いといて。本題に行こうか。なあ、レ
イン?」

『嗚呼、そうだな。確かにイクセルが言った通り、あやつとはヴァ
イスファイトのこと。あやつはまた行使したのだ。竜を滅ぼすため
の歌を』

竜を滅ぼすための歌、滅竜歌を。悔しげに金色の瞳を伏せるアル
を何とも言えない複雑な気持ちでルカは見つめた。彼は誰よりも始
竜として存在することの痛みと悲しみを“知って”いる。

あの時、非情になりきれなかった自分の責任だと、俯いた彼は思
っているのかもしれない。

淡泊で薄情に見えてもアルは優しい。それはルカにだけではなく、
始竜として生まれるはずだったイクセを気にかれたりしているし、
ルーアを軽んじることもない。ちゃんと“竜”として接している。

ルカは思わず親友で相棒の名を口にした。アル、と。

アルは長い孤独を、誰にも打ちあけられない悲しみを、ずっと一人で抱えて生きてきた。唯一、始まりの時より生きる竜として。ルカには及びもつかない様々なものを背負っている彼。どうすれば彼の苦しみを和らげることが出来るだろう。

「残念だけど、どこか、まではわからない。使ったのは一度だけだったから。でも嫌な予感がする。“みんな”が言ってるんだ」

「みんな？」

「うん。大地がそういつてる。ぼくは豊饒の君だから漠然とだけど、彼らの声を聞くことが出来るんだ」

繊細な美貌を歪め、悲痛な面持ちでアティが言う。彼の言う“みんな”とは誰のことだろうか。ルカが尋ねれば、アティは大地の声だと教えてくれた。

始竜たちが持つ名には意味がある。アルが白銀、リオンが紅蓮の名を持つように、アティもまた豊饒の君という名を持っていた。彼が司るのは創造と再生。それは様々な命が芽吹き、育む大地と同じでもある。

「良くはないってことだろ？　なら尚更どうにかしないと。あいつが滅竜歌を使わない保証なんてないんだから」

同じ存在になるはずだったイクセには分かる。あの瞳はなりふりなど構わない目だ。自分の目的を果たすためならば、他はどうなってもいい、自分の身でさえも。そんな苛烈さを含んだ瞳は、かつての自分と同じものだったから。

取り返しの付かないことが起こる前に、彼を止めることは出来なくなつた。

千年前の悲劇を繰り返す前に引導を渡すのだ。それが始竜となるはずだった、ある意味はヴァイスファイトの半身とも言える“イクセル”の役目だから。

『歌は誰かを癒すためのもの、励ますためのもの。だから忘れないで。悲しませるためや傷つけるためだけに歌わないで。ルカ、貴方の声はね、皆に幸せを与えてくれるから』

いつか母が言っていた。“歌”は誰かを悲しませたり、傷つけるものではないと。ルカはもう母の顔さえ殆ど覚えていないけど、それだけははっきり覚えている。

そう言っ母は笑った。なのに、あの人は、ヴァイスファイトは歌で竜たちを傷つける。

『血塗れの刃は我が手中。四散せしは幾千の叫びにして幾万の嘆き。世界を埋める幾億の慟哭。白は緋へと染まり、真紅の涙が流れ行く。遙かな詩は世界より途絶え、世界は滅びに満たされる。昏き破滅を知るならば、今反逆の証を立てよ』

初めて聞いた時、なんて悲しい歌だと思った。痛みと苦しみ、憎

しみ、ありとあらゆる苦痛によって作られた歌。人が竜に向けた憎悪と嘆き。聞いていて胸が締め付けられるような歌だった。

何故こんなにも悲しいんだろう。あれは竜を滅ぼすための歌なのに。

まるで千年以上も前の人の嘆きを聞いているような、そんな感覚に陥った。

だがだからこそ、止めなければならない。魔歌は、歌は、殺戮のためだけに使つてはいけない。守るための力だ。ルカはそう思っているし、師であるアルにもそう教えられた。

自分一人の力では到底彼に届かないだろう。

けれど、ルカは一人ではない。みんながいるから。アルやリオ、イクセとルーア。アテイ、父とゼファイ、ウイスタリアやイシュリアも。

このままでは本当に人竜大戦を再現することになる。それだけは駄目だ。絶対に繰り返してはならない。人と竜が憎しみあつて欲しくない。

どんなに近くにあつても人と竜は違う。それはルカにも分かる。

しかし違うから分かり合えないのか。そうではない。それはただの言い訳。逃げでしかないのだ。

違うからこそ分かり合える。人間だつて同じ、“全て”が同じならば、そもそも分かり合うことすらない。

信じよう、人と竜の可能性を。アルと自分が分かり合えたようにきつと分かり合える。

そんな時、ルカたちの耳に不穏な噂が入る。それはアルたちが滅竜歌の存在を感じてから、十日近く経った日のことだった。

第七奏
了

不穏な噂

「竜狩り？」

思わずルカたちの声が重なる。耳に入った単語は、どう考えても物騒なものだった。

古来から寄り添い、生きて来た人と竜。

しかし過去には自衛という名目、あるいは名誉目的で竜を狩る者たちがいたという。竜殺しの猛者、滅竜歌とはまた違う、ドラゴンスレイヤー。それはあくまでごくごく少数の人間。

普通の者には殺すどころか、傷をつけることさえ難しい。一般的には武器より魔歌が有効とされているが、それでも並の使い手では不可能である。それに加え、竜族は人のよき隣人とされている。現在ではそんな竜を狩る、などの言葉は出ないはずなのだ。

「そうそう。なんでもエスメラス王がやってるらしいぜ。ありゃあ、魔水晶目的だな。間違いないねえ」

竜が死した時に生み出す魔水晶は竜の魔力と彼らが取り込んだマナが結晶化したもの。強力な魔歌の増幅器でもある。

力説するのはルカよりもやや年かさの少年だった。その声は恐ろしく心地良く、物騒な話題でさえ子守唄に聞こえそうなほど。

ギルドを訪れたルカ達を待っていたのは一人の少年。

年は恐らく、十六、七歳だろうか。中々に整った顔立ちで、黙っていたれば可愛いのだが、生憎橙色の瞳は好奇心に輝いていた。

手入れはあまりされていないらしい亜麻色の髪に、ハンチング帽を斜めに被っている。

武器の類いは殆ど携えておらず、ルカのようにベルトで二の腕に取り付けられた短剣くらいのもだった。動き易そうな服装の彼だが、どんな職についているかとても想像できない。

聞く所によると珍しく、イクセの知り合いだとか。

「その噂、出所は確かなんだろうな？」

「あつたり前じゃん。俺を誰だと思ってんの？ 名うての情報屋、リード様だぜ？ 分かってんだろ、《黒呀》。でも確か過ぎてなあ」

やや冷たい視線で少年を睨むイクセに対し、リードと名乗った彼はけろりとしていた。おまけに自信満々である。

慣れていいのか気にしていないのか、ルカには分からないが、気さくな人だと思う。周りにはいないタイプだ。

「はいはい。分かってるさ。小夜啼鳥ナイチンゲール」

「ねえ、イクセ。小夜啼鳥って何？」

聞き慣れぬ単語にルカは思わず聞き返した。イクセが《黒呀》と呼ばれるように、小夜啼鳥もまた彼の呼び名だろうか。

では彼もルカやイクセと同じ冒険者なのか。イクセを二つ名で呼んでいることもある。それにしても冒険者を示す石の飾りは見当たらないが……。

おまけに武器だって短剣だけだ。格闘技に長けた、と言うのなら別だが、そうではないだろう。

「ん？ こいつの二つ名。ナイチンゲールは良い声で鳴く渡り鳥だ。こいつは情報屋で無駄な美声だろ？」

「無駄で悪かったな。こんなの止めて俺と来ない？ ルカ・エアハート君」

イクセが言うように恐ろしいほどの美声である。あまりに美しく、聞き入らずにはいられない声はナイチンゲールと言うよりは船乗りたちを惑わすセイレーンのよう。恐らく、その良い声で鳴く渡り鳥である小夜啼鳥と、リードの声、それに情報屋をかけているのだろう。

ナイチンゲール
小夜啼鳥のように美しい声でルカの名を呼び、じっと見つめてくるリードの瞳は好奇心に彩られたものではない。見る者を引き付けて離さない、蠱惑的な何かを孕んでいた。

「どつして……」

自分の名を知っているのだろう。情報屋とは聞いたが、そう簡単に分かるものなのだろうが。冒険者なのだから不思議なことではないかもしれない。

けれど、ルカはイクセのように名を知られるほどの冒険者ではない。不思議そうに自分を見るルカに、リードは片目をつむって笑ってみせた。

「ちつつち。小夜啼鳥を嘗めて貰っちゃあ、困る。君の名前は有名だよ。何せイクセル・クラインの連れだし。珍しい銀色の竜を連れた少年ってね」

ルカが知らないところで彼の名前は有名になっていたのだ。珍しい銀色の竜を連れており、並の魔奏士以上に魔歌を操る少年。それに加え、紫の《黒呀》が気に入り、行動を共にしていると注目されない方がおかしい。

ただでさえ、イクセは他人と行動を共にすることが少ないのだから

『銀色の竜ではない。私にはちゃんとした名がある。それより“竜狩り”について話してもらいたいものだな』

「ごめんね、アル君。ただまだ君から直接名を聞いてなかったから、勝手に呼ぶのも失礼かなって。でも見つかって良かったよ」

やや不満そうなるアルの声に、リードが人好きのする笑みを作ったまま、何気なく答える。そう、普通に答えたのだ。竜であるアルの声に。

竜の声を聞くことが出来るのは声ドラクナーを聞く者だけ。つまり彼は紛れもなく声ドラクナーを聞く者ということだ。

「ふうん。声ドラクナーを聞く者、ね。ルカほどじゃないけど、人にしては強い力だ」

「そだよ。そっちのルーア君はルシタニアで会って以来だね。ってお兄さんと……お姉さん？ 誰？」

口を開いたのは今まで黙っていたリオンだ。彼はワインレッドの瞳を細め、まるで値踏みするようにリードを見た。隣のアティは相変わらず微笑んでいる。

リードはルーアを見て微笑んだ後、リオンとアティを見て首を傾げる。小夜啼鳥の二つ名で呼ばれる彼も、流石にリオンやアティのことは知らなかったらしい。お兄さんはリオンでお姉さんはアティに違いなかった。

リードの話からすると、ルーアと彼は会ったことがあるらしい。ルシタニアでアルの情報を集めたい時、会ったのだろうか。リードは先ほど見つかって良かったと言った。それはアルのことなのか。

「えっと、こつちがリオン兄であつちがアテイ兄ね」

「えっ！ そのお姉……じゃなくってお兄さんだったんだ。あ、すつかり本題から逸れたけど、竜狩りねえ。何でもここ最近、エスメラス王に取り入った輩がいるらしいぜ。でも意図的だな、この噂はさ」

リードはまじまじとアテイを見つめた後、信じられないのかももう一度視線を向けた。

『竜狩り』、という物騒な噂が流れたのはここ数日の話だ。どうやら現国王に取り入った人間がいるらしい。その人物が竜狩りの指揮をとっているらしいのだが、明らかに噂が広がるのが早すぎる。人の口に戸は立てられないとは言ったものだが、意図的に広めるとしか考えられない。でなければ僅か十日ほどでここまで噂が広がるはずがないのだ。

『エスメラスか……あの国は昔から飽きることなく戦い続けているな』

アルは金色の目を細めてため息をつく。

エスメラス王国はここより東に位置する王国で強大な軍事力を持つ国である。抱える魔奏士たちも多く、ここ最近まで骨肉の争いが繰り広げられていたらしい。

新たに即位したエスメラス十六世は野心深い男としても有名で、兄たちを暗殺して国王の地位についたとはもつぱらの噂である。

その噂が真実かどうかは分からないが、最悪の事態を想定せねばならないだろう。

「取り入ったって、もしかして……」

考えたくはないが、これまでの話を合わせると答えは自ずと出る。ル力が答えを求めるようにアルを見れば彼は小さく頷き、リオンに至っては深いため息をついた。

事情を知らないリードは首を傾げるしかない。意図的に流された噂、アルたちが感じた力。

「だろうね。本当に何を考えているのか」

「……もう分からねえよ」

何を考えているのか分からない、琥珀色の目を伏せ、美しい顔を歪ませるアテイにリオンは吐き捨てるように呟いた。ヴァイスファイト。かつてなら理解していた存在。

だがそれはもう、遙か昔のこと。リオンの側から去ってしまったもの。『友』だと思っていたのは自分だけなのか。

リオンにはもうヴァイスファイトの心が分からない。分かりたくも無い。変わってしまった彼の心なんて。アルも、アテイだって同胞を殺したいとは思わない。それしか方法がないから、ヴァイスファイトをとめられないから。

自分達の感傷で世界を危険に晒す事は許されないのだ。心を殺せと言いつ聞かせたはずなのに胸が痛い。アルもリオンもアテイもやるべきことはもう分かっているから。

「あの、ありがとう。リード」

「気にするなよ。仕事でもあるし。何か知らないけど、役に立てたなら情報屋の本望ってな」

「サンキュ。ほら、取つとけ。小夜啼鳥」
ナイチンゲール

にっこりと笑うルカに、リードもつられるように笑った。純粹に礼を言われることが少ないのか、照れているらしい。視線を逸らし、頬をかいているのだから間違いないだろう。

イクセは手に持った何かを投げた。陽光を反射して煌くそれは綺麗に放物線を描き、リードの手の中に納まる。それは金貨、情報料だ。

「まいどー。……気をつけるよ、《黒呀》。竜狩りなんてろくなことじゃねえ。じゃ、な。またのご利用を」

今までは年相応の笑顔を見せていたリードの表情が変わる。それは紛れも無く小夜啼鳥ナイチンゲールの名で呼ばれる情報屋の顔だった。彼も情報屋という職業柄、危険を感じているのかもしれない。

しかし次の瞬間には人好きのする笑みに戻っている。思わず聞き入ってしまう声で別れの言葉を告げた後、リードは冒険者ギルドを後にした。

「アル」

『ああ。ゲイルたちに連絡を取って、行くぞ。エスメラスへ』

ルカは肩に乗る相棒に声を掛ける。そこできつと『彼』が待っているのだろう。リオンのかつての親友にして同胞、暁闇の君　ヴ
アイスファイトIIグラフIIノスフェラートが。

ゼフィの迷い

『君の歌が大好きだったよ。優しくて悲しい詩。どんな時でも一緒だった。辛い時も苦しい時も傍にいてくれた。でも君はもうここにはいない。君は今、どこに居ますか。私と同じ空を見上げていますか。君と歌った詩。約束の場所。君と繋いだ物語。^{ストーリー}進むべき未来を示す道標。輝きの光に変えて。戻らない過去を謡う物語』

本来の姿となったアルの背中に乗りながらルカは、歌い慣れた歌を口ずさむ。

本当にエランダディアを出てから色んなことがあった。イクセヤルーアとの出会い、アルとの別れ、リオンとの再会。故郷を出る時は想像すらしていなかっただろう。目に映る全てが新鮮で、きらきらと輝いていた。

普段は考えることすらしないが、感傷的になっているのだろうか。

東の空は既に黄金色に輝き、僅かに太陽が顔を出している。ルカ以外の皆は未だ眠りの中にいるのだろう。ゲイルたちとはエスメラスで合流することになっていた。

ルカは風を切って飛翔するアルに声を掛ける。

『ねえ、アル』

『なんだ？』

すると直ぐに答えが返って来る。皆を起こさないよう配慮して、二人は思念で声を交わした。やり方さえ教えて貰えば、ルカにはそう難しいことではない。

元より飛び抜けた力を持つ声^{ドラグナー}を聞く者である。声を聞く者の力は

一種の精神感応だと言われているのだから。

『王様は、陛下は俺たちの話を聞いてくれるかな？』

言いながらもルカだつて理解していた。普通に考えれば難しい。平民の願いなど聞き届けてくれるはずがないではないか。そうでなくても、にわかには信じられない話だ。おまけにルカには何の後ろ盾もない。

それに滅竜歌のこともある。エスメラス王に全てを話すのは危険だ。

当然、滅竜歌について知っているはず。手に入れた力を簡単に手放すはずがない。

普通の人間でさえ、大きな力を手にすれば変わる。いや、人の手にあまる強大な力は容易に人を変えてしまうのだ。それだけではない。エスメラス王は野心深く、肉親を殺害して王位を得たと噂される人物である。噂が真実かどうかは分からないが、火のない所に煙は立たないという言葉もあるのだから。

『普通の方法では聞こうとすらしないう。何せ私たち始竜の存在さえ眉唾物なのだからな。下手には明かせない』

『あー……もう、どうすればいいんだろう』

始竜の力は強大だ。始竜の存在を明かせば、野心深い王は必ずアルたちの力を手に入れようとするだろう。

だが王が簡単に協力してくれるとはとても思えない。話せば分かってくれるような人物ではなさそうだからだ。勿論、噂だけで全てを判断してはならないのだが。

ルカは人と竜が争って欲しくないし、憎みあうのも嫌だ。しかし

考えたくはないが、このままヴァイスファイトが竜を殺し続けられ
まず間違いない争いは起こる。千年前の再現だ。

考えれば考えるほど分からなくなって来た。単純な問題ではない
のである。

何が最善なのか、どうすればいいのか。考えても良い案など思い
浮かぶはずもなく。思わず髪を掻き回すルカに、アルは穏やかな声
で言った。

『気持ちは分かるが、あまり焦るな。全てはエスメラスに着いてか
らだ』

『……うん。そうだね』

アルが言うように今の状態ではまだ何も分からない。噂は所詮、
噂だ。百聞は一見にしかず。自分たちの目と耳で確かめなければま
だ何も判断出来ない。アルの言葉に少し気持ちが軽くなった気が
する。彼の言う通り、全てはエスメラスに着いてから。悩むのはそ
れからだ。

琥珀色の照明が店内を照らしている。カウンター席の端に腰掛け
たゲイルは酒を呷っていた。隣にいるゼフィは途中まで何杯か数え

ていたが、一時間ほど前に数えるのを止めた。ゼフィの相棒はかなりの酒豪だ。

アルコール度数の高いものを飲んでいるようだが、全く酔った様子は無い。寧ろ平然としている。

アルからの連絡を受けた彼らは一足先にエスメラスに入った。後はルカたちを待つだけ。

ウイスタリアとイシュリア、そしてフィーは情報を集めると言って宿屋を出た。ゼフィはと言えばこの仕方のない相棒のお守である。これでも一応は相棒だし、放っておくことは出来ない。呆れながらもゼフィはゲイルから離れられないのだ。

「どう思う？ ゼフィ」

グラスを片手に唐突にゲイルが口を開いた。酒場には二人以外、客の姿は無い。バーテンダーは離れた場所でグラス磨きをしているため、話を聞かれる心配はないだろう。例え聞いていたとしても問題は無い。

主語がないため普通なら分からないが、そこはゼフィである。彼が何を言いたいのか、彼女はちゃんと理解していた。

アルから聞いたある噂。エスメラス王に取り入った人物、そして竜狩り。取り入った人物はヴァイスファイトに間違いないだろう。

現に王都は噂のお陰で物々しい雰囲気にも包まれている。冒険者も多いし、ぴりぴりしているのだ。

「畏に違いありません。噂が広がるのが早すぎます。意図してし
か……」

「例え畏だとしても俺たちは飛び込むしかない。手をこまねいてい

る訳には行かないからな。野心深い王なら尚更だ」

ヴァイスファイトが何を思ってこんな行動に及んだのか、ゼファイには分からない。

しかしこれは罠だ。自分達をおびき寄せるための。でなければこ
うも早く噂は広まらない。ゲイルの視線は相変わらず、グラスの中
に注がれた琥珀色の液体に向いている。

そうなのだ。これが罠だとしても、選べる選択肢はそう多くない。
ゼファイたちが止めなければ、彼は竜を殺し続けるだけ。自分たちが
姿を現すまで。

一度力を手にしてしまえば簡単には手放せない。人を凌駕する力
を持つ竜を殺戮出来るほどの力となれば尚更だ。力に酔ってもおか
しくはないはず。野心深い王なら尚更。

始竜が世界に干渉することは許されない。許されないが、このま
まではかつて始竜であった存在が引き金となり、再び人と竜の戦が
起こってしまう。

千年前の悪夢の再現。その悲劇だけは決して繰り返してはならな
い。多くの命が失われるだろう。人も竜も。かつて戦いにより疲弊
した二つの種族は滅竜歌の存在を秘匿とした。今回もそうなるとは
限らない。

ゼファイは迷っていた。心の中で降る雨は未だ止まない。

「ゲイル様、私は……私はどうすればいいのでしょうか？」

ゼファイはウイスタリアに続く若い竜で千年の時を生きてはいない。
受け継いだ記憶は膨大だが、それは彼女自身が直接体験したもので
はないため、何が最善なのか彼女は判断し兼ねていた。

知識だけあっても意味が無いのだ。始竜は世界に干渉してはなら

ない。それは分かっている。でも納得出来ない。どれだけ考えても堂々巡りで、出口の見えない迷宮を彷徨っているかのよう。

「俺に聞かれてもな。俺は人でお前は竜だ。よく考えろ」

「……はい。申し訳ありません」

ゲイルの切れ長の瞳がゼフィを映す。ゼフィの髪とはまた違う、鮮やかな緑の瞳。その瞳には不安そうな自分の姿が映っていた。彼のいう通りだ。

ゲイルは人でゼフィは始竜。彼に答えを求めるのはお門違いというもの。

それに生きた年数だけを言えば、ゼフィは軽く彼の十倍以上を生きていることになる。

「いいか、ゼフィ。始竜だとかそんなのは関係ない。大事なのはお前がどうしたいか、だ」

ゲイルは項垂れるゼフィの顎を掴み、無理矢理こちらを向かせた。『造られた』存在である始竜と言えど、意思がある。美しいだけの人形ではない。

大事なのは、ゼフィがどうしたいか。ヴァイスファイトを止めたのか、それとも始竜としての使命に従うのか。こればかりはゲイルが決めることではない。ゼフィ自身が選択しなければならないこと。

誰も彼女の助けにはなれない。こうしろ、と言っつのは簡単である。だがそれではゼフィのためにはならないからだ。突き放す訳ではないが、信じているからこそ、ゲイルはゼフィに自分で答えを出して欲しい。

そつと手を離し、ゼフィの頭を撫でる。彼女は嫌がらなかった。

「は……い」

消え入りそうな声で頷き、ゼフィは俯いた。ヴァイスファイトを放置することは出来ない。けれど彼を止めるということは、禁忌である大きな世界の流れに干渉することに違いないのだ。いや、その流れを作り出したのもまたヴァイスファイトである。

「おいおい、そこまで気落ちするなよ。ゼフィ、お前も飲むか？」

沈んだ様子の彼女を見て、ゲイルは子供のように笑う。かと思えば目の前でグラスを揺らし、酒を勧める彼が可笑しくて、ゼフィも思わず笑みを零した。

「人の酒では酔えません」

「そうだったな」

ゼフィにぴしゃりと言いつ返されても、ゲイルは気にもしなかった。竜族は酒を飲んでも酔うことは無い。人の酒は竜には弱すぎる。ゼフィとて飲めない訳ではないが、今は眠りにについているエクレールのような酒豪ではない。

竜族が人の酒では酔わないことはゲイルと知っているはず。恐らくは彼なりの気遣いだったのだろう。

「……本当にそのくらいの甲斐性、ルカ様にも見せてあげて下さい」

ゼフィはどこか批難するような眼差しで相棒を見上げた。ゲイルは粗暴にも見えるが、こう見えて実に他人思いである。

それなのに何故か息子に対しては本領を發揮できないらしい。それは一番辛い時、側に居てやれなかつた後ろめたさによるものだが、今のままではゲイルもルカも辛いだけだ。

決してルカを思っていない訳ではない。彼はとても不器用だから。予想外もしないゼファイの手痛い一言に、ゲイルは困ったように笑った。

「それは言わない約束だろうか？」

負の連鎖

エスメラス王国はテゲア大陸でも一、二を争うほど大きな国である。当然、王都はルカが今まで目にしたどの都市よりも大きかった。アルストロメリアやルシタニアでさえ、王都には及ばない。人の波に酔いそうである。露店では威勢の良い声が飛び交い、飲食店も実に賑わっている。活気は十分にあるだが、どこかぎこちない。

例の噂の影響だろうか。エスメラス王が竜狩りを行っていることは既に大陸の殆どに知れ渡っていた。それに比例するように武装した者たちも多く、物々しい雰囲気を漂わせている。

城下町ということだけあり、道端には様々な露店が開かれており、野菜から雑貨まで一通りのものが揃う。売られている青果は全て新鮮なもので、それだけでエスメラス王国が潤っていることが分かった。

ルカの故郷、エランディアでは生鮮食品は貴重で中々手に入らない。仮に手に入ったとしてもそれなりに高価だ。

それも当然である。生鮮食品は保存が難しく、貯蔵も難しい。魔歌で劣化を緩やかに出来ない訳ではないが、限界があるし、熟練者でなければ難しい。それが店頭に並んでいるということは、それだけエスメラス王国が裕福だということだ。とても数年前までは内乱で荒れていたとは思えない。

郊外までアルに乗って移動した一行が王都に辿り着いたのは、日も高くなった昼に近い時刻。待ち合わせ場所は冒険者ギルドと決めているため、迷うことはない。イクセがギルドの場所を知っているからだ。

「こいつら、オレたちがリード君から聞いたのと同じで、噂を聞きつけて来たってか？」

リオンの炎を思わせる髪やアテイのやや奇抜とも思える格好はかなり目立っているが、道行く人々が気付くことはない。皆、何事もないように通りすぎていく。流石にこのメンバーでは目立つ所の話ではないので、アルが力を使って気付かれないようにしているのだ。ルカも初めて見る大都市に浮かれていたが、そうも言っつてられない。

エスメラス王が竜狩りの危険性を理解していないはずがない。竜が本気になれば人の都市を吹き飛ばすことなど造作も無いからだ。

「物々しい雰囲気だよね」

「冒険者も割りといるな。見知った顔もあつたぜ」

ルカの隣を歩くイクセはすれ違う人々を見ていたらしい。やはり冒険者の数が多いようである。

中堅である『赤』は勿論のこと、実力者とも言える『青』の冒険者もちらほらと。中にはイクセが仕事を共にした冒険者もいた。

「ね、あれってゲイルさんたちだよね？」

ルーアが指差した先 冒険者ギルドの前には緑の髪の男性と、コバルトグリーン髪の女性の女性、晴れ渡った空と同じ青い髪の青年に、灰色に近い銀の髪をした女性、そして彼女の肩には燃え盛る炎を思わせる鳥がいる。ここからでは顔は見えないが、ゲイルたちに違いない。

彼らも彼らで実に目立つ面々ではあるが、四人の姿は見事に周囲に埋没していた。ゲイルたちもまた、ルカたちのように『力』を使っているのだろう。

「おーい、みんな！」

「ルカ様、ご無事でしたか」

柔らかな笑顔を浮かべたゼファイが迎えてくれる。ウイスタリアもイシュリアも珍しく笑顔だったが、ゲイルだけはその後ろで、どこかばつが悪そうに頭を掻いていた。ルカもルカでゲイルに何と声を掛けていいか分からない。意識すると余計に駄目だった。頭が真っ白で何も考えられないのだ。

その時、ルカの肩に乗っていたアルがびくり、と動いた。金色の目を街の外に向け、じつと何かを見据えている。

「アル？」

不思議に思ったルカが声を掛けるが、彼は答えない。何かを考えるように沈黙を守っている。やがて、

『風天、隠蔽と防御結界、蒼穹は幻術を。紅蓮と豊穰は私と共に』

唐突に言ったアルはルカの肩から降りる。突然の行動にルカやイクセ、ゲイルは訳が分からずにいた。それに対して、始竜たちは皆理解しているらしい。

隠蔽と防御結界、そして幻術とは穏やかではない。何かが起ころうとしているのだ。彼らが何をしようとしているのかはまだ分からないが、ルカは咄嗟にアルの体を掴む。

アルの声はいつも以上に真剣で、きつと何かあるのだ。

けど、もう放って行かれるのは嫌だから。そんな思いがルカの中にあっただ。

「待って！俺も一緒に連れて行って」

『ルカ……分かった。イクセル、ルーアハ、お前達はゲイルや風天たちと留守番しておけ』

イクセが抗議の声を上げかけるが、その瞬間、ふわりと体が宙に浮く浮遊感。

気付けばルカは人の姿となったアルに抱えられ、街の上空にいた。風が少しだけ冷たい。傍らには紅蓮と黄金の翼を広げたりオンとアテイの姿もある。

「わわっ！」

「随分動きが早いな。こつちとしてはもう少し遅い方が助かるけど」

面倒臭そうに、あるいは、投げやり気味にリオンが呟く。彼の視界の先には無数の影。それは正しく竜の群だった。少なくとも見積もっても二十体はいるだろうか。彼らが本気を出せば軽く王都を吹き飛ばせるだろう。

強大な力を持つ竜族。彼らが敵に回れば現在の人に抗う術はない。……滅竜歌さえなければ。

ルカを抱えたまま、アルが月を思わせる金色の瞳を彼らに向ける。すると先頭を飛んでいた竜が一步前に出た。竜たちの中心的存在だろう。彼、もしくは彼女にアルは言う。

「そこで止まって貰おう」

『何者だ？』

アルの声に応えたのは、赤い鱗の竜である。リオンのような燃え盛る炎の色ではない。乾ききった血を思わせる赤黒い色。刃を思わ

せる瞳は鋭い鳶色で、溢れる殺気を隠そうともしない。

竜は三人の背から広がる翼を見て、アルたちが同族だと気づいたのだろう。

しかしアルやリオンから感じる力に無意識に体を強張らせる。漏れ出す力に怯えているのだ。アルもリオンも、アテイも長い時を生きる竜。彼らが秘める力は強大。

「若造如きに名乗る名はないと言うところだが、教えてやろう。私は白銀の君、後ろが紅蓮と豊穰だ。そこまで言えばお前たちに刻まれた記憶が知っているはずだ」

凜とした声だったが、ルカはアルの僅かな声の変化に気づく。少しだけ機嫌が悪い。ルカはただ、竜たちの会話に耳を傾けることしか出来ない。

アルが二つ名を口にした瞬間、竜たちの間にざわめきが広がる。先頭の竜は声さえ上げなかったが、驚愕の眼差しで三人を見つめていた。

竜たちは元々、始竜から生まれた命だ。気の遠くなるほど遙かな時が流れた今も、その記憶は竜たちの奥底に眠っている。二つ名を耳にしたその時こそ、その記憶が呼び覚まされた瞬間だった。

“始竜”。この世界で何よりも先に生み出された命。自分たちの元型なるもの、永遠を生きる存在。強大な魔力を持つ彼らは、このアルカディアと名付けられた世界の監視者。

この世界を生み出したものが去った今、彼らは神に等しきものだった。

だが始竜は監視するものであり、干渉するものではなかったはずである。

『……ドラゴンロード殿が何故、我等を阻むのかお教え頂きたい』

「それはこちらの台詞だ。お前たちは一体、何をするつもりだった？」

竜の鳶色の瞳が、訝しげに細められる。理解出来ないとも言うように。

アルの金色の瞳は微かな怒りを宿していた。リオンの方はバーガンデイの瞳を細め、アティは悲しげに琥珀色の瞳を伏せる。

ルカは分かってしまった。アルが何を言いたいのか。隠蔽結界に防御結界を張った理由も。王都を、人々を守るため。そして彼らを守るためでもあるのだ。いくら竜と言えど滅竜歌に抗うことは出来ない。

『……愚問だ。我等が同胞を殺した人間を殺すまで』

『そうだ。あれほどまでに同胞を殺した罪は重い。……殺せ！』

『あれはただの虐殺だ！』

先頭の竜に呼応するかのように、後ろにいる竜たちも次々と叫び始める。彼らはヴァイスファイトによって仲間を殺されたのだ。彼が故意を噂を流したのは、自分たちをおびき寄せると同時に“これを狙っていたのだから”。

ルカは出来ることなら、耳を塞いでしまいたかった。それほどまでに怨嗟に塗れた声だったから。

しかしこればかりは耳を塞いでも意味がない。強い力を持つ、声を聞^{ラゲナー}く者であるルカには全て聞こえてしまう。普段は意図的に聞かないようにしているが、今のように感情。それも怒りや慟哭、怨嗟が入り交じった声は聞こえてしまうのだ。

「……そのために罪のない命を巻き込むのか？」

『我等には関係のないこと。そこを退いて頂こう』

「なら余計に退く訳にはいかないな」

「きみにこの子たちのいのちを奪う権利はないよ」

リオンとアティも竜たちの前に立ち塞がるように、アルの隣に並ぶ。例え、ここにいる竜全員でかかったとしても、誰一人敵わない。それほどまでに絶対的な力の差があった。

始竜と普通の竜ではあまりに違いすぎる。それでも今の彼らは憎しみに囚われ、歴然たる力の差さえ忘れてるんだろう。

『あの人間を殺すためなら何だってしよう』

「そんなの駄目だ！ どうして、関係のない命を奪おうとするの？ 殺したから殺して、それで何かが解決するわけじゃない！ 繰り返すだけだよ！」

もう聞いているだけは嫌だった。そう思った時、ル力は自らの想いを口に出していた。

ヴァイスファイトがしたことは決して許されることではない。彼らの怒りももつともだ。だからと言って何もかもが許されるのか。殺されたから殺した。それではいつまで経っても終わらない。

無限に続く負の連鎖。一度囚われてしまえば抜け出すことは本当に難しい。

勇氣と無謀は紙一重

『貴様に何が分かる。人間風情が!!』』

大気が震える。そう錯覚させるほどの咆哮だった。同時に拒絶の意思が伝わってくる。竜はルカへの殺気を隠そうともしない。体は強張り、逃げ出したくなる。意識することなどないが、彼らは人よりにずっと強大な力を有しているのだ。

アルたちがそばにいてくれるとは言え、恐怖ばかりはどうにもならない。湧き上がる恐怖を抑えようと唇を噛み締めながらも、決して気持ちだけは負けないつもりで赤い竜を見た。

それが竜にすれば信じられなかったらしい。珍しいものを見るような目つきでルカをじっと見つめている。

しかしルカを侮辱されて、黙っていられるアルではない。

「我が友を侮辱するか、竜風情が!!」

今しがた竜がルカに向けた言葉と同じ。大きな声ではないのに、まるでそれが圧力にでもなったかのように、竜たちから苦しげな吐息が漏れる。普段、怒りを露にすることのない彼も抑えられなかったのだらう。

彼が怒りのままに力を振るえば、竜であつても滅びは免れない。

しかしアルは感情に任せて力を使うような竜ではないことをルカはよく知っていた。だから彼を安心させるようにアルの銀色の髪を撫でる。いつか彼がしてくれたように。

「俺なら大丈夫だよ、アル。でもありがとう。俺のために怒ってくれて」

「ルカ……」

アルの声を聞いただけで、不思議と恐怖は消えていた。彼らは竜竜は『友』。今、ルカの心を占めるのは、どうすれば自分の思いを伝えられるのだろう、ただそれだけだ。ルカは誰にも傷付けて欲しくないだけ。

だが今の彼らは怒りに身を支配され、とても話せる状態ではない。どうすればいい。どうすれば彼らは自分の声を聞いてくれる。そう考えた時、ルカの頭の中に一つの考えが浮かんだ。

それはいつか、自分がまだ旅を初めて間もない頃、ギルドの彼らに使った方法。

アルにそつと耳打ちすれば、彼は小さく微笑んでくれる。両隣にいるリオンとアティモルカの意図を察してくれたようで、こちらを見て頷いた。

ルカは魔奏士にして声ドラクナイを聞く者。届かないなら魔歌を通して伝えればいい。自分の声を、歌を、思いを。

ルカの心は湖面のように穏やかだった。アルやリオン、アティモ自分を信じて任せてくれる。見守ってくれる人たちがいるから頑張れるのだ。

息を吸い込み、今から歌う魔歌をイメージする。

誰かを傷つけるためではない。これは子守唄。あらゆるものを鎮める優しい旋律。そしてルカは静かに歌い出した。

『星歌う、愛しい子らへの子守歌。その歌は母なる調べ、全てに通ずる安らぎの旋律。おと星が奏でし原初の調べが染み渡る。遙かな詩は世界に響き、世界は歌に満たされる。優しき音色を知るならば、今導きの声に応えよ 潮騒』

少しでも自分の思いが彼らに伝わるように心を込めてルカは歌った。魔歌はただの歌ではない。例え元は喪歌から作られたまがい物でしかなくとも、それは確かに人と竜の絆だ。

ルカはアルから魔歌を学んだ。彼を通して世界に触れた。彼が居たからこそ今の自分がある。

ルカにとって魔歌は自分とアルの絆だ。例えルカが声ドラグナーを聞く者でなくても、きつとアルを友人だと言えただろう。

あれほど憎しみに囚われていた竜たちでさえ、妙なる響きに聞き入っていた。ただ美しいだけではない。歌い手の感情が籠った歌は何よりも竜たちの心に届く。

争いたいわけではない。ただ話を聞いて欲しいだけ。人と竜に争って欲しくないと思うのは、自分勝手な思いなのかもしれない。

けれど、ルーアの記憶で見た人竜戦役。あんな悲しい戦い、二度と起こしてはならないのだ。

万感の思いを込めてルカは言った。

「お願い、俺たちの話を聞いて」

ヴァイスファイトのことだって話さなければならぬ。

だが怒りに囚われたままでは彼らは自分たちの話を聞いてはくれないだろう。

『……何を聞けと言うのだ。ドラグナー、声を聞く者よ』

竜の声は先ほどとは比べ物にならないほど穏やかだった。彼らがドラグナー、と言ったのはルカに対して称賛の意を示してのことだったのだろう。

竜にとって魔歌はただの歌ではない。魔歌を通じてルカの心に触れたから。

「……千年前に失われた滅竜歌を使い、きみたちを傷付けたのはぼくたちの同胞はいつから」

「ヴァイスファイトⅡグラフⅡノスフェラート。かつて暁闇の名を冠していた始竜だ」

アテイの言葉をアルが継ぐ。竜たちは沈黙している。まるで二人の言葉を計り兼ねているように。

やがて搾り出すように口を開いた。

『あれは……人だった。竜ではない』

「魂がヴァイスファイトのものなんだ」

「初めから話すしかないな。いいだろう、レイン？」

魂がヴァイスファイトだと言っても簡単に理解出来ないだろう。

ルカの説明にも竜たちは首を傾げている。そこで見兼ねたりオンが同意を求めるようにアルを見た。

「……嗚呼。でなければ止まりはしないだろう。それに私はルカを悲しませたくない」

柔らかく微笑めば、ルカと目が合う。アルにとってルカは何よりも大切な存在だった。そんな彼が悲しむ顔はもう見たくない。自分が泣かせてしまったあの時のような顔をさせる訳には行かないのだ。

全てを話さなければ彼らは止まらない。力づくで封じることもあるが、ルカはそれを望まないのだ。だからアルは全てを語った。

暁闇の君、ヴァイスファイトについて。

彼が何をしようとしているのか、何故人の体に宿っているかまで到底信じられるものではないだろうが、全て本当のことなのだ。

「……これで分かっただろう。お前達の手にも負えるようなものではない。あれは」

『しかし、我らとてこのまま引き下がる訳には行かないのだ。相手が何であろうと同胞たちの仇は取る……！』

滅竜歌を扱うヴァイスファイトにとって竜など紙同然。殺す事に躊躇いのない彼に付け入る隙は無い。彼らには滅竜歌に対抗する術が無いのだ。

無駄だと言うアルに対し、竜は静かに首を振った。あるいは死ぬ覚悟すら決めていたのかもしれない。相手が何であろうと引き下がることは出来ない。

語る彼の瞳には揺るがぬ決意が宿っている。命さえ投げ捨てるほどの覚悟が。そこにあるのは憎しみだけではない。彼らはそう、愚直なまでの真つすぐさを持っているのだ。

「お願いだから退いて！俺は竜と争いたくないし、君たちに傷付けても欲しくないんだ！お願いだから……」

その先は言葉にならなかった。どうして言葉とは、これほどまでにまどろっこしいのだろう。魔歌でしか届かぬ思いがあるように、直接言葉にしなければ伝わらない思いもある。

このまま王都に乗り込むことになれば、どちらもただでは済まない。死傷者は十中八九出るだろうし、彼らは間違いなくヴァイスファイトに討たれるだろう。

今の彼らからは理性が感じられるが、それでもヴァイスファイト

を殺そうとすれば王都や人々の被害は免れない。それに加え、彼の思っ坪だ。

エスメラス王はリードが言っていたように恐らく、魔水晶を欲して竜たちを殺している。今、ここで彼らが王都を攻めれば、竜狩りの真つ当な理由を与えてしまうことになるのだ。

「そうだよ。気持ちは分かるけど、何も死に急ぐことだけが勇気じゃない」

「このままだと無駄死もいいところだ。それでも、って言うならオレたちは全力で止める。あの悲劇を繰り返すつもりはないんでね」

アテイとリオンの静かな声が響く。死ぬと分かっているヴァイスファイトに挑むことは、立派なのかもしれない。あるいは彼らは死に花を咲かせるつもりなのだろうか。

何にしてもそれは勇気ではなく無謀だ。それでも構わないと、ルカの思いを踏みにじるのなら、リオンたちも彼らを全力で止める。

彼らの気持ちが分からない訳でないが、千年前の悲劇を決して繰り返してはならない。得るものなんてない。ただ失うばかりだ。

大好きだから

『……いいだろう。声ドラクナーを聞く者よ、お前の思い、しかと受け取った。そなたの思い、しかと我らに届いた』

顔を輝かせるルカに赤い竜が頷く。彼の後ろにいた竜たちも、彼に応えるように声を上げる。ルカの想いは確かに魔歌から伝わった。ルカがいかに関心を持ち、竜を友だと思っていることも。

憎しみに囚われ、何も見えなくなっていた自分たちの目を覚ましてくれた優しい旋律。母が歌う子守唄のよう。

赤い竜は背筋を伸ばし、凜とした声で言った。

『我が名はレイシャン。クリムゾン。古き緋の一族を束ねる者。名を教えて貰えるか？ 優しき子よ』

「ルカ・エアハートだよ」

「クリムゾン。なるほど、オレたちの次に生まれたものたちか」

自らも名乗るルカに、クリムゾンの名を聞いたリオンが納得したように頷いた。

クリムゾン、古き緋の一族。この世界でもっとも初めに生まれたのがリオンたち始竜である。その次に生まれた竜、それが緋や碧などの名を冠したクリムズンを初めとする一族である。

もっとも始竜に近く、強大な力を有する彼らクリムゾンの一族はリオンに近い血を持つ。

『貴方という通りです。フィーニクス様』

「リオンで良いって、レイシャン。堅苦しいのは苦手だし。悪かったな、キツイ言い方して」

冷静さを取り戻したからか、妙に畏まるレイシャンに、リオンはひらひらと手を振ってみせる。リオンにとっては孫のような存在だし、こちらも少々悪かったかもしれない。華やかさはあるが、威厳の欠片もない（少なくとも今は）リオンだが、レイシャンの目には素晴らしい竜に映っていることだろう。

しかしレイシャンは尚も頭を下げ、ひたすらに恐縮していた。

『いいえ、こちらこそ取り乱していたとは言え、リオン様を初め、シルバーレイ様やアマルティア様に対しご無礼を』

「気にするな。同胞を殺されたとあらば仕方ない」

「だからきみたちが謝ることはないんだ。どうかきみたちのいるべき場所へお帰り」

律儀にフィーニクスからリオン、と呼び直したレイシャン。そんな彼を見て、幾分か柔らかな声でアルが言い、アティは顔を綻ばせた。一族の者たちが殺されたとなると、理性を失うのも仕方ない。本当に話が分かる竜で助かった。そうでなければアルたちも実力行使に出るしかない。

一方、笑うアティは本当に美しかった。まるで愛し子を見守る母のように。事実その通り、アティは創造を司る『母』なのだから。

「ごめんね。だけど、ここは俺たちに任せて」

滅竜歌は竜に対して絶対的な力を有する。

だが人であるルカには効かない。いざとなれば自分がアルたちの盾になるつもりでいた。滅竜歌で受けた痛みは想像するしかないが、凄まじい苦痛に違いない。内側から裂けたような傷を思い出すと、今でも体が震えた。いくら彼らが痛みにも耐性があるとしても、痛みを感じない訳ではないのだ。

悲劇を繰り返してはならない。その思いがルカを駆り立てていた。『すまない。そして礼を言う。ルカが止めてくれなければ我らの命はなかった』

「お礼を言われることじゃないよ。俺は人も竜も好きだから」

項垂れたようなレイシャンにルカは笑う。

自分がしたいと思ったことをしただけ。人も竜も好きだから争って欲しくない、傷つけあって欲しくない。

まるで太陽のようだ。晴れやかに笑うルカを見てレイシャンはそう思った。

レイシャンとその一族の者たちは翼を羽ばたかせ、いるべき場所に帰って行く。その様子をルカはアルに抱えられながら見つめていた。

「良かった。でもこんなことが続けば……」

「ああ。到底抑えられなくなる」

一転して不安げな顔をするルカに、アルの表情も晴れない。彼らは納得して退いてくれたが、他の竜たちもそうだとは限らないからだ。こんなことが続けば今のようなものでは済まないだろう。

それともそれこそがヴァイスファイトの狙いなのか。何にしても彼を野放しにはおけない。

「それが目的なのかね、あいつの」

「あの子の真意は誰にもわからないよ。あの子自身にしか……」

ため息をついたりオンに、アティは首を振って答える。もう自分たちの心は繋がっていない。始竜ではなくなった彼の心を伺い知ることが出来なくなった。

かつてリオンの傍らにあった存在。昔は彼の心もリオンのそばにあったのに。胸に去来する様々な想いを振り払い、リオンはアルの方を向く。

「分からないな。ま、帰ろうぜ、レイン」

「そうだな。イクセルたちも首を長くして待っているだろう」

「まずはどうやって王様に会うか考えないとね」

エスメラス王に会うにしても慎重を期す必要がある。大国、エスメラスの軍力は半端ではない。竜と全面戦争になれば血で血を洗う戦となるだろう。

数で劣る竜族だが、力では遙かに人を上回っている。本来なら、竜族が負ける道理はない。竜を滅ぼす滅竜歌トランクスレイヤーさえなければ。

全ては自分たちの行動にかかっている。ヴァイスファイトを止め、人と竜の戦いを阻止する。要約すればこの二点だが、そのたった二つが難しい。

戻るぞ、とアルの声が聞こえたかと思うと、再び浮遊感に襲われる。気付いた時にはもう空の上ではなくてそこは既に冒険者ギルドの前にいた。

しかし特殊な術でも使っているのか、仲間たちを除いて突然現れたルカたちに気付く者はいない。アルは戸惑うルカを降ろすと竜の姿に戻り、彼の肩に飛び乗った。

「あ、お帰り。ルカ兄」

「一体何だったんだ？ そのお二人さんは教えてくれないし」

「ばあ、と顔を輝かせたルーアと若干辟易したようなイクセが出迎えてくれる。彼が顎で示した先にはウイスタリアとゼファイ。」

ルーアは何となく感じていたようだが、人間であるイクセやゲイルはそういうわけにもいかない。いきなりアルたちが消えたかと思えば、二人が隠蔽結界と防御結界を張り、幻術を使ったのだ。お陰でイクセやゲイルには何が起こったのかさっぱりである。生憎と彼らのような力もなければ耳もない。

『クリムゾンの一族のようだ』

「まさか彼は分かっていますか？」

唸るようにアルの口から漏れた言葉を聞き、真剣な顔でゼファイも問う。もはや始竜ではなく、人となった今も古き血に連なる一族は分かるというのか。彼らはもつとも自分たちに近いもの。

事態は深刻ということか、とウイスタリアとイシュリアも納得したような顔で頷いている。

「だからさ、さっきから何なんだよ。俺たちに分かるよう、かみ砕いて話せて。なあ、ルーア」

「僕も何がなんだか。竜の気配は感じたけど、何かあったの？」

「おい、ゼファイ。分かるように話せ」

頭を掻くイクセに眉をハの字に曲げるルーア。ゲイルも呆れたように口を挟む。隠蔽結界や幻術まで張って、一体何の騒ぎだ。

「申し訳ありません。私もまだ確信がありませんでした故、沈黙を通させて頂きました」

責めるようなゲイルにも丁寧に答えるゼファイ。

やはり始竜たちは感じていたのだ。自分たちに近い血を。そこは流石は相棒。ゲイルはゼファイが言わんとしたことを多少なりとも察したらしい。半眼で相棒を見据えた。

「……もういい。大体は分かった。で、理由は」

『ヴァイスファイトが殺した竜たちは古き血に繋がる“クリムゾン”の一族”だった。朱や碧などの名を冠する竜たちは我等にもっとも近い“血”を持つ。そんな彼らが奴を殺すためにここに来たのだ』

アルがゼファイたちに隠蔽結界や幻術を指示したのもそれが理由である。人々に彼らの存在を知らせないため。もし人々が竜たちの存在に気付けばパニックになるだろう。

竜族は人間の都市に出ることは珍しいし、何より殺気立っていた。竜は人の数倍以上の魔力を秘めている。古き血に連なる竜たちとなればそれ以上だ。

アルたちが力を使ったことで、ヴァイスファイトに気づかれた可能性はある。けれど彼らを止めるためには必要だった。

「道理でリオン兄と近い力だと思った」

「んぐ、メシアってばやつぱり鋭いねえ。人造竜兵ドラグーンにしとくのが惜しいくらい。何ならオレの眷属にならない？」

ふうんと呟いたルーアをリオンはそつと後ろから抱きしめる。極上の笑みを浮かべて提案するリオンに、アルとウイスタリアは呆れるしかない。

眷属、というのはその名の通り、イシュリアやフィーのように始竜から力を与えられた存在である。主である始竜が死なない限り、不死に近い生命力を持つ。人であろうと獣であろうと、人造竜兵でさえ例外なく。

「考えとくね。でも今はいいよ。それに僕の力とリオン兄の力が反発したら不味いから」

「そうじゃなくても反対だな。ったく、この節操無しが」

ルーアは竜を元に作られた命だ。始竜であるリオンの力と反発しないとも限らない。

イクセはと言うと、呆れたようにリオンを睨みつけた。

こんなの眷属になったら嫌な予感しかない。この竜は気に入ったものなら男も女も関係ないらしく、それこそ節操なしだ。

それに今はそんな話をしている場合ではないだろう。一種の気遣いかもしれないが、この人物に限ってないとイクセは断言したい。

「なに？ イクセってば妬いてるの？ 大丈夫。オレはみんなのリオンだから」

満面の笑みで言い切るリオンに、こればかりはルカやルーアも驚くしかない。どこをどうすればそんな答えが出るのだろうか。

イクセが無言でリオンの頭を殴ると、アルは永久凍土よりも冷たい視線を紅の青年に向けた。

『阿呆は放っておいて本題に入るぞ』

真っ白な子供

ただエスメラス王に謁見するだけなら造作も無い。アルたちの力を持ってすれば。

だがそれだけではヴァイスファイトに気付かれてしまう。慎重を期す必要はあるが、事態は一刻を争う。悠長に構えていられるほど残された時間はそう多くない。ではどうすればいいのか。

しかし良い案など簡単に見つかるはずもなく。アルたちがあれやこれやと意見を出し合う中、ルカはルーアとフィーを連れて街に出ていた。

王都を見て回りたいとは思っていたが、情報収集を行うという目的もある。少年の二人組だと嫌に目立つが、ルカの耳に煌めく飾りを見れば大体の人間なら合点が行くだろう。耳飾りに嵌められている特殊な石は冒険者の証だからだ。

訪れた時と同じように何とも言えない雰囲気。少しでも均衡が崩れれば一気に崩壊してしまいそんな危うさを感じる。

「全然手掛かりないね、ルカ兄」

「そうだね。アルたちも何か良い案が出るといいんだけど」

ルカの隣を歩いていたらルーアが疲れたように呟いた。耳に入るのは自分たちには必要のない情報ばかりで、自分たちが欲しい情報は殆どない。

アルたちを期待しようにも、最後に見た彼らからは難しかった。ヴァイスファイトに見つからず王に謁見する方法などないような気もする。

『難しいかもしれませんが。あちらは失うものなど無いでしょうが、こちらは枷が多過ぎます』

唸るように言ったのはルカの肩に乗ったフィーである。ルーアが付いているから心配ないと言ったのに、どうしてもとリオンがフィーを連れて行けと言い張ったのだ。

確かにフィーの言う通り、彼が失うものは何もない。肉体も暁闇の名も捨てた彼。

だが自分たちは違う。小さなため息を付いたルカは、誰かが自分の服の裾を引っ張っていることに気付いた。

「あれ？」

思わず視線を下に向けると、そこにいたのは子供である。年はルーアより少し下、十歳前後だろうか。性別までは分からない。

混じりけのない真っ白な髪に、夜明けを思わせる瞳。愛らしい顔だちをした子だった。白の外套を纏っていることから、雪の化身のよう。

ルカと目が合ったその子にはにこりと笑う。ルカは戸惑いながらも、掴んでいた裾を放させ、ゆっくりと尋ねた。

「君、どうしたの？」

「迷子かな？」

突然立ち止まったルカを訝しげに思ったルーアも、子供の姿を見て驚きに目を見開いた。

フィーは黙ってルカの肩の上にいる。

「ねえ、おにいちゃんたち。ミラと遊ぼうよ」

ミラ、というのがこの子の名前なのだろうか。どこかで聞いたような気もするが、思い出せない。

きゃらきゃらと無邪気に笑いながら、ミラは歌を口ずさんでいた。それがただの歌ではなく、魔歌だと気付いた時にはもう遅い。

『 遙かな詩は世界に響き、世界は歌に満たされる。夢幻と知るゆめまほろしならば、今導きの声に応えよ 幽幻鏡』

真つ先にそれが魔歌であることに気付いたのはルーアだったが、その時にはもう遅い。ルーアが何か叫んだのは聞こえた。

しかしルカの意識はそこで途切れる。気を失う直前、ごめんなさい、と小さく謝る声が聞こえた気がした。

唐突にルカの意識は浮上する。まず目に入ったのは鈍い光を放つ鉄格子。

慌てて周りを見回せば、石作りの壁に床と、どう考えても牢獄だった。しかも手足は頑丈な鎖で拘束され、身動きが取れない。

腰を見ればジークルーネも腕や足の短剣もそのままだが、これでは意味がない。

「ルーアと一緒に歩いてて、それで……」

しかし自分は何故こんな場所にいるのだろうか。そう、ミラと名乗ったあの子と遊ぼうと言われたのだ。そしてその子が歌った歌が魔

歌であることに気付いた。

だがルカが覚えているのはそこまでである。

ルーアは幸い隣にいたが、ルカ同様囚われている上に意識もないらしい。一緒にいたはずのフィーはどこにもいなかった。

「ルーア。起きて、ルーア」

ルーアもルカ同様、四肢を鎖で拘束されていた。

首だけを動かして呼び掛けるが、返事はないし、彼の瞳も閉じられたまま。鎖は頑丈で、武器を使えないルカにはとても壊せそうにはない。ここがどこかは分からないが、いつまでもこうしている訳にもいかないだろう。

魔歌を歌おうとした瞬間、ルカは愕然とした。歌えない。恐らく、魔歌を封じる結果が施されているのだろう。魔歌封じの結果の中で魔歌を歌ってもただの歌でしかない。嫌な予感がした。魔歌封じの結果など早々あるものではないからだ。そこから導き出される答えは一つ。

ルカが悔しげに唇を噛んだ時、何者かが鉄格子の前に現れた。全身を黒いロープで隠しているが、背格好からして男、だろうか。フードを被っているため顔はよく見えない。

「誰？ 何の目的で俺たちをここに連れて来たの？」

真つすぐに、怯えることなく自分を見据えるルカに、ロープの男は小さく笑みを零した。顔を隠しているフードに手を掛ける。

「目的だと？ ただの気まぐれだ」

フードの下から現れたのは見知った顔。絹の如く流れる黒髪に、

紫水晶を思わせる瞳。整った顔立ちはイクセル・クラインそのものだが、彼がイクセではないことをルカは知っている。

かつて暁闇の君と呼ばれた始竜。

「ヴァイスファイト……。俺には貴方のしようとしていることが分からない」

零れ落ちた一言に青年　ヴァイスファイトは唇の端を歪めた。鉄格子を一枚隔てたそこにいたのは黒い青年。端正な顔にはどこか意地の悪い笑みが浮かんでいる。

外見はイクセにそっくりだが、瞳に宿るものが違う。彼の紫水晶の瞳はまるで深淵を覗き込んでいるようだ。そこにあるのは深い闇、あるいは虚無。

ヴァイスファイトが自分の前に現れたことは驚いたが、それならそれで聞きたいことがある。

アルたちが語った理由。それだけが彼を駆り立てているのだろうか。生を歪め、竜の肉体を捨ててまでも？

「誰に理解してもらうつもりもない」

ルカの言葉をヴァイスファイトはそう切り捨てた。その瞳に浮かんでいるのは、やはりどこまでも広がる闇だ。ルカが今まで目にしたどの瞳より昏く、諦めが滲んだそれが、ヴァイスファイトの答えだった。

理解してもらうつもりはない。それはつまり、彼には彼の理由があるのだろう。憎しみだけではなく、他の理由が。でなければヴァイスファイトははっきりと言っていたはずだ。

「それでも俺は嫌だ。殺し合いなんて望まない」

アルたちにも、ヴァイスファイトにも。

彼の瞳を見て分かった。彼は何も信じていない。自分でさえも。嫌だと言うルカにヴァイスファイトは何も言わなかった。

無言で鉄格子を開けると、身動きできないルカに近寄り、顎を掴んで上を向かせる。触れた手はまるで氷のように冷たい。予想もしえない突然の行動にルカの体が強張る。

「同情はいらぬ。それとも、お前が止めてくれるとでも？ 脆弱な人間が？」

「……同情なんかじゃない。けど、止めてみせる。あんな悲しいこと、繰り返しちゃいけないんだ。確かに人は脆い。だけど、だからと言って全てを否定するのは間違ってる。人も竜も俺が止めるよ。絶対に」

馬鹿にしたような問い掛けとは裏腹に、ヴァイスファイトの顔には何の表情も浮かんでいない。嘲りも諦めも何も。ルカにはまるで人間を試しているように見えた。

だから逸らしかけた視線を戻し、臆することなく紫水晶の瞳を見据える。不思議と恐怖は湧かなかった。

ルカはヴァイスファイトに同情している訳ではない。何故なら、彼が背負っていたものはアルが悠久の時より背負い続けて来たものだから。

確かにヴァイスファイトの言う通り、人は竜よりも脆い。

だが脆弱だから出来ない、というのは間違っている。小さな力だつて集まれば、大きくなるように人間にしかない力だつてあるのだ。少なくともルカはそう思っていた。

待ち侘びた存在

「……遙か昔、もしお前のような人間に出会っていたのなら、我も白銀のように変わっていたのだろうか」

「え？」

ヴァイスファイトの口から出た思わぬ言葉に、ルカは呆けたように声を上げる。

ルカに、というよりは独り言に近いものなのだろう。彼が初めて見せた憎悪や悲しみ、諦め以外の感情。それは後悔のようでもあり、独白のようでもあった。ヴァイスファイトの真意、なのだろうか。

ヴァイスファイト「グラフ」「ノスフェラート。彼が何を思い、今の言葉を発したのか。ルカは思い切って声を掛ける。

「ヴァイスファイト。今からでも遅くない。やり直せるよ。だから……」

彼が多くの命を奪ったことは紛れもない事実。それは変えようもないが悔い改める機会はあるはずだ。

しかしその刹那、ヴァイスファイトが纏う空気が一変した。まるで首筋に冷たい氷の刃を突き付けられているような威圧感。本来なら知覚化されることのない魔力が、黒い光となってヴァイスファイトを包んでいる。始竜の名に関係しているのだろうか。アルなら銀、リオンなら赤、というように。

ヴァイスファイトの瞳が鋭さを帯びた。

「何を言う。これは既に定められたこと。忌まわしい始竜など滅びてしまえばいい」

「違う。そんなこと、させない。アルたちは俺が守る」

滅びてしまえばいい。迷うことなくそう言った彼は、かつてこの世界に生きる全ての命を慈しんでいた。それなのに、今の彼は妄執に囚われた憐れな者でしかないのだろうか。彼の真意が読めない。

思えばルカは守られてばかりだった。アルに庇われ、リオンやウイスタリアにも心配を掛けた。だから今度は自分が彼らの助けになりたい。

そしてそれと同じように、ルカはヴァイスファイトも助けたかった。例えこの声が届かないとしても。

「ならば抗ってみせる」

「言われなくても……」

牢獄に張られた魔歌封じの結界は、マナを拘束し、魔歌によって集められないようにする効果がある。それを破るには、結界に込められた以上の力を持つてしなければならない。当然、生半可なことではなく、一流の魔奏士でも難しいだろう。

それを始竜という師を持つとは言え、ただの少年が出来るはずがない。ヴァイスファイトは間違いなくそう思っていた。

だが、少年はやつてのけたのだ。結界に抗うことによつて生じた不快感をもとませず、ルカは歌った。

『揺らめく光は黄泉への導、逆巻く炎は断罪の槍。其は誓いと祈りを知り、猛き焰の旋律へと誘う。朱は制約、血は誓約。己が力を知り、魂を織る。無垢なる願いは届くことなく、果てなき天へと響くのみ』

結界を破るにはそれを構成する以上の力を持って破らねばならない。それはルカも知っている。師である彼も言っていた。魔歌封じの結界を破るには、それ相応のリスクが伴う、と。

だからルカは唇を噛み切った。鮮やかな血が口元を伝い、床に赤い花を咲かせた。

血は火に属する魔歌を扱う時、特に有効とされる触媒だ。ただし扱いが難しいため、暴走の危険もある。得意とする魔歌の一つ、誓焰槍の旋律を口にしたルカは目眩と頭痛に襲われた。結界を破るほどの力と血による代償。それでも構わず歌い続ける。

『 遙かな詩は世界に響き、世界は歌に満たされる。掲げた約束を知るならば、今導きの声に応えよ 誓焰槍』

誓焰槍は本来なら炎の槍を作り出す魔歌だが、対象はヴァイスファイトではない。

魔歌が完成した時点で結界は意味をなさなくなる。ルカは生み出した炎の槍を自分とルーアを戒めている鎖に向けた。じゅっ、と金属が溶けるような音と共に鎖が床に落ちる。

縛めから解き放たれたルカは素早く腰の鞘からジークルーネを抜き、ヴァイスファイトに突き付けた。彼にはこんなもの、何の脅威にもならないだろう。

けれど、これはヴァイスファイトを止めるというルカの意思表示。アルたちは自分が守る。そして彼を全力で止めるのだ。

「なるほど、ただの人間ではないということか。それに……白銀の牙。竜に愛される者、か」

抑揚のない声で呟くヴァイスファイトをルカは油断なく見据える。何から何までイクセと瓜二つで、錯覚してしまいそうになる。

ルーアの方は何らかの術で意識を奪われているのだろう。こうし

ている間も彼が目を覚ますことはなかった。浄化系の魔歌を歌えば別かもしれないが、ヴァイスファイトがそんな隙を与えてくれるとは思えない。

しかし一人でこの場を切り抜けるのも難しいだろう。今は人の姿をしているとは言え、彼は類まれなる魔歌の使い手なのだ。ルーアを庇いながらではとても戦えない。

ルカが唇を噛み締めたその時、

「すまない、ルカ。遅くなった」

聞き慣れた声に酷く安堵する自分がいる。

唐突に現れた“彼”はルカを庇うようにヴァイスファイトの前に立ち塞がった。幾重にも重なった白いローブは美しい金の装飾がなされている。

絹糸のように滑らかな長い銀髪に、類い稀なる美貌。影を作るほどの長い睫毛も美しい銀で、瞳は月光を一身に集めたような眩しい黄金。目を見張るほどに美しい青年だった。

ルカは待ちわびた彼の名を呼ぶ。

「アル！」

「よほど死に急ぐか。白銀」

アルの姿を認めたヴァイスファイトが嘲るように笑う。始竜であろうとも、滅竜歌の前では滅びを免れない。それは掠っただけのリオンの腕からは血が止まらなかった。

それほどまでに恐ろしいのだ。竜を滅ぼすために生み出された滅^{テラ}竜歌は。^{ンスレイヤ}

「何とでも言え。お前はもはや同胞はらからではない。竜の肉体を失ったお前が私に敵うとでも？」

ヴァイスファイトの挑発をもとめせず、アルは凄艶に笑った。竜の魔力は血に宿る。その源である肉体を失った彼が、単純な力だけではアルには到底及ばない。何せ彼は、始まりの時より生きる竜なのだから。その身に秘める魔力は強大。都市すら簡単に破壊する力を持つアルだ。

「なら聞くが、貴様は我を傷付けられないだろう？」

そう、始竜は同胞を傷付けられない。ヴァイスファイトはアルを殺せるが、アルは違う。竜の魂を持ちながらも、竜の肉体を捨てたヴァイスファイトはその鎖には縛られない。

しかしアルは焦るところか淡く笑っているのだ。

「私は、な」

「何がいいたい？」

含みのある言い方にヴァイスファイトは怪訝な顔をする。だから彼は気付かなかつたのだ。アルの背に隠れたル力が魔歌を歌っていることに。

ヴァイスファイトはアルばかりに注意を向け、ル力など眼中になかったから。

『見上げた空は自由の証、旅する風は世界の守人。全てを包む優しき風シルフよ。遙かな詩は世界に響き、世界は歌に満たされる。真なる自由を知るならば、今導きの声に応えよ 風舞華』

刹那、牢獄に突如として突風が巻き起こった。本来なら生まれるはずのないそれは、間違はなくルカが歌った魔歌の効果。予想もしない衝撃に、ヴァイスファイトはたたらを踏む。

ただの攻撃術ならば、彼も防げたかもしれない。

だがこの風は傷付けるものではないため、ヴァイスファイトも動くのが遅れたのだ。その間にアルは、ルカとルーアを抱えて転移する。

正に一瞬く間の出来事だった。ヴァイスファイトを足止めした風が霧散した時にはもう三人の姿はない。少年たちを戒めていた鎖が落ちていくだけだ。一人残されたヴァイスファイトは嗤う。

「こうでなければ面白くない。なあ、ミラ」

不敵な笑みを浮かべた青年は自らの足元を見やった。そこにはルカたちに話し掛けて来た子供の姿がある。雪のように白い髪、夜色の瞳。

名を呼ばれた子供は、年齢に似つかわしくない憂いを帯びた表情で頷いた。

竜たちの動揺

ルカとルーアがフィーを連れて街に出てから、どれほどの時間が経っただろう。まず最初にフィーの声を聞いたのはリオンだった。普段のフィーと比べ、随分取り乱している。街に出るというルカとルーアにフィーも連れて行けと言ったのはリオンだ。

今は肩に乗るほどの小鳥の姿をしているが、それはフィーの仮の姿である。本来は不死鳥を思わせる火の鳥。リオンが生まれてから初めて生み出した眷属、それがフィーだ。フィーがついていれば心配ない、そう思っていたはずなのに。

『申し訳ありません、主様！ ルカ様とルーア八様を見失いました！！』

「何だつて!？」

それまで肩肘をついていたリオンが思わず声を荒らげる。同時にリオンの頭にフィーが見た景色が流れ込んで来た。意識の共有である。

皆の視線が一斉にリオンに向いたが、リオンの方はそんなことを気にする余裕はない。

見えたのはルカとルーア、そして二人に話掛けて来た子供だった。真っ白な髪に夜色の瞳。愛らしい顔立ちから性別ははっきりしない。その子供が口ずさむ歌が魔歌だと真っ先に気付いたのはルーアだった。

だがその時にはもう遅い。二人と子供は一瞬にしてフィーの前から消えていたのだ。

『五月蠅いぞ、紅蓮。……何があった？』

刃のように鋭い金色の瞳でリオンを睨み付けたアルは、静かな声
音で問う。その声にリオンは、僅かだが冷静さを取り戻す。苛立ち
紛れに炎のように赤い髪を掻き回し、深く息をついた。

「……ファイがルカとメシアを見失った」

『なんだと!?!』

「見失ったってどういうことだ？ ルーアだつてついていたのに」

予想もしない言葉にアルが珍しく取り乱し、イクセが眉を潜める。
ゼフィヤイシュリア、アティは不安そうな顔で、ウイスタリアと
ゲイルは顔にこそ出さないが、心配しているに違いない。

ルーアは愛らしい少年の姿をしていても、その実態は始まりの竜
に匹敵するほどの力の持ち主である。そこにリオンの眷属であるフ
イーまでいれば、何の心配もなかったはずだった。いくらヴァイス
ファイトと言えど、簡単には手を出せない。そう思ったからこそ、
アルたちは二人を送り出したのだ。

「ヴァイスファイト、か」

「そうとしか考えられませんね」

唸るように言ったゲイルにゼフィも同意する。他にルーアとフィ
ーを出し抜ける存在など考えられなかった。自分たちがエスメラス
王国に入ったことは気づかれているだろうと思っていたが……。

人質に取るつもりなのか、それとも他に目的があるのか。それだ
けでなく、ファイのことも気になる。わざと逃したのだろうか。分
からないことが多すぎた。

静かに言ったのはアル。内心は焦っているだろうに、先程の動揺は微塵も感じさせない。彼はもう肩に乗るほどの竜ではない。同性ですら見惚れるほどの青年がそこにはいた。

「私が行こう」

「アテはあるのか？」

イクセが自分より更に長身である青年　アルを見上げる。ヴァイスファイトだとしたら、どうやって二人の居場所を突き止めるのか。簡単に教えてくれるほど、敵も甘くないはずだ。

あるいは始竜たちをおびき寄せるための罠か。普通に考えれば罠である可能性が高い。イクセはアルに暗にこう言っているのだ。罠だとして何か策はあるのか、と。

「私の牙から作った魔剣を標にする。行くのは私一人でいい。余計な数はあやつを刺激するからな」

ルカが持つ魔剣は、アルが彼のために自らの牙から作り出したものだ。竜は普通、友好の証に鱗を加工した竜笛を授けるが、牙は鱗よりずっと竜の力を秘めている。

元は体の一部であった魔剣の縁を辿れば、見つけ出せるだろう。もしルカから牙が離された場合でも、アルはすぐにそれを察知出来る。それが無いということは剣は未だルカと共にあるのだ。

「ですが、危険ではありませんか！　ゲイル様もそんな顔していないで、何かおっしゃってください！　ルカ様に危険が迫っているのですよ！！」

「落ち着け、ゼフィ。それと、こんな顔で悪かったな。俺はいつも

こんな顔だ」

慌てたゼフィは、隣にいるゲイルの服を引っ張ってがくがくと振り回す。竜の力で振り回されれば、ゲイルとて苦しくないはずがないが、お構いなしである。

普段なら、ゼフィがゲイルを諭す場面が多いのだが、ルカが絡めば彼女も冷静ではいられないらしい。

それも当然だろう。殆ど家に帰らなかったとは言え、ゼフィはルカを弟、時には息子のように可愛がってきた。アルほどではないが、過保護だし、ルカのことになると途端に前が見えなくなる。

思い切り揺さ振られながらも、ゲイルは平然と答えていた。が若干、目がやや怪しい気がするのには気のせいだろうか。おまけに冷や汗も浮かんでいるように見える。

力づくで振りほどかない辺り、彼はやはり彼女を信頼しているのかもしれない。ただ振りほどけないだけかもしれないが。

「その辺にしておけ、風天」

「そうそう。ゲイル随分、苦しそうだけど？」

「え？」

呆れ気味のアルと半分面白がっているリオンの言葉に、ゼフィはふと我に返った。自分がゲイルの胸ぐらを掴んでいたことに気付き、慌てて手を放す。

突然手を離され、ゲイルはよろめいて倒れそうになる。何とか踏みとどまったが顔色が悪い。そんな相棒を見て、ゼフィは全力で頭を下げた。

「も、申し訳ありません、ゲイル様！」

「だから落ちつけて言ってるんだろ」

乱れた服を整え、ゲイルは平謝りする相棒の頭を軽く叩いた。彼女はいつも冷静で頼りになるのだが、このように一旦取り乱すと大変なのだ。それに加え、なまじ力が強いのも厄介なのである。

相当シヨックだったのか、しゅん、とうなだれる彼女はとてもウイスタリアより年上には見えない。外見そのままの少女のようにか。

「申し訳ありません。私としたことが。取り乱してしまいました」

「気にするな。ゼファイが取り乱すのも仕方ない」

「そうそう。でも大丈夫だよ、きっと」

そんな彼女を見て、ウイスタリアとアティが声を掛ける。ウイスタリアはいつものように仏頂面で、アティはニコニコと笑ったままだったが。ルカとルーアが心配なのは皆も同じなのだ。

「あれの目的は分からないが、行くのは私一人でいい。大勢で行けば刺激してしまう」

ヴァイスファイトが二人をさらった理由。自分たちをおびき寄せたためなのか、それとも他に目的があるのか。

まだ分からないが、二人の安全を考えれば下手にヴァイスファイトを刺激出来ない。加えて数が多ければ成功する訳でもないからだ。皆で行けば、ヴァイスファイトがどんな行動に出るか。

アル一人なら、少しは油断するだろう。その隙に二人を助け出せ

ばいい。

「……分かった。二人を頼む、アル」

真つ先に返事をしたのはイクセである。そんな彼に呼応するように竜たちも頷いた。

だがゲイルだけが何も言わない。本来なら真つ先にルカを心配する彼が。いくら親子関係が上手く行ってないとは言え、ゲイルは薄情な父親ではないのだ。沈黙するゲイルに皆の視線が集まる。

「おい、アル。ルカに何かあったら承知しねえからな」

「こんな時だけ父親面をするな、ゲイル。この馬鹿者が。……まあ、普段からこうなら私も文句は言わないがな」

真剣に、アルの金色の瞳をじっと見つめて来るゲイルにアルは言った。言葉だけなら辛辣とも取れないが、アルは笑っていた。どこまでも仕方のない父親を見るように。

実際、仕方のない父親なのだろう。不器用で、誤解されやすく、おまけに息子のこととなると腑抜けになる。それでもアルはそんなゲイルが嫌いではなかった。好ましく思っていると云っていい。ルカへの不甲斐ない態度さえ何とかなるのなら。

「……すまない」

「謝るな。お前らしくないぞ。いつものように尊大でいる」

「それはお前だろ！」

ふっ、と顔を綻ばせたアルにゲイルはつい声を荒らげた。これで

はまるで自分が俺様人間のようではないか。そんな彼の答えに満足したのか、アルは小さく頷くとその場から一瞬で消えた。ル力たちの元へ転移したのだ。

アルの強さはここにいる誰もが理解している。彼ならば必ず二人を助けだしてくれるだろう。

「頼む、アル」

祈るようにイクセが呟く。この場にいる全員がル力に救われた。ル力という存在に。

イクセは楽しみを見出だせなかった毎日から。ルーアは千年の戒めから。ウイスタリアやリオン、イシユリアは人間という存在を見直すことが出来た。

アテイにしても、彼は人の新たな可能性を見せてくれた。ゼファイはゲイルやル力と出会って、人のあたたかさを知った。そしてアルも。人間もまたこの世界に生きる命なのだと教えられた。あんな小さな子に。

どうかル力が無事であるようにイクセは、否、皆は祈る。

ゼフィは心配性

アルに抱えられたルカは、瞬く間に宿屋の一室に出現した。帰ってきたのだ。そこが牢獄ではないと分かった瞬間、ルカの体から力が抜ける。

視界に入ったのは滞在していた宿屋。そこで初めて緊張していたことに気づく。知らず手が震えていた。震えを抑えようとするが、中々上手くいかない。

すると、震えていた手に白く滑らかな手が重ねられる。

「大丈夫か？」

「う、うん。何とか……」

心配そうに自分を見下ろし、支えてくれるアルにルカはどうにか返事をした。ちゃんと笑っているだろうか。

もう終わったのだと理解した瞬間、ルカを満たしたのは安堵した。しかしヴァイスファイトが何をしようとしたか、結局は分からずじまいである。やけにあっさりと帰してくれたのもおかしい。人質にするなら他にもっと方法はあったはず。

腕や足に付けた武器だつてそのままだったし、腰のジークルーネも取り上げられていない。この魔剣がアルの牙だと分からぬヴァイスファイトではないはず。

もう少し彼の真意を探りたかったが、ルカもルカで必死だった。とにかくあの場から逃げ出すことで精一杯だったのだ。

ルカは心配になってアルの腕に抱えられたルーアを見る。先程からずっと眠ったままだ。身じろぎもしない。

不安気にアルを見上げれば、彼はルカを安心させるように微笑ん

だ。

「ルーアは？」

「喪歌で眠らされているだけだ。浄化系の歌を歌えば問題ない」

「……良かった」

ルーアに何かあれば自分を責めずにはいられない。アルの言葉に力が抜ける。

アルは近くにあるベッドにルーアを横たえようと、二言三言何かを呟いた。その刹那、ルーアの体をあたたかな光が包んだ。

アルが言った浄化系の歌だ。浄化の効果を持つ歌は、その効力故に古代歌に属する。勿論、ルカにも扱えるがアルの方が早い上に効果も高い。

微かな身じろぎの後、瞼がゆっくりと開き、鮮やかな瑠璃色の瞳が露になる。ルカはルーアの瞳が好きだった。どこまでも青く澄んだ空のようで深い海のような色。この世界の青、全てを内包したような色だから。

「ルーア。大丈夫？」

「あれ、ルカ兄にアル？ 僕……あれからどうしたんだっけ？」

ルーアの瞳は未だ夢の中にいるようで、焦点が定まっていない。何やら呟くと、ぱっと起き上がり、キョロキョロと辺りを見回した。そこが宿屋の一室であると気付くとほっと息を吐く。

「一体、何があった？」

「……分からない。街を歩いてて小さな子に話しかけられたんだ。その子が魔歌を歌っていることに気付いた時にはもう遅くて、目が覚めたら牢獄だった」

若干硬い声で尋ねるアルにも、ルカは弱々しく首を振ることしか出来ない。あのミラと名乗った子は何者なのだろう。どう見ても年はルカより下だったし、ルーアの外見よりもだ。

それなのに人造竜兵^{ドラグーン}であるルーアと、始竜の眷属であるフィーを欺いたのである。

気が付けばそこは牢獄で、鎖に繋がれていた。抵抗する間もない鮮やかな手際。ルーアにはひとつ、思うことがあった。あの子は……。

「……多分だけど、あの子、人間じゃないよ」

ゆっくりと、だが確信を込めてルーアは言った。

雪を思わせる真っ白い髪に夜色の瞳。愛らしい顔立ちの子供。あくまで言動と外見は、だが。

現にルーアやフィーは魔歌の発動に気付けなかった。始竜の眷属^{ドラグーン}と人造竜兵^{ドラグーン}がだ。それは意味することは一つ。

「竜ってこと？」

「例の子供か？ 嫌な予感しかしないな」

ルカとアルの言葉にルーアは無言で頷く。アルは秀麗な美貌を歪め、苦虫を噛み潰したような顔になった。あの子供が人ではなく、竜ならばただの竜ではない。意表を突いたとは言え、ルーアとフィーを出し抜いたのだから。

とその時、階段を駆け上がる複数の足音。次いで扉が開け放たれた。

「ルカ様！！」

真っ先に飛び出して来たのはゼフィだった。鮮やかなコバルトグリーン^①の髪を振り乱し、ルカの元へ駆け来て来る。無事を確認したゼフィはルカをぎゅっと抱きしめた。

かなり焦っているようだが、力の加減は出来ている限り、まだ冷静らしい。

しかし日の光を思わせる瞳は潤み、今にも泣き出しそうである。

「大丈夫ですか！？ 怪我はありません！？ ご無事でなによりです」

「ゼ、ゼフィ。大丈夫だから」

ルカとしては心配してくれるのは嬉しいが、抱きしめられるのは恥ずかしい。ゲイルと運び屋の仕事をしている彼女と会うことは少なかったが、ゼフィは母のように優しくかった。父親であるゲイルが呆れるほどだが、ルカは嬉しかったのだ。

「おっ、無事だな。二人とも」

「ケガはない？」

ゼフィに遅れること数十秒。イクセにアテイ、リオンと肩に乗ったファイが入って来たと思えば、ゲイル、ウイスタリアとイシユリアも入って来た。一部屋にしてはかなり多い人口密度である。

ゲイルはゼフィに抱きしめられたままのルカに近付くと、何も言

わずに頭を撫でてくれた。心配してくれたのだと思うと、申し訳なくして少しだけ恥ずかしい。

リオンは後ろからルーアの飴色の髪をかき回した。その肩ではフイーが申し訳無さそうに項垂れている。二人がさらわれたと言うのに何も出来ず、一人だけ残されたことを気にしているのだろう。

「メシアも無事で良かった。リオン、心配しちゃった。ほらほらフイーもあんまり気にしない。ルカもメシアも怒ってないからさ、ねっ」

『ですが……主様から任されていたというのに私は……』

「過ぎたことを悔やんでも仕方ないっしょ。フイーの悪いクセだよ」

話を振られた二人もうんうんと頷くが、フイーはまだ気にしているらしい。

炎を思わせる瞳は依然、下を向いたままだ。ルーアの髪を梳きながらリオンは苦笑した。フイーの責任感が強いことは知っている。

だが少しばかり気にしすぎだろう。過ぎたことを悔やんでもどうにもならないのに。

「聞いて、フイー。フイーたちが見た子供なだけどさ、ちよっとオレに心当たりがあるんだよねえ。セレスや勘のいいレインは気付いてるだろ？ 後、鼻がいいアティモ」

心当たりがある。そう言ったりリオンだが、軽い口調とは裏腹に浮かない表情をしていた。話を振られた三人は三者三様の顔をしている。

ウイスタリアは納得した、どこか悲しげな表情で、アルの一種の芸術のような美貌からは何も読み取ることは出来ず、アティは憂い

に帯びた顔で金を散らした琥珀色の瞳を伏せていた。

「どづいづこと？」

「もしや……」

竜たちは何か分かってしているようだが、こちらはさっぱりだ。ルカだけではなく、イクセもゲイルも首を傾げている。ゼフィの方は何か気付いたらしい。それっきり黙り込んでしまった。

一体、彼らは何に気づいているのだろう。ルカたちが答えを求めようとアルを見ると、

「我ら始竜は今二柱を除いて目覚めている。残る二柱は眠りについている紫電の君と転生に入った夢幻の君。ルカ、お前たちが見た子供は恐らく……夢幻だ」

「おい、そりやあ……」

淡々と語るアルにイクセが唇を噛む。ルカとルーアをさらった子供が始竜だなんて到底信じられない。もし本当にその子供が始竜なら何故、始竜を滅ぼそうとしているヴァイスファイトと共にいるのだろう。まるで見当もつかなかった。

けれどアルたちが同胞を間違うことなどあり得ない。ならばあの子はやはり、夢幻の君なのだ。

「でも始竜は転生しても記憶を受け継ぐんでしょ？ とてもそうは見えなかったよ。ねっ、ルカ兄」

「うん。普通の子供みたいな言動だったけど……」

ルカもあの子に声を掛けられた時のことを思い出す。確かあの子はこう言ったのだ。ねえ、おにいちゃんたち。ミラと遊ぼうよ、とルーアが言うように、始竜は転生してもそれまでの始竜の記憶を受け継ぐ。だから彼らは生まれた時より博識なのだ。

しかし、あの子供はとても深い知識を持っているとは思えなかった。演技をしている訳でもない……と思う。ほぼ一時間ほど前のことを思い返していたルカは、あることに気付く。

「あれ？ そう言えばあの子、魔歌を歌ってた。喪歌じゃなくて」

「はい、間違いありません」

ルカの疑問にフィーもまた頷く。臃げにしか覚えてないが、あの時、意識を失う直後に聞いた歌は魔歌であって喪歌ではない。いくら竜が人の姿を取っていたとしても、それは偽れないはずだ。現に殆ど人の姿を取っているルーアでさえ、結びの言葉はちゃんと喪歌のものである。

あの子が始竜なら何故、魔歌を歌えたのか。説明がつかない。

魂に響く歌

「あれは夢幻だ。例え、感じられる力が僅かだとしても。そうだろう？ 蒼穹？」

そう言って小さく嘆息したアルは、金色の瞳をウイスタリアに向けた。夢を司る夢幻の君と彼は、始竜の中でももっとも近い存在である。ウイスタリアはこの中で一番、夢幻の力を感じることが出来るのだ。空を司るウイスタリアと夢幻を司るウイスタリア。

アルの言葉にウイスタリアは答えない。考えるように、あるいは悩むように口を閉ざしている。

そんな彼を心配してイシュリアがウイスタリアの名を呼んだ。

「ウイスタリア様……」

「確かにあれは夢幻。しかし、始竜としての力は半分ほどしか感じられない。暁闇に真名を奪われているのかもしれない」

「真名を奪われただって？ ゼファイならシルフィードゥウィンディ
「ゼルフィロスっていうあれか？」

ウイスタリアが言った真名を奪われている、という表現にゲイルが眉を潜める。彼らは互いに愛称や二つ名で呼び合うが、真名というと始竜たちが持つ真なる名前のことだろうか。

ゲイルの相棒であるゼファイにも、シルフィードゥウィンディ「ゼルフィロスという名があるように。その真名を奪われている、ということは今夢幻の君は『始竜』ではないのか。

「真名ってというのは、ぼくたちにとってとても大事なものだから」

「名と記憶を奪われたら、オレたちはオレたち（始竜）でいられない。話を聞く限り、大方、竜であることも忘れてるんだろうな」

アテイの言う通り、真名は彼らにとつて、とても大事なものだ。心を許した相手にしか真なる名を明かさない。アルの場合はそれが徹底している。

始竜の証である真名と記憶を奪われれば、始竜とて竜ではいられないのだと。そう、リオンは言った。

言葉通りなら、あの子は始竜でありながら、始竜であることを忘れてるのだろう。

「思い……出した。俺、あの子を夢で見たんだ」

「^{ドラグナー}声を聞く者の力か？ いや、でもそれなら俺やゲイルさんだってそうだろう？」

どうして忘れていたのだろう。ルカが夢で見た人物。何か訴えるような視線を向けたのは、白髪に夜色の瞳をした子供だった。間違はなく、街で見たあの子供だ。

ルカやイクセ、ゲイルなど、^{ドラグナー}声を聞く者と呼ばれる者たちが持つ力は、精神感應に属する力だと考えられている。

夢幻かもしれない夢を見た。つまり、声を聞いてもおかしくはない。

だがそれはイクセやゲイルだって同じ。ルカは人間の中でも稀に見るほどの強い力の持ち主だが、ゲイルや始竜として生まれるはずだったイクセもまた、他のドラグナーと比べて強い力を有している。

「アルたちとの繋りのせいじゃない？」

「有り得ないことではない。ルカは強い力の持ち主だ。私たちと接することによって、夢幻の声を聞いたのかもしれない」

ルアの言葉にアルが頷く。ルアの推測もあながち間違いではないかもしれない。ルカは暁闇と、今は眠りにについている紫電、そして夢幻を除いた全ての始竜たちから真名と竜笛を受け取っている。力の殆どを奪われているとは言え、あの子供も始竜であることには変わりないのだ。

始竜として生まれるはずだったイクセと出会ったことも、偶然ではないのかもしれない。

「しかし厄介だな。夢幻はその名が示す通り、幻術に長けている。本来の力を取り戻してはいないが、人なら簡単に術中にはまるだろう」

「夢幻の君……」

呟いた言葉はあの子に不似合いな気がする。街で見たあの子はとも始竜とは思えなかった。それどころか竜にさえ見えない。ルーアよりも小さい子にしか。それも竜であることを忘れているからだろうか。

おまけに『夢幻の君』は幻術に長けているという。厄介なことこの上ない。

「どうにか出来ないのか？ 始竜なんだろう？」

「真名を取り戻せば記憶は自ずと戻る。しかしそれには暁闇か夢幻に接触しなければならぬ上に、私達では無理だ」

眉間に皺を寄せ、髪をかき回すイクセの言葉に答えたのはアルだ。

真名を奪われているなら取り戻せばいい。それは分かる。

しかし彼らには出来ないというのとは一体どういうことだろう。その子供が夢幻の君だと言うのなら、彼らは同胞ではないか。何故無理なのか。

「オレたちは例え、真名を知ったとしても、それを口には出来ない。愛称で呼ぶのもそこからだな。真名は口に出す事で力となる。一種の言霊のようなものだから」

リオンの説明通り、始竜たちは自分以外の真名を口に出すことは出来ない。互いを傷つけることが出来ないように。だからこそ、始竜たちは互いを愛称や二つ名で呼ぶ。それほどまでに真名は彼らにとって『尊い』のだ。

「……分かった。俺がやるよ。あの子の声を聞いたのは俺だから。ドラグナーの力が必要なんだよね」

「話が早い。そういうことだ」

自分がやると言ったルカに、アルは渋々と言ったように頷いた。
ドラグナー 声を聞く者が持つ精神感應力。それを使えば夢幻の名を取り戻すことが出来る。ヴァイスファイトから取り戻す、あるいは夢幻自身から真名を探るにしても。

ドラグナーとして、もっとも強い力を持つ自分が、始竜として生まれるはずだったイクセ。

自分かイクセが適任だとルカは分かっていたのだ。あの子の声を聞いたのは自分だし、何とかしてあげたいとも思う。

夢の中であの子が言おうとしていた名が真名なのだろう。最後まで聞き取れることは出来なかったが、確か始めは『ミ』だったはず。ミラと言う名が真名を縮めた愛称なのかは分からないが、手掛かり

にはなる。

「でも危険じゃない？」

「ルーアさんのいう通りです。もしルカ様に何かあったら……そう
思いませんか、ゲイル様？」

「行って来い」

真名を取り戻すには、ヴァイスファイトか夢幻の君に直接会わなければならぬ。あまりに危険すぎる。成功する保証なんてないのだ。

同意を求めるように見るゼフィに対し、ゲイルは予想外の言葉を返す。ただ一言、行って来い、と。

それは、今までゲイルが口にしたどんな言葉より、ルカの心に響いた。自分を信じ、任せてくれるのだと分かったから。

いつだって白い夢を見る。白に塗りつぶされた夢。自分以外、何も寂しい世界。全てが白で染まり、時が止まったような感覚に陥ってしまう。ミラは決まって『そこ』にいた。

寂しさに耐えるように一人座り込んで耳を塞ぐ。何も聞きたくな

い、何も見たくない。言いようのない虚無感に襲われる。

何か肝心なことを忘れていないか。そんな焦燥に駆られることもあり、いつも心に虚しさを抱えていた。まるで心にぽっかりと穴が開いたような、そんな気がしてならない。

耳を塞いでいたはずなのに声が聞こえた気がして、ミラは顔を上げる。白だけの世界に現れた色彩。視線を合わせるようにしゃがみ込んでこちらを見ているのは、一人の少年だった。

恐らくは十代半ばではないだろうか。一見すれば少女とも少年ともつかない、中性的で整った顔立ちをしている。

抜けるような青い髪は天上を思わせる色をしており、茜色の瞳は宝石よりずっと輝いていた。

「どうして泣いてるの？」

心地よい、心の中にすっと入ってくるような声だった。水晶の鈴を鳴らしたかのような透明感のある声にはミラを案じる響きがある。泣いているの、という少年の言葉にミラは頬に触れた。それが涙だと気付き、手と少年を交互に見比べる。流れた涙の意味も分からず、答えを求めるように。

「わからない。なんにもわからない」

「きみの名前は？」

自分は『誰』なのだろう。何も分からなかった。自分が何故、泣いていたのかも。ここはどこで、彼は誰なのか。

そう、そうなのだ。この問いを待っていた。生まれ落ちた時より、そう確信出来る。名を呼んで欲しくて。ほんとうの（しんなる）名を。それが今、叶おうとしているのだ。

「……」

まるで宝物のように、自らの名を口にする。

なのにミラの視界を埋め尽くす白。それが全てを遮った。ミラの声を聞いてくれた少年の姿ももうない。嗚呼、と声にならない悲鳴が漏れた。

あの人なら、失くしたものを取り戻してくれる、そう思ったのに。ミラは一人ぼっちだ。雪のような世界にただ一人。

「……ひとり」

この世界に一人きり。ずっと体の芯から冷えていくような感覚に襲われた。今はもう何も見えない。取り戻せると思ったものも、己が誰なのかも。

そう思った時、瞳から冷たいものが滑り落ちる。それが涙だと気付いたミラは白い空を仰いだ。流れ落ちる涙の意味さえ知らぬまま。ただひらすら、涙を流し続けた。

昔、母がよく歌ってくれた子守唄。母の顔はもう、殆ど覚えては
いないけど、その歌だけは覚えている。

皆が寝静まった頃、ルカは宿屋の屋根に登り、母が歌ってくれた
子守唄を歌っていた。暖かで心に染み渡るメロディ。それでいて懐

かしさを感じさせる。

空には満天の星空。空気は澄んでいて、とても穏やかな気持ちになれた。

真名を取り戻す。迷いも恐れもない。あるのは使命感だけ。夢で見たあの子に名前を取り戻してあげたい。自分の名さえ思い出せないのは辛いではないか。

『まだ眠らないのか？』

聞き慣れた声にふと我に返る。振り向けば、そこには小さな竜の姿をしたアルがいた。彼は座り込み、足を伸ばしたルカの隣に着地する。

時間的にはもう真夜中だと言っていいが、月と星明かりのおかげで明るく、アルの銀色の鱗は星のようにキラキラと輝いていた。

「うん。あんまり眠くないし。そういえば、アルと二人きりで話すのって久しぶりだよな」

『そう言えばそうだな』

緊張してはいなかったが、眠気はまだやって来ない。

ふと思ったことだが、最近はアルと二人きりで話す機会もめっきり減った。故郷のエランディアを出た時は、ルカとアルの二人旅。それが一人増え、二人増え、今では大所帯である。

いつだって仲間たちが一緒にいるため、二人きりで話すことも旅が始まってめっきり減った。

『寂しいか？』

「うん……正直」

悪戯つぼく聞くアルに、ルカは正直に肯定した。皆がいてくれるから、寂しいとはまた違うかもしれない。

けれど、こうやってアルと話せなくなるのは嫌だ。子供っぽいと呆れられるかもしれないが、自分の気持ちに嘘は付きたくないから。言い返そうとしたルカの髪に長い手が触れた。そのまま優しく頭を撫でる。アルが人の姿となったのだ。

困ったような口調とは裏腹に彼はいつになく、慈しむような表情で少年を見つめていた。

「まだまだ子供だな、ルカは」

「……どうせ俺は子供だよ。アルと違って」

「子供でいることが悪いことではない。歌ってくれ、ルカ。お前の歌は心地良い。その純粋な音色は、私の魂まで響く」

されるがままだったルカがぼつりと呟いた。自分よりずっと年上な彼の余裕が悔しくて、拗ねているような答えになってしまう。

そこまで手放しに褒められると気恥ずかしくてくすぐったい。

時々思うことがある。彼ほどの力を持ち、始まりの時より生きる彼がただの人間であるルカと共にいるのか。不安になるのだ。自分は果たして、彼の隣にいる資格があるのか、と。

でも彼はアルは自分を選んでくれた。それがきつと答えなのだ。

ルカは答える代わりに息を吸い込み、再び子守唄を歌った。母がルカに歌ってくれたように優しく。

このまま時が止まればいいのに。それなら誰も傷付かない。リオンが悲しむこともないし、アルたちが辛い役目を負うこともない。

例えそれが叶わぬ願いだとしても、ルカはそう思わずにはいられなかった。逃げだつていい。彼らは世界の支柱として逃げることも許されなかったのだ。

ただ一人のために歌うルカに、アルは無言で目を閉じ、彼が奏でる音色に耳を傾けていた。

第八奏 了

魂に響く歌（後書き）

八奏、終了となります。次章は零れ落ちる命、です。

心がある証

“仲間”たちがルーアを見ていた。感情のない、虚ろな瞳で。だ
というのに、彼らがルーアを見る瞳には嫉妬や絶望と言った負の感
情が浮かんでいるような気がする。皆、口々にルーアを責めるのだ。
何故、お前ばかり、と。

数多く作られた人造竜兵の中で、ルーアは唯一の成功体だった。
他と人造竜兵とは違い、人間に近い心と呼べるものがあつた。

ルーアを除いた仲間たちは、力に耐え切れず暴走するか、失敗作
の烙印を押されて処分された。ただ一つの例外もなく。無慈悲なま
で。

怨嗟の視線を向けて来る仲間たちにルーアは何も言い返せずにい
た。

仲間たちの中には人と竜を混ぜた異形のものや、皮膚が醜く爛れ
た竜の姿をしたものがある。ひしひしと伝わってくるのだ。お前が
憎い。何故お前ばかり、と。そんなことルーアにも分からなかつた。

ここは暗くて寒い。まるで永久凍土の中にいるように。

あの人が助けてくれたから、ルーアは生きることが出来た、世界
を知ることが出来た。あの人が愛したこの世界を。

自分の命は無数の骸の上に築かれたもの。彼らはそれを忘れるな
と言いたいのだろうか。忘れていた訳ではない。ただ、思い出す回
数が少なくなっただけ。

ルカやアル、イクセたちの隣は心地良くて、つい甘えてしまった
のだ。『ルーア』は竜を元にして作られた偽物なのに。そのことが
酷く罪深い気がしてルーアは唇を噛んだ。

『ごめんね。でも僕は最後までルカ兄たちのそばにいたい。だって

もう……』

今にも崩れ掛けた同胞たちに向けてルーアはそう謝った。その先は言葉にならない。口に出すことは躊躇われた。すると彼らの形は崩れさらさらと砂になって行くではないか。

残されたのはルーアただ一人だけ。一人ぼっちになったのだ。

皆、ルーア一人を残して逝ってしまった。この世界にルーアと同じ存在は一つとして存在しない。それが酷く悲しかった。

『さよなら、みんな』

一筋の涙が少年の白い肌を滑る。それが悲しみによるものなのか、それとも別の感情によるものか、ルーア自身にも分からない。

けれど、誰かのために涙を流す、それこそが心がある証だとあの人は言った。

『ルーア』は確かに作られたものだ。けれどこの心は、決して作られたものじゃない、紛いものなんかじゃない。今ならそう、胸を張って言える。

目が覚めれば、いつもの日常だった。窓から差し込む朝日が少し眩しい。気だるげに身を起こせば、酷く喉が渴いていることに気づく。

気を利かせてくれたのか、部屋にはルーア以外、誰もいなかった。先ほどまで見ていた夢は、まるで現実のように鮮やかでルーアの心を抉った。目を閉じればはつきりと思い出せる。同胞たちの怨嗟の声、嫉妬や憎しみ。

喉はからからで水分なんてないはずなのに、ルーアの瑠璃色の瞳

から涙がこぼれ落ちた。

「あ……」

止めようとしても止まらない。シーツを引き寄せて握り締める。どうして涙が出たのか、ルーアにも分からなかった。悲しみか哀れみか、それとも別の何かなのか。

「ルーア、どうしたの？ 怖い夢でも見た？」

聞き慣れた声に顔を上げる。

するとそこには扉を開けたまま、心配そうに自分を見るルカの姿があった。彼はすぐにルーアの涙に気付き、ゆっくりと歩み寄り、ルーアのベッドに腰掛ける。

答えることが出来なくて、無言で首肯した。慈しむように髪を撫でられると、堰を切ったように涙が流れ落ちる。ルーアが何よりも怖かしいのは、孤独。

夢の中には自分を理解してくれる存在はいなかった。皆、ルーアを憎しみ、あるいは嫉妬の籠った眼差しで見つめていたのだ。

「そっか……でも大丈夫だよ。そばにいるから」

声を殺して泣くルーアを、ルカは優しく抱きしめる。何度も大丈夫だと言って背中をさすった。

いつかアルが言っていた。ドラグーンとそのマスターは精神的に繋がっているという。ルーアの悲しみが伝わって来る。

言葉など必要なかった。少なくとも今は。

「ルカ兄……」

ルカの手はあつたかくて、いつも自分が望むものをくれる。これ以上、この人に甘えてはいけないと分かっているのに。

だってもう、終わりが見えているから。ルカのためなら、何物も惜しくはない。彼の力になりたいと思う。ルカは何も知らなくていい。全て自分がもってゆく。

「たまには甘えてもいいんだよ」

なのにルーアの考えを読んだようにルカが笑う。

生まれてからはや千年。甘えることすら許されなかった。自分を作ってくれたあの人にさえ、弱音を吐くことは躊躇われた。甘えるなんて論外だ。

「甘えて……いいの？」

「勿論。それとも年下の俺に甘えるのは嫌？」

ルーアは生まれてから過ごした時間はそれほど長くない。

しかし封印されていた時間を合わせると千歳以上であり、十五歳のルカよりずっと年上である。つまりルーアにはルーアの矜持がある訳で。

「うっん。そんなこと……ない」

「なら問題なし！」

どんな時間を生きていても甘えたいなら甘えればいい。問題ないと微笑むルカに、ルーアも涙を拭い顔を綻ばせた。

（ありがとう、ルカ兄。貴方がいたから、僕はこの世界に“生まれる”ことが出来たんだ）

むせ返るような血の臭い。視界は赤で染まっている。それ以外の色彩など存在しないかのように。

吐きそうになるのを堪えて、ミラは己が引き起こした光景を見つめた。ミラの小さな体は今や返り血で真っ赤に染まり、白い髪も同様に真紅に染まっていた。

背後には青ざめる者、堪えきれずに嘔吐する者まで様々だ。彼らはヴァイスファイトが連れて行けと言ったから共に来ただけ。エスメラス王の配下たちである。

ミラの前には力なく四肢を投げ出した竜たちが積み上がっていた。皆一様に虫の息で、放っておいても死に至るだろう。彼らが体に負っている傷は刀傷や人の魔歌によるものではない。大きな裂傷は爪や牙で切り裂かれたようなものであり、喪歌によって受けただろう傷も見受けられた。全て彼らが同士討ちをした結果である。

ミラは何もしていない。ただ少し幻術をかけてやっただけ。

それだけで彼らは同士討ちを始めた。本来なら、人間の魔力で竜を惑わせることは困難で、一体ならまだしも、地面に転がった魔水晶と、そこにいる竜たちを合わせると三十体はくだらないだろう。

こんなこと、したくないのに体が勝手に動く。まるで手足の自由

がきかなかった。

「…………ごめんなさい」

『人間……風情が』

折り重なるようにして倒れていた竜の一体が起き上がる。

だがその身に負った傷は既に致命傷。体のありとあらゆる場所に走った傷からは絶え間無く血が流れ出していた。残った命の炎を燃やし尽くすかのように竜は力の限り咆哮する。

『オオオオオオ！！！』

それは正に大気を貫く咆哮。兵士たちは呪縛されたように立ち尽くし、恐怖に震えることしか出来ない。だと言いつのに、ミラは恐怖を感じなかった。本能、というべきなのだろうか。

水沫乃檻、と呟いた瞬間、竜の体を包んだのは形を持った水だった。まるで檻のように現れたそれは、容赦なく竜を拘束する。

自分の意思とは無関係に動く唇。藻掻く竜に、ミラの唇は容赦なく旋律を紡ぎ出していた。

『絶対氷結』

周囲の気温が一気に下がり、竜の巨体を覆っていた水が残らず氷結する。きんきんきん、と甲高い鈴のような妙なる響きは思わず聞き行ってしまうほど美しかった。

けれどそれは、聞く者を感嘆させるだけの旋律ではない。死へと誘う慈悲なきうた。

隆起した幾本もの氷柱が竜の肢体を貫いた。その刹那、硝子が碎けるような音を残して氷の枢は四散する。碎けた破片が日の光を浴

びて空中を舞った。

過去の遺物

誰かに呼ばれた気がした。

いや、誰かではない。恐らくは、この世界でもっとも自分に近いもの。ルーアが“それ”に気付いたのはルカと共に捕われ、意識を失っていた時だ。よくよく考えれば当然だったのかもしれない。始まりの竜の力は強大。例え魂だけの姿になったとしても、ただの人間がその受け皿になることは出来ない。力に耐え切れず、肉体は朽ち果てるだろう。

「ルーア？」

「考えたいことがあるから、ちょっと散歩、行ってくるね。大丈夫、心配しないで。すぐに戻るから」

ルカに気付かれないうつ、笑ってドアノブに手を掛ける。ちゃんと笑えているのだろうか。

ルカは鋭い。少しでも変な所があれば、すぐに気づくだろう。だから細心の注意を払わなければならなかった。心配しないで、と言えばルカは何か言いたそうな顔をしていたが、頷いて、気をつけてねと言ってくれる。

ドアを開けたまま、振り返りルカを見ると様々な思いがこみ上げてきた。

「ルカ兄」

「なに？」

「……大好きだよ」

不思議そうにこちらを見るルカに、ただ一言だけ言葉を贈る。
大好きな人。ルーアを牢獄から連れ出してくれた、世界を見せてくれたマスター。彼がいなければ、ルーアは水晶の中で滅びを待つだけだった。

一言だけではとても、ルカへの気持ちを表すことは出来ない。
でも今のルーアにはそれ以外の言葉など思い浮かばなかったのだ。

「え？」

「ううん、何でもない！」

何でもない風を装って部屋を出る。ルカにだけは知られたくない。彼の顔を見ただけで、決意が揺らぎそうだった。胸に去来する様々な想いを振り払い、ルーアは宿屋を後にした。

「御望み通り、来てあげたけど？」

宿屋を出たルーアは一人、森の中を歩いていた。森の奥、千年樹がそびえ立つ　開けた場所で立ち止まる。

ルーアは己を待つ人物に声を掛けた。それは黒いローブに身を包んだ人物。肌で感じるマナの動き、ここ周辺には隔離結界が張られている。

振り返ったのは青年とも呼べる男だった。冬の夜空を思わせる黒髪に、紫水晶のように鮮やかな瞳。イクセと瓜二つな彼は、ヴァイスファイト「グラフ」ノスフェラートに他ならない。

「一人で来るとはよほど死にたいのか、ドラグーン人造竜兵」

「さあね。それより、隠したって分かるよ。僕を殺したいほど憎んでいるくせに。君は“何”？」

イクセと同じ顔には何の表情も浮かんでいない。

しかしそんな彼に対してルーアは普段見せることのない、どこか嘲るような笑みを浮かべている。それは不思議な問い掛けだった。彼はヴァイスファイトであるはず。

「俺は竜の力を移植されたニンゲンだ。紛いものの竜、ドラグーン。何故お前ばかり……所詮偽物でしかないくせに」

「君こそ、人にも竜にもなれなかった失敗作だろうに。自分を棚に上げて随分な言いようだね。始竜の魂を受け入れて世界に復讐でもするつもり？」

ヴァイスファイト ではなく、彼は竜の力を移植された人間だと言った。彼のイクセと同じ紫水晶の瞳はいつの間にか黒に近い色になっている。

(所詮偽物でしかない？ 笑わせるな)

もしここにルカたちがいれば驚いただろう。

今の彼はルーアであってルーアではない。その堂々とした立ち振る舞いは、人の手によって作られた人造の竜 ドラグーンとは言え、竜そのものだった。

ルーアたちが作られる以前、人の身でも竜に対抗する術が講じられた。その計画によって作られたのが“彼ら”だ。

「竜の魔水晶に人が耐えられただけでも奇跡なのに。でも結局、竜には勝てなかった」

「何故お前だけが！ 作り物の……紛い物のくせに！！」

彼らは己の体に竜の魔水晶を埋め込んだのだ。それには凄まじい苦痛が伴い、発狂死した者が殆どだったという。所詮、人の身では竜を越えられない。それが研究者たちに突き付けられた事実だった。淡々と、だが不敵な笑みを浮かべて言葉を紡ぐルーアを、彼は射殺さんばかりに睨み付けていた。青年から吹き出す殺気は尋常ではない。始竜の力を受け入れたためだろう。

単純な魔力だけならルーアでも彼に及ばない。その上にここには、力を制御してくれるマスターがいないのだ。ルーアにとって致命的とも言える。

それでもルーアが焦る様子はない。むしろ予想していたように見える。まるでわざと彼の怒りを買ったように。

「確かにこの体も力も全ては作られたものだ。けど、心は違う。この心だけは僕のものだ。ルカ兄やみんなが育んでくれた」

ルーアは確かに紛い物でしかないのかもしれない。

けれど、この心だけは違う。誰かに与えられたものではない。あの人気が気づかせてくれ、ルカたちが育んでくれた大切な宝物。全てまがい物だとしても、この心だけは本物。それだけは誰にだって否定させない。

「五月蠅い……まがい物は消える！」

その瞬間、風が不可視の刃となってルーアを襲う。竜と同じ。彼は短い、たった一言で魔歌を発動させた。

いや、この場合、喪歌と言った方が正しいかもしれないが。ただの魔歌でルーアが傷付くことはない。人間の魔力、ではだが。

しかしヴァイスファイトの力を受けた彼なら、ルーアを殺す事が出来る。

「初めて見た時からずっと殺してやりたいと思ってた。お前に何が分かる！！」

叫びと共に飛来する風の刃と魔力の奔流。ルーアはそれを魔力を纏わせた腕で振り払い、残った分を同じように風の刃をぶつけて相殺させた。

青年は強すぎる力を制御出来ていないのだ。

だがそれはルーアも同じ。自分の力に振り回されないようにするのが精一杯。何としてでも隙を突き、夢幻の真名を取り戻さなければ。

こんな危険なこと、ルカにはさせられない。いくら彼が望んでもルーアが嫌なのだ。もう、あの人のように守れないのは嫌だから。目の前であの人の命が消えると分かった瞬間、ルーアを襲ったのはどうしようもない恐怖だった。

自分を理解してくれる人がいなくなる。それがどれほど恐ろしいことか。

「よく言うよ。過去の妄執に囚われているだけの哀れな人形が。時代に沿わない遺物は消えるべきだ。君も……僕もね」

口の端を吊り上げ、不敵に、それでいて寂しげに笑ったルーアは全ての攻撃を捌ききっている。望まなかったとは言え、戦いの記憶を体が、魂が覚えているのだ。

二人の魔力がぶつかり合い、激しい風が吹き荒れる。

ルーアも彼も、本来なら存在してはならないもの。過去の遺物は消えるべきだ、この世界から。

ヴァイスファイトが表に出てこないのは、何か考えがあつてのことか、それとも彼の好きにさせているだけなのか。ヴァイスファイトが何かを考えていたとしても、今のルーアには関係ない。

自分は始竜ではないため、彼の興味を引く対象ではないだけなのかもしれないが。

『氷葬陣』

ルーアは襲い来る風の刃を相殺し、息を付く暇もなく喪歌を唱える。

刹那、周囲の温度が急激に下がり、植物や大気までもが凍りつく。それは喪歌、ではなく遙かなる時に埋もれし古代歌だ。

本来なら、マスターたるルカの力を借りずに行使できるものではない。

だがこのままではジリ貧なのだ。ルーアの方が先に息切れするのは目に見えている。

「死ぬ気か？」

「さあね」

死ぬ気かと笑う青年に、ルーアはどうか笑みを浮かべながらはぐらかす。ぱき、ぱきと音を立て、青年の足が凍りついて行く。無情にも全てを凍てつかせ、封じる氷姫。遍く氷界を司る冷たき姫は、

己以外の存在を許さない。吹き荒れる雪風は正に彼女の吐息のよう。だが有利であるはずのルーアの顔は真っ青で、肩で息をしている有様だった。どの道、もう限界だ。

『燃える、緋炎燐』

青年の体が凍りつくと同時に氷がとけて行く。

魔力と魔力のぶつかり合い、純粹な力比べ。ルーアは確実に押し負けるだろう。

しかしそんなこと、言われるまでもなく分かっている。ルーアは地面を蹴り、青年の腕を掴んだ。

黒に近い紫の瞳が驚愕に見開かれる。ヴァイスファイトに奪われた夢幻の真名を取り戻すには、精神に潜らねばならない。声を聞^{トラゲ}く者だけでなく、マスターと精神接続を行うルーアもまた適任だったのだ。ルーアの力を持つてすれば精神接続は一瞬。見えた。『。それが夢幻の名。』

だがその一瞬で青年を戒めていた氷が砕け散り、ルーアの肌を裂く。青年が生み出した緋色の炎が少年を飲み込まん^と顎を開けた。

『絶対……氷結』

ルーアは必死に喪歌を紡ぐ。地面から隆起した氷柱が炎を消し去ったかと思うと、きん、と空気が裂く音がした。直後、激しい爆風が生まれる。ルーアの喪歌と青年の歌の力がほぼ同等だったために起こった現象だ。

膨れ上がった力がルーアの中で荒れ狂う。気を抜けば自分の力に飲み込まれそうだ。正気を保つために、肌に爪を立てる。痛みで意識を繋ぎ止めておかなければ、立っていることさえ出来なかった。

満身創痍といった様子のルーアを見て、青年が嗤った。イクセと

同じ顔で。

『血塗れの刃は我が手中。四散せしは幾千の叫びにして幾万の嘆き。世界を埋める幾億の慟哭。白は緋へと染まり、真紅の涙が流れ行く。遙かな詩は世界より途絶え、世界は滅びに満たされる。昏き破滅を知るならば、今反逆の証を立てよ』

人が生み出した竜殺しの魔歌。まともに受ければルーアの命はない。

しかし、彼にはもう抗うだけの力さえ残されていなかった。震える唇でどうにか喪歌を紡ぐが、声にならない。

『滅竜歌』

さよなら

皆、それぞれ出掛けているため、部屋に残されているのはルカだけだ。

ゲイルとゼフィは情報収集に、アティとウイスタリア、イシユリアは夢幻の気配を追って街を出た。ルーアは未だ戻っていない。

そこにリオンとイクセ、彼の肩に乗ったアルが入って来る。

『ルーア八はどうした？』

「考えたい事があるから散歩に出るって」

ルーアがいないことに真っ先に気付いたのはアルだった。

先程も自分がいてはルーアが弱みを見せられないから、と席を外してくれたのだ。冷たいようできてこの竜は実に仲間思いなのである。

心配しすぎだとアルの頭を叩いたのはイクセ。自分が始竜として生まれるはずだったと聞かされた時、正直頭が真っ白になった。自分を見失いそうになったと言っても過言ではない。

「ま、そんな時だってあってもいいだろ。俺だってそうだったからな」

「メシア、最近、無理して元気出してたみたいだしさ。きっとヴァイスファイトの器になったものの事、気にしてるんだろ」

「どっぴつとっぴつ」

リオンは一体、何のことを言っているのだろう。

ルカがどういうことかと尋ねれば、アルモリオンも苦い顔になった。訳が分からないのは自分とイクセだけだ。

「イクセなら別だけど、人の肉体は始竜の魂を受け止めきれない。耐えられないんだ」

「え？」

始竜が持つ力は強大。人造竜兵ドラグーンでさえその力に耐えられなかったというのに、人が始竜の魂を受け止めきれるはずがない。

イクセは新たな暁闇の君として生まれるはずだった。始竜としての器である彼なら別だが、普通の人間は始竜の魂に耐えられない。肉体は即座に崩壊してしまうだろう。

『恐らく、あやつは人の身でありながら魔水晶を移植されたもの。ルーアハが生まれる前に生み出された存在。ルーアハは本能的に気付いていたのだらう』

人でありながら始竜の魂を受け入れたもの。彼は恐らく、魔水晶を移植された実験体。そう考えれば、彼の体が未だ形を保っている理由が分かる。

魔水晶を移植された青年と魔水晶を元にして作られた少年。彼らは同胞といってもいいのかもしれない。

アルヤリオンがあえてそれを口に出さなかったのは、ルーアを慮つてのことだ。真実は時に残酷で人を傷付け、突き落とす。

「だから……」

泣いていたのか。マスターだと言うのに、ルカは気付けなかった。それが悔しくて情けなくて、少しだけ悲しかった。

とその時、甲高い音を立てて床に転がったもの。それは冒険者を示す緑の宝石がつけられた耳飾り。止め具の部分が取れたのだろう。

「落ちたぞ」

「ありがとう、イクセ」

拾ってくれたイクセに礼を言って耳飾りを受け取る。何故だか胸騒ぎがした。

それを上手く言葉で表すことは出来ないが、この駆り立てられるような焦燥はなんだろう。杞憂に終わればいい。そう思いながら、ルカは耳飾りをつけた。

走馬灯、と言うのはこういうことを言うのだろうか。自分があの
人に作られてから、竜を殺すためだけに存在していた。この手で数
えきれないほどの竜を殺した。自らの意思ではないとは言え、それ
は間違いなくルーアの罪だ。

体を裂かれるような激しい痛みを意識が覚醒する。白いシャツは
血に塗れ、傷口からは絶え間なく血が流れ続けていた。動く度に激
しい痛みが襲い、足を引きずるようにして歩く。

青年が歌った滅竜歌はルーアの体を捉えていた。どうにか逃げ出
したものの、転移するだけの力さえ残されていない。

だがここで倒れるわけには行かない。ルカに伝えなければ。

「ルカ兄……みんな」

勝手なことをした自分を怒るだろうか。呟いた瞬間、激しく咳き
込んだかと思うと唇から真っ赤な血が溢れ出した。滴り落ちた血を
拭い、再び歩き出す。そんな彼の耳に聞こえるはずのない声が聞こ
えた。

「ルーア……!」

死にかけて自分の耳が捉えた幻聴。そう思い込もうとしても、向
こうから駆けて来る存在。ルカと彼の肩に乗ったアルにイクセ、そ
してリオンだった。

目の前で崩れ落ちた血まみれの体を、ルカはイクセと共に支える。
顔は真っ青で死人のよう。彼の体は傷ついていない場所を探す方が
難しいほどぼろぼろだった。

自らの名を呼ぶ声にルーアがゆっくりと瞼を上げた。露になった
のは瑠璃色の瞳。いつだって美しく輝いていたはずのそれは今や輝

きを失っている。

「ルーア！」

「早く手当てを。ルカ」

「う、ん……」

呆然とするルカに促すようにイクセが言った。その声に我に返ったルカが魔歌を紡ごうと口を開く。だがそれをルーアは弱々しい声で押し止めた。

「もう、無駄だよ……分かるんだ」

「無駄なことなんて……」

「自分の……体だから」

言われるまでもなくルーアは理解していた。自分の体のことは自分が一番よく分かるのだから。

滅竜歌はマナとマナの繋がりを破壊する。ルーアの体は竜よりもその結び付きが弱い。人の手により作られた竜だから。彼の体は修復不可能なくらい破壊されていた。

古代歌を行使したとしても、奇跡は起こらない。

『何故、こんなことをした？』

今まで一度も口を開くことがなかったアルが低い声で問う。それ故に重い一言だった。

感情を表すことの少ない彼にしては珍しく、金色の瞳には僅かな

怒りと悲しみが浮かんでいる。

「僕の体は……限界、だったから……。どのみち長くはもたない。失敗作……だったから」

「隠していたのか」

静かに紡がれたリオンの声に、こくりと頷く。

アルとリオンにはルーアの状態が手に取るように分かった。彼の体から溢れ出す力。恐らくはずっと隠していたのだろう。

ドラケン 人造竜兵唯一の完成体。それがルーアだ。

しかし彼とて人の手により作られた存在。綻びが生まれるのは当然と言える。今のルーアは己の力を抑えるだけで精一杯。このまま放っておけば、暴走するのは目に見えていた。

「だからって……どうして言ってくれなかったの!？」

「ルカ兄やみんなに……そんな顔、させたく……なかったからだよ。力が抑えられなくなれば……僕は死ぬ。マスターとして、ルカ兄と僕は繋がってるから……危険なんだ。でも、僕は自分で死ぬことが出来ないから」

茜色の瞳からこぼれ落ちる涙がルーアの頬を伝う。

ルーアが力を暴走させれば、マスターであるルカも巻き込んでしまう。もし彼らがそれを知れば、自分たちなど省みずに方法を探ししてくれるだろう。

けれど、そんな方法などない。この身は力に耐え切れず、崩れ落ちようとしているのだから。

しかし兵器として作られたルーアは、自分で命を絶つことが出来ない。かと言って、皆に頼めるはずがなかった。自分を殺せなど。

「ホントに馬鹿だろ、お前は……」

「ごめんね、イク兄もリオン兄……アルも」

馬鹿だろ、と半ば叫ぶ形になったイクセを見てルーアは微笑んだ。それから黙ったままのリオンとアルに視線を向ける。リオンは悲しげな表情で無言のままゆっくりと首を振り、アルは小さく謝るな、と呟いた。

「ルカ兄……手を」

ルカは差し延べられた手を夢中で掴む。小さく、血に塗れた手を。それはひどく冷たく、生きている者の手とは思えなかった。

重ねた手から伝わって来る記憶、夢幻の真名。ルーアが何故、こんなことをしたのか、ルカは本当の意味で理解した。全て自分のためなのだ。

驚きから何も言えなくなったルカの手を握り直し、ルーアは優しく微笑んだ。とてもあたたかな、包み込むような笑顔で。

「ねえ、ルカ兄。笑って……僕、ルカ兄の笑った顔が大好きなんだ」

涙で視界が霞み、ルーアの顔が見えない。笑おうとしてもとめどなく涙が溢れて来る。

その刹那、握っていたルーアの手が急に質感を無くした。

「ルーア!？」

「嫌だ! ルーア!!!」

「ありが……とう。みんながいたから、ルカ兄がいたから、僕はもう一度……この世界で生きることが出来たんだ。あの人が愛した世界で。嬉しかったよ……。見届けられないことが……悔しいけど。僕が死んでも、このマナは世界と一つになる。……だから淋しくない。いつも見守っているから」

ルーアの体が徐々に消え始めていた。透けた手と体から地面が見える。

さよなら、マスター。最後の言葉は声にならなかった。瑠璃色の瞳から流れた一筋の雫。ルカの手を握り返していた手が力を失って落ちる。

「ルー……ア？ ルーア！！」

「嘘、だろ……」

声の限りに叫んでも、ルーアの瞳が開くことはない。イクセは呆然と呟き、今にも動き出しそうな少年の亡骸を見ていることしか出来ない。

それまで人の形をとっていたルーアの体が輪郭を失っていく。

その僅か数秒後、何の前触れもなく少年の体は光の粒子となって消えた。後に残ったのはルカが買ってあげた服と漆黒の魔水晶だけ。

ルカは恐る恐る拳大の水晶に触れる。ぱきん、硝子が碎けるような音がしたかと思うと魔水晶はさらさらと砂になって風に流れて行った。

彼は、ルーアは自分たちに何も残してはくれなかった。認めたくない。なのに、どうしようもない現実がそこにあった。

これが夢なら覚めて欲しい。だけどいくら願っても無駄なことだった。

「う、ああっ……ああ」

ルーアの血で染まった服を両手で強く抱きしめ、涙が枯れ果ててしまっただルカは泣いた。

服には今もルーアの体温が残っている。それは彼がつい先ほどまで生きていた証。なのに、ルーアという少年はもうこの世界のどこにも存在しない。

世界と一つになると彼は言った。

だがルカは二度と『ルーアハ』という存在を感じることが出来ないのだ。

笑ってと、笑った顔が大好きだからと言われたのに、笑えない。口から出るのは嗚咽ばかりで、そんな自分が酷く惨めだった。

全てが終わってから

どうして気付けなかったのだろう。気付いていれば運命は変わっていただろうか。

笑って、と彼は言った。全身は血に塗れ、ぼろぼろになりながらも。ルカは笑えなかった。この手から、繋いだ手から体温がなくなってしまうことが酷く怖かった。

行かないで、心の中でそう叫んでも彼の手はどんどん冷たくなって行く。

ルーアは死んだ。世界と一つになった。

だけど、ルカ兄、そう言って笑いかけてくれた存在はもう、どこにもいない。声をからして叫んでも応えてはくれないのだ。

扉を閉めると同時にアルは金色の瞳を伏せ、小さく嘆息した。今の彼は竜ではなく、人の姿をしている。皆が沈黙する中、憂いを帯びた表情でアティが尋ねる。

「どっ？」

「落ち着いた。今は泣き疲れて眠っている」

部屋にはイクセにリオン、ウイスタリアにイシュリア、ゲイルとゼフィの姿があるが、皆一様に沈痛な面持ちで口を開こうとはしなかった。

泣き疲れて眠っている、と言ったアルの顔にも疲労の色が濃い。イクセは苛立ったように唇を噛み、怒りの矛先を見つけられずに右手で壁を叩く。

「くそ……何でだよ、何でルーアが死ななきゃならなかった」

それは普段のイクセから考えられない弱々しい声だった。

ルーアの異変に気付いたのはアル達だった。その後、泣きじゃくるルカをどうにか宥め、リボンタイだけはルカが形見の品として持つことにし、ルーアの服を亡骸の代わりに埋めた。

今でもまだ信じられない。ルーアがもうこの世界のどこにもいないなんて。明るい少年だった。自らの出自を恨むことなく、始竜たちを慕い、ルカやイクセを兄と呼んだ。

自らの体の限界を悟ったルーアは誰にも相談せず、一人で終わらせようとした。

夢幻を追っていたアティとウイスタリア、イシュリアの方は一足遅かったらしい。三人が駆けつけた時には強大な力の残り香とマナの残滓、そして血に塗れた大地だけが残されていた。

そして情報収集に出ていたゲイルとゼフィが手に入れた情報。エスメラス王は秘密裏に戦の準備を進めているらしい。それが示す事はただ一つ、竜との戦争だ。

「……悲しむのは全てが終わってからだ。私はもう少し、ルカの側にいる」

状況は悲しむ時間さえ許してくれない。悲しむのは全てが終わつてから。彼も、仲間達も分かっているのだろう。イクセは何も言わずに目を伏せ、再び唇を噛んだ。

仲間たちを残し、アルはルカが眠る部屋へと戻る。ルーアが死んで辛いのは皆同じだ。

だが今はまだ悲しむ時ではない。悲しむのは、後悔するのはいつでも出来る。

静かに寝息を立てるルカの頬には未だ乾ききれぬ涙の跡が残っていた。あれからルカはひたすら泣き続けた。涙がかれてしまうのではないか、そう思わせるほど。

アルはルカが眠るベッドに腰掛け、彼の青い髪を梳く。空いた左手を血が滲むほど強く握り締める。悲しむのは全てが終わってからだと皆に言つたが、自分はルーアの異変に気付けなかった。

彼は確かに人の手によって作られた人造竜。

けれど、どんな形で生まれた命であっても、この世界に生きる命だったのだ。

人と竜が争い、殺しあえば世界は『終わる』。そう作られている。何故ならこの世界『アルカディア』は人と竜の理想郷だから。

ヴァイスファイトは自分達を殺すよりも、この世界を終わらせたいと思つていのではないか。アルにはそう思えてならない。

もうこれ以上、先延ばししておくことは出来ないだろう。夢幻の真名を取り戻した今、一刻も早く行動を起こす必要がある。そう、刺し違えてでもヴァイスファイトを止めるのだ。

そこまで考えてアルは気付く。ルカはそんなこと、望んでいない。もし自分が死ねばルカはきっと自分を責めるだろう。させてはならないし、させたくない。

「……アルカディア。この世界を生み出した神は去った。残された我らは、世界を見守り続けた。だがそれも、遂に終わりの時を迎えたのかもしれない」

世界は既に創造主の手を離れた。もう潮時なのかもしれない。もし人や竜が世界の滅びを望むのなら、自分達に止める術はない。何故なら始竜は見守る者にして監視者。世界という鎖に縛られたもの。だがアルが滅びを望んでいる訳ではない。必死に生きようとしている命がある限り、世界を終わらせることなんて誰にも許されない。例え神であっても。子は親の手を離れ、一人で羽ばたけるようになったのだから。

「……ヴァイスファイト。全ての決着をつける時だ」

全てを終わらせる時が来た。人と竜は必ず分かり合える。ルカがルーアが、皆が愛するアルカディアを守るためにも。その思いは使命感から来るものではない。

始竜だからでもなく、アルがアルだから。アルトウール＝レインセル＝シルバレイというこの世界に生きるただ一つの命として。

「ゲイル様、よろしいのですか？」

アルが部屋から出た後、躊躇いがちにゼファイが尋ねた。

ゲイルはルカの父親で、本来なら彼のそばについているべきだ。いくらゲイルが不器用だと言っても、それくらい気付いているだろう。

「いいんだよ。俺がそばにいるよりあいつがいた方がいい。分かってるさ、俺がいい父親じゃねえってことは」

案じるように自分を見つめてくる相棒。彼女が言いたいことは分かる。分かるが、ゲイルでは駄目なのだ。

苛立ちと諦めを紛らわすようにゲイルはがしがしと頭をかいた。妻をなくしてから、お世辞にも良い父親とは言えなかった。何せ仕事を言い訳に逃げていたのだから。ルカの容姿はシルフィア譲り、そっくりと言っている。ゲイルには耐えられなかったのだ。

それなのに今さら現れて父親面とはむしが良すぎるではないか。

「そんなことは……」

「ある。俺は怖かった、辛かったんだ。あいつを、ルカを見ているのが」

言いかけたゼフィの言葉を遮る。言い訳なんて出来ない。ゲイルは結局、怖かったのだ。息子を見ることが。

ルカは年々、シルフィアに似てくる。髪や瞳の色だけではない。顔立ちだって。成長するにつれて、妻の面影を宿す息子を見ていられなかった。

ルカを見る度に妻を思い出し、そんな自分に腹が立つ。その繰り返し。

ルカはルカだ。シルフィアではない。理解しているのに、感情がついていかなかった。ルカと向き合うことを恐れていたのだろう。

ゼフィもゲイルの思いを知るが故に、責めることはなかった。ゲイルは甘えていたのだ。彼女と息子、アルに。

「ゲイル様……」

そしてゼフィも彼の思いを知るが故に、それ以上、言葉を続ける事が出来なかった。妻を失った痛みは今も彼を苛んでいる。時が心の傷を癒してくれるとは限らない。むしろ時が経つにつれ、酷くなる場合もあるだろう。

ゲイルの心は今も血を流している。彼の痛みを癒すことが出来るのは『ゼフィ』ではない。その事実がゼフィの心を抉った。

リオンは部屋を出て、一人星空を眺めていた。世界と一つになったルーア。始まりの竜である彼は、その気配をほんの僅かだけ感じることが出来る。

だがそれは彼自身ではない。ただの残り香に過ぎないのだ。『ルーア』はこの世界のどこにもいない。彼は死んだ。死んで世界と一つになった。多くの竜たちと同じく。

「大丈夫、ミリイ？」

優しく掛けられた声にリオンは短く、ああ、とだけ答えた。リオンの隣に並んだのはアティである。何も聞かずとも、リオンの苦しみは理解出来た。

誰よりもヴァイスファイトと親しかつたのはリオンだし、ルーアを弟のように可愛がっていたことも知っている。普段弱さを見せないリオンだから、大丈夫と聞いたところで大丈夫だと答えることは分かっている。だから、

「あの子のためにも、ファイを止めよう。悲しみの連鎖を断ち切るため、悲劇を二度と起こさないためにも。ぼくたちがやらなきゃ。例え世界の監視者たる存在でも、ぼくはこの世界を守りたい」

アティはこの世界が、人が竜が好きだ。千年前の悲劇は繰り返してはならない。そうなれば世界は再び、破滅の危機に晒される。アティは、始竜たちは禁を破ってもヴァイスファイトを止める覚悟でいた。

監視者だろうと何だろうと、この世界に生きる命であることには
変わらない。世界を守りたいのだ。始竜の使命、ではなく、自分の
心に従っただけ。

ルーアのためにもヴァイスファイトを止める。悲しみの連鎖を断
ち切り、彼の魂に安らぎを。かつての同胞、ヴァイスファイトの魂
に。

「オレだってそうだ。メシアの代わりに最後まで見届けるのがオレ
の、オレたちの役目だ」

「……そうだね」

どんな結果になろうとも、見届けるのが自分達の役目。他でもな
いルーアの代わりに。

もしかしたら、これが最後の夜かもしれない。そんな思いがリオ
ンの中にあっただが、心は何故か澄んでいた。迷いなど一つもない。

自分の心に従うのみ。答えはもう決まっているのだから。

記憶の中の笑顔

ウイスタリアとイシュリアは屋根の上にあった。空を仰げば銀の星屑が煌めいている。星の光が地上に届くまで、途方も無い時間を要する。自分たちが見ている星の光はずっと昔のものだ。もしかすれば、ウイスタリアが生まれる以前の輝きを見ているのかもしれない。星たちが放つ生命の輝きに目を奪われる。

この世界はこんなにも美しく、同じくらい醜い。それを始竜であるウイスタリアは知っている。

リオンやアティのように人間を好いている訳ではないし、ルカやイクセ、ゲイルを除けばむしろ嫌いと言えるだろう。

「……シャーレン。お前なら何と言っ？」

星空を仰いだまま、問い掛ける。シャーレン。イシュリアと並ぶもう一柱の眷属。今はもう世界に返った竜だ。

眷属と言っても常に始竜たちのそばにいる訳ではない。イシュリアが例外なのだ。現にリオンとフィーだってそうだし、アティやゼファイもそうだ。アルに至っては眷属さえ生み出してはいない。

青紫の瞳を閉じ、遠い昔に思いを馳せるようにイシュリアは言った。

「シャーレンならきつとこう言ったはずです。『ウイスタリア様の御心のままに』と」

その声は確かにイシュリアである。なのに彼女の言葉に秘められた一言はシャーレンの声そのものに思えた。シャーレンの命は世界に溶けて一つになった。ルーアと同じように。

ルーアの埋葬を済ませ、帰って来たアルはウイスタリアにこう言

つたのだ。シャーレンが死んだ理由が分かった、と。シャーレンの最後の声は、ウイスタリアですら全てを聞き取ることは出来なかった。

『お前の眷属、シャーレンの死因はマナの過剰摂取だ。勿論、ヴァイスファイトの手によるものだが、あやつはシャーレンの精神に介入して、お前の居場所を知ったのだ』

竜族はマナを取り込み、それを糧とする。本来なら自分の器以上のマナを取り込むことはない。

だがヴァイスファイトは強引にシャーレンにマナを取り込ませて狂わせた。その上で精神に介入してウイスタリアの居場所を知ったのだ。ルーアが夢幻の真名を取り戻した方法と同じ。

何故なら始竜とその眷属は繋がっているのだから。だからシャーレンの魔水晶は黒く染まり、跡形もなく砕け散った。力に耐え切れず、崩れ落ちようとしていたルーアの魔水晶も同じように変色していたことを思い出す。

本来なら絶対に起こりえない事態。だからこそ、アルも気づけなかったのである。

「我は人間を好いている訳ではない。しかし竜も人もこの大地に、世界になくってはならないもの。どちらが欠けてもならない。イシュリア、我は憎しみではなく、希望をもってあやつと相対そうぞ」

目を閉じ、世界を感じる。創世の時と比べ、あまりに変わってしまった世界。ウイスタリアの記憶が教えてくれた。空を変え、世界を作り替えたのは紛れも無い人だと。

それが何だというのか。世界は時と共に変わりゆくだろう。人や動物が進化していくように。変化はある意味では必然。

共に変わりゆくものだからこそ、人と竜は手を取り合って生きることが出来る。この世界は確かに理想郷なのだと思っ心から思う。

シャーレンの死の原因を作ったヴァイスファイトは許せない。だからと言って、憎しみに囚われることはしない。シャーレンは望まないだろう。

もしウイスタリアの心に痛みを残すなら、自分の存在など忘れて下さい、そう言う竜なのだ。

「それでこそ、ウイスタリア様です。ルカ様や皆様もいます。私達の思いは負けません」

自分達は一人ではない。孤独ではない。この思いだけはヴァイスファイトにも負けるつもりはない。

負けません、と力強く言ったイシュリアに、ウイスタリアもああと頷いた。

(シャーレン、そしてルーアハ。見ていてくれ。我らは負けない。この思いがある限り)

ルカたちと出会う前はただ何となく毎日を過ごしていた。紫の冒

険者、《黒呀》と謳われようと、何かが足りなかったのだ。自分の存在に対する違和感。疎外感と言ってもいいだろう。

今、思い返せば自分が始竜として生まれるはずだったのならそれも頷ける。

初めはただの気まぐれだった。魔歌を操り、竜を連れた少年に興味があつたのだ。それがまさかこんなことになるうとは。

彼等との旅はイクセにとって驚きであり戸惑いの連続だった。

イクセはゲイルとゼフィの邪魔をする訳にも行かず、部屋の前の壁に持たれかかり、腕を組んでいた。組んでいる腕を解き、手のひらを見つめる。

ルーアを支えた時、この手は彼の血で真っ赤に染まった。自分は一体、どれほどの命を奪ってきただろう。

人を殺したことだつてある。今さら綺麗事を言つつもりはないが、ルーアの死はあまりに理不尽だった。

竜を殺すことを強要され、嫌だという声も黙殺された。千年の縛めより解放され、自由に生きていけるはずだったのに。少年の儂い命は散ってしまった。

「なあ、ルーア。お前は幸せだったか？」

尋ねてみても、答えが返って来ることはない。

人の手によつて生み出され、戦うことを宿命付けられた存在。それが彼。

イクセは彼を親友だと思っていた。見た目は自分より幼い少年だったが、ルーアは確かに千年の時を生きた竜だった。

ルカや自分を兄と慕った少年はもうどこにもいない。まだ半信半疑だった。今にもこの扉を開けて出てきそうなくらい。有り得ないと分かっているても実感が沸かない。

「幸せだったよ。あの人が愛したこの世界で生きることが出来て。だから悲しまないで。僕は『ここ』にいる」

聞こえるはずのないルーアの声が聞こえた気がした。

イクセはふつと笑い、腰の刀に触れた。この手と刀は確かに多くのものを傷付け、奪ってきた。だからこそ、今度は守ってみせる。幼き日、守れなかった大切なものを。ルーアが愛した世界を、そしてルカを。

ヴァイスファイトがこの世界や始竜を憎むというのなら全力で彼を止めよう。それがルーアのために出来ることであり、始竜として生まれるはずだったイクセのけじめ。

「そうか……。それに、悲しむのは全てが終わってからだったな」

ルーアを失ったことは未だ信じられない。ぽっかりと心に穴が開いたようだ。

しかし悲しくても、苦しくても立ち止まってはられない。痛みを堪えて前に進まなければ。

アルにも言われたはずだ。悲しむのは全てが終わってからだと。でなければルーアに怒られる。自分の死を言い訳にするなど。

イクセは記憶の中にある笑顔を思い浮かべ、淡く微笑んだ。

何故こんなにも苛つくのだろうか。自分はただ偽物を壊しただけなのに。竜ですらない人造竜兵を。

殺したいほど憎んでいた。作られた存在でありながら、日の下で明るく笑っていた少年。

分かっているのだ。これは醜い嫉妬だと。自分と同じく兵器として生み出されたモノだというのに、彼は幸せそうに笑っていた。だから許せなかったのだろうか。自分には決して手に入らないものだから。

竜の魔水晶を移植された『同胞』たちは例外なく狂い死んだ。強大な竜の力に耐え切れなかったのである。寄りもなく、どこで生まれたかも分からない。貧民街で燻る毎日。だから、実験体としてうつつけだったのだろうか。

青年もヴァイスファイトの魂を受け入れていなければ、同胞たちと同じように発狂死していたに違いない。

エスメラス王城、とある一室。豪華絢爛と言って差し支えのない部屋は『ヴァイスファイト』のために用意された貴賓室である。この部屋にあるありとあらゆる調度品は全て高級品。値段は庶民が聞けばひっくり返るもので、何一つ安いものはない。

室内を照らす王冠型のシャンデリアに使われているのは紛れも無い黄金。カットされたガラスがよりシャンデリアの放つ光を美しく見せていた。

黄金の獅子が刺繍された真紅の絨毯でさえ、目が飛び出るほどの値段だろう。見るからに座り心地の良さそうな深緑のソファも、壁に掛けられた時計さえも。

部屋の内装にも黄金がふんだんに使われていることから、エスメラス王国の豊かさが分かる。流石は貴賓室ということか。

「……何を考えている？」

窓に手をつき、『中』にいる彼に問い掛ける。磨き上げられた硝子窓には物憂げな青年が映っていた。夜を思わせる黒い髪、紫水晶の輝きを秘める瞳。抜けるように白い肌。どれも青年本来の色ではない。

彼の魂を受け入れたことで肉体は変質し、顔や髪、瞳の色でさえ『彼』と同じになった。自分という存在はどこにも残っていない。

『何、とは？』

「傍観していた理由だ」

もしこれを第三者が見ていたら、さぞ奇妙な光景だろう。とぼけたように尋ねるヴァイスファイトに青年は少し苛立っていた。言うまでもない。それともわざとなのか。

夢幻の真名を奪われた時ですら、ヴァイスファイトは動揺すらしていなかったのだ。まるで最初から分かっていたとでも言う風。数秒の沈黙が流れる。そして、

『それが人造竜兵の少年の願いだったからだ』

「願い、だと？」

嘲るような笑みを浮かべ、ああ言っていたのに？

『よく言うよ。過去の妄執に囚われているだけの哀れな人形が。時代に沿わない遺物は消えるべきだ。君も……僕もね』

何があの人造竜兵の願いだというのだろう。苛立ち紛れに返せば、ヴァイスファイトはそれ以上、喋ろうとはしなかった。

望み通り人造竜兵の命を奪ったというのに、ささくれ立った心は休まらない。言い知れぬ感情。全てが自分の心を乱す。青年は苛立ちを紛らわすように乱暴に壁を殴りつけた。

出来ること

自分はルーアに何をしてあげられただろう。

人の手によって作り出された人造の竜。それがルーア。ルカが彼の声を聞かなければ、彼は水晶の揺りかごの中で眠り続けていただろう。命が終わるその時まで。

けれど、ルカはルーアを見つけた。あの声を聞いた時、どうしても放っておけなかったのだ。

ルーアを作った人はこの世界と彼を愛していたのだろう。ルーアを見ていて分かった。

ルカは初め、自分の選択が正しかったのか、分からなかった。彼は確かに生きることを望み、己の翼で羽ばたいた。人造竜兵^{へいき}ではなく、アルカディアに生きる一つの命として。

ただルーアに美しい世界を見せたかっただけ。血と赤に塗られたものではなく、緑の匂い溢れ、花卉が舞う生命溢れる世界だと。

グラディウスで言ったことは本当だ。この世界は決して美しいだけではない。醜いものも汚いものも存在する。それでも、その中で美しいものを見て欲しかった。ルーアを作った人が愛した世界は、こんなにも美しいのだと知って欲しかったのだ。

ルーアは最後まで何かを憎むことはなかった。己を生み出した人も、戦い続けた竜も、世界も。

果たして彼は幸せだったのだろうか。自分は彼のために何が出来ただろう。断ちきれぬ罪の記憶。

「ありが……とう。みんながいたから、ルカ兄がいたから、僕はもう一度……この世界で生きることが出来たんだ。あの人が愛した世界で。嬉しかったよ……。見届けられないことが……悔しいけど。」

僕が死んでも、このマナは世界と一つになる。……だから淋しくない。いつも見守っているから』

嬉しかったよ、とルーアは言った。ルーアと過ごせた時間は僅かでも確かにルーアは『ここ』にいた。作られた存在だとしても。世界と一つになった彼は今もルカ達を見守ってくれているのだろうか。

だから、せめて祈ろう。彼の魂が安らかに眠れるよう。

目が覚めたルカは泣いている事に気づく。

ふと手に触れる細長いもの。それは青と白のストライプのリボン。夢の中でもルカはルーアの服を抱きしめていた。

目覚めればルーアが微笑みかけてくれるような気がしてならない。もう彼はこの世界のどこにもいないのに。ただ、生き急ぐように駆け抜けた少年の名を呼ぶ。

「ルー……ア」

「起きたか、ルカ」

優しい声に涙でぼやけた目で声のした方を追うと、銀色の青年と目があった。

月のように美しい瞳は僅かな憂いを湛えてルカを見下ろしている。青年のしなやかな手がルカの頭を撫でてくれた。暖かくて、安心する。

「……アル。うん。分かってるよ。ちゃんとしなきゃって。ルーアのためにも。前に進まなきゃいけないって分かってるんだ。でも、認めることが怖い。……認めてしまえば、ルーアの死は過去のこと

になつてしまつような気がして」

ベッドから体を起こしたルカはくやしげにシーツを掴む。流れ出た涙がぼたり、と白い生地に染みを作った。

ルーアはもうこの世にはいない。それはどうしようもない事実で、覆しようのないこと。

けれど、ルーアの死を認めることが怖かった。認めてしまえばそれは過去のものになる。流れ落ちる涙を拭いながら、ルカはぼつぼつと自らの考えを語った。

「分かつている。ゆっくりで良い、認めて前に進め。ルカ、今なら我慢することはない、悲しんでいい。失ってしまった存在^{もの}を惜しむのは残された者の当然の権利だ」

アルはルカの体を抱き寄せ、記憶の中に残る母のように柔らかかな声音で言った。ルカは強い。

だがそれと同じくらい弱いのだ。今すぐに認めて前に進まなくてもいい。少しずつ、一歩ずつでいいから進んでいければ。

今は悲しんでいいのだ。きっと明日になればこの少年は、太陽を思わせる笑みをアルたちに向けてくれるだろう。

「アル……アル……。どこにも行かないで。側にいて」

ルカは俯き、アルのローブを掴む。

ヴァイスファイトや夢幻の君のことを考えなければならぬことは分かっている。

今は、今だけはそれを忘れて泣きたかった。そうすればこの悲しみが消化出来るような気がして。

「私はどこにも行かない。誓つただろう？ この命尽き、魂さえ燃

え果てようともお前のそばにいます。だから今は我慢するな。好き
なだけ泣けばいい」

ルカの背中をさすり、言い聞かせるように誓いの言葉を唇に乗せ
る。

この誓いは何があっても変わることはない。一度は切れてしまっ
た絆だけれども、もう二度と離しはしない。例えこの命が尽き、魂
さえ塵になろうともルカの側にいると誓ったのだ。

空よりも青く、海よりも深い美しい魂に寄り添いたい。そう願っ
たから。

好きなだけ泣けばいい、その言葉にルカは声を上げて泣いた。声
が枯れ果てるほど強く、悲しみを洗い流すように。

「大丈夫か？」

「うん、もう大丈夫だよ。ありがと、アル。心配かけてごめんね」

もう泣いていられない。悲しむ時間はアルがくれた。後はあの子に真名を返してあげて、ヴァイスファイトを止める。それが今のルカに出来ること。

金色の瞳に僅かな心配を覗かせてアルは問う。大丈夫だと答えてルカは身支度を済まし、最後にルーアのリボンを二の腕に結んだ。これでルーアと一緒にいられる。そう思えば不思議と勇気が湧いて来た。

「礼は不要だといつも言っているだろう？」

「でも俺が言いたいから」

律儀にも礼を言うルカを見たアルは、またかと微笑した。そんな彼を見返してルカは輝くような笑顔を見せる。そこにはもう憂いの色は見当たらない。

ルーアのためにも悲しみに沈んではいられない、泣いてはいられない。すべきことがあるのだから。

「ルカ、お前は私が守る。何に代えても、とは言わない。生きて帰ろう」

「うん。でも俺だってアルやみんなを守りたいんだ。……行こう、みんなが待ってる」

アルがルカを守りたいと思うように、ルカもアルや皆を守りたい。顔を見合わせて二人は笑った。考えていることは同じなのだ。

ルカは皆が待つ部屋への扉を開ける。すると、心配げにこちらを見ている皆の姿が飛び込んで来た。

「ルカ！」

「みんな……ごめん、心配かけて」

ルカが謝ると、ゼフィはぎゅっと抱きしめてくれ、アティとリオンは何も言わず、優しい表情でよしよしと頭を撫でてくれる。イクセは肩を叩いてくれた。ウイスタリアとイシュリアはそんな微笑ましい光景を見守っている。

少し離れた場所からルカを見守っていたアルは、意地の悪い笑みを浮かべて隣の男に視線を向けた。

「お前は行かなくていいのか、ゲイル？」

「いいんだよ。別に卑屈になってる訳じゃねえ。父親らしいことから、これからいくらでも出来る」

アルの声にゲイルは目を細めて首を横に振る。いつそ開き直ったような清々しい表情で、彼は笑った。父親らしいことなら、これくらいいくらでも出来る、と。

その顔は確かに子を案じ、慈しむ親の顔だった。随分進歩したらしい。

彼が言うように、そこに卑屈な響きはなく、アルは肩を竦めて素直ではない父親に言う。

「やれやれ。やっとましな顔になったようだな」

「うるせえ」

呆れたように微笑するアルの横から照れ隠しなのか、余計な一言が返って来る。それも実にゲイルらしい。

今まで随分ルカに寂しい思いをさせたのだから、これからは今ま

で以上に『父親』として接して貰わねばならないだろう。

「みんな……行こう。二度とあの悲劇を繰り返しちゃいけない。ヴァイスファイトを止めよう」

腕に結んだりボンに触れ、ルカは仲間たちを見回した。発した声は思ったより落ち着いている。ルーアが側にいてくれるような気がした。皆、無言で頷き、こちらを見返す。

今ならなんだって出来る気がする。ヴァイスファイトを止め、夢幻に真名を返す。

（だから見てて、ルーア。俺たちは負けない。ルーアが、あの人が愛した世界を守ってみせるから）

第九奏 了

出来ること(後書き)

長々と書いて来ましたが、次章で完結となります！

禁忌を犯しても

笑いが止まらなかった。何故、人は、竜はこれほどまでに違うの
だろう。だからこそ、彼らは争うのだろうか。回りだした歯車は止
まらない。

もうすぐだ。もうすぐ全てが終わる。そうすればやっと、この苦
痛から解放されるのだ。

この体は既に限界。例え魔水晶の力を得た人間であっても、始竜
の魂には耐えられない。

体が軋む音がした。この魂はとうに狂っている。だから今から自
分がしようとしていることは、間違っているのだろう。正しいとは
とても言えない。

しかしこの方法しかないのだ。誰に理解して貰おうとも思わない。
全て覚悟の上でこの道を選んだのだから。

「何がおかしいのだ？」

「いいえ、何でもありません。陛下。ただ少し、楽しみなことがあ
りまして」

紫紺の戦装束に身を包んだエスメラス王を見て、ヴァイスファイ
トは笑う。この男も人間も竜たちでさえ、彼にとっては駒でしか
ない。どんな罪悪感に苛まれようとも賽は投げられた。引き返すこと
は不可能。

薄い笑みを浮かべるヴァイスファイトを見て、王は何を思ったの
か。黒衣の青年を見下ろし、鼻を鳴らす。

「まあいい。ヴァイス、貴様の働き、期待しておるぞ」

「恐れいります。必ずや陛下のご期待に応えてみせましょう」

ヴァイスファイトが優雅に一礼して見せた後、誰かがローブの裾を引っ張った。白い髪に夜色の瞳の子供　ミラである。愛らしいその顔には何の表情も浮かんでいない。人形のような。

ミラの視線の先には一糸乱れぬ動きを見せるエスメラス王の軍勢。皆、鎧に身を包み、武器を携えている。ただならぬ雰囲気だということは一見ただけで分かるだろう。

ヴァイスファイトは何も言わず、ただミラの頭を撫でた。

「おい、どうした？　お前が焦るなんて珍しいな」

「そりゃ……焦るって……。エスメラス……王が大軍を率いて竜の……峰に向かった。怪しげな黒衣の奴も一緒にな」

宿を出たルカたちの元に飛び込んで来たのは衝撃的な知らせだった。通りの向こうから駆けて来るのは、亜麻色の髪に橙色の瞳を持った少年　リードだ。普段は余裕のある彼が珍しく焦っている。

随分急いで走って来たのだろう。頭に被った帽子はずれているし、肩で息をしている。驚くイクセに、リードは息も絶え絶えに、だがまくし立てるように言った。

エスメラス王が大軍を率いて、竜の峰に向かった、と。怪しげな黒衣の奴、はヴァイスファイトとしか考えられない。

竜の峰は王都より一番近い竜たちの住処である。竜は切り立った断崖や険しい山脈に住む。竜の峰も天然の要塞と言っても過言ではないだろう。

『やはり動いたか。しかし予想よりも早い。それに我等に気配を気付けせないとは……夢幻か』

「急がないと。戦いが始まったら……」

ルカの肩に乗ったアルが唸るように言う。エスメラス王の兵と竜たちがぶつかれば被害は免れない。そして何より、人と竜の戦いの引き金となってしまう。そうなれば千年前の再現。再び、理想郷の地は血に塗れることになるだろう。それだけは絶対にさせてはならない。

自分たちは果たして、止められるのだろうか。エスメラス王を。いくらアルたちがいると言っても、彼らは始竜。世界に過度な干渉は出来ない。

顔を伏せたルカに、アティがいつになく真剣な声で言った。

「いざという時は力づくで止めるしかないね」

「え？　出来るの？」

『それが私たちが話し合っ出て出した結論だ。もうこれ以上、あれに好き勝手をさせる訳には行かない』

驚くルカにアルが頷く。

これは始まりの竜全員で決めたこと。例え世界に干渉してもヴァイスファイトを止めると。元を辿れば自分達の失態だ。

ならば、どんな手を使っても彼を止めなければ。禁忌を犯すことになるうとも。ヴァイスファイトの目的が何であれ、この際関係ない。アルたち始竜はこの世界を見守る者にして支柱。

それが何だというのだ。世界を守るためなら、いや、取り繕うのはよそう。大切なものが生きるこの世界を守ってみせる。それが始竜たちの想いだった。

「アル……」

「でもいいのか？ 始竜たちは世界に干渉出来ないんだろ？」

「ま、そうだけどね。でもオレたちだって指くわえる訳にいかないっしょ。こんな時に」

いいのか、と尋ねるイクセにリオンが相変わらずの軽い声で返す。その口調は軽いものの、表情は真剣そのものだ。例えかつての友であるうと、否、友であるからこそ、この手で討つ。今のリオンには迷いなどなかった。

迷いは判断を鈍らせる。大切なものを守るために、もう一度彼と相対そう。

「行きましょう、皆様。全てを終わらせ、始めるために」

一歩前に出たゼフィが胸の前で手を組んだ。まるで祈りを捧げるように。

そう、これが終わりではない。始まりなのだ。退路はない。ならば愚直なまでに進むまで。

『飛ぶぞ』

「ありがとう、リード」

肩に乗ったアルの言葉に、ルカがリードの方を振り向き笑顔で礼を言う。その後ろからイクセが小さく手を振った。

瞬間彼らの姿がその場から掻き消える。術でも使ったのか、気付いていたのはリードただ一人。そこにはもう、数秒前まで彼等がいたという痕跡すら残っていないかった。

「どいつもこいつもリードの理解の範疇を超える奴らばかりだ。一般人にして常人である自分には理解出来ない。」

ただ、彼らといると、退屈だけはしないようである。

「一つ気になることと言えば、飴色の髪の少年　ルーアが見当たらなかった。考えすぎだろうか。」

「あーあ……。情報料貰い忘れちゃった。ま、いいか。俺が勝手にやったことだし」

ルカたちが消えてから気づく。彼らから、情報の代金を貰うのを忘れていたのだ。小夜啼鳥なら滅多にしない失態だが、それでも構わなかった。これは自分が勝手にしたこと。頼まれていた訳ではない。お得意様なのだから、サービスとでも考えよう。

両腕を頭の後ろに添え、リードは空を仰いだ。彼らが何をしようとしているのか、自分は知らない。

けれど、何かをしようとしているのは確かだ。それはきつととも仰々しいこと。

だからせめて、彼らの無事を祈ろう。自分には祈る神などないけれど、居もしない神に祈るのも悪くない。

無造作にポケットから取り出した一枚のコインを指で弾く。コイン、と鋭い音を立てて金色のコインが宙を舞う。それを横から右手で掴み取り、リードは笑った。

「……死ぬなよ。ルカ君、黒呀」

アルが飛んだ先は、青々とした草の海　大平原が見渡せる高台だった。正面には静謐ささえ感じさせる竜の峰が鎮座していた。見下ろした先には、エスメラスの王に従う大軍と立ち塞がる百頭はいらるであろう竜たち。数だけで言えば圧倒的に人が勝っているだろう。しかし人と竜では力が違いすぎるの。例え何人いようと、竜に傷を付けることすら難しい。魔奏士であろうと生半可な者では歯が立たない。

「間に合ったか……？」

硬直状態に陥っている人と竜を見下ろしてイクセが呟く。張り詰めたような空気が漂っている。

その直後、マナに敏感な始竜たちとル力は気付いた。収束する大量のマナに。即座に人の姿を取ったアルが素早く指示を飛ばす。

「紅蓮、蒼穹、風天、人に防御結界と拘束を。豊饒は私と共に竜を」

竜の喪歌を受ければ人間など一たまりもない。それにこの中にヴアイスファイトの力は感じなかった。彼が何をするつもりか知らないが、黙って見ていられるはずがない。

高台から消えたル力たちは大軍の真つ只中に出現する。

ル力たちの登場と同時に、響く竜たちの咆哮。空中に描き出された無数の魔法陣。そこから放たれた荒れ狂う炎、雷、風。竜の喪歌は人の防御魔歌など容赦なく突き破るだろう。

人と竜の大軍に挟まれる形になったル力たちは、リオン一人が竜たちの喪歌を防ぐために障壁を張り、ゼフィとウイスタリアが兵士たちを拘束する。

赤光の障壁に走った衝撃と爆音。その程度ではリオンの障壁は揺るがない。

一方、竜たちは金色の光の鎖によって動きを制限されていた。アルとアティの力である。その中でル力は異変を感じ取っていた。

「ねえ、何だかおかしくない？ まるで俺たちの姿が見えていないみたい……」

様子がおかしい。ル力は身動きの取れなくなった二つの種族を見比べる。

まるで、人も竜も自分たちの姿など目に入っていないかのような。竜たちの声には戸惑いが、人の声には動揺と恐怖が混ざっていた。

「まさか……幻術か」

「これほどの人数を？ 解く方法は何かないのか？」

真っ先に気付いたのはやはりアルである。彼らにはきっと彼らの敵しか見えていない。だからこれほどまでに戸惑い、恐怖している。恐らく、自分達が来ても簡単に戦いを止められないようにヴァイスファイトが先手を打ったのだろう。

アルの言葉を聞いたゲイルは訝しげに眉を潜めた。彼は仕事柄、魔歌にも通じている。いくらミラ、という子供が始竜の力を持っているとは言え、半分も発揮していない程度でこれかと。

「術者を見つけれしかないね。無理に解けば精神崩壊を起こしかねない」

「術者は勿論、夢幻だな」

拘束の手を緩めぬまま、アティが言った。ウイスタリアも彼の意見に同意する。

夢幻の君が彼らに掛けた幻術は非常に高度なもの。術者以外が力づくで解こうとすれば、幻術を受けている人間、竜共に精神崩壊を起こしてしまう。厄介だが、術者である夢幻を見つければ。

漣桜花

罪悪感なんて湧かなかつた。ミラは命じられたことをやっただけ。この平原にいる人と竜の意識は、全てミラの手内にある。

与えられた役目は人と竜を殺し合わせるといふもの。少し手を加えるだけで、彼らは血で血を洗う戦を始めるだろう。自分が何故、これほどの力を持っているのか、ミラには分からない。

しかしそれを当たり前だと思おう自分がいた。何も思い出せないというのに。

誰かが自分の名を呼んでいる。ヴァイスファイトではない。優しい、あたたかな声。この声を知っている。

ミラの視界に入ったのは、銀色の竜に乗った一人の少年だった。いつか夢に見た時と同じ少年。透き通る青い髪に夕焼けを切り取ったような茜色の瞳。

もう彼ら以外、目に入らない。ミラは無意識に彼に向かって手を伸ばした。

すると竜が銀色の青年へと姿を変え、少年を抱えて降りて来る。少年も同じようにミラに向かって手を伸ばした。二人の手が触れる瞬間、走った電流。ミラは“全て”を思い出した。脳裏を駆け巡る様々な記憶。始まりの時から、“最後”の記憶まで。弾かれたように少年を見上げる。

「あ、あなたは……」

「俺はルカ・エアハート。こっちはアル。思い出した？ 君は夢幻の君、ネイロス。ミラージュ。テスカトリポカ。始竜の石柱だよ」

彼 ルカ・エアハートと名乗った少年はにこりと笑った。夢の中で見た太陽のような笑顔。

そう、ミラはミラではない。全てを思い出した自分は、夢幻を司る始竜 ネイロスⅡミラージュⅡテスカトリポカ。ミラが認識した直後、人と竜にかけられていた幻術が霧散する。

「……全ては夢幻の如く、か。貴公らには迷惑を掛けた、白銀の君、改めて名乗ろう。同胞からの寵愛を受ける者よ。自分は夢幻の君、ネイロスⅡミラージュⅡテスカトリポカ」

ミラは子供の愛らしい顔立ちながら、今までとは纏う雰囲気が全く違う。口調も幼いものから、妙に固くなっている。幼い姿と大人顔負けの態度は実にアンバランスだ。

記憶を取り戻したことで、封じられていた力も解放された。生まれたばかりとは言え、始竜は先代からの記憶を受け継ぐ。よって今のミラは幼いながらも成熟した竜と変わらない。

「過ぎたことは良い。しかし、このままでは争いは避けられまい。幻術を掛け直してくれ」

「承知した」

幻術が解ければ、兵は王の命令通り、竜と戦うだろう。竜たちも己の身を守るために戦うしかない。そうなればヴァイスファイトの思う壺である。阻止するには今一度幻術を掛け、彼らの動きを止めるしかないだろう。

アルの言葉にミラは頷き、掲げた小さな手を横に振った。眼前に浮かぶ純白の魔法陣。

しかし、ぱちん、と小さな音が響いた瞬間、それを上回る、糸が切れたような大きな音が響いた。

「何!？」

ルカは思わず空を仰ぐ。澄み渡る蒼穹が漆黒に染まっていた。

いや、空ではない。薄暗い闇が半円場のドームとなって、自分たちの視界を覆っているのだ。いつかヴァイスファイトが歌った喪歌、夜天牢に似ている。まるで薄いフィルターが掛けられているよう。

ルカにも分かる、感じられる。これは間違いなくヴァイスファイトの力だ。

力の気配に振り向けば、地面に浮かぶ強大な闇色の魔法陣。宙に浮いた無数の魔水晶が鈍い光を放っていた。異変はそれだけではない。

「アル!? ミラ!? どうしたの!？」

二人の様子がおかしい。胸を掴み、苦しげに呻いている。ルカは何ともないのに、見えない何かがある。アルとミラを苦しめていた。

様子がおかしいのは二人だけではない。リオンやアティ、ウイスタリアとゼフィの声まで聞こえる。始竜ではない竜たちもだ。皆、苦悶の声を漏らしているではないか。ミラもどうにか幻術を維持しているようだが、それも時間の問題。竜たちを苦しめている力の正体は何だ。

魔法陣と魔水晶が関係しているのはまず間違いないだろうが、それだけでは何も分からなかった。

「竜……封じの結界、か……」

「竜封じの結界?」

アルの顔は蒼白と言っても過言ではなく、息も絶え絶えといった

有様である。

ル力は直ぐ様アルに駆け寄るが、何とかしたくても、どうすればいいか分からない。

竜たちの声が頭に響いて何も考えられなかった。集中し、どうにか“彼ら”の声を遮断してアルに尋ねる。これが何か分からなければ、対処のしようがないからだ。

「ああ……。滅竜歌と同じく、千年前に葬られた呪法。あまりにリスクが高すぎたために……。使われることのなかった結界だ。まさか私たちの自由すら……。奪うとはな。魔水晶で結界の力を大幅に増幅しているのだらう」

千年前、人竜大戦時。人は強大な竜に対抗するため、様々な手段を講じた。人造竜兵や竜封じの結界もその一つである。

竜封じの結界はあくまで“封じ”の結界。竜を拘束することは出来ても、傷付けることは出来ない。そのため、人竜大戦でも殆ど使われることがなかった。

しかも封じるだけの結界でも、竜は人間より遙かに強い力を持つ存在だ。

人間が発動させようとすれば、術者は一人では到底足りない上に、下手をすれば竜に力負けしてしまう。

本来なら竜どころかアルたちを戒めるほどの力もないが、囲むようにして浮かぶ数百もの魔水晶、その力によってヴァイスファイトは己の力を増幅したのである。

「破らなきゃ。でもどうやって?」

ヴァイスファイトの術を正面から破れるのはアルたち始竜だけ。人の力ではとても無理だ。いくら人の肉体に宿っているとしても、

その体もまた魔水晶を移植されている。結界を破るには、それ以上の力をもつてしなければならぬ。

人の身で正面から竜の術を破る術は無いに等しいし、だからと言って他に方法はないのだ。アルやミラの力に頼るのが一番なのだろうが、今の彼らに結界を打ち破るほどの力は出せないだろう。

「ルカ、私と共に歌って……くれ。今の私は十分な……力を発揮出来ない。だがお前となら……」

「うん。アルと一緒に何だって出来る」

一度は切れ、千々になった絆だけど、確かな証は今ここにある。

アルは美しい顔を苦痛に歪めながらも、鉛のように重い身体を引きずって、ルカの隣に並んだ。迷いなど一切ない。頷き合い、手を取り合った二人は想いを歌に乗せる。

アルと一緒に何だって出来る。幼き日のルカは何の疑いもなくそう信じていた。

それは今も変わらない。少し過保護で時には家族、親友である相棒。人だから、竜だから関係ない。ただのルカとアルであった頃から、彼はルカにとって大切な存在だった。

『舞い落ちる花卉、其の色彩は泡沫の証。儂き人の性を表すもの。其は定めに散り逝く美しき紅。刹那の生は今此処に永久の誓いとならん。遙かな詩は世界に響き、世界は歌に満たされる。限り在るの命と知るならば、今導きの声に応えよ 漣桜花』

『舞い踊る花卉、其の色彩は存在の証。猛き竜の性を示すもの。其は悠然と咲き誇る雄々しき紅。久遠の色は今此処に刹那の誓いとならん。遙かな咆哮は世界に響き、世界は声に満たされる。色褪ることなき生と知るならば、今我が導きに応えよ 漣桜花』

澄んだ鈴の音のようなルカの声と、堂々とした、それでいて耳を傾けずにはいられないアルの声が重なる。人と竜を表した詩を人^{ルカ}と竜^{アル}が奏でる。

それはきつと、魔歌でも喪歌でもない。これは本来なら魔奏士同士が別々の歌を歌い、一つの強力な魔歌を紡ぐために作られた技法^{デュエット}。二重唱と呼ばれるものだ。

強い力を持つ竜族とは違い、力で劣る人族が生み出したもので、強力な竜の喪歌と共に唱えた魔奏士がルカを除いて何人いるか。

それとも、この二重唱を生み出した人物は、竜^{ドラクナー}と心を通わせる者だったのだろうか。

どこからか聞こえた鈴の音。それは正に妙なる調べ。重なりあう声と鈴の音は聞く者を魅了する。場を満たすのは清浄なる空気。

漣桜花。結びの言葉を口にした直後、無数の薄紅色の花弁が光と共にひらひらと舞い落ちた。薄紅色の結界がルカたちを覆うように広がっていた結界とぶつかり合い、甲高い音を立てて砕け散る。

青く澄んだ空が覗いたと思うと、アルたちを戒めていた不可視の力が消えた。

掴み取る未来

漣桜花が発動したことで、ルカたちを覆っていた竜封じの結果は砕け散った。とは言え、その程度で諦めてくれるほど、ヴァイスフアイトも甘くはない。

アルたちを囲んでいた何百もの魔水晶が集まり始めたのである。

例えるならそれは巨大な、魔水晶で作り上げられた竜だった。爛々と輝く水晶の瞳に鋭く伸びた牙。精緻な硝子細工を思わせる両翼も硬質な輝きを放っており、不気味なことこの上ない。その瞳に生命を感じさせる光はなく、まるで人形のような。

数は百体以上はいるだろう。逃がさないとばかりに竜たちを、人を、そしてルカたちを囲んでいた。

「一体何だったの。悪趣味なことこの上ないな」

「かわいそうな子たち。水晶となってもまだ死ねないなんて」

水晶の竜を見たりオンは舌打ちし、アティは悲しげに目を伏せた。彼らはヴァイスフアイトが殺した竜たちが残した魔水晶より作られている。術者の命令通りに動く傀儡だ。

ゼファイがゲイルを庇うように前に出ると、イクセは無言で腰の刀に手を掛ける。

イシュリアは本来の、水晶の翼を持った狼の姿となっており、ウイスタリアの隣に並んだ。

「近くに……いる。どこだ？」

「高見の見物か、暁闇よ。随分と小細工をしてくれたようだ」

夜色の目を細め、周囲を見回すミラにアルは嘲るように笑った。当然、その彼からの答えはない。竜の大群を目にしてもアルは静かだった。

或いはそれが合図だったのか、水晶の竜たちが咆哮を上げ、ルカたちに襲い掛かる。

その瞬間、仲間たちは思念で言葉を交わした。

『ミリイ、ルウ、ルカ。ここはぼくたちに任せて彼のもとへ』

『私なら心配無用です。そうですね、ゲイル様？』

『ああ、行ってこい。俺たちはここで一暴れさせてもらっぜ』

アテイが微笑む気配がした。ここで時間は掛けられない。それにヴァイスファイト自身が望んでいるだろう。ルカたちとの相對することを。

ゼフィもいつも以上に明るい声を出し、ゲイルは照れたように笑みを漏らす。

『水晶の竜が相手つてのも、悪くないな。アル、ルカを頼む。俺よ
り、リオンが行った方がいいだろ。……頼む、終わらせてやってく
れ』

『……ありがとう、イクセ。必ず止めるから』

イクセは躊躇いなくリオンに声を掛ける。ヴァイスファイトが望んでいるのは恐らくリオン。違う存在とは言え、今はほんの僅かに彼の心を感じることが出来た。

それでもヴァイスファイトの考えまでは分からない。全ては闇に閉ざされている。それとも、終わらせてくれる存在を待ちわびてい

たのだろうか。

泣きそうな声で礼を言うリオンに、数秒の沈黙の後、イクセは言った。親友なんだから、と。

『イシュリア、夢幻と共に人と竜を守れ』

『仰せのままに。……どうかご武運を』

『お膳立てなら喜んで引き受けようぞ』

ウイスタリアの声にイシュリアは頭を垂れると、ミラも愛らしい顔を綻ばせて首肯する。皆の声を聞いたルカは胸が熱くなる思いだった。

仲間たちはここは自分たちに任せ、ヴァイスファイトの元へ行けと言ってくれているのだ。短い言葉の中に込められた想いが伝わってくる。

『みんな……』

『すまない。……後は頼んだぞ』

『フィー、俺の代わりにみんなをサポートしてやってくれ』

躊躇いなく自分たちを送り出してくれる仲間たちにルカはそれ以上、言葉を紡ぐことが出来なかった。

アルは同胞たちの思いを噛み締めるように俯き、リオンは己の眷属を喚び出す。現れた火の鳥は主の命に頷き、その手から羽ばたいて行った。

『みんな、ありがとう……。あの人と決着を付けてくるよ』

万感の思いをもって、ルカは礼を言った。悲しみの連載を断ち切り、彼の魂を解放するため。

誰かに導いてもらう未来なんていらぬ。未来は自らの手で選び取るもの。例えそれが滅びの道であっても、ヴァイスファイト一人が決めることではないのだ。

それに、誓ったから。ルーアのためにも、この美しくて、同じくらい汚い愛しい世界の結末を見届けると。

もうすぐ“全て”が終わる。何と滑稽なのだろうか。何もかもが自分の手の上で踊っているのだ。いつから狂ってしまったのだろう。千年前から？ それともこの世界に生まれ落ちた時より？

或いは、いつそ己も分からぬほど狂った方が幸せだったのかもしれない。

だが魂の内にはまだ、己の意識がある。ヴァイスファイト「グラフ」ノスフェラートという存在が。

明けぬ夜などない。そう言ったのは誰だったか。

しかしヴァイスファイトの夜は“明けぬ”し、望むものは手に入らぬ。自分はただ願っただけなのに。それなのに止められなかった。

始竜という鎖から解き放たれたはずが、今のヴァイスファイトは羽ばたくことを禁じられた小鳥同然だ。

“世界”を感じられない。声が聞こえない。なら、全て壊してしまえばいい、ともう一人の自分が笑う。

「……来たか」

例え視えなくても、感じることは出来る。待ち侘びた存在。決着をつけるためにここまで呼び寄せた。かつて“暁闇”の領域であった場所へ。

ヴァイスファイトは待っていた。暁闇を示す薄紫色の魔水晶は無残に砕け、ひび割れて渴いた大地を踊っている。生命の輝きは皆無。生きているものなど何もない。

ある意味では、楔である始竜を失った世界の末路を現している光景とは言えないだろうか。

同じ始竜でもリオンやウイスタリアの領域とは違う。ここには力強く輝く赤や、真っ直ぐに澄んだ美しい青など生命が放つ輝きがないのだ。

現れた人影は三つ。二人はヴァイスファイトの予想通り。なのに、最後の一人だけが違った。

海の青でも空の青でもない髪をした少年と、彼に寄り添うように立つ銀髪の青年。そして最後は炎よりも鮮やかな赤い髪と、蠱惑的なパーガンデイの瞳を持った青年。ルカとアルは分かっていた。

しかし、リオンの登場だけは未だに信じられない。最後の一人はイクセだと思っていたのに。

「全部終わらせよう。お前の罪も、受けるべき罰もオレが背負う。最初からこうするべきだった」

千年より昔、もつとも己に近かった赤毛の青年は、彼には似合わない憂いを湛えた表情で言った。記憶を思いおこさせるような明るい声でも、騒がしい声でもない。

かつて、彼がこれほどまでに悲しみを露にしたことがあっただろうか。

思えば、どこで狂ってしまったのだろう。誰よりもこの世界に生きる命を慈しみ、その命のために涙を流す存在だった彼が。『暁闇の君』、闇の名を与えられながらも彼は眩しかった。リオンなどよりずっと優しく、いや、だからこそ、始竜に向いていなかったのだ。

始竜は世界の支柱であると同時に傍観者でもある。世界に干渉することは許されない。彼はその禁を破ってまで、命を助けたいと願った。

あの時、最も近い存在であった自分が彼を思いとどまらせていれば、こんな事にはならなかったのだろうか。

リオンが彼を殺したも同然だ。ヴァーミリオンⅡフレリアⅡフィニクスが。

分かっていたつもりだった、理解していたつもりだった。それなのに、ヴァイスファイトをこの手にかけてという事実はリオンの心を深く傷つけた。

だから彼は長い間、眠りについていたので。時が流れ、ルカと出会い、全ては過去のものとなったはずだった。

なのに、彼は再び自分たちの前に現われた。『復讐者』、として。

またこの手で、かつての友を殺さなければならぬ。始まりの竜、『紅蓮の君』として。

体が裂かれるような痛みだった。いつそ、本当にそうであれば、どんなに良かったのだろう。

彼はきつと暁闇の領域にいるだろう。かつてリオンやアルたちが彼を追い詰め、滅した場所だ。全ての始まりにして終わりの場所。そしてリオンの予想通り、『彼』はただ一人待っていた。枯れた大地、全てが朽ち果てたその場所で。

彼が振り返ると、フードから漆黒の髪が零れ落ちた。

イクセと瓜二つの顔、紫水晶を思わせる瞳にかつての輝きはない。ル力が心配するようにリオンの裾を掴む。見ればあのアルでさえ、気遣うような眼差しで自分を見つめていてはないか。

まったく情けない。リオンは無言で首を横に振ると、正面からヴァイスファイトの視線を受け止めた。昔を懐かしむように微笑む。

「全部終わらせよう。お前の罪も、受けるべき罰もオレが背負う。最初からこうするべきだった」

リオンの笑みを見て、ヴァイスファイトもまた笑った。かつての彼を思わせるような顔で。

だがもう昔には戻れない。何もかもがあの時とは違ってしまった。ヴァイスファイトは死んだ。目の前にいるのは過去の亡霊に過ぎない。

「……既に終わっている。この命も体も仮初のもの。我は、亡霊に過ぎない。全てを終わらせたいのなら、掛かってくるがいい。今を生きるものたちよ」

相容れない者同士

イクセが振るった刀が、紙のように水晶の竜の首を切り落とす。振り向き様に刀を閃かせた彼は、もう一体の竜を両断した。けたたましい音と共に竜の巨体が崩れ落ちる。

作られた竜とは言え、竜同様に喪歌を操るため、油断は出来ない。

イクセが持つ刀は、金の燐光を纏っていた。

いくらイクセといえど、魔水晶で作られた竜を倒す術はない。魔水晶は恐るべき硬度をもっているため、生半可な武器は通用しないのだ。おまけに竜と形を変えているせいか、恐ろしく硬い。これでは刀が折れてしまう。

だから彼はアティから、ゲイルはゼフィに、剣に力を付加してもらった。

始竜の力をもってすれば魔水晶を砕くことも容易い。

しかし、ただ砕くだけでは水晶の竜は機能を停止しなかった。厄介なことに再生するのである。

切り落とした首から紡がれる喪歌。巨大な魔法陣が展開した。イクセは降り注ぐ炎の雨を舌打ちをして避ける。その刹那、イクセを守るように生まれた金色の障壁が彼を炎から守ると同時に、どこからか放たれた光の矢が竜の体を四散させた。

青々と茂る草に瞬く間に火が広がる。放っておけば、辺り一面は火の海と化すだろう。イクセが再び舌打ちした時、耳に入った歌声。

『泪雨』

結びの言葉と共に浮かび上がる水色の魔法陣。それはいつか、ルカがグラティウスの祭で披露した古代歌だ。

降り出した優しい雨が炎を消し、イクセの体を濡らした。

先程金色の障壁を張り、光の矢で竜を粉々にしたアティが、雨を降らせたウイスタリアがイクセのもとへ駆け寄る。意外に心配性な始竜たちにイクセは、大丈夫だと片手を上げてみせた。

「怪我はない、イクセ？」

「無事か？」

「まったく、きりがねえつての」

「やっぱり、守りながらじゃ無理があるかな」

きりがない、と思わず悪態をついたイクセに、アティは困ったように顎に手を当てる。その間も体は動き、竜たちと戦っているのだから驚きだ。

水晶の竜たちの強度は半端ではない上に、下手な攻撃ではすぐ再生する。

ヴァイスファイトの傀儡だからだろうが、厄介なのは彼から力の供給を受けているということ。どんなに砕いても、例え破片でも再び竜の姿を取るのだ。加えて数も多い。

「イシュリアや紅蓮の眷属の援護があるとは言え、目覚めたばかりの夢幻とて辛いだろう」

ウイスタリアも唸りながら、フィーやイシュリアと共に、兵士たちと竜たちを守るミラに視線を向ける。ミラはまだ始竜として覚醒したばかりで、力をうまく使いこなせていなかった。

だからこそ、イシュリアとフィーをつけたのだが、このままでは先が目に見えている。

「どうしても戦わなきゃいけないの？」

ルカはヴァイスファイトに問い掛けながらも、分かっていた。

本当は戦いたくない。彼はとてもかわいそうな人。イクセにそっくりで、深い闇を持つ彼。そして彼の体にはもう一人いる。

始竜、暁闇の君、ヴァイスファイトと、名も知れぬ青年。体を弄ばれた拳句、失敗作の烙印を押された彼。彼は、彼らは既に答えを出している。

彼らがルーアを殺した。それでも彼らを憎むことなど出来なかった。

「相容れぬ者同士、それしか選択肢はない。世界の終わりを望む我らと、世界の存続を望むお前達。分かっているはずだ。人の子よ、いや、竜に愛されし、声を聞く者よ^{トラグナー}」

彼にしては感情の籠った声で、ヴァイスファイトは言った。黒曜石を思わせる黒髪が風に靡く。

多くを語らずとも、彼の体から立ち上った魔力が全てを物語っている。深い紫色の、視覚化されるほどに強い魔力だ。

世界の終わりを望む彼らと存続を望むルカ達。相容れないのなら、戦うしかない。言葉を交わす時は既に過ぎた。

「ルカ、歪んでしまった魂は私たちでも助けられない。滅つするところが唯一の救い。辛いなら……」

気遣うように、アルがルカの肩に手を置いた。その手はあたたかくて、一人ではないことを教えてくれるのだ。

アルは優しいし、いつでも自分が辛くないようにと考えてくれる。けれど、甘えてばかりはられないのだ。アルの声を遮って、ルカは首を横に振った。

「俺なら大丈夫だよ、アル。辛いことも悲しいことも、アルと、みんなと背負うって決めたから」

「ルカがこう言ってるんだ。オレたちも腹括ろうぜ、レイン」

リオンが茶化すように、アルの銀色の髪を掻き回す。不機嫌そうにしているアルなどお構いなしだ。

アルが笑った。艶やかな、それでいて圧倒的な美しさを内包する笑み。普段、笑みを見せることの少ない彼である。

ルカが、そしてリオンでさえも彼に見とれていた。

次の瞬間、アルの体から噴き出す銀色の光。

「……ああ、力を解放したのは久方ぶりだ。存分にやらせて貰おう」

「つたく、やっとやる気になったか。レイン、ルカ。やるぞ」

につ、と狂暴な、それでいて艶美な笑みを浮かべたりオンの体からも真紅の光が滲み出ていた。ルカも頷き、腰のジークルーネを抜

く。
出来るなら、戦いたくはない。戦いたくはないが、戦うことでしか守れないものもある。アルが教えてくれた魔歌^{うた}は大切なものを守るために使う。誰かを傷つけるためではなく。

「忘れた訳ではあるまい。お前たちは私に傷をつけられない」

ヴァイスファイトの口から紡がれた不吉な歌。それは正しく、竜を滅ぼすためだけに生み出された怨嗟の歌だ。もつとも、それを正面から受けるほど、こちら馬鹿ではない。

「させるかよ」

リオンが手を翳した瞬間、現れた赤光の盾が滅竜歌を相殺する。その隙にルカとアルは頷き合い、共に歌った。魔奏士同士が別々の歌を歌い、一つの強力な魔歌を紡ぐ。二重唱。これならば、アルであってもヴァイスファイトに傷をつけることが出来る。紡がれる二つの歌、重なり合う歌声。

『絶対氷結』

二人が歌ったのは、蒼穹の眷属であるシャーレンの命を奪った魔歌。地面から隆起した無数の氷柱がヴァイスファイトを襲う。

絶対氷結。ルカとアルが紡いだ歌は、二人の力を持ってすれば、竜の命すら奪う慈悲なき氷の枢となる。

しかし、ヴァイスファイトの体がぶれたかと思うと、彼を包んでいた氷が音を立てて砕け散った。四散した破片を握りしめ、彼が笑う。無駄だと、そんな物では自分には届かないとでも言うのだろうか。

「まずい！ 紅蓮！！」

「駄目だレイン！ 間に合わない！！」

「アル？ リオン兄！？」

まるで致命的なものを見落としていた、とでも言わんばかりに、アルが叫ぶ。リオンも唇を噛み締めたまま動きを止めた。状況が理解できないのはルカただ一人だけ。

二人が膝をつき、指さえも動かせないと言うのに、ルカだけが苦もなく動ける。アルとリオンは見えない力に押さえ付けられているかのような。

濁いた大地に描かれたのは、複雑な血の魔法陣。氷の破片を掴み、血に塗れたヴァイスファイトの手が赤く光っている。

「我らとて、白銀や紅蓮の相手をするには分が悪い。だから小細工をさせて貰ったまでのこと。お前さえ死ねば、我を傷付ける者は何もない。因果なものだな。忌ま忌ましい“始竜”と言うものに縛られるとは」

「私たちを……嵌めたな。始竜という因子を利用して」

いくら滅竜歌を操るヴァイスファイトとは言え、その肉体は人のそれ。そこには絶対的な力の差が横たわっていた。加えて、彼らはルカと二重唱を歌うはず。人が操る歌でヴァイスファイトを害することが出来るのは、二重唱で紡がれた魔歌のみ。千年前と同じ手は食わない。

歌い手であるルカさえどうにかすれば、ヴァイスファイトを阻むものは何も無いのだから。

苦しげに呻きながら、アルはヴァイスファイトを睨みつける。彼

は自らの内に残る始竜という共通の因子を利用した。“人”の血と始竜としての力を媒介として、アルたちの体を掌握したのだ。

ただでさえ、ここはかつて暁闇の領域であった場所。彼の力が強まるのは当然だ。

「そこで見ているがいい。“希望”が消える瞬間を。指をくわえて、な」

迫るヴァイスファイトに見入られたようにルカは動けなかった。じやらり、と鎖が擦れる音がしたかと思うと、ルカの身体はどこから伸びて来た闇色の鎖に拘束される。

相当な魔力が込められているのか、ルカが抗おうとしてもびくともしない。魔歌では拒絶するように弾かれてしまう。頼りのジークルーネも両手が縛められているため、抜くことが出来ない。

くそ、と悪態をつき、いくら身をよじっても血が滲むだけ。アルたちの足手まといになりたくないのに、自分は無力だ。力があっても全てを救えるわけではない。それは分かっている。それでもこの瞬間、ルカは己の力無さを呪った。

「ルカ！！」

例え我が身を犠牲にしようと、アルはルカを守りたかった。なのに身体が、自分の思うままにならない。地面についた手は渴いた砂を掴むことしか出来なかった。

守りたい

体が自由にならない。例えるなら鉛のようで、指一つとっても動かせないとは情けない限りだ。ルカが目の前で捕われているというのに。

何を賭してでも彼を守りたかった。それこそ、己の命すら惜しくはない。彼が望まなくても、この命でルカを救えるのなら、喜んで差し出そう。

海よりも鮮やかで、空よりも澄んだ魂を持った少年。自分を救ってくれた存在。彼を助けることが出来なくて何が始竜か。

アルは足に力を入れ、無理矢理にでも立ち上がろうとする。

とても言い表せるような痛みではなかった。体を微塵に刻まれ、ばらばらにされた方がどんなにましか。力を入れた足と地面についた腕の皮膚が裂け、血が滲み出る。それでも構わず、立ち上がるのと更に力を入れた。傷が急速に治癒すると同時にまた皮膚が裂ける。その繰り返し。

「レイ……ン！ 無茶をするな！！」

「ルカの……ためだ。無茶くらいする」

それを横目で見ていたりオンが苦しげに喘ぎながら、驚愕の眼差いでアルを見る。与えられる苦痛はある意味では滅竜歌よりも凄まじい。自分という存在を全力で否定されるのと同じこと。

それなのにアルはその力に抗い、打ち勝とうとしている。ルカのためだと言って。

そんな彼を見て、リオンも困ったように、あるいは呆れ気味に笑った。彼がああまでしているのに、自分は何なのだろう。リオンだ

けさぼっているわけにはいかない。

リオンもまたルカに救われた一人だ。弟のような存在だと思っているし、アルには敵わないが、守りたいとも思う。一人休んでなどいられない。悲鳴を上げる体を無視し、力を入れる。

「まったく……無茶するよな。オレ一人休んで……馬鹿かつつーの。カッコわりー……」

「アル！ リオン兄！ ……足手まといになんかなりたくない！！俺だつてみんなを守りたいのに！」

アルが、リオンが、立ち上がるうとしている。血に塗れながらも、二人の瞳は光を失っていないかった。

二人が自分の身を顧みることなくルカを助けようとしてくれているのに、自分はなんだ。無駄だと諦めるのか？ 二人が助けしてくれるまで何もせずに？

そんなの真つ平ごめんだ。彼らの負担になんてなりたくない。むしろ彼らが自分を守ってくれるように、自分も彼らを守りたいのに。力一杯、鎖を引つ張る。それでも闇色の鎖はびくともしない。血が滲んでも皮膚が破れても、ルカは止めなかつた。力の限りに足掻く三人を見て、ヴァイスファイトが嘲るような笑みを浮かべた。

「力なき者はただ虐げられるだけ」

「違う！！」

世界が全てに平等ではないことは知っている。それでも、その考えは間違っている。

ルカは燃えるような瞳で、ヴァイスファイトの感情の見えない瞳を睨みつけた。絶対に違う。力なき者は虐げられるだけではない。

力なき者も力ある者も手を取り合い、生きて行けるのがこのアルカディアだ。そうあって欲しいと思う。ルカはそれをアルから学んだ。自分一人の力などちつぽけなものなのだろう。けれど、ルカは一人ではないのだ。

「人も竜も手を取り合って生きていける。だってこの世界は理想郷アルカディアなんだから」

ルカは抵抗を止め、ある旋律を口にした。ただの歌ではなく魔歌だが、鎖を壊すためのものではない。

その旋律は驚くほど穏やかなものだった。始竜たちは世界から生まれた。この世界こそが母なのだ。心を込め、歌にヴァイスファイトへの思いを乗せる。

『優しき腕かいなに抱かれて眠れ愛し子よ。目覚めにはまだ遠く、現実まことを知るにはまだ早い。今はただ、母なる旋律めぐみに身を委ね、深き眠りに沈む時。遙かな詩は世界に響き、世界は歌に満たされる。妙なる響きを知るならば、今導きの声に応えよ 摇篮歌』

本音を言うとルカは彼を傷付けたくないし、ヴァイスファイトにも傷付けて欲しくない。彼の魂はきつと悲鳴を上げている。早く終わらせて欲しいと。

だからこの歌は誰かを傷付けるものではない。慈しむ歌だ。

摇篮歌は子守唄。母が子に歌うもの。歌を聞いたヴァイスファイトが何かを否定するように、激しく頭を振った。

「何を……こんな物、無駄だ」

「無駄じゃない。無駄だと言つのなら……ヴァイス、お前は何故泣いてる？」

「違う、違う！ 泣いてなど！！」

指摘したのはリオンだった。血に塗れながらも彼は立っていた。そしてアルもまた。ヴァイスファイトの力を打ち破ったのだ。かつて暁闇の君と呼ばれた彼の頬に伝う一筋の涙。

アルはルカに歩み寄り、彼を戒めている鎖に手を触れた。それだけで闇色の鎖は粉々に砕け散った。血が滲んだ手首をさすり、ルカはヴァイスファイトを見る。

そこにいたのは、無慈悲に竜たちを殺して来た始竜ではない。今にも砕け散りそうなそんな何かを、必死に堪える青年だった。

「なあ、ヴァイス。もう……止めてくれ。お前は誰よりも世界を愛していただろ？ それともまだ殺し足りないか？」

一歩、また一歩とリオンはヴァイスファイトに歩み寄る。誰よりも世界を愛していたはずの彼。どこでどう、違ってしまったのだらう。

ヴァイスファイトは言った。世界の滅びを願う我ら、と。それが彼の本音だというのか。

リオンは彫像のように動かないヴァイスファイトの手を取り、己の胸に当てた。

「なら、オレを殺せ」

自分の胸にヴァイスファイトの手を当て、リオンは自分を殺せと言った。予想もしない一言にヴァイスファイトは瞳を見開き、瞬きもせずリオンを見つめている。ルカもまた、信じられないと言った風に彼を見ていることしか出来ない。

「リオン兄……?」

「あいつに任せておけ。何か考えがあるはずだ」

思わず駆け出そうとしたルカの手をアルが掴む。彼は首を横に振った後、二人の様子を見守っている。

ヴァイスファイトはリオンの友であったと聞いた。もっとも近い者であったとも。ルカもリオンが自ら命を捨てるとは思えないが、不安が込み上げてくるのだ。

「どうした? さあ、殺せよ。お前が殺した竜たちのように。ほら、簡単だろ?」

ほら、とリオンは己の胸を叩く。いくら始竜であっても、心臓を止められれば死ぬ。滅竜歌を歌わずとも。

勿論、生半可な力では傷すらつけられないが、ヴァイスファイトには始竜の力がある。その力を持ってすれば、リオンの命を奪うことも出来るだろう。

「簡単だ。“ここ”を止めればいい。それとも怖じけづいたか?」

「我、は……」

彼は、リオンは何一つ変わらない。燃え盛る炎のように色を変える美しい髪に、ワインレッドの瞳は千年前と同じ色を湛えて、ヴァイスファイトを見つめている。

なのに自分はこんなにも穢れてしまった。漆黒の髪も紫水晶の瞳も歎きで汚れてしまった。

どんなに手を伸ばしても、もう二度と戻れないというのに、望んでしまいそうになる。失ったものだからこそ、こんなにも焦がれる

のだろうか。嗚呼、今更気付いても遅い。

「……お前が出来ないなら、俺が」

ヴァイスファイトが纏う気配ががらりと変わった。落ち着いた声音が苛立ちを込めたものへ変化する。

ヴァイスファイトと本来の体の持ち主の青年が入れ替わったのだろ。『彼』が手に力を込めた瞬間、リオンの表情が苦悶に歪んだ。それでもリオンは彼から離れようとはしない。これには流石のアルも顔色を変えた。

「紅蓮！」

「リオン兄！！」

「来るな！！」

ヴァイスファイトの様子がおかしいことに、アルもルカも気付いていた。このままではリオンが危ない。二人がリオンから青年を引き離そうと、足を踏み出し掛けた瞬間、リオンの鋭い声に動きを止める。

普段、滅多なことでは声を荒らげることはない彼だ。二人の、とりわけルカの動揺は大きかった。

「でも……」

「いいから、オレに任せてくれ」

苦痛に顔を歪めながらもリオンは首を縦には振らない。彼が放つ気迫と思いの強さを感じたルカは、一步を踏み出すことが出来な

つ
た。

夜明けを齎す者

時の流れは全てを変える。人も竜も、何もかもが、変わらざるには
いられなかった。それは不変であるはずの始竜であつても例外では
ない。皆、驚くほどに変わった。『アルトウール』は人を慈しむよ
うになり、大切な存在を見つけた。

先代風天の君と蒼穹の君は死に、ゼフィとウイスタリアが生まれ
た。夢幻の君は転生に入り、エクレールは眠りにつく。唯一変わら
ないのは、千年近く眠り続けていたアティではないだろうか。

千年の時はリオンをも変えた。同胞を、友を手にかけて時から。
アルのように割り切ることが出来れば、よかつたのかもしれない。
いや、紅蓮の君としての自分は割り切っている。

けれど“ヴァーミリオン”フレイア“フィーニクス”は違う。必
要なことだと割り切れなかった。

白銀の君であるアルは世界のためなら、同胞を手にかけることに
も迷わない。それほどの覚悟なくして、始竜ではいられないのだ。
だがリオンはアルのようになれない。それが羨ましくて悔しくて、
仕方ないとも思うのだ。自分は彼ではないし、どうやっても彼には
なれないから。

「オレ”の……声が聞こえるか？ ヴァイス。お前にオレは殺せ
ない”

「何を馬鹿なことを。おめでたい奴だな”

黒衣の青年から身を離すことなく、中にいるであろうヴァイスフ
アイトに呼びかける。

殺せないと断言したりオンを見て青年がせせら笑うが、彼もまた

笑っていた。それは絶対の自信に満ち溢れた、勝利を確信した笑み。

「たかが千年生きてただけのお前には分からないだろうよ。中にヴァイスがいなかったら、一瞬で塵にしてやるところだ」

一瞬で塵にしてやる、と言ったりリオンはルカが今までに見たことがないくらい、綺麗で凶悪な笑みを浮かべていた。実際、リオンが本気を出せば、人の体など簡単に塵に出来るだろう。

そう言えばいつかアルが言っていた。ある意味では怒ったりリオンが一番過激で怖いと。

不安になったルカは助けを求めるように隣のアルを見る。本当に自分たちはただ見ているだけでいいのかと。アルを見た瞬間、その不安は消えた。アルの月色の瞳には迷いなどない。そこにあるのはリオンへの絶対的な信頼。

ならば、ルカが言うことは何もなかった。少し寂しい気もするが、彼らは自分には及びもつかない時を共有してきたのだから。

「なら塵にしてみればいい」

「く……」

青年は更に胸を掴む手に力を込める。リオンの顔が一層苦痛に歪んだ。リオンは苦しげに喘ぎながらも、まだ笑っている。

リオンは震える手で青年の腕を掴み、小さく呟いた。燃えろ、と。そう呟いた直後、青年は何か気づいたようにリオンから身を離すがもう遅い。リオンが掴んでいた彼の腕が炎に包まれていたのだ。それはすぐに顔を歪ませた青年によって消されたが、リオンは嘲るような笑みで彼を見下ろす。

「オレの勘は当たっていたようだな。ま、塵に出来なかったのは残念だが。なあ、オレを本気で怒らせたいのか？ 邪魔だ。さっさとあいつに代われ」

「ねえ、アル。どういうこと？」

ルカは目を白黒させて隣のアルを見る。一体何が起こっているのだろう。始竜であるリオンは彼を傷付けられないのではなかったのか。

しかし、現にリオンが掴んだ腕は燃え上がった。あれを攻撃とは言わずに何と言うのか。

アルはじつと二人を見つめた後、小さく息を吐き出した。

「確かに、私たちは互いに傷付けることが出来ない。では“あれ”をヴァイスファイトたらしめているのは何だ？」

「魂じゃないの？」

始竜を始竜たらしめるのは、その肉体と魂であると聞いた。ヴァイスファイトは己の肉体を千年前に失い、魂だけの存在となったが、人の肉体を得たことで今ここにいる。確かに体は人間のものだが、魂はヴァイスファイト「グラフ」ノスフェラートそのもの。いくらアルやリオンが強大な魔力を持っていても、攻撃出来ないのなら意味がない。

ではアルは何故、今更こんなことを聞いたのか。

「そうだ。しかし今、表に出ているのはヴァイスファイトではない。つまりはそういうことだ」

「あ……！ そうなんだ」

ルカもアルが言わんとしたことを理解する。

少々呆気ない上に拍子抜けだが、つまりアルたちが彼を“ヴァイスファイト”を始竜と認識するのはヴァイスファイトの精神が表に出ている時だけだということだ。

種が分かってしまえば拍子抜けだが、それを確かめるのは簡単ではなかった。

彼らが使った滅竜歌は竜にとって致命的なもの。リオンやアルであっても例外ではない。確かめるには危険を冒さねばならなかった。

「……」

顔を上げた青年は笑っていた。悲しげに、痛みを耐えるように。

“彼”ではない。ヴァイスファイトだ。見間違うはずがない。途切れ途切れに聞こえた声は、はっきりと聞こえなかった。

本当に小さな声だったが、ルカは声ドラクナーを聞く者だ。声なき者の声を聞くことが出来る。ルカの心に届いた声は信じられないもの。

「待つて！」

「ルカ！」

いてもたってもいられず、ルカは駆け出した。アルの声も聞かずにヴァイスファイトに飛びつく。彼の服を握りしめ、どうして、と呟いた。

どうして、ヴァイスファイトはあんな事を言ったのだろう。

(せめて死ぬならお前の手で死にたかった。しかし、我はもう、お前に同胞殺しの罪を着せたくない)

彼はそう言ったのだ。お前というのは、間違いなくリオンのこと

だろう。どうしてこんなことを？

ルカには分からなかった。彼は世界の滅びを望むと言った。

本当にそうなのか？ ルカがしがみつけば、ヴァイスファイトは穏やかとも言える笑みを浮かべて、こう言った。

「我は結局、悪役にもなりきれなかった。どうか人の子よ、歌ってくれ、創世の歌を。そして救ってくれ、我とこの者の魂を。同胞を」

弾かれたようにルカはヴァイスファイトを見上げた後、リオンとアルの方を見る。まるで時が止まっているかのように二人とも動かない。

答えを求めるように、再びヴァイスファイトを見る。彼の表情はどこまでも穏やかで優しい。例えるのなら、死を前にした殉教者のよう。その表情に不安を掻き立てられる。

「暁闇の力を使って時を引き延ばしているが、長くはもたない。どんなに取り繕っても、我が侵した罪は消えないだろう」

「ねえ、一体どういうこと？」

ヴァイスファイトの紫の瞳はとても優しい色を宿していた。イクセと同じだ。その中に憎しみなどどこにもない。悪役になりきれなかったとは、どんな意味なのだろう。

それだけではない。彼が何を言いたいのか、まるで分からないのだ。

創世の歌とは何だ。彼とアルたちを救うとは？ 混乱してうまく考えられない。

「始竜は世界を支える柱でもあり、滅びの危機に瀕した時、人柱となる役割を持つ。滅びの時は近い。次に人柱となるのは……白銀だ」

「うそ……」

理解出来なかった。心が拒否している。彼は何を言っているのだろう。信じられるはずがない。始竜が世界の支柱であることは知っている。人柱になるなんて、誰も教えてくれなかったではないか。それとも、だからこそ彼らは永遠を生きるのか。

ヴァイスファイトを問い質したのに、口から漏れるのは呼吸の音だけ。声を出すことが出来ない。体が小刻みに震えた。

これが嘘だと断言出来るなら、どんなにいいだろう。今のルカに彼の言葉を否定するだけの材料がない。

何故、始竜かれらが存在するのか。創造主はどうして、彼らに永遠の命を与えたのだろう。ヴァイスファイトが言うように、世界に命を捧げるためだと考えれば合点が行く。

監視者であり、生贄。何が始竜か。彼らは本当に鎖に繋がれ、檻に閉じ込められた小鳥だった。

「千年前、人柱となったのは先代の蒼穹だった。明けない夜はない。だが闇を司る我では駄目なのだ。どうか夜明けを齎してくれ。ルカ、優しき人の子よ。許してくれとは言わない。怨んでくれて構わない。我にはこの道しか選べなかったのだ」

先代の蒼穹の君は千年前の戦いで命を落としたと聞いたはずだ。しかし彼の言葉が嘘とは思えない。この道しか選べなかった、と彼は悲しげな瞳で言った。

その刹那、引き延ばされていた時が元に戻る。アルヤリオンにすれば今の時間は、一瞬に過ぎなかったのだろう。

ルカが顔を上げた瞬間、耳に届いたある音。

ぱきん、ぱきん、と硝子が砕けるような濁いた音だった。それは

間違いなく、ヴァイスファイトから聞こえている。ルカの頭に寄せられた彼の腕が、砂のようにさらさらと崩れはじめていたのだ。

「ヴァイスファイト……？」

命尽きるその時まで

腕が砂のように崩れゆく様は、ルカにルーアの最後を思い出させた。ヴァイスファイトの片方の腕が崩れ、風に流れて消えて行く。血は流れておらず、ヴァイスファイトも平然としていた。

それを信じられない面持ちで見つめているのはルカだけではない。リオンもである。

アルは何かに気付いたのか、驚きもせずはその光景を見つめていた。リオンは恐る恐るかつて親友だった存在の名を呼ぶ。

「ヴァイス……？」

「我は、我らは亡霊。こうなるのが定め。それでも我は、何一つ後悔していない」

「何故……何故だ」

黒髪の青年は吹っ切れたように、或いは晴れやかに笑っていた。アルは動かず、何かを悟ったように首を横に振るだけ。

魔水晶で強化されていても、人の体では始竜の力を支えきれない。人の器にはあまりに大きすぎる。今までもった方が奇跡に近いのだ。それとも、暁闇の力を使って崩れかけた体を繋ぎ止めていたのだろうか。

リオンにはヴァイスファイトの心が分からなかった。彼が何を思っている、何をなそうとしたのかさえ。

口をついて出た声は震えていて、自分でも歯止めがきかない。何故、どうして。それが今のリオンの心を満たしていた。かつて傍らに在った存在が酷く遠い。

ヴァイスファイトはリオンの方に近寄ると、ゆっくりと残った片方の手を伸ばし、リオンの頬に触れた。その手は確かに質感を持っている。

だが氷のように冷たいのだ。まるで死人であるかのように。事実、彼の命は尽きている。死人なのだろう。初めに彼が言ったように、その体も命も仮初のもので、既に失われてしまったもの。

「お前には分からない、紅蓮。いや、ヴァーミリオン。……既に終わっている。この命も体も仮初のもの。我は、亡霊に過ぎない。だからこそ、消え去るのが道理。お前もそれを望んでいただろう？」

「違う！ 違う!!！」

全てを否定するように激しく頭を振りながらも、分かっていた。

彼の命が既に終わっていることに。

ヴァイスファイトの肉体は千年前に滅びている。ここにいる彼は彼の言う通り亡霊に過ぎない。本来なら存在してはならないのだ。

それはリオンが一番よく知っているではないか。千年前、『ヴァーミリオン』が彼を滅ぼしたのだから。

今にも泣きそうに顔を歪めるリオンに投げかけられるアルの声。

「紅蓮。何をしている。お前の役目は何だ？ 何のためにここに来た？」

「分かっている……。分かっているさ」

アルの声はこんな時でさえ淡々としていた。その静かでもいつも通りの声音から感情は見えない。

リオンは拳を作り、分かっている、と呟いた。アルの想いを理解出来ぬほど、リオンも馬鹿ではない。アルは自ら憎まれ役を買ってく

れているのだ。リオンが辛くないように。

不器用で無愛想、加えて唯我独尊。なのに同胞たちのことを何よりも気にかけているのだ。それを表に出さないだけで。

「その必要はない。……これで仕舞いだ」

ヴァイスファイトは優しく笑ってリオンの頬から手を離し、彼の胸をとん、と軽く押した。リオンは彼の真意を理解出来ずにヴァイスファイトを見返す。

しかし青年は何も言わず、ただ微笑んで歌を紡いだ。ヴァイスファイトは歌いながら、この肉体の本来の持ち主である青年に呼びかける。

『結局、最後までお前を巻き込んでしまったようだ』

『構わない。どうせあんたに会わなければ、野垂れ死んでいた命だ』

暫くして返って来たのはどこか照れたような声。

実際、彼はヴァイスファイトと出会わなければ死んでいた。人が竜の強大な力を制御出来るはずがない。ヴァイスファイトが肉体を共有していなければ、体などとうに崩れ落ちていただろう。かつて始竜と呼ばれた竜の真意は知れなかったが、青年は一二もなく体を貸すことを了承した。

最初はまさか、こんな大それたことをするとは夢にも思わなかったが。

『悪役は慣れている。それにあいつの、同胞の願いを叶えることが出来たからな』

『……人造竜兵の少年か』

『あの時、何故あんなにも苛立っていたのか分からなかった。でもやっと分かったんだ。俺が苛立った理由は、あいつが何一つ恨んでいなかったから。己を作った人も竜も、世界も慈しんでいた。恨み言の一つも言わず、世界に還った。同胞とは少し違うかもしれないし、俺はあいつを憎んでいたのに、あいつは俺を恨んでもいなかった。命尽きるその時まで。そう思ったら馬鹿らしい。俺は千年の間、何をしてたんだろう。全てを憎み、拒絶して自分から世界に背を向けたんだ』

彼の言うあいつ　同胞とは命尽き、世界へと還ったあの人造竜兵の少年のことだろう。ヴァイスファイトの呟きに彼が頷く気配がした。

完全なる人造竜兵であり、人の手によって作られた少年と、竜の力を無理矢理移植された青年。同胞と呼ぶには少し違つかもしれない。

青年はルーアを憎んでいたし、消したいとも思っていたが、ルーアは違う。これっぽっちも彼を恨んではいなかった。青年だけではなく、人も竜も、何一つ恨まなかった。恐らく、自分がルーアを殺すようにわざとあんな態度を取ったのだ。

全てが馬鹿らしくなった。

世界に復讐をするつもりなどなかったが、憎しみはそう簡単に消えない。ヴァイスファイトに協力すると決めてからもその想いは青年の根底にあった。

決して消えないはずの憎しみという名の炎。そう思っていたのに、心を焦がしていた炎はいつの間にか消えている。

世界が青年を裏切った訳ではない。善も悪もなく、世界はいつだってそこにある。全てを憎み、拒絶したのは青年自身。自分から世

界に背を向けたのだ。

ルーアを見て気付かされた。目が覚めた、と言えはいいのだろうか。あんな少年を憎み、世界を恨み、自分は今まで何をやっていったらうと。

『そうか……』

『ああ、だから付き合ってやるよ、あんたに。地獄の底までな』

そう言つて青年は声を上げて笑つた。心の底から楽しげに。彼もまたヴァイスファイト同様、様々な鎖に縛られていたのだ。

自分たちの魂は輪廻の輪に還ることも許されず、消え行く定めにあるのだろう。別の肉体に宿り、長い時を生きただけで、この魂は歪んでしまっている。もし彼と地獄に行くのなら、それも悪くないと思う。少なくとも退屈だけはしなさそうだと。

ヴァイスファイトは小さく微笑むと、巻き込んでしまった青年に謝り、最後の詩を歌い上げた。

『踊る焰は光に熔け、火神の怒りは天を突く。我は赦されざる者、灼眼の咎人。緋は鎮魂、死は手向け。己が終焉おわりを知り、定めを識る。願いは果てなき天へと届き、荒らぶる御霊を呼び起こす。遙かな咆こ哮えは世界に響き、世界は声に満たされる。掲げた誓いかくこを知るならば、今我が導きに応えよ 緋神凰』

リオンやルカが止まる間もなく、ヴァイスファイトの体は真紅の炎に包まれた。神々しい霊鳥が両翼を広げたかのような赤と橙、鮮烈な炎の色。

彼は穏やかな表情を浮かべ、残った片方の腕で自らの体を抱きしめる。何故だろう。その光景がルカにはまるで炎の、いやリオンの腕に抱かれているように思えた。夜空を切り取ったような艶やかな

黒髪が炎の中で揺れる。

どうして彼はこの選択をしたのだろう。この道しか選べなかったとヴァイスファイトは言った。本当にそうなのだろうか。他に方法はないのか。

「待つて、ヴァイスファイト！」

何か他に方法があるのではないのか。皆が苦しまずにいられる方法は。そんな都合の良い方法なんてないのかもしれない。

けれど、もうシャーレンの時のように失うのは嫌だ。叫び、駆け出そうとしたルカに、ヴァイスファイトは静かに首を振った。言わなくていい。とでも言うように。それを見ていたリオンが、血が滲むほど強く唇を噛み締める。

「こんな結末、納得出来るか！！ オレは……」

「あやつの最後の願いを叶えてやれ」

「レイン……」

ヴァイスファイトに向けて伸ばしかけたリオンの腕を掴んだのはアルだった。リオンは燃えるような眼差しでアルを睨みつけるが、彼の金色の瞳はどこまでも静かだった。

いくらアルが言うことでも、納得出来るはずがないだろう。

ヴァイスファイトは始竜として禁忌を侵したが、リオンの親友には変わらない。そんな親友の最後の願いが自ら命を絶つことなのか。こんな結末を望んだ訳ではない。リオンが望んだのは罪と罰。なのに、

「嫌だ！！ こんな結末、オレは望まない！ どうしておまえはオ

レに罰を与えてくれないんだ……」

「リオン兄……」

ヴァイスファイトの黒髪が揺れる。鮮やかな炎を舞台に踊っているかのようだ。

リオンは全てを否定するように頭を激しく左右に振った。初めこそ叫びに近かったが、最後は殆ど懇願に近い。

親友を死に追いやったことを彼は千年もの間、悔やみ続けていたのだらう。もう一度、ヴァイスファイトの命を絶つと決めたのは、親友を手にかけた己への罰だったのだ。

生き物のようにうねる炎の中でヴァイスファイトの口が微かに動く。それは思念を介した声ではなく、彼が口に出したものではないが、確かにルカやリオン、アルに伝わった。

『ありがとう。愛しき者たちよ』

その言葉に“全て”が込められていた気がした。禁忌を侵し、失われた歌を使って多くの竜を殺した彼の。ルカにはヴァイスファイトの思いを全て理解することなんて不可能だ。

彼は微笑んでいた。満足したように、それでいてどこか悲しげにヴァイスファイトの紫の瞳とリオンのバーガンデイの瞳がかち合う。ほんの一瞬、彼らは哀切の視線を交わした。

その刹那、炎が更に勢いを増し、これまで以上に燃え上がる。灼熱の化身である鳥が天に羽ばたくように消え去った後、そこに青年の姿などない。透明で澄み渡った紫色の輝きを放つ魔水晶があるだけで。

古より続く負の連鎖

『ありがとう。愛しき者たちよ』

何の前触れもなく聞こえた声、感じたのは喪失感。胸を突く激しい痛み。それは突然で、イクセは頬を流れる冷たい何かに気づいた。それは一筋の涙。己の瞳から流れ落ちた雫。

イクセは慌てて平常を装って刀を構えた。戦場での隙は例え一瞬でも死に繋がる。それを《紫》の冒険者は痛いほど理解していた。まるで心にぽっかりと穴が空いたような、言葉にし難い感覚。

『彼』が消えたのだと理解する。肉体と魂が惹かれあっているのだろうか。

何故、こんなにも悲しいのかイクセには分からない。何かを感じたのはイクセだけではなかった。アティやウイスタリア、ゼフィにミラも天を仰いでいる。

「お疲れ様、ヴァイス。きみの魂に安らぎがあらんことを」

アティの美しい琥珀色の瞳から涙が流れ、頬を伝った。ゼフィは悲痛な面持ちで俯いており、ウイスタリアとミラの表情からは感情を読み取ることが出来ない。

刹那、イクセたちを囲んでいた水晶の竜が甲高い音を立てて崩れ落ちる。

例えるのなら糸の切れた操り人形のように、竜を形作っていた魔水晶は粉々に砕け散って風に流れて消えた。

唯一、分からなかったのはゲイルだけで、動きを止めた始竜とその眷属、イクセを見て怪訝そうな顔をしている。

「なんだ、終わったのか？」

「……ああ。終わったよ、全部」

ゲイルの問いにイクセは刀を鞘に納めて頷く。

世界を憎んでいたはずの彼は死んだ。誰の手でもなく、己の手で、半身を裂かれたように心が痛かった。彼とイクセは同一ではない、別の存在なのに。

今まで彼の存在など感じたことなどなかった。ならば、この胸を刺す痛みは何なのだろう。

「……ううん。まだ終わってない。世界の滅びを回避するために、ぼくたちの命を使わなきゃ」

「何のことだ？」

静かに首を振ったアティは、いつもの人を和ませる笑顔ではなかった。珍しく憂いに満ちたもので、イクセとゲイルを戸惑わせる。

世界の滅びを回避するために命を使うとアティは言った。そしてウイスタリアやゼフィも驚いた様子はない。ぼくたちの、と言うのは始竜を指すのだろう。

「我らは世界の支柱であると同時に人柱であるということだ。それが始竜が永遠を生きる意味、創造主より与えられたもう一つの役目」

「私たちは世界が滅びの危機に瀕する度、その命を捧げることで滅びを回避して来ました」

ウイスタリアの言葉をゼフィが継ぐ。

始竜は世界を支える柱にして人柱。強大な力と永遠に近い命。彼

らは何故、それほどの力を持つのか、イクセは考えたことなどなかった。

緑髪の竜は言う。世界が滅びの危機に瀕する度、その命を捧げて来た。

「それこそが始まりの時より続く負の連鎖。自分たちを縛る鎖。その鎖がある限り、自分達は解放されない。世界を守るために永劫の時を生きる。己の意思で生きること死ぬことも許されない」

驚く二人をよそに淡々とした、感情を感じさせない声でミラが呟く。

そう、それこそが彼らを、始竜たちを縛る真の鎖だった。

鮮烈な炎が消えた時、そこにヴァイスファイトの姿はなかった。枯れた大地に横たわるのは、透明で澄んだ輝きを放つ紫色の魔水晶。それだけが彼が確かにここにいた証。

リオンはふらふらとその場に膝をつき、恐る恐る魔水晶を手にとった。

すると、ぱきん、と甲高い音がする。魔水晶に無数のひびが入っているのだ。リオンの手の中にあっただけ粉々に砕け散り、両手からこぼれ落ちていく。

「ヴァイス……」

リオンの声に伝えてくれる者はもう、この世界の何処にもいないのだ。誰もがこんな終わりを望んだわけではない。

白い砂となった紫色の魔水晶を握りしめながら、リオンは小刻みに体を震わせていた。悲しみに堪えるように。彼はリオンに何一つ、真意を語ることなく、逝ってしまった。

どこでどう間違ってしまったのだろう。何度自問しても分からない。

否、初めから答えなどないのかもしれない。その間に両手にあった砂は風に流れて消えていく。呆気ない。呆気なさすぎる終わりだった。

「リオン兄……」

「私にあれの心をはかることは出来ぬが……後味の悪い結末となつたな」

肩を震わせるリオンを、ルカは心配そうに見つめる。アルは複雑な表情で同胞と、砂をさらった風の行く末に視線を向けた。

引き延ばした時の中でヴァイスファイトは言った。

『始竜は世界を支える柱でもあり、滅びの危機に瀕した時、人柱となる役割を持つ。滅びの時は近い。次に人柱となるのは……白銀だ』と。

確かめる必要がある。ルカは意を決して、憂いを帯びた表情を浮かべるアルに声をかけた。

「ねえ、アル。始竜が人柱って本当？」

「何のことだ？」

驚いた様子など微塵も見せない。首を傾げるアルは、普段とどこも変わりなかった。

ルカには分かる。十五年生きて来た中で、彼とは十年以上の時を過ごして来た。分からないとでも思っているのだろうか。

ルカは臆することなく、親友であり、家族である青年の月色の瞳を見上げた。その金色の瞳の中に見つけたほんの僅かな、毛ほどの動揺。

「とぼけないで。ヴァイスファイトが教えてくれたんだ。始竜は世界の支柱であると同時に人柱でもあるって。それと……次はアルだっけって言った」

最後の言葉だけは言いたくなかった。みつともないが声が震える。アルは決してルカに嘘をつかない。だから、正直に答えてくれるはず。

そして、アルは否定しなかった。酷く悲しげな顔をするだけで。どうして話してくれなかったのだろう、誰も教えてくれなかったのだろう。

みんなは優しいから、悲しむと分かっているように隠していたのか。事実、この理想郷と呼ばれる世界が犠牲の上に成り立っていたとは考えもしなかった。

ルカは真っ直ぐにアルを見上げる。アルはきつと自分が望めば答えてくれる。この銀色の竜はルカに甘い。それを利用するようで心苦しいが、知らなければならなかった。

始竜が存在する意味、ヴァイスファイトが残した言葉。彼らは本当に、世界の支柱であると同時に人柱なのか。

「お願い、アル。教えて。何も知らないままなんて嫌だ。……アルが関わることなら尚更」

「ルカ……」

アルのローブの裾を掴み、懇願するように相棒を見つめる。

もう隠し事をされるのは嫌だった。知らなかったから、で全てが済まされる訳ではない。知らないことも、いや、知ろうとしないことも罪なのだ。

アルはルカの相棒で親友、掛け替えのない家族でもある。彼を犠牲にする世界なんていらぬ。自分勝手だと分かっている、この想いを偽るなんて出来なかった。

アルがルカのために命を捨ててもいいと思うように、ルカもまた彼のためなら命も惜しまない。

「本当にお前は……」

アルは困ったように笑ってルカの髪を撫でる。誰よりも竜のことが大好きで、一度決めたら頑として譲らない友人。心優しい少年は、きつと自分のために泣いてくれる。

出来れば知られなくなつた。残された時をどう生きるか、アル自身も決めかねていたから。

「……レイン、ルカには知る権利がある。いつまでも隠してることもなんて出来ないだろ」

悩むアルに声を掛けたのはリオンだった。

ルカは何も言わずに目の前の青年を見る。彼の手にはもう何も残っていないかった。魔水晶の欠片も、砂でさえも。全て風に攫われてしまった。

掛ける言葉など見つからない。リオンの痛みはルカ如きにはかり知れないからだ。

今は励ますことも、慰めることも出来なかった。彼の悲しみを癒せるのは今は亡きヴァイスファイトだけ。

ルカの様々な感情が入り交じった視線に気付いたのだろう。リオンは照れ臭そうに笑い、くしゃりと己の髪を掴んだ。

「心配することなんて何もなさ。悲しむのはいつだって出来る、だろ？」

今やるべきことは、悲しみに溺れることではない。確かに全てを投げ捨て、悲しみに身を任せられれば楽かもしれない。リオンよりずっと優しく不器用な親友。出来るなら、彼を想って泣きたかった。

だが今はまだその時ではないのだ。自分たちの役割と、始まりの時より続く負の連鎖。始竜が背負うもの。本当なら話したくはなかった。アルもリオンも、同胞たちだって。

アルは少しだけ息を吐き、ローブの裾を掴んでいたルカの手に己の手を重ねた。

「……全てを話そう。それにはまず、始まりの時より与えられた私たちの役目を話さねばならない」

古より続く負の連鎖（後書き）

後四回の更新で完結すると思います……！

世界の真実

「始竜は世界を支える柱であると同時に、世界が滅びに曝された時、命を捧げる人柱として生まれた。私たち竜は大気中のマナを糧とする。中でも始竜が取り込むマナは膨大。それを解放することで、崩れた世界のバランスを元に戻す。先代の蒼穹は千年前の戦いで命を落としたのではない。その命を世界に捧げた。そうすることで“人の側に傾いた力を元に戻したのだ”」

空気と同じく、マナは世界に無くてはならぬもの。枯渇、あるいは力が傾きすぎれば世界は崩壊へと向かう。千年前、人と竜が争ったことにより世界のマナは乱れ、力は人の側へと傾いた。

崩れたバランスを元に戻すためには膨大なマナが必要となる。普通の竜が生涯で取り込むマナでは到底足りない。だからこそ、始竜の命が必要になるのだ。

アルの声は淡々としており、それ故にルカは不安になる。まるで全てを達観しているかのよう。

「だからオレたちは“永遠”を生きる。自らの意思で命を絶つことすら出来ない。この世界の誰もが生まれ持つものをオレたちは持つてないのさ」

おどけたようにリオンが言った。己の生き死にでさえ、自分の意思でどうにもならない。この世界で生まれた誰もが、生まれながらに持つ選択をアルたちは持たないのだ。

世界に捧げる命であるからこそ、彼らは永遠を生きる。世界を生かすために、犠牲となるために。それが始竜の真実。創造主より与えられたもう一つの役目。

「それが私たちの存在意義であり、与えられた役目。ルカや愛しい者たちが生きるこの世界が守るべきものだ、私は心から思う。心配するな。滅びの時は近いと言っても、私たちの感覚で、だ。お前が生きている間はまず心配ない」

それは日だまりのように暖かな笑み。守るべきものを見つけたと語るアルの瞳はどこまでも優しい。だからこそ、ルカは心配になった。

アルは自分が生きている間は、滅びの時は訪れないという。近いというのは、彼らの感覚であって人ではないと。

「ずっとそばにいてくれるって約束したよね。……アルは嘘ついてる。俺が分からないと思った？ 嫌だ。ルーアみたいにおいて行かないで……一人にしないでよ」

ルカはアルの手とロープの裾を掴み、子供のように嫌々と首を振る。

アルを困らせた訳ではない、我がままだって分かっていた。自分とアルは人と竜。どんなにそばにいたいと願っても、別れの時はやって来るだろう。

でも、こんな終わりは嫌なのだ。

ルーアとの別れも一瞬だった。最後の笑顔が脳裏に焼き付いて離れない。アルもルーアのように、自分のそばから去ってしまうのか。それが何よりも恐ろしかった。

「ルカ、私は……私はこの世界を守りたい。お前が生きる世界を。お前を悲しませることになろうとも、私の思いは変わらない。この命尽き、肉体が消え失せようと、この魂はルカと共にある」

アルはルカの頭を撫でながら、自らの思いを口にする。

ルカを残して逝くことはつらい。身が引き裂かれるように。出来るなら彼の成長を見届けたかった。

だが全てを投げ出すことは出来ない。始竜として、アル自身として。

例えこの命が尽き、肉体が塵と消えようと魂はルカの傍らにある。自分という存在は、世界を守るために命を捧げた始竜たちのように世界と一つになるのだ。

「嫌だ……嫌だよ。アルがない世界なんていらぬ。俺の“世界”はアルだから」

「聞き分けのないことを言わないでくれ。私は感謝しているのだ。ルカ、お前と出会えたことを」

ルカは決して離すまいと、裾を掴む手を強める。懇願するようにアルを見上げれば、彼は困ったようにルカを見つめていた。ルカが幼い頃、母に会いたいと一度だけ我が儘を言った時のように。

アルがない世界なんてルカには意味がない。ルカにとっての世界は彼だから。

考えたことなんてなかった。アルが自分より先に死ぬなんて。

竜はおよそ、二千年の時を生きる。普通ならルカの方が先に老いて死ぬ。自分はアルを置いて逝くほうで、アルはずっとこの悲しみ、苦しみに耐えてきたのだろうか。ただ一人で。

始まりの時から今まで、アルはどれほどの命を見送って来たのか。ルカには想像することしか出来ない。

時の流れから置き去りにされたよう。愛しい者も親しい者も、自分より先に老いて死んでいく。それはどんなに辛いことだろう。想像しただけで胸が締め付けられた。

アルの手が優しくルカの髪をすく。この手がなくなってしまうなんて認めたくない。

けれど、アルの決意を変えられないことも分かっていた。諦めるしかないのか。そう思った時、ヴァイスファイトが残した言葉が頭に浮かぶ。

『どうか人の子よ、歌ってくれ、創世の歌を。そして救ってくれ、我とこの者の魂を。同胞を』

その歌を歌えば、アルを救うことが出来るのだろうか。

「ねえ、アル。創世の歌って？」

「何故それを……」

「ヴァイスファイトが言ったことを思い出したんだ。創世の歌でアルたちを救ってくれって」

ルカはアルとリオンの先ほどのやり取りを話した。ヴァイスファイトが願ったこと。創世の歌を歌い、アルたちを救うこと。

創世の歌とはその名の通り、神々がこの世界を創造する際に歌った歌なのだろうか。

ルカの口から出たかつての同胞の名と歌に、二人は驚いているようであり、悲しげにも見える。

リオンの顔が歪んだ。二人はヴァイスファイトの意図を察したのかも知れない。

「ヴァイス……お前ってヤツは」

「創世の歌を歌えば、世界の理さえ書き換えることが出来る。しかしそれには、この世界に生きる命　人や竜が望まなければならぬ」

もしかして、とルカは思う。ヴァイスファイトが滅竜歌を使い、竜たちを殺した理由。滅びの時を少しでも先延ばしにするためだったのではないか。

始竜たちが潜在的に内包するマナは強大。そのマナを使って世界のバランスを元に戻すのだが、竜たちも彼らほどではないにせよ、体内にマナを溜めることが出来る。

竜が死した時、解放されるマナは始竜と比べてずっと少ないが、それでもヴァイスファイトはアルたちのために、彼らを手にかけたのだらう。

だからアルもリオンも驚き、悲しげな顔をしていたのだ。ヴァイスファイトの本当の願いを知ったから。

彼は同胞を、リオンを始竜という鎖から解放放ちたかったのだ。

そして、神々に縛られ続ける世界を。決して許されることではない。どんな理由があるにせよ、彼は多くの竜たちを殺し、混乱を招いた。しかし彼を心そのままに責めることは出来ない。ヴァイスファイトもそれが罪だと知りながら、己の望みに従って行動した。自らの魂を歪め、守りたかった親友リオンに背を向けてでも。

「でもそれしか方法はないんだよ？ 出来るならやってみたい。この世界も、みんなも助けたいんだ」

始竜たちの犠牲で世界は確かに救われるのかもしれないが、ルカはこの世界もアルたちも救いたい。創世の歌なら、世界の理すら変えられるとアルは言った。つまり、アルたちを始まりの竜という鎖から解き放つことが出来るのだ。

これはルカの我が儘かもしれない、自分勝手な思いなのかもしれない。

だけど諦めることなんて出来ない。もう二度と大切なものを失い

たくないのだ。

「やろうぜ。……なあ、レイン。レインまでオレの前からいなくならないでくれよ」

リオンは弱々しく笑って、押し黙るアルの肩に手を置いた。

自分たちの命を犠牲にするほか、方法はないと思いつつも、彼の気持ちは複雑だったのだろう。なんだかんだ言いつつも、彼らの繋がりは深い。まるで家族のようだ。

「お願い、アル。俺に力を貸して。俺はアルを失いたくないよ」

アルを失いたくない。我が儘だっていい、自分勝手にいいからアルを、始竜たちを助けたいのだ。そのためならどんな誇りも受けし、必要とあらば泥も被る。

世界を救う、という大それたことをしたい訳ではなく、ただ純粹に彼らを助けたかった。

「紅蓮、ルカ……。分かった」

「ありがとう。アル、リオン兄。俺の“声”を“みんな”に届けて欲しいんだ」

『みんな』とは仲間たちではない。世界に生きる命たちに、だ。

創世の歌はこの世界に生きる命たちが望まなければ効力を発揮しない。普通に考えれば不可能である。だから、ルカはこの声を、思いを世界に伝えようとしているのだ。

アルもリオンも、ルカの意図が分かったのだろう。リオンは艶やかに笑い、アルの肩を叩く。

「声を届ける、か。確かに始竜の精神感応力を使えば出来る。レインも異存ないな」

「ああ。どこまでもルカに付き合おう」

アル、リオンの体が淡い光に包まれる。

次の瞬間、そこにいたのは麗しい青年ではない。光を弾く銀色の鱗と金の瞳を持つ竜に、燃え盛る炎を思わせる真紅の鱗をした竜。青年から姿を変えた彼らは、本来の竜の姿となっていた。

繋がる歌

何と言えはいいかなんて分からなかった。この思いを言葉にすることなど出来るのだろうか。

けれど、自分の思いを伝えなければ。そんな衝動がルカを突き動かしていた。

アルたちが見守ってくれている。そう考えれば、怖いものなんてない。今一番怖いのはアルを失うこと。アルのためなら、何だって耐えられる。

アルとリオンの方を振り向けば、彼らは無言で頷いた。アルの体が銀色の光を帯びたかと思うと、リオンから真紅の光が溢れ出す。ルカは息を吸い込むと、意を決して口を開く。

「この声が聞こえますか？ この世界、アルカディアに生きる命よ。俺はルカ・エアハートといます。どうか俺の話を聞いてください。世界を構成するマナ、そのバランスが崩れ始めていることで世界は今、滅びの危機に曝されています。突然言われても実感など湧かないでしょうし、信じられないと思います。けれど本当のことなんです！」

アルたちの力でルカの声、そして姿は世界の人々、竜たちに伝わっているだろう。

臆してはならない。自分に出来ることなどたかが知れている。だからこそ自分が出る精一杯のことをしなければ。

でなければ、悔やんでも悔やみ切れない。無様でもいい、何もしないで後悔することだけは嫌だから。

「理想郷と呼ばれしこの世界を守るために、人知れず犠牲となった竜たちがいます。俺の大切な友人たち。彼らを、そして世界を救う

ため、皆の力を貸してください。お願いです、彼らは世界のため、不死という鎖に縛られて来ました。自らの命さえ自由に出来ず、自分の意志で生きることすら出来ない。他でもない俺たちや世界のために、彼らはそれを始まりの時から繰り返して来たんです。気が遠くなるほど長い時間を。ですが、突然のことに戸惑うのは当然です。だから俺の記憶を“視て”下さい。俺の思いを」

誰も彼らの犠牲を知らない。知らないというのに、彼らは世界のために命を捧げ続けた。お伽話で始まりの竜と語られし伝説の存在たちは、世界という鎖に縛られた小鳥だった。

もう解放してあげてもいいのではないか。アルたちを自由にしてあげたい。

自分の思いを全て言葉で告げることなんて出来ない。だから見てもらうのだ。ルカの記憶を。

今までアルと過ごした日々。ルアが体験した千年前の人竜大戦。そしてルアとの別れ。ルカは歌い始める。目を閉じ、意識をクリアにして。己の思いを乗せるために。

イクセの頭の中に響いたのはルカの声だった。イクセやゲイルがアティたちから聞かされたのは、世界に滅びが迫っていることと、そのために始竜　アルの命が必要だということ。

だがルカはまだ諦めていないのだ。少年の声からはそれがはつきりと感じられる。友人の声を聞きながら、イクセは始竜たちに問う。

「なあ、力を貸すって何なんだ？」

ルカは言った。皆の力を力を貸して欲しいと。具体的に何をすればいいのだろう。

そしてルカは何をするつもりなのか。

「多分、創世の歌のことだね」

「創世の歌だつて？」

「創世の歌は遙か昔、神々が世界を作り出すために歌った歌のことです。この世界に生きる命たちが望めば、世界の理を書き換える事も可能です。私たちを縛る鎖でさえも。私たちに出来ることはルカ様と共に創世の歌を歌うことだけ」

アティをはじめとした始竜たちは分かっているらしい。アルを救うための方法、創世の歌なるものを。イクセやゲイルの疑問に答えたのは、ゼファイである。

この世界を生み出した神々は二つの姿を持っていたという。人と竜。彼らはその似姿なのである。

神が作りし理想郷、アルカディア。

この世界を真の意味で救えるのは、世界を去った神々ではない。アルカディアに生きる命たちの意思が必要になるのだ。共に創世の歌を歌えば、世界は文字通り、『変わる』。

神々はそれを見越して、始竜たちに創世の歌を残したのか。創造主の御心はゼファイたち始竜にも分らない。

「しかし、今はまだその時ではない」

「彼の歌はまだ続いている」

空を見上げるウイスタリアに、ミラはルカの歌に耳を傾けるように目を閉じる。

流れ込んで来た記憶は、未だミラの術で拘束されたままのエスメ

ラス軍と王、竜たちを戸惑わせるには十分だった。

海上都市エランディア。

いつものように聖堂で海の神に祈りを捧げていたジェイドは、突然聞こえた友人の声に慌てて頭を上げる。その声は少し前にエランディアを旅立った親友のもので、戸惑うジェイドの脳裏に思い描いた少年が浮かんだ。ルカ・エアハート。竜に愛された少年。彼の歌声は人々を癒し、希望を与えた。

思わず、壁にもたれ掛かっていたラルフに視線を向けると、彼も信じられないと言った面持ちでジェイドを見返す。

「おい、これってあいつだよな？」

「うん、ルカの声だ」

目を白黒させるラルフに、ジェイドは頷いて辺りを見回すが、当然、友人の姿などどこにもない。当たり前だ。彼はここではない、きっと遠い空の下にいるのだから。

しかし二人揃って幻聴を聞くのは有り得ない。確かにルカの声だし、彼の姿が見える。

ジェイドとラルフは顔を見合わせ、黙ってルカの声に耳を傾けた。

「ルカ君……？」

照り付ける太陽、少し冷たい潮風がヘンリエッタの頬を撫でる。

一通り洗濯物を干し終えた彼女は、ルカの声を聞いた。

聞こえたと言っても頭の中に直接響くようなもので、その声はヘンリエッタ個人ではなく、世界に生きる全ての命に向けられている。彼が口にした単語はヘンリエッタからすれば、信じられないことばかりだった。世界に迫る滅びの時、世界を存続させるために命を捧げて来た竜たち。ルカの真剣な気持ちが伝わって来る。

ルカの優しい歌声と共に、次々と頭に浮かんだのはルカの記憶。アルとの出会い、そして旅立ち。イクセや作られた竜の少年、ルーアとの出会い。

彼が体験した千年前の激しい戦いの記憶にルーアとの別れ。そしてアルたちに課せられた重く苦しい定め。ヘンリエッタは知らず涙を流していた。

彼女は流れ落ちた涙を拭おうとはせず、感情のまま涙を流し続けた。他でもない犠牲となった竜たちとアルのために。

「アル君。貴方なんてつらい運命を」

「ねえ、アーヴィン。これ……」

「ああ、ルカ君の声だね」

アーヴィンとリスがルカの声聞いたのは、オアシスで休息を取っていた時だ。流れ落ちる汗を拭い、目を閉じる。彼の声に耳を傾けるためだ。

トラグナー
声を聞く者であるリリスは、この声が竜たちと同じような精神を介した言葉であることに気付いていた。

彼が口にした衝撃の事実。到底信じられはしないが、ルカが言うのなら真実なのだろう。

「私たちの力なら、いくらでも貸してあげる」

「そうだね。それが世界だけじゃない、あの子たちのためになるなら」

彼は世界中の人々に呼びかけている。リリスやアーヴィンの力など、ちっぽけなものなのだろう。それでもこの小さな力が彼らや世界のためになるのなら、いくらでも貸そう。

アーヴィンとリリスは互いの手を重ね、どこまでも続く青空を仰いだ。この空が彼らと繋がっていることを信じて。

「何だか大変なことになってるみたいだな。ふふ、ルカ君もあいつも随分と大掛かりなことに巻き込まれたもんだ」

エスメラス王都を歩いていたリードは突然の声に足を止めた。

見れば通りを歩く人々全員が足を止め、戸惑ったように顔を見合わせている。それも無理はない。なんとたつて頭の中に突然、声が聞こえて来たのだから。

しかし彼は依然、飄々としており、面白そうに唇の端を歪めている。

それからしばらくは騒がしかったが、美しい歌声が聞こえた瞬間、
辺りは水を打ったように静まり返った。

リードは眩き、ただ一人、楽しげに空を仰いだ。

「……いい歌だ」

母が子に残したもの

創世の歌なんて知らないが、アルやリオンと繋がっているからだろうか。その旋律は自然と心の中から沸き上がって来た。

とてもあたたかな気持ちになれる。声は聞こえずとも、皆の思いが伝わって来たから。

今更、迷うことなどない。今はただ“歌う”だけだ。ルカは頭に浮かんだフレーズを口ずさむ。それは魔歌や喪歌にとてもよく似ていた。

『 無は有に、刹那は永遠に、昼は夜に、天と地は交わり、創世の光は遍く命を照らすだろう。未だ目覚めぬ愛し子よ、夢見る子供たちよ。其の小さき翼で飛び立つことを我らは願う』

『 ルカ、お前には助けられてばかりだな』

『 何今更なこと言ってるの、レイン』

ルカの歌声にアルとリオンの声が重なる。この歌は世界に生きる全ての命に届いていることだろう。アルの想いもリオンの想いも全て頭に流れ込んできた。

助けられてばかりだとアルは言うが、助けられていたのはルカの方。幼い頃、彼がいたから、寂しさに飲み込まれることはなかった。時には父であり、兄であった親友。大切な存在。

彼がいない世界なんていらぬ。アルがいないだけで、ルカの世界は色褪せてしまうだろう。

アルを助け、皆を始竜と言う名の鎖から解き放ちたい。万感の思いを込めて歌い続ける。

『ルカ、ありがとな。あいつの声を聞いてくれて』

『ぼくたちも歌うよ。あの子たちのために』

アルヤリオンの声と共に、イクセとアティの歌声が加わる。ヴァイスファイトの思いは、彼らに伝わったのだろう。イクセの声は普段と同じだったが、ルカは彼が泣いているような気がした。

ヴァイスファイトとイクセの繋がり強い。始竜の器とその魂。彼の最後の思いを受け止めたのは、きつとイクセなのだろう。

アティの歌声は全てを包み込むようで、優しさに満ち溢れていた。ヴァイスファイトと名もなき青年のためにアティは歌う。

『ルカ様、私たちの思いは同じです。ですよね、ゲイル様？』

『分かってるさ、ゼフィ。……ルカ、よくやったな』

ゼフィが言えば、照れくさそうにゲイルが笑う気配がした。そばに居る訳ではないのに、頭を撫でてもらっているような気がする。くすぐったくて、嬉しくて、少しだけ気恥ずかしい。

そこへウイスタリアたちの歌声も重なった。

『始まりの時より続く負の連鎖、ここで断ち切ろうぞ』

『はい、ウイスタリア様』

『自分たちはもう羽ばたくことの出来ぬ小鳥ではない。自らの意思で鎖を断ち切るのだ』

『感謝致します、ルカ様』

興奮を隠し切れないウイスタリアの声に、あくまでも、いつもと変わらないイシュリア。待ちわびたかのようなミラとそ丁寧なフィ。皆の歌声と共に気持ちも伝わって来る。

彼らは檻に囚われた小鳥ではない。鎖を断ち切り、檻を壊してみせよう。アルたちが己の翼で羽ばたけるように。

ルカは泣きそうになりながら、心の中で礼を言う。

『俺たちも手伝うぜ、ルカ』

『君ばかりに背負わせるわけにはいかない』

『私で力になれるなら、いくらでも手伝うわよ』

懐かしい声に、ルカは泣きそうになった。故郷にいるラルフにジエイド、ヘンリエッタが応えてくれたのだ。彼女たちだけではない。エランディアの人々の思いが、歌声が伝わって来る。

ラルフはどこか照れくさそうで、ジエイドの声は凜とした響きに満ちていた。ヘンリエッタの声は穏やかで、母を彷彿させた。

『私たちも忘れないでね』

『こら、リリース』

『俺さまもねー、ルカ君』

忘れないでね、と笑うのはリリースで、少し呆れたような声の主はアーヴィン。リードが笑うと、アイリーの声まで聞こえるではないか。親しい者たちだけでなく、竜たちの歌声もルカの声に重なった。

力が沸いてくる。今ならなんでも出来る気がした。

そう、世界を変えることだって。ルカは力を貸してくれる命たちに礼を言い、最後のフレーズを口にした。

『さあ今、母の手を離れ、羽ばたけ雛鳥。その無垢なる瞳に光を映せ。遙かな声は世界に響き、世界は歌で満たされる。我らの祈りと願い、知るならば、今導きの詩に応えよ』
アルカディア
創世歌』

何と愚かなことをしたのか。エスメラス王はやっと理解出来た。全ては己の愚かさが招いたこと。竜は、彼らは争うべき敵ではない。この世界で共に生きる命だ。

優しく、包みこむような歌を聞きながら王は思う。伝わって来た少年の記憶、想い。彼にとって竜は友人であり家族でもあり、掛け替えのない存在だった。

もう二度とあんな悲劇を繰り返してはならない。あんな悲しく、苦しい戦いは。

王は自らの欲に溺れて、理解しようとしなかった。そしてそれは兵や竜たちも同じらしい。戸惑ったように互いを見つめている。その瞳にこれまでのような敵意はない。

その刹那、兵士たちが上げた感嘆の声に王は我に返った。天から無数の光の羽根がひらひらと落ちて来る。天国というものがあるのなら、こんな感じなのだろうか。

惹かれるように羽根に手を伸ばせば、触れた瞬間に消えてしまう。知らなかった。世界がこんなにも美しいなんて。自分は今まで世界の醜い部分しか見ていなかった。

いや、見ようとしてもしなかったのだ。王は万感の想いを込めて呟く。

「世界はこんなにも美しいのだな」

力が溢れてくる。頭の中に皆の声が響く。それはいつしか大きな声となり、一つの歌となっていた。

創世歌、アルカディア世界の名を冠したそれは、理想郷を生み出した神々が紡ぐ歌。正にこの世界に生きる命たちが紡ぐスヘルアリア魔歌なのかもしれない。

『無は有に、刹那は永遠に、昼は夜に、天と地は交わり、創世の光は遍く命を照らすだろう。未だ目覚めぬ愛し子よ、夢見る子供たちよ。其の小さき翼で飛び立つことを我らは願う。さあ今、母の手を離れ、羽ばたけ雛鳥。その無垢なる瞳に光を映せ。せかい遙かな声は世界に響き、世界は歌で満たされる。我らの祈りと願い、知るならば、今導きの詩に応えよ』
創世歌アルカディア

世界の名を冠した歌。母がかみ子にせかい残したものの。神々が歌に託した思

いがかかった気がした。どんな形であれ、彼らは世界を愛していたのだろう。

でなければ、こんなに優しい歌を子供たちに託しはしないはず。歌い終わった瞬間、ルカを中心に光の輪が広がって行く。まるで世界の全てを包むように。

「これって、羽根？」

ひらひらと空から舞い落ちるのは銀と金の光の羽根だった。

ルカが触れれば、それは光の粒となって消える。雪のように羽根が舞い散る様は幻想的で、ルカは言葉を失い、ただその光景に魅入っていた。

言葉を失っていたのは、人の姿に戻ったアルとリオンも同様である。彼らも驚いたように、銀と金の羽根を見つめていた。

「これで私たちは、忌まわしい鎖から解き放たれたと言うことさ」

アルでもリオンでもない声に、ルカは驚いて振り返る。

佇んでいたのは長身の女性だった。年の頃は二十代前半ほど。紫掛かった艶やかな黒髪を頭の上で纏め、背中に流している。

切れ長の瞳は湖底を思わせるアクアグリーンで、肌は抜けるように白く、一点の染みすら見つけられない。

くびれた腰にすらりと伸びた肢体、抜群のプロポーションはリリースを思わせる。

冒険者のような動き易い黒の服と、同色のパンツ。武器は携えていないようだが、彼女が纏う雰囲気はイクセによく似ていた。

例えるのなら雄々しく、そして麗しい戦女神のよう。

「あなたは……」

初めて会ったはずなのに、どこか懐かしい。そう、彼女はアルに似ているのだ。芸術品のような美しさや魔力、と云えばいいだろうか。

呆けたように彼女を見ていたルカは、我に返って言葉を紡ぐ。

ここはまだ暁闇の、ヴァイスファイトが作り出した空間。普通の竜や人間が、足を踏み入れる場所ではない。そう考えると、彼女もまたアルの同胞はらからなのだろう。

「紫雷……」

「初めましてだな。私は始竜が一柱、与えられた名は紫雷の君、エクレール。ミスラ。レミエールさ」

驚くりオンとアルの呟きに代わり、彼女が微笑む。

女性は歌うように自らの名を口にした。始竜が一柱、エクレール。ミスラ。レミエールと。エクレールと名乗った彼女に向け、リオンがよつと手を上げてみせる。

エクレールは眠りについていとされる最後の一柱。

「はよ、ミスラ」

「流石にあんな歌を聞かされれば目も覚める。で、その少年がレインの半身か？」

「あ……ルカ・エアハートです」

エクレールの視線はアルとリオンに向いた後、再びルカに移る。

じつと見つめられ、上ずった声が出た。アルたちのお陰で美形は見慣れているが、やはり緊張してしまう。そんなルカを見て、彼女は声を上げて笑った。

「いや、面白い。退屈せずとも済みそうだ」

言いながらエクレールが、アルが、リオンが空を仰ぐ。逆光でよく見えないが、舞い落ちる羽根の中に光の球体のようなものが見えた。太陽のように光輝くそれは、まるで卵のよう。

その刹那、光が弾け、枯れた大地が蘇る。荒れ果てた大地には草花が生い茂り、吹き付けていた渴いた風は、柔らかな緑の匂いを運んで来た。創世の歌の影響だろうか。

「すごい……」

信じられない光景に、ただただ驚くことしか出来ない。球体はぱきん、と破砕音を響かせて地面に触れると、溶けるように消える。

球体が消えた後に佇む人物。

その人物を見た瞬間、ルカは溢れ出る涙を抑えることが出来なかった。

母が子に残したもの（後書き）

明日の更新で本編は終了となります。

美しきアルカディア

「ルー……ア？」

光の球が現れたのは整った顔立ちをした十代前半ほどの少年。愛らしいとも言えるだろう。夜明けの空を思わせる橙掛かった金色の髪に、美しい瑠璃の瞳。失ったはずの彼がそこにいた。

違うのは髪の色くらいだろう。ルーアは飴色の髪をしていたが、目の前にいる少年は、夜明け空を思わせる橙掛かった金色。

これは夢ではないのだろうか。今もまだ信じられない。手に残っているルーアの感触。彼は確かに、この手の中で命を終えた。忘れたくても忘れられない。

では目の前にいるルーアそっくりの少年は誰なのだろう。戸惑うルカに、竜の三人は黙って彼を見つめている。

「私はルーアハと名付けられた人造竜兵を核として、この世界に生きる者たちの思いより生まれし、新たな始まりの竜。名は暁天の君、ルーアハ＝メシア＝ラズライト。明けない夜はない。夜明けを齎してくれたこと、礼を言う。これで始竜が世界に縛られることはなくなり、人と竜の行動で世界のバランスが崩れることもない」

どこか淡々とした声音で少年は言った。

ルーアを核として人々の思いより生まれた新たな始まりの竜。名は暁闇ではなく、暁天。顔は同じなのに、ルーアよりも低い声から別人であるかのよう。

いや、彼の言葉を借りるのなら、彼はルカたちの知っているルーアではないのかもしれない。

ルカが口を開きかけた時、強い風が吹き、花弁を舞い上げる。

何かが変わった。雰囲気と言えればいいだろうか。少年の顔が大人

びた表情から照れ臭そうな笑顔に変わる。

「……ただいま、ルカ兄、アル、リオン兄」

それは正しく、ルカの記憶の中に残るルーアの笑顔と声だった。ルカは考える前に地面を蹴り、一杯ルーアを抱きしめる。

触れた体は暖かい。この体温が嬉しかった。それは一度はなくしてしまった暖かさ。嬉しくて泣きそうになる。どうしてだとか考える余裕などない。ただ彼が帰ってきてくれたことが嬉しかった。

「ルーア……ルーア、今も信じられない。嘘みたいだよ」

ルカはルーアの変わってしまった金色の髪を撫でる。夢ではないことを確かめるように、何度も何度も。

触れてしまえば、幻のように消えてしまいそうで怖かった。あの時のようにまた失うかと思えば、とても耐えられない。

けれど、ルーアは消えず、腕の中にいた。

「ごめんね。泣かないでルカ兄。僕は本当に一度死んだんだ。けど、優しい歌が聞こえたから。僕はもう一度生まれた。始まりの竜、暁天の君として。……リオン兄、苦しいよ！ アルも子供扱いしないでってば」

「驚いた。夢みたいだな」

ルーアを抱きしめるルカごと腕の中に包みこむリオンに、アルは無言で微笑み、ルーアの頭を撫でる。エクレールはそんな三人を少し離れた場所から呆れたような、だが優しい表情で見つめていた。本当に夢のようだ。これも創世の歌の力なのだろうか。ルーアは一度死に、もう一度生まれた。人に作られた人造竜兵ドラケンではなく、世

界を支える柱　始竜、暁天の君として。

ヴァイスファイトが願った『夜明け』を司る者。

「おい、ルカ、アル！」

「走るな、みつともないではないか」

「まあまあ、ウイスタリア。怒るのもそれくらいでいいのではありませんか？」

「ほつとけ、ゼフィ。つたく、ガキどもが喧嘩してんじゃねえよ」

「ゲイル殿も主を煽らないで頂きたい」

「疲れる……」

「きみはまだ目覚めたばかりだからだよ、ミラ」

騒がしい声に振り返れば、そこには仲間たちがいた。

おい、と手を振るイクセに眉を潜めるウイスタリア。そんな二人を宥めようとするゼフィに、構うなと言うゲイル。

ゲイルを窘めるイシュリアに、ミラは疲れたと若干辟易した様子だ。

アティはあまりにその態度と外見が一致しないミラを励ましている。フィーはどうしていいか分からず、ぱたぱたと翼を羽ばたかせていた。

「みんな！」

「つてルーア！　お前、なんで……」

ルーアを見た皆の表情が驚愕に変わる。イクセは盛大に驚き、あのゲイルでさえ、目を白黒させているではないか。ただ、始まりの竜たちは、どこか納得したような顔をしていた。

ルーアもまた始竜なのなら、彼らもどこかでルーアの胎動を感じていたのかもしれない。ウイスタリアがミラの力を感じたように。駆け寄って来たイクセが乱暴にルーアの髪を撫で、アティがぎゅっと彼を抱きしめる。揉みくちやになっているルーアは困ったような顔をしているが、やはり嬉しそうだ。

エクレールもちやつかりその輪の中に加わり、同胞たちを驚かせている。

ルーアとはしゃぐ仲間たちから少しだけ距離を取ったルカは、隣のアルを見上げる。これは創世の歌を歌った時から思っていたこと。

「……ねえ、アル。俺、思うんだ」

「なんだ？」

「この世界を作り出した神々は、俺たちのことを何よりも思ってくれてたんだと思う。親が手を差し延べれば、いつまでたっても一人で飛べない。俺たちを思うからこそ、きっと自分の力で羽ばたいて欲しかったんじゃないかな」

全部ルカの推測でしかないし、矮小な人間ごときが神の思いを慮るなんて、凶々しいのかもしれない。それでも創世の歌を歌った時に感じたのだ。

『其の小さき翼で飛び立つことを我らは願う。さあ今、母の手を離れ、羽ばたけ雛鳥』

それはきつと、母から愛しい子に向けられた言葉。小さい翼だっ

ていい。己の翼で羽ばたけと。

母が力を貸してしまえば、いつまでたっても子は自分の足で立つことは出来ないだろう。愛しい子であるから、神々はこの世界から姿を消した。それに、

「どうでもいいなら、アルたちに創世の歌を残したりしないよ」

「……そうかもしれないな」

この世界を去る前に、神はアルたちに希望を残した。それが創世の歌。子供たちが自らの意思で世界と向き合い、歩き出せるように。アルにも自分たちを生み出した者たちの意図など分からないが、ルカが言うのなら、そうなのだろう。

アルは小さく微笑むと、掛け替えのない親友であり、家族である少年の頭を撫でる。

自分はこれからも彼の魂に寄り添って生きていく。空よりも青く、海よりも透き通った美しい魂を持つ少年と。いつかきつと別れるときは来だろう。

けれど、その時まで一分一秒でいい、ルカとの時間を噛み締めて生きていきたい。

もうアルは自由なのだ。両翼を縛る鎖はもうない。どこへだって自由に飛んで行ける。

「ルカとアルもこっちに来いよ。で、これからどうするんだ？」

「僕、ルカ兄の故郷を見てみたい！」

「ぼくも興味あるな」

手招きをするイクセに、はい、と手を上げて意見を出すルーア。アティもにつこりと笑って二人を見つめている。そう言えば、一度ルーアにエランディアの話をしたことがある。その時も行ってみたいと言っていたが、まさか今、この話題が出るとは思わなかった。

「オレも久しぶりに行きたいかも」

「我らも見てみたいものだな、イシュリア」

「はい、ウイスタリアさま」

「えっ、ええ！ ちょ、いきなり、そんな……」

ルーアやアティだけではない。リオンとウイスタリア、イシュリアもうんうんと頷いている。まさか全員で押しかけるつもりなのだろうか。

口々にルカの故郷であるエランディアを見てみたいと言い始める仲間たちに、ルカは慌ててアルとゲイルを見上げる。どうにかして欲しいとの気持ちを込めて。

「いいんじゃないか？ 故郷はいいもんだぞ」

「それをお前が言うか、ゲイル？」

故郷はいいもんだぞ、と得意げに言うゲイルを睨むアル。何せ、この父親は滅多にエランディアに帰らなかったのだ。仕事など理由にならない。

アルの言いようにゲイルも腹が立ったのだろう。二人は早速、睨み合いを始めてしまう。

リオンやアティ、エクレールも加えた仲間たちは、そんな二人などそっちのけで、ルカの故郷の話に花を咲かしているではないか。

「はあ、もう……。ほら、行こうよ、アル、ルーアも。父さんも大げないんだから」

ルカは腰に両手を当てた後、アルとルーアの手を取って走り出す。背後からイクセヤリオンの声が聞こえるが振り向かない。

アルに出会えてよかったとルカは思う。彼に出会えたから、イクセヤルーア、仲間たちと巡り会うことが出来た。掛け替えのないものを手に入れた。

改めて口に出すのは恥ずかしくて、ありがとう、と心の中でアルに礼を言う。

(アルと出会えてよかった)

「どうした、ルカ？」

声に出した訳ではないのに、アルは何かを感じたらしい。ルカはアルに気付かれないよう笑い、ううん、と首を振って空を仰ぐ。

青く澄み渡る空はどこまでも続いている。ルカの幻聴かもしれない。ありがとう、とヴァイスファイトと名も無き“彼”の音が聞こえたような気がした。

これから本当の意味で、世界は、自分たちは己の翼で羽ばたいて行かねばならない。

楽しいことばかりではないだろう。翼が傷付き、くじけそうになることもある。前に進みたくないとして全てを拒絶したくなることだってあるかもしれない。

人と竜が本当の意味で、手を取り合って生きて行けるかどうか

分からない。誰も未来のことなんて分からないのだ。

けれど、どんなに傷ついて、雨に打たれても、己の翼で羽ばた
くことを諦めたりはしない。人と竜は、世界はきつと大丈夫。
だって、この世界は理想郷アルカディアなんだから。

了

美しきアルカディア（後書き）

これにて本編終了です。ご愛読ありがとうございました！本編はこれで終わりですが、次からは番外編を更新して行きたいと思います。

黒耀玖歌（前書き）

本文にはネタバレが含まれます。本編読了後にご覧下さい。

黒耀玖歌

『そこ』は一切の光さえ差さぬ闇。気がついた時、イクセは己すら見えぬ闇の中にいた。

何も見えない。光さえなく、この空間が広いかどうかも分からない。唯一分かるのは、この闇がイクセの夢だということだけ。

しかし夢であっても、目覚める方法など見当もつかなかった。ふう、とため息をついた時、唐突に感じた気配に身構える。が、夢であるために腰に剣はない。思わず舌打ちをしかけるが、

「案ずるな、イクセル。我が半身であつたはずの者よ」

「お前は……」

イクセの前に現れた人物。声の主を見たイクセは言葉を失う。

目の前にいたのは一人の青年だった。恐らくは二十歳前後だろうか。黒曜石を思わせる艶やかな黒髪に、切れ長の瞳は異国の神話で美少女の化身とされるアメジストと同じ輝きを湛えている。

抜けるように白い肌には一点の染みもなく、纏う黒の外套のせいか浮かび上がるように見えた。

そして何より驚くべきことは、目の前の青年はイクセと瓜二つであること。違うところを見つけるほうが難しい。艶やかな黒髪も美しい紫水晶の瞳も、整った顔立ちも。全て。

まるで鏡の前に立っているような、あるいは双子であるかのような錯覚を起こしてしまいそうだ。

そう、忘れるはずがない。彼の名はヴァイスファイト「グラフ」ノスフェラート。かつて暁闇の君とされた始竜であり、ある意味ではイクセであつた存在である。

「それで、何の用だ？」

イクセは油断なくヴァイスファイトを見据える。いくら夢の中とは言え、冗談にしては笑えない。これはただの夢に違いない。彼はもう消えてしまったのだ。その魂も輪廻の輪に戻ることなく消滅した。自らの願いを叶えるために、守るべきものから背を向けた彼。始竜としては許されないことだった。それでも彼は己の心に従い、それを実行した。全ては同胞を、親友を始竜という名の鎖から解き放ち、世界と名付けられた鳥籠を壊すため。

イクセ自身、彼と二人きりで言葉を交わしたことがない。ヴァイスファイトの想いを感じてはいたが、未だ彼の前では平静を保つことが難しかった。

「何の用、か。我はただ最後にお前と話をしたかっただけだ。厳密にいうなれば今、お前の前に居る我は我ではない。残留思念のようなもの。こうして夢という形をとって話ができるのは、お前が始竜として生まれるはずだった存在であり、我と繋がっているからだ」

「話、だと？ あんなことをしておいて、今さら話すことなんて俺にはないね」

彼はヴァイスファイト自身ではなく、残留思念だという。

話をしたい、そう言われてもイクセから話すことなどないに等しい。彼が何を思い、あんな強行な手段を用いたのか、イクセ自身は何も知らないのだ。イクセはヴァイスファイトではないのだ。彼を完全に理解することなんて出来ないのだから。

「……だろうな。我はただ同胞^{はいから}たちを救いたかっただけ。例え何を犠牲にしても、鎖を断ち切りたかった。己を正当化するつもりなど

毛頭ない。この魂は歪んでしまった。器を持たぬ魂は、輪廻の輪へと還ることなく消える定めにある。それでも、先に待つ運命を知っていても、我はこの選択をした。それを後悔することなどないだろう」

「お前……」

淡々と語る彼の瞳は深い憂いを帯びている。いつかイクセが見た『ヴァイスファイト』とはとても同一人物とは思えない。

どちらが本当の彼なのか。あるいはどちらも彼が持つ側面にしか過ぎないのか。

ヴァイスファイトはリオンに最も近き者であったという。彼が世界という鎖から解き放ちたかったのはリオンなのだろう。勿論、他の同胞たちもそうだろうが、イクセにはそう思えてならない。

始童として禁忌を犯し、その魂すら無明の闇へと消える。全てを覚悟してまで選んだ道。彼は誰よりも『人間』らしい童なのかもしれない。

「お前が助けたかったのはリオンだろ？」

「リオン……ヴァーミリオン。我が友、唯一無二の存在。そうだ。我はあれを助けたかった。世界という鳥籠から解き放ちたかった。どんな罪を犯しても、あれを悲しませることになろうとも」

柔らかく微笑む彼は一瞬だけ、痛みを堪えるような表情をした。ただ一つの存在のために世界すら、同胞すら、そしてそのリオンにさえ背を向けた彼。

ヴァイスファイトの思いにイクセは言葉を失い、ただ目の前の青年を見つめることしか出来ない。そこで沸き上がってくる一つの思い。

許せなかった。ヴァイスファイトはもっともリオンの近しい存在だったのだという。ならばどうして分からない。リオンの望みを。

「……して。どうしてだ。分かっているのなら、何故そばにいてやらなかった。何故あいつの手で殺されることを望んだ!? 答える! ヴァイスファイト!! グラフ!! ノスフェラート!!」

瞳に苛烈な光を宿したイクセはヴァイスファイトを睨みつける。リオンと己を重ねてしまった。かつて両親はイクセを残して自ら死を選んだ。

何故、どうして。残されたイクセは自問し続けていた。二人がいれば何もいらなかったのに。どうしてそばにいてくれなかったのかと。そしてヴァイスファイトも。

分かっているのなら、どうしてリオンのそばにいてやらなかった。リオンは始竜という鎖から解き放たれるより、親友の方が大事であったはず。それなのに、彼はリオンの手で己を殺させた。それがどれだけリオンを傷つけるか分かっていたいながら。

卑怯だとなじるイクセに、ヴァイスファイトはしばしの沈黙の後、そうだな、と答えた。

「分かっていたさ。それでも望んでしまった。あれの罪も罰も全て我が背負う。……本当は泣かせたくはなかったのだがな」

「ヴァイスファイト……」

「やっと我の名を呼んだな、イクセル。一つだけ頼まれてくれるか? あやつに、リオンに伝えてくれ。我は」

「分かった。必ず伝える」

ヴァイスファイトの伝言を聞いたイクセは静かに頷いた。彼の選択は決して許されるものではない。どんな理由があろうとも。

けれど彼の思いを否定することもまた出来ないのだ。必ず伝える、イクセが約束すると、ヴァイスファイトは心からの笑みを浮かべた。同じ顔であるはずなのに見惚れてしまう。これが彼本来の笑顔なのだろう。

「礼を言う。イクセル。そしてすまなかった。愛しい子らに辛い思いをさせて。許してくれとは言わん。だが我もまた救われたのだ。空よりも海よりも青く鮮やかな魂を持つ少年に」

紫水晶の瞳はどこまでも澄んでいて、一切の曇りも無い。

ありがとう、とヴァイスファイトは最後に感謝の言葉を述べ、イクセから背を向ける。イクセは最後に彼に寄り添う炎のような光を見た気がした。

黒耀玖歌（後書き）

ヴァイスは本編よりかなり多弁になってますね。本編では真意を見せることの少なかった彼ですが、リオンは唯一無二の存在だったと語っています。

本編では結局、イクセとヴァイスが二人きりで話す場面がなかったので、番外編で書かせて頂きました。

ヴァイスがかなり素直になっております。何にも縛られることがなくなっただけでしょう。

もう怖くない(前書き)

リオンがヴァイスファイトについて考える話。最低でも本編の六章
読了推奨です。

もう怖くない

例えば、の話を考え始めればきりがないのだろう。それはリオンの理解している。

しかし、どうしても考えてしまうのだ。かつて傍らに在った存在。そして今は何よりも遠くなってしまった彼のこと。

皆が寝静まった頃、リオンは宿屋の屋根の上にいた。そこにはリオンを除いて誰の姿もない。夜空に輝く黄金の月だけが眠りに付いた街を優しく照らしている。

ヴァーミリオン・フレイア・フィークスは気の遠くなるほどの時を生きてきた。始竜の中でアルを除き、一番の年長者であるリオンは、この世界の美しいものも、汚いものも知っている。

かつて美しい、人と竜の理想郷であった世界はこんなにも変わってしまった。世界は今もマナは溢れているが、やはり創世期と同じにはいかない。

リオンが虚空を掴むような動作をすれば、手のひらの中で螢火のような光が舞い踊る。力を使い、本来なら不可視であるはずのマナを具現化したのだ。

それも空に昇ると、一瞬にして掻き消える。遙か昔、まだ人と竜が本当の意味で共に生きていた頃は、世界はマナに満ち溢れていた。マナはこの世界の生命力そのもの。それを知るのは始まりの時よ。り生きるアルと、初代の記憶を継いだリオンら始竜だけ。魔歌や喪歌を使えばマナは還元され、再び世界へと帰る。

『彼』のことを考えていたせい、センチメンタルになっていたのかも。かもしれない。

その時、かたん、と小さな音がした。

気配のする方を振り向けば、そこには一匹の猫がいる。闇に溶けるような漆黒の体毛に、紫紺の瞳。そう、その猫は今正にリオンが考えていた『彼』を驚くほど彷彿させた。

野良猫なのだろう。首に鈴や首輪は見つけられない。その猫はリオンに怯えることなく近寄ってくる、ちよこんと彼の前に座った。リオンは猫の顎を撫でてやると気持ちいいのか、ごろごろと喉を鳴らす。

「よしよし、どこの子だ？」

気持ち良さそうに目を細める猫を、リオンは新鮮な目で見つめていた。

リオンは竜だ。それも始竜。いくら人の形を取っていても、彼ら獣は無意識に自分より上位の存在だと分かるのだろう。獅子や虎でさえ、始竜には近寄らない。分からないのは気配に疎い人くらいだ。

「じゃあ、お前。ちょっと見とけよ？」

リオンが軽く手を握ると、そこにはいつの間にか一枚のコインが握られていた。

彼はそれを右手の間接と付け根を使い、人差し指、中指、薬指、小指と順に手の甲で転がすと、今度はそれを左手でもやってみせた。定みのない滑らかな手の動きは流石と言えるだろう。

コインロールと言って、手品を生業とする者の間ではお馴染みのフラリツシュ（現象を華やかに見せたり、演者の技術をアピールするための補助的な手段）だ。

それほど難しいものではないが、胸を張ってコインロールと言えるには慣れが必要になる。

リオンは簡単にやっているが、それは彼の努力ゆえの結果なのだ。それを見ていた猫が嬉しそうに一声鳴いた。

「じゃあ」

「気に入ったか？ リオン様の實力をもつてすれば造作もないけどな」

すると猫は何を思ったのか、もう一度だけにゃあ、と鳴くとリオンのそばを離れて屋根を飛び移っていった。月明かりがあるとは言え、真っ黒な毛並みのせいもあり、猫の姿はすぐに見えなくなる。

「行っただか……」

観客をなくしたマジシャンは指でコインを弄びながら空を仰いだ。闇を溶かしたような夜空に、ほんのりと輝く銀の星々。いくら手を伸ばしても、星は掴めない。こんなに近くに見えるというのにそれも錯覚で、どんなに焦がれても星を掴むことは出来ない。

まるで自分と彼のようだと思う。かつて傍らに在った存在はいつも喜んで、リオンの奇術の観客となってくれた。リオンは最も人に近い始竜である。

多くの始竜が自らが作り出した空間に留まる中、人の姿をとっては地上に降りていたのだ。奇術もその時に覚えた。

『また考え事か？』

聞き慣れた声に振り返れば、銀色の小さな竜の姿があった。それは勿論、アルである。

また、というのはこの間、奇術に興奮したゼフィに危うく殺されそうになったあの夜のことだ。あの時もリオンは屋根に上って空を仰いでいた。

「考え事、か。どうだろうな。……なあ、レイン。人はさ、どうしようもなく愚かで汚いけど、オレは好きだな。考えてみるよ。竜は人の何倍以上も生きるのに、こういう娯楽はさっぱりだからさ」

「こういう娯楽、というのは奇術のことである。それだけではない。劇や本、占いもそうだが、人間たちが生み出したものは始竜である。リオンをも唸らせた。」

「竜は人の何倍以上も生きるのに、てんで駄目だ。山に引きこもっているだけではないか。」

「それは刹那を生きる人と悠久の時を生きる竜の考え方の違いなのかもしれないが。」

『しかし人は良きものも変えてしまっ、歪めてしまっ』

「そう。奇術も人を喜ばせ、笑わせるためにあって、人を悲しませるある訳じゃない」

「それはきつと真理なのだろう。奇術に限らず、様々なものは使い手によって如何様にも変化する。奇術で培われた巧みな話術や指捌き、そして竜の喪歌をもとにした魔歌も。」

「奇術も魔歌も人を喜ばせるためにあるのであって、傷付け奪うためにあるのではない。」

「しかしながら残念なことに、それが分からない畜生共もいるわけだ。人は良いものへと変えるかもしれないが、その逆もまたしかり。」

『だからあやつは私たちに背を向けたのだろうか……』

「さて、どうだろうな。……オレにはもう分かんない」

ヴァイスファイト「グラフィック」ノスフェライト。かつて暁闇の君と呼ばれていた始まりの竜。……リオンの親友。アルにはもう、リオンの考え事などお見通しなのだろう。

リオンの痛みを本当の意味で理解出来るのはアルしかない。ヴァイスファイトを知り、千年前の経緯を知る彼にしか。

こんなことでは駄目だとリオンだって分かっているのに、心はぐちゃぐちゃに掻き乱されたまま。猫を見て、彼だと思っるのは流石に重症だ。

『迷うなどは言わないが、やるべきことは分かっているな？』

「勿論。オレたちはオレたちである前に、始竜なんだからな」

アルの言葉は正しい。リオンもアルもアティやウイスタリア、ゼフィですら、個である前に始まりの竜なのだ。己の感情を押し殺し、世界を見守る存在。

リオンはそれを分かっている。アルも全てを理解した上で、あえて釘を刺したのだ。やはりこの竜はリオンなどよりずっと強い。自分たちが迷わぬように進んで憎まれ役を買ってくれている。

「さっすが、レイン。いつもぶれないねえ。リオン感心しちゃう」

『……真面目に答えた私が悪かった。私ももう寝る。お前もいい加減眠れ』

感心しちゃう、と碎けた声音に戻ったりオンを半眼で睨み付け、アルは部屋へと戻っていった。そんな彼を見送った後、リオンは再び空を見上げる。どんなに手を伸ばしても、星には届かない。

だが届くものがあるではないか。ルカやアルを始めとした仲間たち。決して届かぬ存在ではない。彼らはリオンの傍らにいてくれる。

だから、

「……もう怖くないな」

手の中にあつたコインを一瞬で消し、リオンはふわりは笑う。今日は久しぶりに熟睡出来るような気がした。

司教石歌（前書き）

ネタバレが含まれます。本編読了後にご覧下さい。

司教石歌

何も見えない、感じない。

ヴァイスファイトはそんな場所にいた。天と地の境さえ分ならず、感覚もないため、自分が立っているのかすら分からない。正に“無”。

歪んでしまったこの魂はアルカディアに生きる全ての魂たちが帰る場所　輪廻の輪に戻ることは出来ない。

つまり“此処”は那由多なゆたの果てなのだろうか。それすらもヴァイスファイトには分からない。何も。もう考えなくてもいいのだ。後はただ消えるだけ。ゆっくりと瞳を閉じたその時、

『ヴァイス、ヴァイスファイト』

誰かがヴァイスファイトの名を呼んだ。自分以外誰もいないはずなのに、その声は確かに届いた。耳ではなく、ヴァイスファイトの魂に。

ぼんやりと浮かび上がった青光の球体。光が弾ける。

恐る恐る瞼を上げた彼は言葉を失った。目の前に佇む人物には見えがありすぎたから。闇の中でも光を放つ髪は、海とも空とも違う不思議な色合いで、宝石よりも美しい瞳は夕暮れを写し取ったかのよう。

肌は陶磁器のように白く滑らかで、染みすら見つけられない。中性的で整った顔立ちには男にも女にも見えるが、“彼”が男であることはヴァイスファイトも知っている。何故なら、彼は、

「ルカ・エアハート……」

佇む少年は、ドラグナー声を聞く者であり、始竜たちの希望　ルカ・エア

ハートだった。

しかし生命力溢れ、きらきらと輝く瞳が今は湖面の様な穏やかさを湛えている。顔の造形は確かにルカと同じであるはずなのに、随分と大人びて見えた。まるでルカ、という姿形を誰かが借りているようで。

戸惑うヴァイスファイトに少年は言う。

『私は神と呼ばれし存在。かつてお前達の元となった始竜たちを生み出した者。今はお前と話すためにこの少年の姿を借りているだけだ』

「神……」

ルカの姿、声をした少年は自らを神と名乗り、一時的に彼の姿を借りているという。にわかには信じられないが、ヴァイスファイトは少年の言葉を否定することも出来なかった。

初代から受け継ぐ記憶の中にも創造主に関するものは殆ど無い。だから彼が本当に『神』なのかどうかは分からない。なのに何故か懐かしさが込み上げて来る。

母を前にしているかのように。

「ここは闇なのか？」

『闇とは少し違う。ここはお前の魂の内』

「魂の内？ 何故？」

彼が言うように、ここがヴァイスファイトの魂の内ならば、何故少年は自分に語りかけてきたのだろう。この魂はもはや輪廻の輪に還ることも出来ないというのに。

今更、話をしたところで何かが変わる訳ではない。『ヴァイスファイト』が犯した罪は重い。多くの竜を屠り、蒼穹の眷属まで手に掛けた。後悔はしていなかったが、決して許されてはならないのだ。

『私はお前を導くために来た。ヴァイスファイト、お前が帰るべき場所は別にある』

「帰るべき場所などあるはずがない。後はただ消え去るのみ」

歪んだ魂に還る場所など無い。この魂は朽ちて消え逝くことだろう。それが罪を犯した自分に対する罰であるはず。悲しいとも恐いとも感じなかった。当然の報いだ。一瞬だけ炎の色が脳裏を掠めたが、気づかないふりをする。彼に背を向けても構わなかった。それで彼を救えるのなら。

自らに言い聞かせるよう呟くヴァイスファイトに、少年は静かに首を横に振った。

『暁闇の名を与えし愛し子。お前が全てを背負うことはない。誰よりも人に近しき子よ、帰るがいい。お前がいるべき場所へ、お前を待つ者のところへ。案ずることはない。あの者の魂も輪廻の輪へと還った。今は深い眠りにについていることだろう。さあ、お帰り、ヴァイス』

慈愛の笑みを浮かべて少年は言った。本当に許されていいのだろうか。罪を犯したというのに。

ヴァイスファイトの迷いを察したのだろう。彼は『ルカ』を思わせる太陽のような笑みを作った。

あの者、とはヴァイスファイトが肉体を借り受けていた青年のことに違いない。消える直前、彼は地獄でも何でも付き合うといってくれた。

だが彼もまた許されたのだ。愛おしげに名を呼ばれ、意識が遠く
なっていく。やがて視界を白い闇が満たした。

ヴァーミリオンⅡフレイアⅡフィーニクスは、銀の宝石が瞬く夜
空を眺めていた。いつの間にか日課となった天体観測。黒色の宝石
箱には色とりどりの宝石が散りばめられている。銀や赤、青。その
中で一際強い光を放つのは、やはり金の女王だろう。夜を司る彼女
は夜神ノティスの化身と伝えられていた。

毎日眺めても飽きることはない。彼らが見せる顔は日によって驚
くほど違う。

この星々はアルカディアの全てを見守り、またこれからもずっと
見守り続けるのだろう。何十年後も、何百年後も。リオンが世界に
還ってからも。

視線を空から屋根の上へと移す。そろそろ小さな友人がやってく
る頃だろう。優しい風に身を委ねながら髪を掻き上げた。

リオンの耳がぴくりと動く。耳に入ったのは待ちわびた友人の足
音。そしてにゃあ、と小さな鳴き声が聞こえた。リオンは満面の笑
みで親友を迎えると、小さな存在を腕の中に包み込んだ。

「いっしょにしゃい、
ヴィオ」

司教石歌（後書き）

司教石、というのはアメジストを指すらしいです。アメジストはヴ
アイスのイメージストーンのようなものなので、タイトルはそちら
から。

リオンが待ちわびていた友人は勿論、彼です。

アテイのキケンな？クツキング（前書き）

第七章読了推奨です。

アティのキケンな？クッキング

アティの料理を見た十人中十人がゲテ物、あるいは生物だと言うだろう。それは比喻ではなく、正にその通りなのだ。

イスラフィール「アティス」アマルティアは上機嫌でオーブンを見つめていた。銀掛かった輝くばかりの金髪に、アーモンド型の瞳は金を散らした美しい琥珀。

その顔立ちはどこからどう見ても女性にしか見えぬ、神話に語られる女神より美しい。ひらひらとした袖をまくり上げ、レースとフリルがついたエプロンを纏うその姿。世の中の男たちが見れば狂喜乱舞するに違いない。

同じく宿に泊まっている仲間たちは皆、思い思いに休日をごっこしていた。

イクセは部屋で剣の手入れ、ルーアは買ってもらった本を読んでいる。その本というのも絵本や娯楽小説ではなく、アティにはよく分からない専門書である。

ルカとアル、リオンはと言えば散歩、というか街に散歩に出ている。アティも部屋にいて、適当に暇を潰しても良かったのだが、ゼフィに触発されて料理をすることにしたのだ。

そういえばこうしてお菓子作りをするのも随分久しぶりである。自分では全く分からないのだが、とにかくアティが作る料理は見た目が悪いらしい。

ちなみに今作っているのはアップルパイ。アティが厨房を使いたいというと、宿屋の主人は二つ返事で了承してくれた。少々鼻の下が伸びていた気もするが。

そろそろ頃合いだろう。オーブンから良い香りが漂ってくる。

オーブンを開け、焼け具合を確認したアティはパイを取り出して

簡単に切り分けた。

そして借りていたエプロンを外し、仲間達のもとへと向かう。どうやらルカたちも街から帰ってきたらしい。部屋から皆の声が聞こえる。

「みんな、アップルパイ焼いたんだけど、食べる？」

扉を開けて微笑む。振り向いた仲間達はアルとリオンを除いて文字通り、固まった。

それもそうだろう。アテイが持つ皿の上には物体X（仮称）が乗っている。

アップルパイの面影は欠片もない、一ミクロンもない。いや、むしろそれは食べ物なのだろうか。アップルパイと言えば普通、さくさくのパイ生地にリンゴのほずである。

しかし目の前の物体にはパイもリンゴも見当たらなかった。

「……いつものことだが、これは一種の才能だな」

「それ言うなら芸術じゃない？」

皿の上に乗った物体X（仮称）を見て、アルが呆れ気味に言い、リオンは苦笑する。

アテイが言うには『アップルパイ』だそうだが、皿の上の物体は生きているかのように怪しく蠢いていた。おまけに湯気とは思えない白煙が上がっているではないか。

「これ、あれか。一種の魔物か？」

「イクセ、魔、魔物は言い過ぎだよ」

剣の手入れをしていたイクセの顔が歪む。言い過ぎだと言いながらも、ルカの顔もひきつっていた。

魔物の例えはあれだが、確かに怪しい物体には違いない。うごうごと蠢く姿、正に生物の如く。一体どこでどう間違ったらアップルパイが“これ”になるのだろうか。

アルとリオンはアティの壊滅的な料理の腕前を知っていたのか。呆れた顔をして驚く様子はない。ならば止めて欲しいと思うのは、ルカたちだけだろうか。

「えっと、こ、個性的だよね、ルカ兄」

「う、うん」

ルーアがどうにか褒めようとするが、褒めるにも言葉に困る。これを作ったのがアティでなければ、ルカやルーアもこれほどまでに気を遣うことはなかっただろう。

食べて、とばかりに満面の笑みを浮かべているアティを、出来れば悲しませたくない。

「みんな、食べてくれるよね？」

「は？ んな物食える訳……」

食べて、と小首を傾げるアティ。その仕草は非常に愛らしいのだが、持った皿の上の物体だけが何かおかしい。イクセがやってられないとばかりに立ち上がりかけるが、

「ま、食べてみなって。イクセも文句言う前に、ぽーいっと」

リオンが皿から暗黒物質を一掴み手に取ると、楽しげにイクセの

口に放り込んだ。

ルカとルーアはリオンのあまりの暴挙に固まっている。アルはと言えバリオンを咎める様子もなかった。

立ち上がるうとした格好のまま、イクセは微動だにしない。思わずルカが、イ、イクセ……？ と恐る恐る声を掛ける。もしかして目を開けたまま、気絶しているということはないだろうか。

しかし次にイクセから出た言葉にルカとルーアは驚くしかなかった。

「……う、美味しい」

「う、美味しい……の？」

イクセもアティのパイを食べて遂に頭が可笑しくなったのだろうか。ルカとルーアが憐れむような視線をイクセに向ける。

何せあの物体Xだ。蠢いている上に、アップルパイのAの字もないではないか。

「そんな可哀想なものを見るような目で見るなって！」

「だって……」

「ねえ？」

腐敗臭はしないが、見た目は正直、それに類するものである。

イクセが失礼な、と声を上げてモルカたちは顔を見合わせているではないか。

ちなみにアティはと言うと相変わらずにこにここと笑いながら皿を持っているし、リオンはベッドの上で笑い転げ、アルは必死で笑いを堪えている。あの滅多に表情を変えないアルがだ。

相当おかしかったのだろう。イクセにしてみれば失礼以外の何物でもないが。

「あははは！ おかしすぎ！ 涙出ちゃうわ。……まあまあ、あんまりイクセを苛めないように。これ、見た目はナンだけど美味しいよ?」

「言っておくが、こいつやイクセルが味音痴と言っわけではないぞ」

笑い過ぎて出た涙を拭いながらリオンがこてん、と首を傾ける。そこにアルも同意するのだから、二人が嘘をついている訳でも、味音痴という訳でもないのだろう。それに、もしあのアップルパイが人に有害なら、アルは真っ先に教えてくれるはず。では本当にあの凶悪物質が美味しいのだろうか。

「えーっと、本当に」

「ああ」

ルカが尋ねても、アルはうつすらと笑みを浮かべて頷くだけだ。アティはと召し上げられ、と言って皿を差し出す始末。アティだからこそ尚更たちが悪い。

「どうしよう、ルーア……」

「覚悟決めるしかないよ、ルカ兄」

ルーアもルカも、目の前の物体Xとしか言い様のないアップルパイ（仮）を見つめることしか出来ない。

二人は視線を逸らせぬまま、ごくり、と生唾を飲み込んだ。勿論、

恐怖のせいである。正直断りづらいことこの上なかった。

「あのなあ、俺は準備もなしに放り込まれたんだぞ」

やや呆れた声で言うのはイクセである。彼は心の準備すらなしにリオンに“これ”を食べさせられたのだ。

しかしいつそのこと、それくらいの方がよかったかもしれない。ルカとルーアは頷き合い、皿から切り分けられた物体を手に取る
と、恐る恐る口に運んだ。

「お……」

「お？」

『美味しい……』

予想を遥かに超えた美味しさに、ルカとルーアは顔を見合わせる。これは一体どんな魔法か。見た目がグロテスクな上に蠢く生物が、ここまで“アップルパイ”だと誰が予想出来よう。

さつくりとした生地は香ばしく、仄かにシナモンの味した。中の林檎も柔らかいし、ほどよい甘さで、これなら菓子類をあまり食べない人間でも美味しく頂けることだろう。この見た目さえクリア出来れば。

「だから言っただろ、美味いって」

「そう言ってもらえるとぼくも作ったかいがあるかな。見た目が不評だったから、前にゼフィと特訓したんだけど、呆れられちゃった」

うんうんと、納得したように頷くイクセと、はにかむように笑う

アテイ。アテイによると以前、あまりに見た目が悪いため、ゼフィと料理の特訓をしたのだという。

しかしゼフィがどんなに頑張っても、同じ材料で作っても何故か物体Xになるとか。これには流石の彼女も呆れたらしい。一体何をどうすればこうなるのですか、と。

「上手いんだけど、この見た目がネックなんだよね。これさえどうにかならしたら、店でも開けると思っただけど」

「残念だが、そんな日は永遠にこないな。この見た目が改善することとはありえない。むしろ目隠して食べて貰う方が精神安定上いいだろう」

うーん、と苦笑しながらリオンがアテイのアップルパイに目を向ける。さらりと凄いことを口走るのは間違いないアルだ。それ斬新かも、と返すリオンと言い、どこまでが冗談か分からない。

いや、彼らのことだ。意外と全部本気かもしれない。

「で、でも見た目さえ我慢すれば美味しいし。アテイって料理上手かったんだね」

「うんうん。ちょっと意外だったかも」

「ありがとう、ルカ、ルーア」

「果たしてそれは『上手い』に分類していいのか？ 駄目だ、皆あれに毒されてる。正常なのは俺だけか」

美味しいことは美味しいが、果たしてアテイを『料理上手』に分類してもいいのだろうか。イクセは呆れを通り越して笑うしかない。

皿に乗った物体Xは未だ白煙を上げている。事情を知らない第三者が見れば、爆弾か何かと勘違いされそうだ。

興味深そうにアップルパイを凝視するルカとルーアに、アティもここにこと笑っている。普通なら癒される光景だろうが、彼らの視線の先にある物体が恐ろしすぎて微笑ましくとも何ともない。

「ある意味では魅惑の料理、だな」

「おい、そこ、アル。何うまく纏めたみたいな顔しやがって」

美味しいが見た目が見た目だけに、イクセが後から胃を心配したのは言うまでもない。

董青石の憂鬱（前書き）

本編読了推奨です。全てが終わった後で、未来を憂うウィスタリアとイシュリアの話です。

董青石の憂鬱

ウイスタリア「セレス」ノーザンライツ。それがウイスタリアに与えられた名だ。

自分たち始竜は生まれながらに己の真名を知っている。誰に教えられた訳でもないというのに。ウイスタリアが受け継いだ名は蒼穹の君とノーザンライツ。後の名は同じ蒼穹の始竜であっても皆違う。ウイスタリアの場合、セレスは古い言葉で天空を表し、ノーザンライツは極光。つまりオーロラを意味するという。

「主様、如何なさいましたか？」

「……何でもない、イシュリア」

自分を案じるような響きに、ウイスタリアは心配ないと言って首を振る。

窺うようにこちらを見つめてくるのは一人の女性だ。年の頃は二十代前半ほどだろう。

肩に届くほどの髪は灰色に近い銀で、切れ長の瞳は青紫。どこか騎士を彷彿とさせる裾の長い衣に、具足と籠手を身に付けている。

彼女はイシュリア。自らの名の一部を分け与えたウイスタリアの眷属だ。

彼女らは始竜の力を受け取った存在で、自分達が死なない限り、彼女らもまた死ぬことはない。家族、という概念がない始竜たちにとって、我が子同然の存在である。

リオンが己の眷属の己の名の一部、『ヴァーミリオン』フレイア『フィーニクス』から、フィーを与えたように、眷族の殆どは始竜の名の一部を貰い受けるのだ。

何でも無い、そう言っているのに、イシュリアの表情は晴れない。相変わらず、案じるようにウイスタリアを見据えている。

「ですが、それにしても憂いを帯びた表情をしていらっしやっただで」

ウイスタリアとイシュリアは、一年前の騒動の原因であるエスメラス王国の王都を見渡せる丘にいた。

柔らかな風がウイスタリアの長い髪を揺らし、人々の声を届けてくれる。ウイスタリアは彼女の言葉には答えず、静かに街を見下ろしていた。

あの騒動から一年。始竜たちにすれば、ほんの瞬きほどの時間であったが、そんな彼らにとっても、この一年は濃密とっていいだろう。

世界という鎖から解き放たれ、ウイスタリアたちは真の自由を手に入れた。

自分達はもう世界の監視者でも傍観者でもない。この世界に生きる命の一つだ。それを嬉しいと感じる反面、不安になる時があった。こうして少し『視た』だけでも人々の中に何体かの竜が混ざっていることが分かる。

本当に人と竜は分かり合えるのだろうか。あの悲劇は二度と起きないのか。

今は心配ないとしても、この先 人竜大戦のような悲劇が起らない保証はどこにもない。いつか人は忘れてしまおうのではないか、そう思ってしまう。

人は忘れる生き物だ。忘却が悪いと言っている訳ではない。忘れなければ生きてはいけないのだから。

始竜たちのように記憶を引き継ぐわけではない。彼らは輪廻の輪

に戻ると同時に、生前に負った魂の傷を癒し、新たな生を歩む準備をする。その過程で、前世の記憶は失われるのだ。

「……今はいい。だがこの先、人と竜は本当の意味で心を通わせ、共に生きていけるのだろうか」

「どうでしょう？ 私にもウイスタリア様にも、先のことは分かりません。今はよくても、いつか人々は忘れ、悲劇を繰り返してしまいかもしれない。理想郷はまた穢れ、人と竜が憎み合う。そんな未来が来ないとは誰にも保証できないでしょう。ですが、きっと大丈夫。この世界は理想郷アルカディアなのですから」

強大な力を持つ始竜でさえ、未来のことは分からない。

未来は不確定で、これからの人々や竜の行動で如何様にも変化する。今は良くても、いつか記憶が風化し、悲劇を繰り返す可能性もないとは言えないだろう。

絶対などない。人竜大戦のように人と竜が殺しあう未来がくるかもしれないのだ。

だがそれでも、イシュリアは信じたいと思う。何故なら、この世界は理想郷アルカディア。人と竜の夢の具現。信じることもまた大切なのだ。

悲劇が繰り返されようとしていた時、竜と心を通わせるルカが全てを救ってくれたように。

「……そうかもしれないな。イシュリア、我は思い違いをしていたのかも。未来を描くのは他でもない我らだ。先をただ憂うのではなく、悲劇を二度と起こさぬよう、我らは記憶を継いでいこう」

創世の時のように、世界が真の姿を取り戻すのも、そう遠いことではないのかもしれない。ルカという人間がウイスタリアたち始竜を救ってくれたように。

ただ先を憂うのではなく、悲劇を二度と起こさぬように自分達は
その記憶を後世に伝えてゆこう。それがウイスタリアたちの役目。

この道の先がどこに続いているのか誰も知らない、分からない。

けれど、それでいいのだ。真つ白な未来を描くのは人だけでも竜
でも、ましてや始竜だけでもない。人であり竜であり、始竜だ。

ウイスタリアはもう一度だけ王都を振り返ると、イシュリアと共に
ゆっくりと歩み出した。

藍青石の憂鬱（後書き）

藍青石、は宝石名、アイオライトといふそうですよ。

琥珀哀歌（前書き）

七章読了推奨です。

琥珀哀歌

お嬢ちゃん。その声を掛けられることには慣れている。アティはル力たちと別れ、大通りをぶらついていた。

別段、意識したことがないのだが、自分の容姿は人目を引くらしい。普段はリオンたちに紛れているため、それほど気にならなかった。だから術をかけることを忘れていたのだ。

ぶらぶらと通りを歩いてはいたはずが、いつの間にか裏通りを歩いているではないか。考え事をしていたからだろう。

高い建物に囲まれ、日の光は殆ど差さず、何とも言えない匂いが鼻をつく。

アティは思わず顔を顰めた。人とは比べ物にならない嗅覚を持つアティには最悪と言うほかない。

床に敷かれているはずの石畳さえ汚れ、ごみに塗れている。ここは所謂、貧民街。そう呼ばれる場所だ。この異様な雰囲気は、とても言葉では言い表すことは出来なかった。こんな場所に長居するのはとても得策とはいえないだろう。アティが踵を返そうとした瞬間、

「お嬢ちゃん、俺らと一緒に遊ぼうや」

下品な笑みを浮かべ、話しかけてきたのは数人の男たちだった。

彼らは瞬く間にアティを取り囲む。

纏う服はやや汚れたもので、皆一様にチンピラ、と言えればいいだろうか。少なくとも、色つきの石は見当たらないため、冒険者ではないらしい。

アティは無言で自分の格好を見直した。長い髪は頭の上で結い上げているが、銀に近い黄金という珍しい色だし、瞳は金を散らした琥珀。

纏う服も煌びやかな帯に、裾の長い異国風の服。どこから見ても『女』に見えているらしい。

「お嬢ちゃんじゃないんだけどな……」

女でもなければ男でもないのだが。アティにはアルやゼフィたちと違って性別がないのだ。

豊穡を司ることもあり、どちらかと言えば女よりだが、本来ならどちらに見えてもおかしくない。ちなみにこのひらひらした格好はアティの趣味である。

「おい、お嬢ちゃん。聞いてんのか？」

頭の上からやや不機嫌そうな男の声。アティが聞いていないと思っただろう。

直後、彼の手がアティの腕に触れる。

「触らないで欲しいんだけど」

アティはふう、とため息をつく、と逆に男の腕を掴み、ぼーい、と放り投げた。それも軽々と。

いくら細身で力が強いようには見えなくても、アティは竜。竜が持つ力は強大である。人一人投げ飛ばすことなど造作もない。

可憐といってもいい麗人の予想もしえない行動に、仲間たちがぼかんと口を開けている。アティはそんな彼らなどそっちのけで喪歌を口ずさんだ。

「さざめく旋律は蒼穹へと届き、妙なる波紋を生むだろう。例え、どんな歌が響いても、やがては静寂に還るだけ。遙かな咆哮は世界に響き、世界は声に満たされる。罪なる心を知るならば、今我

が導きに応えよ 光縛晶

涼やかな、聞き入らずにはいられない美しい歌声だった。呆けたように歌声に聞き入っていた男たちだが、アティが歌い終わった瞬間、何十にも生まれた光柱が彼らを拘束する。その全てが男たちの服だけを貫き、地面に縫い止めていた。

まさか彼らも可憐な少女？ に一網打尽にされるとは思っていなかっただろう。目を白黒させてアティを見つめている。

「きみたちが悪いんだよ。ぼくはね、弱いもの苛めは趣味じゃないんだ。だからこれで許してあげる。これがミリイなら、きみたちまる焦げだね」

もし彼らに囲まれたのがアティではなくリオンなら、目も当てられない。間違いなく冷ややかな笑みを浮かべて、(勿論、加減するだろうが)丸焦げにするだろう。

アティは鼻歌を歌う勢いで、裏通りを歩いていると、路地裏で座り込む少女たちが目に入る。

恐らくは姉妹なのだろう。少女、と分かるのは長い髪と着ている古びたワンピースのお陰だった。

満足な食べ物を出ていないに違いない。痩せ細り、四肢は小枝のようだ。白かったであろう肌もくすんだ色をしている。

別段、珍しいことではない。彼女たちのようにものごいをして生きる子供も、大人でさえ。

分かっているのだ。ここでアティが彼女らだけに手を差し伸べても意味がない。ただの偽善だ。

アティは豊穣を司る始竜。それでも世界の全てを実り多きものにすることは出来ない。始まりの竜と言っても、アティは彼女たちすら助けられない。けど、

「これ、あげる」

気がつけば己の腕に嵌まった腕輪を、姉らしい少女に手渡していた。これを売ればかなりの金になるだろう。アティとて分かっているのだ。これは偽善でしかない。

けれど、偽善だと何もしないより、何かした方がずっといいのではないか。それに始童には家族という概念がない。

アティたちは死ねば記憶を引き継いで転生する。眷属が彼らにとって家族に等しい存在であるように、『家族』である彼女たちの助けになりたかった。

「お姉……ちゃん？」

「売ったらお金になるから。そこまで一緒に行こうか」

もしここで少女たちと別れれば、腕輪をとられてしまうかもしれない。だから共に行って、後から隠蔽の喪歌を歌えばいい。

にこりと微笑んだアティは少女たちの手を引いて裏通りを後にした。

「アティ？ どうしたんだ？」

丁度、宿屋に帰っていたリオンがアティの姿を見て怪訝そうな顔になる。散歩に行っていたはずなのに、何故かアティが付けていた装飾品が全てなくなっているではないか。腕輪も首輪も耳飾り、髪飾りにいたる全てが。

だが晴れやかな顔をしているのはリオンの勘違いではないだろう。

「あげちゃったんだ、みんなに」

「みんな？」

アティはあれから、出会った貧民街の子供たちに、身に付けていた装飾品をあげた。だから、結い上げていた髪も今は下ろしている。アティがしたことなど、ちっぽけで偽善だと笑われるかもしれない。それでも満足だった。

「だってあの子たちのかなしいうたは聞きたくないから」

「だからってそれするか、フツー」

アティがしたことは誰もができることではない。リオンとて真似出来ないだろう。

この世界は平等ではない。どこかで絶対に優劣が生まれる。光のもとに影が生まれるように。

呆れたように、だが仕方ない友人を見るように笑ったリオンは、いつの間にか取り出していたものをアティに投げた。

それはアティの瞳と同じ、琥珀が嵌め込まれた銀の腕輪。

「ミリイ？」

「やるよ。オレよりアティの方が似合うだろ？」

リオンは多くは語らないが、それはぴたりとアティの腕にはまった。普段はお茶らけていて、スキンシップが好きな彼なのに、こんな時は普段とは違うのだ。いつもの彼なら、きつと抱きついてくるだろうに。

アティは銀の腕輪をはめた腕をリオンに見せ、ふわりと微笑んだ。

「ありがとう、ミリィ」

始竜たちの遊戯（前書き）

本編読了推奨です。

始竜たちの遊戯

チェックメイト。

涼やかな声と共に、黒のキングがごとんと倒される。倒したのは銀髪の美しい青年　アルだ。向かい側では、ルーアがうんうん唸りながら難しい表情を浮かべている。

眼の前には象牙色のチェス盤と白と黒の駒。

ぷくつと頬を膨らませた姿は愛らしい少年そのもので、思わず抱き締めなくなりそうだが、目の前の彼に効くはずもなく。そんな彼らの勝負を観戦しているのはルカである。

「アルは凄く強いからね。俺も一度も勝てたことないし」

「……もう、アルってば強すぎ。少しは手加減してよね」

小さな竜であった時から、アルはよくルカを相手にチェスをしたものだ。お陰で上達したルカは島でも殆ど負けなしだったが、アルにだけは未だ一度として勝てていない。

ルーアはまだ機嫌が悪いらしく、足をぶらぶらさせていた。そんな彼に対してアルは呆れたように笑う。

「そもそもチェックの時点で諦めないお前が悪い。それに、獅子は兎を狩るにも全力を尽くすと言うだろう？　もっとも私は竜で、お前は兎どころか子猫のようなものだがな」

「むー……何も言い返せないのが悔しい」

中級者や上級者のゲームとなると、チェックメイトまでゲームを進めること自体が少ない。チェック、将棋で言うなら詰みの時点で、

チエックをされた方が敗北を認めるからだ。

ルーアも昔、チエスをしたことがあるらしいが、今の場合は最後までアルに負けなくなかったからだろう。ルーアを相手にしてめ流石はアル。一切危なげなく、余裕しゃくしゃくだ。

その時、街に出ていたイクセとリオンが帰って来る。実に珍しい組み合わせだが、イクセが強制的にリオンに連れて行かれたただけだ。チエスに興じているアルたちを見たイクセが少し驚いたような顔になった。

「アルがチエスなんて珍しいな。てつきり人間の娯楽には興味がない、って言いそうなのに」

まさかアルがチエスをするとは思わなかったからだ。

彼は確かに世界の始まりより生きてはいるが、リオンより人間社会についての興味はない気がする。とは言え、様々な知識に通じているのだが。

思い出されるのはつい先日、麻雀をしていたミラとエクレール。エクレールが一方的に勝ち、高笑いしていたことを思い出す。

「それは私の真似か？ 悪いが全く似ていない」

「レインはチエス強いよ。オレも三回に一回勝てるかどうかだし」

「五回に一回だ」

「あれ、そうだったけ？」

あれー、と頭を掻くりオンは、どうやらわざとらしい。リオンの方はチエスに始まって麻雀や将棋にオセロと中々に多芸である。一

番得意なのはカードゲームらしく、ブラックジャックやポーカーはアル以上の腕前だ。そこはやはり経験だろう。

そしてチェスも。チェスは所謂頭を使うゲームであるが、五回に一回でもアルに勝てるなら相当な腕前である。

「何ならメシア、オレと勝負する？」

「しない！ だって五回に一回でもアルに勝てるんでしょ」

倒れた黒のキングを手にとって弄びながらリオンが笑う。

しかし返って来たのはやや不機嫌そうなルーアの声だった。頬を膨らませる少年は非常に可愛らしいが、彼もこう見えて千年を生きた竜である。

リオンの場合、手加減をする前に遊ばれそうだからだ。

「こゝら、メシア！ 可愛い子にはお仕置きしちゃうよ！」

リオンはルーアの背後から腕を回し、彼の金色の髪をくしゃくしゃとかき回す。

止めてよ、との抗議の声にも知らんぷりだ。そんな二人を尻目に、アルはチェスを片付け始めている。リオンを止めるつもりもないらしく、我関せずと言った様子だ。

「ゼファイだったら喜んで相手してくれると思うよ」

「でもゼファイ姉は、ゲイルさんと買い物でしょ？」

ルカがゼファイに聞いたところ、彼女はよくゲイルとチェスをしていたらしい。

だが肝心の彼女はゲイルと共に街に出ている。ゲイルが無駄な物

を買わないようにとのお目付け役だ。相棒と言うより、もはや嫁だ
と思うのはルーアだけだろうか。

勿論、口には出さない。そんな一言を口にすれば、ゲイルが黙っ
ていないだろう。

「ルカ様、皆様、ただいま戻りました」

そこへ、ちょうどゼフィとゲイルが帰って来た。

艶々している彼女に対し、ゲイルがぐったりしているのは気のせ
いだろうか。大方ゼフィに口出しでもされたのだろう。流石は嫁で
ある。

「あ、ちょうど良かった、ゼフィ」

「はい、何でしょう、ルカ様？」

「父さんは放っておいて、ルーアのチェスの相手お願い出来る？
アルは大人げないから」

一言も喋らない（喋る気力もない）ゲイルそっちのけで、ルカは
ゼフィの手を取った。アルも少しは手加減をすとか、ルーアのレ
ベルに合わせてあげればいいのだが。

するとアルからは、大人げないと言うならルーア八だつてそうだ
ろう、と返って来る。

見た目は少年でも生きた年数ならウィスタリアやゼフィより上な
のだ。大人げないもくそもないとアルは言いたいのだろう。

しかしながら、人はどうしても見た目で判断してしまう生き物だ。

「やっぱゼフィは頼りなるう。ゲイルには勿体無い」

「リオン。お願いですからところ構わず抱きつかないで下さい」

ぎゅっ、と抱きしめるて来るリオンに、彼女は苦笑しつつもされるがままだ。

何だか大きな息子と母、に見えなくもないが、ゲイルがひそかに不満そうな顔をしていたのは長い付き合いのアルだけが知っていた。

「私でよければ是非、お相手いたします。リオンもいい加減にしないとレインに怒られますよ?」

リオンに誰より厳しいのはアルだ。

イクセはそもそも相手にする気すらないし、ルーアとウイスタリアは呆れている。

ルカも兄と慕う相手にはやはり甘い。アティはそもそもあの性格だし、エクレールは適当で、ミラに至ってはどうでもいいらしい。

『絶対氷結』

「おうわ!」

アルの朗々とした声が響くと共に、室内の温度が急激に下がる。

絶対氷結。リオンが慌てて飛びのいた瞬間、足元が瞬時に氷つく。冗談では済まされない。避けていなければ麗しい(リオン談)氷の彫像の出来上がりだ。ただ、効果が一点に留まっていることから、アルも一応配慮はしたのだろう。

リオンにしてみればあるかないかの配慮ではあるが。

「何すんだ、レイン! 人を殺す気か!」

「お前は人ではなく竜だろう?」

「だからそれは言葉のアヤだって」

思わず声を荒らげるリオンに、アルは素っ気なく返すだけだ。

確かにリオンは人ではなく竜であるが、それは言葉のあやである。冗談が通じないのは昔からだだが、ここ最近ではルカが絡んで更に酷いとリオンは思う。もっとも、それを本人に言えば、古代歌が飛んでくるだろう。

「はいはい。二人とも喧嘩はそこまでね。ゼフィ、ルーアの相手お願い」

「はい。それではルーア。始めましょうか」

「うん！ 負けないからね！」

喧嘩（どちらかと言うとアルの一方的な）を始めるアルとリオンをルカが宥め、その内にゼフィとルーアは楽しそうにチェスを始めた。

ちなみにイクセとゲイルと言えば、迷惑極まりない始竜たちの喧嘩に巻き込まれないよう、部屋の隅で剣の手入れをしている。

「ホントにこれだからあいつらは……。巻き込まれる身になってみるって」

「あれには一種の慣れが必要だ。……ルカみたいにな。まあ、頑張れよ、若人」

「だから何で、あんたに励まされなきゃいけないんだ」

剣の手入れをしながら、ぶつくさ文句を言うイクセを見て、ゲイルが笑う。イクセは決して彼と同じではない。断じて彼らに遊ばれてなどいないのだ。

頑張れよ、と豪快に肩を叩かれた青年は、結局言い返すこと無く、ただ胃が痛い、とぼやきながら剣の手入れを再開した。

「よし、じゃあ、レイン。麻雀でもするか」

「何なら何かを賭けてもいいが？」

ルカに止められ、喧嘩を止めた二人だったが、既に元に戻っている。

始まりの時より生きるアルと、始竜の中ではアルに続く年長者であるリオン。互いの性格はよく分かっているし、アルもリオンも人間の娯楽は嫌いではない。

「うわー、二人とも笑みが黒い」

「ルカ、近付くなよ。あいつらの曲がった性根がうつつたら困るからな」

仲良くチエスをするルーアとゼファイ。そんな二人を見守るゲイルとは対照的に、アルとリオンは黒い笑みを浮かべてお互いを見つめている。

イクセは慌てて、ルカを危険な始竜たちから引き離した。

「誰が曲がった性根だと？」

「イクセってば酷い。オレたち神サマに誓って清い始竜だもーん。ね、レイン」

珍しく微笑むアルと艶やかに笑うリオン。笑っているはずなのに、彼らの金とバーガンディの瞳はちつとも笑っていなかった。これはイクセでなくても背筋が凍るだろう。

するとアルが何やら思いついたらしい。アルの微笑みが、含みを帯びている気がする。非常に嫌な予感がした。そして案の定、

「ならば、勝った方はこれを好きにこき使うことにしよう」

「ナイス、レイン！ よし、頑張っちゃうよ」

「ちょ、お前ら……！ 俺の意思を無視して勝手に決めるなっの」

アルの言う、これ、は言うまでもなくイクセである。彼の金色の瞳は珍しく楽しそうだ。

意気投合したらしいアルとリオンは、さっさと席について麻雀を開始してしまう。先日、ミラとエクレールが使っていたものだ。

イクセの抗議など、なかった事にして麻雀をする二人。苛立ったイクセが声を上げるが、

「おい！」

「知らないー、聞こえないー」

リオンは適当に返事をし、ふふ、と笑って麻雀に興じている。

アルは相変わらず無表情で何を考えているか分からない。イクセを不憫に思ったのだろう。ルカがおずおずと口を開く。

「ええつと、ごめんね、イクセ」

「もう勝手にしてくれ……」

ごめんね、と本当に申し訳なさそうに謝るルカに、イクセは肩を落として呟いた。止めても無駄なのは分かりきっている。ならばもう何もすまい。時間と労力の無駄だ。

始竜たちの遊戯はまだ終わらない。

翡翠連声（前書き）

最低でも七章読了推奨です。

翡翠連声

「ふんふんふふーん」

鼻歌を歌いながら、シルフィードⅡウィンディⅡゼルフィロスは生クリームが入ったボウルをかき混ぜていた。長い鮮やかな緑の髪を結び上げ、レースのついた白のエプロンを纏っている。

端から見れば美少女が上機嫌でお菓子作りをしているようにしか見えないだろう。

もとよりお菓子作りが趣味のゼフィである。こうして暇を見つけては、宿屋の調理場を借りて作っているのだ。

勿論、ゼフィの力を持つてすれば調理器具を持ち歩くことなど造作ないし、調理場を借りる必要もない。ようは雰囲気の問題なのだ。出来上がったクリームをスポンジケーキに丁寧に塗りながら、オーブンでクッキーを焼く。鼻腔を擦る甘い香りがゼフィは好きだ。昔はよくこうしてルカに作ったものである。とは言ってもゼフィが始童であることは隠していたため、ゲイルが買ってきたことにしていたのだが。

「いい匂い……なにつくってるの、ゼフィ？」

匂いにつられてやって来たのは、眠そうに瞼を擦るアティだった。ただ寝起きのためか、服は半分ほど乱れているし、髪もあちこちはねている。

ゼフィは苦笑しつつ、アティの乱れた服を直し、椅子に座らせた。

「アティは私よりずっと年上でしょう？ 本当に仕方ないですね」

まだ眠そうなアティを見て小さく笑い、ゼフィは普段から持ち歩いているくしを取り出して髪をすく。

さらさらと流れる髪はまるで金糸のよう。ゼフィの瞳と同じ、お日様の色だ。はねたところを丁寧に梳かしつけ、綺麗に結い上げる。ゼフィは生まれてまだ千年にも満たない若輩者で、アティはアルヤリオンに続く長命な竜。アティの方がずっと年上だというのに、これでは逆ではないか。

「はい、出来ましたよ。でも珍しいですね。アティが自分から起きてくるなんて」

「んー……いい匂いがしたから」

アティは寝つきはすこぶる良いのだが、寝起きが最悪なのである。相当なことがないと起きないし、起きても三十分は夢つつつなのだ。しかしどうやら、この匂いが目覚まし代わりになったらいい。

「ふふ、もう直ぐ出来ますから、アティはお茶の準備をお願いしますね」

「はい……」

アティは緩慢な動作で立ち上がると、ティーセットを持って調理場を出て行った。瞼を擦っていることから、まだ完全に眠気が覚めた訳ではないらしい。

そろそろ出かけていたルカたちやゲイルも帰ってくる頃だろう。

こうして皆と共にあり、大好きなお菓子作りが出来る。それはとても幸せなことだ。ルカの手により、始竜という鎖から解放された今、ゼフィたちを縛るものは何も無い。

ゼフィは年若い竜だ。始竜としては勿論、竜としても。

ウイスタリアと同じように記憶を全て引き継いでいるが、それは先代たちのものであって彼女自身の記憶ではない。初代からの記憶を保持しているとは言え、ゼフィはシルフィード「ウィンディ」ゼルフィロス以外の何者でもない。

ゼフィがケーキを仕上げた後、クッキーをオープンから出していると、ルカたちの声が耳に届いた。それも竜である彼女の耳が捉えたもの。

ゼフィはゼフィであってルカの母にはなれない。

けれど姉のような存在になりたいと思う。自分たちには『同胞』はあっても『家族』はないから。ということはゲイルは父親だろうか。そう思うと自然に笑みが零れた。

彼には悪いがゲイルはとも十五歳の子供がいるようには見ええない。若々しい外見とその性格、言動ゆえだろうか。

彼はきつとゼフィのことを相棒としてしか見ていないのだろう。

ゲイルは今もシルフィアを愛している。それはいつも傍らにいた自分がよく知っていた。

この思いが報われることはきつとない。

だがそれでいいのだ。ゼフィはシルフィアを愛しているゲイルが好きだから。

いつか誰かが言っていた気がする。愛とは見返りを求めないことだ。

自分は運び屋ゲイルの相棒、それでいいではないか。

ゼフィはケーキを切り分けて大皿に乗せると、エプロンを外し、クッキーとケーキが乗った皿を手に調理場を後にした。

その瞳にあるのは悲しみでも憂いでも、ましてや諦めでもない。

ゼフィの瞳は全てを等しく照らす陽光のようにきらきらと輝いてい

た。

翡翠連声（後書き）

タイトルの連声は恋情とかけている、つもりです。が、上手く書け
ませんでした！

日長瓊歌（前書き）

本編読了推奨です。

日長瓊歌

イクセからもたらされた突然の伝言。それはかつての友であり、今でも大切に思う存在からのものだった。

（我が友、唯一無二の存在よ。悲しませて、泣かせてしまってますまない。例えこの魂が燃え尽き、灰となろうとも我はお前と共にある。もう離れることはない。忘れるな）

「ヴァイス……！」

大事な大事な言葉。彼が宝石のようだと言ったバーガンディの瞳から透明な滴が流れ出し、白い頬を伝う。

リオンは今、己が作り出した空間にいた。揺らめく炎を思わせる無数の魔水晶が淡く煌めき、彼をほのかに浮かび上がらせる。

もう離れることはない。彼の魂は歪み、輪廻の輪に還ることは出来ないだろう。それなのにそばにいてくれる。残留思念だ何だろうと嬉しかった。

彼はリオンに何も残してはくれないのだと思っていた。

だが違うのだ。ヴァイスファイトは言葉を、思いを残してくれた。始まりの竜として、鎖から解き放なれたことは嬉しい。けれどそれよりも、リオンはただ傍らに彼がいて欲しかった。

「泣いてるの、リオン兄？」

突如として響いた声に、リオンは弾かれたように顔を上げる。そこに立っていたのは、海よりも空よりも鮮やかな青い髪を持つ少年。リオンが弟のように可愛がっている彼。少年　ル力の茜の瞳は心配そうにリオンを見つめている。

「ルカ……」

「リオン兄が泣いてるような気がしたから」

少年の首から下げられた光の加減によって色を変える炎の石が存在を示すようにちかり、と輝いた。

それは竜笛。リオンが彼に授けたもの。竜笛を通してリオンとルカは繋がっている。とは言え、本来なら繋がるのは一方的であり、人が竜を感じることはない。

しかしルカの類い希なる《声を聞く者》としての力が竜笛を通して、リオンの異変を伝えたのだらう。

「オレなら大丈夫。だから……」

「ううん。辛い時は、泣きたい時は泣いていいよ。我慢する必要なんてない。俺だってリオン兄の力になりたいんだ。いつかリオン兄がしてくれたように」

背伸びをしたルカが優しく笑い、リオンの髪を撫でる。まるで母のように。

かつて母に会いたいと涙を浮かべるルカを、あやすように抱きしめたことがある。ルカはその時のことを言っているのだらう。

リオンは何を言うべきか分からず膝をついた。自分よりずっと年下の少年の前で泣いてもいいのだらうか。ルカは戸惑った表情を浮かべるリオンをそっと引き寄せ、掻き抱く。触れた体はあたたかかった。その温もりが一人ではないことを教えてくれる。

「……分かってるよ、リオン兄。悲しかったね、辛かったね」

優しく髪に触れる手に自然と涙が溢れた。アルたちの前ではどうしても、同胞であるという点から泣けなかった。それは一応、リオンの矜持。

それなのに、この少年はそんなものなど関係なしに包み込んでくれる。止めようとしても止まらない。嗚咽が漏れ、とめどなく涙が零れる。

ルカの腕の中でリオンは幼子のように泣いた。いなくなってしまうった親友を思い。

彼はリオンの中で生きている、生き続ける。もう二度と離れることはないのだ。

ヴィオ、という名は彼の瞳を見た時、自然に思い浮かんだ名だった。

リオンはいつものように宿屋の屋根に上り、小さな友人を待っている。既に夜の帳は下り、辺りは闇色のヴェールに包まれている。揺らめく焰を思わせる髪に美しい瞳を持つリオンは、まるで闇の中に浮き上がっているかのよう。言うなければ輝く太陽。それも真夜中の太陽だ。

「ホントに星掴めたらいいのにな……」

ベルベットの宝石箱の中で光を放つ宝石^{ほし}。

流石の始竜であっても、星は掴めない。

それを悔しく思ったのは、“リオン”として生まれて間もない頃だ。勿論、先代の記憶は引き継いでいるし、物理的に無理だと分かっている。若さゆえの未熟さというか、好奇心だ。

とその時、空を見上げていたリオンの耳に小さな足音が聞こえた。

にゃあ、と小さく鳴いたのは、リオンの小さな友人である黒猫である。夜空を切り取ったかのような毛色に、瞳は高貴の象徴である紫^{むらさき}。

彼の首には、精緻な細工が施された金の首輪が付けられていた。

リオンがヴィオに贈ったものだ。

ヴィオは特等席であるリオンの膝の上に乗し、ご機嫌そうに毛繕いをはじめた。

ヴィオ、と言う名は古代語で紫を表す単語から取ったもの。

彼も気に入っているのか、リオンがヴィオ、と呼べば律儀に応えてくれた。リオンは毛繕いに夢中なヴィオを抱き上げ、なあ、と問うた。

「……なあ、ヴィオ。お前はオレを恨んでないのか？」

ヴィオはヴァイスファイトだ。

リオンたち、始竜は魂を視ることが出来る。この黒猫の魂は間違いないく彼のもの。

消滅したはずなのに、何の力が働いたのか、あるいは神の気まぐれか、ヴァイスファイトは猫に転生した。しかもこの時代の猫に。いくらかもつともらしい理由があったとは言え、リオンはヴァイスファイトを手にかけた。直接手を下した訳ではないが、同じことだ。もし、なんてあり得ない。

けれどあの時、親友の真意に気づいていたら、“こう”なること

はなかったのか。

「にゃにゃにゃ！」

するとヴィオは何が気に入らなかったのか、リオンの手に猫パンチをする。何を馬鹿なことを、とでも言いたいのか。

パンチと言っても所詮は猫だ。

まさか猫パンチなど予想していなかったりオンは、ぼかんと口を開けている。ヴィオはぺしぺし、としこたま猫パンチを浴びせると目を細め、リオンの手に顔をすり寄せた。

「……つまり、これが答えってか？」

「にゃん！」

ヴァイスファイトは、最後までリオンに真意を悟らせなかった。そうすることで、巻き込まないようにしたのだろう。

出来るなら馬鹿だと怒鳴り付けてやりたい。それはもう叶わないけれど。

もう二度とこの手を離しはしない。壊れものを扱うようにそつとヴィオを抱きしめ、リオンは万感の思いを込めて呟いた。ありがとう。ヴィオ、ヴァイス、と。

日長瓊歌（後書き）

リオンを慰める役は最初はアルを考えてたんですが、彼のプライドを考えると、絶対アルの前では泣かないなと思ひまして。

ルカにしてみました。しかしながら十五歳とは思えぬ包容力に……

！

真夜中の太陽（前書き）

本編読了推奨、女装ネタです。

真夜中の太陽

どうしてこうなったのだろうか、とイクセは考える。

初めはただの遊びだったのだ。それがいつの間にか賭け事になり、気づいた時にはもう遅い。リオンの言うことを聞くこと。それがリオンの条件だった。

ちなみにチエスで負けた訳ではなく、麻雀である。

どうやら真紅の竜は奇術だけでなく、チエスや麻雀も嗜むと知ったのはついこの間。少しだけ手合わせするだけが、流星はリオンである。

「だから何で俺がこんな目に……」

周りからの視線が痛すぎる。穴があったら入りたいというのはこのことだろう。

昼間の賑わいとはまた違う。夜の帳がおりた街中はまた違った活気に溢れている。小耳に挟んだ話では夏至祭、というらしい。何でも夏の訪れを祝う祭りで、すれ違う者の殆どが花冠を被っていた。

ふと耳を傾ければ陽気な歌声や拍手の音が聞こえる。

明々と灯された照明はまるで真夜中の太陽。

「いいじゃん。似合ってるよ、イクセ。それと今は俺って言っちゃダメ」

めっ、と幼子を諭すように言われてもどうしようもない。

これがリオンでなければ殴り飛ばしていたところである。今の状態を一言で表すならやはり、鬱陶しい、だろう。

イクセは長い袖を見つめて深いため息をついた。今、イクセが纏っているのは故郷、スイレンの民族衣装だ。

「別にいいだろ。俺の勝手だ」

不機嫌そうに眉を寄せるのは美しい『女性』だった。

艶やかな濡羽色の髪は頭の上で纏められ、翡翠や紫水晶が付けられた金の簪を差している。

金の鳳凰が描かれた紫紺の着物に藤の刺繍が施された帯が美しい。うっすらと化粧が施された肌には一点の染みもなく、滑らかな陶磁器のよう。引かれた紅が鮮やかだ。

女性にしては長身だが、隣に並ぶ青年がいるお陰でそれほど気にならない。むしろぴんと伸びた背筋といい、位の高い遊女のよう。

ただ彼女は他人に媚びることは一切ない。侵しがたい何かがある。深い紫や董など、光の加減によって色を変える瞳は紫水晶。

紫は『彼女』の故郷では一番高貴な色とされる。そして紫水晶の石言葉は高貴だ。

彼女が歩を進める度、漆塗りのぽっくり下駄がからんころんと音を立てた。

「折角の罰ゲームなのに。オレだって一緒に着てるじゃん？」

「そっちは男ものだろ！」

唇を尖らせる青年は女性、ではなくイクセとは違い、女性ものの着物を纏っているわけではない。

イクセ同様長い髪を金環で纏め、背中に流してはいるが、彼が身につけた真紅の着物は男物。スイレンでのみ咲く桜が描かれたそれは、リオンによく似合っていた。

あまりにイクセが可哀想だから見ていられなかったのだ。
だがルカとてまさか“こんな”結果になるとは思わなかった。長
身の青年の隣を歩きながら、ルカは眉間に皺を寄せる。

「ルカ、どうした。気分でも悪くなったか？」

「ううん。大丈夫だよ、アル」

大丈夫だよ、と言って目の前の青年を見上げた。

今は青年の姿をしているアルは文句なしに綺麗だ。男性に綺麗とは失礼かもしれないが、ルカはそう思う。今日のアルはいつもの白いローブ姿ではない。スイレンの民族衣装である。

普段は下ろしている髪をちょうど頭の真後ろ辺りで金の飾り紐を使って纏めている。

纏う衣装は銀糸で蝶の刺繍が施された着物で男物ではあるが、神秘的な雰囲気のアルと相まって、一見すると性別の判断に迷いそうだ。

「ちょっと歩きづらくて。それに視線が気になるだけだから」

「私は“力”を使っても構わないんだがな……」

ルカもここにはいないイクセ同様、女物の着物である。

ルカの髪よりもやや深い青の布地に睡蓮の刺繍。ただし今回もグラディウスで歌姫に扮した時と同じく、つけ毛を付けて簪を指し、結い上げていた。

ゼフィの手によって薄い化粧を施されたその姿は、大人と子供の中間。その年頃の少女が持つ何とも言えない美しさがある。清楚であり艶やかでもあった。

アルにしてみればルカは自慢の教え子であるが、この姿を他人に見せたくないとも思ってしまう。

“力”を使えば人々の意識を逸らすことなど容易いが、それでは面白くない、トリオンに一蹴されてしまったのだ。

「何か食べたいものはあるか？」

「んーと……」

アルに聞かれ、軒を並べる露店に視線を向ける。

どれもこれもが珍しくて目移りしてしまう。よくよく見回せば、エランダディアの海神祭とは出ている露店も違った。

どちらかと言えば、スイレンに近いせいもあるのだろう。ふわふわとした砂糖菓子や小さな星の欠片のような菓子など実に様々だ。

「あれ、あれが食べたいかな」

ルカが指差したのは一つの露店だった。

売っているのはスイレンの菓子で、林檎を丸ごと水飴で包んだ林檎飴と呼ばれるもの。青果が貴重なエランダディアでは見かけないものだ。

「林檎飴って意外に美味しくないんだね」

アルに買って貰った林檎飴をなめながら、ルカが一言。

見たこともないスイレンの菓子を買って貰ったまでは良かったが、この林檎飴、物凄く美味しいかと言えば否だ。というか期待しすぎたルカが悪かったかもしれないが。

「まあ“林檎飴”だからな」

「むー……知ってたら教えてよ、アル」

始まりの時より生きるアルである。深い知識を持つ彼は取り分け、菓子に関してかなり詳しい。

本来なら食事が必要とはしないが、アルは昔から菓子類を好んで食べていた。ぷくりと頬を膨らませる親友を見て、銀髪の青年は小さく笑う。

「すまない。失念していた。“全て”を覚えているということはそういうことだ」

「そっか。そうだよね……」

林檎飴が袖に付かないよう、細心の注意を払って食べる。

分かっているのだが、普段はつい忘れてしまう。始まりの時より生きるアルは、文字通り“全て”を目にして来た。世界の監視者として。

俯くルカに、アルは蕩けるような笑みを浮かべて手を伸ばした。

「お前が気に病む必要などどこにもない。私は始竜で良かったと思っっている。始竜でなければルカと出会うことなどなかっただろう」

「アル……」

優しい手がルカの髪を撫でる。結い上げた髪が崩れないよう、そつと、優しく。

それが少しくすぐったくてほんの少しだけ気恥ずかしかった。それでも始竜で良かったと言ってくれるなら、これ以上嬉しいことはない。

「俺もだよ。アルに出会えて良かった。こうして並んで歩けるのが凄く嬉しい」

アルと出会ったのはルカがまだ三歳の頃。それからもう十三年近くになる。

ずっとそばにいてくれた彼。彼がいたからルカは寂しくなかった。世界のために犠牲になる定めだと知った時、ルカは初めて絶望を知った。深く暗い闇の中に堕ちていくような感覚。

それでもヴアイスファイトが残した言葉でアルを、アルたちを始竜という鎖から解放放つことが出来た。

こうして隣を歩ける事が本当に嬉しい。

「二度と約束を違えはしない。この命尽きようとも私はお前と、お前の魂とともに在る」

それは何よりも尊い誓い。もう二度と離しはしない。

何度でも誓おう。空よりも海よりも鮮やかで美しい魂を持つ少年と共にあることを。

とても賑やかで思わず顔が綻ぶ。

それでもこの格好だけが嫌だった。これではまるでリオンにエスコートされているようではないか。

周りからの視線だって気に入らないし、民族衣装は歩きづらい。ルカまでこんな目に合っていると思えば、いたたまれなかった。

「イクセってば、そんな怖い顔したら、台無しだよ。折角綺麗なのに」

「生憎この顔は生まれつきだ」

そう言っって肩を抱こうとするリオンの腕を振り払い、睨み付ける。するとほんの一瞬だけ、リオンが悲しげな顔をした。

イクセは本来なら暁闇の君として生まれるはずだった。この顔はヴァイスファイトと同じ。化粧をしているとは言え、思い出さずにはいられないのだろう。

「リオン、その……」

「謝る必要なんてないよ。イクセとヴァイスは全然違うから。顔は同じでも、ね。あいつのことで甘えるなんて卑怯だし、狡い。しちやいけないことだよ。だから謝るのはオレの方。ごめんね、嫌な思いさせて」

「ごめんね、と笑うリオンはいつもの彼で、イクセは何も言えなくなる。

確かにイクセとヴァイスファイトの顔は同じだが、自分と彼では何から何まで違う。

けれど、どこに彼が謝る理由があるのだろうか。

リオンは始竜として心を殺し、親友と相對した。例え直接手を下した訳ではないにせよ、辛かったはずだ。その痛みはイクセ如きには想像出来ない。

どうして彼らはすれ違ってしまったのか。

親友を、同胞を始竜という鎖から解き放ちたいと願った彼と、彼と共にあることを望んでいたリオン。

失われた命は戻らない。

ヴァイスファイトは全て承知の上で茨の道を歩み、そして自ら命を絶った。イクセにはとても共感出来ないけれど。

「お前こそ謝るな。そんな言葉が欲しい訳じゃない。それにずるくも卑怯でもないだろ。甘えたい時は甘えればいい。リオンがそんな辛気臭い顔してたら調子狂う」

イクセはリオンに謝って欲しい訳ではない。

彼が、彼らがどれほどの重荷を背負ってきたか知らぬイクセではないのだ。時には弱音を吐いてもいいではないか。

イクセはヴァイスファイトではないし、彼にはなれないけれど、話を聞くことは出来る。

「ホント、悩むなんてオレのキャラじゃないんだけどなあ……。大丈夫だよ。でもありがとう。うんと甘えさせて貰ってるから。ふふ……。元気出てきたかも。いこっか。イクセの晴れ姿を皆に見せなき

やね
「

それは止めてくれ……」

何故か上機嫌に笑うリオンにイクセはうな垂れるしかない。ちょっと元気がないと思っただらこれだ。

真紅の着物に身を包んだりオンに半ば引っ張られながら、イクセは雑踏に紛れて消えて行った。

翠銀奏歌（前書き）

本編読了推奨です。

翠銀奏歌

アルとゲイルが二人きりで話すことはまずない。アルはいつもルカのそばにいたし、ゲイルは滅多にエランディアには帰らなかった。既に世界崩壊の危機は去り、自分たちが共にいる必要もなくなつた。

ゲイルは数日の内にゼフィと共に旅立つつもりだという。運び屋の仕事に戻るのだ。

アルはゲイルに背を向けたまま問いかける。

「……もう行くのか？」

「ああ。長居は出来ねえだろう。俺は結局、根なし草だからな」

尋ねるアルは小さな竜ではなく、長身の青年の姿をしている。

くつくつと喉を鳴らしてゲイルが笑った気配がした。声には少しだけ自嘲が含まれているようだ。

シルフィアが死ぬ前のゲイルがどうであったのか、アルは詳しく知らない。

だが彼はこう見えて愛情深い人間である。妻を失ったゲイルがどれほど悲しみに暮れたか想像は難しくない。

「もう少し、ルカのそばにはいられないか？」

「あいつはもう子供じゃねえ。俺がいなくなつて上手くやるだろ。

お前や《黒呀》たちがついてるんだからな」

「だがルカの父親はお前一人だ。私では父になれない」

もう少しそばにいられないのか、尋ねるアルに、ゲイルは困ったように笑いながら首を振る。ルカはもう十五歳。エランディアでは立派な大人だ。

ゲイルが言いたいことも分かる。

しかしアルは家族、友人、イクセたちも仲間や友人になれても父親にはなれない。ルカの父親はゲイルただ一人だけだ。何故それが分からない。

アルがどんなに望んでも手に入らないものを持っているというのに。

「分からないわけじゃない。けどな、今更父親なんて出来ないだろ。今まで散々放っておいたのに。これくらいの距離で十分だ」

「しかし……」

「なあ、アル。俺はな、ルカにとって決断していい父親とは言えなかった。それはお前も分かっているはずだ。確かにルカの父親は俺一人だろう。けど、お前だってそうだ」

言い淀むアルにゲイルは苦笑する。

彼はとても良い父親とは言えなかった。一年の殆どを世界中飛び回って過ごし、家に帰ることもまずない。ゼフィに口を酸っぱくして言われても、決して考えを変えることはなかった。

それは負い目もあつたのだろうが、ゲイル一人を責めることは出来ない。アルも分かっている。

アルはゲイルの言葉の意味をはかり兼ね、無言で彼を見据えた。

「お前は父親にはなれないかもしれないかもしれない。それでもルカの友人で、家族であるのはお前だけだ。アルトウール、レインセル、シルバ、レイ」

「ゲイル……」

ゲイルの緑の瞳は普段よりずっと真剣で、深い色を湛えている。ルカの父であり、有数の運び屋である男。冒険者からも一目置かれる彼が、実は息子との接し方に難儀していると誰が思っただろう。彼の心を察しながらも、アルはゲイルという人物を理解しようとしなかったのかもしれない。ゲイルが苦悩していたのは知っている。

「だから、これでいい」

「お前がそう決めたのなら、私はもう何も言うまい。……全く仕方のない父親だ。付き合いきれん」

「そりゃどうも」

無然とした様子のアルに対して、ゲイルは肩を竦めて軽く笑う。すると直ぐ様アルから、褒めてない、との容赦のない一言が返って来た。アルも怒っている訳ではない。少々呆れてはいるが、それがゲイル・エアハートという男だ。飄々として、掴みどころがない。それでいて不器用なのだ。

「本当に手厳しいな、お前は」

「それは光栄だ。しかしながら、不甲斐ない父親を叱咤するのも私の役目。嫌ならもう少ししゃきつとしろ。嗚呼、嘆かわしい。どうしてお前のような人間が父親で、あんな優しい子に育ったのか……」

美貌の青年は、思わず頭に手を当てて空を仰いだ。

ゲイルとルカは正真正銘親子だというのに似てもにつかない。何

故、こんな適当な上にちゃんぽらんな男が父親で、優しく素直な子に育ったのか謎である。

そんなアルを見て、ゲイルはいけしゃあしゃあとこう言った。

「勿論、お前の教育の賜物だろ？」

「……お前にはもうほとほと愛想が尽きた。どこへなりとも行ってしまえ！」

殆ど家に帰らなかったゲイルに代わり、アルがル力を育てたと言っても過言ではない。父であり、時には兄。親友でありながら、家族。いつも傍らにあった。

アルを信頼したような、だが無責任とも取れる発言に、アルが呆れた果てたのは言うまでもない。

黄金涙歌（前書き）

本編読了推奨です。

黄金涙歌

ルーアハ「メシア」ラズライト。その名は『彼』が与えてくれた宝物だ。海より青く、空よりも澄んだ魂を持つ、竜と心通わせる少年が。あの人の面影を宿す少年　ルカ。

ルーアは宿屋の屋根に上り、夜明けの空を見つめていた。夜が明ける直前の空は黄金と紫紺、橙を混ぜた美しい色をしており、思わず目を奪われてしまうようなコントラストを描いている。街は未だ眠りの時にあり、その壮大な光の絵画を見ているのは恐らくルーアだけ。他の始竜たちは眠りにについていることだろう。

ドラグーン
人造竜兵としてのルーアは一度死に、もう一度生まれた。始まりの竜、暁天の君、ルーアハ「メシア」ラズライトとして。命尽き、もう一度生まれるまでの記憶はほとんど無い。

覚えているのは、自分を包み込むあたたかな光と優しい歌。母の腕でいるようで、とても安心したことを覚えている。気付けばルーアは、暁天の君として生を受けていた。世界に望まれた新たな始竜。夜ではなく、夜明けを齎すもの。この身に宿る力も、人造竜兵であった時とは桁違いだ。今ならヴァイスファイトの想いを理解出来るような気がした。

世界は変わった。

アルカディアはこれから、理想郷としての本来の姿を取り戻して行く事だろう。それを実現したのはただ一人の人間の少年。ルーアを深い闇から救ってくれた人。

彼のそばに在れることが嬉しいと思う。何故だろう、魂が安らぐ、懐かしいと感じるのだ。彼がドラグナーだからだろうか。それとも『父』に似ているから？

何度となく繰り返してきた問い。いつも答えは出ない。或いは、明確な答えなどないのだろうか。

「……ルーア？」

聞き慣れた声に、ルーアはふと我に返る。

振り返った先に佇んでいたのは、鮮やかな青い髪をした少年ルカだった。今まで寝ていたのだろうか。ジャケットを羽織った彼はまだ少し眠そうだ。

部屋を抜けだしたことに気づかれたのだろうか。起こしてしまったて申し訳ないと思う反面、嬉しさが広がる。

「ルカ兄。起こしちゃった？」

「ううん。ちょっと目が覚めてルーアがいなかったから、ここかなって思ってた」

まだ朝も随分早い。普通ならまだ寝ている時間だろうに、ルーアがいないことに気付いて、わざわざ探しに来てくれたのだろうか。もしかすれば、始竜たちは気づきながらもルーアを一人にしてくれたのだろうか。

流石はルーアよりずっと長い時を生きた竜たちだ。

ルカはルーアの隣に腰を下ろすと、夜明けの空を見つめたまま、ねえ、とルーアに視線を向ける。

「ルーアはもう、一人で消えたりしないよね？」

「ルカ兄……」

尋ねる声は少し震えていて、こちらを見る瞳は紛れもない不安に

揺れている。そんなルカに、ルーアは掛ける言葉を見つげられずにいた。

自分で考えて出した答えとは言え、ずっとルカたちに己の命が長くないことを黙っていたのだ。アルにも悟られないよう、細心の注意を払って。

ルーアはそれで良かったが、ルカたちの気持ちを考えていなかった。考えようとしなかった。迷惑を掛けたくない一心で。

「……皆に心配を掛けなくなかったんだ。先に待つ運命は、変えようがないものだったから。でも、ごめんなさい。自分の都合ばかりで、ルカ兄たちの気持ちを考えてなかった。もう勝手に居なくなったりしない。ルカ兄のそばにいるよ」

「……うん。……ねえ、ルーア。分かってたんだ。ルーアが俺たちのことを考えて出した答えなんだって。ルーアはこうして目の前にいるけど、怖くなる。あの時のようにまた消えちゃうんじゃないかって」

今もまだ鮮明に思い出せる。体が急速に冷えていく感覚。最後に見たのは、ルカの泣き顔で、ずっと謝り続けていたのだ。悲しませて、黙っていてごめん、と。

ルーアはルカを安心させるように微笑み、俯く彼の手を取った。

「僕は誓うよ、ルカ兄。ううん、ルカ・エアハート。心優しい人の子よ。暁天の君、ルーアハメシアラズライトとして。この命尽きるその時まで、貴方の傍にあらう」

アルのようにはいかなければ、ルカが安心するのなら、何度でも誓おう。この命が尽きるその時まで、そばに在ることを。

もう彼を悲しませたりしない。ルーアの瑠璃色の瞳から金色の涙

が
一筋、
流れ落ちた。

またまたイクセの受難（前書き）

女性ネタ再びです。今回もイクセがりオンの被害にあっております。

またまたイクセの受難

「殺す……」

魔物もびつくりの殺意を撒き散らしているのは他でもない、イクセだった。

いや、恐らくはイクセらしい女性、である。

ただ普段は下ろしている艶やかな黒髪にはとんぼ玉がついた簪をさし、金の髪飾りをつけ、形の良い唇には鮮やかな紅が引かれている。

纏う服もいつもの黒い服ではなく、いつか女装させられた時のようなスイレンの民族衣装で『浴衣』と言うひとえの着物。彼が嫌がるのも無理はない。

薄紫の生地に藤の花が描かれた浴衣に紺の帯。

薄い化粧まで施されたその姿は、美しい女性そのものではあるが、無理矢理着せられたことから非常に不機嫌そうだ。

「イクセ、落ち着いて」

「そうそう。僕たちだって同じ格好してるんだから」

殺気を撒き散らすイクセの両腕を掴んでいるルカとルーアも同じ浴衣姿だった。勿論、女物の。ルカは朝顔が描かれた薄紅色の、ルーアは金魚の柄の水色の浴衣を着ている。

ルカの髪には花の髪飾りがつけられ、ルーアの二つに結わえた長い髪には絹のリボンが結ばれていた。

二人供、どこからどう見ても可憐な少女たちである。

ただルーアの方は普段の少年の姿より、二、三歳上で、ルカと同

じ十代半ばほどだろうか。

「なんで二十歳になってまで女装しなきゃいけないんだよ」

「わー、アル、リオン兄。何とかしてよ」

本気で嫌がり、抵抗するイクセに、ルカとルーアもたじたじた。ルカは眉をハの字にして二人を見つめる。

そもそもこんなことになったのは、アルとリオンの賭けが原因だった。

賭けの内容とは、麻雀で勝った方がイクセを一日こきつかえらという理不尽極まりないもの。

ちなみに勝ったのはアルだが、この提案したのはリオンだった。

「もう、イクセってば、往生際がわるーい。覚悟決めなよ。……仕方ないなあ……。レイン」

「私たちが一肌脱ぐとしよう」

瞬間、リオンとアルの姿が蜃気楼のように歪んだ。その間、僅か数秒。

次に視界に入った光景に、イクセは固まることになる。

何故なら、そこに佇んでいたのは、見目麗しい青年たちではなく、美しく艶やかな女性たちだったから。

「イクセのために大出血サービスしちゃっよ」

「二度目はないぞ」

揺らめく炎を思わせる髪の毛の女性と、銀糸を紡いだような髪を持つ

女性が笑う。二人ともイクセと同年代だろう。

赤い髪の彼女は例えるなら艶やかな蝶。

頭の上で纏められた髪は赤から朱、橙へと移り変わっており、まるで炎そのものであるかのように背中を流れている。瞳は蠱惑的なバーガンディで見入らずにはいられない。

一点の染みもない白い肌には赤い浴衣がよく映えた。

紅も引いていないのに鮮やかな朱唇といい、顔の造形は非の打ち所もない。神の手によるものであるかのよう。

妖しい色香を放つ彼女は蝶であり、艶やかな花でもある。

「驚いたようだな」

得意げにイクセを見る女性も、赤い髪の彼女とはまた違った意味で美しかった。

きらきらとそれ自体が光を放つ銀の髪は、頭の後ろで纏められており、左右のこめかみ部分だけ残した髪を肩に流している。

影を作るほどの銀の睫毛に、瞳は満月を思わせる暖かな金色。その瞳に見つめられると、全てを見透かされてしまいそんな錯覚に陥りそうだ。

白磁を思わせる肌は滑らかで、透き通るよう。

赤い髪の女性が艶やかに咲き誇る大輪の花ならば、彼女は凜として咲く美しい一輪の花。

誰にも媚びることがないその美しさは、見る者に一種の畏敬の念すら抱かせる。

桜の花びらが描かれた浴衣は彼女のためにあつらえたかのように、よく似合っていた。

「アルとリオン、だよな……？」

「他に誰がいる？」

「こんな美人さん、オレとレインしかいないじゃん」

わなわなと震えながら、二人を指差すイクセに、さらりと答えるアルとリオン。

確かに普通に考えればアルとリオンだし、この世のものではないかのような美しい容貌は二人としていない。

しかしながら突然、青年から女性に変われば驚くというものだ。

アルもリオンも青年である時より背は低く、声が高い。

丸みを帯びた体のラインにくびれた腰といい、抜群のプロポーションは、世の女性たちの憧れだろう。

「アルもリオン兄も凄く綺麗だよ」

「うんうん。僕ももう少し大人になればよかったなあ」

満面の笑みを浮かべ、心からの賛辞をおくるルカと、少し残念そうに少女になった自分を見るルーア。

イクセは女性の姿をしたリオンを睨みつける。

自分たちだけでなく、ルカやルーアにまで女装させて（今のルーアは女だが）何がしたいのだろう。リオンのせいで目眩と頭痛から起こりそうだ。

うんざりした表情で頭に手を当てながらイクセが問うと、

「一体何がしたいんだ……？」

「ん、女装大会」

「ふざけんな!」

首をこてん、と横に傾けながら、さも当然という風に言うてるリオン。

イクセの怒鳴り声が宿屋どころか通りにまで響き渡ったのは容易に想像出来る。

しかし、その程度でリオンが懲りるはずもない。結局はリオンにいいように振り回されたイクセだった。

それぞれの価値観（前書き）

リオンが先代の紅蓮の君について語る話。アルも出てきます。

それぞれの価値観

始竜は眠りを必要としない。それでもリオンが眠るのは、愛しい者たちに合わせて、である。もつとも同胞であるアティは眠ることが好きだし、ゼフィもゲイルと同じくらい睡眠時間を取っているだろう。

仲間たちと旅を始めてから、リオンは夜になるとよく宿屋の屋根に上り、星空を眺めていた。

全てを包み込む夜色のヴェール。どこまでも深く、暗いその中で生命は生まれた。輝く星屑は、いわば生まれたばかりの命たち。夜空は創世の頃そのものを表しているかのよう。

世界という枠組みの中ではリオンでさえ、ちっぽけなもの。取るに足らない存在。

遙か昔、世界を創造した神々はもはやこの世界から去ったが、命の営みは続いている。神がいようがいまいが。

生きることに。それが創造主が全ての生命に与えた役割。その中にはきつと始竜である自分たちも含まれる。

「また星を眺めているのか。お前も飽きないな」

「レインってば、そんな物好きみたいな言い方やめようよ。オレが変わり者みたいだし」

突如として聞こえた声にもリオンは驚かない。茶化すように返して再び星空を仰ぐ。

すると背後にいた人物が深いため息をついて、座るリオンの隣に並んだ。

まるで静寂に満ちた夜闇に輝く女王のように美しい青年だった。癖のない艶やかな髪は銀系の如く背中を流れ、白い外套の上を滑っている。

影を作るほどの長い睫毛に縁取られた瞳は黄金。それ自体が輝く宝石のよう。その瞳で見つめられれば、全てをさらけ出されるような錯覚に陥りそうだ。

「事実だろうか？」

「ホント、失礼しちゃうわ。……なあ、レイン。オレはさ、昔は彼女の、先代の想いを理解出来なかった。どうして刹那の幻の焦がれるんだらうって。そしてルージュを不幸だと思ってたんだ。長い生の中でたった一つの愛しい存在を見つけてしまった彼女を」

空を仰いだまま、リオンは続ける。今まで決して誰にも言わなかった心のうち。紅蓮の君として生を受けた直後の自分は、先代の紅蓮の君、ルージュの想いを理解出来なかった。

始竜は先代の記憶を引き継いで生まれてくる。

彼女の経験も想いも受け継いだリオンは、彼女を不幸だと思ったのだ。世界ではなく、たった一人の人間を愛したルージュ。

カーネリア「ルージュ」スカーレット。

彼女はアルと同じく、始まりの時より生きた竜だった。リオンと同じ揺らめく炎の髪と紅玉髓の瞳を持った絶世の美女で、よく人の世界を渡り歩いてきたという。

そんなある時、ルージュは一人の少年と出会った。名はカイン。少年だった彼を気に入る、彼女はカインの旅に同行することを決めた。

やがて少年は青年になり、ルージュはいつの間にか彼に惹かれて

いた。そして彼も。

竜の化身である彼女と人間である彼。変わらぬ姿のまま、美しいルージユと老いて死に向かうカイン。二人の間に横たわるものは多すぎた。

始竜として、ただ一人の人間に心を傾けることなど許されない。それを理解していながらも、ルージユはカインを愛した。先に待つのが別れだと理解していたのに。

リオンは初め、ルージユの思いを理解出来ずにいた。何故、刹那の幻に焦がれるのだろう。何度そう思ったことか。昔のリオンでは分からなかった思いも今は理解できる。リオンもまた、大切なものを見つけたから。

誰よりも美しい魂を持つ少年と、親友と同じ姿の、だが全く違う青年。

隣の彼　　アルが微かに笑う気配がする。

「レイン？」

「昔、だろう？　今は違う。ならば何を悩む」

リオンがアルを見ると、彼は見惚れるような柔らかな微笑を浮かべていた。普段の彼が滅多に見せることのない表情にリオンの頬も緩む。

流石は始まりの時より生きる竜。過ぎたことなら悩む必要はないのだが、リオンはアルのようにはいかない。分かっているも、それが出来るか出来ないかはまた別の問題だ。

「ホント、レインには敵わないな。不幸なんてオレが決めることじゃない。幸せだとか、不幸だとかどうでもいい」

リオンは苦笑しながら髪を弄ぶ。今だからこそ分かったことがある。彼女が不幸だとか幸せだとか、決めるのはリオンではないのだ。いや、どうでもいい。

そして、言葉を切り、だつて、と続ける。

「幸福も不幸も善も悪も、所詮それぞれの価値観でコロコロ変わる様な薄っぺらいものだと思わない？」

それぞれの価値観（後書き）

シリアスにしようと思った挙句、よく分からない文になったとい
う……。

アルとリオンのコンビを書くのは楽しいです。ルカ、アルコンビと
はまた違った楽しさがありますね！

許されないなら、せめて（前書き）

本編とはリンクしておりません。リオンの先代に当たる紅蓮の君、ルージユと彼女が愛した青年の別れの話です。

許されないなら、せめて

『これ』は何なのだろう。分かっているのに、ルージュは理解出来なかった。

否、理解したくなかったのだ。己の腕の中で横たわる愛しい人。カーネリアールージュとスカーレットが愛した彼。

彼を抱えたルージュの手は赤く染まり、彼の体にも真紅の花が咲いていた。こうしている間にも命の灯火が消えて行く。どうして、何故。全て言葉にならない。

「ルー……ジュ」

彼がルージュの名を呼んだ。愛おしげに。彼の手が恐る恐るルージュの頬に触れる。紅玉髓の瞳からこぼれ落ちた涙が彼の手を伝った。

「いや……いやよ、カイン。私はこんな終わりなんて望まない……。どうして、どうして!?!」

どんなに治癒の喪歌を行使しても意味が無い。ルージュ自身も分かっていた。彼が、カインが負った傷は致命傷。竜きせきが操る喪歌も意味をなさない。

今の彼に決定的に足りないもの。それは生きようとする力だった。いくら傷を治しても、生きようとする力だけはどうにもならない。どんなにもがいても変えられない。彼の命の灯火は消えようとしている。

そんなルージュに対し、カインは穏やかに笑っていた。死を前にした者の表情とは思えない。愛おしげに彼女の頬を撫でて笑う。

「これで……いいんだ。生ある者はいつか死ぬ……それが今だっただけのこと、だから。ルージユの笑顔が見れなくなるのは残念だけど……これで良かったんだ。君は永遠を生きる竜。俺は刹那を生きる人。……いつか別れる時はくるんだから」

「そんなこと、言われなくても分かっている。私は『始竜』よ。だから何度も言ったじゃない！ 私の眷属になればカインは永遠を生きることが出来る。今だって、私を受け入れてくれたら、貴方は『生きる』ことが出来るのに……」

カインに言われるまでもなく分かっていた。ルージユは始まりの時より生きる竜。人と竜。持ちうる力も生きる力も違う。加えてルージユは始竜。世界の監視者である自分たちはただ一つの存在に心を奪われてはならない、ならなかった。

それなのに、ルージユは彼を愛してしまったのだ。それが許されないことだと知りながら。

始竜は己の力を分け与えることで、眷属を生み出すことが出来る。人や獣とて例外ではない。カインもルージユの力を受け入れるのなら、共に永遠を歩むことが出来るのに。

何度も繰り返した問いだった。その度に彼は首を横に振ったのだ。

「……出来ない。ごめん、ルージユ。君と共に生きたいけれど、永遠を生きるなんて耐えられない。……俺は、人として死にたいんだ。……君の心に深い傷を残すと分かっているけど、君と歩むことは出来ない。……でも、後悔なんてしないから。ルージユと出会い、君を愛したことも」

「……そうね、貴方ならそう言うと思ったわ。本当に酷い人。私の気持ちを知ってるくせに」

泣いているのか笑っているのか、今のルージュにはそれさえ分からない。彼の答えなんて分かりきっていた。永遠を生きるには人は脆すぎる。自分以外の者が老いて死んでゆくのだ。愛しい者も親しい者も。

皆が自分たちを追い越してゆく。そんな中で時が止まったように生き続ける自分。永遠の名を冠した甘美な美酒ではなく、地獄という名の毒薬なのだ。

カインは全てを分かっているながら首を縦には振らなかった。

「何度生まれ変わっても、俺はきつと……君に恋をする。何度でも、何度だって。愚かでもいい、ルージュしか考えられない……」

「私だって……！ 必ず見つけ出すから……」

悲劇だってよかった。最後がハッピーエンドでなくても、後悔はしない。どんなに辛くても苦しくても、愛したことを後悔などしない。

何度生まれ変わっても恋をする。最後に待つのが残酷な運命だとしても、同じ道を選ぶだろう。愚かでもいい、それほどまでに互いを愛していた。

「ルー……ジュ、愛して……」

最後の言葉は彼の口内に消えた。目を閉じた彼は、眠っているようにしか見えない。穏やかな表情で。まるで母の腕に抱かれているように安らかだった。

だがルージュには分かっていた。彼はもうどこにもいない。ルージュが愛したカインは長い旅路についたのだ。彼の眠りを妨げるものは何も無い。

信じたくない、信じられない。愛していると言って欲しかった。

けれど、彼がルージユの名を呼んでくれることは二度とない。愛を囁いてくれることも。

ルージユは彼の胸に顔を埋めて泣いた。今は全てを忘れて泣きだかった。始竜でもなく、カーネリア「ルージユ」スカーレットではなく、カインが愛した「ルージユ」として。

行き場のない感情。言いようのない悔しさと悲しさ、そして愛しさ。心が引き裂かれたようだった。いつそ、彼と共に死んでしまえばどんなに良いだろう。

しかし共に死ぬことだって、ルージユには許されない。始まりの竜である彼女には。宿命という鎖に縛られ、身動きも取れないのだから。

ルージユは物言わぬ骸となった彼の手を取り、己の胸に当てて微笑んだ。

「許されないのなら……。せめて私の心を一緒に持って逝って」

S i d e : Y k s e l (前 書 き)

ルカが初めてアルストロメリアのギルドを訪れた時の話で、イクセ視点です。かなり短めです。

イクセル・クライン。それが俺の名だ。冒険者としてもまあ、それなりに名は通っている方でご、丁寧な二つ名まである。

だがイクセは毎日が退屈だった。ただ何となく依頼をこなすだけ、毎日がその繰り返し。

他人が嫌いな訳じゃない。寧ろ面倒見は良い方だと思う。思い返せば故郷を出たあの日から抱える虚しさ。それはハンターとなっても、最高位の紫となっても変わらず彼の中にあつた。

それが変わったのはあの日、アルストロメリアを訪れた時だ。

何があつたかは知らないが、ギルドは乱闘騒ぎとなつてた。酒瓶や料理が飛び交い、怒号が響き渡っている。

イクセは我関せずといった風に、入り口近くの椅子に腰掛けて傍観していた。荒くれどもには受付のリリスも流石に参っているらしく、もう諦めてグラスを磨いている。

イクセが間に入ればすぐ終わるだろうが、正直面倒事は御免だ。おまけにイクセは《紫》の冒険者では最年少。妬むものもあり、下手に目立てば更に状況は悪くなる。何もしないこと。それがイクセに出来る最善だ。

テーブルに肘をつき、目立たぬようギルド内を見つめていると直ぐ近く、入り口から誰かが入ってくるのが分かった。

一人は頭と腕に包帯を巻いた二十歳前後の青年。もう一人の受付でリリスの恋人のアーヴィンである。

もう一人は空の青でもなく、海の青でもない不思議な髪をした中性的な顔の少年だった。優しい茜色の瞳は春の夕暮れのように優しい光を湛えている。

そして彼の肩に乗るのは、なんと見たこともない小さな銀色の竜だ。鮮やかな金色の角に猫のように細長い瞳孔をした瞳は、世にも珍しい金の色。今まで数多くの竜を見てきたイクセでさえ初めて見る竜だった。

冒険者の誰かが投げたミートパイが竜の顔面に激突する。

何やら言っているようだが、この距離では聞き取れない。じっと見ていると少年は、息を吸い込んで歌いだした。

『星歌う、愛しい子らへの子守歌。その歌は母なる調べ、全てに通ずる安らぎの旋律。おと星が奏でし原初の調べが染み渡る。遙かな詩は世界に響き、世界は歌に満たされる。優しき音色を知るならば、今導きの声に応えよ 潮騒』

ただの歌ではない。スヘルアリア魔歌だ。現に今まで乱闘を繰り返していた男たちが毒気を抜かれたように立ち尽くしている。

一瞬で騒ぎを治めた少年にイクセでさえ驚かされた。

魔歌を操り、一瞬にして場をおさめるとは。熟練の冒険者であってもこう上手くいかないだろう。

面白い。興味が沸いた。イクセは人知れず唇の端を歪めた。

冒険者たちの祭典（前書き）

三章読了推奨です。

冒険者たちの祭典

ギルド本部が設置されているテゲア大陸最大の都市、メガロポリスでは年に一度、街をあげての祭りがあるらしい。冒険者組合ハンターズギルドとメガロポリスが共同で行うもので強制ではないが、多くの冒険者が集まるという。

それはひとえに冒険者同士の情報交換や売買などが目的であるが、純粹に祭りを楽しもうと考える者や交流を深めようとする冒険者たちもいる。

ルカたちはイクセの後押しもあり、祭りの真っ最中であるメガロポリスを訪れていた。

荒くれものどもが揃うということだけあって、祭りはルカの予想以上に盛り上がっている。様々な出店や冒険者同士の大会も行われているようだ。

こんな騒ぎに慣れていないルーアが目を白黒させている。その時、立ち止まっていた一行に近づく影があった。

「イクセルじゃねえか。《黒呀》がガキ二人のお守りかよ」

年の頃は二十代後半から三十代前後。ざんばらな茶の髪に黒の瞳、動物の皮をなめした鎧に一振りの剣を携えている。同業者であることを示すのは首から下げた赤い石。彼が冒険者の中でも中堅である証だ。

途端、イクセが苦虫を潰したような顔になった。

「ねえ、イクセ、誰？」

「本来の実力なら、まあ、結構なものなんだが、色々問題を起こす

厄介な奴だな。ほら、石の色も赤いだろ？」

『ふうん』

ルカが小声で尋ねれば、心底言いたくないといった口調で、だがちゃんと答えてくれた。つまりは係わり合いにならない方が賢明ということだ。

以前、イクセが言っていたが、《紫》であることで同じ冒険者から難癖をつけられることも多いと言っ。

イクセとルカ、ルーアにアルのきつい視線も男は気にならないらしい。

「んだよ。つれねえな。“紫”の冒険者様は、俺なんかに構ってる暇ないってか。ん、よく見りやてめえ、新人じゃねえか。こいつとつるむなんて良いご身分だぜ」

男はどうやら、ルカの耳飾りに気付いたらしい。冒険者の資格を取ったばかりであるため、石の色は緑　つまりは新人である。確かにイクセは紫で自分は緑だ。

だがこんな失礼な男に良い身分だと言われる筋合いはない。むっとした顔で男を睨み付けるルカを庇うようにルーアが男の前に立った。

「ルカ兄のこと悪くいうなら許さないよ」

「ガキが、やるうってのかよ」

「そっちがその気なら受けて立つよ」

男の方は十二、三歳の少年に睨まれても全く意に介していない。

ふん、と鼻で笑っただけだ。正に一触即発といった雰囲気、ルカが止めに入るが、全く聞こえていない。

イクセはあー、と他人事のように呟き、ルカの隣に乗ったアルが肩を竦める。

「ルーアは主人に忠実だからな。お前が馬鹿にされたのが気に入らなかつたのだらう」

いつの間にか二人の周りには人ばかりが出来ていた。しかもその野次馬たちは血の気の多い冒険者たちである。賭けを始めたり、いぞ、やれと煽ったりやりたい放題だ。

「ああなつたら止められねえな。ま、ルーアなら心配ないだろ」

言った先から、どうやら力自慢大会なるものに飛び入り参加するらしい。良くも悪くもノリの良い奴らばかりであるから、飛び入りを拒むはずがない。

二人は早速、簡素な木のテーブルを挟んで対峙した。こうして見れば、かなりの体格差である。筋骨隆々とはいかないものの、がたいの良い男に対して、少年であるルーアは随分と線が細い。

観客からは盛大な歓声が上がると同時に、賭け金の金額までもが飛び交う始末だ。ルカたちも何とか観客を押しつけて最前列に滑り込む。

「止めるなら今の内だぜ？」

「誰が」

男の言葉をルーアは無表情で切り捨てる。そのまま男とルーアは

テーブルに肘を付き、右手を合わせた。

まるで丸太のように太い男の腕と白魚のようなルーアの腕は比べるまでもない。ただ、ルカたちはルーアがかわいらしいだけの少年ではないことを知っている。

始め、と言う声が響く。が勝負は一瞬だった。ルーアの細い腕が男の腕を押さえ込み、テーブルに叩きつける。

あまりに予想と掛け離れた結果に、観客は言葉を失い、辺りは静寂に包まれる。

負けた本人も信じられないと言った面持ちでルーアを見つめていた。そこで我に返った男はいち早く叫ぶ。

「う、うそだ！ イカサマしやがっただろ！！」

「そんなくだらないことしないよ」

やれやれ、これだから人間は、とため息を付くルーアに男は頭に来たのか、間にあつたテーブルを蹴りあげる。

周りの観客たちも悪乗りしたのか、やれーだの、やっちまえだの、楽しそうに煽り始めたではないか。

ルーアは勿論、イカサマなんてしていない。そもそもドラグーンである彼には必要ない。

「すかしてんじゃねえぞ！ ガキが！！」

遂に男が腰の剣を抜いた。陽光に照らされた白刃がきらりと光を弾く。更に歓声が大きくなったことから、冒険者たちもかなり興奮しているようだ。

男は抜いた剣をルーアの鼻先に突き付ける。対してルーアは怯える所かしらつとしていた。

『どうする、ルカ。ルーアなら助けに入らずとも心配ないだろうが……』

「うん、そうだと思うけど、俺も我慢の限界だし」

「何だったらキツイお灸据えてやってもいいぜ。俺も流石にうんざりしてたしな」

別に自分が馬鹿にされるのはいい。ルカは自分がまだ“子供”であることを理解している。成人を迎えたとは言え、自分は子供だ。

だがルーアを馬鹿にするにもほどがある。

イクセの言葉に頷き、ルカは静かに息を吸い込んだ。

『揺らめく光は黄泉への導、逆巻く炎は断罪の槍。其は誓いと祈りを知り、猛き焰の旋律へと誘う。朱は制約、血は誓約。己が力を知り、魂を織る。無垢なる願いは届くことなく、果てなき天へと響くのみ。遙かな詩は世界に響き、世界は歌に満たされる。掲げた約束を知るならば、今導きの声に応えよ 誓焰槍』

喧騒の中、澄んだ歌声だけがまるで反響するように届いた。ルカは歌いながら前に出る。もはや誰も声を出すことが出来なかった。

ルカが手を掲げた先、男を囲むように展開する炎の槍。命があれば直ぐに槍は男を襲うだろう。

「いい加減にしてくれないかな。ルーアはイカサマなんてしてないし、いい大人が大人げない。言っとくけど、先に剣を抜いたのはそっちだよ」

ルカの茜色の瞳に明確な怒りはない。静かな光を湛えたままだ。しかし男にしてみればそちらの方が恐ろしかった。ルカとて本気

で攻撃するつもりはないが、お灸を据えるならこれくらいしないと、
と言うことで大出血サービス中だ。

「が、ガキ相手に本気な訳ねえだろ！！ 覚えとけ！！」

男は不自然な動作で剣を鞘に納めると一目散に逃げ出した。まるで
三流悪党のような捨て台詞である。

ルカは炎の槍を消すとルーアの方に向き直った。心なしかおもしろく
なさそうな顔をしている気がするが、気のせいだろうか。

「ルカ兄ったら、僕の見せ場取っちゃって。せつかく僕が華麗にぶ
つ飛ばす所だったのに」

「あ、ごめん」

そこまで気が回らなかったのは許して欲しい。

イクセと彼の肩を借りたアルカがやって来る。イクセは近寄るな
り、満面の笑みで思いきり二人の肩を叩いた。

「あれで当分は大丈夫だろ。よくやったな、ルカ、ルー……」

ルーアの名を呼ぼうとしたイクセだったが、頭にかけられた液体
に遮られた。それを皮切りにどつと歓声が上がリ、ルカやルーア、
アルにさえも琥珀色の液体が浴びせかけられる。

若いのにあいつを追い払っちゃまうとはやるじゃねえか！！ 流石
イクセル・クラインと一緒にいるだけのことはあるな、など見ず知
らずの男たちから声を掛けられ、肩を叩かれる。

「な、何これ！？」

「蜂蜜酒だな」

「さ、酒っ!？」

どつりで変な感じがすると思った。というか酒が目にしみて結構痛いのだが、男たちはお構いなしだ。

結局、酒盛りは夜どころか次の日の朝まで続いた。

イクセはまだしも、ルカが二日酔いになったのは容易に想像出来る。酔ったルカが何をしたのか、それは語らない方が幸せだろう。

朱い空（前書き）

第二章読了推奨です。

朱い空

微かに歌声が聞こえた気がした。或は気のせいかもしれないし、他の者なら空耳だと片付けるだろう。だがイクセは確信していた。あれは歌声だと。

そう思った時、目を開ける。ベッドから身を起こし、ふと視線を窓の外に目を向ければ、東の空が朱くなり始めている。夜明けが近いのだ。

やはり聞こえる。微かだがイクセの耳は確かに声を捉えていた。

「嗚呼、灰色となったこの街で、この最果ての地で私は一人、歌い続ける。どうか私に約束を下さい。愛しい人を待ち続けられるように。例え記憶の墓標が崩れ落ちてても、ただ一人歌い続けよう。この身体、朽ちて灰になろうとも、この魂、消えて塵になろうとも想いだけを貴方に」

間違えようもない、ルカの声だ。上着を羽織って部屋を出る。宿屋から少し離れた一本の木の上でルカが歌っていた。肩の上にはアルの姿もある。

その時、イクセの気配を察したルカが、歌を止めて振り返った。少年は眩しい笑顔をこちらに向ける。

「イクセ」

「悪い、邪魔したか？」

ルカの歌声は不思議と心地よくて、最後まで聞けなかったことが残念だと思ってしまう。

アルストロメリアのギルドでも思ったのだが、彼は魔奏士として

随分優秀らしい。竜であるアルに教えを受けたのだから、当たり前かもしれない。それでもこの歌声は本当に美しい。ルカの才能なのだろう。

そんなイクセの心情を察したらしいアルが口を開いた。

『ルカ、歌を続けてくれないか？ イクセルも聞きたいようだぞ』

顔までは見えないが、ルカがくすりと笑った気がした。

イクセは座り込み、太い木の幹に背中を預けた。優しく、哀しい旋律がイクセとアルの耳朵を震わせる。

ルカの歌を聞いていると何故か故郷を思い出した全てを捨てた自分には、故郷とは名ばかりの街ではあるが。色を無くした故郷はイクセにとって灰色の街なのかもしれない。

静かに目を閉じれば、ありありと蘇る記憶。両親の最後の姿。何故共に生きてくれなかったのか。瞼を上げれば東の空は、血のように朱い朱い色をしていた。

イクセはこの色が嫌いだった。

だが今は素直に綺麗だと思える。この哀しくも心を打つ旋律の影で。

『どうした、そんな顔をして』

翼を羽ばたかせ、アルはルカの肩からイクセの頭に移動する。あれほど頭には乗るなど言っているのに、彼には関係ないらしい。どうせ注意しても無駄だ。

そしてやはり、彼は人の感情に敏い。流星は始まりの時より生きる竜。伊達に長い時を生きている訳ではないのだろう。

ただ、どう答えればいいものか。アルは同情もしないし、恐らくはイクセの話聞いてくれるはずだ。

「……別に。昔を思い出したただけだ。大して面白くない昔話さ」

『イクセル、お前は他人に対して無意識に壁を作るだろう？ ルカは例外のようだ』

「そう、かもな。そうなんだろうな」

アルの月色の瞳がイクセルに向けられている。困ったように笑ってアルの頭を撫でた。彼は嫌そうに身をよじっていたが、本当に嫌な訳ではないのだろう。それならば文句の一つでも言って、さっさと離れている。

アーヴィンにも一度言われたことがあった。

イクセル自身は勿論、意識したことはない。それでもアルやアーヴィンが言うのなら、そうなのだろう。

他人と深く関わることを避けている。間違いなく、両親が原因だ。『……ひとつだけ。心の傷は時間で癒えるものではない。己自身が乗り越えなければ、それはいつまでも傷として残り、自身を苛むだろう。誰もがあの子のように強くはない。けれど、強くあるうとすることは出来る』

「強くあるうとする、か」

目を閉じ、優しい旋律に身を委ねる。ルカの歌はまだ続いていた。確かにそうなのだろう。時間が心の傷を癒してくれるとは限らない。己自身が向き合い、乗り越えなければいつまでも傷として残ったまま。

ルカは強い。強くて真っ直ぐだ。まだ十五歳だというのに。

イクセルはもう一度、今度は乱暴にアルの頭を撫で、ありがとう、と呟いた。

貴方に捧げる歌（前書き）

第三章読了推奨です。

貴方に捧げる歌

東から覗く朝日が辺り一帯を照らしている。

まるで一面実った稲穂のように思える金色こんじきの光を受けて佇む一人の少年がいた。

年の頃はまだ十歳を少し過ぎた辺りか。光を弾いて煌めく飴色の髪に宝石のように美しい瑠璃色の瞳。

辺り一面が輝く光景は、彼　ルーアが封印される前、最後に見た風景と酷似している。

あの人を見たのも、それが最後だった。致命傷を負いながらも最後まで、ルーアが眠りにつくまで笑って頭を撫でてくれた。

ルーアはいつの間にか、あの人がよく歌ってくれた歌を口ずさんでいた。

『　遠く遠く離れた声も、いつか一つの場所に辿り着く。重なる詩、重なる音、響き渡る旋律。一つが二つに重なる時、やがて世界に届く声。透き通る歌声は揺り籠を揺らし、眠り子を誘うだろう。かつて眺めた景色は未だ遠く、夢見た友はまだ遠い。戻るべき故郷はもはや記憶に埋もれ、地平線の彼方に消えた　』

あの子はもう居ない。遙か昔に逝ってしまった。この世界のどこを探しても、あの子が生きていた証はもう無いのだ。本当に？　否、たった一つだけ残っている。

あの子がこの世界に生きた証、それはルーアと言う存在そのものだ。

もう彼がルーアに微笑みかけてくれることはないけれど、記憶の中に残っている。それはいつまでも色褪せることはないだろう。

『　こんな朝早くから発声練習か？　』

どこか皮肉まじりの声の主は、銀色の小さな竜、アルだ。ぱたぱたと羽音をさせ、ルーアの近くまで来ると、ちょこんとルーアの肩の上に乗った。いつもアルがルカにしているように。

アルは始まりの時より生きる竜だと言う。まがい物の竜である自分が本物の、それも長い時を生きた竜とこうして普通に話をしていくなんて信じられない。

本来なら罵られてもおかしくないのだ。竜族は誇り高い。それなのに彼はルーアを受け入れてくれた。嬉しくて、柄にも無く胸が熱くなる。

「アル……」

『歌の名は何だ？』

アルの問いにルーアは首を横に振る。

タイトルなんて聞いたこともない。あの人は友と息子をなくし、帰る場所もないと言っていたから、彼の作った歌なのかもしれない。

「分からない。僕もあの人が歌ってるのを聞いて覚えただけだから」

『……そうか。その歌、いつかルカにも歌ってやれ。きっと喜ぶぞ』

そうだね、と返事をしてルーアは随分明るくなった空を仰いだ。

（大丈夫、僕は一人ぼっちじゃない。僕なら大丈夫です。僕に命を与えてくれた事を感謝しています。だからどうかゆっくり休んで下さい。僕を作ってくれた人。……父さん）

『何だ？ 泣いているのか？』

「……泣いてなんかないよ」

からかうような声が頭上から降ってくる。泣いてなどいない。いくら眠っていたとしても、ルーアは千年を生きた竜なのだ。

ただ、アルからすれば、ルーアなど赤子同然なのかもしれないが、本当に不思議な竜である。

するとアルは何を思ったのか、ルーアの肩から降りて人の姿となった。

銀糸を紡いだような艶やかな髪、煌く金の瞳。目の覚めるような美貌の持ち主だ。この世ならざる美貌は確かに竜の化身である証なのかもしれない。

「アル？」

「辛いなら我慢するな。泣ける時に泣けばいい」

ルカに接する時と同じように優しい声だった。泣きそうになって俯く。

泣ける時に泣いてもいいのだろうか。本当に？

ルーアが何も言えずにいると、誰かが頭を撫でてくれる。下を向いているため、表情までは見えないが、アルしか考えられない。

不覚にもあの人を思い出した。あの人もよくルーアの頭を撫でてくれたのだ。

あの方はルーアに亡くなった息子を重ねていたのかもしれない。

それでもルーアは幸せだった。血に塗れても、この手で竜を殺すことになっても。あの方はルーアのために怒ってくれた。自分の立場が悪くなると分かっただけでも。

「僕、僕……」

涙が溢れた。流れ落ちた雫が地面に染みを作る。

アルは何も言わない。ただルーアの頭を優しく撫でてくれた。ル
ーアが泣き止むまですっと。

銀の誓約(前書き)

本編読了推奨です。

銀の誓約

夕暮れの海上都市エランディアに響き渡る歌声。美しく、全てを包み込むような温かさに満ちている。天上の歌声。そう表現するのが一番だろう。

声の主は一人の少年だった。空よりも海よりも鮮やかで澄んだ青い髪、少年にしてはやや大きい瞳は長い睫毛に縁取られている。紅に染まる空を切り取ったかのようだ。

彼　ルカはエランディアにある時計塔の頂上に座り、一人で歌っていた。

里帰りをしたのはつい二日前。色々と盛大なことをしたせいで、街の人たちに追い回されて大変だったのだ。

小耳に挟んだ話だが、ハンターズギルド冒険者組合がルカにイクセと同じ、『紫』の称号を与えるという話もあるらしい。何だか自分の知らないところで話が進んでいる気がする。

ルカは別に大それたことをしたという意識はない。勿論、世界を守りたかったというのは理由の一つだ。

だがルカは何より、アルたち始竜を世界という鎖から解き放ちたかった。だからこれは至極自分勝手な理由。

例え罵られても、ルカは同じ選択をしただろう。誰かに認めて貰いたくて、褒めてもらいたくてした訳ではない。ルカは自分がしたいことをしただけだ。

その時、ばさりと羽ばたきの音がする。思わず歌を止めて振り向けば、そこには銀色の髪をした美しい青年　アルがいた。

いつもの竜の姿ではない。この世のものとは思えない美貌は、何度見ても飽きることはないだろう。銀糸のように艶やかな髪は光を

弾いてルカと同じ色に染まっている。

「アル」

「久しぶりに歌っていたのか？」

「うん。たまには魔歌じゃない歌もいいかなって」

アルが隣にいる。それだけで、心にあたたかな光が宿るような気がした。歌も魔歌もルカとアルを繋ぐもの。エランディアを旅立つ前も、こうしてよく時計塔で歌っていたものだ。

ここなら誰にも邪魔されない。それを知っているのはアルだけだ。辛い時や悲しい時、あるいは一人になりたい時は決まって時計塔に来た。

「お前の歌は心が安らぐ。私の魂に響くのだ」

「そう、かな？ そうだといいな……」

最近、思うことがある。彼は始まりの時より生きる竜で、自分は十五年しか生きていない人間。そんなルカがアルのそばにいてもいいのだろうか、と。それでも彼が自分を望んでくれるなら、これ以上のことはない。アルのために歌おう。この歌声が美しい銀の竜の魂に届くと言うのなら。

ルカははにかむように笑い、再び歌を口ずさむ。ただ一人の観客である彼のために。

否、竜笛を通して繋がっているリオンやウイスタリアたちにも届いているだろう。

例えば魔奏士でなかったとしても、ルカは歌が好きだ。歌っている間は楽しくて、ワクワクして、優しい気持ちになれる。

歌い終えたルカは、夕暮れに染まる街並みを見つめながらぼつりと呟く。

「……俺はただヴァイスを止めたかった、アルたちを助けたかっただけなのに、何だか大事になっちゃったね」

「そのようだ。だが仕方がないといえば仕方がないだろう。ルカ、お前は誰もやり遂げられなかったことをした。私たちを世界という鎖から、鳥籠から解き放ってくれた。全てのものは変わらずにはいられない。それでも変わらぬものもある。お前が望むなら、何度でも誓おう。この命尽き、魂すら塵と消えようとも、私はお前と共に在る。これがその誓いだ」

アルはルカを立ち上げらせると、恭しく彼の手を取った。思わぬ行動に少年は驚いて目を瞬かせている。それはまるで騎士が主にするような神聖な儀式のよう。

アルの動きがあまりに自然すぎてルカはどう反応していいかわからない。触れた彼の手はひやりとした。人と竜の体温が違うからだろう。

気恥ずかしいような、それでいて誇らしい気持ち。本当にこの美しくて気高い竜の傍に在っていいのだろうか。

「……俺も誓うよ。この魂はいつだってアルと共に在る。離れたりしない。だから、これからもよろしく、アル」

世の中のありとあらゆるものが、時と共に移ろいゆくだろう。けれど変わらないものだってあるはず。それはアルが自分の傍にあること。そしてこの魂が彼に寄り添い続けることだ。

どんなに遠く離れても、互いを思う気持ちがある限り、魂は傍らに在る。ずっと、いつまでも。

例え、ルカという人間が死しても、その思いは魂は、アルの中で
生き続けるだろう。

真珠交歌（前書き）

本編読了推奨です。本編では出番の少なかつたエクレールとミラの
お話。短めです。

真珠交歌

どこまでも広がる草の海。時折、吹き付ける柔らかな風が緑の香りを運んでくる。そこには草花や動物、そして二人の人物を除いて何も無い。あるのは青く澄み渡る空と生命溢れる草原だけ。

風が吹く度、ゆらゆらと草花が揺れ、まるで海底のよう。

そんな草原に行くのは二人の人間だ。一人は妙齡の女性。切れ長の瞳は涼やかなアイスグリーンで、長く艶やかな紫掛かった黒髪をポニーテールにしている。

抜群のプロポーションをした彼女は、女性にしては長身だ。

動き易い黒の上下を纏っており、一見すると冒険者のよう。美しい女性だったが、どちらかと言うと雰囲気は男性的であり、中性的な容貌と相まって青年にも見える。

「ルカたちのお陰でしばらく退屈せずすみそうだ」

女性はそう言って、猫のように目を細め、うん、と背伸びをした。その言葉は独り言のようでもあり、他の誰でもない、後ろを歩く子供に向けられたもの。

「それを言えば始竜の生の大半は暇を持って余していることになる」

少し不機嫌そうな、呆れたような声で言い、前を歩く女性を睨みつけたのはまだ幼い、十歳にも満たない子供である。深い夜色の瞳に、新雪を思わせる白い髪がさらさらと風に揺れていた。

愛らしい、中性的な顔立ちをしているせいか、性別は何い知れない。

しかしその顔に浮かぶ表情は、とても年相応とは言えないだろう。

「それはそれ、これはこれさ。ところでミラ、お前はいつまでその姿でいるつもりなんだ？ 力は既に戻っているだろうに」

振り向いた女性 エクレール「ミスラ」レミエールは肩を竦めてミラ、と呼んだ子供を見た。

ミラは姿こそ幼い子供だが、本来は始まりの竜と謳われる強大な力を持つ竜。真名はネイロス「ミラージュ」テスカトリポカ。

初代からの記憶を生まれながらに持つ彼らは、生まれた時より成熟している。

おまけに失っていた力も、ミラは既に取り戻しているはず。今までは力が十分ではなかったために子供の姿を取っていたが、今はもう必要ないはずだとエクレールは言っているのだ。

実際、もう子供の姿を取る必要はなかった。色々と煩わしいため、ミラはわざと子供の姿をしていたのである。

「こちらの方が楽でいい。面倒なことも多いが」

ふう、とため息をついたミラの姿が塵気楼のように歪んだ。眉間に皺を寄せ、不機嫌そうな顔をしているのは幼い子供ではなく、二十代前後の青年だった。

夜を思わせる深い瞳に、陽光を受けて煌く白い髪は後ろだけ長く、背中につくほど。袖の長い不思議な衣を纏っている。非の打ち所が無い美貌は、始竜の中で唯一、始まりの時を生きるアルトゥールを彷彿させた。

もっとも、エクレールにしてみれば、彼の変化などどうでもいいらしい。驚いてもいないし、むしろからかうように笑っているではないか。

「図体だけでかくなっても意味がないか？」

「それは貴公にだけは言われたくないものだな」

エクレールは不機嫌そうなミラの髪をくしゃくしゃにかき回した。嫌そうな顔をしていてもお構いなしである。エクレールも長い時を生きてはいるが、アティヤリオンには及ばない。それに比べ、ミラは生まれてまだ一年ほど。そこは年長者の余裕である。

例え、見た目がどう変わっても彼はミラ。それは変わらない。

「さて、世界も平和になったことだし、当分は地酒巡りでもするか」

「……もう勝手にすればいい」

エクレールはどうしようもないくらい酒好きで、ミラが目を離せば何をしでかすか分からない。本当に千年以上も生きる竜が怪しいくらいだ。彼女の方もそんなミラを面白がっているのだろう。

ミラは投げやり気味に呟くと、エクレールを追って歩き出す。

「次はグラディウスか……イクセルの故郷、スイレンも捨てがたい。どうしたものか……」

一方、エクレールの頭には次の目的地のことしかなかった。

グラディウスの酒はきついものが多いらしく、イクセの故郷

島国スイレンには珍しい酒があるという。エクレールは三度の飯より酒好きだ。甘党のアルと言い、始竜は嗜好品が好きなのかもしれない。

本気で悩み始めた彼女に、ミラは呆れを通り越して感心していた。澄み渡る空を仰ぎ、大きなため息をつく。

アルカディアは今日も平和である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9297w/>

アルカディア

2012年1月5日22時48分発行